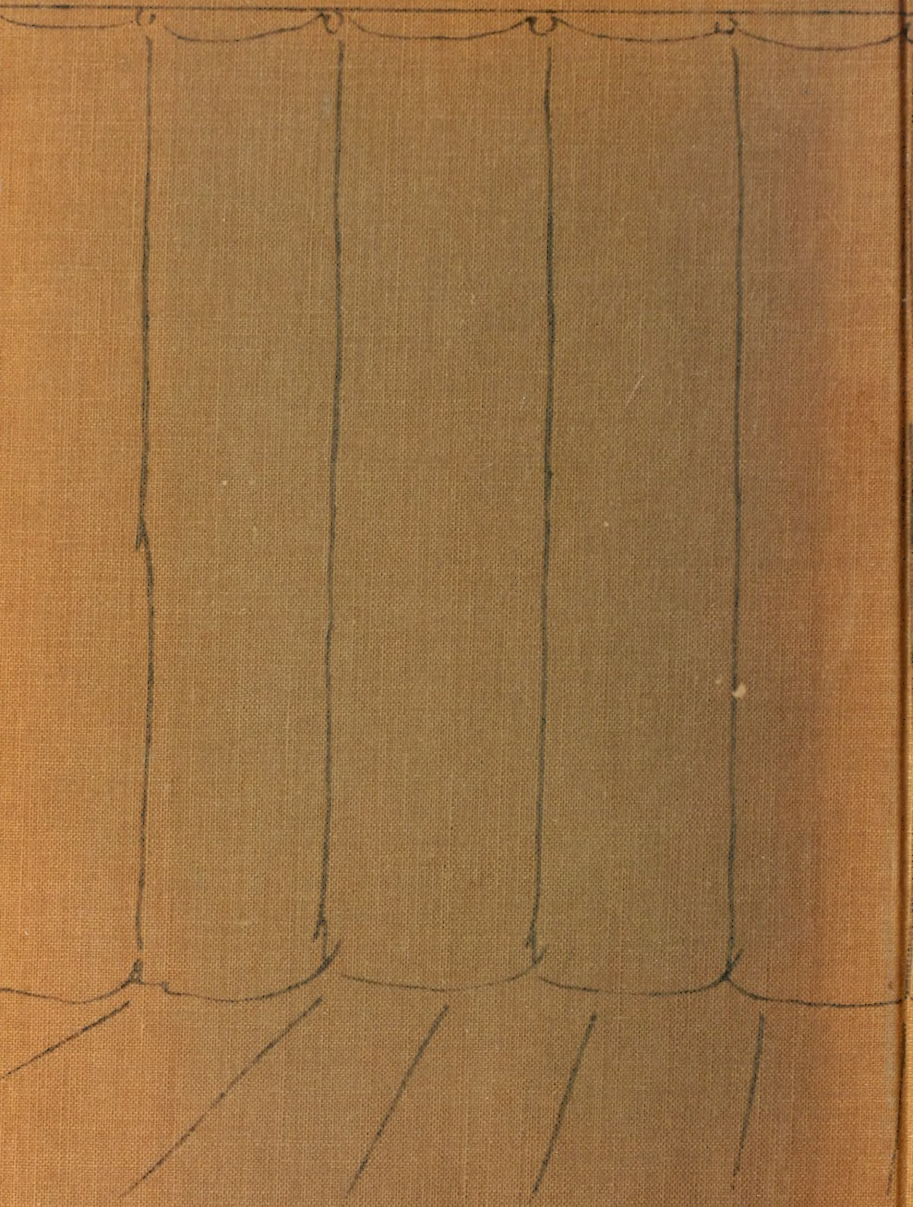


日本戯曲全集
第三十四巻

依田學海
福地櫻痴
榎本虎彦
右田寅彦

岡村柿紅
松岡松翁
大森痴雪

現代篇第二輯

東京
春陽堂版



「大森彦七」　松本幸四郎の大森彦七



「春雨傘」

市川八百藏の釣鐘庄兵衞

市村羽左衞門の大口屋曉雨



「名工柿右衛門」 柿右衛門 仁左衛門・栗作 宗十郎
姉娘 榮三郎



「女歌舞伎」

中村歌右衛門の桐大内藏
中村福助の大内藏弟子菊江



「政子と頼朝」 市川松蔦の北條娘政子
市川壽美藏の源頼朝



「坂崎出羽守」の舞臺面



「陸奥陽之助」　雁治郎の陸奥陽之助・福助のお蓮



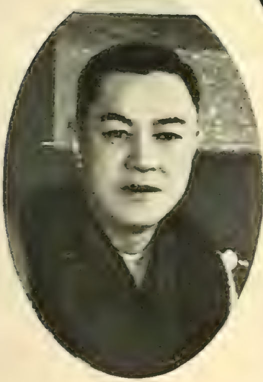
福地櫻痴



依田學海



右田寅彦



大森痴雪



松居松翁

日本戲曲全集　第三十四卷　目次

松井松翁篇

大森痴雪篇

依田學海篇

吉野拾遺名歌譽（三幕十一場）

凡例

一此篇本年十月十七日。築地大榛樓に於て。劇場改良會員の聽を煩はし。その評論を請ひしに。會員諸君種々の說ありて。余もまた大にその說に服し。改良すべき箇處頗多く。すでに改正せんとせしに。事多くして未た暇あらず。そのまゝにして打過しか、此頃前田子來りてこれを見て刊行せんことを請ふ。余改正未た成らざるをもて辭せしかど。前田子また改正せざる本も。反りて眞面目をみるべしとて。固く請ひ。さらばそのよしをことはりて。刊行するときは。必しも諸君の好意にもとるにもあらず。又この戯本必ず改良戯に用ふるにもあらずときけば。かたかた子細あるべからずといふにまかせて。かく刊行する事とはなりぬ。

一原本姪孫貞還か評あり。もとより改正すべき心なれは。删りすてはやと思ひにけれども。こもまた作意を示すに。たよりある評も多ければ。そのまゝにしつ。

一此本を作りしのち。又余が筆をもて。これを潤色し。我國の戯本にあらためて。近日これを刊行せんとす。その名を二人婿とつけたり。なほこの餘あまたあれば。つゞきて刊行すべし。

明治十九年十二月　學海居士しるす

場別

役名

一四條大納言隆資
一楠家の老僕安達藤六
一楠小次郎正儀
一左近衞大將早俊
一楠大和守正時
一鷲野平內左衞門時景
一多田院別當千嶋法橋
一鷲野郎等關作吾
一多田院若黨横山丹下
一右近衞大將道順
一伊賀平次國枝
一飛坂兵衞忠基
一辻風藤馬
一楠將監
一楠の臣和田新發智源秀
一同　和田新兵衞正朝
一同　和田紀六左衞門
一同　關　良圓
一同　南宮八郎正直
一同　鳴尾七郎正道
一權中納言資明

一鷲池平九郎正虎
一內侍の侍女梅ヶ枝
一伊賀の局
一辨の內侍
一里見の臣淺川主計
一楠左金吾正行
一雜色
一仕丁
一侍女
一鷲野郎等
一軍兵大ぜい
一百姓

吉野拾遺名歌譽（三幕十一場）

序幕

吉野行在所惣門外の場
辨の内侍曹司の場
假陣營正行居間の場
皇居長廊下の場

同 返し

大和國六田川原の場
同山手の場
吉野山續き山中の場

本舞臺ズツト上へ寄せて。檜わだ葺の四ッ足門を斜に見せ。上下一間ヅヽ御所風の煉塀正面より下手へ所々樹木のあしらい。向ふ一面山々に樹木の茂りたる遠見。此樹木の間より行在所の庇。煉塀の續を遠く見たる書割。物すごきもやうよろしく。すべて吉野行在所惣門外の體。

爰に守護の武士。伊賀平次國枝。飛坂兵衛忠基。烏帽子直垂小具足附太刀にて床几にかゝり。下手に仕丁三人棒を持ちひかへ居る山おろしにて幕あく。

平次　先帝此吉野山へ御幸在し／＼てより。數へて見れば早や十餘年。新田楠の兩將を始め。名ある智勇の人々は次第に戰場に討死し。殘る忠義の者共は心は鐵石にかたむれど。或は討死或は病死。日に増し軍威の衰ふるは。未だ時の至らざるか。但しは御運の末なるか。頼み少なき今の有様。御身如何思はるゝや。

兵衛　いかにも和どのゝいはるゝ如く。畏くも先帝には。かゝるいぶせき假宮にて。日夜叡慮を惱まし給ひ。朝敵誅伐の御志も果し玉はず。終には崩御在しまして。朝家に屬する者共は。闇夜に燈を失ふ心地。勇氣もくじけ心もよわり。歎きに沈むの外はなし。

平次　夫のみならず諸國の官軍。開かぬ御運を見限りて過半は賊徒に心をかたむけ。さしも普天率土王土と云ふは。大和を始め河内和泉の三ケ國おとろへ果し御ありさま。

兵衛　されど一ツの頼と云ふは。先年湊川にて討死ありし。楠正成公の嫡子正行朝臣。年はやう／＼二十三四なれども。智略は父中將におとらず。衆にすぐれし勇膽義烈。

平次　和田恩地を始めとして。義を金鐵にかためたる一騎

當千の勇臣。多く新帝を輔佐し奉り。尊氏が強敵にあたり。未だ一度の敗を取らず。戰ふ毎に毎度の勝利。

兵衛　既に去月河内の國誉田林。又藤井寺の合戰に。賊將細川陸奥守顯氏を散々に打敗り。さすがの高の師直も。恐れて軍サを止どめしは。偏へに楠の武功によれり。

平次　まことに稀れなる名將軍。此人かくておはさんには。吉野の皇居は無事安泰。

兵衛　頓て賊徒を討亡し。再び君の御運を開く。時こそ有らんと存ずれば。

平次　是ぞ味方の一ッの頼み。

兵衛　いよ／＼分骨碎身なり。

平次　忠義の二字を。

兩人　磨き申さん。

平次　イヤナニ其方共も。輕き身分とは申乍ら。君の御爲忘れまいぞ。

○仕丁　ヘイ／＼私共は武家と違ひ。年が年中箒を持て。御掃除を致し居れば。

△　何の御役に立ませぬが。忠義に二ッはござりませねば。

□　箒のかわりに先へ出て。命を限りに働きまして。御恩報じを致しまする。

平次　ヲ、出かした／＼よく申した。かく下々の者迄も。忠義に一命惜まぬは。偏に聖德の及ぶ處。

兵衛　頓て榮を見るでござろふ。イヤナニ其方共もかかる時節のことなれば。若し敵の間者のもの。入込まんもはかられず。あやしきものと見たなれば。必ず共に心付をけよ。

○　畏しこまりてござりまする。怪しき者と見た時は。

△　寄てかゝつて引捕へ。

□　すぐにひきづッて參ります。

平次　ヲ、必ず共に油斷いたすな。さき程より餘程のひま入り。イザ一ト廻り見廻り申さん。

兵衛　イザ御同道致し申さん。

（ト各の鳴物にて兩人上手へはいる。）

○　今のお二人の咄しの通り。楠樣が御坐るさかひ。なんでも軍サは勝に相違はなひ。

△　とかく云ふ内に敵方の間者のやつでも。つかまへて立身出世をしたいものじや。

□　アレ／＼向ふからなんじやゝら。希體なやつがあゆみくるぞよ。

○　キヨロ／＼してくるからは。何でも間者にちがひなひ。たたきのめして手柄に仕やうぜ。

△　油斷をするなよ。

□　合點じや。

（ト三人身がまへをする事よろしく有。山おろし合方

にて。向ふより鷲野の郎等關伴吾。きりわらかづら胴服小袴一本指。草鞋旅形(たびなり)にて出て來り花道にて。)

伴吾　ヤレ／＼くたびれた。どうぞ早く御主人に御目に懸りたいものじや。

（ト直々(ちき／＼)本舞臺へ直る。上手へゆきかける。仕丁三人上手より取りまき。)

○△□　怪しいくせもの。そこうごくな。

（ト是にて。伴吾思入有て。)

伴吾　アヽイヤ拙者は。是なる吉野に御奉公をつとむる者。決して怪しい者では御座りませぬ。

○　イヽヤいくら言ひぬけても。なみ／＼ならぬつら魂。

△　殊にこゝには見なれぬやつ。いはずとしれた京方の。

□　間者のものに相違なひ。サア尋常に名乘て仕まへ。

伴吾　イヤ決して左様な者では御座らぬ。主人の使に旅行なし。只今歸りて參りし者。どうぞ爰をお通し被下。

○　其各も名乘らず。通らんとは。

△　いよ／＼もつて、怪しいやつ。

□　ひつくゝつゝて、詮議なさん。

伴吾　さりとては迷惑千萬。どうぞ疑ひはらして被下。

○　ヱヽめんどふな。それ。

（ト早目たる合方にて。三人一度にかゝる。一寸立廻つて。きつとなる。此時上手の奥より。鷲野平内左衛門時景。鎧直垂烏帽子(ひたゝれえぼし)附太刀にて。草履をはき出て來り。)

平内　ものどもひかへイ。

（ト是にて四人下手へひかへる。)

夫なるものは身共が郎黨。必ず怪しい者ではないぞ。

○　そんならあなたの御家來で御座りましたか。

△　一圖に間者と思ひ込み。

□　とつけもなひそゝふを致しました。

○　御免ん被成て。

三人　被下ませ。

平内　是と申すも其方共警固におろそかならざるゆゑ。決て咎むる處はなひ。用事はないゆけ／＼。

○　へイ／＼有りがとふ御坐ります。おゆるしの出た上からは。

△　私どもは是よりすぐに。

□　部屋へ參るで御坐りませふ。

○　へイ有難ふ御坐りまする。

（ト仕丁三人下手へはいる。跡合方に山おろしをかすめて鷲野あたりへ思入有て。)

平内　兼て多田の院の別當と示し合せし。密事のつかひ大義で有た近ふ／＼。

伴吾　ハヽ他國を憚る大事のお使ひ。首尾よくいたして。彼方よりお返事が參りました。

（ト懐中より密書を出して渡す。平内受取りて。）

平内　シテ別の仰はなかりしか。

伴吾　お返事の其外に。仰を受けたる機密の大事。其仰の子細と申すは。

平内　アヽコレ。

（ト耳を示す。伴吾さゝやく。平内一々うなづく事よろしく。）

ヲヽよし／＼承知致した。まだ申付る用事もあれば。汝は是より陣所へ參り。ひとまづ休足致すがよい。

伴吾　左樣なれば。拙者めは。休足致すで御坐りませふ。

平内　ヲヽ大義で有た。

伴吾　ハヽア。

（ト前の鳴ものにて。伴吾下手へは入る。鷺野跡を見送り。あたりへ思入有てこの密書の封を切り。讀み下す。此時上手の門の内より、多田の院法橋鎧直垂坊主かづら。烏帽子附太刀草履にて出て來り。）

多田院　鷺野どの。

（ト是にて。鷺野びつくり密書をかくす。）

是に御坐つたか。

平内　たれかと思へば。千嶋どの。びつくり致した。

多田院　申合せし一義に付。御身の居どこを尋ておつた。

平内　兼て御身と申合せし一義。上首尾で御坐る。

多田院　ナニ上首尾とな。

平内　彼方よりして送し書翰御覽被成。

（ト此密書を出して見せる。多田院取てよむ事有て。）

多田院　何さま此文ていでは大丈夫。ナレドモ是なる文中に。達て頼としるしあれど。其次第の御座らぬは。如何なる事か御存じなるや。

平内　其義は郎黨伴吾より。事つまびらかに申こされた。

多田院　シテ其頼みの次第と云ふは。

平内　其頼みと申すは。

（ト耳に口をよせさゝやく。）

からで御座る。

多田院　スリヤ當御所の女官の内。美人ときこへの辨の内侍を。

平内　夫さへ首尾よく渡したら。望みの通り兩國を與へんとある此文てい。

多田院　いまだ都にありしとき。嵯峨の花見の其折に。見そめられたといふ事は。人の噂に聞き居しが。左程に執心召さるゝか。イヤ夫なれば安き事。たかゞかよわひ女のひとり。拙者家來に申付。今宵の内にぬすみ出し。彼方へ渡し申さん。

平內　イヤ〳〵それは覺束なし。たかゞ女とは申せども。アノ辨の內侍は先つころ。北條高時の爲めに。あへなくうたれし右中辨俊基の娘にて。先帝の御時より此宮中に勤仕して。人にとつぐ事を願はず。忠義一圖の義烈の女。夫のみならず。此程より。辨の內侍が妹と爲し。部屋に養ふ。伊賀の局は。新田の勇臣篠塚伊賀の守が娘にて。容貌美麗の女に似合ず。壯士も及ばぬ無双の怪力。かゝるものがつきそひ居れば。うかつに事ははかられず。計略を以てだますに手なし。此義に付ては某が一工夫致すで御座らふ。

多田院　イヤ〳〵夫れは餘り思慮に過ぎたり。和どのの器量に引くらべ彼が勞をますと申もの。何程の事があらんや。其義は拙者にお任せ被成。

平內　和どのは左樣に仰あれど。あなどり難き二人の女。此義はひらに。某が思案御坐ればお任せ被下。

多田院　日比の勇氣にふさはしからぬ。要心すぎた和どのの思案。齒ケゆひやふには存ずれど。左程までに仰ある事。まづ和どのにお任せ申さん。

平內　細工は流々仕上の程を。

多田院　首をのばして。お待申さふ。

（ト少し不平の氣味にて言ふ。）

何はともあれ。是なる書翰。

（ト密書を渡す。鷺野受取て懷中する。上手より多田院の若黨横川丹下。胴服小袴一本指にて出て來り。）

丹下　御主人是にお出有しか。只今飛坂兵衞どの。何かお談事の筋有とて。御こしに御坐ります。

多田院　然らば。直樣參るで有ふ。

平內　ついに見似ぬ御從者は。

多田院　今日かゝへし。新參もの。

（ト丹下を見て思入有て。）

てふど幸ひ。

（ト平內と顏見合せ。）

鷺野氏お先へ參る。

（トづか〳〵とゆきかける。）

平內　ア、イヤ千嶋どの。かへす〳〵も只今の一義必ず拙者にお任せあれ。

多田院　いかにも。承知いたして御坐る。

平內　然らばいよ〳〵御承知とか。

多田院　武士の言葉に。二言は御座らぬ。

平內　どうやら心に。

多田院　ヤ。

平內　しかとことばを。

兩人　つかへ申た。

（ト是の鳴物にて。多田院よろしく思入有て。丹下付

て上手へはいる。跡合方。)

平内　多門殿が今のそぶり。何とも以て心がゝり。われを出しぬき。ひとりして。事を成んも計られず。破れとならぬ其先に。よい計略が有りそふなもの。

(ト向ふを見て。)

ムヽ、あれへ参るは。此程まで舞の内侍に仕へし女。品によつたら。

◎の ムヽ。

(トきつと思入レ。早き合方にて平内早足に上手の奥へは入る。山おろし合方に成り。向ふより侍女梅ヶ枝さげ髪かづら。古代の衣裳。ちいさき包を持出て来り。花道にて。)

梅ヶ枝　いつものよふに主計殿が。あそこに居て下さんすりやよいが。どうぞ早ふ逢ひたいものじや。

(ト此鳴物にて本舞臺へ来る。上手を見込で。頬にうかゞふ事よろしく有。下手の奥より。楠家の老僕安達藤六。白髪かつらキリワラ。胴服小袴一本指にて出来り。)

藤六　コレ娘。

(ト梅ヶ枝うつかり。上手の奥を見て居る。)

コレ娘。

(ト背中をたゝく。是にて梅ヶ枝びつくりする。)

何をして居るのじや。

梅ヶ枝　お前はとゝさん。びつくりしたわいナア。

藤六　何も其やうに。びつくりする事が有ものでか。そうしてけふはどこへゆきやる。

梅ヶ枝　アノけふは。急ぎのすゝぎものを頼まれました。とゝさん一寸いつて来ますぞへ。

(トゆかふとする。)

藤六　アヽコレまちや。少しそなたに咄しがある。マアこゝへ来や。

梅ヶ枝　夫でも急ぎの頼れもの故。一寸わたしやいつて来ます。

藤六　そふでも有ふが。用が有。マアこゝへ来ひといふに。

(トきつといふ。)

梅ヶ枝　ハーイ。

(ト梅ヶ枝ふせう／＼。藤六のそばへ来り、兩人捨石に腰をかける。)

藤六　そうしてそのすゝぎものは。どなたの頼みじや。

梅ヶ枝　ハイアノコレハ。里見殿イヽエアノ須田殿に頼れましたわいナア。

藤六　須田殿の。御陣所なら。是より北へとつてゆくはづじやが。

梅ヶ枝　エヽ。

藤六　わりや親に。うそをつくな。

梅ヶ枝　イヱ〱。そふでは御座んせぬ。けふは此御所内に來て居れば。詰處へとゞけて吳との事故。夫でこちへ來たのじやのわいナア。

藤六　なんじややら。そは〱と。前後揃はぬ言葉のやうす。わりや未だ心が直らぬな。コレ此間此親父が。くれぐれいふて聞かせた事。よもや忘れはせまいがな。

（ト合方きつぱりとなる。）

改めていふではなけれども。もとおれは河内の國。赤坂在の百姓で。正成公に召出され。何の御用にもたゝぬものを。只正直なものと有て。正行樣のおもり役。極おちいさい時分から。ぢひよ〱とおつしやて。少しもそばをおはなしなさらず。主從やら友達やら。わからぬやうにおなじみ申し。とふ〱此吉野までお供して。おれはふもとへ家をつくり朝夕上りて御奉公。そなたは辨の內侍樣へ。お宮仕へに上(あが)つてから。月日を送る其內に。先帝には崩御まし〱。宮方は次第におとろへ。敵は日增に威勢つよく。いつなん時此御所へ。押寄せて來よふも知れねば。お上(かみ)を始め宮方では。夜の目もあわぬ御心配御苦勞なさる其中で。有ふ事かそなたには。里見樣の御家來の主計殿と。不義徒ら。若いうちは。有うちの事とはいへど。きびしい軍令。法度を犯せば重罪ゆへ。死刑はのがれぬ二人りが身の上。それといわずに內侍樣が。そなたに暇を下されたは。お情こもるお計らも。御恩を仇にいつまでも。阿漕が浦の度重り。事顯れた其時は。大事に思ふ主計殿の。お命にかゝわる事。あなたを大事と思ふなら。此間もいふた通りふッつり思ひ切てしまや。そうない時は是迄の。わが身の忠義も水となり。そなたゆへに此親迄。どの面(つら)下げて人樣に。顏向けがならふと思ふ。いかに年がゆかぬといふて。是程の道理がわからぬか。見下げはてたおのれハナア。

（トうれひの思入よろしく異見する。梅ヶ枝じつと思入有て。）

梅ヶ枝　とゝさんかんにんして下さんせ。わたしがわるふ御坐んした。今おまへのいふ事は。よふきゝわけて居る程に。もう〱決して案事て下さんすな。主計殿にも噺しをして。けふこそふッつり二人りが中は。わかれる事にしてある故。どうぞ安心して下さんせや。

藤六　イヤ〱どふもおれは呑込ぬ。それはそなたの一寸のがれ。夫とも又本まに思ひ切たなら。おれと一處に內へ歸へれ。

梅ヶ枝　それじやといふて。今日は急ぎの用物を持て居れば。一寸とゞけて直に內へかへる程に。先へいつて待て居て下さんせ。直に跡から內へゆき。もふどつこへもゆかずに居るのが。わかれたといふしやうこで御ざんすは

いナア。

藤六　なる程。夫程にいふ事なら。さきへ歸つて待て居やうわへ。

梅ヶ枝　すぐに跡からかへるはいナア。

藤六　そんならおれは。一足さきへゆかう。あとでとつくり。

梅ヶ枝　エ。

藤六　娘待て居るぞよ。

（ト山おろしになり。藤六よろしく思入有て下手へは入る。梅ヶ枝跡を見送りて。）

梅ヶ枝　コリヤマア。困つた事になつて來たわいナア。

（トよろしく思入。なまめきたる合方になる。上手の門の內より淺川主計總髮キリッラ。洞服小袴附太刀草履にて出て來る。）

主計　梅ヶ枝。

梅ヶ枝　ヤ主計さん。逢とふ御坐んしたわいナア。

主計　我とてもそなたに逢たく。先刻是へ來合せて。藤六殿が段々と事をわけたるそなたへ異見。出るに出られず。門內に委細の樣子を聞て居たわへ。

梅ヶ枝　とゝさんが今の異見身にしみ〲とき〲わけれど。どうしたわけかおまへの事。思ひ切られぬわたしの因果。どうしたらよふ御坐んせふ。

主計　一日逢ねば千秋の思ひは。われも同じ事かゝる時節の其中にて。女に魂奪はるゝ。武士の身にはあるまじき所業と知れば。いく度か心で心を誡むれど。思ひ切られぬ心の煩惱といつてわかれぬ其時は。君へは不忠先祖へ不孝。

梅ヶ枝　もし主計さん。

主計　コリヤなんとしたら。

兩人　よからうナア。

（ト兩人よろしく思ひ入有。）

梅ヶ枝　もし主計さん。さう考へて計り居ずと。けふにつづまるわたしが身の上。よい思案して下さんせいナア。

主計　今藤六殿のいわれし事。いち〲最至極の道理。殊更是が露顯なさば。此身計りか。御主人の御身の上にもかゝわる仕儀。どふ思ひ直してもわかれるより外。思案はなひわへ。

梅ヶ枝　そんならお前はわたしをば。今更見捨る心かひナア。

主計　なんの今更見捨るどころか。今もそなたにいふ通り。思ひそめては中〲に。わかれる心はさら〲ない。切るに切られぬ煩惱の。きづなをたつもお主の爲め。おれは思ひ切て居る程にそなたも思ひ切てくりやれ。

梅ヶ枝　ソリヤ情ない主計さん。親のことばに背くとも。

わたしやわかれる心は御座んせぬ。そんな事いわずとよい思案して下さんせ。

（ト主計じつとうつむいて居る。）

もし主計さん。どうぞ思案しかへて下さんせ、もし〳〵。是程いふに返事のないは。どうでもいやになつたのかいナア。今さらおまへに捨られて。わたしが身はなんとせふ。所詮そわれぬ事なれば。そうじや。

（ト主計の小刀へ手をかける。主計これをとめて。）

主計　是は又短慮千萬。早まつた事致すまいぞ。

梅ヶ枝　はなして。殺して下さんせ。

主計　どふしてこれがはなされやうぞ。此主計へのつら當に死る心か知らねども。大恩ある藤六殿へそなたは不孝にならうがや。

梅ヶ枝　たとへ不孝にならうとも。おまへにわかれて何たのしみ。わたしやいきては居ませぬわいナア。

（トなく主計じつと思入有て。）

主計　夫程までに此主計を。

梅ヶ枝　わたしの因果で。御座ンすわいナア。

主計　か程に慕ふてくれるものを。なんと是が捨られやう。いかにも二人り。夫婦にならふ。

梅ヶ枝　エ、そんならわたしの願ひをば。

主計　叶へひでなんとせふ。

梅ヶ枝　うれしう御座んす。とはいへ、今の二人りが身の上。よい思案が御座んすかへ。

主計　外の思案もなけれども。是より二人り爰を立ちのき。弓矢を捨て土民となり。山野の住居をしてなりと。そなたと二人りくらす所存。

梅ヶ枝　そういふ事なら少しも早ふ。つれてのいて下さんせ、そうして二人りが行く先は。

主計　どこといつてあてはなけれど。爰に居れぬ互の身の上。思へば是迄。大恩をうけし。主人をよそになし。此身を退く不忠不義。

梅ヶ枝　内侍殿のお情を。仇に此儘身をかくせば。お主人へ不忠、親へは不孝。

主計　敵をおそれてにげかくれし。腰ぬけ武士とわらはゞわらへ。

梅ヶ枝　さぞや跡にてとゝさんが、にくいやつめとお腹立。

主計　其天罰のむくひ來て。

梅ヶ枝　頓てうき目を見る事も。

主計　知りつゝ。犯す身の大罪。

梅ヶ枝　切るに切られぬ二人が悪縁。

主計　思へばはかなひ。

兩人　身の上ぢやナア。

（ト兩人よろしく有て。）

主計　不義を犯せし不忠の大罪。
梅ヶ枝　親にそむける不孝のつみ。
主計　おゆるし被成て。
兩人　下さりませ。
（トよろしくわび入る事有て。）
主計　人目にかゝらぬ其内に。
梅ヶ枝　少しも早ふ。
主計　サア來やれ。
（ト兩人手を取りゆきかける。此時上手の奥より。以前の鷺野出て來り。）
平内　不義の兩人そこうごくな。
（トずつと前へ出る。兩人びつくり。）
主計　ヤ、あなたは鷺野。
梅ヶ枝　時景殿。
平内　かゝる時節も辨へなく。不義をはたらく不屆きもの。我目にかゝる上からは。見のがしには相成らぬ。是より直に汝等兩人。檢非違使の官人へ引渡し。きつと軍令正さにやならぬ。
主計　ハ、。かく御目にとまる上からは。今さらなにと身のいひわけ。申解くべき言葉とては候はず。如何にも我我兩人は、いか成る重き刑罰に、行はるゝも此の身のさび。
梅ヶ枝　軍令犯せし不義の咎。こゝで命をめさるゝとも。さら〳〵いとひは御坐りませぬ。
主計　只情なきは。檢非違使の手に渡る其時は。我〳〵ばかりか覺へなき。主人主税助が身の上にも。かゝればつらなる兼ての軍令。何卒主人の身の上に。かゝわることのこれなきやう。
梅ヶ枝　どうぞ二人りを此場にて。あなたのお手にかけられて。
主計　御成ばいを遊ばされ。主人の身の上つゝがなきやう。弓矢の道の御なさけ。
梅ヶ枝　どふぞお慈悲に時景殿。
主計　偏へに願ひ。
兩人　上げまする。
平内　ム、ハ、。汝等不義をはたらくからは。事顯れた其時は。主人の身にかゝわる事は。素より示知で爲したる罪。今さら何様申そふとも。軍法は破られぬ。
主計　スリヤいかやうに願ひましても。
平内　願て主人の主税之助も。多分は切腹致すで有ふ。
主計　ヱ、我々が科よりして。何御存なき御主人に。
梅ヶ枝　御切腹をさせませねば。ならぬ事になつたるか。
主計　コリヤもふいつそ。ム、。
平内　ヤ、大罪犯せし身をもつて。私しに死をとげんなど

と。叶はぬ事だ。
主計　スリヤ。どふあつても此儘には。
平内　是より陣所へ引立ゆき。一人りは素より主税之助も。
軍法通りに行ひくれる。サア身と一處にあゆみおれ。
主計　めぐりは早き小車の。
梅ヶ枝　ひくにひかれぬ。
主計　絶たい絶命。
平内　其身に重き罪咎も。魚心あれば水ごゝろ。
主計　なんとおつしやる。
平内　身共が陣所へ。
（トやさしく云て。顔見合せ一寸氣をかへるを。道具
かわりのしらせ。）
きり／＼うせふ。
（ト平内きつとなる。兩人是非なきこなし。此もやう
山おろし合方にて。道具まわる。）
（本舞臺三間の間中足の二重家體。三方折まわし。檜
皮葺の庇。縁側高欄付。金襖の古びたるもやう。上の
方一間奥へ下げて。續き家體。同じく庇縁側高欄付。
古びたる御簾を下げ。下手に三尺の廊下口。上の方大
樹の立木にて見切り。下の方破れたる網代垣。樹木の
あしらひよろしく。同じく立木にて見切り。此道具皇
居の模様。一切ふるびて。物さびたるてい。誂へあり。
すべて皇居内。辨の内侍曹司のてい。）
（爰に二重の上の方に。辨の内侍さげ髪かづら白袖小
うち着緋の袴にて褥に座し。古今集をよみ居る。二重
の下手に伊賀の局さげ髪かづら白小袖緋の袴にて。長
刀の身をふき居る。）
（此もやう遠く笙の音をかすめたる。誂への合方にわ
づかに蟲笛をあしらひ道具とまる。）
辨内侍　流れては。いもせの山の中におつる。よしのゝ川の
よしや世の中。貫之朝臣がゑらまれし。昔しはいもせの中
におつるも。今は都のかよひ路の。中をへだつる吉野川。
かゝる深山の假宮に。うきは身にしむ木がらしの。風も
敵かと驚かれ。便りにきくは修羅道の。外にはなにの音
傳さへなく。虫の音を友として。あるに甲斐なき皇居の
有さま。
伊賀局　月卿雲客の人／＼も。雲の上とは名のみにて。軒
もる雨もふせぎかね。こけの莚のおきふしに。御身にな
れぬ賤のわざ。都の方を詠めては。昔しゆかしき。懐舊
の情に袂をひたしたまひ。
辨内侍　朝夕木の下岩影に。清水を結び渇を凌ぎ。ひまゆ
く駒をいたづらに。たゞ九霄の雲を望み。
伊賀局　時を待間の夜あらしに。落る木の葉も身の上と。
心にひゞく遠寺の鐘。

辨内侍　是非もなき世の。
兩人　ありさまじやナア。
（ト兩人よろしく此のせりふの内。伊賀の局は長刀の身をふき。さやをかけてかたへゝ押やる事有。）
伊賀局　内侍殿。けふはお上のおひけも早く。こふいふ時に少しなと。お氣をおなぐさみ遊しませ。世が世の時で有るならば多くの人にかしづかせ。蘭奢の薫りのその中に。彼の風さへいとふ御身が。かゝるいぶせき假御殿。なれもならわぬ深山の御住居ひ。さぞお氣うつに御座りませふ。
辨内侍　わらはよりはそなたこそ。上なき君にお仕へ申す。其身の果報は有ながら。女官といふも名のみにて。部屋に在ては侍女同様。賤の手わざもいとわずに。わらはを助くるそなたの深切。忘れはおかぬうれしいぞや。
伊賀局　内侍様とした事が。改まつた其お言葉。御存の通り。わらは此身は石山寺のかたほとり。母と二人りで世を忍ひ。賤が伏やに落ぶれて。埋れ果る身の上を。隆資公に召し出され。おほけなくも宮仕へ。なれぬ雲井の式令節會。あなたのおかげでやう／＼と。女官の内にかすまへらるゝ。御恩おくりの萬分一。どふぞ御心おかれずに。おつかひ被成て被下ませ。
辨内侍　其やうにはいやれども。もとそなたの身はたれ有ふ。左中將義貞朝臣の御内にて。武勇すぐれしますらをと。世にひゞきたる篠塚伊賀守殿の娘なれば。御宮仕へに何憚らぬ氏素性。殊に長刀兵法も。武士に勝る勇力武藝。かゝる器量を持ながら。卑しき賤のわざまでも。いとふ心の無きそなた。心の内が思ひやられてならぬわいのう。
伊賀局　ナンノマア。そのやうな御心遣ひに及びましやうぞ。久しく深山の住居をなせば。おのづとなれし賤の手わざ。何とも思ひは致しませねど。あなた様には右中辨。俊基朝臣の御息女にて。やごとなき御身に有りながら。時代とはいひながら。此朝夕の御不自由。御門の爲めに御心をお盡し遊ばす御辛勞。お察し申上げまする。
辨内侍　其辛勞は此身ばかりか。皇后皇妃の御身にさへ。夜の目もあわぬ御心遣ひ。是といふのも朝家の御運。爰にかたむく時なるか。かぞへて見れば早十九年。我父俊基朝臣には。執權北條高時が暴逆を討亡し。叡慮を安め奉らんと被成し事も果さずして。むざんの刃に世を去り給ひ。其後新田楠の忠臣出て。高時を討亡し。一度君の御世となし。父が忠義は貫しが又もや賊臣尊氏が。逆意の爲めにせばめられ。今は是成よしの山に。わづかに皇居をたて給ひ。
伊賀局　正成卿を始めとし。義貞卿も無念の御最期とげ給

ひ。父にて侍る伊賀守も出てゆくゑは白波の。跡とふすべもなき世となりしは。皆反賊尊氏が爲せるわざ。

辨内侍　いふでわれとは思へども。かよわき女の悲しさは。打物とりて出るにも出られず。軍議の席へつらなるさへ。ならぬ此身のふがひなさ。

伊賀局　今此儘に日を送らば。忠義を思ふ人々も。次第に賊の手に降り。日に增しせまる朝家の成行。何卒賊を討ちしづめ。叡慮を安んじ奉らんと。思ふに甲斐なき女の身。

辨内侍　女子同士でかたらふとも。所詮及ばぬ天下の大事。兼てわらはが心中に。秘して今まで言はざりしが。實は天下の豪傑に此身をまかせて因を結び。内外ともに力を合せ。思ふ忠義を貫ぬかんと。心を決して居るわいのう。

伊賀局　わりふを合すそのお詞。わらはも忠義の勇將に。緣を求めて力をたのみ。盡さんものと兼てより。思ひ定めし心の操。

辨内侍　そんならそなたも其心か。そうとは知らずけふまでも。いわずかたらぬ互の心。

伊賀局　あかして見ればあなたにも。思ひは同じ忠義の道。

辨内侍　女ながらも身を粉にして。

伊賀局　かたむく御代をとりもどし。

辨内侍　再び開くうどん華の。

伊賀局　花咲春は顯へども。

辨内侍　御運の末となるときは。

伊賀局　かくごは兼て修羅道の。

辨内侍　ちまたにさらす互のかばね。

伊賀局　吉野の山の雪霜と。

辨内侍　はかなくきゆる身のなる果。

伊賀局　それぞ氣運の至れる時節。

辨内侍　頼みなき世の。

兩人　なりゆきじやナア。

（ト兩人憂ひのこなしよろしく有。下手の廊下口より侍女一人出て來り。）

侍女　内侍樣へ申上げます。三位樣の北の方の御使ひとして。此程御暇になりましたる。梅ヶ枝が文箱を持參いたし。御目通りを願ひまするが。いかゞ斗ひませふや。

辨内侍　ナニ。二階堂の叔母上よりのお使に。梅ヶ枝が來りしとや。此程暇は遣したれど。別に罪なきあの梅ヶ枝。殊に常々なつかしう。思ひ申せし叔母上のお使とあれば。苦しうない是へ通ふしや。

侍女　畏りました。

（ト侍女もとの廊下口へは入る。）

辨内侍　暇をあたへし其後は。便りもきかぬ梅ヶ枝が。二階堂にまします叔母上に。おつかへ申て居やるとや。

梅ヶ枝　お暇をいたゞきましてより。今は當國高市郡二階堂にまします二位様の北の方に御奉公をいたしまする。

辨内侍　オヽそふで有たか。シテ叔母上にもおかわりはあらざるか。

梅ヶ枝　ハヽ。

（トうつむいて居る。）

辨内侍　コレものいわねば子細が知れぬ。叔母上にはつゝがなくわたらせ給ふか。早ふ様子をきかせてたも。

梅ヶ枝　委細の事は此お文に。くわしう出て御座りまする。

（ト文箱を出す伊賀局とりついで内侍へ渡す内侍封を切り文を出して。）

辨内侍　ハテ心得ぬ余人の手跡。

（ト心ならぬ思入にて。文をひらきよむ毎に驚き。うれひの思入。）

ヲヽ此文のやうにては。叔母上には此程より。御いたつきにて。いともあつしくおはしますよし。梅ヶ枝御ありさまはいかゞなるや。

梅ヶ枝　そのお文にも、くわしう書て御座りまするはづ。御病氣におなり遊してより。日に増し御様子わろく。此四五日はお食もすゝまず、御大切な御様子に御座りまする。

辨内侍　エヽ。大程の御ありさまとや。うみの父上母上には。御恩も贈らず。おわかれ申し。たよりに思ふは叔母上ひとり。此吉野へこもりてより。お目にかゝるもまゝならず。お顔を見ればことさらに。おなつかしさもなほまさり。思はぬ日とてはなきものを。是程の御いたつきに。ならせ給ふも露しらず。お側に付そふ事さへも。心にまかせぬ仕への身。幸なきものは我身じやナア。

（トよろしくうれひの思入。）

伊賀局　内侍様常々御慕ひ遊ばした。北の方の御大病。さぞ御苦勞で御座りませふ。お察し申上まする。

梅ヶ枝　御奉公に上りましてより。お側におつかへ申うちも。内侍様のお噂斗り。たゞなつかしく思召て。朝夕のおものがたり。殊更今の御大病。たつた一ト目逢たひと。其事ばかり被仰てゞ御座りまする。もはやけふあすにも。頼みすくなひ。みありさまに御座りまする。

辨内侍　かくきく上は。かたときもうち捨てられぬ今わのきわ。はやくお上へお願ひ申。今宵直に御暇給はり。せめては一と夜お側にて。御みとり申上げふ。コレ梅ヶ枝。そなたは早ふさきへかへり。口上を申そふには。上よりお暇給はらば。直に跡より參りまするとよふ叔母上に申してたもや。

（ト文箱を出す。伊賀の局とりつぎて。梅ヶ枝に渡す。梅ヶ枝受取て。）

梅ヶ枝　畏りまして御座りまする。此事申上げましたら。さぞおよろこびに御座りませふ。左樣なれば。私は。早やお暇致しまする。

辨内侍　ヲヽ大義で有た。

梅ヶ枝　ハヽア。

（ト合方にて。梅ヶ枝式禮して。よろしく下手へは入る。跡内侍氣遣ひの思入よろしく。）

辨内侍　是より直にお上へ往て。今宵一ト夜のお暇を。お願申て來やうわいのう。

伊賀局　わらはもそこまで。御つき申さん。

辨内侍　少しも早ふゆきませふ。

（ト琴唄に成り。兩人立上り。しとやかに奥へは入る。唄切れる。時の鐘風の音に成り。下手の立樹の影より。以前の横山丹下。烏帽子に覆面忍びのこしらへよろしく。刀を帶びて出て來りあたりを伺ひ。）

丹下　御主人への奉公始め。暮てしまりのつかぬうちと。爰までは忍び入りしが。まだ暮るにはよほど間もあり。

○ ムヽ。

（ト丹下よろしく椽の下へ忍ぶ。知らせに付風の音にて。此道具まはる。）

本舞臺少し上へ寄せて。二間常足の二重家體。三方折まはして茅葺の庇。同じく丸木の椽側眞中にくつぬぎの石。向ふ古びたる唐紙上の方奥へ下げて一間のつゞき家體。圓相まど。下手三尺の廊下口につゞいてふるき煉塀の袖を見せ。上の方樹木をあしらひ。古びたる煉塀にて見切り。下の方同斷。向ふ山々遠見の書わり。吉野山麓のもやう。すべて楠正行居間の體。

爰に二重の上の方に。楠正行烏帽子鎧直垂小刀を指し。見臺にむかひ。兵書を讀み居る。うしろに太刀かけへ太刀をかけ。鎧櫃へ鎧をかざり。鎗弓矢等よろしくたてかけ。

（時の鐘合方に風の音をかすめて道具とまる。）

正行　傳へきく。唐の玄宗は安祿山が謀叛により。その身を巴蜀に避け給ひ。又我朝の淨見原のすめらぎは。近江の朝廷に襲はれて。此吉野山に隱れ給ふ。皆下剋上の患にして。一度天下の亂となる。されども邪は正に敵しがたく。終には聖主の德化に歸す。是天道の順理なり。殊に當今聰明叡智にまし／＼。蜀の昭烈皇帝が英略にもおさおさおとり給はねば。再びかへす君が御代。などかその時なかるべき。とは思へども家實てきせず。よき計略も。ハテムヽ。

（トよろしく思入。下手の廊下口より。郎黨一人小具足にて出て來り。）

郎等　ハツ申上ます。只今御本國より。何か密々の御用と

て。御舍弟正儀樣。御出に御座りまする。
正行　ナニ正儀が參りしとや。
（ト不審の思入よろしく。）
是へと申せ。
郎等　ハッ。
（ト引かへしては入る。）
正行　彼は本國千早の守。大切の身をかろ〲しく。うかつに出るものならず。城を離れて遙る〲と。是へ來るは心得ず。定めて仔細の有る事ならん。
（ト合方になり。下手の廊下口より。楠小次郎正儀。烏帽子鎧直垂。太刀を下げ。出て來り下手にすまふ。）
正行　めづらしや正儀。亂れたる世の習ひとて。常にあひ見る事なければ。互に心に思ふのみ。まづは汝もかわる事なく。重疊々々。
正儀　この上にも御かわりもなく。うるわしき御顏を見奉り、大慶至極に存じまする。
正行　シテ母上松葉尼公にも。かわらせ給ふ事はなきや。
正儀　母上にも御すこやかにて。異儀なくお渡りに御座りまする。
正行　夫は何よりよろこばし。何はさて置其方は。城を離れて遙る〲と。此吉野まで來りしは。定めて子細の有事ならん。是にて具サに申きかせよ。

正儀　某是へ參りしは餘の儀に非ず。今一度この上の御顏を拜し。今生の御暇乞を申さん爲。母上とひそかにはかり。是まで參上致して御座りまする。
正行　ナニ今生の暇乞とは。シテ其子細は。
正儀　只今申のぶるで御座りまする。
（ト鳴もの入り誂への合方。）
先年このかみ正時主ともろともに。常行在へ御越し有しより。諸國の官軍爰に集り再び朝家の威勢をふるひ。賊軍しばしば攻寄しも。このかみ小勢を以て之にあたり。百戰百勝の功を奏し給へば。賊主尊氏おぢおそれ。暫く軍サを止るに至ろ。既に藤井寺のたゝかひ。まつた住吉の合戰に。賊の先鋒師直顯氏が膽をひやし。賊軍都へ逃かへりしと。注進により承はれり。サレドモ虎狼の尊氏。此儘に止む可きならず。某つら〲賊軍の擧動を察し見るに。今尊氏の恐るゝものは。偏に楠家の一族のみ。其餘の諸將は追ひ〲に。或は戰死し或は降り。朝家にしたがふもの共は。日增に人數減少して。賊徒はいよ〲多人數加はり勢ひ破竹の如くにして。遠からぬ内大擧なし。是成吉野へ攻寄んずる時。寡は衆に敵しがたく。このかみいか成謀略ありとも。施す所あるべからず。其節に至りては楠一家の手勢をまとめ。一擧に事を決し給はん。
正行　ヤ。

正儀　さある時にはこの上にも。早討死の御覺悟と。某推し奉れば。これ今生の御わかれ。今一度御顏を見まほしく存る故。近頃めゝしき事ながら。推參致して御座りまする。

正行　さすがは弟。此正行が肺肝を鏡にかけて見る如く。はかゝる思慮ある其方が。大切なる本國の守りを離れ。はる〴〵と此吉野までは來りしぞ。敵に空虛をおそわれなば。ゆゝしき大事に及ぶべし。其時汝は如何致すぞ。

正儀　其儀に付ては。思慮なくしてうかつに居城を明け申さんや。某敵の擧動をはかるに。今赤坂を攻る時は。この上吉野を討て出て。さしはさんで攻めうたれん。是尊氏の恐るゝ處。容易に河內へ軍勢をさしむくる事有るべからず。たゞ心にかゝるはこの上の御身の上と存る故。母上とひそかに斗り。和田正武に謀事をさづけ。赤坂城を守らしめ。吉野へ使者を立るといつはり。十四五人の郎等に打交。城をぬけ間道より。是まで參上致して御座りまする。

正行　ホヽヲあつぱれなる汝が智略。才幹を見る上は。正行討死なすとても。跡にて君を守護なすもの。其方あれば氣遣ひなし。頓て大軍寄せ來らば。勝負を時の一擧に決し。花〴〵しく一戰なさん。

正儀　其御決心と存る故。わざ〳〵參上致せしなり。去ながら唯只管に討死を決し給ふは心得ず。抑〳〵當時諸國の武士ども尊氏に屬するは我れに忠義を存ずるならず。かれが威勢をかりそめに。已れが欲を遂んとするのみ。さればその心全く盜賊の所業なれば。今四五年を過ずして高上杉等を始めとして。各私欲增長し。確執不和の內亂を生せん事疑なし。其虛にのりて攻討給はゞ。これ第一の良策ならずや。この上の御賢慮如何に御座りまする。

正行　わりふを合す汝が異見。いかにも數年の時日を待たば。賊軍に內亂の生せん事。われも疾より見ぬきたり。

正儀　左程に先見おわしながら。時の至るも待給はで。こたびの軍サに討死と。御心を定められしは。正儀更に心を得ず。何の故にかこの上には。只討死をいそぎ給ふや。正しく忠義の爲ならず。無益に一命捨給ふか。思慮なき事には候はずや。

正行　汝の異見。一わたりはことわりなれど。是には深き子細あり。正行平生身よわくして。やゝもすれば病に侵され。年つき枕に臥すこと多し。されば神心日々に衰へ。今より數年の生命を保たん事覺束なし。迚も死すべき命なり。あはれ戰場に屍を曝し。あまねく天下に示しなば。諸國にひそむ忠臣勇士。これが爲に義氣を振ひ。正行一人死すといふとも。百萬人の忠臣あらはれ。恢復の功を奏すべし。女わらべに介抱せられ。病の床に死するには。

いくばくか増すよしあらん。又二ッには敵の大軍よせきし時。我小勢をもつて牛角の勝負は爲しがたし。我れ手勢を引ゐ。まつしくらにつくならば。かの大將を討取らん。さらずばかれと刺しちがへ。その場にこの身は死すといふとも。味方其機に乘ずるならば。などか勝利を得ざらんや。是我死を決せしところなるぞ。吾心すでに決せり。後の事は汝に委ぬる。再び諫むる事なかれ。

正儀　ハ、かく御決心有る上は。正儀何をか申上べき。今にも大軍攻寄せなば。思のまゝに一戰あれ。萬一この上討死あらば。其時こそは某赤坂に在て。時機を量り。皇居を安泰に守護し奉れば。御心安く思召れよ。

正行　それにてわれも心安し。いかなれば。當今には聖慮かしこくましませど。次第にかたぶく時運の末。

正儀　今は諸國の官軍も。過半尊氏の手に屬し。

正行　六十餘州大方は。賊軍ならざる處もなく。

正儀　吉水院の山房を。假の皇居となし給ひ。

正行　わずかに照らす天が下。

正儀　世のうき雲を吹拂ひ。

正行　再び君の御ひかり。

正儀　かゞやく時のなかる可き。

正行　見よ／＼今に尊氏兄弟。

正儀　朝家に仇なす反賊ども。

正行　頓て天罸。

正儀　思ひしらさん。

（ト時の鐘を打込み。）

正行　實に冬の日の暮早く。もはやたそがれ。

（ト正行なるこをならす。廊下口より以前の郎等出て。）

郎等　ハッ御用に御座りまするか。

正行　暮なば早く麓なる。陣所／＼を見まはりなせば。乘馬を引すへ用意いたせ。

（ト郎等廊下口へは入る。）

正行　頓てのちほど歸陣なし。今宵は夜とゝも酒宴のひらき。ゆる／＼互ひの名殘を惜まん。

正儀　某とても明日は早う。本國へ立歸れば。今宵一夜が兄弟の。長きわかれにくみかわす。

正行　其盃の數よりも。めぐりは早き光陰の。

正儀　おしみても猶おしまるゝは。

正行　弓矢とる身の。

（ト兩人顏を見合せるを。道具かわりのしらせ。）

兩人　ほまれじやナア。

（ト此もやうよろしく。時の鐘合方にて道具廻る。）

（本舞臺通し高足の二重。檜わだぶきのひさし高欄付。椽の下を一面に見せ。長廊下のもやう。上の方一間の

つゞき屋體。同じく高欄付。前へ御簾を下げ折廻して白木の遣戸。明け立ある。下の方同じく遣戸にて見切り。平舞臺。上の方大樹の立木にて見切り。下の方立樹人の登る事有。上下の方芝垣の見切。向ふ一面御所內廣庭遠見の書割。夜のもやう。すべて皇居內長廊下の體。風の音時の鐘にて道具とまる。)

(トしめりたる合方に成り。正面の縁の下より。以前の丹下伺ひ出て。下手の立木より二重へ上り。あたりを伺ひ上手へゆきかける。人音する心にて。一ず下手のすみへ身をひそめる。上手の遣り戸を靜に明け。內より伊賀の局小うち着緋の袴にて。雪洞を持出て下手へゆく。丹下身をすりぬけて上手へゆく。伊賀の局是に目をつけ。つか／＼とゆきて丹下の帶ぎわを取て引もどす。丹下此力に驚く。思入よろしく。すかしみて女と知る事有て。ふりはなし雪洞をたゝきおとす。是にてあかりきへる。伊賀の局小うち着を脫ぎ白小袖にて丹下を引きとめるくらやみの立廻り。此內すべて丹下は伊賀の局に叶わぬ事よろしく有。トゞ伊賀の局は丹下のむなぐら取てしめ上る丹下是にて血を吐き落入る。伊賀の局是をしらず。)

伊賀　とのゐの人達おわするや。怪きものを組とめたり。出合給へ／＼。

(ト大音によぶ、バタ／＼に成。下手の遣戸より。里見主稅之助義遠烏帽子直垂小具足附太刀にて走り出る。是と一處に。平舞臺上下より軍兵六人。各松明に棒を持出て來り。上下へわかれて。松明を二重へ向けてさし出す。)

わどのは里見義遠どの。

主稅助　シテ怪しきものと仰有しは。

伊賀局　則これに。

(ト手をはなす。丹下バッタリたほれる。)

主稅助　イデ繩打て引申さん。

(ト丹下を引おこし見て。)

ヤヽいつの間にやら絶命なして。

伊賀局　ナニ息絶へたりとか。

(ト丹下を見て。)

ヤヽさては只今しめたるとき。力あまつて命をたちしか。

主稅助　兼て噂サに聞及びしが。驚き入たる局の怪力。

伊賀局　無益の力に一命たち。詮議の手づるを失ひしは。

コリヤ思はぬあやまち。

(ト一寸ゑしやくすること。木のかしら。)

いたしました。

(トはづかしきこなし。皆々局の力に感心する。此もやう風の音早めたる合方にて幕。)

（引付ると。山おろしにて直に引かへす。）

（本舞臺通し。常足の二重。砂地の張もの。舞臺一面浪布。所々蛇籠を置き。上下水除けの杭。上手へ大和國六田川と印たる傍示杭。向ふ一面。吉野山を遠く見たる。夜の遠見の書割。上下樹木の張もの。(誂へあり)にて見切り。すべて六田川原の體。爰に百姓三人簑笠。竹棒松明を持。立かゝり居る。）

（水の音にて幕明く。）

○ 時に此ごろのやうに度々の軍さざわぎでは。こまりきるではござらぬか。

△ 其おかげでわしらまで。夜まはりをいひつけられ。かうして廻てあるかにやならぬ。

□ 怪しい者と見たならば。すぐに見廻りのお役人へ。知らせよとソレハ／＼嚴しいいひつけ。

○ なんにしろ此吉野には。天子樣が御座るゆえ。九分のつよみといふものだ。

△ そのうへ楠樣といふ。とひようもない名將が。ついて御座れば軍さには。

□ なんでも負る氣遣ひはない。早ふ軍サが勝になり。

○ 世間が靜に成てノウ。農業がでける樣にならにゃ。枕を高ふしてねる事も。どふもかふも仕樣がない。

△ どうぞ軍が早ふやんで。

□ むかしばなしにしたいものだ。

○△□ サア／＼精出して早ふ廻つて仕まをかひ。そふしよふ／＼。

（ト水の音にて三人上手へはいる。ヤハリ水の音にて。向ふより雜色一人烏帽子素袍高もゝ立附太刀わらじにて。松明を持出る。跡より白木の板輿に翠簾を下げたるを。仕丁四人にてこれを舁出る。此内に辨の内侍乘て居る。跡より侍女二人。下げ髪かづら古代の衣裳。かづきを被り草履にて出る。跡より雜色二人。先の一人と同じ樣にて。松明を持出て。直に本舞臺へ來る。バタ／＼に成り上下より鷲野の郎等伴吾先に六人。キリワラかづら小具足附太刀にて出て來り。双方よりよろしくとりまき。）

伴吾 辨の内侍をおむかひの爲め。

○郎等 我／＼是まで參上いたした。

△ 各々には是よりして。

□ 御歸りあつて然るべし。

⧖ 是から先は我々が。

※ 慥に踏次の警衛なせば。

伴吾 早く此場を。

六人 かへられよ。

侍女(二) 二階堂よりのお迎ひとは。御苦勞千萬。

⊠　わらはどもは内侍様の。御側の御用をつとむるもの。
雑所()　我〳〵とても仰を受け。御供に立し上からは。
同⊖　二階堂へお入り有まで。
同II　御供なして立かへらん。
()　いざ御同道致すで御座らふ。
伴吾　イヤ〳〵夫は無益な事。我〳〵内侍を守護すれば。心置きなく。
六人　かへられよ。
()　たとへなんと申さるゝとも。二階堂まで御供なすが。我〳〵どもが役目で御座る。
⊖　おつきそひ申て。
II　參るで御座らふ。
伴吾　コリヤ是程にいゝ申ても各々にはかへられぬとな。
()　いづれにしてもお供なせば。道をいそいでおこしを早く。
（ト仕丁に差圖する。）
伴吾　是非に及ばぬ。〇ソレ
（ト水の音はやめたる合方に成り。双方一度に雑色の松明をたゝき落す。上下より軍兵大勢出て。雑色三人と侍女二人へ一度にかゝる。）
()　こりやりふじんな。
侍女二人　アレエ。

（ト雑色太刀をぬかふとするを。大勢おりかさなつてこの五人に繩をかけて引すへる。此時輿の翠簾を内より上げて。辨の内侍顔を出し。）
内侍　合點のゆかぬ此場の様子。供につれたる者共を。手ごめになすは心得ず。若し二階堂の迎ひといふは。
伴吾　いかにも内侍を大内より。引出すの拵らへごと。
内侍、雑、侍女　ヱヽ。
()　さては汝等は盜賊よな。
内侍　乘もの早ふもとへもどしや。
（ト是にて仕丁もどりかける。）
伴吾　ヤ、逃るとてにがさふか。
（ト郎等皆〳〵太刀をぬき。）
（サア此輿を少しも早ふ住吉まで。）
内侍　ナニ住吉とは。
伴吾　サア早くいそげ。ゆかずば已れまつ二ツだぞ。
〇　サアゆけ。
六人　サアゆけ早くいそげ。
（ト伴吾始め郎等四人付て輿をかゝせ。せき立て上手へはいる。軍兵これに付ては入る跡供の五人と。郎等二人軍兵四人のこる。）
侍女⊛　ア、コレたれぞ來て下され。
同⊠　内侍様を助けて下され。

郎○　エヽやかましい。聲を立ると命がねへぞ。
雜㈠　二階堂の迎ひと思ひ。
㈡　油斷なしたるばつかりに。
㈢　手込に逢しは口惜い。
○　もうかう成ては叶はぬ處だ。
△　いかして置ては後々の邪魔。
○　不便ながらも五人もろとも。
△　いでそつ首をはねてくれん。
（ト兩人太刀をかざし立かゝる。此時向ふバタ／＼に成る。楠の郎等。南宮八郎。鳴尾七郎。キリワラかづら。鉢巻小具足附太刀手槍を持ち走り出る。跡より楠の郎等同じ拵にて四人走り出て來り。直に本舞臺へ來り。此内へは入り皆々を追ひちらす。一寸立廻り有て。鷲野の郎等叶はずして。皆々上下へ逃げては入る。是にて五人の繩をとくこと有て。）
八郎　百姓どもの知らせに寄り。狼藉ありと承り。
七郎　直樣是へはせ付しが、シテ／＼此場の樣子はいかに。
㈠　シテ各々には何れの御方。
八郎　楠が郎等にて　今宵陣々を見まはる途中。
七郎　狼藉有りとの訴へに。直樣是へかけつけ申た。
㈣　わらはどもより內侍樣の。
㈤　御身の上こそ氣づかわし。

八郎　ナニ內侍樣の御身の上とは。
侍㈥　二階堂にまします。叔母御せんの御病氣と。おきゝなされ。
同㈦　僞りごとゝは御存なく。お上へ願ひお暇給はり、
雜㈠　我／＼五人御供なし。此所まで參りし處。
同㈡　何者の仕わざなるか、兼て手筈のあると見へ。
同㈢　多人數にておつとりまき。辨の內侍のめさせたる。
㈠　おこしの儘に奪ひ取り。立ち去りました。
八郎　ヤア／＼シテ／＼お輿はいづれの方へ。
雜㈠　たつた今山の手の方へ。
八郎　ム、遠くはゆくまい。跡追つかけ。
七郎　內侍の君を。お救ひ申さん、
八郎　少しもはやく。
七郎　いづれも御座れ。
（ト八郎先に郎等六人。皆／＼いそひで上手へ走りは入る。）
㈠　我／＼ども跡よりつゞいて。
㈧　內侍樣のおせんどを。
☒　少しも早く。
（ト立かゝつて。）
侍女二人　アイタヽ、。
（ト身うちのいたむこなし。）

雜()　どふなされた。

☋　こゝかまずと。

⊠　早ふおあとを。

()　ムゝお身たちふたりは。

（ト立上り上手を見込を道具かわりのしらせ。）

跡よりござれ。

（ト雜色（ざうしき）三人いつさんに上手へはいる。此もやう水の音早き合方にて道具まはる。）

本舞臺眞中に大なる松の立木。上下山の張もの。向ふ一面山〳〵の遠見。すべて六田川つゞき山手のもやう。又に以前の楠の郎等六人。鷲野の郎等三人と。軍兵大勢を相手に立廻り。此うしろに内侍の乘て居る。以前の輿を昇すへてある。

（はげしき禪のつとめにて道具とまる。）

（トどさくさの立廻りよろしく有て。トヾ鷲野の郎等叶わずして上下へ逃げては入る。楠の郎等六人是を追てはいる。跡山おろしに成い。向ふよき處へがらす張の月を出す。しつとりした合方に成り。輿の内より辨の内侍小うち着緋の袴にて出來りほつと思入。）

辨内侍　思ひがけなひ狼藉に。西も東もわからねど。幸ひさえし月影を。道のしるべにそふじや。

（ト下手へ行きかける。此時上手の奥より鷲野平内左衛門。鎧直垂烏帽子附太刀好の拵にて出來り。）

平内　氣づかひあるな辨の内侍。身共がおくつてつかわそふ。

辨内侍　そういふ聲は。

平内　鷲野平内左衛門時景で御座る。

辨内侍　まことに和どのは時景殿。どふしてこゝへ。

平内　先刻より此所に。御身の來るを待ておつた。

辨内侍　ナニ待つて居たとは。もしや今の狼藉ものは。

平内　いかにも身共が家來のもの。

内侍　エヽ。

（トびつくりどうとなる合方かわつて。）

平内　其驚きはことはりなれど。素より意趣も意恨も無けれど。其うつくしい容貌に。ぞつこんほれた其人から。御身をぬすんで與れよとある。餘義なひ頼みを受けし故。行氏卿の北の方が。病氣なりといひ拵へ。まんまと爰まで引出したが。御身を慕ふ其主は。住吉にて待ち給へば、身どもと一處に參られよ。

辨内侍　スリヤ叔母上の御大病は。僞りごとで有りたるか。そふきく上はこふしては。

（ト立上て行ふとする。時景袴の裾をしつかりふまへて。）

平内　逃るとも逃そふか。もうかふなつたら是非がない。

のがれぬ所と覺悟めされ。
辨内侍　もふ此上は。
（ト内侍懐劍をぬいて。切りかける。一寸立廻り。時景その手をきつと取り。）
平内　あよこざいなはむかいだて。もふ此上は手籠（てごめ）になしてつれゆかん。
（ト内侍の刀を打落し。引立ゆかふとする。此時上下より以前の八郎七郎出て來り。内侍をかばひきつとなる。）
八郎　ヤア汝は鷲野時景よな。
七郎　内侍をとらへて此狼藉。
八郎　イデ縄打て。
七郎　引立ゆかん。
平内　何やつなるか。我に向ひ。手むかい立は無禮なやつ。
八郎　ヤア無禮とは汝が事。かく言ふ我は楠家の郎等。南宮八郎。
七郎　鳴居七郎。底意知れざる汝がふるまひ。
八郎　サア尋常に。
兩人　縄にかゝれ。
平内　何をこしやくな。
（ト誂への鳴ものに成り。平内左衛門は二人を相手に立廻りよろしく有。よき時分に上下より。鷲野の郎等二人出て來り。）
○郎　ヤア御主人是に。
△　おわたり有りしか。
平内　よい處へ、兩人加勢いたせ。
兩人　心得ました。
（ト兩人双方へかゝる。立廻りの内平内は内侍を引立て上手へは入る。）
八郎　あれをやつては。
○郎　何を。
（ト又立廻つて。きつと見へ。知らせに付。六田川原山〳〵を見たる遠見の道具幕をふりおとす。）
禪のつとめに成り。上手より以前の雜色三人。軍兵三人と立廻りながら出て來り。いろ〳〵おかしみの立廻り有て。トゞ軍兵叶わず下手へ逃げては入る。雜色三人是を追ては入る。山おろしになり知らせにつき。）
（道具幕切て落す。）
本舞臺一面通し高足の二重。岩山の張もの。嶮岨のもやう誂へあり。二重上の方大なる岩山の張ものに。奥の方へダラ〳〵登り口。下の方同じく岩山の張ものを。二重にたて此間中途山道のもやう。諸々樹木のあしらひ。向ふ一面山々遠見がらす張の月。すべて山添への中段細道のてい。山おろしにて道具治る。

（ト二重下手の岩山の間ダ奥より。辨の内侍緋の袴のまゝ逃て出て。二重よき處にてころぶ。跡より平内左衛門追かけ出て。是をとらへる。一寸立廻り有て。トヾ内侍を引立。上手の上り口へは入る。鳴もの打上る。）

次へこれ巖石巍々たる山谿は。名におふ吉野の山つゞき。限なき月も影くらく。谷間をつたふ山道の。いとものすごき山中に。あはれ内侍はくせものゝ。してふにかゝるうきなんぎ。すでに危き時しもあれ。駿馬に鞭打ち走せ來るは。今南朝の柱石と。人も知たる楠左金吾正行が。直垂烏帽子優美のすがた。そびらに負なす白羽の征箭。あたりを掃て見へたるは。めざましくもまたいさましゝ。

（ト大小入り誂への鳴ものに成り。向ふバタ〳〵にて楠正行鎧直垂烏帽子附太刀ゑびらを背おひ弓を持。馬乗にて走り出る。跡より郎等二人。手鎗を持附そひ走り出て。花道よき處にとまり。向ふをきつと見て。

正行　辨の内侍が危難の知らせ。きくと其儘走付しが。アレ〳〵夜目にそれとはわからねど。遥の山の岨づたひ。女をいどむ曲ものこそ。まさしく鷲野平内左衛門　兼て足利尊氏に。二心をいだく反賊時景。いでや一矢に射とりくれん。

（トよろしく弓に矢をつがひ。切てはなし給ふを見て。

それ。

（ト誂への鳴ものにて。正行馬乗のまゝ。むちを打て一ツさんに本舞臺より。上手へは入る。郎等二人付ては入る知らせに付。此道具しづかに半分廻す。）

作者自評

正行馬上にて弓を射るの一條は。中昔の武士がよく射を用ふるのかたちをみせんとの旨趣なり。弓も眞物を用ひ箙その餘のものまで盡く眞様を模し。矢をぬき出す仕方。又馬上にて放つ仕方等。よくその古實を正して。昔の武士のさまは。かくあらんと推察せしむるの意なり。故に舞臺に此時人を居らしめずして。矢を十分に放たしめ。矢聲ならびに弦走(つるはし)りの音まできかしむる旨向なり。又云當時戯れに弓を射て的に中るをよしとするから に。その容體をいふものなし。又箙のからみやう。矢を抜出す等の伎は。學者にして古を好むものは識れども。世の中絶て見るものなければ知るものもなかるべし。弓箭の器械は博覧場にてこれを見れども。いかにして用ふるものにや知りがたきもの多し。よりてこれ等の躰を演しそのかたちを見

せしめむとするも。亦無径の事にあらざるべし。
平舞臺前につゞき道具。上の方にタラ〳〵に。平舞臺へおりる山道のもやう。山中のもやう種々誂へあり。向ふ遠見のよき處へ、からす毘の月。すべて此道具誂へあり。爰に二重の下の方に辨の内侍。胸に手を當て動氣を痛むてい。正行歩立(かちだち)にて是を介抱して居る。二重上の方に。以前の平内左衛門。矢の立つたる儘にたほれ死して居る。平舞臺上の方に。以前の郎等二人正行の乘馬を引すへ。ひかへて居る。山おろしにて道具とまる。

正行　藥師へ祷りしからは。早お氣づかひは候はず。心をたしかに持給へ。

内侍　おもひもかけずも。賊徒の辱をまぬかれしは。全く和君の御恩による。何をもて報ずべき。ありがたき惠みにこそ。

正行　コハ思ひよらざるその御言葉。たとひ見もしらぬ人なりとも。かゝる狼藉に出逢ふからに。など打捨ておかるべき。ましてや御身は宮中に。事(つか)へ玉へる女官なるに。萬一賊徒におかし辱められんには、御身の恥辱のみならず。朝家の恥辱此上あらじ。かく申す正行等。守護の役めにおこたりし。其罪なしと申されず。折よく道に出合しは御身の幸なるのみかは。此正行もおもてを起すと申もの。さりにてもにくむべきは鷺野時景。賊徒に内應するよしぞ。風聞に知るものから。かゝる狼藉に及ぶ事必ず子細有る事ならん。此よしつぶさに奏聞して。與黨の詮議に及び申さん。

内侍　夫に付ても心得ぬは。日頃やさしき梅ケ枝が。何故かれらに一味せしか。

正行　ナニ梅ケ枝とは。

内侍　跡にてゆる〳〵ふたり申さん。

（ト山おろしにて。平舞臺上手より。以前の郎等八郎七郎出て來り。）

八郎　我君これにおわたり有しか。

七郎　曲ものどもは一人モのこらず。

八郎　からめとりまして。

兩人　御座りまする。

正行　ヲ、太義〳〵。是成る時景が死骸もろとも。とらへしものども。一同に行在所へ引立よ。

八郎　ハ畏て御座りまする。

（ト八郎づか〳〵と二重へ上り。鷺野平内が矢をぬきとる事有り。）

八郎　胸さか箆深(のぶか)に射ぬかれて。唯一矢に即時の落命。

七郎　吾君の御手だれ。今にはじめぬ事ながら。
兩人　畏れ入て御座ります。
正行　生どらんと思ひしかど。內侍にあやまちあらんをおそれ。やむ事を得ず討取たり。
內侍　きゝ傳へし八幡どの。筑紫の八郎にも、おさ〳〵おとらぬ此弓勢。わらはも感じ入ました。
（平舞臺上下より。以前の雜色三人侍女二人仕丁四人輿を舁出て。）
㊀侍　內侍樣には御無難にて。
㊁侍　これにおわたり遊しましたか。
㊀雜　まづはおかわりなきていを拜し。
㊁同　我〳〵一同いか斗りか。
㊂同　大慶至極に。
五人　存じ奉りまする。
內侍　正行ぬしの助けにより。はからず危難をのがれしぞや。
正行　某路じの警衞なせば。內侍にはイザあれなる輿へ。
內侍　それではあまり。
正行　其斟酌は無益な事。きみにつかふる御身なれば。我身にして我身にあらず。夜のふけぬ間に少しも早ふ。
內侍　然らば仰に隨がはん。
（ト立上り正行と顏を見合するを木のかしら。）

（正行少し身をかへり下って。）
正行　まづ〳〵。
（ト一禮する。內侍は正行を見てあつぱれ豪傑いと賴母しと云ふ氣味あひ十分ある。平舞臺の一同。平伏する。此ことやう双方ひつぱりよろしく山おろし。）
（大小入り謡の鳴ものにて幕。）

作者自評

內侍が正行の弓勢（ゆんぜい）をほむる所は。もつともこの役をつとむるものゝ注意すべき所にして。その武勇を感じ。自らその人品をも慕ふ所を言語の外に示して。見るものをして。何となく慕はしく思はする仕打。十分ありたし。たゞその武勇をほむるのみにして。さらに色合なきやうにては。作者の用心にそむくもの也。

二幕目

楠正行假陣營の場

本舞臺四間通し。中足の二重。茅葺の庇（ひさし）椽側付。上の

方一間はすにぬり骨の障子にて見切り。向ふ一面古びたる唐紙。其中に上り段。軒先へ菊水の幕を張り。上の方一間の煉塀へ同じ幕を張り。紅葉の立木。下の方ずつと奥へはすにつゞき家體。廊下もやう。ヤリ戸にて見切り。平舞臺下手ちいさなる樹木。菊水の幕を張り。上下同じ幕にて見切り。二重の正面に鎧櫃鎗長刀弓矢等よろしく。立ならべすべて吉野の庵假陣營のてい。爰に二重の上に。楠の郎等和田新發智源秀。坊主かづら鎧直垂附太刀好の拵にて住ふ。二重の下手に。同じく和田新兵衞正朝。キリヽラかづら鎧直垂附太刀。好みの拵へにて住ふ。平舞臺上の方に。前幕の南宮八郎正直。鳴尾に郎正道。以前の形にてひかへ居る。平舞臺下の方に。前幕の鷲野の郎等伴吾始め。六人繩付にて座して居る。うしろに軍兵四人棒をひかへる時の太鼓にて幕明く。

源秀　こりや鷲野時景が家來。闘伴吾其外五人の者共。よく承はれ。今此處へ呼出せしは餘の義でなひ。汝等が主人時景事敵將高の武藏守師直に心を通じ。みかどを傾けんとはかりし條。則時景が懷中より出たる密書にて事明白なり。また舞の内侍を奪はんとせしも。是又師直が頼みにより。計略を以てあざむき出せし事。昨夜汝等が白狀によつて顯然たり。之に依て時景が首級軍門にかけて諸人に示す。また其餘の者共もいち〳〵罪狀を糺すべき朝議なりしが。吾君正行朝臣このたびの功にかへ。汝等始め一同の一命は申請けたり。去るに依て今日只今。繩目をゆるし追放なせば。いづれへなりとも勝手次第。それ彼等が繩目をといてつかはせ。

軍兵　ハヽ。

（ト軍兵立かゝり。六人の繩を解く。六人顏を見合せ。互に難有涙にくれる事よろしく。）

伴吾　ハヽ、存寄らざる御仁惠。我々主人の命を受け。内侍を奪ひとらんとせしも。

○　敵將高の師直へ。降參なすべき爲めなれば。

△　いふまでもなき不忠の大罪。死刑に逢ふはのがれぬ處。

□　所詮命はなきものと。覺悟きはめておつたるに。

⧖　思ひもかけず。正行公の功にかへ我々が。

※　一命お助け下さるゝとは。生々世々の御洪恩。

伴吾　身を粉にくだきつかゆるとも。いかでか報ひ奉るべき。此上のお願ひに。今日よりして改めて。當家の御家人とも成下雜兵の列に加へられ。

○　御出陣の其時に。

△　先陣なして君の御楯と。

□　討死なして今日の。

⧖　御洪恩に報ひたく。

※　何卒此義を御兩所より。
伴六　御大將へ御取なし被成下るゝやう。偏へに願ひ。
六人　奉る。
正朝　神妙なる願ひなれど。罪あるものを此儘に旗下(きか)につくるは。上へのきこえ。其義は決して相叶はぬ。
伴六　スリヤ我々がお願ひは。
正朝　叶はぬ處とあきらめて。早く此場を退散いたせ。
伴六　ハヽ、不忠の罪ある我々ども。みゆるしなきは是當然。是非もなき次第なり。今さらかへらぬ事ながら。主人に不忠の行ひあるを。
○　いさめも入れず。
△　惡事と知つて與(くみ)せしは。
□　是我々が一生の不覺。
⧖　かく情けある大將の。
※　みもとをはなれ今さらに。
伴吾　いづくをさして退(のが)るべき。とはいへ御許容なき上は。是非に及ばぬいづれもと。ともに此場を退散いたさん。
（トよろしく手をつかへ。）
重々厚き御情け。いづれいつかは今日の。御恩に報ひ奉らん。仰に隨ひ此所を。一同退散。
六人　仕り升る。
（ト六人よろしく式禮して。すご／＼立かゝる。）

源秀　アヽコレまて／＼。
（ト是にて六人もとの如く住ひ。手をついてひかへる。）
汝等が赤心某とくと承知せり。まこと汝等悔悟して。忠義を盡す心ならば。こゝに一ッの功を立てよ。某よしなにとりなし得させん。
伴吾　スリヤ一ッの功を立るなら。我々が身の願ひをば。お叶へ被成て被下るゝとな。
○　たとへいか成る事なりと。
△　一命かけてつとむる所存。
□　何事にもあれ我々が。
⧖　つとむる御用これあらば。
伴吾　一ッの功の立升るやう。偏へに願ひ。
六人　奉り升る。
源秀　然らば其次第申聞かせん。既に昨夜御所内へ盜賊忍び。伊賀の局の勇力にて。其場に於て落命なせしが。詮議の手づるを失ふたり。なれども此者よもなみ／＼の盜賊にてもこれ有まじ。あやしむべきは。多田院法橋。此程よりの彼が擧動(ふるまひ)。疑はしき事ども少からず。もしや彼が所爲なるか。今より彼が方に至り得と實否を正し得て。申上る事ならば。夫を一ッの功と爲し。御大將へ推擧なさん。此事汝等なし得んや。

伴省　ハ、驚入たる。御眼力。我々どもゝ憶には。存ぜぬ程の事なれど。多田院洪橋は。主人時景もろともに。敵に心を通ずる事うす〳〵承知致し居る。其義なればいと安し。彼に隋ふていになし。實否を正しお知らせ申さん。

正朝　ム、其義に於ては此正朝。兼て君命うけ居れば。密かに謀を授くべし。直様身共が詰所へ參れ。

伴省　ハ、委細畏て御座り升る。

正朝　左様御座らば源秀殿。

源秀　萬事は和殿にゆだね申す。

正朝　然らば後刻御意得申さん。

(ト正朝一禮してよろしく立て下手の廊下口へは入る。是と一處に。平舞臺の六人よろしく。源秀に一禮して。下の手の奥へは入る。軍兵殘らず下手へは入る。源秀のこる。木〆りがれを打込。床の浄瑠璃になる。)

上〽吹風に遠寺の鐘のこふ〳〵と。ひゞく麓のひとかまへ。楠左金吾正行が。威儀嚴重なる陣屋の外。老の一てつ藤六が。不便や娘梅ヶ枝を。高手小手に戒めて。引立てこそあゆみくる。

(ト下手より前幕の藤六。胴服小袴一本ざし。娘を引立出る。前幕の梅ヶ枝繩にかゝり。藤六に引立られて出て。平舞臺よき處にて。)

藤六　つみとが重き此娘。只今途中に見かけしゆえ。召連れ升て御座り升る。コレ下に居よ。

上〽引すへられて梅ヶ枝は。今さらなんといひわけの。きへも入たきうき思ひ。せつなき胸は娘より。親の心はなほ百倍。忠と義理とにしめからむ。血筋の繩も恩愛に。ゆるむ心をはげまして。

(ト梅ヶ枝よろしくさしうつむく。藤六よろしく差て。)

コリヤ己れは〳〵は日頃の心に似もやらず。大悪人の手について。あらふ事か大恩ある。内侍殿を。敵の手に渡さふとした不忠不義。人の皮きた畜生め。うぬどふしたら腹がいよふ。

上〽情用捨もあらけなく。ゑりがみとつて引すへて。拳をかためてう〳〵〳〵。慈悲も情もわきまへし。血筋の親のせつかんは。骨にこたへて梅ヶ枝が。

梅ヶ枝　とゝさん。かんにんして被下升せ。

上〽かんにんしてと斗りにて。後は涙にむせかへる。不便の者と源秀が。

源秀　藤六どのゝ心のうち。源秀さぞと察し入る。コリヤ梅ヶ枝其方は不らちなものじやな。不忠不義の時景に一味なし。女の身にて大膽にも。二階堂の使といつはり辨の内侍をあざむきし事。不届至極な女め。

上へするどき言葉に梅ヶ枝は。なんと答へも今更に。
身の罪科のおそろしく。

梅ヶ枝　ハア、。

藤六　コリヤヤイ。泣て見せてもその手じやゆかぬ。どふしてわれは悪人に一味した。そふして主計殿は。いづれに居る。サアまつすぐにいふてしまへ。コレだまつてゐてはわけがわからぬ。めろ／＼なかずと早ふぬかせ。いはぬか。いはぬか。よし／＼いはずば親がしよふがある。サア是じや。いはぬとこれで打のめすぞ。サアいへ。いはぬか。いはずばこふして。いはせて見せふ。

上へ棒おつとつて立かゝる。折からうしろの一門より。
立出る大和守。

（ト藤六棒ふり上げ打んとする。奥より楠大和守正時。烏帽子鎧直垂太刀。好の拵へにて出て來り。）

正時　藤六まて。

藤六　ヤあなたは御舎弟正時様。

正時　時景が巧みのいち／＼。事明白に相わかれば。最早詮議を致すに及ばぬ。

藤六　では御座り升ふか。餘りと云へばにくい女め。

（ト又立かゝるを。）

正時　ハテさしづもまたで。自儘の詮議ひかへて居よ。

藤六　ハ、。

上へはつとばかりにひかゆれば。正時静かに座について。

（ト正時二重上手に住ひ。）

正時　藤六。彼がいましめをときつかはせ。

藤六　ハツ。

（トもぢ／＼する。）

正時　ときつかはせと申すに。

藤六　ヘーイ。

（ト藤六よろしく思入有て。梅ヶ枝の縄をとく。）

正時　藤六。其方にはこのかみが。何か御用の筋ありとて。先刻よりお尋ありし。少しも早く奥へ参へ。

藤六　御尋とあれば親父めは。

正時　そちは早く参るがよひ。

上へいわれて藤六立上り。

藤六　これ娘。けふからしては勘當じやぞ。

梅ヶ枝　ヱ、。

藤六　顔を見るも是限りじや。

上へきつてはなせし一言に。娘はかなしくマアまつてと。いふにいわれぬ身のつみとが。わつと斗りになきしづむ。氣づよくいへどこなたにも。思ひは同じ親子の恩愛。きづなにひかるゝ愛別離苦。心

残して入りにけり。

(ト両人よろしく有て藤六奥へは入る。)

上へ正時あとを見送りて。源秀にうちむかひ。

正時　最早用なき此女。早く追放いたされよ。

源秀　アイヤお言葉では御座れども。彼がみそかを淺川主計。昨夜よりして行衛知れねば。詮議の手づるは是成女。

正時　夫とても詮議に及ばず。女に魂しひ奪はるゝ。腰ぬけ武士の五人十人。敵に隨身なしたりとて。味方の害となるにあらねば。其儘にさし置れよ。

上へ寛仁大度の一言を。きく梅ヶ枝がせつなさつらさ。

梅ヶ枝　是まで軍さのそのたびに。あつぱれ手がらもした者を。腰ぬけ武士とはお情なひ。とはいへ悪事にくみせしからは。いひとくよしもなけれども。

上へ夫と定めかしづくぬし。腰ぬけ武士とのおさげすみ。どふマアきひて居られ升ふ。

みんな此身がなせるわざ。世にはづかしい身のいひわけ。おきゝ被成て被下ませ。

(ト下座の合方。)

御法にそむき主計ぬしと。あの世をかけていひかわし。親の意見もうはのそら。不忠不孝は知りながら。きのふ二人で。館を立退き。身をかくさんとせし處。時景殿に見咎められ。軍令犯せし不義の咎。二人りは素より御主人の。里見様にも御切腹と。きいた時の身の悲しさ。我が身は覺悟のことなれど。何に科もなき御主人の。御身にかかる御難儀を。助けてたべと手を合せ。

上へすがりなげゝば時景殿。世に恐ろしい悪事のたくみ。

此事首尾よくつとめたら。主税助の身も安泰。事おんびんにすました上。二人を夫婦にしてやらふと。のつぴきさせぬ手づめのなんぎ。

上へお主殿の御身の大事。またふたつには二人りして。夫婦になつてそひたひばつかり。

ついわるい事を致し升た。わたしは文の使の役。主計ぬしは敵方へ。都をさして行かしやんしたが。今はどうして御座るやら。事の露顯ときひたなら。定めし生ては御座んすまひ。敵に降參するよふな。主計ぬしでは御座り升せぬ。疑ひはらして被下ませ。もしお願ひで御座り升る。

上へさすが女の一筋に。夫を思ふ其實の。まことは詞にあらはれたり。正時とつくと聞終り。

正時　夫を思ふそちが心底。正時篤と聞届けた。早謀主たる時景の。罪科分明なる上からは。其餘の者は一同に。このかみ已が功にかへ。助命の義をゆるさるれは。再び主計かへり來るも。一命助け追放なさん。其方とても科は

同じ。此地に居ること相成らぬ。いづく〳〵なりと。勝手次第に立去るべし。ヤア〳〵ものども。是成女を門外より追放いたせ。

(下手にて。)

軍兵　ハ、ア。

上へはつと答へて軍兵ども。手に〳〵竹棒携へ出。

(ト下手より軍兵四人。わり竹棒を持出て來り。よろしくならぶ。)

きり〳〵たて。

上へいはれてなく〳〵梅ケ枝は。

梅ケ枝　左樣なれば。お暇致すで御座り升う。

上へ兼てかくごはしながらも。どふぞまいちど主計ぬしに。此世の名殘たゞひとめと。心を定めて梅ケ枝は。引立てられて出てゆく。

(ト梅ケ枝よろしく。軍兵ついて下手へは入る。)

上へ折からこゝへあわたゞしく。郎等一人走り出で。

(ト下手のヤリ戸より郎等一人出て來り。)

郎等　ハツ申上升す。何か御內勅を蒙らせられし趣にて。四條大納言隆資卿。辨の內侍もろともに。只今俄に御入に御座り升る。

(トいひ捨て。もとの下手へは入る。)

正時　四條大納言隆資卿。內勅を奉じ入來とは。何事なるか。何はともあれ入來の趣。この上へ申上ん。

上へいひつゝ立て正時は。一ト間へこそは入りにけれ。

(ト正時よろしく奥へは入る。)

上へ知らせによつて。楠家の棟梁楠左衞門正行は。烏帽子直垂おごそかに。威儀を正して出で向ふ。

(ト奥より楠正行。烏帽子直垂附太刀。好の拵へにて出て來り。二重下の方によろしく住ふ。源秀は少しうしろへひかへる。)

上へ待間程なくこなたのかた。かしこき勅をうけ奉り。四條大納言隆資卿。辨の內侍をともなふて。しづしづとして入り來る。

(下り葉になり。)

(ト下手の廊下口より。四條大納言隆資卿。立烏帽子直垂。好の拵にて出る。後より辨の內侍。五ツ衣緋の袴檜扇を持ちしとやかに出て來り。よろしく下手に立身。)

正行　隆資公には俄かの入來。假陣營にてお席を設くるひまもなく。失禮の段おゆるしあり。いざまづ是へお通り下されい。

隆資　然らばゆるさせられよ。

上へ靜づ〳〵と打とふる。

(ト隆資。二重眞中スコシ上手へよろしく住ふ。辨の

內侍は。隆資の上手へはすに住ふ。正行は眞中スコシ
　下手へ住ふ。源秀その下へ住ふ。）
正行　彼の勅使。いかなる仔細か。何卒仰せきけられよ。
隆資　只今申のぶるで御座らふ。
　（ト管絃に成り。）
皇居警衛の武士。鷲野平內左衛門。兼て京方に心を通じ。昨夜辨の內侍を盜み取り。高の師直に贈らんとせしを。汝正行參り合せ。時景を即時に討取り。內侍が危急を救し事。叡慮に達し深く御感在らせらる。其折內侍を奪はれなば。朝家の瑕瑾と深く恥思召處なるを。其事に至らざりしは。偏に正行が忠節による處と。淺らず御感あり。しかるに主上正行が定れる妻なきよしきこしめされ。內侍のすけ藤原氏は。故右中辨俊基の娘にして。文才すぐれ。忠義の志も又男子におとらず。これを正行に女合しなば。一對の夫婦たるべしにと思召し。即ち隆資に內勅あり。內侍を正行に下し給ふ。隆資これをうけたまはり。內侍を只今召しつれたり。謹んで勅答せられよ。
正行　ハヽ、御內勅の趣。謹で承る。そも君の御爲に。身をいたすは君臣たるの道にして。めづらしからず。然るに昨夜いさゝかの微功ありしを。かくまでにめでさせ給ひ。殊更に宮女をゑらみ臣正行に下し置るゝの條。君恩身にあまり。如何斗りか難有存じ奉る。

隆資　然らば內侍を給はるとも。さゝはりの義はこれなきよな。
正行　何とてさはりこれあるべき。彼の內侍は系圖正しく。殊更忠義の志は。男子も及ばぬあつぱれ烈女と。常に心に感稱し罷在る。今正行が妻にせよとの御事。最も望む處にして某がよろこび此上は候はず。叡慮の趣ありがたきまで辱なく存じ奉る。此義よろしく奏聞願しくこそ候へ。
隆資　然かあらば勅旨を奉じ妻となし。婚姻を整へ給ふよな。
正行　ア、イヤ。只今も申せし如く。身にあまりたる寵命は辱けなく存奉れど。正行深く思ふ處あり。妻と定むるに至りては。何とも勅答申上難し。綸言に違ふは恐れあれど。只いくゑにも御免を蒙り奉る。
　上へ思ひがけなき正行が。詞に隆資不審はれず。
隆資　君の叡慮を辱なくぞんじ奉りながら。反て婚姻をこばまるゝは。定めし深き仔細ぞあらん。委細具さに申きかされよ。
　上へ承はらんとのたまへば。
正行　ハヽ、君の叡慮を。辱く存じ奉りながら。婚姻の義を。辭し奉る正行が苦心の程。ハテ何をかな。
　上へ何か思案の胸の中。ひとりうなづき正行が。

源秀文臺を是へ。
源秀　ハ、ア。
上へハツト答へて奥の間より。懐紙をのせし文臺を。
正行が前にさしをけば。
(ト源秀奥より、文臺に筆硯と懐紙をのせ持出し。正行の前へ直す。)
上へ正行つくへに打むかひ。筆とり上げてさら／＼と。
こゝに染なす水ぐきの。後やゆかしき大和歌。さすがにたけきものゝふの。かくとは誰かしらま弓。矢竹心の其のなかに。なさけの道も辨へし。優にやさしき大將と。後の世までも知られたり。
(ト正行大鷹の紙へ。一首の歌をかく事よろしく。有て。隆資の前へ差出し。)
正行　是正行が勅答の。心をこめし一首の和歌。御内見被下よ。
上へとさし出せば。隆資手にとりあげ。
(ト隆資この懐紙を手にとり上る。内侍もともにこれを見る。)
隆資　迚も世にながらふべくもあらぬ身の。假の契りをいかでむすばん。
内侍　とても世に。ながらふ可くもあらぬ身の。
隆資　假の契りを。いかでむすばん。

上へくりかへし。吟ずる内に隆資卿。扨は討死の覺悟かと。思ひは同じ辨の内侍。互に顔を見合せて。暫し詞はなかりけり。
(ト兩人正行の心に感ずる思入よろしく有。)
上へヤ、有て隆資卿。ふさがる胸のといきをつぎ。
此よみ歌を見る上は。何といふべき詞もなし。たゞ感歎の外あらず。内勅の御使もはや是迄。
上へ件の懐紙まき納め。座を改めてこなたにむかひ。
いかに朝臣。御身が忠義の眞心は。隆資まことに感佩せり。去にても内侍には。望を起せし英雄の。ゑにしも姿にあだとなり。さぞやほいなくおぼされん。せめて御身がこれまでの。忠義の素志を此なべに。正行朝臣に打明し。かたりてうきをなぐさまれよ。
へいはれて内侍ははりつめし。忠義も今は水ぐきの中をへだつるうす氷。とけぬ心の奥底を。それと知らねば正行が。
正行　辨内侍もきかるゝ如く。其こしをれにて正行が。心の程は推し給はん。いともかしこき勅諚を。いなみ奉るも忠義のため。御身をいとふに非れば。必らずあしうおぼされな。
上へさとす詞をきくからに。内侍はかたちを改めて。
内侍　何とて惡しく思ひましやう。かく申さば淺き女子の

嗚呼なることぞと。笑はせ給はんか知らねども。むかし下野の形名の妻は、夫を助けて蝦夷のあだをうちやぶり。又左馬頭義仲朝臣のをもひもの。巴御前は君の馬前に先驅して。平家の軍をうちしと聞く。わらはも同じ女子なり。甲斐なき身とはいはるゝとも。やはかこの人々におとるべき。いかでよき大將とちなみを結び。夫は外にあだをたひげ。妻は内に士卒をはげまし。夫婦心を一ッにして。君の御爲國の爲命をすてんと思ひしに。楠どのにはかゝる御覺悟。これも忠義の爲なれば。今さら何と申すべき。

正行　ハ、アあつぱれなる女丈夫かな。そら飛ぶ鳥地を走るけもの。男女の情を知らぬはなし。正行木石の身にあらず。苦樂を共にし。生死を誓はんとある。内侍の眞心。かゝる言を聞くうへは。たとへ婚姻は結ばずとも。今より心を一ッにして。忠臣烈婦の名を殘さん。必ず心おかるゝな。

隆資　げに一對の名將賢婦。かゝる良縁はありながら。結ぶにかたき妹と背の。誓を爲さぬぞ怨みなる。御使に立し隆資は。申すもさらなり。主上も左こそ本意なく思召すらん。さりながら。その勅諚を辭し奉るも。必死をきはめし忠義の眞心。いかでおろそかに思し召さんや。隆資よしなに奏聞せん。

内侍　事をわけたる。正行朝臣の御詞。是にすぎたるよろこびなし。それにつきてわらはが一ッの願あり。きかせ給ふか知らねども。君の御父中將殿と。日頃むつまじき新田左中將ぬしの家臣にて。武勇拔群の聞えある。篠塚伊賀守がむすめ。父の受領をそのまゝに。伊賀の局と申なる。常々心をあかしあふ。妹となせしそのおなご。今日供に召連れたれば。かゝる次に對面をゆるし給はらば。この身のよろこび。これをもきかせ給はんや。

正行　きゝ及びたる武勇の女官。何にくるしかるべき。いざこなたへ。

内侍　しからばこれへ呼出さん。いかに伊賀の局。正行ぬしが對面せんと御せなり。はやうこなたへ御出あれや。

下手の奥にて伊賀の局　ハア。

上へハツト答へてかなたなる。妻戸を開き立出る、伊賀の局は。怪力の名には似氣なき容貌美麗。いともやさしきその姿。折目正しく座になほる。

（ト下手の遣戸より。伊賀の局小うちぎ緋の袴。好の拵へにて出て來り上の方辨の内侍の上手へすこし前へ斜に住ふ。）

正行　常は内外隔つれば。親しくものを申せし事はなけれども。局の勇力精悍は。兼て噂にきゝ及ぶ。既に昨夜曲ものが。御身の力あまりありて。忽ちその場に息絶えしは。

昔の巴板額にも。おさ〳〵おとらぬ局の勇力。正行感心いたして候。

伊賀局　女子の身にて及ばぬわざ。御恥かしう存升する。

正行　尚此上も朝家の御爲め。俤の内侍と力を合せ。互に節義を守られよ。

伊賀局　女ながらも命にかけて。盡す心に御座り升れば。何卒よきに正行殿。

正行　其義は氣遣ひいたされな。内外力を添ゆるで御座らふ。

上へ互に心打とけて。よろこび合ふぞ頼母しき。隆資卿は三人のやうすに。つく〴〵たんそくなし。

隆資　揃ひも揃ひし忠臣烈婦。此貞心を見るにつけ。正行朝臣が勅答の。和歌を叡覽これあらば。さぞや本意なく思召さん。出てかへらぬ綸言を。かへし申すも君の御爲。是非なき事とはいひながら。偏に時運のいたす所。叡慮さこそと思やられて。いともかしこし。

上へあといひさして口ごもり。一滴浮む涙の色。正行始めあり合ふ人々。顔を見合て。是非も涙の雨もよひ。霜に露おく風情なり。

（ト皆々うれいのこなしよろしく有。）

上へ正行きつと心付き。

正行　かくまであつき勅命を。我一身の節を守り。却て叡慮を煩はし奉る事。是又臣が本心にあらず。幸なるかな。我弟正儀は。未だ年若には候へども。その義心兄にもまされり。伊賀の局を妻になし。婚姻の義を取結び。一人は外にあつて大軍にあたり。一人は内にあつて君を助け奉らば。正行婚儀を辭し奉るとも。いさゝか叡慮をなぐさむる端ともならんか。隆資卿には如何思召さるゝ。

隆資　ホヽウ。夫こそは望む處。よくこそ心付かれたれ。此事叡聞に達しなば。君にもさぞかし御滿足。勅旨を奉ぜし隆資もおもてを起すと申もの。

正行　シテ伊賀の局は、別に仔細のあらざるや。内侍は何と思召るゝ。

内侍　兼て心に願ひし事。別にいなやは有るまじとわらはは思ひ侍れども。

上へ問かけられ。思がけなき妻定め。ハッとばかりにあからむ顔。

伊賀局　なんのいなが御座り升ふ。

上へあとは得いはずうれしさの。もりてあまれる顔に袖。いと恥かしげにさしうつむく。

内侍　局が心もわらはと一ツ。殊に夫はたぐひまれなる。正行朝臣の弟御の。妻と定まる身の果報。さぞや御身は嬉しかろ。わらはもうれしう思ひ升る。さうして御舎弟正儀主は、本國河内にましますとの事。もしやお氣にそ

まね時に。

正行　アイヤ、正儀事は故あつて。當陣中に參り居れば。此處へよび出し。彼が心中承はらん。ヤア〳〵正儀是へ參れ。

正儀　ハ、ア。

上へこなたの障子押開き。楠小次郎正儀が。故あつて・たけからざる大將の。容儀備はる其有樣。しづやかに座になほる。

（ト上手の障子の内より。小次郎正儀烏帽子鎧直垂好のなりにて出で來り。正行の下手へ住ふ。）

正行　隆資卿を始め内侍にも。是こそ某が舍弟小次郎正儀。お見知りおかれ被下よ。

隆資　嘗て其名は聞及べど。面會なすは今日初めて。きゝしにまさるあつぱれこつがら。末頼母しく存申す。

正行　正儀汝をよび出せし事。改めて申聞ずとも。定めし其方聞つらん。

正儀　かしこの一ト間にまかりあり。委細のこらずうけ給りましてござります。

正行　さもあらんとおしはかれり。其方違背は有まじきよな。

正儀　このかみの御はからひ。何しに違背仕らん。いかにも局は某が。妻に申受るで御座りましやう。

隆資　故中將の胤(たね)とはいひながら。かくも揃ひしおとゞひが。互ひに通ずる心と心。まことに國の柱石じやナア。

正行　さらば此場に於て。婚禮の儀式を假に取行ん盃事(とりおこなはんさかづきごと)の用意いたせ。

源秀　ハ、ア。畏てござります。

（ト源秀よろしく奥へは入る。下手バタ〳〵に成り。以前の和田新兵衛正朝甲冑にて出て來り。）

正朝　ハツ。御注進申上升る。

正行　待兼し正朝。シテ〳〵様子は如何成ぞ。

正朝　ハツ。かねて仰示されし如く。菅野時景が家來の者共を。多田院が陣處に遣し。窃(ひそか)にかれが謀をさぐらせしに。その奸謀に相違なし。即ち謀計を以て途中におびき出し。某手勢を伏せて搦(から)めとり。陣所へ引つれ拷問せしにかたき直師へ通せし事。また昨夜家來の者を陣所へ忍ばせ。内侍を奪ひ師直に送らんとせしも。彼が所爲なるよし。逐一白狀致して御座ります。

正行　ム、。大義で有た。其由逐一奏聞なし。本人法橋は刑に處し。其餘の者は助命なさん。まづ夫迄はひとやにつなぎ。嚴重に警固いたせ。

正朝　畏て御座升る。

（ト新兵衛下手へは入る。）

上へ正行きつと威儀を改め。

正行　いかに正儀。遠からず內師直兄弟。大軍を催し攻來らん其時こそは正行が。誓つて彼ら兄弟が。首ひつさげて立歸らんが。もし又此身の運つたなく。我々兄弟其場にて。萬一討死なしたらん時。汝本國千早に有て。君を守護なす計略は。

正儀　ハツ。

（ト正儀よろしく居なほつて。）

其時こそは正儀が一トまづ君を吉野の奧。賀名生へ遷幸なし奉り。紀州大和の將卒に吉野の皇居を守らしめ。某赤坂に在て敵をさゝへ。たとへ何萬騎よするとも。

上へ天にそむきし逆賊ども。さきへ進まばうしろを襲ひ。千變萬化にかけなやまし。或は打取或は退け。

皇居間近く敵勢の至らぬさきに追くづし。君の御座所を安泰に宸襟を安んじ奉る事。某が手の裏にあり。

上へ智勇兼備の名將が。詞に。局もいさみたつ。

伊賀局　女ながらも其時は。君に付そひ奉り。吉野の山の山深く。天の河の嶮岨をふみわけ。岩根を傳ひ雲をわけ。道なき谷間に出たる時は。

上へ岩間に生へる松杉の。手ごろの古木を根本より。引ぬき／＼かけわたし。君を始めつきそふ人々。なんなくわたし奉り。

賀名生の御所へ御供いたせば。氣遣ひあるな兄上殿。

正行　ホヽウ。いさまし／＼。我もこたびの戰ひに。時運に叶ひ世にあらば。共に凱歌を謠ふべし。まづそれまでは正儀には。本國の守り肝要ぞや。

上へまさりおとらぬ兄弟が。割符を合す互の智略。忠義の程こそ賴母しゝ。折から爰に持はこぶ。てふしかわらけのしこんぶ。折目正しくすへ置きて。

（ト奥より源秀さきに郎等三人。銚子瓦盃それ／＼持出て。二重の前よろしき處へすへ。郎等三人は奥へは入る。）

源秀　仰付られ升たる品々。調へ升て御座ります。

正行　イデヤ。是にて互ひのかため。婚姻の儀式取結ばん。

隆資　少しも早く取行はれよ。

正行　目出たく一獻開くで御座らふ。

此杯は局より。

（ト源秀とりつぎ。かわらけを局の前へ持ゆく。下座の謠に成り局と正儀と盃事よろしく有て。）

正行　其盃は辨の內侍へ。因を結ぶかためのしるし。

（ト內侍盃をうけて飲む事。）

隆資　さし當りたる此場の媒妁。其盃は隆資が目出たく納め申可し。

（ト隆資盃をうける。）

正行　是にて互ひのかためもすみ。

内侍　さはる事なき三々九度。
隆資　君にもさぞかし御滿足。
伊賀局　是で此身の願ひも叶ひ。
正儀　互ひにつくす忠義の操。
源秀　松の常盤の末長く。
正儀　いのるは君の御よはひ。
内侍　内と外とは隔つとも。
伊賀局　心は常にあいおひの。
正儀　頓て凱歌の時至らば。
正行　兄弟夫婦打集ひ。今この如くよろこびうたはん。
上へ口にはいへど正行が覺悟はそれと正儀も。是ぞ此世のわかれかと。一滴こぼす勇士の涙。
（ト正行正儀よろしく有て。）
目出たひ。
上へいわずかたらぬ心と心。義を金鐵のおとゞひが。みさをは千載末代に。楠三代の忠臣と。其名は世世に耀やけり。
（ト三重。皆々よろしく有。隆資盃をのみほして。）
隆資　目出度婚姻調ふ上は。我は是より參内なし。此よし奏聞申可し。
正行　某も諸ともろとも。是より直に參内なし。多田の院が罪狀奏聞致さん。

隆資　かゝる目出たき折なれば。一トさし祝して御立あれ。
正行　然らば御免。
（ト正行よろしく立上り。）
普天の下率土の中。いづく王地にあらざるや。
（ト下座の拍子に相成り。）
頓て名にしおふ關の。戸ざゝであふ坂の。山をこゆれば。うら波の粟津の森やかげろうの。
（トよろしく田村を舞ふ。此内隆資以前の懐紙をひらき。つく〴〵見る事よろしくありて。正行と顔見合せ。一寸氣をかへるを。木のかしら。）
石山寺をふしおがみ。是も清水の一佛と。頼みはあひに近江路や。勢田の長橋ふみならし。駒も足なみやいさむらん。
（ト正行よろしく舞。隆資懐紙を巻ながらうれひの思入。皆々正行の舞を見込む。此もやう双方ひつぱりよろしく。）
舞の拍子にて幕。

作者自評

伊賀の局正儀にはじめて對面する處は　はづかしき思入ありて。何となく色合見ゆる所あるべし。はじ

め武勇をあらはせしに似ざるたほやかなる所を見すること簡要なり。後にものがたりに至りて。おのづから武勇の氣色見ゆる處あるべし。物語終りて正儀と目を見合せ。又はづかしきこなしあるべし。

三　幕　目

吉野皇居階下の場
吉野山谷間地藏堂の場
同返し大詰　吉野の奥如意輪堂の場

本舞臺一面皇居の煉塀を遠く見せたる道具幕。爰に軍兵三人びんぼう德利にて茶わん酒をのみ。焚火をしてゐる。山おろしにて幕明く。

○コレおまへがたばつかり飮んで居ずと。その茶わんをちつとはこちらへ。まはしてもよいではないか。

△ヲヽさうとも／＼。サア／＼さすぞ。

□どれ／＼おれが酌をしてやらう。

（ト酒を呑あふ事よろしく有。）

○なんでもナ今の間に。おもひ入れ酒でものんでおかぬといふと。それはモフやがてのこと。どふなるかしれたものじやないテ。

△ナルホド。どふなるか知れぬといや。今度京がたからいよ／＼大軍で押てくるといふのは。ほんとふの事であらふか。

□これがほんとふのことで。噂のとふりであつた日にや。おたがひに中々もつて落ついて。とてもかふして居られんノフ。

○まだ御觸はまわりはせんが。何のみんなが知つて居る。高の師直と弟の師泰が十萬斗りの軍勢で。此吉野山へおしてくるといふ事は。慥にそれにちがひはあるまい。まだ／＼それから。京方の大軍がくり出すといふ事じやによつて何十萬になるか。知れんし。其大軍で一時に押してこられたら。此吉野はひとたまりもあるまひテヤ。

△イヽヤ。たとへ何十萬押て來たとて。こつちには楠殿といふつよい大將が付てござるから。容易にまける事ではなひわへ。

□ヲヽ／＼。そふとも／＼藤井寺や。住吉の戰で。大膽知れたものじや。其上一人でも弱いものはないさかい。こつちは大丈夫なものじやナ。

○イヤ／＼。そふじやない／＼。今度は京方でもきかぬ氣になつて。これまでよりは十倍もました大軍で。一度に攻つぶす氣でやつてくるゆゑ。なんぼ楠勢が強ふても。

ソコハ多勢に不勢。とても〳〵叶ふことじやない。そこで己がおもふには。いつまでも爰にぐずついて居たら。皆殺しにあふかもしれぬ。それよりやすぐとかたをかへ。おれは京がたへはいこむ積りじや。

△ 夫じやア。おぬしやは宮方をすてゝ。敵に降參する了簡か。

○ おまへ達もそふせぬとナ。今に命がなくなつてしまふぞや。

□ 夫ではア。いよ〳〵アノおぬしは。

○ おらア。是からかけおちじや。

△ そふきくからは仲間でも。

□ うつちやつちやア置かれぬぞ。

○ ナニうつちやつては置かれぬとは。

△ ひつくゝつて本陣へ。おぬしを引立てゆくのじやワヘ。

○ そふ聞てはもふこゝに。まご〳〵しては居られぬ。

(ト早めたる鼓のつとめに成り。三人おかしみの立廻りよろしく有て。トゞ追驅あつて上手へは入る。すぐに。山の淨瑠璃に成る。)

上〽都とは名のみ吉野の假皇居。木々の梢も冬がれて。木だまにひゞく猿猴の聲。物すごきおきふしも。さすが一天萬乘の上。なき君の行在所とて。月卿雲客。きらびやかに。列を正して居ならびし。威儀おごそかに見えたりけり。

(ト管絃に成り。しらせに付道具幕切て落す。)

本舞臺三間の間。中足の二重。三方折廻して檜ばだ葺の庇椽側。白木の高欄。眞中に高欄付の階。向ふ一面に御簾を下げ。上の方三尺程はなして一間の高足の二重屋體。同じく庇椽側。高欄付。椽側の内奥へ折廻して御簾を下げ。此家體より中足の家體へ横に高欄付の階。上手大樹の立木にて見切り。下の方奥へ下げて。一間のつゞき屋體。廊下の模樣。同じく庇高欄付。向ふへ御簾を下げ。下手白木の遣戸にて見切り。平舞臺立樹のあしらひ。すべて吉野皇居階下のてい。爰に二重の上の方に前幕の降資。冠裝束好の拵へ檜扇を持よろしく住ふ。下手に左大將早俊。右大將道順。權中納言兼明。同じく冠裝束にてよろしく住ひ。うしろに公家三人居ならび。下の方に同じく三人上手をむきてよろしく居ならぶ。管絃にて道具治。まるやはりこの鳴物にて。)

降資 今日關白左大臣殿。所勞によりて參内に及ばれず。隆資勅定をうけ奉り。諸卿參集の義を相觸し所。火急の參内神妙に存る。今日の參集は餘の義には候はず。京都より次第の注進。諸卿も大方はきかれつらん。足利尊氏此の吉野殿に向ひ。關西關東の兵士十餘萬騎を起し。執

事高の武藏守師直を惣大將として。日ならず攻よすると の事。察するに。去年の秋より官軍しば／＼勝にのり。楠河内守正行が河内國處々の合戰に。敵勢をうちなやませしをもつて。彼等これを無念とし。こたびは一擧に事を決せんと謀ると覺たり。これよの常の合戰にあらず。君の御大事この時に在り。いかなる計略をもつて。これを打やぶるべきや。各々所存をのこさず。詮議あらまほしうこそ候へ。

早俊　こは隆資卿の御言葉とも覺えず。普天率土王土王臣にあらずといふことなし。敵何十萬騎よするとも。なでふの事かあるべき。錦の御旗を眞先にさゝげ。みかどに敵對奉るやつばら。天の誅伐いかでかまぬがるべき。命惜くば降參せよと。呼はり／＼進みなば。賊兵その勢に辟易し。戰はずして勝を得んこと掌をさしてみるが如し。計略などゝはまはり遠き御言葉。諸卿如何思はるゝ。

道順　早俊卿は。いまだ御年若なれば。軍陣の事になれ玉はず。たゞ本朝の書籍をそらんじ。議論の上にこそ長ケ給はめ。利害得失をさとり給はぬと覺えたり。いぬる承久の合戰より天下武家の手に歸すること百餘年。君臣の大義をわきまふるもの幾人かあるべき。先帝一たび朝權を復させ給へども。やがてまた武家の爲にせばめられ給ふ。聖德のうすきにあらず。ひとへに時勢のしからしむる所に候はずや。今鎭西奥羽の國には。官軍少なからずとは申せども。この吉野の行在所には。其勢甚だわづかにして。賴母しきものとては楠一家のものどものみ。今此小勢を以てかの大敵にあたらんは。石をいだひてふちに投ずる如く。危きともいと危し。道順が存ずる所は。敵いまだよせざる先に。はやく御使をつかわされて。御和睦の義を計らわせ給ふにしく事あらじと存じ候へ。御合戰の御用意あらん事。ゆめ／＼しかるべからず。

早俊　道順卿ものに狂ひ給ふか。先帝の御遺詔御身の耳には入せ給はぬか。いともかしこき神みたま。この吉野にとゞまらせ給へば。賊徒退治の御事は。九泉のもとにわすれさせ給はずと。仰せのこされしを忘れ給ふか。たとへ身をひしびしほにせらるゝとも。和睦などゝは申さるべき。以ての外の事で御座る。

兼明　早俊卿の仰の如く。我々二代のみかどに事へ奉り。此山中にありと申せども。賊徒退治の事は。一日片時もわするゝ事は候はず。敵よするこそ幸なれ。近國の兵を駈催ふし。要害に取手をかまへ。小勢なれども案内はよく知たり。敵近よらば大石大木を投下し。矢玉を惜まず射立なば。よもたやすくは攻落されじ。かくすること二三十日に及ぶ時は。諸國の官軍馳せ集り。敵のうしろを襲ふべし。味方此勢にのり。命かぎりにきつて出んに。

勝すといふことあるべからず。兼明の所存。かくの如くに御座る。

○　我々どもゝ　兼明卿早俊卿の仰の如く。この吉野に楯(たて)籠(こも)り。敵を引受け防戰し。

△　命にかけて君を守護し。奉らんとの所存に御座る。

道順　イヤ／＼寡はもつて衆に敵すべからず。弱はもつて強に敵すべからず。小敵のかたき大敵のとりこなりと。孫子の本文。かゝる味方の小勢をもて。大敵にあたらんには。たとひ諸卿身を粉にして戰はるゝとも。勝利は決して覺束なし。道順先帝の御遺詔を存じ知らざるにあらず。又賊徒と和睦するの非なることを心得ざるには候はず。無謀の合戰にやぶれを取らば。我々どもの生死は論ずるに足らず。我君を危ふきにおとし入れ奉り。人民を塗炭に苦しむるは。忠臣の所爲にあらず。恥を忍び時を待ち。計略をめぐらし。御運を開かれんこそ社稷の臣たるものゝ爲す所。唯いたづらに死を輕んじて危きにのぞむをのみ忠臣と爲すべきや。一旦の和睦に敵をおこらせ。敵引かへしなば。しづかに官軍の鋭氣を養ひ。諸國の義兵を謀じ合せ。四方より起りてこれを撃たば。その時こそは味方の勝利。疑ひなしと存ずるなれ。諸卿の御議論いさましきに似たれども。勇餘りありて謀略に乏し。隆資卿にはいかゞ思召さるゝ。

隆資　諸卿の所存。同じからずと申せども。君の御爲國の爲。忠誠ことばにあらはれたり。されども軍馬のかけ引は武臣の職。當時この吉野においては。河内守正行にしくものなし。故三位中將が家法をつぎ。智勇逞ましきは人の知る所。軍議の席に招き出して。その謀略をきゝ候はばやと存ずるが。諸卿に御意見はこれなきや。

早俊兼明　いかにも御尤なるその仰せ。其儀然るべく存じ候なり。

（トいふ所に藏人走り來り。）

藏人　楠河内守正行朝臣。軍事の義によりて奏聞を願ふよしにて。參内致されて御座ります。

隆資　正行參内せらるゝよな。いそぎこれへ。

（トこれにて藏人その席より出て。正行つゞきて出來る。五位の衣冠扇を持ちて座につく。）

隆資　正行朝臣。軍事の義を奏聞願はるゝよし。かねて風聞にも知られつらん。兇徒の大軍よせ來るにより。勅諚により軍議に及ぶ所。臨時の參内折よく候へ。只今評議兩途にわかれ和議を計るべしと申もあり。又この吉野にたてこもり。防戰すべしと申すもありて。未だいづれとも決し申さず。和殿の計略きかまほし。

正行　されば候。敵は師直父子を大將として。その勢十餘萬。目にあまる大軍なり。味方は河内和泉と攝津の半國

のみ。とても對應の軍(いくさ)にあらず。又この吉野の嶮岨により。戰ふべしとは申せども。大軍には嶮岨なし。諸方より手分をなしてよせられなば、味方鬼神の勇ありとも。よくこれを防がんや。防戰の御事はいかにも叶(かな)ひ候まじ。

道顯　かた〴〵あれをきかれしか。流石(さすが)は正行朝臣は楠家の棟梁朝家のかため。深謀遠慮(しんぼうゑんりよ)感じ入る。しからばはやく京都へ御使をさしつかわされ。御和睦の義簡要と存じ申す。

（一同あきれたる有樣。ヤヽありて。）

正行　イヤ、しばらく御待候へ道顯卿。貴卿御和睦の利害つまびらかに御承知候か。

道顯　ソリヤ。申までもなし。漢土にも南北兩朝ならび立たるためしもあり。敵將の心をなだめられんには。軍兵を引てかへらん事相違あるべうも候はず。

正行　イヤ左にあらず。天に二つの日なく。土に二人の王なし。若し御和睦あらんには。北朝いかでそのまゝやみ申さんや。主上を都にかへし入れ。御位を廢し奉り。諸國の官軍に綸旨をなし。足利に從ふべきよし强て命ずるのみならず。もしこれに從はざれば。兇徒賊徒といひなして。誅伐に及ぶべし。しからんには。諸國の人民うたがひ迷ひ。忠臣義士立どころに戰死して。かへりてその名をのちにけがし。天下は賊のものとならん。こゝに御心つかれずや。かへす〴〵も不覺の至り。いかゞに候道順卿。

隆資　あつぱれ候正行朝臣。今にはじめぬ明智の一言。されば和睦の事は。今更申までも無き事ながら。防戰かなひがたしとあらば。和戰の二事何れに決すべき。朝臣の所存承らん。

正行　凡そ戰は萬全の計を。定めてのち戰ふべしとは。兵法のいふ所なれども。そもまた時のよろしきによるべき事か。今もし敵の寄するをまちて。要害によりて防ぎ戰ふとも。味方はもとより小勢なり。敵の爲めにみすかされて。いかなる堅固の備へありとも。攻ぬかれん事必定なり。正行このたびの戰ひに。生きてかへる所存にあらず。敵よせぬ先一手の勢を引まとめ。こなたより馳せむかひ。北軍の不意に出で。敵の多勢を目にかけず。無二無三に中軍にかけ入りて。大將師直をうちとりなば。その餘の諸將はかねて一致(いつち)せずと承れば。その勢ひに辟易して。うらくづれして敗走せん。その機に乘じ後陣より味方の諸軍押よせなんには、一擧にして勝利を得ん事疑ひなし。正行志を得ずして討死するとも。天下の義士これが爲に忠憤の心をおこし。後日正行が志をつぎ。忠戰を勵まんもの。吾一族のみならず。君を助け一たび京都を攻落し。尊氏等が膽を冷さんこと。この數年をすぐべ

からず。み心やすくおぼしめされよ。

隆資　いかにもいみじきその計略。さりながら。此一戰に命をすてんと思はるゝは。そはまたいかなるゆゑなるや。

正行　正行が死を決せしは。これ今日に起りしにあらず。父にて候贈三位中將正成。湊川出陣のみぎり。正行を櫻井の驛にまねき。跡後を托し。君の御爲身命をなげうつべきよし申ふくめ。東西に別れしが。終に湊川に戰死に及べり。正行其時十三歳。おしからぬ命を今にながらへしは。かゝる御大事の時に至り。命をすてゝ上は吾すめらぎの。山たす御恩にむくひ奉り。下は亡父が教訓を守り、海より深きめぐみに報ぜんとの心にて候なり。今日こゝに死を決せずば。君には不忠の臣となり。父には不孝の子とならん。正行が一心此外に候はず。御洞察願ひ奉る。

隆資　左程決心ある上は。今さら何をか申すべき。此上は君前にて。叡慮を伺ひ奉らん。

早俊　某等一同席につらなり。

正行　然らば是より君前へ。

隆資　一同仕候致されよ。

上へいざや御前にまゐらんと。列座の公卿一同に。打連れ立て。

〽下隆資さきに皆々立て。上手の階を上り。廊下を横に上手へ行く此もやう。）

（管絃三重にて道具廻る。）

作者自評

此段は中古朝廷の公卿。大事を議するときは。大方かくあるべしと推せらるゝやうに。宮殿のさま又列座のさま。又衣冠のさまを見すること肝要とす。議論の詞も。まゝ太平記ならびに當時の古書によりて。これをつゞり。後世の言語と大に異なる所あり。されば全く古き語をのみ用ひては。みるものに解しがたきをもて。その中間を折衷したり。

本舞臺通し。平舞臺眞中に。大なる櫻の立木。上下樹木のあしらひ。上の方大なる山の張物。下の方一間、古びたる堀立柱の地藏堂を斜に見せ。下手の方扉あけ立あり。眞中に上り段。舞臺をむけて古びたる板羽目。所々くづれたるもやう。此側に古びたる石の手水鉢。正面山の張物に背水の流れを見せ。向ふ谷合の流れ遠見の書割。下の方山の張物にて見切り。すべて吉野の奥谷合のてい。水の音に雨車をかすめて道具とまる。

（トすぐに下座の獨吟に成る。）

唄へゆく雲のひとしきりふる村時雨。ぬれて岩間の袖雫。寐もせで夢をみよしのゝ。花に宿かる下ぶしも、あしたをまたぬ冬の日の。落てゆく衛は西の空、

（ト本つり鐘を打込。雨車水の音をかすめて。向ふより序幕の淺川主計。衣流しジン／＼端折一本差。素足簑を着て。片手に竹笠をかざし。出て來り花道にて。）

主計　夕べはからず梅ケ枝に逢ふて。くわしい噺しをきけば、時景殿の其外は。正行公の情にて、助命ありしときくからは。尙々我身の恥かしく。御主君始め人々にも。活て面を合されぬ。淺川主計が身の成る果、かへらぬものは迷ひじやナア。

唄へ谷間の風の肌寒く。梢を傳ふ鐘の音は。諸行無常をつげわたる。

（ト主計よろしく本舞臺へ來り。あたりを伺ふ事有。合方に成り。）

幾度思ひ直しても。たゞ恨めしきはわが心、いろに溺れしばつかりに。あらぬ惡事に一味なし、心にもなき不忠の所業。身のいひわけに切腹と。此身の覺悟はきわめしが。われ相果しときくならば。アノ梅ケ枝もいきては居まい。夫のみ心にかゝりしが、夕べ逢ふてそれとなく。短慮をとゞめおきたれば。もはや思ひ置事なし。

（ト下手の地藏を見て。）

今は此身の冥闇を。たのむ木陰の地藏堂。爰にて潔く最後を遂ん。

唄へ死出の田長の道すぐに。わけ迷ひゆく戀のやみ。人の昔は身の上と。

（ト雨車やむ。主計よろしく簑をぬぎ。下へしひて。其上へ座し。肌をぬぎ刀をぬきよろしく觀念する。）

唄へ岩にせかるゝ瀧浪の。あはやくだけてちる玉も、流れは早き谷の川。

（ト此唄一ぱいに。主計刀を腹につき立んとする。下手バタ／＼にて。前幕の梅ケ枝。好のやつしなりにて。走り出で來り。これを止めて。）

梅ケ枝　主計さん。マア／＼待て下さんせいナア。

主計　梅ケ枝か。そこはなせ。

梅ケ枝　イヽエ。はなさぬ。はなし升せぬ。けさわかるゝ時おまへのやうす。合點ゆかぬと思ふたゆゑ。後を慕ふてさいぜんから。あそこにかくれて居たわいナア。

主計　ムヽ、そんなら、そなたは始から、此身の覺悟を知つたりしか。

梅ケ枝　大事の夫の命の際。知らいでなんとせふぞいナア。おまへはひとり腹切て。犬死をするお心か。

主計　犬死なりといはゞいへ。世に淺間しい惡事にくみし。なんといきて居られやう。せめて今はにいさぎよく。悔悟の切腹なす所存。武士の最後のさまたけいたすな。

梅ヶ枝　サアどの道捨る命なら　時節を待て汚名をすゝぎ。立派に死んでは下さんせぬカ。

主計　時節を待て。立派に死ねとは。

梅ヶ枝　サアおまへも兼て知る通り。もふ近々に京方から。押てくるのが知れてあれば。その時人數にくはゝりて。立派に討死しなさんせ。今死ぬ場所では御ざんすまいか。

（ト云れて主計じつと思入有て。）

主計　ハヽ、我ながら誤つたり。一度色に溺るゝ時は。かふも心の亂るゝものか。今のそなたの一言にて。さつぱり夢の覺たる心地。

梅ヶ枝　そんならわたしの意見に付。思ひとまつて下さんすか。

主計　いかにも今の死をとゞまり。今にも京軍よせ來らば。先陣たして討死なさん。

（トいひながら刀をさやへ納める。）

梅ヶ枝　よふきいて下さんした。嬉しう御ざんす。

（ト手を合せおがむ。此時下手より藤六。のふきかへ簑笠にて出で來り。そつと下手の地藏堂へかくれる。兩人これをしらす。）

主計　負ふた子に教へられ。淺瀨をわたる此主計。夫につけても女の身で。よくぞ心づいたるぞ。あつぱれ見上しそなたの魂。

梅ヶ枝　イヱ／＼。わたしじやござんせぬ。表向は勘當して。内へよせぬといひこしらへ。おまへに逢て此事を。呉々いへとゝさんのいひつけ。

主計　ム、そんなら親の藤六殿が。夫れ程までに此主計に。心を添て下さるゝか。忝ふ御座るぞよ。

（トよろしく禮をいふ事有。）

梅ヶ枝　今わかれては。又いつか逢事ならぬあの世の旅。暇乞やら二ッには。わたしの心ののこらぬやう。盃していつて下さんせ。

主計　ヲ、いかにも。此世の緣は薄くとも。未來へむすぶ水盃。

唄へ淚の雨のはれ間時。あの世をかけし緣のはし。むすぶ谷間のこけ清水。互ひの心くみかわし。

（ト主計肌をいれて竹笠にて。うしろの清水をくみとり。兩人水盃をすることよろしく有て。）

梅ヶ枝　これでわたしが心の安堵。

（ト梅ヶ枝よろしく懷劍をぬき。髮を切つて主計に出し。）

これをとつて下さんせ。

主計　そんならそなたも覺悟して。
梅ヶ枝　未來の縁をたのしみに。おまへの後を弔ひ舛る。
主計　なんにもいわぬ。
（ト手を合ておがむ。）
唄〽みさほをうつす谷川の水。
（ト唄切れる。主計髮の毛を取て懷中する。）
梅ヶ枝　今が互ひの顏の見をさめ。
主計　梅ヶ枝。
梅ヶ枝　もしよふ顏を見せて。
（ト主計にとりつくを。道具かわりのしらせ。）
下さんせいナア。
（ト兩人手をとりあふて。名殘のもやうよろしく。下手の堂の羽目の破れより。ふきがへの藤六あたまを出してふしおがむ。此もやう。水の音にて此道具逆まはりに廻す。）
（本舞臺もとの階下の道具になる。）
（管絃にて道具とまる。すぐに床の淨瑠璃になる。）
〽時うつり時去れば。軍議も既に事果て。勅を奉じて正行は。早御暇賜はりて。
（ト上手の廊下より。以前の正行靜かに出て來たり。階を下りて正面の。家體へ段々にあゆみくる。）
上〽御前をたつか弓取の。矢竹心も龍顏の。是今生の見納めと。悲歎を忍び靜々と。あゆむ宮殿樓閣も。けふを名殘と見かへり／＼。たちもとをれるうしろの方。
（ト正行よろしく有上手の奥にて。）
隆資　アイヤ。正行朝臣しばし／＼。
上〽しばしと聲をかけまくも。かしこき君の勅をうけ。四條大納言隆資卿。立出玉へば正行も。席を正してさしむかふ。
（ト上手の奥より。以前の隆資出て來り。正面の家體上手に住ふ。正行よろしく下手に住ふ。）
君前の軍議一決なし。御身出陣の義に付て。隆資思ふ處あれば。一言を申のべん爲。扨こそ御身をとゞめたれ。
正行　樣子有げなその仰、今出陣の際に望み。思召さるゝ處ありとは。如何なる處にて候や。
隆資　申までにはあらざれど。すべて戰場に望みては。進む可きによくすゝみ。退く可きに退くは。是名將のなす處。されども進む可きを見て進む事は。士卒も是を能すれど。退く可きを見て退く事は。勇將といへどもかたんずる處。御身こたびの戰ひに。進退其度を失はざるやう。何卒斷引これ有たし。
〽それといはねど正行が。底意を悟る一言に。
正行　ハヽ、心盡しのその仰。正行慥かに服膺仕る。

隆資　即座の答へ。祝着に存る。
正行　我は是より手勢を引具し。四條縄手へ出張致さん。
隆資　君の爲に身を思ふと。返すぐ／＼も心にしかと。
正行　變に應じて。駈引致さん。
隆資　然らば朝臣。
正行　隆資卿。
隆資　心ならざる。
正行　ヤ。
隆資　勝利の知らせを相待申す。
〽さらばとばかり文武の兩臣。右と左へ立わかれ。
これぞ名殘と隆資卿。思ひは同じ正行が。心の内の暇乞。
(ト兩人立上り上下へわかれて。名殘のもやうよろしく。兩人一度にふりかへり。顔見合て一寸氣をかへるな。木のかしら。)
上〽わかれ／＼て。
(ト隆資は上手。正行は下手へ靜かにあゆむ。此もやう双方よろしく。鳴物なし三重にて幕。引付ると。すぐに山おろしにて引返す。)
(本舞臺一面の山幕。爰に二幕目の圖の伴吾。甲冑手鎗を持立身。外に二幕目の鷲野郎等五人。皆々甲冑手鎗を持。立かゝり居る。陣太鼓にて幕明く。)

伴吾　いかに各々此度の戰ひ。敵は大軍味方は小勢。尋常のはたらきにては。所詮勝利は覺束なし。すは合戰といふ時は。一番に切て出。討死なして正行公の。恩義を報ふは此一戰。
○　我々とても同じ事。當時名將の聞え有。正行公の先鋒なして。命を捨るは。もとより武士ののぞむ處。
△　今日爰に命を捨ねば。いつか恩義に報ふべき。一ト足もひく所存はござらぬ。
□　殊更一旦犯したる。不忠の罪ある我々が。汚名をすゝぐは今日此時。
⧖　たとひ何程大軍なりとも。何恐るゝ事あらん。鋒先を揃へ討て出。
※　花々しく討死なし。名を後世にかゞやかさんと。我等は決心致してござる。
伴吾　いさましゝ／＼。大將正行公には。恩顧の人々召つれられ。いま先帝の御廟所へ御出あれば。
○　頓て麓へ御越しならん。
△　御出陣に間も有まじ。
□　是よりすぐに我々は。
※　麓へ參りて人數を揃へ。
伴吾　大將の御出をお待申さん。ソレいづれも御つゞきなされ。

(ト山おろしにて件吾先に。此人数皆々上手へはいる。すぐに床の浄瑠璃に成る。)

〽爰は所も吉野の奥。巖石峨々たる山中に。木々の梢も色深く。如意輪堂の伽藍の前。けふ討死の出陣と。楠左金吾正行が。きなす鎧は緋おどしの。あたりかゞやく其いで立。つゞいて舎弟大和守。和田兄弟を始とし。死を極めたる楠家の一族。一世のはれと花やかに。列を正して居ならびたり。

(ト山おろし小鼓のあしらひにて。正面の山幕切て落す。本舞臺少し前へ出して中足の二重。岩山の張もの。下の方ダラ〳〵の下り口。二重ずつと上へよせて。二間中足の二重。朱塗の堂。三方折廻して瓦屋根の庇。朱ぬりの椽がわ。朱ぬりの上り段。金かなもの付の扉を左右へ開き。翠簾を半分捲上る。此中黒ぬり金もの付の須彌壇の模様軒口へ。如意輪堂と記したる額を懸け。正面大なる櫻の立木。枝のはびこりしもやう誂へあり。上下樹木の立ならべ。下の方茅屋根付石の手水鉢。向ふ一面深山遠見の景。上下山の張物にて見切り。すべて吉野の奥。如意輪堂のてい。爰に上手に楠正行緋縅の鎧附太刀。甲下烏帽子。箙を背負。好の拵にて軍扇を持。床几にかゝる。背に郎等一人甲冑にて。正行の龍頭の兜盔をかぶりひかへる。少しうしろに大和守正時。緋おどしの鎧。楠將監和田新發意同じく新兵衛の四人。銘々甲冑好の拵へにて床几にかゝり。下の方に和田紀六左衛門。關良圓。南宮八郎。鳴尾七郎の四人。各々甲冑にて座し。此前へ大なる板へ銘々の名をしるしたるを置。ずつと下手に鷺池平九郎正虎。甲冑好の拵へにて鐵の棒を持ひかへる。同うしろに楠の郎等大勢。皆々甲冑にてひかへ。菊水の旗幟等よろしく立連ね。山おろし小鼓のあしらひにて道具治る。

正時　いかに各々此度の出陣は。十死一生の戰ひにして。生きて再びかへらじと。只今先帝の御廟に參り。誓ひを立て銘々の。御暇申上たれば。今は大空一點の。心にかかる雲もなし。

將監　仰の如く。賊將尊氏。毎度の敗を恥辱に思ひ。此度こそは一擧にして。攻落さんと軍議を決し。

源秀　師直兄弟細川赤松。仁木六角武田の諸將。合て其勢十萬餘騎。大軍一時に押出す。

正朝　楠一手の人數をまとめ。敵勢吉野へよせざるさき。四條縄手へ打て出で。目ざすは中軍師直兄弟。

平九郎　不意におこつて討つてかゝり。賊のあらぎもとりひしぎ。あたるを幸ひなぎまわし。刀の目くぎのつゞくだけ。切て〳〵切まくり。

紀六　先へすゝんで一ト足も。あとへはひかぬ楠勢。

良圓　此百四十餘人のものは。いづれも必死の誓ひを立。
八郎　是成御堂の壁板を。過去帳となし大將始め。
七郎　一同姓名書記し。いきて再びかへらぬけいやく。
紀六　御堂へ納る其過去帳は。大將に御覽に入よ。
八郎　心得申た。
（ト八郎右の大板を正行の前へ持ゆき。ひざまづきて是を見せる。正行つく〴〵見る事ありて。）
正行　人は死して名をとゞむ。豹は死して皮をとゞむと。王彦章が最後の一言。かく姓名をとゞめ置くは。再びかへらぬ印ちしるし。直様アレなる堂内へ。
八郎　畏てござります。
（ト八郎この大板を持つて上手の堂内に入り。須彌壇の前へよろしく立かけ出て來り。もとの處へ住ふ。正行ふりむいて見て。
正行　ム、忠孝二ツを全ふなせば。死すとも今は恨みなし。頓て冥府へかへる身の上。正行が此世の思ひ出。
上〽潸々立てかたへなる。御堂の戸板に打むかひ。中ざしの征矢ぬき出し。かたみに遺す言の葉の。後は涙のかたり草。實に忠臣のいさほしを。末世に傳へ形のこす。文字も亂れずさら〴〵と。鏑に顯す。辭世の一首。
（ト正行堂の緣へ上り。背負たる矢をぬきとり。矢の根にて扉へ。一首の歌を書く事よろしく有。）
かへらじと兼て思へば梓弓。なき數にいる名をぞとゞむる。
〽吟じ給へば。有おふ人々。心を感じ顏見合せ。聲をのんでぞ居たりける。折から爰へ走來るは。里見主稅之助義遠。夫と見るより立とゞまり。
（ト山おろしに成り。向ふより序幕の里見主稅。烏帽子鎧直垂。附太刀草履にて出て來り。花道にて。）
主稅　正行朝臣には。是におわたりあられしか。
正行　御身は里見義遠どの。何用有て此處へ。
主稅　某是へ參りし次第。夫へ參りて申のべん。
（ト大小入の鳴ものにて。主稅之助本舞臺へ來り。下手よき所へ床几にかゝり。）
四條大納言隆資卿より。申入るゝ事有て。是まで參上致してござる。
主稅　されば御身が出陣氣づかはしく。朝廷再び詮議あり。即ち四條大納言を惣大將として。和泉紀州のものども。一萬餘人をさしそへられ。ともに出陣これ有事に。朝議一決致したる旨。御心得これあるやう。隆資卿の仰をうけ。是まで參上致したり。

正行　スリヤ。隆資卿にも御出陣とな。委細承知仕る。

正時　隆資卿中軍に御座ある上は。いよ／＼もつて心やすし、無二無三に討入て。思ひのまゝに一戦致さん。

正行　頓て御出張これあらば。陣中にて拜謁なし。共に軍議を示し申さん。

〽勇み立たる其處へ。北面の侍走り來り

（ト向ふより侍一人。烏帽子素袍高股立附太刀にて。走り出て花道にて。）

侍　ハッ申上升る。御上より御内勅を蒙らせられ。辨の内侍。只今是へお出にござりまする。

〽いひ捨てこそひつかへす。

（ト侍向ふへは入る。）

正行　勅使とあれば。出迎ひなさん。

〽大將始め一同に。列を正して出むかふ。遥かあなたの山影より。辨の内侍のめさせたる。白木の輿をかきになひ。路次の警衛おごそかに。いと靜やかにあゆみよる。

（ト山おろし大小のあしらひにて。向ふより仕丁四人白木の輿を舁き出る。後より侍女一人仕丁二人つきそひ出て。直に本舞臺へ。ずつと上手へ輿をすへ。其前へ筵をしく事有。

上〽内侍は君の内命を、自からこひし御使。因を結ぶその人に。此の世の名殘をしまんと。しとやかに立出給ひ。上座にこそはおしなほる。

（ト辨の内侍小うち着緋の袴にて。輿より出で筵の上へ床几にかゝる。正行よろしく手をつかへ。）

正行　内勅と有て。内侍には。思ひよらざる只今の入來。勅諚の趣逐一に仰せ聞られ候へ。

内侍　内命の趣外ならず。今日正行出陣につき。ことなふ叡慮をなやまさせられ。四條大納言隆資を。さしそへらるゝと申せども。この度正行が決心。朕よく知れば。さらに安き心もなし。只幾重にも正行を。股肱と頼み思召せば。進退その度を失はず。つゝしんで命を全ふすべしと。此よし呉々も傳へよとの。勅をうけ給はり參りしわらは。叡慮を安んじ奉る。勅答の程あらまほし。

上〽ひとへに頼むのみことのり。正行は身ひとつに。叡慮さこそと押はかり。默然として居たりけり。

主税之助さしよつて。

主税　今官軍の人々が。擧つて頼むは御身一人。君の叡慮もさぞかしと。某推察仕る。何卒君命を奉じ給ひ。宜しく勅答これあるやう。願はしう存ずる。

正行　ハ、。數ならぬ身をかくまでも。御心にかけさせ給ふ事。臣が身にとりいか斗りか。冥加至極に存じ奉る。

内侍　そふして御身が進退駈引。

主税　勅命を拝するお心か。

正行　戦場の儀はいくへにも。勅答申上げ難し。正行が心中あれを見られよ。

ヘかたへの和歌をさし示せば。

（ト兩人御堂の扉を見て。）

内侍　ナニ、かへらじと。兼て思へば梓弓。

主税　なきかずにいる、名をぞとゞむる。

内侍　ヤ、。そんならどうでも。

主税　決心有てか。

正行　このよしくわしく。奏聞せられよ。

上ヘ意氣決然たる一言に。二人は顔を見合せて。とりつくしまもなかりけり。

（ト兩人よろしく有。）

上ヘ析から変へ藤六が、甲冑に身をかため。いきせきとしてはせ來り。

（トド手より前幕の藤六。甲冑帯刀(たいとう)にて出で來り。よろしく下手に住ひ。）

藤六　いつの間にやら。御出陣と承はつて。親父めも。おあとを慕ふてまゐりました。

正行　ム、、たれかと思へば安達藤六。見れば甲冑に身をかため。その方いづれへ參る心じや。

藤六　ヘイ、御出陣のお供をいたし舛。

正行　ナニ。出陣の供をいたす。我に於ては其方へ。申聞せし覺へはなきが。何者が申せしぞ。

藤六　どこからも申きかせはござりませぬが。給ふた御人の御出陣に。家來が御供をいたし舛のは。コリヤあたりまへの事でござりまする。

正行　イヤ其義は相成らぬ。此度は供にはつれぬぞ。

藤六　是まで度々の御出陣に。大ていはお供致して居り舛のに。ナぜ此度はなりませぬナ。

正行　其方にはことわけて。申付る事あるぞ。

藤六　ソリヤどんな御用か存じませぬが。此度ばかりは此親父せひともお供をいたしまする。

正行　如何心得て居るかは知らねども。此度に限り其方に。申付ることが有るのじや。

藤六　どふで相應な。ろくな御用ではござり升まひ。そんな事なら。此親父きゝたくもござりませぬわへ。

正行　おろかな事をいふやつかな。大事の使なればこそ。申付る事なるに。其事がらもきゝわけず、とかく申は不禮ならん。

藤六　なるほど。こりや。親父がわるふござりました。左様ならどんな御用か。おつしやつて下さりませ。

正行　只今申聞るで有ふ。

上ヘいひつゝ頓て懐中より。とり出す二ツの髻(もとどり)。

（ト正行鎧の間より。二ツのもとゞりに。紙札をつけたるを出して。）

いかに藤六。こは我々兄弟。如意輪堂へ納めたる。髻を分し此もとゞり。そも此度の出陣は。十死一生の戦ひにして。生死の程も知りがたし。萬一兄弟運きわまり。戦場に討死なす時は。千早にまします母松榮尼公の御なげきもいか斗り。是成ふたりのもとゞりを。汝本國へ持參なし。形見と御覧あれかしと。申傳へて其方は。われにかわつて母上の。御先途を見屆けくりやれ。

上へさし出せば見むきもせず。

藤六　大かたそんな事で有ふとぞんじました。あなたがお討死なさるのを。なんでおめ〳〵本國へ。此親父が參られましようぞ。其使はたれにでも。餘人におつしやり付て被下ませ。

正行　藤六いしくも申たり。されども死する計りが忠義にあらず。此使つとむるが。死に勝る我々への忠義。何卒此事つとめてくりやれ。

藤六　イヱ〳〵なんとおつしやりましても。是ばつかりはいやでござりまする。

正行　おさなき時より正行を。手しほにかけて育てし其方。ヤンチヤをいふては其方に。しかられた事もいく度か。其小言をいふた事がある故。さやうに剛情を申が。これ正行が一生の頼みじや。親父どふぞきいてくれよ。

藤六　イヱ〳〵いけませぬ。あなたさまのおつしやる事。外の事ならなんなりと。仰は背きは致しませぬが。此事計りは此親父。きつとお斷り申ます。

正行　汝は主のことばを背くか。

藤六　ヘイそむき舛。老さらぼひし此藤六。役に立ぬとあなたさまに見くびられた上からは。お氣に入らふが入るまいが。戦場に出てむちやくちやに。命を捨ておわびをすれば。なんのかまふ事がござりませぬ。

正時　コリヤ藤六。常はともあれ。今日は惣大將たる。兄上の詞に背くは。軍令のゆるさゞる所。何やうに申とも。軍の供は叶わねば。すなほに古郷に參るがよいぞ。

藤六　そんならどうでも此親父は。アノお供は叶ひませぬか。

正時　軍令そむくは大罪なるぞ。

上へいひはなされて藤六は。物をもいはずうは帶とき。手早く鎧ぬぎ捨て。さしぞへに手をかくる。

（ト藤六じつと思入有て。手早く鎧をぬぎ。死ふとする。）

正行　コリヤ藤六何をいたす。

藤六　軍令を背く此藤六。どこで死ぬのも同じ事。こゝで死んでしまひます。

正行　其方われにだゞを申な。
藤六　ヘイ。おちいさい時あなたさまがわたくしに。だゞをおつしやいましたから。今日は私があなたにだゞを申します。
正行　コリヤどふあつても其方は。
藤六　どうぞ死せて被下ませ。
〽思ひ込んだる老の一てつ。正行思案の胸を定め。
正行　コリヤ身がわるかつた。軍の供にめしつるれば、必ずともに早まるな。
藤六　スリヤ。おつれ被成て被下升るか。
正行　ヲ、サ。
藤六　ヘイ夫で親父も落付ました。
正行　コリヤ鷺池平九郎是へ出よ。
平九郎　ハ、ア。
（トづか〳〵と正行の前へ出る。）
正行　是成もとゞり。本國へ持參致せ。
平九郎　コハ存寄らざるその仰。拙者は平に御免を蒙る。
正行　定めし左樣申さんなれど。正行が申付る。きつと其方相つとめよ。
平九郎　いかやうに仰あつても。此儀斗りは。
正行　主將の一言は是軍令、幼稚の折から恩のある藤六とは違ふぞよ。汝正行が言葉をそむかば。軍令にそむくなり。達て申さば出陣の血祭り。討てすつるぞ。
平九郎　軍令にそむくとも。何しに髮をうごきましよふや。サアすつぱりと遊ばせ。
正行　ヲ、よい覺悟だ觀念いたせ。
（ト太刀に手をかけ立かゝる。）
主稅　アイヤ。こは御身には似合ざる。あまりといへば無法のふるまひ。
正行　必らずともにおかまひあるな。此期に及び一人たりとも。むざと味方を失ふ事。無念には存ずれど。軍法なれば已を得ませぬ。
主稅　スリヤ。どふ有ても此ものを。
正行　軍法に處せざれば。何をもて諸軍をつかはん。とゞめ給ふな。
主稅　ハテナア。
上〽さしひかゆれば平九郎。それと察して座をすゝめ。
平九郎　お手おろさるゝまでもなし。君に一命さゝげ申さん。
上〽すでにこふよと見へければ、藤六はかけよつて。
（ト平九郎小刀をぬき死ふとする。此時藤六づか〳〵とゆき其手にすがり。）
藤六　またつしやれ。思ひ切て此親父。お使に立ましよふ。
平九郎　スリヤ。そこもとが此おつかひを。

藤六　こなたは血氣さかんの身の上。いつかどの御用に立ものを。どふ見殺しになりましよふ。
正行　そんなら其方得心して。
藤六　參りまするでござりましよふ。
正行　それにて我も安堵せり。コリヤ藤六此二品を持參なし。我々兄弟其外の。郎等共が後世の弔ひ。逆緣ながら母上にゝ其方よきに申上げよ。
トヘいひきかすれば藤六は。なんとかへす詞もなく。
涙の外はなかりけり。
正行　藤六そちやなんでなく。
藤六　是がなかずに居られましよふか。
（ト樂の合方。）
餘人とは違ひ此親父は。おもり役ゆゑあなたさまの。ちいさい時からおつき申。お弓のおけいこ馬場のお供。いくさごつこのお相手まで。ぢいよ／＼とおつしやつて。おなじみ申せし若さまが。けふ討死の御出陣。
上ヘ老さきのない身をもつて。死出の御供をする事の。
ならぬ此身の不甲斐なさ。
此まゝ直に本國におわかれ申。此親父が心の內の悲しさを。御推量被成て被下ませ。
上ヘすいりやうあれやわか樣と。老の涙のやるせなく。
人目もはぢず聲をあげ。わつと計りになきふせば。
心を察して正行が。
正行　その志しはわれとても。おさなき時よりなれなじみ。一ト方ならぬ養育の。恩ある汝にわかるゝは。すぎし昔の櫻井にての悲しみも。思ひは同じ正行が。心の內を推量せよ。今忠孝を全ふして。死すとも心に恥なきは。又これ汝が養育の力なしとすべからず。正行謹んで禮を言ふぞよ。
藤六　勿體なひ事おつしやりませ。なんの御用にも立ぬものを。此年頃のおいつくしみ。御恩もおくらず此まゝに。おわかれ申もよぎなき御使。御本國へ參つてから。此悲しみより又一倍。御母公樣のおなげきが。今見るよふに思はれて。
上ヘあとは得いはずくひしばる。涙の雨のやるせなき
はてしなければ正行が。
正行　愛別離苦は人の身ののがれぬ所。殊更に弓矢とる身の常にして。兼て覺悟のあるべき事。歎きをとゞめ本國へ。少しも早く立かへれ。
上ヘ件のもとよりさし出せば。藤六なく／＼さしよつて。是今生のわかれぞと見あげ見おろす主從が。
心を察して辨の內侍。有あふ人々顏見合せ。涙の
みこむ其所へ。
（ト正行藤六皆々よろしく有て。）

上へいきせき走くる辻風藤馬。
ト山おろしに成り。向ふバタ〳〵にて。辻風藤馬小
具足帯刀にて走り出で。直に本舞臺へ來り。)
藤馬　ハッ、申上升す儀て仰を蒙りて。都のやうす伺がひしに。高の師直師泰兄弟。大軍を卒し都を立。早淀八幡まで出張なし。師直にはこれなる吉野。又師泰には赤坂へ。二手にわかれて攻寄る。敵の手筈に候へば。此儀御注進申上升る。
正行　敵淀八幡まで出したとあれば。もはや猶豫すべきにあらず。イデヤ是より馳せ向はん。それものども乘馬をひけ。
奥かた軍兵　ハ、ア。
(ト大小入り謡への鳴ものになり。下手の奥より軍兵大勢正行の乘馬を引來る。正行兜をきし此馬に乘る事有る正時始め楠の郎等皆々平舞臺へ下りて上手より順に立ならぶ。內侍主稅藤六二重へのこる。)
正行　みよ〳〵賊將師直兄弟。今にひと泡ふかせてくれん。
正時　これよりすぐに河內なる。往生院の陣所に至り。陸貝喇を軍議を示し。
將監　敵八方よりよするとも。目ざすは中軍高の師直。
源秀　備へを立ざる其先に。不意に起て横合より。
正朝　兼て手なみは知りつらん。楠家の一族是にありと。

名のりかけ〳〵。まつしぐらに切り入て。
八郎　狼狽なすを追立て追つめ。
七郎　切立なぎ立おいまくり。
平九郎　多勢をたのむ葉武者ども。さんらんなすを追ちらせば。勝どき上るはまたゝくうち。
主稅　いさましゝ〳〵、其吉左右を相待申す。
正行　イデヤ出陣。
內侍　そんならこれが。
(トよろしく有る。)
藤六　もし。
(トこれをへだてる。)
正行　方々さらば。
上へいさみすゝんで。
(ト正行は軍扇をとつて。花道つけぎはに至る。向ふな見込できつと見へ。內侍藤六名殘りおしきこなし。主稅感じる思入。此もやう大小入り謡への鳴もの。三重にて拍子幕。)
(此幕。平舞臺一同のものをのこして。引上げ。內侍主稅藤六の三人を消す。是より謡の鳴ものにて正行馬上にて。しづ〳〵と向ふへは入る。後正時始め順に旗馬印等列を正して順々に向ふへは入る。一番後に平九郎鐵の棒を以て。大踏歩しては入る。後シヤギリ。)

作者自評

藤六たぶさをもたせかへす一節は。これら會員外山菊池兩君の說に。飾りくだ〳〵しくして。又正行最後の決心の意を。何となくゆるまするに近く。俗にいふだれるといふものなるべし。この一節を削り去るべしとの說あり。この說は實に卓說にして。從ふべきことなり。のちさらに修正すべし。

作者總評

演劇は遊戲に出たりといへども。即ち一の美術なり。正史實傳をのみ主とすべきにあらず。或は君臣の情義を演し。或は父子夫婦のありさまをつまびらかにして。その善惡邪正をのべ。見るものをして。感を起さしむるにあり。必しも勸善懲惡の意を。あらはに示さずして。自ら心に感ずる所あらしむるを妙とす。又は滑稽諧謔を以て。諷諭を寫すこと有べし。されば今余が作る所は。これ改良演劇の一部にして。これをもて演劇を盡く槩するにはあらず。しかはあれども。此戲は男女の情體を描きて出して。情義ふたつながら得さしむるを主とし。かたはら弓馬衣冠の古實を示し。又言語をのぶるにも。雅にして耳に遠からず。俗にして野鄙猥褻に入らざるをむねとす。又殺伐慘刻なるかたちを示さず。又悲痛哀歎にすぎて。衰弱狼狽の狀をあらはさず。哀むといへども。勇壯憤烈の意を寓し。武勇を示すといへども。結構粗暴の所爲を見することなし。正行が一箭よく時業を射て。その薫頭をゆるし。內侍伊賀局が別を惜むことをのべて。悲歎に沈むといへども。尙は慷慨の美氣をあらはすが如き。是なり。作者の用意こゝにあり。又梅ヶ枝主計の色情も。時業が家臣等も。正行の恩義に感じ。戰死を決するに至るなど。また然り。

福地櫻痴篇

俠客春雨傘（六幕十三場）

序幕　（一）大口屋店先狼藉の場
　　　（二）同　奥家督讓の場
第二幕　（一）向島喧嘩の場
　　　（二）松葉屋二階惠金の場
第三幕　（一）阿部川町浪宅敵討の場
　　　（二）松葉屋內證折檻の場
第四幕　（一）新吉原揚屋密談の場
　　　（二）同　仲の町出會の場
第五幕　（一）淺草並木闇討の場
　　　（二）同　諏訪町立田屋門口の場
　　　（三）同　釣鐘切腹の場
第六幕　（一）薄雲店先忍出の場
　　　（二）今戸八幡敵討の場

登場人物

大口屋治兵衛　淺草藏前札差
後に大口屋曉雨　淺草俠客
大口屋治左衛門　曉雨の父
大口屋清三郎　曉雨の異母弟
蔦頭金兵衛　大口屋の抱
金太郎　大口屋の抱
天野民部　旗本
天野靱負　民部の子息
片山又四郎　天野民部の家來
齋藤孫市　同
奴黑內　同
逸見一角　小普請御家人
後に逸見鐵心齋　鶺鴒組の頭
入谷丹五郎　鐵心齋の門弟
根岸松兵衛　同
田畑彌九郎　同
今西玄之進　浪人
釣鐘庄兵衛　稻妻組の頭實は〇〇頭條八
撞木權藏　同子分
龍頭龍太　同子分
突座丸五郎　同子分
立田屋清助　諏訪町料理店主
松葉屋與兵衛　新吉原妓樓亭主
女房お節　今西玄之進の妻
女房お民　大口屋曉雨の繼母治左衛門の後妻

傾城葛城　松葉屋の抱
傾城　山　同
傾城薄雲　同　初めお鶴（今西玄之進の娘）
新造　豐花　同
遣手お熊　同
此外旗本、御家人、供男、番頭、手代、下男、丁稚、幇間、俳諧師、新造、禿、町奴、亭主、町人、子分、小間使、藝者、仲居、茶屋女等。

序幕

一　大口屋店先狼藉の場

享保十五年庚戌十月廿三日午後

此に江戸幕府時代、淺草御藏前札差藏宿、大口屋治兵衞店先（本舞臺五間常足の二重）の體にて、正面には（上手寄り）中仕切を入れたる帳場押入ありて、白壁には帳面類を澤山に懸け、其次には（下手寄）一間貳枚の格子障子を建て（出入口）鴨居の上には御藏前札差仲間の議定書を貼出してあり。店（二重）の上手は荒格子を一間ばかり附けて、其下手は一間ほどの土間を設け、其向うは米置納屋にて米俵等を積んだり。店（二重）の上手には番頭忠右衞門、次に手代與兵衞、庄五郎（縞羽織膝掛）いづれも前に帳面箱を控へ、丁稚子太郎、丑松（着流膝掛前埀）下手に坐り、土間（平舞臺）には下男寅藏、卯吉（仲衆の拵へ）にて立掛り、兩人にて米俵の出し納れを仕て居る。（幕明く）

忠右　オイ子太郎どん。三番のお藏の方は、モウ渡り仕舞に成つた時分だが、どう成つたか。寅藏どんが附いて居るから聞いて來な。

子太　ヘイ畏りました。次手に二番の方も、見て參りませうか？

忠右　ム、。二番の方もどんな模樣だか、見て來るが宜いよ

子太　宜しう御座います。

（ト草履を穿いて出掛るを見て。）

與兵　此忙がしい中で、道草を喰ちやア可けないぜ。

子太　與兵衞さん。大丈夫で御座いますよ。

（ト急足にて下手に入る。）

庄五　忠右衞門さん、アノお徒町の原田樣へ上げまするお扶持米は、今の中に持たせて上げませうか？

忠右　ム、さうだツた。早く持たせて上げる樣に仕ようぜ。オイ寅藏どん、原田樣の六斗五升は、お役扶持の方だから、神奈川の上米だぜ、並のお扶持米と間違へちやアい

けないよ。
寅藏 宜しう御座います。練塀小路の大久保樣へ上げまする三拾俵の次手が御座いますから、今日一所にお屆いたしませう。
與兵 それから、卯吉どん。お箪笥町の新見樣の分は、どう成つたね。
卯吉 アリヤ、昨日すツかりと納め濟みに成つて、綺麗に方が附きましたよ。
忠右 さうか。そりやア御苦勞だッた。
卯吉 どういたしまして。サア寅公、それぢやアロ分に掛かると仕ようか。
寅藏 ム、さう仕よう。
(ト下男の寅藏、卯吉は米俵を納屋の内に運び入る。)
(此時表(下手)より大口屋の札旦那横川助右衞門羽織、袴大小、御家人の拵)中間に編笠を持たせて、店先に來る。是を見て。)
忠右 入ッしやいまし。どうぞお上り遊ばしまし。
(ト一同に會釋すれば、助右衞門は店(二重)に上る。丁稚茶煙草盆を出す。)
助右 一昨日は、わざ〳〵案内を致しくれて、世話であつた。大層早く落ちたのゥ。
忠右 ヘイ大層お早う御座いました。オイ與兵衞さん、横川樣のお目錄を出してくれさつしやい。
與兵 承知いたしました。
(ト帳箱の中より、半紙竪紙に書いて竪に卷いて折つたる目錄の書付を出して、忠右衞門に渡せば、忠右衞門は一寸披見して、助右衞門の前に差出し。)
忠右 ヘイお切米の御勘定は御覽の通り、三拾五俵のお拂代が、一米二金で拾三兩貳分と貳匁三分に相成まするで御座りまする。唯今お持歸り遊ばしまするか?
助右 (目錄を見て) さうさな、持つていかうよ。
忠右 承知仕りました。(一寸小切手を書いて帳面の間に挿みて) オイ丑松どん。(ト渡せば、丑松は請取つて格子障子の中に入る)
(此時上手より松永金平(羊羹色の黒紋附の羽織、大小、着流しの貧乏御家人) 出來り直に店(二重)に上り横川助右衞門の側に着座すれば。)
金平 イヤ構はッしやるな。與兵衞、此節は蔵落で、忙がしいだらうネ。
與兵 お蔭さまで、忙がしう御座いまする。
(ト店のもの一同が都て此松永金平に對しては、不經嬌なる取扱ひ。此時丑松は前に請取つたる帳面と、小さき白木の盆に金を入れたるを持つて奥より出來りて。)
丑松 ヘイ忠右衞門さん。金拾三兩貳分と貳百四拾八文で

御座います（忠右衛門請取つて、一寸員數を見て差出し）

忠右　ヘイ金拾三兩貳分ト貳匁三分、お請取を願ひまする。憚ながら御印形を（ト助右衛門より印形を請取り帳面に押して）

忠右　有難う御座いまする。（ト印形を返す）

助右　（ト忠右衛門は金子を請取つて）イヤ大きに世話であつた。

忠右　おさう／＼様で御座いまする。コレ丑松どん、お履物を……

（ト言附くれば丑松助右衛門の雪駄を直す。忠右衛門、庄三郎立つて、上り口まで見送り會釋して、原の如く復座する。但し與兵衛は、松永金平と引合中ゆゑ送りに立たず。金平は與兵衛に向つて。）

金平　番頭、度々の事で迷惑でもあらうが、實は手前勝手もと甚だ不如意、で老母は長の煩ひ、家内は產あげくと云ふので、至極の產後へ、附いては此玉落で引去つて宜しいから、唯今壹兩貳分、用立つて貰ひ度いね。

與兵　（帳面をくりひろげて）折角の御談示で御座いまするが、御年貢の口と、お玉落濟のお證文とで三拾八兩壹分、此冬のお玉と申した所が拾五俵のお取分、とても振溜しが附きませんに由つて、此所は御免を蒙りまする。

金平　イヤサ手前も存じて居るが、そこを繰合せて用立てくれるのが、札差の働きと申すもの。現在家内が長の煩ひで、老母が產あげく、イヤ／＼さうでは無かつた、家内が產あげくであつた。それを一ト通りの談示の樣に斷るとは情ない。エヽ、番頭どうか工夫を致してくれい。

（ト口說立つれば、與兵衛は迷惑さうにパチ／＼と算盤を彈いて居る。此時大口屋の抱の鳶頭金兵衛（皮羽織鳶の頭の拵へにて）下手より出來り店先（二重下）の土間に來りて。）

金兵　ヘイ番頭さん、今日は、

與兵　ヤア金頭か

（ト一寸挨拶する。金兵衛は松永金平の談示を横目に見て、土間の米俵の上に腰を掛け店先の畳番を仕て居る。與兵衛は、一寸庄五郎に相談して。）

與兵　それぢやア出來ません所を、私共が兩人で無理に工夫を致しまして、此お玉落をあてに、金三分ほど、御用立てませうか……

金平　たツた三分か？

與兵　たツた三分かと仰しやいましても、お借財が此通り、三十俵のお高で百貳拾五兩、其内でお玉落で頂かねば成りません分が、二拾八兩貳分と云ふ御大借、……

金平　分ツてるよ、手前の借財は、手前よく存じて居るよ。そこで、どうあつても金三分の御用立か、エヽ、よろしい、

然らば三分借用いたして參らう。
(ト印形を出せば、與兵衞は、前の手續にて小切手を帳面に挾み、丑松へ渡す。丑松奥へ入る。與兵衞は證書に金高を書入れ、松永の印を押しながら。)
與平　松永樣。この三分は、きツとお玉落の節に戴きますから、其時に成つて、御異存は可けませんよ。
金平　宜よ、決して異存は云はないよ。三拾俵の小普請でも松永金平だ、安心して居るが宜いよ。
(此時丑松は、前の如く金三分を持つて來る。與兵衞は改めて金平に渡し。)
與兵　金三分、慥に御用立まする。
金平　(金を懷中に入れて)　イヤ大きにお世話であつた。
與兵　御機嫌よろしう。丑松どんお履物を……
皆々　御免を蒙ります。
(三人とも一禮したる切にて、見送に立たず。丑松は不せう／＼に金平の駒下駄を直す。金平は元來し方(上手)に入る。)
金兵　(跡を見送て)　エヽ與兵衞さん貧乏御家人のくせに乙ウ見識ばつて居るぢやア、ごぜエませんか。
與兵　さうさ。あゝ云ふのが、藏宿の虫と云ふんだな。
庄五　それでも、此大口屋のお店は札旦那がみンな身分の宜いお方ばかりで、屑が少ないから樂だが、外のお店を見ねエ、此節ぢやア、毎日々々小普請の虫が、ぞろ／＼と詰掛けて、無理口說を仕て居るが、堪つたものぢやア無いよ。
金兵　さうでエすかネ。何商賣にも煩(わづら)エがごぜエますが、小普請の貧乏御家人は、藏宿の煩エで、今の松永とか云つた奴なんかア、お店の厄病神とでも云ふのでごぜエませうよ。
忠右　どうして／＼、松永さんなんざア上の口だ。此大口屋の札旦那で、逸見一角さんと云ふのがあるが、高が百俵で、親御の代からの小普請、劍術は隨分甘いと云ふ評判だが、酒ツくらひで博奕が好きで、町奴交際を仕て、それは／＼困ツた人よ。
金兵　ヘエさうでエすか。そんな旦那は、斷る理にやア參りませんかね？
忠右　所が代々の札旦那で、どつさり貸込んであるから、今更斷る理にやアいかないよ。
丑松　(向うを見て)　オヤ噂をすりやア影がさす。番頭さん、見附の方から、逸見の厄病神が、やツて來ましたぜ。
忠右　ム、成ほど、ありやア逸見さんだ。が此忙がしい中で、困らせるぜ。オイ庄五郎さん、今日はおまへ引受けて下さつせエ。
庄五　どうして／＼。私にやア手こツちにをへませんから、

興兵衞さんが宜しう御座いませう。
興兵　わたしやア、たツた今松永さんで困つたばかりだ、おまへさん今度ァ引受けるが宜いよ。
忠右　さうとも〱。マア庄五郎さん、先陣に向ツて見なせエ。それでいかなけりやア、私が二陣に出るからね。
（此時向う（揚幕）より逸見一角（黒羽織、長大小、着流の御家人）出來り直に店（二重）に上れば。）
忠右　ヘイ逸見さま。
皆々　入ツしやいまし。
一角　どうだ番頭。十月の小三月で、好い天氣だのウ。時に番頭逸見一角、はたと暮し向に差支へたに由つて、此お切米を引當に、當金貳拾兩用立つてくれい。
忠右　ヘイ、左樣で御座いますか。オイ庄五郎さん、逸見樣の御談示を、よく伺ツておくんなせエ。
庄五　承知しました。
（澁々と帳面を繰返し、算盤を彈いて居る。一角は是を見て。）
一角　オイ若番頭、何をぐづ〱仕て居るのだ。算盤を彈いて見ずと、分りきつて居るぢや無いか。僅か貳拾兩の談示だ、さつ〱と用立ツやうに、致すが宜いワ。
庄五　恐ながら、お高が百俵の所に、御舊借御當座とで、〆て貳百八拾七兩に相成つて、一杯の上を、餘ツぽど越して御座いますから……
一角　用立ツ事は出來ぬと申すか？
庄五　お氣の毒で御座いますが、何分にも出來ませんで御座いまする。
一角　なぜ出來ないのだ。百俵の持高で、三百や四百の借財は當り前だ、それとも百兩とか五拾兩とか申したら、斷るのも少しは聞えて居るけれど、高が貳拾や三拾のはした金、因業な事を申さずと、綺麗に用立つてくれい。
庄五　何分行屆きませんに依つて、御免を蒙りまする。
一角　（わざと立腹の體を見せて）エ、理の分らねエ小僧ぢやア無いか。苟にも御直參の逸見一角が、自分で當家へ罷越し、折入つて申入るゝのに、澄した面を仕て、行屆きませんとは何の事だ？ オイ大番頭。アノ青二才ぢや相手にならぬ、貴樣引受けて貳拾兩、唯今用立やうに取計らへ
（ト大聲にて云へば、忠右衞門は、落付顏にて、帳面を庄五郎より取つて、一覽して。）
忠右　逸見樣、甚だ恐れ入りますが、此お借財高では、唯今庄五郎より申上げましたる通り、何分御用立かねまするに由つて、此所は御免を蒙りまする。
一角　ナニ手前までが御免を蒙ると云ふのだなア。きッと貳拾兩、用立ッ事は出來ぬと申すか？
忠右　ヘイ何分にも行屆きませんに由つて、御免を蒙りま

する。

一角　行屆かぬと云ふのは、金があつても貸す事は出來ぬと云ふのだなア。よいワ。其方共では相手に成らぬ。當家の主人。大口屋治兵衞に面會いたして直談示を致す。治兵衞に是へ參れと申せ。

忠右　主人治兵衞は、御面會をお斷わり申し上げまする。

一角　何だと？　主人治兵衞は、御面會をお斷り申上げますると、しかと左樣申したな。コレよく聞け、此逸見一角は親代々の札旦那で、大口屋治兵衞は、此方より札差米を貰ひ、用達を相勤むる出入町人、おれが家來を差向けても、治兵衞は直に面會いたし、何の御用で御座りまするかと、聞かねば成らぬ身分のもの、夫に何ぞや、面會を斷るなどとは不屆至極、金のあるのを笠に着て、公儀のお旗本御家人を、ないがしろに致す不埒者、其趣を此足で直に會所へ斷つて、御目付衆へ申立つる、其時に相成つて、ぢたばた致して後悔するな。

（ト大聲に罵しり、煙草盆を蹴散して、立ち掛る。土間に扣へて默つて見て居たる金兵衞は、忠右衞門はじめ一同の迷惑を察して。）

金兵　ア、申し旦那さま。當家の主人は、唯今佛參にめエりまして、留守でごぜエますから、番頭衆がお斷りを申したので、何も家に居て、お目に掛らねエと云ふのぢアごぜエません。それを彼是れと仰しやるなア、お前エさんも、少し分らねエぢやアごぜエませんか。

（ト喧嘩を買はうと云ふ息込にて云へば、一角も少し考へて。）

一角　ム、さうか、治兵衞は留守だと云ふのか。それならさうと早く申せば宜いに、併し遠路の所を、出直して參るのも面倒だ。治兵衞が歸宅を待受けて、直談致すと仕よう。（どつかと坐して大あぐらをかき煙草を吸て居る）

忠右　お待なさると仰しやつても、いつ歸りますやら時刻も知れず、

與兵　治兵衞が歸つて御面談をいたしても、とてもあなたの御談示は、

庄五　行屆かぬ儀で御座いますれば、先づ今日は此儘で、

與兵　お引取を、

皆々　願ひまする。（ト返さうとする）

一角　エ、喧しいわい。其方共に用事は無い。（蹴散したる煙草盆を取つて）どりや治兵衞が歸りを、一寢入して待受ようか。やつとこ取つちやアうんとこな。

（ト枕にして、店先に大の字形に成つて寢る。是を見て金兵衞が立掛かるを、忠右衞門手附きにて止める。庄五郎は奥に入る。一角は振向いて。）

一角　治兵衞はまだ歸ッて來をらぬか。餘り遲いとあるな

らば、牢問いたせ、治兵衞が居間に罷越し、炬燵には入つて休息いたすぞ。

(ト枕にしたる煙草盆を忠右衞門に擲付けて、立上る。此時格子障子の中にて聲あつて。)

治兵　アイヤお越には及びません、大口屋治兵衞。それへ參つて御面會を致しませう。

忠右　アノお聲は、

皆々　旦那様、

(是にて一角座に復る、大口屋治兵衞(縞の羽織着流し、藏前の町人風障子を明けて出來り、下手に着座して兩手を支へ。)

治兵　私が大口屋治兵衞に御座ります。あなた様が、逸見一角様でおらッしやいますか、無調法もの、何とぞ御見知置きを願ひます。

(ト慇懃に挨拶をすれば。)

一角　ム、貴様が治兵衞か、初めて逢ひ申した。先程より手代どもへ申談じた金談一條、貴様宜しく取計らつて、氣持間の金子、唯今用立やうに致してくれい。

(ト横柄に云へば。治兵衞考へて。)

治兵　あなた様の御勘定もの、いかゞ相成つて御座りますか、一應取調べまして(忠右衞門が差出したる帳面を見て)逸見様、御勘定の通りの御勘定で御座りますれば、此上の御用立金は、ひたすら御免を蒙りまする。

一角　(刀を引よせて居合腰になりて)ナンダ。貴様までが御免を蒙ると。コレ治兵衞、よッく聞け。其方は數代此方の札差を勤めながら、現在此方の難儀をお差構はず、札旦那の御家人をば、見す／＼路頭に迷はせて、相濟むものと心得居るか?

(ト詰掛かれども。治兵衞は落付きて。)

治兵　是は仕たり逸見様、失禮ながら、お詞とも存じませぬ。多分番頭等より申上げたで御座りませうが、御舊借と御新借の口々を、悉皆勘定いたしますれば、此節の様に相場の低い時では、當多のお玉落を、殘らず頂戴いたしても、此通り、お利息にも引足りませぬ。(ト傍の算盤を取つて自分で彈いて)左様致しまする時には、恐乍ら日々の御飯米、御面にお差支と存じますゆゑ、お借財の元金は、此通り、殘らず證すゑ、御飯米に差出しましたる餘分をば補かづゝ御利息の方へ戴いて、御勘辨を仕つて居りまするは、憚りながらあなた様へ對して、此治兵衞が格別の御奉公、是が即ち、あなた様を路頭に迷はせ申しませぬ慥な證據。なんと、左様では御座りませぬか?

一角　ム、。

治兵　これを只今御談示に任せ、此上の御用立金を致しまして、御飯米まで差引きましては、第一、御藏前札差仲間

の議定に外れ、随ッて藏宿渡世も相立ませぬ。それでも達てと仰せられては、聊か御無體の様に相聞えまする。

一角　ナニ無體だと、何が無體だ？　おのれ、喙青い小二才の分際で、理窟らしく申立て、おれに恥辱を與へをつたな。

（ト云ひながら、前なる算盤を取つて立上り、治兵衛の眉間を撃つ。眉間より血流るゝ。治兵衛は其の算盤を引たくッて、持つて立上る。一角も刀の柄に手を掛ける。土間の金兵衛、天秤棒をもち。寅藏、卯吉棒を持つて立掛かるを、忠右衛門、與兵衛制する。此時障子の内より、大口屋治左衛門（羽織着流）庄五郎を随へて急ぎ出來り、兩人の間に割つて入り）

治左　逸見様、私は大口屋治左衛門で御座りまする、悴の無調法、何とぞ御勘辨を願ひまする、御用立金は、恐ながら私が仕りまする。

（ト懐中より金子の包を出せば。一角は請取つて。）

一角　ム、了見の致し惡い奴なれど、そなたに面じて勘辨いたす。コレ治兵衛、以後をきッと謹みをれ。

（ト嘲弄して立上り、土間（平舞臺）に下りる。治兵衛は猶も怒りに堪兼て立掛るを、治左衛門止め。金兵衛等を與兵衛、庄五郎制する。忠右衛門は一角を見送る。）

治兵　餘りと云へば、

一角　ナント申す。

（治兵衛氣を入替て坐り、手を突いて。）

治兵　逸見様御機嫌よろしく（と云ふた機掛にて）入らつしやいまし。

（ト無念を忍びたり。）

（此道具廻ル）

同　家督讓の場　同日の事

此は大口屋隠居奥座敷（本舞臺一面の平舞臺）にて、正面上手寄り九尺の床の間には三幅對の懸物を掛け、花入には紅葉と寒菊を挿け、床續き地板の違棚には料紙硯箱など置き、其次二間の所は、四枚建の襖（出入）鼠地に金にて唐形の唐紙、上下とも、例の所に同じ唐紙二枚建（出入）其他は都て鴨居の上下共、根岸の塗壁、一枚半の腰張り。尤も上手よき所に下地窓。下手よき所に中窓を附け置く。舞臺には紺綠の薄縁を敷き、上手には座蒲團、手あぶり、烟草盆、火鉢、茶道具菓子器等を置き、主人着座の用意。但し此外に客設けの火鉢煙草盆二ッばかり置きたり。

此に隠居治左衛門の女房（即ち治兵衛の繼母）お民（ふけたる女房の拵）治左衛門の次男清三郎（治兵衛の異母弟）（縞羽織着流息子の拵）にて火鉢の傍に居り。小

間使おのぶ（島田の女中）其側にて煙草盆の火をいけて居る。（道具留る）

お民　おのぶや。もう大旦那が、お奥へ入ッしやる時分だから、お前、お煙草盆の火をいけたら、此土瓶をあけて置きな。それから御膳の支度は出來て居るか、臺所へ往つて聞いて來なよ。

おのぶ　ハイ畏りました。（ト火入を煙草盆に入れ、茶盆を持つて下手には入る。）

お民　（耳を欹てゝ）ネー淸三郎。お店の方が、先ッきから騒がしい樣だが、何か間違ひでも出來たのぢやアあるまいかねえ？

淸三　さうで御座いますネ、此節は盆時分で御座いますから、隨分若旦那には、無理な掛合を持込ンで、店のものを困らせるお方が御座いますよ。何なら私が一寸お店へ往つて、見て參りませうか。（ト立掛る）

お民　お止よ。今におのぶを仲の間まで見せにやるから。何に親子兄弟の中でも今ぢやア兄さんの治兵衞さんが御當主で、お父ッ樣は御隱居のお身分、仲の間へ出て入らつしやるのは、兄さんのお手傳をなさるだけ、それにお前が、用も無いのに口出しをしちやア、兄さんへ對して私までが宜くないよ。

淸三　大きにさうで御座います。夫だから、私もお店の事に限ッちやア、お兄樣のお指圖の無い中は、けして手出しを仕ない事に致して居りますよ。

お民　それが宜いよ。兄さんが私をばおッ母さま〳〵と、あの通り大事に仕てくれて、お前を一ッ腹から出た兄弟の樣に可愛がつて下さるから、お前も亦その義理で、遠慮がちに仕て居ないぢやア、可けませんよ。

淸三　ありがたう御座います。私も常から其氣で居りますが、お父ッさんの御留守の時に成ると、お兄樣がお金藏の鍵も、奥帳場の鍵も私に渡して、お金の出入を任せておさせなさるにやア、困りますよ。

お民　サア、夫だから猶更控目に仕ないと、世間で彼是と言はれますよ。

淸三　そりやア仰ッしやる迄も無く、次男は奉公人同樣の積りで、言語も其通りに仕て居ますのに、一昨日もお店の忠右衞門が私に、淸さま、あなたから〳〵と申して居たのを、お兄樣がお聞きなすッて、大勢の中で顏色變へて『番頭始め店の者が、なぜ淸三郎の事を若旦那と云はないのだ、たとひお繼さまの言附でも、當主のおれが常々言渡して置いたのに、それを用ひぬとは、怪からぬ事だ、以來とも淸三郎の名を云ふと承知しないぞ、おれは皆が知ッての通り、女嫌ひで女房は無し、子供は無し、此家督も終には淸三郎の物だ、淸三郎も其積りで、おれ

同樣に番頭手代はじめ呼捨に仕て若旦那らしく仕なけりゃア可けたからうぜ』と諂い見幕のお小言で、私も困り切りました。

（ト治兵衞の口氣を眞似て話せば。）

お民　さうかい。さうして見ると兄さんが、『私は女嫌ひだから、女房を持ちまするのは、何と仰しやつても、御免蒙りまする』と、あの孝行の人が、緣談の話に成ると、お父さんの云ふ事を聞かつしやらぬは、私への義理立で、お前を家督にする下心であるかも知れぬが、それぢやア、私とお前が濟まないねエ。

清三　私だッて、義理にもそうは出來ませんよ。

（ト母子が談して居る所に。大口屋治左衞門（下手より）出來りて、默然として着座する。）

（お民、清三郎は會釋して。）

清三　お父ッさま、今日は大層お引けがお遲う御座いましたネ。

お民　それに、お店の方が、今しがた、大層騷がしう御座いましたが……。

清三　何か間違でも出來たのでは無いかと、おッ母さまも氣を揉んでお居なさいました。

（此前に小間使のおのぶは、茶道具を持て（下手より）出て來りて、程よき所に居る。）

治左　ナーニ、別に間違も無かつたが。……オイのぶや、お茶をくれい。……ア、治兵衞はわづか一年の内に、大層勘辨強く成つたよ、あれぢア、おれが居なくッても、大口屋の身代は大丈夫だ。

お民　そりやア、どういふ譯で御座りますねエ？

治左　今にわかるよ。コリヤ清三郎、貴樣も兄貴を見習ッて、勘忍が第一だぞ。他家へ養子にいつても、兄貴のお蔭で分家をさせて貰つても、勘辨強くならなけりやア、宜い町人にやアなれないぜ。

清三　有がたう存じまする。是からしては猶以て、お兄樣の御勘辨強いのを見習ひまするで御座りませう。

（此時治兵衞（前場の扮）眉間血汐のにじみたる痕を見せて（下手より）出來れば。）

お民　治兵衞さん、お出なさいまし。

清三　お兄さま、お出なさいまし。

（ト挨拶すれば。治兵衞は會釋して座に着き、治左衞門に對ひて。）

治兵　お父ッさま、唯今は御心配を掛けまして、相濟みませぬ、御蔭を持ちまして穩かに事濟み、有がたう存じまする。

治左　お前もあの亂暴に逢つて、さぞ腹も立つたらうが、よく辛抱した、よく勘辨した、我子ながら實に感心した、

今も其噂を仕て、清三郎に教訓をして居た所だつたよ。

治兵　どう致しまして、夫と申しまするも、全くはお父ッさまが、おいでなすッて下すつたからで御座います。

（ト禮を述ぶる。お民と清三郎は、治兵衛が眉間の疵、および羽織の袖に血痕のにじみたるを見て、打驚きて。）

清三　オヤお兄さま。あなたのお額はどうなすッたので御座います？

お民　さう云へば、眉間の疵、羽織の血痕？

治左　これが今いつた勘弁強い治兵衛の辛抱、併しお前、額が痛むだらうが、早く膏を附けたが宜いぜ。

治兵　ナーニ僅かの打傷、薬を附ける程でも御座りませぬ。

お民　一體どうしたので御座いますねェ？

治左　ナニ其譯と云ふのは、今店へ来た鳶見さまが……

（ト話し掛けるを冠せて。）

治兵　そのお話は、ゆるりと跡で私から致しませうが。時にお父ッ様、改めて一ツのお願、何ンと、御聞入れなすつては下さいませぬか？

治左　ハテ改めて願ひと云ふのは？

治兵　別儀でも御座りませぬが、私は今日限り隠居いたして、此大口屋の家督をば、此に居まする弟の清三郎へ譲り度う御座ります。

治左　エ、何ぢや。清三郎に家督を譲つて隠居し度いと云はつしやるか？　そりや成らぬ、成りませぬ。

治兵　では御座りませうが、どうあつても御承知を願ひまする。

（と思ひ切つたる體にて云へば、）

治左　（思入あつて）ウム汝は、余が此間だ、お民と二人で、清三郎に別家させ度いと、相談して居たのを聞いて、余への面當に、そんな難題を云ふのだな。

（ト立腹するを。お民は側にて取なして。）

お民　ア、申し、そんな事を、あなた仰しやつて……治兵衛さんに限つては何であなたに、面當がましい事を云はれませう。是には外に仔細のある事これ申し治兵衛さん、お前さんは、此清三郎に義理立して、家督譲りを仕度いと仰しやッても、第一お父ッ様が御承知にも成らず、又私の目の黒い中は、どんな事があつても、清三郎に其様な不義理な事はさせぬに由つてどうぞ、そんな事を言はないで下さりませ。（と真實を見せて云へば）

治兵　（涙を流して）お父様、お母様、親身の親子兄弟中で、何の面當だの、義理立だのと云ふ事が御座りませう。一昨年の三月、此大口屋の身代を譲られて、當主に成つて足掛け三年、札差家業がつく〴〵否に成つて、モウ迚も堪へ切れ無いから御座います。

治左　何と云はッしやる？
治兵　お父樣、よくお聞下さいまし。總別大家や金持になり度いと、我人共に望むのは何の爲、人にも立てられ、世間に肩身を廣く仕度いと思ふからで御座りませう、夫が出來ぬ暁には、大口屋治兵衞が、三十萬兩の身代は愚か、三百萬兩が三千萬兩の大分限でも、一文無しの貧乏人と、少しも變り御座りませぬ。今も今とて、お母樣がお尋ねなされた眉間の疵、惡小普請の逸見一角、無理強談の押付掛合、店の者の迷惑を見兼まして面會いたし、用立金を斷わつたれば、亂暴無頼の一角が、算盤おつ取り打たる手疵、先は御家人札旦那、こちらは町人札差と云ふ悲しさに、手向ひならざる其上に疵を受けての誤り閉口、內濟金を此方から出して、やつと濟ませた意くぢなさ、今日と云ふ今日、我身で我身に、愛想が盡きて御座りまする。
お民　その疵は、さうした譯でありましたか。
治左　併し、そこを我慢いたしたが、天ばれ辛抱、この身代を大切ぢやと思ふから。
治兵　サア其身代大切も、お父ッ樣に、御苦勞を掛けまいと思つた故。持つたが病の聞かぬ氣は、水道の水を飮んだが因果、百萬石の加賀樣でも、天秤棒を肩にしたぼていふりでも、五分と五分で往來を成ばつてあるくが江戸の花その眞ン中で育ッた治兵衞、いつ何時間違ッて、堪忍袋の緒が切れて、暖簾に疵が附かうも知れぬ。お藏手代や輕御家人、逢ふ人每に頭を下げ、其お蔭で商賣するのは、清三郎見た樣な、おとなしい人物に限りまする。ジヤに出つて、家業に不向な私は、一日も早く隱居して、てッきり適當ッた清三郎、それに讓るが家の爲、御先祖樣へも孝行と申すものでは御座りませんか？
清三　さう仰ッしやッても私には、此大口屋の御家督は…
治兵　相續が出來ぬと云ふのか？　ム、それぢやア、明日にも此兄が死んだ後でも家督を續がず、他人を養子にさせる積りか？
清三　サアそれは？
治兵　それ見い、そんな不孝な奴が、どこにあるものか。マア默ッて居て、余がする通りに任かせて置きなせエ。そこでお父ッ樣、私が此通り、札差家業に愛想が盡きて、隱居が仕度いと云ひます上は、思ひ止まる私でも御座りませぬ。又私が當主では、此大口屋の繁昌は、覺束なう御座りますれば、清三郎へ家督讓り、どうぞ御承知を願ひまする。
（ト精神おもてに顯はれて望みければ。治左衞門は、腕を叉き、暫し默然として考へたりけるが、稍あつて膝を打ち。）

治左　ム、宜しい、承知した。如何にもお前の望み通り、此大口屋はお前の身代、弟へなり誰へなり、讓ッて隱居を致すとも、心の儘にするがよからう。

治兵　それぢやア、私のお願ひ、御承知なすつて下さりまするとな。エ、有がたう御座りまする。

お民　エ、それぢやアあなたは、治兵衞樣の若隱居を？

治左　オ、望み通り、させてやる。

清三　そりやア又どうした理で？

治左　別に理とて無いけれど、倅の治兵衞は、子供の時から、負けるが嫌ひの江戶ッ子氣性、幼少からして武藝すき、堀內源太左衞門殿の弟子になり、皆傳免許の劍術遣ひ、柾がッた事なら一寸でも、其儘通さぬ彼れが氣性、今日の樣な事があつては、成程札差家業はふッつり嫌に成つたであらう。處で治兵衞、お前が望み通り隱居して後は、どうする所存ぢやな？

治兵　弟の清三郞、當年正しく廿一歲、讀書、算盤、人應對、立派に出來ます男ゆゑ、清三郞へ讓りますれば、お父ッ樣には、御苦勞ながら是まで通り、御後見を願ひまする。

治左　ム、そりやア承知したが、肝腎のお前の所帶は？

治兵　へエ私の所帶で御座いますか？　私はどこか一軒小さな家を、清三郞に貰ひまして、樂隱居を致しまする分の事。

お民　ぢやと云ッて、あなたの御身代を、

治左　別に割つて相應の分家をせねば、

兩人　成るまいがなア？

治兵　アイヤ、そりやア私と淸三郞との相對話、必らずお構ひ下さりまするな。……時に淸三郞、今日改めて此家督、余からしてお前に讓るが、札差家業の藏宿商賣、勘忍が專一だぜ、勘忍が強くなけりやア、大口屋の身代は持ッ事が出來ないと、不斷それを心に思ひ、辛抱我慢をせねば成りませぬぞ、其他の事は、お父ッ樣が附いて居らッしやれば、余が云ふにも及ばぬ事、

淸三　有がたう存じまする。

治兵　そこで淸三郞、一昨年余が此大口屋の家督を請取ッた時には、身代合せて貳拾七萬八千兩、その中で廿萬兩を資本に立て、殘金はお父ッ樣からお預り分に仕て置いたが、今では凡そ三拾萬兩以上の身代。お前の分が貳拾萬兩、御兩親樣の分が五萬兩、余の分が五萬兩と三口に立て、三口ともお前が預ッて、御兩親樣へは御隱居料を差上げ、余には其五萬兩だけの利息をは、每年渡して下さらぬか？

お民　エ、、御前さんの別家高が、アノたッた五萬兩で？

治兵　何の、隱居をしての一人暮し、五萬兩の利息が年一

割で五千両、私にやア多過ぎて困る位で御座りますよ。

エ、清三郎、これで御前承知したか？

清三　承知どころか、お兄イ様の思召し、有がたいやら恭ないやら、恐れ入つて御座いまする。

治兵　シテお父ッ様おッ母様には、御不足は御座りませぬか？

治左　何の不足があらう、我子ながら其方が潔白、無欲のはからひ感心して居るぞいのウ。

治兵　それぢやア話しはそれで極ッた。善は急げだ、清三郎、今日からしては、お前が直に大口屋治兵衛、余は隠居で、俳名を其儘に、大口屋暁雨。ハイお父ッ様。おッ母様、治兵衛さん、おめでたう御座いまする、

（ト祝辞を述ぶれば。治左衛門はじめ宜しく挨拶して後に。）

治左　さて治兵衛……

治兵　モウ治兵衛ぢや御座いません、暁雨で御座います。

治左　それぢやア暁雨。其方は是から隠居して、何が楽しみ？

治兵　サア、一本立の暁雨となれば、弱きを扶けて強きを挫き、此蔵前を初とし江戸中の町人衆、裏店小店に至るまで、難儀を救ふが此身の楽み。

お民　エ、、それでは、あの侠客の町奴に

治兵　イ、ヤ男は立てゝも町奴には成りませぬ、男は吝な野郎でも、大口屋暁雨、まさか町奴に立ち交り、ゆすり威し喧嘩買、博奕渡世のかすりとり、そんな真似は金輪際、致す事ぢやア御座りませぬ。決して御案じ下さりますな。

治左　それぢやア此爺が請合ッた、昔も安心いたして居るがよい。（と考へて、つト立ち奥に入り、長脇差を袋に入れたるを持出して）サア暁雨、この脇差は御先祖から傳はッたる大兼光の一尺七寸、今改めて此治左衛門が其方に譲るぞ。

治兵　エ、其大兼光を？（取って戴きて）有がたう御座います、此暁雨が男を立つる一生の守り、必らず大事に致しまする。

お民（氣遣ひて）もしやその脇差で、治兵衛さんの身の上に……

治左　ハアめつたに抜かぬ封印は、

治兵　心に附けて御座りまする、イヤ重ね〴〵の御高恩、人は一代名は末代、これから男に（と立上る柝の頭）なれまする。

（治左衛門は立派な男よと見とれ、お民清三郎は治兵衛の恩に感じ、猶その行末を案ずる）

――拍子幕――

第二幕

一　向島喧嘩の場

享保十六年辛亥正月廿六日午後

此は向島三囲の邊にて、正面より上手少し奥深に細つて、向島の堤（高足二重）其の前（平舞臺）は地方にて、奥は隅田川の心なり。堤の邊の青草は既に其の芽を發すれども、兩傍の櫻は未だ蕾を綻びず。下手には堤の上り段ありて、其先に葭簀張の水茶屋あり。正面川を隔てゝ向うは。山谷、今戸邊り（遠見の書割）を見渡したり。

此に堤の上には伊兵衛（町人）呂中（隱者）半七（町家の息子）床几に腰を掛け。茶店の娘おいな（島田）茶を汲て出し、雜話の最中なり。（囃子）

伊兵　去年は、閏があつたせゐか、正月でも大そう暖かで御座いますねエ。

呂中　左樣さ、大そう暖氣なので、龜井戸を始めとして、此向島あたりも、もう梅が滿開で御座りますよ。

半七　それぢやア、御隱居樣は、梅見にいらツしやつたので、御座いますねエ。

呂中　何にも、風流の樂みは、梅見に限るよ、櫻になると俗物が出掛けて、雜沓するのに困り切るね。

伊兵　さうでございますかネ。私なんぞは、寒い時分にわざ／＼梅を見に參るよりは、三月に成つて櫻の盛を見るが樂み。

半七　そりやア夜櫻から朝櫻、夕櫻となるのが、一番面白うございますね。

呂中　殊に北廓の夜櫻、ものいふ花が面白からうが、あの花も見過ぎると身の毒になるのぢやて。

伊兵　大きにさうで御座いますね。イヤモウ彼是七ツ近くに成るだらう。エヽ、姉さんさうだらうねエ？

おいな　ハイ、先きに長命寺樣の八を打ましたから、モウ七に間は御座いますまいよ。

半七　さうかね。夫ぢやア伊兵衛さん、そろ／＼と出掛けませうか？　御隱居さまごゆるりと。（と立掛れば）

呂中　イヤわたしもそこらまで御一所に參ると仕やう。（三人が宜しく茶代を拂つて立つ）

おいな　有がたうございます、お靜かにいらつしやいまし。

（三人は下手に入る。おいなは、そこらを片付て居る。）

（此時（向うより）逸見鐵心齋（序幕の逸見一角なり。五分月代、羽織着流し、大小）門人、入谷丹五郎、根岸松兵衛、田畑鍋九郎、並びに子分、山猿の赤藏、猪熊の荒七、狂犬の武者平、貉の無垢助（門人は大小。

子分は一刀尺八の町奴）或は梅の枝を荷ぎ、或は笹折を提げ、或は瓢箪を携へて梅見歸りの酩酊にて出來り（花道に）止りて。）

鐵心　ナントから打揃ッて、ぶら／＼と野掛を致すは、よい心持だのウ。

丹五　何にも先生の仰せの通り、天氣は暖かで、風は無し。

松兵　堤の景色も春めいて、陽氣になつた彼岸まへ、

彌九　家にござるも退屈と、俄に出掛けた此梅見、

赤藏　龜井戸邊から柳島、こゝらあたりに來て見れば、

荒七　今を盛りの梅の花、われ劣らじと咲匂ひ、

武者　低い鼻まで高くなる、旦那のお供の梅見酒、

無垢　一杯機嫌で此通り、人中押してあるくのは、

丹五　宜い心持で、

皆々　御座いますなあ。

鐵心　それで自分も悦ばしい。（と茶店を見て）幸ひあれなる堤の茶店、一服いたして休息しようか？

丹五　それが宜しうござりませう。

鐵心　サア參ると致さう。

丹五　まづおいで、

皆々　なさりませう。（鐵心齋先に立ち、打ちつれて茶店に來る）

おいな　入ッしやいまし。まアお掛けなさいまし。唯今お茶を差上げまするで御座いませう。

鐵心　茶はゆッくりで宜いから、早く煙草の火をくれい。

おいな　ヘイ／＼畏りました。

（ト煙草盆に火を入れて出す。門人等床几を持出せば鐵心齋は腰を掛けて。）

鐵心　こりや赤藏、その瓢箪にまだ酒が殘つてあるか？

赤藏　（瓢箪を振つて）まだ此通り澤山殘つてございまする。

鐵心　然らば此景色を肴にいたし、今一獻運らさうか。

（ト門人に酌をさせて酒を飲み居たり。）

（此時上手の奥より天野靱負（大若衆、振袖の伊達羽織、袴、大小）奴黑内（伊達奴）を召具して出來り（よき所に止ッて。）

靱負　なんと黑内。いつ見ても向島はよい景色だのウ。

黑内　左様でごせエますネ。若旦那様、御覽なせエまし、あの向うの森が待乳山で、こちらが觀音様の五重の塔でごぜエますぜ。

靱負　さうか。それではあれが、眞崎の稲荷ぢやのウ。

（ト地方の風景を立ちながら眺望して居る。是を見て、鐵心齋は丹五郎に囁けば、丹五郎心得て、靱負の側に來り、一禮して。）

丹五　ム、天ぱれ美しいお若衆さま。我々共は、音に聞ゆ

る鵜飼組の者で御座るが、今日は梅見遊山の浮れあるき。幸ひ我等が持參の酒、一口其様に進ぜたい。侍冥利若衆冥加、あれなる茶店で夕酒もあり、御案内を致す程に、サア御入來が願ひたい。

（ト靱負の手を取れば。靱負は振拂つて。）

靱負　その御芳志、常ならうは御座れども、唯今は急ぎの歸り路、殊に宅も遠方なれば、お招ぎ御辭退いたしまする。

（ト下手の方へ往かゝれば。松兵衛彌九郎出來ッて。）

松兵　イヤ左様に御辭退召さるゝな。袖ふり合ふも他生の縁。

彌九　侍同志が出會つて、頼みある中の酒宴。さうすげなく斷るは。

兩人　武士の本意で御座るまい。

丹五　殊にかしこに居らるゝは、鵜飼組のお頭株、一手の指圖も致さるゝ方が、お若衆に杯さそうと言掛けて斷られては男が立たぬ、是非とも御承知、

三人　召されませう。

（ト三人にて靱負の兩手を執りて、引張れば。靱負は振りほどきて身構をなして。）

靱負　ヤア慮外なり、それなる方々。何組かは存せぬが、見ず知らずの方々に、杯もらふ手前で御座らぬ。妨げいたさず往來を、疾とお通しなされぬか？

（ト聲を勵まして云へば。三人は立塞がッて。）

丹五　ワハ、、ハ、何と斷り申すとも、此方も侍男だてだ。

松兵　所望を聞いて貰はにやア、此方の顏が立ち申さぬ。

彌九　それとも達て通り度くば、

丹五　通る様にして、

三八　通らッせエ。ワハ、、、ハ。

（ト嘲り笑ふ。此前より奴の黑内は頻に腕をさすッて進み出ようと仕したるを、靱負制して居たりけるが、今は堪らず黑内ずッと前へ出て、靱負を後に圍つて。）

黑内　エ、聞分の無エ。瘦侍エ。若旦那の忍びのお供、喧嘩はなンねエ法度だと堅エ掟をぶん守り、辛抱して勘辨すりやア、附上ッた其ごたく。此堤の往來を通さねエとぬかすなら、此奴がかうして通るワい。

（ト拳を固めて丹五郎を打てば。）

丹五　おのれ素奴め、何を仕やがる。

（ト丹五郎松兵衛彌九郎の三人の中に、黑内を取籠めて打て掛る。黑内は此を先途と爭ひたれども、力敵せずして取押へらる。三人は黑内を隅田川の水中（舞臺正面の奥）に投込みて、）

三人　ざまア見やがれ。（と笑ふ）

（此前より堤下（平舞臺）にては赤藏荒七武者平無垢助の四人、鐵心齋の指圖にて、靱負に取て掛る。四人

は各〻尺八、靱負は扇子にて防ぎ居たるが。堤の上にては丹五郎等、今しも黒内を水中に投入れて。)

丹五　サア邪魔な奴は片付た。其若衆は手前共が、

三人　受取たぞ。

(ト丹五郎等三人、刀に反を打つて、三方より靱負を取囲む。靱負も今は是迄なりと思ひ、扇を捨て、刀の柄に手を掛けて、双方睨み合うたる折から。彼方よりして。)

玄之　(揚幕の内より) 待つた〳〵お若衆。其刀必らず拔かれな。

(ト辭を掛けて今西玄之進（老體、編笠、大小、著流窶々しき病後の浪人) 小さき包を携へて出來り直に其場に（舞臺）に馳せ入り、編笠を脱ぎ捨て雙方の間に割て入り。)

玄之　御雙方ともお待ち下され、某は通り掛りの通行もの、此喧嘩、事の起りは存ぜぬが、意趣遺恨あつての事ともお見受申さぬ、言はゞ當座の行掛り、何と某へお預けは下さるまいか。御雙方、如何で御座りますな?

靱負　お救ひ下さるとあるならば、相手は知らず、某は異議なく貴殿へお任せ申す。

玄之　忝なう御座る。シテ方々にはいかゞで御座るな?

(丹五郎等は、玄之進が病みあげくの老體にて、衣服大小の粗末なるを見て、心にあなどりて。)

丹五　痩浪人の案山子(かゝし)どの、用でも無い扱ひして、腰骨を挫かうより、

松兵　早く堤下に這込んで、小さく成つて、

三人　すツこんで居るが宜いワ。

玄之　いかにも某、痩浪人では御座れども、通り掛ツて此扱ひ、何とぞ枉げて某へ、お預けなされて下さるやう、お頼み申す。

丹五　エ、喧しい扱ひ沙汰、聞く耳持たぬワ。

玄之　デモ御座らうが……

丹五　まだ申すか、其(そこ)のかずば、かうするぞ。

(ト玄之進の胸倉を取れば。玄之進引外して筋斗(もんどり)を打たせる。松兵衛、彌九郎が引続いて組付くを、其手を執つて左右へねぢ上げて。)

玄之　ヤア無禮なり方々。最前よりして、是なるお若衆主從を、相手となして無體の狼藉、いま又我に手向ツて、尾籠の振舞、この上は某がお若衆の助太刀、其錆刀のなまくらもの、拔きたくば拔いて見ろえエ。

(ト左右に投付け、あたりの松の杭木を手早く取つて、身を固むれば。)

靱負　お待ちなされ御老人。某ゆゑに貴殿をば……

玄之　お案じあるな。年こそ寄つたれ、高の知れたる相手

の侍。それに控へて見物召されい。
丹五　うぬ、よくも手向ひ、
三人　仕やがつたなア。
（ト三人は刀を抜きつれ斫て掛る。玄之進は松の杭木を得物となし、三人を相手にして防ぎ戰ひ、身近くも寄せ付けず。赤藏荒七武者半無垢藏の四人は、鐵心齋の差圖にて、脇差を抜翳し、玄之進の後の方に廻る。是を見て靱負は欅の力木に立てたる竹を取りて槍に成し、赤藏等を相手にして戰ひければ、丹五郎等は刀を打落されて、或は倒れ、或は逃去つたり。是を見て鐵心齋は刀を抜いて。）
鐵心　老人慮外、
（ト詰つて掛り烈しく戰ふ。玄之進は隙を見て、鐵心齋の刀を打落し、持つたる杭木にてしたゝかに打つ。打たれて撞と仆るゝ。同時に赤藏も靱負に胸を突かれて氣絶する。玄之進は是を見て、あたりを見廻して。）
玄之　ヤレ危ない事で御座つた。お若衆、お怪我は御座らぬか？
靱負　幸ひ怪我は致しませぬが、御老人には？
玄之　無事で御座る。サア後詰の者の參らぬ中に……
（ト編笠取つて冠り、靱負と倶に、急ぎ向うに入る。鐵心齋は氣が附いて起上り、あたりを見廻し、刀を鞘に納め、丹五郎其外の者共に活を入れて呼起し。）
鐵心　いづれも正氣に相成つたか？
丹五　先生、いま出會つた痩浪人、
鐵心　ム、見掛に似合はぬ彼奴が腕まへ、
松兵　天狗の樣なはたらきは、
皆々　何もので御座りまするな。
（鐵心齋は、玄之進が落したる包を開き、書付を見て。）
鐵心　ム、そんなら彼奴は……
（ト無念の體にて向うを睨むれば。丹五郎その書付を覗きに掛る。鐵心齋氣が附いて、其書付を後に廻して
（木ツ掛）
鐵心　ム、。
（ト膝を打つと倶に、打傷の疼むを堪へて怒りの體をなす。）
（拍子幕。すぐに引返す）

二　松葉家二階惠金の場

享保十六年辛亥正月廿五日夜

但見る（本舞臺一面の平舞臺）正面一間の床の間には、料紙硯箱等を飾り花瓶に櫻の花を生け。其次一間の地板には、琴三味線棋盤將棊盤等を飾りたり。塗壁にそひては、衣桁に花やかなる打掛等を掛け。夜具棚、

塗箪笥等あり。下手は塗骨障子にて見切り、其外は廊下なり。此仕切中は薄縁を敷詰め。座蒲團火鉢煙草盆燭臺等を配置したり。是れ新吉原角町松葉屋の二階なる、傾城丁山の部屋なり。

此に丁山の新造若梅、呉竹の兩人。禿千鳥、幷に幇間善孝、俳諧師蛙吟（坊主）鳶頭金太郎等居並びて（下手にて）酒宴最中なり。（幕明く）

若梅　千鳥どん、大妓はどうさつしやつたか？　見申して來なよ。

千鳥　アイ〱。（下手の奥に入る）

金太　オイ呉竹さん。旦那はお湯だが、誰かお附申して居るのかねエ？

呉竹　アイしのぶどんがお附き申して居るから、今にわちきがお迎ひにいくんざますよ。

善孝　それぢやア、呉竹さん、御苦勞さまながらお願ひ申します。

呉竹　承知ざます。（下手に入る）

若梅　宗匠さんへ、をかしな事を聞く樣だが、あの曉雨さんはあんな好い男のくせに、なんで女嫌ひざますだらうねエ、丁山さんの大妓も、しみ〲氣を揉んで居なますよ、ほんに憎らしい曉雨さんですねエ、どうかして少しや女ずきにならッしやる樣なまじなひはありまへんかエ？

蛙吟　どうもさう云ふまじなひは、僕れも心得申さぬが。善孝子、貴公などは此道の博學多才だから、知つて御座るだらうてな？

善孝　ハヽヽア私だッて其まじなひは知りませんねエ。それを知ッて居る位なら疾うに自分でまじなひを仕ますけれど、

金太　そりやア無駄な詮議だ。こッちの大將は、藏前きつての評判の女嫌ひ、夫人さんも邪魔だッて、まだ持たねエ程の變り物だもの、まじねエなんかが利くものかい。

若梅　これが、なんで三日にあげず、此吉原へ來さつしやつて、大妓の所へ來なますだらうねエ？

金太　その理は、おいらがよく知つてるが、マア斯だ、旦那が常々仰しやるには、余が家に出入りをする學者文人宗匠畫伯、その人數はあまたあれど、追從輕薄お世辭だらだら、太鼓持も同じ事だ、歯が浮く樣な詞エを、聞いて居るのが癪に障る。所が吉原のおいらんは、遊女でこそあれ、氣位がピンとして、大名だらうが金持だらうが、氣に喰はなけりや口も利かず、つんと澄ました鷹揚枝、その代りに氣に入りやア、良友だちを目ッけた氣で、すき自儘の勝手ばなし、微塵少しも諂エの無エ所が心證だ、それが面白くッて、おいら、時々吉原へいつて、其處此處の大妓を買エなじんで居るんだと旦那のおはなし、そ

れだから此の丁山のおいらんが、いくら氣を揉んで尋常エのお客の様に枕を交させようと思つても、そりや迚もむだの事ッた。

善孝　成るほど、こりやア頭のおつしやる通りでござエませう。私も去年から此通り御贔屓になりますがいつしか、一度もそんな事を拜見いたしませんよ。ねエ宗匠、お前さんもさうでごせエませう。

蛙吟　成るほどさうだねエ。併し引手あまたのもの言ふ花、それを手折らぬと云ふのは、アツ天下のむだだなア、のウ金太先生。

金太　またきまり言つて居らア。時に若梅さん、丁山さんの大妓とこへ、釣鐘庄兵衞と云ふ男が、此節客に成つて來るぢやア無エか？

若梅　アヽ、歸つて居さつしやりやア言ひますが、實はさうざますよ。それに附いて、もし差合ひでも無けりやアよいがと、大妓も氣にして居ますよ。

善孝　ナニ、曉雨旦那と釣鐘の親方とは、お突合は無い中だから、差合ひぢやアありませんが、若梅さん、御同前さまに、氣を附けて居にやア成りませんせ。

（トはなして居る所に、傾城丁山（部屋着）下手の奥より上草履にて出來り、直に上手に着座して。）

丁山　曉雨さんは、まだ來さつしやらないかねエ？

若梅　アイ、まだお湯に這入つてざます、呉竹さんとしのぶさんとが附いて居ますから、今にあがつて來さつしやりませうよ。

丁山　さうかい。（と若梅に囁けば）

若梅　（承知して）アヽ、それぢやアわちきは、釣鐘さんのお座敷へ……

丁山　アヽ、これ。（制すれば）

若梅　大妓へ、釣鐘さんの事は、みンなが知つて居なますよ。

丁山　オヤさうかへ、面目なうざますねエ。

（ト立上る。）（木の頭に此道具半廻しに成る。）

（此は前の部屋外、廊下の體にて前の下手の障子、今は上手に成りて、所々に釣行燈を掛けたり。）（道具止る。）

（上手より、前場の禿千鳥先に立ち、稻妻組の頭と立てられたる町奴の釣鐘庄兵衞、その子分撞木の權藏、鷲頭の龍太、突座の丸五郎、この三人附添ひて出來り、立止つて。）

權藏　エヽ、親方。今夜アどうなせエますな？

庄兵　どうすると云つて、別に面白エ趣向も無エから、見番の藝者でも呼上げて思ふさま騷ぐと仕ようか。

龍太　エヽ、それがようごせエませう。夫に就けても、親

方が買なじみの丁山が座敷に居るあの客は、……
丸五　當時世間に行の高エ、藏前の曉雨と云ふやつ、買掛りの張合から、それに引けを取つた日にやア、
三人　親方、顔が立ちますめエせ。
庄兵　知つて居るよ。おれがする樣に、任せて置けよ。
權藏　おやと云ッて、あの曉雨が……
庄兵　エ、煩せエ、默つて見て居ろエ。
（ト叱り附けて立止り、少し思案してぞ居たりける。）
（此時廊下づたひに（向う揚幕より）禿しのぶ先にたち、藏前の侠客大口屋曉雨（どてら浴衣襲ね）新造吳竹附添ひ出來り、歩みながら。（花道にて。）
曉雨　ア、好い湯であつた。思はず長ッ風呂を仕て居たので、さぞ待ちくたびれたらうね。
しのぶ　イエ／＼、待ちくたびれは致しません。
吳竹　だが、おいらんが、きつう待つて居なますから、早うお出なましな。
曉雨　ム、部屋へいつて一服のまうか。
（ト此方（舞臺）に歩み來るを見て。庄兵衛は子分に目附で知らせ、曉雨の前に立塞がる。曉雨左によければ、左により、右によくれば、右に寄る。曉雨も立止れば。庄兵衛は睨め付けて。）
庄兵　エ、何を仕やがる。盲ぢやアあるめエし、此の廣い廊下の中で、何で人の邪魔を仕やがるんだい。
（ト喧嘩を賣りに掛れば。）
曉雨　こりやアお邪魔を致して相濟みません。眞ッ平御免なせエまし。
庄兵　氣を附けやがれ。（子分に向ひて。）エ、間拔な野郎ぢやアねエか。ワハ、、、ハ
（ト子分と倶によろしく嘲り笑ひながら（下手）へ入る。曉雨は平氣にて上手の障子に入る）（道具戻る。）
（金太郎はやつきと成つて、廊下の外に出掛んとするを。曉雨は止めて。）
曉雨　金太どこへ往くのだ？
金太　かの釣鐘めが旦那の事を、
曉雨　なんと云はうが構ふものか。
金太　デモ盲だの間拔だのとぬかしやがつて……
曉雨　エ、何とでも言はせて置けエ。二階廊下のはした喧嘩、それを買ふ樣な曉雨ぢやア無エワ。是非とも又買はにやア成らねエ喧嘩なら、手前にやア賴まねエよ。
金太　だッて、見す／＼お前さんに詫らせて……
曉雨　ハテ人に突當つて詫言いふのはあたりまへ、それに何も不思議はありやア仕ねエよ。
（ト金太を制して座に就く。此時丁山も（下手より）出來りて。）

丁山　曉雨さん、良いお湯ざましたねエ。

曉雨　思はぬ長湯で、皆も待遠であつたらう。宗匠も善孝も、遠慮なしに飲んで居なすッたか？

蛙吟　御遠慮なしに頂戴いたしして、

善孝　この通り、大醉で御座いまする。

（此時下手より撞木の權藏（付髷）若いもの喜助に酒肴を持たせて出來り、曉雨の前に差出し、慇懃に兩手をつかへて、）

權藏　御免下せエまし。わつちやア釣鐘庄兵衞の子分、撞木の權藏と申すものでごぜエます。親分庄兵衞申しますには、唯今あれなる廊下で、曉雨さまとも存じませず、失禮な事を申上げ、甚以て相濟みませぬ、そのお詫かたがた名代としてわつちを差出し、粗末な酒肴、御受納を願エます、附ましてはお近付に成りたうごぜエますが、此お座敷へ上りましても、お差支はごぜエませんか、御返詞をお願エ申上げまする。

金太　そんなら釣鐘庄兵衞が、詫言いつて此座敷へ……

曉雨　エ、喧しい。……イヤナニ權藏殿とやら、お使から御苦勞で御座います。庄兵衞殿へ御返詞には、唯今は廊下にて此曉雨が思はぬ失禮、それに却て其方から御挨拶では痛み入ります、御持參の酒肴頂戴いたす譯はなけれど折角のお心入、わざと受納いたしますれば、お禮は此方より改めて申入ませう、但し此座敷へ御入來の儀は、當方にて迷惑いたせば、お斷り申します。遊女屋の二階、遊興の場所、互に知つて知らぬ顔、近附せぬが遊びの花、其中、折があつたなら、お近附にも成りませうと、宜しく云つて下つせエな。

權兵　御返詞は慥に承知いたしました。それぢやア、こな樣はどうあつても、

丁山　釣鐘さんに、今此でお近附には、

雨人　なりませんか？

曉雨　いかにも近附に成るのは、まア止に仕ようよ。

權藏　お前エさんが、否とお言ひなさりやア、話しはそれまで、何も釣鐘親分が、達てお近附になりてエと、無理から望んだ譯でも無エが、併し曉雨さん、それぢやア達衆の顔を潰す樣なものぢやアごぜエませんか？

曉雨　これは仕たり、權藏殿とやら、釣鐘の庄兵衞殿は、音に聞えた達衆であらうが、此曉雨は堅氣の商人、町人の隱居、男も賣らねば立入れもせぬうぶの素人、遊興の席ゆゑに、お近附は御免なせエと斷るのに、何の仔細もありやア仕まい、庄兵衞殿の氣に障らぬやう、こなさんからよく云ッて貰ひませう。イヤ態々のお使、御苦勞さまでごぜエました。

（ト一寸挨拶して話し切れば、權藏も心得て。）

権蔵　よく分りました。それぢやア御口上の通り、親分へ、申聞けるでござエませう。イヤ大きにお邪魔を致しました、どれお暇を致しませう。

曉雨　御免なせエ。

(ト挨拶すれば。権蔵も皆々へ會釋して去る。(下手の奥には入る)丁山は曉雨の所為に落意せねば。)

丁山　曉雨さん。主やアなんだツて庄兵衛さんが逢はうと云ふのを。斷りなんした？　廓の立入れ貰ひ引、ひけを取らぬが男の意地、其男が頭をさげ、わざ／＼よこした使の挨拶、それを斷り、近附を否ぢやと云ッた其時は、モシ曉雨さん、主の顔は是ッきり、五丁町ではすたりんしたよ。

金太　旦那。お顔がすたると聞いた日にやア、お否であらうが、かの庄兵衛と……

曉雨　エヽ又口出しをするのかへ、煩せエぢやア無いか、おれが事はおれに任せて、打ッ遣ッて置いてくれい。

丁山　デモ曉雨さん、此噂が聞えりやア、主は庄兵衛さんを怖がつて、尻込さんしたと、みンなのものに笑はれますぞえ。

善孝　モシ大妓、お詞の中で、御座いますが此噂が聞えたとて、旦那の事は五丁町で、笑ふ者は御座いませんよ。

丁山　サア笑はぬに仕た所が、不斷からして男を賣り、負けるが嫌ひの庄兵衛さんどうした事やら今夜に限り、粹を通したあの使、それを否と言はんしちやア、主が却てきやほんにおなりんすが、口惜うござりますソ。

曉雨　好いやね、野暮だらうが臆病だらうが、おめエの知つた事ぢやア無エよ。

丁山　ぢやア、主やア庄兵衛さんが怖いのざますネ？

曉雨　ム、怖いとも／＼、釣鐘庄兵衛は、おいらア怖くてならねエよ。

(ト聽くも言ふも煩さければ、鼻の先であしらつて居る。丁山は、曉雨があまり意氣地が無いのと、平氣で居るのに、愛想が盡きたるか、少々腹立の體に成つて。)

丁山　それぢアどうなりとも、主の氣任せにお仕なまし。わちきア、あッちの座敷にいきますぞへ。

(トつんと立ち、呉竹千鳥を引連て、奥(下手)に入る。皆々は氣を揉む。曉雨は思ひ出したと云ふ體にて。)

曉雨　オヽ金太、貴様はな、大儀でも是から家へ歸ッて、

(と金太に囁けば)

金太　承知しました。それぢア明日の朝、小揚の頭を使に立て……

曉雨　コレ靜にせい。だが、つかひ物は達筆に持たせてやるのだぜ。

金太　その代りに、庄兵衛なんかとお突合は、真平だと斷

るのでごぜエますね？
暁雨　ム、さうだ。
金太　分りやした。
暁雨　分つたら、早くいけ。
金太　承知でごぜエます。（と立掛れば）
蛙吟　シテ僕等（ぼくども）は進退いかが仕りませうな？
暁雨　宗匠は善孝と一所に、大島屋へ引下り、一杯のんで待ツて居なせエ。わしも程なく、出掛ようから。
善孝　それぢやア、御贔屓の夕次を呼びにやつて、置きませうか？
暁雨　また引過の静かな所で、編笠でもうたる氣だな。ハ、、、
蛙吟　それぢやア善孝子、
善孝　御一所に出掛ませうか。旦那御免を蒙りまして、一足お先に。
兩人　參りまする。
（ト、挨拶して金太郎と倶（とも）に去る。（向うに入る）あとは暁雨一人に成りて。）
暁雨　キツと静かに成つた、ヤレ／＼さう／＼しい事であつた。そりやア宜いは、明日は芭蕉庵の例會、頼まれて居た跋書を、持たせてやらねば成るまいが、
（ト棚の硯箱を取出して序文の草稿を認むる。）（此時下座の獨吟に成る。）
ハウタ〽待乳（まつち）しづんで。梢乘りこむ山谷ぶね。土手の合傘。かた身ばかりの夕時雨。君と思へば逢はぬむかしがましぞかし、どうして今夜はござんした。さういふお聲を聞きにきた。
暁雨　ア、好い聲だ。節廻しが、めつぽうに甘いが。ハ、ア廷（つぶ）しんだな。
（ト草稿を書きながら聞いて居る。）
（此時引込新造お鶴は。（振袖）病人の體にて（下手より）出來り、障子の外より小さな聲にて。）
お鶴　呉竹さん／＼。呉竹さんは居なますか？
暁雨　呉竹さんは此に居ないが、誰だへ？
お鶴　オヤ暁雨さんざますか。（と障子を明くれば）
暁雨　マアお鶴さんか。まアおは入ンなせエ、
（ト優しく言て、招き入るれば。お鶴は着座して。）
お鶴　暁雨さん、お久しうざます。相替（あいかは）らず御盛んで……
暁雨　オ、お鶴さん。久しく逢はなかつたが。ひどいやつれやうだ。お前が病氣だとは、聞いて居たが。是程のこととは思はなかつた　シテどこに寢て居なさるね？
お鶴　外に寢る所はありませんから、爛部屋に伏せつて居

ますソ。

曉雨　さうかへ。それで誰が看病をして呉れるのだへ？夫からしてお醫者は何と仰しやつたね？

お鶴　お醫者樣は、家に來さつしやる岡野さんで、寒さを引込んだのだから、しつかり養生を仕なければ、癒らぬとおいひなんした。夫で精出してお藥を戴いて居りますけれど、看病だつて、誰も身にしみて仕てくれる人はありやア仕ませんよ。それだから時々二階に上つて來て、吳竹さんに、何やかや、內證の事を賴むのざます。

曉雨　それで丁山はお前の世話を親切に仕てくれるかい？

お鶴　アイ、大妓(おいらん)だつて、いつも客人でいそがしうざますから、わちきたちの事までは……

（ト口にこもりて、あらはには言はず。曉雨はそれと悟りて。）

曉雨　さうだらうよ。あの女は俳諧も一寸出來て浮世話も面白いやうではあるが、思ひの外に不人情な質(たち)だから、碌々世話も仕てやるまい。それぢやア朝晩の事にも、困るだらうねエ？

お鶴　ナーニ、そりやア大妓(おいらん)が附いて居なますから、困る理はありませんが……

曉雨　所が、さういかないから、矢つぱり困るだらうよ。

（トお鶴の容體を見て）こりやアひどい瘦せやうだ、かういふ病氣にやア、お藥も忘つちやア不可ないが、何でも身體の養ひに成つて、精分の附く物を、せい出してたべにやア、お藥が利かないよ。それで、どんな物をたべて居なさるね？

お鶴　サアお醫者樣も、其やうにおいひでござんすが。わちきたちぢやア、さうは出來ないのでありますソ。

曉雨　アツ、成るほど、まだお客にも出ぬ振袖では、さうであらうよ。

（ト不憫の思ひをなし、紙入の金子を殘らず取出し、紙に包みて。）

曉雨　お鶴さん、生憎と今持合せた金子が、たつた參兩、餘まり少ないが、こりや余(わし)がお前への病氣見舞。これで何なりと買つて、養生を仕なせエな。

（ト手に渡せば、お鶴は其包を押戻して。）

お鶴　曉雨さん、おまはんの御親切は身に餘るほど嬉しいけれど、わちきやア、此の大妓(おいらん)丁山さんのお世話になる引込新造、その新造が大妓の客人から、お金を貰つては、大妓に對して濟まぬ程に、戴く事は出來ませんソ。

曉雨　そりやアさうでもあらうが、折角出した病氣見舞、はね附るのはそつけ無いぜ。マア納めてお遣なせエな。

お鶴　有がたうは御座りまするが、どうぞ是だけは堪忍しておくんなまし。

曉雨　ぢやア此曉雨が氣に入らぬから、突返すのだなア？

お鶴　さうぢやア有りませんが、緣もゆかりも無いお方から、お貰ひ申すが否でござますから。

曉雨　ハヽヽア緣もゆかりも有るぢやア無いか。余が丁山の客で、お前が丁山の座敷で、世話に成つて居なさりやア、まんざら見ず知らずの中ではあるまいがなア。

お鶴　さう云はれると困りますれエ。……それぢやア曉雨さん、其のお金をお鶴の病氣見舞にやつてくれいと、大夫に渡しておくんなまし。大夫の手から下さるなら、私も有がたう戴きますでござんしよう。

曉雨　成ほど、お前は、武家育ちだと聞いて居たが、堅過ぎるにも程があるせ。是が指南とか武指南とか纏つた金子なら、表から丁山に渡して病氣見舞と云つても宜いが、高の知れた貳両か參両のはした金、なまじい人に知れた日には、お前ばかりか第一は此曉雨がしみつたれで恥かしい。人間と云ふものは、堅いばかりが能ぢやア無い、人の情の裏底を、汲んで知るのが誠の附合、お前がいま突戻した其金子、まさか余が引込ます理にも往かなからう。ぢやに由つてお鶴さん、色氣をはなれて僅の見舞、まア納めてお置きなせエ。

（ト說得して、金子の包をお鶴が手に、無理に渡せば。）

お鶴　それ程までに仰しやるのを、戻しましては、御親切にそむく道理、曉雨さん、有がたう戴いて置きまする。しかし此事を大夫だけには、話して置いてもようざんすか？

曉雨　イヤ丁山に知らせるのは、止しに仕なせエ。不斷から、して疑ひ深いあの丁山乙ゥ勘ぐつて、をかしく思ふと却て迷惑。それに僅な金子の病氣見舞。丁山はじめみんなの者に沙汰なしに仕ておくんなせエ。

お鶴　それぢやア默つて居りませう。曉雨さんありがたう存じまする。

（此時廊下にて人の足音聞ゆれば。）

曉雨　お鶴さん誰か來た樣だせ。兩人が差向ひで居て、變に思はれちやア詰らねエ。サア早く下へ往きなせエ。

お鶴　さうざますねエ。それぢや曉雨さん、御ゆつくりと、おしげりなんし。

曉雨　わたし一人でか、ワハヽヽハ

お鶴　オホヽヽヽホ

（ト笑ひてお鶴は此座を去る。）（下手には入る。）

（此時丁山先に立ち、釣鐘庄兵衛、權藏、龍太、丸五郎、若梅、吳竹、千鳥、しのぶ打揃ひて、ドヤ／＼と（下手より）出來りて。）

丁山　サア釣鐘さん。わちきの座敷、遠慮はない程に、おは入りなまし。

庄兵　それぢやア、おいらん、御免なせエ。

(ト皆々入る。丁山は曉雨を見て、わざと驚いたる振にて。)

丁山　オヤ曉雨さん。おまはんまだ居なましたか。わちきやアまた、先に皆をつれて、大島屋へ往なんしたと思つたゆゑ、外の客衆をお連申して……マアどう仕ませうねエ。

(トわざと當惑の體をすれば。)

曉雨　ナーニ、少しも構つた事は無い。わしも今丁度仲の町へ往かうと思つて、煙草入を仕舞つた所よ。

(ト煙草入を仕まひ立掛れば。)

庄兵　アイヤ曉雨どん、少し待つて貰ひませう。先きこの權藏を使に立て、わざ／＼とお近附になりてエと申入れたに、をかしな返詞。この釣鐘と一座して、酒くみ代すが否ぢやときつと言はつしやるのか？

曉雨　これは仕たり釣鐘どんとやら、庄兵衛どんとやら、先きも返詞を仕た通り人目づゝみの編笠に、通ひくるわの樂みは、しつぽり濡るゝ夜の雨、互に憚かる屏風の背戸、それを破つて逢はうとは、粋な男のせぬ事ゆゑ、機があつたら其時にお近附にもなりませうが、此で逢ふのは御免なせエと、斷つたが分らねエのか？

庄兵　サア其斷りが氣に食はねエ。男が一旦近附にならうと云つたを斷られちやア、此釣鐘の顔が立たぬワ。

曉雨　ハテどうしたもので御座エますな、否と云ふのを無理無體、往生づくめの得心は、色男には似合はねエぜ、互に思ひ思はれて、積るなじみに打解けて、語るが誠の深い中、わしが代りに丁山と、ゆツくり話してお居でなせエ。

(ト戯談にまぎらして、庄兵衛を丁山の側につきやりて、歸り掛るを見て、權藏はじめ立上ッて。)

權藏　此奴ア、口に關所が無エと思つて、ベラ／＼と饒舌ちらし、親方を馬鹿に仕やがるなア、改めて近附の盃しねエ其内は、一寸でも此座敷、立たせる事は、

皆々　成らねエぞ。

(ト取卷く。曉雨は平然として。)

曉雨　エ、何で大聲を出すのだい。貴様たちの相手に成るやうな曉雨ぢやア無エぞ。達て止めだて仕やがると、冥土の席へ鞍替させるぞ。

(トキッと睨めば。此勢に恐れて皆々脇へ寄る。庄兵衛は默つて居る丁山は曉雨の側に來りて。)

丁山　そんなら曉雨さん。どうあつてもいになますか？

曉雨　「いなうとも止めうとも、何でもわごりよの御ばからひと、言うては小腰にとりついて」ワハヽヽヽヽハ。

(ト狂言小唄をうたひ、小舞のふりを一寸見せて笑ふ(是を木の頭にて)庄兵衛無念のこなし、其他皆々意外の思ひをなす。)

―― 拍木幕 ――

第三幕

一　阿部川町浪宅の場

享保十六年正月三十日の夜

阿部川町今西玄之進が(浪宅四間の所常足の二重)後は西教寺境内の卵塔場の三昧にて。一方(上手)には損じたる竹垣に出入の木戸を設け。一方(下手)には疎なる杉の生墻にて境なす。正面(上手寄)一間の所に中塗の壁ありて、其前の刀掛には大小を懸け、其側の古机には硯箱を置き、一間貳枚の破襖(出入口)を建て汚れたる薄縁を敷き、破れ行燈に灯火を點け、下手(横)には雨戸を建て、上手(横)には破れ障子を建てたり。正面には濡縁を附け。根ッ子の沓脱あり。(幕明く)

此に旗本天野民部(報負の父)が家來片山又四郎齋藤孫市三浦大次郎三木喜右衛門の四人。天野の紋付けたる提灯を携へ(天野の紋は丸の内に三蓋松)上下を見廻りて出來りて

又四　ヤア御苦勞で御座つた。表の方は何も別條は御座らぬかな?

孫市　左樣、表の方は何の仔細も御座らぬが、シテ裏の方は如何で御座るな?

大次　裏手の方は、西教寺の卵塔場は云ふに及ばず、庫裏の邊まで見廻つたれど

喜右　怪しき體は更に御座らぬ。

又四　左樣で御座るか。御同樣に御主人天野民部樣の仰を受け、既に去る廿六日より、今日まで五日の間、此通り

孫市　毎夜是なる今西玄之進方へ相詰めて、嚴しく警固を致して居れど、

大次　かの鶺鴒組の惡黨ばら、押寄せ参る景色も見えねば、

喜右　玄之進殿の言はるゝ通り、向島の意趣ばらしに、參る事は御座るまい。

又四　拙者とても其通りには存ずれども、相手は名におふ鶺鴒組、武家町人の差別なく、喧嘩をするのが彼等のつね。

孫市　もしも當家の老人に過ちあつては相成らぬ、用心せよと殿の嚴命、

大次　それ故にここ若殿にも、わざ〳〵お出張り相成つて、お詰なさるゝ今度の仕儀、

喜右　參るものなら早く參つてくれゝば宜いに、僕などは日頃の腕前、

又四　御同樣に武藝の手練、目にもの見せて、

四人　やり度う御座るなア。

（ト四人は互に力身ばなしなぞ仕て居る、此時襖の中に聲あつて。）

玄之　若殿、これへお越し下さりませい。

（ト案内して、今西玄之進（着流、無刀）先に立ち。天野靱負（羽織袴、提刀）その跡より、玄之進の妻お節（老けたる女房）附添ひ出來り、靱負を上座に居らすれば、又四郎等は、一同に敬禮して。）

又四　ハツ、若殿樣へ申上ます。當家の內外、唯今も篤と見廻り致せし所、

孫市　更に別條、

四人　御座りませぬ。

靱負　大儀であつた。猶念入れて警固をいたせ。

四人　畏ツて御座ります。

玄之　餘寒の折から、每夜の御警固御苦勞に存じまする。コリヤお節、各方へ澁茶なりとも差上げぬか。

お節　さうで御座ります、此寒いのに、皆樣もお大抵では御座りますまい。マアお手なとおあぶりなさいまし、唯今お茶を差上まする。

（ト火鉢を持出し、土瓶に茶を入るゝ。）

又四　アイヤ御內室、かならずお構ひ下さるな、咽が乾けば御勝手へ罷越し、自由に頂戴いたすで御座る。

玄之　時に若殿、唯今もあれなる一間で申せし如く、御父上民部樣の思し召、有がたうは御座れども、每夜々々の御警固は、玄之進身に取つて、心苦しう御座りますれば、達て御辭退申上ます。

靱負　アイヤ、其儀は斟酌かならず御無用。相手は多勢の鶺鴒組、世を憚からぬあばれもの、もしも貴殿の身の上に、過ちある其時は、我等親子が相濟まねば、警固いたすは當然。お心置なく御遠慮なされて宜しう御座らう。

玄之　まだ〳〵左樣に仰あるか。向島にて喧嘩の折から、計らずも行合せ、御加勢したは手前が物好、其爲に此如く、御苦勞掛くるは甚だ不本意。その上にまた鶺鴒組のあばれもの、既に今日まで五日の間、押寄せて參らねば、最早懸念は御座りませぬ、よし又押寄せ參つた所が、高の知れたる小普請御家人町奴のならずもの、病みほうけても玄之進、唔々打たれも致しませぬ。どうか今夜は若殿にも御一同を御つれあつて、御引上を願ひまする。

靱負　先程よりして其御遠慮承はつては御座れども、引上げたる其跡で、若もの事のある時は、天野民部の武士がすたる。夫ぢやに依ツて用心あしき當所を立のき、拙者屋敷へ御入りあれと、達て申すを御聞入これなくて、其まゝ是に御座あるゆゑ、五日はおろか十日一月、此ほとぼりのさむるまで、御警固いたし申さねば、親子の一分相立ちませぬ。

玄之　是は仕たり、靱負樣。拙者を御警固下さらねば、天野樣の武士がすたると御意あるならば、其御警固を受けましては、此玄之進も武士がすたる。御父上は、其昔し劍道出會の好みを以て、拙者が今の浪々を氣の毒なりと思召し、御合力下されうとの御親切、それを御辭退いたしまするは、敢て此意地では御座りませぬ。故主水野隼人正殿の御不行跡を褒ひし條り、御家督讓りの內評議、もれて受けたる此身の不興、その後、主家は御沒落、孤忠を守る玄之進、今日に相成つて、天野樣より、御合力を受けましては、心の操が貫きませぬ。其上に今度の一條、かく御警固を蒙ッては、鶺鴒組に恐れをなし、天野樣を頼んだと、相手の奴等に笑はれては、故主の名までも穢すの恐れ、此通の次第ゆゑ、達てお引上を願ひまする。

靱負　御尤もの御心底。然らば其旨一應父上へ申上げ、御承知あつた其上で……

玄之　アイヤ其儀は昨日民部樣、お忍びにてお人のをり、篤と申上げ置きまして御座りまする。

又四　では御座らうが。主人よりして引上の指圖なき其內は、……

玄之　お引上は下さらぬか？

四人　いかにも左樣。

玄之　然らば是非が御座らぬ。玄之進、明日とも云はず、唯今、當所を立のき宿替いたす。

お節　ハテさて、又しても性急な言掛り。御親切な天野さまのお詞に從うて、今夜だけはお警固をお願ひしたが、宜しからうと思ひまする。

玄之　ヤア其方までが左樣な事を申し居るか、御警固に預かつては、此玄之進の武士がすたり、故主隼人正樣の御恥辱にまで相成る次第。それが其方に分らぬか。

お節　成るほど、さう云はつしやれば其樣なもの。……イヤ申し若殿さま、お聞の通りの次第から、それに又常からして心を極て言出したら、一かな引かぬ玄之進の氣質。御迷惑では御座りませうが、どうぞお引取を願ひまする。

靱負　イヤ迷惑は少しも御座らぬが、不用心なる此お住居。……

玄之　ハテ生死は人の運次第。運强ければ敵勢に取卷かれても、命は助かる。運盡きる其時は、金城鐵壁ありとても、其身は必ず亡ぶる道理。此あばら屋の不用心が、運をためすに屈竟。サア直さまお引上げ下さりませい。

靱負　ぢやと申して、唯今直には……

玄之　お引上げなさらずば、玄之進、直に此屋を立退きませうか？

靱負　サアそれは。

玄之　お引上ゲ下さるか？

靭負　サアそれは。
玄之　若殿ナゼお引上げはなされませぬな？
（ト決心の體を見せて迫れば。負靭は據なく、）
靭負　左程までに仰の上は、強ひて申すは却て不禮。然らば余し家來等を召連れて、お暇いたさんが、何とやら今夜の氣掛り。
玄之　ナニお氣掛りは御座りませぬ。夜の深けぬうち少しも早う、御歸館なされて下さりませい。それ御一同お供の御用意、……
（ト頻りにせき立る。靭負は行燈のあかりを見て、小首を傾けて。）
靭負　左様におせきなさらずとも、歸宅いたすで御座らうが、此燈火の薄暗く、しかも光を失ふは、もしや貴殿のお身の上？
又四　凶事の兆で
皆々　御座るまいか？
玄之　（行燈を見て）ワハヽヽハ燈心に丁子がつけば、行燈はいつでも暗く成りますもの（行燈を掻立て）それ御覽じろ、此通り。左様な迷は女子供の申すこと、武士に於ては恥づべき沙汰。サア御歸館下さりませ。
靭負　然らば玄之進殿、お暇申す。お内方、お世話に預りました。

玄之　御親切の御警固、民部様へ宜しき様、仰せ上げられ下さりませ。御一同にも御苦勞の段、忝なう存じまする。
お節　若殿さま、御一同様、有がたう存じ上げまする。
四人　今西殿、お暇仕りまする。
（各々暇の挨拶あつて、心を殘して去る。（上手の木戸へ入る）玄之進は跡を見送つて。）
玄之　天野殿の人々が、引上げてくれたので、ヤツと心が休まつた。今夜から落々とゆツくり寢られて有がたい。
お節（不審顔して）お前さまの心底が、どうも私に分りませぬ。天野様御親子の御深切、御自分ゆゑとは云ひながら、大抵の心づかひ、それをあの様に斷らしやツたは一體どうした理で御座りますなア？
玄之　マヽ其不審は尤至極。先日向島にて助けた若衆。天野民部殿の子息靭負殿と、聞いてびツくり、此身の當惑。天野民部殿と申すは小川町に御座る四千石のお旗本、故主水野隼人正様とは遠縁のお間から、殊に劍道では度々お出會申した御方。
お節　それぢやア、お前さまも、御懇意の御方。何も當惑はありますまいに？
玄之　イヽヤさうで無い。思ひ廻せば十餘年の其昔し、先君水野隼人正様、營中にて御亂心、お小サ刀を拔かせられ、常々意趣ある方々を、あびせ掛けての御刃傷、寄附〳

人もなかりしに、ヤア不埒たり隼人殿と聲掛けながら、むんづと組み、押伏せたるは即ち其日の御當番、天野民部殿、それさへ無くば先君は猶思ふさま斬散し、其場で立派に御切腹もありつらんに、押へられたる御無念は、如何ばかりでおはしたらん。其民部殿親子の家に、聊なりとも扶けては、故主へ對して本意で無い。夫故にこそあの難に、もぎだうに斷つたが、天野殿には玄之進を堅意地の義理知らずと、下墨で御座るであらうが、武士の操で是非が無いワ。

お節　成ほど、さう云ふ理(わけ)で御座つたかいのウ。そんなら其様に初から、打明けて言はつしやればよかつたらうに。

玄之　侍同士の應對に、左様な事が云はれるものか。それは偖措、娘のお鶴、去年の冬、おれが病氣の最中に、旗本屋敷へ御奉公に遣したが、また宿下りを致さぬかな？

お節　お前さま、宿下りは三月ときまつて居る。それにまた番町の小出様は、取分け堅きお屋敷ゆゑ、宿元からして迎ひに行き、お願を致さねば、一日たりとも町中へ、お出しにならぬが掟とやら。

玄之　屋敷の掟はさう無くては叶はぬもの。併し手紙の便が疎遠であるのは、どうしたものだな？

お節　サア今西玄之進が娘と云つて奉公させるは、此方の恥、家主殿を宿に頼み假親しての御奉公、それで手紙のやり取も、さう自由にはなりませぬわいのウ。

玄之　何(なに)さま、そりやアさうであらう。同じお旗本でも、小出様は八千石の御大身。支度とても無い事ゆゑ、さぞやお鶴も朋輩中(なか)で、肩身が狭い事であらう。

お節　サア、わたしもそれで色々と考へて居りますが、お前様の御病氣が、すッかり直つた其上で、とッくりと相談を致しませうわいのウ。

玄之　ハヽヽハ又御相談か、それもゆッくり聞くと致さう。イヤ思ひ出した、今日は藥を朝一度呑んだばかり、寝る前にもう一服呑まねば成るまい。お節、大儀であらうが、煎じてくれぬか？

お節　そのお藥は、此通り、日の暮まへに煎じて置きました。ドレ暖めて上げませうか。

（と藥土瓶を火鉢に掛くる。玄之進は机の上の本を取出して行燈の前で讀んで居る。此時木戸（上手）の外にて逸見鐵心齋の子分、山猿の赤蔵、猪熊の荒七狂犬の武者平、餘の無垢助の四人は騒廻ッて。）

赤蔵　ヤア泥棒だ〳〵。早くつかまへてくれい、〳〵。

荒七　それ向うの方に走つていつたぞ、

武者　ヤア屋根傳に逃げていつたぜ、

無垢　卵塔場に逃げ込んだぜ、

四人　早くつかめェておくんなせェ。

（ト頻りに騒ぎ廻れば。）

玄之　ナニ泥棒が逃げ込んだと？

（ト刀掛の刀を取つて、立上れば、お節は行燈を持つて一所に緣先に出づる、此時下手の杉墻の中にて。）

赤藏　それそこの墻根の方に逃げていつたぜ。

荒七　そッちの方を追掛けてくれい。

（ト叫び足音をさせて馳せ廻れば。玄之進は下手を見て。）

玄之　ハテ怪からぬ騒ぎ。お節、その光を此方の方へ向けてくれい。

（ト刀を携へて、庭先（舞臺）に下り、墻根（下手）の方へゆく。お節は行燈を出して。）

お節　お前さま、怪我を仕ては成りませぬぞ。

玄之　ナニ大丈夫だ。

（ト墻根に寄添ひて卵塔場を覗く。此前より逸見鐵心齋は墻根の間に忍び居て、槍をしごき、横合より不意に玄之進の脇腹を突く。玄之進は突かれながら其槍を握つて。）

玄之　ヤア何奴なれば卑怯未練のだまし討……

鐵心　向島にて喧嘩の遺恨、覺えて居るか。

玄之　ム、扨こそおのれは鶺鴒組の……（槍を突きのけ手負ひながら刀をぬく）

お節　（此體をすかし見て）なんとなされましたなア？

（ト氣遣ひ、庭先（舞臺）に下りやうとする。此時上手より礫を打ち、行燈を打消すと同時に、赤藏等四人拔きつれて入來り、お節をめつた切りに斫る。お節は叫びながら死ぬる。）

（此方には逸見鐵心齋と玄之進は激しく戰ふ。）（知らせ無しに此道具半廻りに成る。）

二　卵塔場欺討の場

此は西敎寺本堂の後にて（本舞臺一面の平舞臺、前場にて下手に見たる杉の生墻、今は上手になる。）所々に石塔ありて、其間には松杉等の立樹あり。（正面の奥には西敎寺本堂後を見する）

折柄（道具止れば）鐵心齋は槍、玄之進は刀にて（上手より）出で來り必死に成つて戰ふ。鐵心齋の門弟入谷丹五郎根岸松兵衞田畑彌九郎各々刀を拔いて構へ、鐵心齋が危く成るを見て、助太刀に出で、前後左右より斫り付くる。玄之進痛手にてよろめきながら、四人を相手に烈しく戰ひ、終に斫り倒さるゝ。鐵心齋は留めを刺して

鐵心　ヤツ思つたよりは骨が折れた。

丹五　是と申すも先生の、

松兵　御手練すぐれたお槍先、
彌九　今に初めぬ御武勇は、
三人　恐れ入つて御座りまする。
鐵心　イヤ是で漸と腹がいえた。（此前より赤藏等四人も此所に來て居たるが、鐵心齋は四人に向ひて）シテ家內の奴ばらは。
赤藏　家內とては女房一人、
荒七　見事に仕止めて、
皆々　御座りまする。
鐵心　ム、それで安心。
（此時上手の奥にて多勢の人聲にて。）
多勢　今西どの。玄之進どの〳〵。
（ト呼ぶ。是を聞て、鐵心齋、それと指圖して、一同本堂の傍に忍び入る。）（此道具知らせなしに原へ戻る。）
（天野の家來片山又四郎齋藤孫市は提灯を持て先に立ち、天野民部（羽織袴大小）奴の黑內附添ひ出來りて。）
民部　玄之進殿は、いづくに御座る。天野民部、わざ〳〵出掛けて迎ひに參つた。
又四　今西どの、〳〵。
孫市　御出會召されぬか？
（ト呼びながら見廻し、お節の死骸を見て。）

又四　ヤアこりや是今西殿の御家內なるが、
孫市　無慙に殺され仆れしは、
（ト打驚けば。天野民部は立寄つて。）
民部　ム、こりや多勢の刀にて、疊み掛けたる許多の疵所、……それに又こゝ等の血汐。玄之進の身の上心許ない、あれなる墓所を見分いたせ。
兩人　畏りました。
（ト卯塔場の方へ（下手）急ぎゆく。）
民部　黑內。其方は當所の家主五人組の者共に、此由急ぎ告げ知らせ、早々是へ同道いたせ。
黑內　畏りました。
（ト木戸（上手）の外にゆく。引違へて、又四郎孫市は、玄之進の死骸を兩人にて擔ぎ來りて。）
又四　殿樣。玄之進殿には此通り、
孫市　あれなる墓所のたゞ中にて、
又四　無慘の最期を遂げられて、
兩人　御座りまする。
民部　ナニ玄之進にも無慘の最期を致せしとな？（玄之進の死骸を見て）扨こそ鵜飼組の奴原が擊し討には致せしよな。斯と察じて此民部、わざ〳〵迎ひに參つたのに、時刻後れて夫婦の横死、殘念な事を致したなア。
（ト打嘆き兩人に指圖して、玄之進お節の死骸を家の

内に（二重）入れさせ、民部は椽に腰を掛けて居る。）

（此時、奴黒内先に立ち、阿部川町の家主作兵衛、五人組いもの辰藏巳之助馬吉横次郎猿八、連立ちて（上手より）出で來り、庭先（平舞臺）に坐りて。）

作兵　ヘイ當阿部川町家主作兵衛に御座いまする。お召に付きまして五人組同道いたし、

六人　罷出でまして御座りまする

民部　自分事は天野民部。今西玄之進へ所用あつて、唯今是へ參りし所、玄之進夫婦には、不慮の横死、委細は家來共より承はり、早々奉行所へ申立て檢死の手續いたしてよからう。尤も葬送其外萬端は、此方にて致す程に、家來等へ申談じ、不都合なき樣取計らへ。

作兵　畏りまして御座りまする。

辰藏　エヽそれおやア玄之進さん夫婦の事は、

巳之　人手に掛つて死なれましたか？

馬吉　道理こそ今しがた、泥棒だ〳〵と、

横次　大騒ぎをした聲が、此方の方で聞えましたが、

猿八　それおやア其時、泥棒が寄つてたかつてお二人を、

五人　殺したので御座いましたか、

（ト驚いて、作兵衛と倶に死骸を見て、殘念の思ひを成す。）

民部　コリヤ〳〵家主。シテ今西玄之進には、伜も娘も、子供は一人も無いのであつたか？

作兵　ハイ伜は玄太郎と申して、十歳で御座いましたが。昨年相果てまして御座りまする。

民部　ム、伜は死んだが、娘は無いか？

作兵　ヘイ娘はお梅と申して、當年十六歳で御座りまする。

民部　その娘は何れに居るな？

作兵　ヘイ奉公に參つて居りまする。

民部　どれへ奉公に參つて居るか？

作兵　ヘイ其儀は少々申上げ兼ねまするで御座りまする。

（ト頭を掻いて、もぢ〳〵仕て居るを見て、民部はじれ込んで。）

民部　何れに居るか。早く申せ。

作兵　實はさる御殿へ參つて居りまするが……

民部　何れの御殿でや、

作兵　サア其御殿が、

（ト猶も言ひ兼ねれば、民部が頻るせき込めるを見て傍より。）

丹五　早く其御殿の名を言はつせエ。

孫市　言ひにくい事は御座るまいが。

作兵　其御殿と申しまするは、

五人組　吉原御殿で御座いまする。

民部　ナニ吉原御殿と？　スリヤ遊女奉公いたして居ると

な？
皆々　左様に御座いまする。
民部　ム、はてさて氣の毒至極……こりや家主、玄之進夫婦の横死、その娘かたへ告げ知らせい。
作兵　委細承知いたしました。
民部　しかと其旨申し付けたぞ。
作兵　へー。
民部　それに付けても娘の身の上……コリヤ黒内、其方は明朝にも、我屋敷へ出入なす大口屋曉雨かたへ罷越し、委細を話して同道いたせ。
黒内　畏りました、曉雨へ話し召連れまするで御座いませう。
（此時民部はつかつかと杉垣の邊にゆきて、垣根に落ちたる槍の穂を取上げ、黒内が差出したる箱提灯を左の手に取つて是を見て。）
民部　こりや是、佐分流の槍の穂……
（ト不審する。此時邊見鐵心齋は、下手の杉垣の内より、顏を半あらはして。）
鐵心　エイ
（ト手裏劍を打てば、民部は早く身を外し、箱提灯にて受止めて。）（木の頭）
民部　ハテ怪しからぬ。
（ト手裏劍を拔取る。）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　――拍子幕――
つなぎにて直に引返す

二　松葉屋内證折檻の場

享保十六年亥辛二月朔日の午後

但見る（本舞臺一面の平舞臺）正面（向う）三間の所は、四枚建の唐紙、時雨に松の繪（出入）其他に根岸の壁、座敷の三方は板廊下（舞臺の前つら一間通り、下手は附際の邊までに折廻してぬめを通し、ぬめの中は座敷の心にて薄縁を敷詰め、其外は廊下の心なれば下手は此ぬめに並びて横に唐紙を一枚たて置き。下手は板羽目の張物にて圍ふ）是ぞ新吉原の遊女屋松葉屋の内證と知られたり。

此に松葉屋の傾城丁山は座敷に居り、遣手のお熊は、引込新造のお鶴を、しごきにて後手に縛り、長煙管を手に持ち、目前に金子の包を置き、板廊下（舞臺の前づら）にて折檻して居る。（幕明く）

お熊　サアお鶴さん、お金の出處をお云ひなせエ。是ほど責めても云はなけりやア旦那さんへ言ひ立つて、炭部屋へつれてゆき、つるし上げても言はせますよ。
お鶴　こればッかりは、堪忍しておくんなんし、なんでわ

ちきが枕さがしや盜みを致しんせう、出處は正しいこのお金。

丁山　ム、出處が正しいお金なら、誰さんに借りたとか貰つたとか、お前なぜ其通り立派には言ひなませぬ。サア其出處を此でちやんとおいひなまし。

お鶴　サア其出處を言つてよいなら、此苦みをせぬ中に、お熊どんに言ひますが、必ずいふな、言ふまいと、誓うた詞があるゆゑに、聞かずと許しておくんなまし。

丁山　そりや出來ない、お鶴さん、お前が客衆を取る身なら、貰うたお金も有るだらうが、まだ振袖の引込衆、お客に貰うたはずは無い。小遣が無いならばナゼおいらん斯斯と、わちきに咄は仕ないのざます。瘦せても枯ても松葉屋の丁山、仕掛をまげても見繕いであげるわちきが心。それにお前が其お金をどうして持つて居ますか。貰うたなら誰さんにどうして貰ひ受けましたと、立派に此でお云ひなまし。

お鶴　それぱッかりは言ふ事は、堪忍しておくんなまし。

丁山　言はなけりやアお鶴さん、お前はお客の枕搜しをしなましたねエ。

お鶴　なんでさもしい枕搜しを致しませう。

丁山　仕なけりアちやんとお言ひなんし。丁山の座敷で世話して居るお鶴さん、泥棒したと云はれちやア、お前ばかりか、わちきまで曉に立つのが苦しうざます。サアさつぱりと、盜んだら盜んだとお云ひなまし。

お鶴　盜んだのではありませんが、貰うた先を云ふだけは、どうぞ聞かずにおくんなまし。

丁山　エ、是ほどなんどり、わちきが聞くのに、白狀せぬのは、ム、こりや矢ッぱり泥棒さしなんしたのだねエ？

お鶴　イエ／＼何といつても、盜んだのではありませぬ。

丁山（立腹して聲荒らげ）エ、いけ强情なお鶴さん。お熊どん、此上は思ふさま痛い目させて、責問しておくんなまし。

お熊　さうで御座いますよ、こんな强情者は、ひどい責に掛けなけりや、本統の事は云はぬもの。サアお鶴さん、有體にお言ひなさい、言はなけりや、かうするよ。

（ト長烟管にて打つ。）

お鶴　ヒー痛いよ／＼。お熊どん痛いから、堪忍しておくんなまし。

お熊　痛けりやア、お金の出處をお云ひなせエ。

（ト身體をつねり打ち擲けば。お鶴はヒー／＼と啼き叫ぶ。此時松葉屋の亭主與兵衞は奧より出で來り、此體を見て打驚き、お熊が持つたる烟管を取上げて、ハタと睨みて。）

與兵　オイお熊。同じ遊女屋でも、余が家は松葉屋といふ

大籬、大妓樂は云ふに及ばず、新造禿に至るまで、打ちちやう擲をせぬが家風。夫に此お鶴、どんな悪イ事があつたか知らぬが、可哀想に、病みほうけて居る者を、縛り上げてこの折檻、コレお熊、チョン／＼格子のはした女郎と、振袖とは譯が違ふぜ大儀にして置いてくれい。

お熊　モシ旦那さん。大妓がたを預つて居る其中は、遣手だけの勤向。否でもせにア成りません。まだ客人に出た事も無いお鶴さん、一歩は疎か、小粒一ツあらう筈が御座いません、夫が三兩と云ふお金をば、持つて居るのが怪しい詮議、丁山さんの大妓が與れさつしやつたと云ふでは無し、貰つたお金と云ひますから、そりや誰にと尋ねりやア、名前は云へぬと白狀せず、てツきりこりやア枕捜し。松葉屋のお二階に泥棒をする引込さん、夫こそ曖昧の疵と云ふもの。是だから否な役だが、旦那さん、丁山さんに相談して、ぶち折檻を仕て居ますよ。

與兵　ム、。シテ丁山、お前にも其金の出處は、知れて居ないと云ふのかね？

丁山　とんとわちきもあたりが附かず。外の事なら兎も角も、わちきが座敷で世話する振袖、枕捜しがあつた日にやア、二階の迷惑わちきの恥、それでお熊どんに相談して、尋ねて居るのでござんす。

與兵　そりやア又變つたはなし。併しお鶴に限ッちやア、盗み泥棒する樣な女で無いと、此おれが慥な證人。ナンノ客衆を取らぬ引込だッて、貰手もあれば與手もあるもの。エ、お鶴、丁山やお熊に言ひ惡けりやア、そッと余に云つたがよい、決して口外は仕ねエからよ。

（トやさしく尋ぬれば。）

お鶴　旦那さん、有がたう御座ります。如何にも客衆に貰うたお金、取つたでも盗んだでもありませんが、其客衆が此事を必ず人に言ふまいぞと、きつい口止め、それを云うては其お方へ濟まぬ程に、少しの間、云ふ事をお待ちなされて下さんせいなア。

與兵　ム、それぢやア、其客衆に、云うて宜いやら惡いやら、聞いて見た其上で返詞を仕ようと云ふのだなア……どうだ丁山、それで承知を仕てやんなせエな？

丁山　旦那さんが、それでよいとお云ひなさりやア、わちきやア別に構ふ事はありませんが、其代り今日ッきり、あの子の世話、わちきやアきつと斷りますぞえ。

與兵　そりやアお前の了簡次第。エ、お熊、それでお鶴の折檻を、許して遣つちやア、どうだらうな？

お熊　ハイ許すとも許さぬとも、そりやアあなたのお心まかせ。併し旦那さん、大妓がたの取締り、是から先きア氣を附ける事が、出來ませんよ。

與兵　さう云はれちやア余も困るが、お熊、どうすりやア

好いんだい？

お熊　旦那さんの御威光で、お金の出處を、此子に言はせておくんなさりやア、それで好いので御座いますよ、ネエ大妓さうぢやア御座いませんか？

丁山　さうざますよ、お鶴さんが持つて居た此お金、誰に貰つたか、どうして取つたか、それがさつぱり知れた上で、わちきが顔が立ちさへすりやア、好のざます。

與兵　ム、よく分つた。エ、お鶴、いま聞いての通りだが、お前が其出處を言はなかつた日にやア。此家の取締、一體への見せしめ、否でも酷い責に掛け痛い目させて言はせにやならぬ、それをさせるが余も否だ。人にやア決して言はねエ程に、余に内證で言ッてくれい。

（ト柔かに言へども。お鶴は只泣き入つて。）

お鶴　旦那さん、濟みませんが。是ばつかりは堪忍しておくんなんし。

（與兵衞は種々に尋ぬれども、お鶴は同じ事のみ言ひて更に出處を白狀せざれば、與兵衞も立腹の體にて、立ち上りて。）

與兵　（聲荒く）是ほど云ふのに白狀せぬとは、見掛に似合はぬ太エあまアだ。コリヤお熊、此上は仕方が無エ、痛い目させて言はせて仕まへ。

（ト言ひ捨てゝ奥に入る。お鶴は見送つて。）

お鶴　旦那さん、お腹の立つのは御尤、どうぞ許して下さりませ。

お熊　（丁山に向ひて）エ、おいらん。旦那さんだつて、此お子のいけッぷてエのにやア、呆れ切つてあの腹たち。かうなりやア今一息、ひどい目に逢はせて責めまするが、可で御座いませうねエ？

丁山　可とも〳〵。思ふさま、痛い目に逢はせ、白狀させておくんなまし。ほんとに呆れ返つた餓鬼ざますねエ。ドレ奥へいつて、旦那さんへ相談して來ませうか。

（トお鶴を尻目に掛けて、奥に入る。跡はお熊とお鶴の兩人に成つて、お熊は再び煙管を取上げて。）

お熊　サアお鶴さん、是からはお前とわたしと根くらべだ。旦那さんも承知の上は、わたしの腕のつゞくだけ、ぶつてぶつてぶちのめし、何でもお金の出處を言はせなけりやア、役目が立たねエ。覺悟を極めてお居でなさいよ。

お鶴　たとひ打たゝかれても是ばかりはお熊どん、堪忍しておくんなまし。

（ト泣入るを。お熊は煙管を振上げて再び烈しく折檻すれば、お鶴は痛みに堪へかねて。ヒー〳〵と泣叫ぶ。）

（此時曉雨はお鶴が泣叫ぶ聲を聞き附けて（向うより）出で來り、花道にて）此體を見るより。）

曉雨　お熊、まて。

（ト障子を明けて座敷に無造作に來れば、お熊は會釋して。）

お熊　オヤ、よくおいでなさいました藏前の旦那。

お鶴　ヤア曉雨さん、どうして此へは？

曉雨　お前、なんでお鶴を打ちたゝきするのだい。

（トお熊が煙管を取つたる手をおさへ上ぐれば。）

お熊　ハイお鶴さんが、枕捜しの泥棒で御座いますから、仕置をするので御座いますよ。

曉雨　ナニお鶴が泥棒だと？　ふざけた事を致かしやがるな。（トお熊の手をみな取つて引きよせながら、奥へ向きて）オイ亭主は居ねェか。與兵衛どんは居ねェのか？

與兵　（襖の中にて）ハイ亭主の與兵衛は此に居りますが、お呼びなすつたは、どなたで御座います？（言ひながら、丁山附添ひ出來りて）ヤアあなたは藏前の旦那さま。

丁山　オヤ曉雨さんで御座んしたか、どうして此へは來なましたねエ？

與兵　何か二階でおいらん衆が、旦那樣へ不調法でも御座いましたか。なにを子供の事で御座いますれば、幾重にも御勘辨を願ひ上げまする。

（ト案じ顔して頭を下げて詫言すれば。）

曉雨　ハヽヽ、與兵衛どん、何もさう謝るにやア及ばねエ。誰も二階で不調法を仕たものもなし、且また有つた所が、それを彼是言ひ出して、内證へごだツる曉雨ぢやア無いから、安心して居るが可よ。余がいま此へ來たのは、此お鶴の一件だが、今も今とて二階で聞きやア、客人の金を盗んだとか、枕捜しを仕たとか云ふ噂。一體マアどうした譯だ。ネ？　余が方にも打明けて話してエ事もあるが、一通り聞かしておくんなせエな。

與兵　ナニお鶴の一件と申しまするのは、實は斯樣で御座いまする。御存知の通り振袖の引込新造、またお客に出るでは無し、萬事はすべて丁山の世話になる部屋持り。それが三兩と云ふお金をば、持つて居たのが不審の起り。

丁山　わちきが遣つたと云ふでは無し、外にくれた人は無し、お金を持つて居る筈が無い。それでお熊どんが、不思議に思つてわちきに尋ね、相談の上でお金の出處を聞いて居る所でございますよ。

お熊　旦那マアお聞きなさいまし。此お鶴さんがね、昨日の朝、一歩と云ふお金を出して、禿に渡し、買物にやる所を、ちらりと見たゆゑ氣に掛り、夫から詮議を仕て見れば、店の若どんを使にたのみ、二兩のお金を阿部川町の親元へ、送ッて遣つた證據が上り。其お金の出處を、いくら尋ねて見ましても、ある客衆に貰ひましたと云ッたばかり。

丁山　お前にお金をくれたお客衆は、誰ざます、お云ひなんしと尋ねても、其客衆のお名前は、どうあつても云ふ

事が出來ませんときつい強情。
曉雨　ム、分ッた。それで與兵衛どんは、お鶴が盜み泥棒を仕たのであらうと云ふのだなア？
與兵　サア餘人は知らず、此お鶴に限ッては、そんな事を決してせぬ女だから、貰つたお金に相違はあるまい。夫にお鶴が申すには、其くれた客人に、一應聞いて見た上で、お名前を云ひませう、夫まで待つて下されと、達ッての頼み。
お熊　所がそりやアある手管、それに乘るやうなお熊ぢやア御座いません。外の事なら兎も角も、三兩でもお金はお金、その出處が知れませんぢやア濟みますまい。
曉雨　それで打折檻して責め尋ね、言はなけりやア、泥棒したと極めるのだね？
お熊　エマアさうで御座いますね。
曉雨　與兵衛どん、お鶴は扨々感心な妓で御座るなウ。一歩金で三兩の金子、あの妓にやつた客と云ふのは、誰でも無い、此曉雨で御座るわい。
與兵　へー。それではお鶴にお金を下すつた客衆と云ふのは、
丁山　主さんでござんしたか？
（ト皆々驚きて。）
與兵　そりや又どう云ふわけで？
曉雨　その譯はゆッくりと話さうが、マアお鶴の繩を解いて下ッし。
與兵　承知いたしました。（お鶴の繩を解く）
曉雨　お鶴さん。ナゼ余(わし)に貰ッたと、早く言ッて仕舞はなかつた、詰らねェ事を隱して居て、酷い目に逢ひなすッたねェ。
お鶴　さうとは存じましたなれど、おいらん初に此事を、誰にもいふなと、主さんがきつう口止しなましたゆゑ、つい強情をはり通し、……旦那さんお許しなすつておくんなまし。
與兵　なんの詫るにも及ばぬ事だ。そこで旦那さま、其お金の仔細と云ふのは、
丁山　どうした事でござんすか？
曉雨　與兵衛どんも、おいらんも、聞いて下ッし。あのお鶴の物言ひから立居振舞天晴の育ち振。親御は誰か知ねェが、是程の人がらで、苦界に其身を沈むるとは、よくよくの事であらうと、色氣なしの不便が起り、折ふし聞いた身の上ばなし、殊に病氣の不自由を、見兼て進ぜた見舞の三兩、それも中々受取らず、是非にと言ふなら丁山に聞いた上での事に仕ようと、何處までも侍堅氣、僅か計りのはした金麗々と言はれちやア此方の恥だ、默ッて受けて置きなせェと、無理に渡した此金子。仔細と云ふの

は此通りだ。是で疑ひは霽れたらうね
與兵　アッ厚い思召で下すッたお金、お鶴が何と聞かれても、言はなかつた次第も分り是で疑は霽れました。旦那さま、有がたう御座います。おいらんお禮を云つておくんなせエな。
丁山　曉雨さん、お鶴さんへきつい信切、嬉しうざます。
（ト口には云へど丁山は心中稍々嫉妬の思ひをなし、且は間の惡いので乙につんとして居る。お熊は居たたまらず。）
お熊　お鶴さんのあかりが立つたら、私は御用濟、どりや二階へ參りませう。藏前の旦那、御ゆるりとなさいまし。
曉雨　ハヽヽア お熊。乙う世詞を云ふぜ。併しおれに掴まれて痛かつたらうが、勘辨してくれい。（懷中より金子を出し紙に包みて投げ出し）こりやア詫り賃だ。
お熊　ありがたう御座います。こんな事なら幾度でも宜しう御座いますホヽヽホ。
（ト世辭笑ひをなし、金子を戴き、奥（上手）に入る、曉雨は懷中より水引を掛たる目錄包を取出して、丁山に向ひて。）
曉雨　おいらん。お鶴が神妙な心掛け、余もひどく感心したゆゑ、お前にも篤と話し、親許へも見續がせようと、此通り、包んで來た十五兩、改めて當人へ取次いでやつておくんなせエ。
（ト出せば。丁山は益々不機嫌にて。）
丁山　有がたうざますが、わちきの座敷で世話する振袖。主さんからお金を貰ふわけがありません。
（ト突き戻すを止めて。）
與兵　イヽヤおいらん、さうで無い。常不斷おいらん衆が伽羅の無心と事變り、親へ貢の思召し、こんな餘いお金は無い。モシ旦那さま、此お金は與兵衞が慥にお預りを致しまして、お鶴の許へ、きつと屆けて遣はしまする。お鶴、よくお禮をおいひなせエ。
お鶴　曉雨さん、段々の御親切、何とお禮を申さうやら、
兩人　有がたう御座りまする。
曉雨　まづこれで事濟みだ、是から二階で一杯飲まう。おいらんもお鶴さんもおいでなせエ。（と皆々立ちに掛る）
葛城　（向う揚幕の内にて）　曉雨さん、少し待つて下さんせいなア。
曉雨　あの聲は、
丁山　葛城さん。
（ト元の座に就く。茲に（向うより）松葉屋の傾城葛城（部屋着上草履）番頭新造豐花、新造葉山。禿うれび。芳野附添ひ、銚子盃を持たせ出で來り（花道に）立ち止れば。）

曉雨　余を呼び止めたは、おいらんで御座ェましたか？

葛城　アイわちきで御座んす、親方さんも御免なまし（と舞臺に來り、曉雨の前に坐りて）曉雨さん、樣子はみんな聞きました。餘り心の優しさに、嬉しいあまり葛城が、持たせて來た此盃、一口のんでおくんなまし。（と盃を取上げて曉雨に差して）曉雨さん、よう參兩のお金、お鶴さんに遣つて下さんした。此里の習ひ、千兩の無心、貳千兩の身受、その全盛の取沙汰は珍らしうも無いけれど、信實こもつた情の見舞、聞いて淚の零るゝは、五丁町はじまつて恐らく今までござんすまい。僅參兩と云ひなますが、情の重みは百萬兩。曉雨さんも、よく遣りなました、お鶴さんも、よくお貰ひなさんした、夫を嬉しいと思はねば、女郎冥加に盡きますぞえ。誰に貰うたどうしたとお熊どんに責められても、命に掛けて言はなかつた、強さ、えらさ、夫でこそ本當のおいらん。モシ旦那さん、お目出度う存じます。サア曉雨さん、其お盃、祝うてわちきの親方へ差して下さんせ。

（ト曉雨は盃を與兵衛に差して、葛城に向ひ。）

曉雨　おいらん、よく祝つて下すつた。それで余の實意も知れ、お鶴の顏も立ち、こんな嬉しい事は無いぜ。

與兵　大きに左樣で御座いまする。

（ト返盃する。此時幇間善孝は鳶の金太郎および奴の黑內となを伴ひて急ぎ出で來り、曉雨に向ひて。）

善孝　モシ旦那、急に頭がお宅から驅け付けておいでなさいました。

曉雨　ム、さうか。金太、何か急用でも出來たのか。ヤア黑內さん、お出でなせエまし。

金太　ヘイ只今しがた、小川町の天野樣から、黑內さんが急ぎのお使。

曉雨　黑內さん何の御用で御座いますね？

黑內　その御用は人中で……

曉雨　さうで御座いますか。それぢやアあちらで篤くりと承はりませうか、

（ト金太郎黑內を引きつれて奥に入る。跡に葛城は丁山に杯を差して。）

葛城　モシ丁山さん、常から立派な俠客、まだ其上に此やうな情深い曉雨さん、それを馴染の客人に取つて居さんすお前の手柄、羨ましうござんすぞえ。

（丁山は是にて再び嫉妬の念ひを起して。）

丁山　成ほど、曉雨さんのなされ方、親切ではござんせうが、わちきに內證で見舞のお金、其內裏をさがしたら、どんな理があるかも知れぬ。今時の引込みさん、仲々油斷は出來ませんよ。

葛城　是は仕たり丁山さん。女嫌ひの曉雨さん、そんな嫌

らしい處置ぶりが、あらう理はありますまい。それを乙に絓ぐるのは、お前の邪推と云ふものでござます。

丁山　オヤ葛城さん、お前は曉雨さんの肩を持ち、わちきを邪推とおいひなますは、ム、分つた。扨はお前は、曉雨さんに疾から岡惚したゆゑに、氣があつての事ざますねエ。

葛城　こりやをかしい丁山さん。人中で口きくなら、相手をよく見てきゝなまし、痩せても枯れても松葉屋の葛城、達入の意地づくでは、否な客にも比翼こそ枕並ぶる事もあらうが、是まで唯の一度でも、人の客衆に指一ッ差した事はござんせぬ、それにお前は此大勢の眞中で、わちきが疾から、曉雨さんに氣があつて、岡惚したといひなました。サア其いひわけを今此で立派に言つておくんなまし。

（ト氣色を變へて詰め掛れば。丁山も膝立て直して。）

丁山　アイ言ひやんした、お前が慥に其氣があるゆゑ、さうだやと言ッた事どうさんす。たとひお職さんをは内々で、曉雨さんが、なぐさましッたに違ひは無いと言うた所が、わちきのお客にわちきの嫉妬、なにもお前が構ッた事はこッちすまい、夫に何ぞや、女郎ひの曉雨さん、そんな客らしい處置振があらう理が無い、お前の邪推と云ふものだと、人から頼まれもせぬ差出し詞。こりやア葛城さん、的きり曉雨に頼まれて、お前さんの肩持か、さうで無いなら、曉雨さんに氣があつての手管であらうと、云うたはわちきの誤ではあるまいと思ひますねエ。

葛城　ホヽヽヽ面白い丁山さんの喧嘩買。なんぼお前が釣鐘さんのお仕込でも筋の違ッた押賣は、餘所へいつてお仕なまし、お職さんの煩ひを不便に思つた曉雨さん、情ない心意氣、察して見れば涙が出るほど優しい深切。宜う遣つてくんなまし、宜う言はずに居なましたと、褒めたはわちきが當然、全體ならお前が手をつき、お禮をいつてよい所、それに引かへ不足らしい燒餅詞、馬鹿々々しいぢやアありイせんか。

（トやり附くれば。丁山は急腹に成つて。）

丁山　さういひなんすりやもう了簡が……

（ト立ち掛るを。與兵衛止めて。）

與兵　これさ丁山、何をするのだえ。先つきから聞いて居たが、思はぬ二人の言ひ争ひ、少しお前の口が過ぎる。ナント善孝、貴公もさうは思はねエかなう？

善孝　さうで御座いますねエ。こりやア丁山さんのおいらんが、お宜しく無いやうで御座いますね。

（丁山は猶も悔しけれど、わざと氣を入替へて。）

丁山　成ほど、何にもわちきが悪うざました、お職さんを疑ぐッたも、葛城さんに狂ッて掛つて言ひ過ぎたも、みンなわちきが淺果ゆゑ今改めて詫ります、堪忍しておくんなまし。

葛城　さうおまはんの心が解けりやア、わちきもそれで氣が濟めば、詫る事はありませんよ。

丁山　そこで葛城さん、わちきがお前に一ツのお頼み、どうか聞き入れておくんなましな。

葛城　わちきに頼みと言ひなますは？

丁山　外でもありイせんが、お前が今も譽めそやした曉雨さん、わちきの樣な張も意氣地も無い者の客衆にするのは不釣合、それに又立派な育ちのお鶴さん、わちきぢや世話も出來ぬに由つて、今日限り手を引いて、わちきの方から斷ります、是から先は葛城さん、どうなりと宜いやうに、お二人さんを扱つて捌を附けておくんなまし。

善孝　おいらん、そりやア可けますまい。さうなつた日にや猶更以てもの事に角が立ちます。

豐花　唯このまゝに此事は、原の通りに仕た方が、宜からうと、

兩人　存じまする。

（ト慰むる。與兵衛はお鶴と兩人にて此場の仕宜いかが成る事かと案じて居る。葛城は平氣にて。）

葛城　ホヽヽヽヽホ丁山さんと仕た事が、改まつての切口上「曉雨さんやお鶴さんの扱ひは、おいらん、どうぞ機嫌を直し、原の通りにお仕なんし」と言つたら都合がよからうが、頼まれて見りやこの葛城、立派に承知しやんした、何にもわちきが引受けませう。併し今言つた詞もあれば、釋迦一代曉雨さんをわちきの客衆にや仕ませんが、今夜からして改めてお鶴さんの客人にわちきが頼んで仕ますぞえ。お鶴さんも又わちきが世話して、隨分派手に三月から、仲の町へ突き出して、太夫職にする程に、安心してお居でなまし。

（ト立派に返答すれば。丁山は、愈々心に怒りを含みて。）

丁山　ハテ口麗い葛城さん。見事さうして見せなますか？

葛城　丁山さん、御念には及びませんよ。

與兵　ムヽ、それで話はさつぱり極つた。丁山も、もう言ひ分はあるまいから、早う二階へ行つたがよからう。

丁山　アイ往けと云ふなら往きますが、旦那さんも、大そう葛城さんの肩を持ち、わちきの顏を潰しなますねエ。

與兵　何も潰す事はありやア仕ねエよ。原はと云へばお前の心のひがみから……

丁山　何がひがみでござんすえ……

（ト此度は與兵衛に狂ッて掛る。此時丁山の禿吳羽は向うより出で來りて。）

吳羽　おいらんへ、あの釣鐘さんが來なましたぞえ。

與兵　ナニ釣鐘の親方がお出でなすつたと。サアおいらん、早く顏を出したがいゝぜ。善孝お前そこまで、おいらん

を見て上げてくんなせエ。

善孝　畏まりました。サアおいらん、お座敷の外までお供を致しませう。

（ト勧むれば。丁山は是を汐に立上つて、）

丁山　どれ釣鐘さんに逢つて來よう。

（ト善孝、禿、附添つて向うには入る。入違ひて曉雨は、黒内、金太郎を連れて奥より出で來りて。）

曉雨　それぢやア余は是から直に黒内さんと御一所に天野様へ往くと仕よう。お寺の方から總べての事は、……

金太　萬事わつちが老父と兩人で、御指圖通りに仕て置きますから、安心しておいでなせエまし。

曉雨　ム、萬端ぬかりの無い樣に、……

金太　承知しました。皆さん御免なせエ。

（ト急ぎ向うに入る。）

與兵　旦那さま。どなたか御不幸で御座いますか？

曉雨　ナーニお屋敷の折口よ。

葛城　曉雨さん。委細の事は聞きなましたか？

曉雨　話を仕ながら聞いて居たが、おいらんの達引、忝なうございますぜ。……時にお鶴、お前の家から急の使は來なかつたか？

お鶴　イ、エ使も何も來ませんが。なぜざますねエ？

曉雨　ハテ使の來ない筈は無いが。（不審する。）

（此時若もの喜助、急ぎ（下手より）來りて一寸一禮して、手紙をお鶴に渡して。）

喜助　ヘイお鶴さん、お宿から急のお使、お目に懸り度いと待つて居ますぜ。

（ト言ひ捨て直に（下手に）引戻す。お鶴は手紙を披見し、恟りして。）

お鶴　エヽ、それでは昨夜、父さんも、母さんも、人手に掛つて……

（ト血相を變へ狂氣の如くに成つて立上る、曉雨は引留めて。）

曉雨　その變事は浮ツかり世間へ言はれぬ事。余も其事をたツた今お屋敷からのお知らせで、聞いてびつくり仕た所だ。

葛城　エヽ、そんならお鶴さんの兩親が、

與兵　變死を仕たと云ふ知らせか？

（ト皆々驚き、お鶴は泣入る。）

曉雨　お鶴さん、泣いて居る所で無い。使に逢ツて内々で、篤と様子を聞きなせエ。與兵衛どん、世話をして下つせエな。

與兵　承知しました。サアお鶴、余と一所に使に逢つて、委細の様子を聞くと仕ようぜ。

（ト立上れば、お鶴は泣きながら無念の色をなして。）

お鶴　何故なれば、やみ／＼とわが父母を殺せしか。女でこそあれ親の敵。

（ト無念の思ひをなす。）

曉雨　（立上りて）それでは直にお屋敷へ參つて、御用を願はうか。

葛城　此上ともに曉雨さん、お鶴さんの力に成つて……

曉雨　ム、町人なれど曉雨の曉雨だ、（葛城が持出したる脇差を取つて差すなかの頭）安心しておいでなせエ。

（ト、黑內を連れて（附際へ）ゆき掛る。葛城は見送る。お鶴は泣き入る。與兵衛は介抱する。）

――拍子幕――

第四幕

一　新吉原揚屋宿談之場

享保十六年辛亥三月廿日の夕方

此は新吉原の揚屋森田屋の奥座敷（本舞臺四間常足の二重。）三方は折廻して緣側（下手の緣に猶廻つて表（下手）に續く（出入）。座敷（二重）の正面上手の一間は塗壁にて下地窓を附け。其次の二間は四枚建の襖（出入）其次の一間は塗壁なり。庭（平舞臺）の上手は板塀に切戸を設け（出入）。下手は袖塀にて見切り。沓拔飛石などありて、下手には鐵の大燈籠をすゑたり。此に仲居お仙（年增）お豐（島田）煙草盆座蒲團を並べて居る（幕明く）

お仙　お豐どん。今日は鶺鴒組の逸見さんがお出でに成るはず、それで松葉屋の薄雲さんが、仕舞になつてあるゆゑ、もう入らツしやる時刻だぞえ。

お豐　オヤさうですか。道理でさツき松葉屋の若どんが、お客樣はまだお越になりませんかと、聞きに來ましたよ。

お仙　さうかえ。あたりまへのお客なら始末が宜いが、人も吞おる鶺鴒組、その上に少しの事が間違ツても、それをとッこに、ものいひ附け、喧嘩を仕掛る逸見さん、あの御連中には困り切るねエ。

お豐　ほんたうにさうですよ。其上に薄雲さんは突出しの初日から、曉雨さんの初馴染、

お仙　さうさ。お鶴さんと云ッて引込の時分から、葛城さんが世話をして、曉雨さんの相方と約束きめた譯ある中、それをあの髭面の逸見さんが、いくら呼んで口說いても、靡く事はあるまいよ。

お豐　それを知らずに今日も亦、薄雲さんを呼び出すとは

お仙　馬鹿げきつた事だねエ。

兩人　ハヽヽヽハヽ。

（ト笑ひながら噂を仕て居る。此時奧より仲居お吉（島

田）出で來りて。）

お吉　お客さまでございますよ。

お仙　お客さまはどなた？

お吉　[illegible]の逸見様

お豐　オヤ噂をすれば影とやら、

お仙　うつかり噂に出來ないねエ　サアお吉どん、お客様をおつれ申しな。

お吉　アイ〳〵

（ト奥に入る。お仙、お豐は上手に客席を設くる、此時正面より逸見鐵心齋（大小仕込衣裳）先に立ち、入谷竹之助、根岸松兵衛、相並び出來りて、着座すれば。）

お仙　逸見さま、入らッしやいまし。

お豐　いつも御機嫌で、

兩人　お目出度うございまする。

鐵心　ヤアお仙にお豐か、相變らず美しいのウ。

丹五　それゆゑ先生、その筈で御座りますわ、此節は浮氣のせゐか二人とも、

松兵　此節お仙が出來て、大うかれで御座りまする。

鐵心　ハヽヽ、二人とも地色が出來て、浮かれて居るか、それやすお[illegible]だ、それで其色男は何者だ？

お仙　アノ噂で御座いますよ、どうして〳〵私ども見た様なお顏に、地色なんぞが、

兩人　出來ますものでは御座いませんよ。

鐵心　イヤ〳〵さうで無い、二人とも揃ひに揃ッて器量はよし、愛嬌はあるし、誰が見ても唯は置かぬワ。

お豐　そりや旦那、薄雲さんのおいらんの事で御座いませう。

お仙　さうとも〳〵、旦那のお目には、外の女は入りア仕ないよ。

丹五　如何にもさうだ、薄雲には、先生のきつい惚やう、

松兵　刀に掛けても言ふ事を、聞かせにや置かぬ御決心。

鐵心　兩人の申す通り、噂に越前の曉雨とやら、當時賣出しの俠客、その馴染と聞くからは、猶更以て此方が手活の花に致さねば、白柄大小神祇組、その面々へ聞えても、神祇組の名折れに成るわ、それは格別、薄雲はまだ參らぬかのウ？

お仙　お迎ひを出して御座いますれば、薄雲さんのおいらんも、

お豐　もう御出で御座りませう。

（此時仲居のお吉、下手緣側より出で來りて。）

お吉　お仙さん、おいらんが入らッしやいました。

（ト知らせて直に引返す。）

お仙　オヤ旦那、おいらんが入ッしやいまして御座いますよ。

（ト其座を設くる。此時下手緣側傳ひに松葉屋の傾城薄雲（伊達傾城の拵へ）番頭新造豐花。禿金彌附添ひ出で來れば。）

お仙　おいらん、お早う御座います。

お豐　こちらへ入らッしやいまし。

（ト丁寧に挨拶して着座させる。薄雲は氣に入らぬと云ふ體にて座に着き。）

薄雲　逸見さん、皆さん、よう來なましたねェ。

鐵心　ヤア薄雲、いつ見ても美しいが、今日は殊更あでやかあでやか。

丹五　誠に天女天降り、花ふる里へ御來臨、

松兵　歌舞の菩薩の御影向、

丹五　先生御恐悅に、

兩人　御座りまする。

鐵心　忝ない〳〵。こりや仲居等、薄雲へ杯を侑めてくれい。

お仙／お豐　畏りました。

（ト奥に入り。直にお吉と三人にて、酒肴および吸物膳を持出し、鐵心齋、薄雲、丹五郎、松兵衛の前に据ゑる。鐵心齋は盃を取上げて、）

鐵心　どれ我等毒味を致さう。（お仙の酌にて一杯を傾けて）サア薄雲、めで度う盃さゝう。

（ト出せば薄雲は一寸見て。）

薄雲　お盃は嬉しいが、わちきやア御酒はきらひざます。

鐵心　酒が嫌ひとあるならば、我等が助て遣はす程に、飲む眞似をして口を附やれ。

薄雲　助てもらふもきつう嫌ひ、マア堪忍しておくんなまし。

鐵心　ハテ扨夫はすげ無い挨拶。然らば盃だけでも受けてもらはう。

薄雲　サア其盃を受けるのが嫌ひゆゑ、……

鐵心　ム、それぢやア其方は身共が盃、受けるが否ぢやと申すのだなア？

薄雲　逸見さん、惡う思つておくんなますな

（トつんと仕て煙草を吸うて居る。鐵心齋はむつと仕て。）

鐵心　薄雲、けしからぬ其方が挨拶、この逸見鐵心齋がさした盃。受けぬと申すは？

（ト立腹の體を見て。）

豐花　ア、申し逸見さん、お差なされたお盃、受ける受けぬは客と情夫、我儘いふも口舌のたね、裏と表の仲の町。

お仙　其お心を推もじして、一寸お合を致しませう。

丹五　ム、成ほど。こりやあ其方たちが申す如く、口と心

の裏表、此節はやる小唄にも〽憎い〳〵は可愛の裏よ。

松兵　〽否ぢや〳〵は又その裏よ。泣いておどすは裏の裏。

豐花　その裏ふかい心の底、さう性急に開かんしても、言はぬが女郎の意地と張、

（ト薄雲に目くばせして其意を悟らすれば、薄雲もそれと覺りて。）

薄雲　ナント逸見さん、さうしたものぢや御座んせぬか。

（ト鐵心齋を秋波にて見れば、鐵心齋は少し機嫌を直して。）

鐵心　ム、何樣、薄雲が嫌ひの酒を、飲めと云つたは身共が不粋。然らば盃は致すまいが、煙草を一服吸付けてもらはうか。

（ト手を出せば、薄雲は手に持つたる煙管を見て。）

薄雲　逸見さん、お安い御用でござんすが、わちきが持つた此きせる、煙り淺間の薄雲なれど、心は深い雛鶴の、羽搔に包む思ひ草、人に許さぬ吸口は、誰があつらへの脂返し、……

鐵心　何と申す？

薄雲　ホヽヽヽ、お客に開いた煙管のはなし、堪忍しておくんなまし。

（ト煙管をわきに置く。鐵心齋又々むッとして。）

鐵心　煙草まで否ぢやと申すか？

お豐　これは仕たり、逸見さんの腹立上戸、何ぞと云へば、二言目には慳貪聲。マアよう思うてもお見なまし、此薄雲のおいらんは、花開きの突出しで、まだ一月も立たぬ勤め、言はゞ廓の蕾の花、この大勢の人中で、盃事や吸付煙草、いくら心に思うても、恥かしいのが初心のつね、主が堅いお武家でも、ちつとは其等を推量したがやうざますよ。

（ト慰むれば。鐵心齋は諾いて。）

鐵心　いはれて見ればさうでもあらうが。併し薄雲には、まだ突出しの其前から曉雨とやら云ふ馴染の客が……

お仙　ア、申し旦那、お客の名前はひどい禁句、知つても言はぬが粋の粋、

お豐　不斷の粋にも似合はぬ詮議、

お吉　お止になすつて、

三人　御座りませいなア。

鐵心　扨こそわいらア申合せ、粋ごかしで啗ませ、薄雲の肩を持ち居るな。イヤ其手は喰はねエ、ツベコベ言はずと、すつこんで居れエ。

丹五　兎かう云ふより一同が、此に居るのが戀路の邪魔、

松兵　此場を外し、表二階で一杯くまうか？

丹五　それがよからう。サア女ども我等と一緒に、

雨人　から參れ。

（ト豊花、金彌、仲居三人を引つぱれば。）

豊花　わたしや葛城さんの吩咐で、此おいらんの番頭新造、かた時そばを離れぬが、わたしの役でござんすぞえ。

金彌　わちきもおいらんに、お附申して居ますわいなア。

松兵　エヽ喧しい。サア參らぬか？

丹五　參れいと申すに。

お仙　ぢやと申して、おいらんお一人、

お豊　このお座敷へ、

丹五　其方等が存ぜぬ事だ。

松兵　きり／＼一緒に、

雨人　うせやがれ。

（ト五人をせき立て、手を取つて無理に連れて奥に入る。薄雲も是を見て。）

薄雲　そんならわちきも、

（ト立上るを、鐵心齋は裾を押へて。）

鐵心　こりや待て薄雲、

薄雲　何ぞ御用でござんすかえ。

鐵心　用があるから坐れと申すに（是にて薄雲再び着座する。鐵心齋は物和かに）コレ薄雲、強情も大概に致したが宜からうぜ。然も櫻の初紋日、その突出しの初日から、日毎に呼出す身共が眞實、いかに年端がゆかいでも、知らぬとは云はせぬぞ、併し長う短う云ふのは嫌ひだ、サア否か應か、二つに一つの返詞をいたせ。

薄雲　サア主の眞實、よう知つてをりますが、主が今も言はんした、曉雨さんと云ふ深い男のある身體、外のお客に逢ふ事は、否でござんす。

鐵心　言ふな薄雲。その曉雨は馴染の客でも、女に枕を交さぬと、誰も知つた變りもの、深い中とは言はせぬぞ、よし又深い中にもせよ、情を賣るが其方の勤め、優しく言へば附け上り、四の五の言つたを是迄は勘辨して居たれど、モウ此上は容赦いたさぬ、否と云はうが應と云はうが。揚代拂つた客の威光だ、從はせずに置くものか。

（ト引寄に掛れば。薄雲は其手を振拂つて。）

薄雲　こりや可笑い逸見さん、此薄雲と曉雨さんとの二人が中、枕交はすか、交さぬか、人目許さぬ閨の内、誰が知つて居りますかえ、深いも淺いも眞實神かけ深い中、並大抵では御座んせぬぞえ、それをば主が積合から、從へ靡けといはんしても、情は賣れど心まで、賣らぬが里の意氣地でござんす、見るから否な逸見さん、揚代拂うたお客の威光、見せらるゝなら見せなまし。テモ氣障な人さんで御座んすぞえのう。

（ト煙草を吹掛けて澄して居れば。鐵心齋は又々立腹して。）

鐵心　おのれ小女郎の分際で、おれに向つて其の悪態、
（ト立掛かる。此首より庭先（上手）の切戸を開けて、釣鐘庄兵衛は（伊達衣裳、一刀、尺八）顔を出して伺ひ居たるが、此時聲を掛けて。）
庄兵　逸見さん、マアお待なせエまし。
（ト飛石傳ひに出て來れば）
鐵心　ヤアそこへ來たのは釣鐘の庄兵衛どんか。サア此方へ這入りなせエ。
庄兵　御免なせエまし（庭先に入來り、縁に腰を掛けて、薄雲を見て）ヤア薄雲さん、モウ歸エんなさるのかね？
薄雲　サア釣鐘さん、今も今とて逸見さんが、わちきを捕へて、從へ靡けと言ひなんすゆゑ……
庄兵　（薄雲に目に知せて）それで氣合が悪いに出つて歸エり度いと云ふのなら。のウ逸見さん、遠慮なしに歸エれと云つておやんなせエまし。
（ト心ありげに云へば）
鐵心　歸り度いなら歸しも仕やうが……
庄兵　薄雲さん、此れ宜いから歸エんなせエ。
（是を汐に薄雲は立つて）
薄雲　逸見さん、それでは、わちきやア歸りますよ。釣鐘さん、ゆるりと話しておいでなまし。
（ト（唄に成つて）薄雲は飛傳ひに下手に入る。鐵心齋は見送つて、庄兵衛に向ひて。）
鐵心　釣鐘、なんで貴様は薄雲を歸したのだえ？
庄兵　逸見さん、おめエさんも、あんな子供をつかめエて、面白くもねエ無理口説、失禮ながら、人に知れると男の器量が下りますぜ、それで歸したのでごぜエます、そりやア格別、東屋まで御使で、達てわつちに逢度エとお前さんの口上は、どういふ御用で御座エますね？
鐵心　ム、折入つて鐵心齋、貴様に相談し度しと云ふは（あたりを見廻して）コウ釣鐘、兼て貴様に明した通り、此鐵心齋は敵持、ふとした喧嘩の遺恨から、岡部川町の浪宅で、討果したる一人の浪人、その浪人の娘と云ふのは慥にそれとは知れねども、薄雲ではあるまい歟と、推量ばかりか世間の噂、尤もおれが親の敵とは、夢以つて知らぬ様子、知つた所が高が女郎、恐ろしい事は少しも無いが、油斷のならぬはあの曉雨、去年から淺草で、人に知られた賣出し男、それが尻を押した日には、鐵心齋が身の大事、それ故にこそ曉雨めの、馴染と知つて薄雲に、強ひて逢はうと呼出すも、色に事よせ様子をさぐり、二つには曉雨めを遠ざけさせん深き計略。併し其計略が外れて見れば、釣鐘、この先の安心は、どうしたもので有らうかのう？
庄兵　初めて聞いた理由因縁。薄雲は女の事、恐ろしくも

怖くも無いが、何かに邪魔はあの曉雨、わつちも彼奴には遺恨のある中。よう御座エます、明日とも言はず今夜の中に、不意の喧嘩で彼奴が命を……

（ト耳に口よせ囁けば、鐵心齋は打諾きて。）

鐵心　仲の町にて喧嘩を仕掛け、仕損じたる其の時は、

庄兵　歸りを待伏せ大勢で……

鐵心　コレ。

（ト制して、再び庄兵衛に囁く。此時奥に人聲あつて。）

お仙　マアお待なさいまし。お光を持つて參りますから、

（ト言ひて、お仙、お豐燭臺を持出し、其後より丹五郎、松兵衛、大醉の體にて出で來り。）

丹五　イヤサ先生には先程よりして、薄雲とお差向ひ、

松兵　しつぽりのお長話し、餘り長いは御身の毒、

お豐　お邪魔いたしに、

四人　參りました。

（ト燭臺にてすかして見て。）

丹五　ヤア貴殿は釣鐘、

松兵／兩人　庄兵衛どの、

お仙　どうして此へは、

お豐／兩人　ござんした？

庄兵　薄雲の名代新造よ。どれお暇と致しませうか。

鐵心　そんなら釣鐘、

庄兵　逸見の先生、

鐵心　必ず手違ひ無い樣に……

庄兵　ヘエ承知でごぜエます。（庭に出て空を眺めて）マタばら／＼降つて來たぜ。

お仙　それぢやア親方、傘を上げませうか？

庄兵　ナーニ傘にやア及ばねエ、ついそこだから、

お仙　そこでもあらうが、親方を濡れさせては、

鐵心　丁山に濟まぬであらう。ワハヽヽヽハ

（ト笑ふ。此前にお豐は奥に入りて、直に紺蛇の目の傘を持出して。）

お豐　ヘイ親方お傘を、

（ト差出せば。）

庄兵　こりやア忝けねエ。

（ト請取つて、ポンと開き。）（木の頭）。

庄兵　一寸逢ッて來ませうか。

（ト鐵心齋と顔見合せて意中を示す。）

（此道具廻る）

二　同　仲の町喧嘩の場

中央より上手に掛けて仲の町引手茶屋和泉屋の店先

(四間常足の二重)を斜に見る。店(二重)の正面上手の二間は四枚建の障子にて、下手の二間より折曲りて塗壁これに花鳥の彩色繪を帶腰に張る。家體の上手は低塀にて見切り、下手少し斜に青竹の圍ひを廻らし、櫻の植込、花盛りにて、下には山吹海棠等の下草ありて、所々に雪洞を附けたり。家體と竹圍の間は横町にて此處には手桶を飾つたる天水桶を置き、其先は下手より奥に掛けて仲の町の景色(中遠見火入)茶屋の前(平舞臺)には床几二脚ほど並べたり。總て仲の町花盛り夜の體なり。

此に薄雲は床几(正面)に腰を掛け、番頭新造豐花、常の新造袖浦、禿金彌いろは左右に附添ひ、緣先には和泉屋の亭主新兵衞腰を掛け、下手には松葉屋の若い衆、薄雲の箱提灯と長柄の傘を持ち、新兵衞の側には、見番藝者お直、お愛立掛つて居る。(道具止る)

新兵衞は煙草盆を薄雲の前に出して

新兵　おいらん一服お上りなさいまし。

薄雲　ありがたうざます。

お直　おいらん、よい按排に雨も止みまして御座いますが、道が惡いので、道中はお困りで御座いませうねエ?

薄雲　ナニ森田屋から此までだから、近うざますよ。

お愛　森田屋のお客は、あのげぢ〳〵さんで御座いましたか?

豐花　お愛さん。あれだから、おいらんもきつう否がつて居なますよ。

新兵　げぢ〳〵さんとは、どなたの事だね。

袖浦　親方、知らッしゃらないの。それ鶺鴒組の逸見さんの事ざまさアねエ。

薄雲　これさ、お客の噂は外でせぬもの、そりやアさうと、曉雨さんは、もう來さつしやりさうなものざますねエ。

新兵　さうで御座います。もうお出でに成る時分、

お直　待つ身はほんに長いもの、

お愛　おいらんお察し、

皆々　申しまする。

(此時上手にて獨吟の唄聞ゆれば、薄雲は耳を濟まして。)

薄雲　オ、よい聲で、三味線もきつう巧いが、お直さん誰ざますねエ?

お直　左樣さ。唄はたしかに河東節の夕丈さんで御座いますが。三味線は、ハテナお愛さん、誰だらう?

お愛　あの撥音は、お綱さんらしいワ。

お直　さう〳〵、お綱さんに違ひ無い。二人ともに、

兩人　うまいねエ。

豐花　夕丈さんにお絹さんぢやア、巧いも道理、ことにあの唄は、

袖浦　おいらん、聞いて居て、よい心持で、

兩人　御座いませうねエ。

新兵　あの唄は、此節講者が皆唄うて、大そうはやるが、おいらんに理があるのかね？

お直　オヤ親方あの理を知らないの、そりやア驚いた、あの唄はね、大きいおいらんの葛城さんが、曉雨さんの事をほめて、お作りなすツた春雨傘と云ふ小唄。

お愛　それを夕丈さんが、節附をして唄ひ出したが初まりで、今ぢやア此の廓の藝人で、春雨傘を知らねものは、

兩人　ありませんよ。

○春雨傘

〽春雨に。なかばつぼめし。蛇の目の傘の。ぬしは誰かや舞鶴の。紋は誰かや。問はでも知れた曉の。雨に濡たる繻か。啼く音や聞かん。聞いたぞえ。〽主の情の悪の雨は。人の命のつなぎ緒や。三すぢの糸は細くとも。音色はゆかし忍び駒。男の中の男とは。優しい中のやさごころ。

（此獨吟の中、よき頭合に、向う（揚幕）より大口屋曉雨（銀針金のなまじめ、黒羽二重、紅裏、舞鶴の紋、淺黄無垢の下着、一刀、尺八、印籠、蛇の目の傘、桂の下駄）出で來り花道にて宜敷くありて、此方（舞臺）に來れば。）

薄雲　曉雨さん、

女皆々　おいでなさんしたか。

曉雨　これは〳〵、お揃ひでヱすな。

薄雲　サア此へ、

女皆々　おかけなさんせいなア。

曉雨　御免なせヱ。（縁臺に腰を掛け、薄雲が吸附けて出したる煙管を取つて喫ながら）おいらん。どこの歸りで御座ヱますな？

薄雲　森田座の歸りざんすが。曉雨さん、今日といふ今日、わちきもつく〴〵困り切りましたワ。ねヱ豐花さん、

豐花　さうざます。あんなに困らッしやッた事は、

袖浦　兩人　ありませんよ。

曉雨　ハ、、ハ、どうで廓は苦界だもの、客に困るはあづらしうもなんとも無い事、併し森田座の客衆と云ふは、おいらんの身には大事のお客、ういもつらいも出世のため、

（ト意あり氣に云へば、薄雲も思入れあつて。）

薄雲　心に願ふ大望を、遂する爲の手掛りに……

曉雨　これさ〳〵、薄雲と仕た事か、おれを相手に餘所ほかの、おのろけを受けさせるとは、そりやア餘りひどからうぜ。ハ、、、、ハ。

豐花　あれさ曉雨さん、おいらんは、のろけどころか、きつい難儀、

袖浦　歸つて居ながら、その樣にからかふのは、

兩人　罪ざますよ。

曉雨　ハ、、ハ、二人までが眞面目に成つて、言分をする中がをかしい。そんな事はどうでも宜いから、一杯のんで騷ぐと仕ようか？

新兵　それが宜しう御座りませう。併しおいらんは？

曉雨　外に客衆も無いやうなら、わしと一所に夜樓を、ゆるりと見物お仕なせエな。

薄雲　（豐花に相談して）それぢやア皆の衆、遊んで居てもよう御座んすか？

お直　よい所か、わたくし等はおいらんの御一座が、

お[illegible]　何より嬉しう御座いまする。

（ト皆々、立戻らうとする。此時向うより相岡善孝、急ぎ足にて出で來り、（花道に止り）此方を見て。）

善孝　ヤア旦那も。おいらんも。此方に御出で御座いましたか？

（ト（舞臺に）來れば。）

曉雨　善孝、何か用でも出來たのか？

善孝　ヘイ香具山の旦那から、おいらんへ急の御手紙。

（ト懷中より手紙を出して薄雲に渡せば。）

薄雲　ナニ香具山さまからわちきへお文。（不審して文を披き一讀して）曉雨さん内證で讀んでおくんなまし。

（ト出せば、曉雨は一讀して。）

曉雨　アッ天野樣、イヤ香具山樣の御親切、ありがたい思召し。それぢやア薄雲お前は直に善孝と、山口巴へ一所に往ツて、香具山樣のお目に掛り、心の中の思ひのたけ、しつぽり話して來るが可ぜ、

薄雲　そんなら往くと仕ますぞえ。

曉雨　善孝、御苦勞ながら、案内してやつてくれい。

善孝　承知いたしました。サアおいらんお出なさいまし。

新兵　おいらん、

藝者
三人　おしづかに。

（ト送る。薄雲は善孝を先に、豐花、袖浦、介彌、いろは等を、引つれて（向うに）入る。）

曉雨　薄雲が居なくなつては、此で飲むのも野暮な話。いつそ是から金子へ往つて、好きなものでも誂へて、ゆるりと飲むと仕ようで無いか？

お直　金子はけつこう、
お愛　直にお供を、
兩人　いたしませう。
曉雨　新兵衞、家がひどく忙がしう無いやうなら、お前も一所に行かねエか？
新兵　ヘエ忙しくッても金子なら、なんでも、お供を致しませう。
（ト立掛らうとする處に、向うより釣鐘の子分、突座の丸五郎出で來り、暖簾の前に立つて、大聲にて。）
丸五　ヤイ此家の亭主新兵衞は内に居るかい？　取次して貰はうぜ。
新兵　ハイ新兵衞は私で御座いますが、何御用で御座いまするか？
丸五　用と云ふのは外でも無エ。吉原町は愚かな事、今戸の端の瓦やま、山下に出る豆藏まで、其名を知つた稻妻組、音に聞えた釣鐘親方、曉雨に逢つて話しをせにやア成らねエ用があるゆゑに、唯今これへお越しになると、曉雨にしつかり取次で貰はうぜ。
（ト言ひ捨て直に引返す。新兵衞、お直、お愛の三人は驚いて。）
新兵　旦那、唯今の使の口上、稻妻組の釣鐘親方、
お直　丁山さんの事からして、もしや旦那に遺恨を含み、
お愛　喧嘩を賣りに此家へ、押して來るのぢや、
二人　御座りませんか？
（ト案じる。曉雨は平氣にて。）
曉雨　なんの、釣鐘が此へ來て、喧嘩を賣らうと仕た所が、それを浮ッかり買ふやうな、曉雨ぢやアない程に、氣を揉まずに居たが宜いワ、併しわざ／＼先觸をよこしたを聞捨に仕て置いて、金子へも往かれめエ、退屈だが少し待つて居ようか。
（ト緣臺に腰を掛直す。新兵衞はお直お愛をつれて暖簾の中より（二重に）上る。）
（此時向うより釣鐘庄兵衞（伊達衣裳一刀尺八）先に立ち、子分撞木の權藏龍頭の龍太附添ひ出で來る。）（花道にちよつと止る。）
（曉雨は庄兵衞等が來るを見て、大聲にて。）
曉雨　ア、臭エ／＼、オ、臭エ／＼、素的に臭エ、狗の皮の匂がするわい。オイ新兵衞、早く伽羅を持つて來てくれい。
（ト鼻をつまみ袖を打振る。是を聞いて庄兵衞はぎつくりする。新兵衞等は不審の顏をして。）
新兵　ハテ今ごろ掃除屋が來るはずは御座いませんが？
お直　それに私等には何にも匂は致しませんよ。
お愛　旦那のお鼻が、どうかなすつたので、

二人　御座いませう。

（ト香箱を出せば、曉雨は取つて香箱の底を叩き、一度に伽羅を煙草盆の火入の中に入れる。庄兵衛等は此方（舞臺の附際）に近づき來れば。）

曉雨　エ、猶々臭く成つて來た。此生皮の匂と來ちやア、伽羅沈香でも消せ無エわい。花の廓の仲の町、めつた矢たらに、犬猫の生皮をはぎ、大げふに歩行かせるとは、宜くねエ事だ。ア、臭エ、たまらねエ匂だ、此鼻が今にいぎれて切れさうだわい。

（ト袖を振つて鼻を掩ふ。庄兵衛は、ぢつと立つて曉雨の所爲を見たりけるが、胸に徹へたと云ふ思入あつて、氣を入替へて、ずつと曉雨の前を素通りして、上手に入る。是を見送つて。）

新兵　私し共には、何の匂も仕ませぬに、旦那はしきりに臭い／＼と仰しやつたし、

お直　それに又、稻妻組の釣鐘さん、わざ／＼使を出しながら、

お愛　何にも言はず、素通りしていかつしやつたは、どうした理で、

三人　御座りまするか。

曉雨　ナニお前たちが知つた事ぢや無エよ。（少し考へて）ム、めつたに此は動かれねエわい。

（ト腕ぐみして居る。）折から向うより逸見鐵心齋（伊達衣裳、大小、駒下駄）出で來り、（花道に一寸止り、直に舞臺に來りて）曉雨の顏を見てわざと驚きながら、床几に腰を掛けて。）

鐵心　曉雨と云ふのは、治兵衛汝であつたか。時に治兵衛、汝に逢つたは丁度幸ひ此一角も當節は隱居いたして逸見鐵心齋、鶺鴒組の兄貴株、その鐵心齋が汝を見かけ、頼み入れたい事がある。

曉雨　ム、逸見鐵心齋と、占者じみた名を附けて、押あるくのは汝であつたか。併し占ひでも人相でも、家業になればそれが重疊（鐵心齋の身なりを眺めて）羊かん色の破羽織、襞も見えない古袴、その姿に引替へて、大そう立派な身の廻り、汝、占ひで餘つぽど錢が取れると見えるな。そりやア格別、おれに頼みがあると云ふなア、又一歩貸してくれいと云ふのだなア。

鐵心　イ、ヤもそつと高い品物だ。汝が馴染の薄雲を、おれに讓るか、それが否なら、姉女郎の葛城を、おれが相方に取持つか、二つに一つの返詞聞うか？

曉雨　イヤ何事かと思つたら、女郎買の相談か。薄雲でも、葛城でも、正札附の賣物だ、買ひたいと思ふなら、汝勝手に買ひに往け、引手茶屋は、おりやア仕ねエよ。

鐵心　ナンノ原を糺せば、おれが家の飯焚が、手足を洗ふ

糠までも、持つて參つた出入の札差。女郎買の使ぐらゐ、へイと云つて勤めるのは當前だ。
曉雨　フヽヽフ。二歩や一歩の强談無心、三年陳のポンポチ米、藏宿のお情で、ヤット露命を繫いだ一角、入山形に三つ星のおいらん買は、汝にはチト食過ろ（手早く懷中より一歩金一つ取出し紙に包みて）それほど女郎が買度くは、サア昔の好みに是をやるから、局へいつて遊んで來い。
（ト鐵心齋の顏に投付くれば、鐵心齋は赫と立腹して煙草盆をおつ取りて。）
鐵心　無禮ものめが、
（ト眉間を目掛けて打つて掛る。其手を押へて。）
曉雨　何を仕やがる。
（ト鐵心齋が手を捻廻し、煙草盆を奪つて眉間を打つ。鐵心齋は眉間より血汐流るゝを押へて、身構なし。）
鐵心　おのれ、おれが額を擊つたよなア。
（曉雨も煙草盆を捨て身構なし。）
曉雨　オヽ、如何にも擊つた。コリヤ一角。この曉雨が小びたひに、微かに殘る傷痕は、去年汝に算盤で打たれた遺恨の名殘と云ふ事よも忘れて居やア仕めエ。其仕返しを今こゝで、汝に仕たのが當座の讎いせ。それが何んと仕たのだエイ。

鐵心　おのれ曉雨、武士に向つて仕返しとは、無禮至極。
曉雨　無禮呼はり片腹痛エ。汝の樣なまくら武士、それを恐るゝ曉雨ぢやア無エぞ。一番堀から五番まで、建つらねたる淺草の、お藏前の札差仲間、五本の指に數へられ、大江戸八百八町の隅々まで、隠れも無エ大口屋、その身代を弟に讓り、男を磨くこの曉雨、弱エものをば助くる代り、强エが自慢で威張ちらせば、町奴でも侍でも、只は通さぬ江戸ッ子氣性、張つて張つて張通す、男の中の一疋、ぶたれた額の仕返しに、腹が立たら、切るとも突くとも勝手にしろエ、鍔鳴組と云ふからは、相手に取つて面白エ、汝が腰の鈍刀、伊達で無えなら拔け〳〵。ニエ誰だと思ふ、一本立の男だて、藏前の曉雨だわいエヽ。
（ト睨めば、鐵心齋は刀に反を打て。）
鐵心　返す〳〵も憎くき曉雨。此世の暇を取らせてくれう。
曉雨　ムヽ、よい覺悟だ。
（ト尺八を持替へて構へる。此前より家體と閣の四つ目垣との間にて傾城葛城立つて見たりけるが、此時駒下駄をぬぎ捨て、跣足に成つて走り出で來り、兩人の中を隔てゝ。）
葛城　マア〳〵待つて御二人さん。此出入は妾が貰うた、松葉屋の葛城が貰ひやんした。
曉雨　ヤア葛城か、そこ退け、あぶない、退いた〳〵。

鐵心　女だてらに大膽に、二人が喧嘩の邪魔する葛城、きり〳〵そこをどかないか。
葛城　イヽヤ、のかぬ、のきませぬ、色香をめづる吉原で、其刀を拔かしやんすか？　拔いたら花が散らうぞえ。
鐵心　ム、。
曉雨　花を散らすは本意で無いが、是には喧嘩の起因もあれば、
葛城　サア其起因も知れてある、わづか一人の傾城ゆゑ、お二人さんが互の意地づく、夫がかうじて此喧嘩、何事ぞ花見る人の長刀。この夜櫻の盛りをば修羅の刃の太刀風に、散らして見しよとは、お二人さん、粹に似合はぬ心ぢやぞえ。
鐵心　とは云へ見す〳〵今此で、曉雨に恥辱を取らされた鐵心齋の此顏が、……
葛城　そのお顏のたて様も、わちきが胸に疊んである。
兩人　それぢやと申して……
葛城　ハテわちきに任せて此顏を、立てさせておくんなまし、
（ト兩人の間に、床几を出して腰となし、其上に腰を掛くる。鐵心齋は此喧嘩に内心懲りたれば。）
鐵心　ム、憎らしい葛城があつかひ、了見仕惡い所なれど、いかにも其が顏を立て、此場の出入を一旦は、卿にあづけて引くと仕ようか。曉雨汝はどうだな？
（曉雨も此場の喧嘩は、都合わろしと思ひて。）
曉雨　オヽ、汝が其氣に成つたら、此方にや固より異存は無エワ。
鐵心　とは云へ此場は是で濟ましても、此遺恨は忘れぬぞ。曉雨、必ず留守をつかふなよ。
曉雨　ム、いつでも出入を持つて來い、川の景色も三好町、見掛は吝な家業でも淺草きつて隱れの無エ曉雨が住居、手前が押して來たからとつて、對談人を賴みやア仕ねエよ。
鐵心　何だと。
（ト立向ひて身構へすれば、曉雨は腰を掛けたるまゝにて身構する。葛城は中に立つて雙方を止めて。）
葛城　エヽ、何をしなます、わちきの顏をつぶしなますか？
鐵心　何さまさうだ。そんなら曉雨。
曉雨　逸見一角。どれ分れると（ト立上るを木の頭）仕やうかなア
（ト立上つて伸をする。鐵心齋は無念をこらへ。葛城は雙方を隔つる。）
――拍子幕――

第五幕

一　淺草並木暗討の場

享保十六年三月二十二日深更

正面は、藁葺柿葺等、入交りたる家續き（書割）此家家の間は松並木、其後は大川の流るゝを見。都て淺草並木町、享保頃の街道にてありし體にて夜中の景色なり。（月出るまでは朧月夜なり。）

此に釣鐘庄兵衞の子分撞木の權藏龍頭の龍太突座の丸五郎を初め伊助露右衞門仁平波太保次邊四郎登久兵衞智之助理七奴留八の十人、銘々身輕に出立ち、手々に尺八を持ちて立掛り居る。　（幕明く）

權藏　こりや、人數は殘らず揃つてるかい？

龍太　さうよ。此方とら三人の外に、伊助から奴留八までで十人ほどだ。

丸五　都合人數は十三人、此通り揃つて居るよ。

權藏　よし／＼。そこで一番手は龍太が頭で、伊助、露右衞門に仁平、波太、保次の六人。二番手は丸五郎が頭で、邊四郎、登久兵衞、智之助、理七、奴留八の六人と手分をして、左右から掛らうぜ。

龍太　其手配りは、すつかり承知だ。何でも權藏兄貴の知らせを合圖に、おいらッちの一番手が掛つたら、

丸五　此方とらの二番手が、直に掛つて曉雨めを、ぶッちめると仕やうから、安心して、

兩人　お出でなせエな。

權藏　ム、喧嘩に慣れた手合だから、油斷はけしてあるめエが。相手は名に負ふ藏前の曉雨だ。どぢを組んぢやアいけねエぜ。

龍太　ナンノ、此人數で右左から、おつ取卷いて、打ッて掛りやア、

丸五　曉雨がどんな手利でも、のがしッこは、

兩人　ありやア仕ねエよ。

權藏　おれもさうとは思つて居るが、此人數でへまを仕ちやア、稻妻組の恥に成るぜ。皆も其氣で、命掛の勝負だから、しつかり腰をはめてくれエ。

皆々　兄貴、承知でござエますよ。

權藏　それで曉雨が、愈々今夜は、宅に歸エるに違エは無エか？

伊平　そりやア大丈夫だ。和泉屋の女房に、

露右　駕籠を云ひ付けて居つたのも、

龍太　わつちら三人が、

三人　聞いて居やした。

權藏　そこで曉雨が乘つて來る其の駕籠は
仁三　其の駕籠は上手の武藏屋で、
保次　脊板の印しと云ふなア、
邊四　丸に銀杏の紋處、
登久　黑で武の字が、
四人　書いてあらア。
權藏　よし其の提灯を見掛たら、敲き消すのを合圖にして
智之　駕籠舁どもをぶち倒し、
理七　それから後が此方の喧嘩、
奴留　相手は曉雨たツた一人、
仁平　ぬかる事ぢやア、
皆々　ごぜエませんよ。
權藏　そんなら皆が手分をして、右と左に、
皆々　忍ぶと仕ようか。
（ト手筈を申合せて、龍太、仁平、露右衛門、波太、仁三郎、保次は上手に、丸五郎、邊四郎、登久兵衛、智之助、理七、奴留八は下手に忍び、權藏は中程に隱るゝ。）
（此時向う（揚幕）より大口屋曉雨、四手駕籠に乘り、垂を揚げさせ（駕籠舁虎吉熊藏）駕籠には赤にて、丸の内に銀杏の紋所、其上に墨にて武の字を書いたる提灯を附けさせ出で來り（花道よき所にて）止まりて。）

曉雨　オイ駕籠屋、一寸俟ねエ。
（ト駕籠を止めさせて（舞臺の方を打見やり）小聲にて。）
曉雨　履物を出してくれい。
（ト駕籠を卸させ駒下駄をはき、虎吉は直に是を熊藏に移し、兩方の垂をおろし、空駕籠を曉雨が乘つたる體にて舁いで、舞臺に掛る。曉雨は駕籠の後より步行て、舞臺下手よき所に立つて止る。）
（舞臺にては權藏、駕籠を見て）
權藏　それ。
（と飛び出して、尺八にて提灯を叩き落せば、是を合圖に、雙方より龍太丸五郎等十餘人のもの、駕籠をおつ取卷て。）
皆々　曉雨、覺悟しろい。
（ト打つて掛かる。駕籠舁の虎吉、熊藏は是に驚いて、上手の方へ逃込む。權藏、龍太、丸五郎は駕籠の垂をあけて透し見て。）
權藏　ヤア、こりやこれ空駕籠。さては曉雨は風を喰ツて、
三人　逃げやがつたなア。
（ト皆々あきれて居る。曉雨は是を透し見て。）
曉雨　イヽヤ逃げねエ。曉雨は此に立つて居るが、汝たちは何奴だえ？

權藏　此世の暇、引導代りに名乘ッて聞せる。稻妻組の其中で、響も高ェ釣鐘庄兵衞。その一子分で撞木の權藏。

龍太　龍頭の龍太。

丸五　突座の丸五郎。

權藏　廓の遺恨意趣ばらし、

龍太　汝の歸りを待受て、

丸五　丁度處も松並木、

權藏　汝の命を、

皆々　貰ふのだい。

曉雨　さうか。欲くば遣らうと云ひ度いが、少し此方に用ある命、汝等に遣るだけは、まア止に仕ようよ。

權藏　遣らぬと云ッても、

皆々　こつちで取るわい。

(ト權藏はじめ十三人のもの共は、前後左右より打つて掛るを。曉雨一人にて引受け、持つたる尺八にて、當るを幸ひと打倒せば、或は氣絶し、或は逃去りて遂に目前に相手なし。曉雨は着物の塵を打拂ひ、悠々として上手に往き掛る。)

(此時松並木の陰より、釣鐘庄兵衞、脇差を拔いて走り掛かり。)

庄兵　曉雨覺悟。

(ト斫つて掛かる。曉雨は持つたる尺八にてあしらひ、烈しく戰ひて、遂に曉雨は庄兵衞が利腕を打つ。打たれてひるむ所を附入つて、刀が持つたる手をねぢ上げ、取つて組伏せて。)

曉雨　サア何奴だ、名前をいへ。

庄兵　イ、ヤ云はねエ。斯なるからは、命は入らぬ、殺すなら立派に殺せ。

曉雨　名前も知れねエ、つまらぬ命、それを欲がる曉雨ぢや無いぞ。名前を云つて詫つたら、汝の命は助けて遣るワ。

庄兵　詰らぬ力身で命を助け、後の難儀を仕ようより、早く殺して安心しろえ。

(ト決心して云ふ。此時月出る、曉雨は庄兵衞の顏を見て。)

曉雨　ヤア汝は○○の、イヤ稻妻組の釣鐘だな。意趣遺恨も無エ余を、なんで並木に待受けて、欺討には仕ようと仕たのだ?

(ト問へども、庄兵衞は組伏せられながら、目を閉ぢて返答せず。曉雨は少し考へて。)

曉雨　成程、汝の望み通り、命を取るから、一緒に來い。

(ト手を取つて引起し、落たる脇差を取上げて渡せば、庄兵衞は意外の思ひにて、地上に(舞臺)坐し、默然たりしが、脇差を取つて鞘に納めて。)

庄兵　往けと云ふなら、往きも仕ようが。どこのいづくへ往くのだい？

曉雨　ハテ來いといつたら、（ト庄兵衞の手を取つて、）（ホッ掛。）來るがいゝわね。

（ト引立つれば、庄兵衞は合點ゆかねども立上がる。）

（此道具廻る）

二　諏訪町立田屋門口の場

上手寄には、柿葺の家根を附たる小さき梅軒門、（出入）其左右は割竹の塀にて、塀の内の植木を見越たり。此塀に續いて、少し下手に寄せて、柿葺の家、雨戸を建切りて一方にくゞり戸を附けたり。其下手は板塀なり。都て淺草諏訪町の料理店、立田屋の表掛り、夜の體なり。此に（道具止れば）番太郎、淺黄の股引、尻端折にて、腰に諏訪町自身番と書いたる提灯を差し、拍子木を持ち、八の時を打つて上手より出で、下手に入る。（此所に夜鷹蕎麥等の仕出あるべし）

（此時向うより大口屋曉雨は先に立ち、釣鐘庄兵衞は後より續き（着物は所々破れ綻びて尻端折、跣足）花道よき所に止まりて、）

庄兵　オイ曉雨。言なり次第に歩行て居るが、汝の家に往のぢや無ヱな？

曉雨　ついそこだから、マア一緒に歩行けと云ふに。（舞臺に來り、下手家臺の潜り戸を叩いて）

曉雨　オイ明てくれい／＼。清助は居ねヱか。清助々々。

清助　（内にて）ハイ／＼清助は宿に居ますが。お呼びなさるのは、どなたで御座ヱますか？

曉雨　おれだい。曉雨だい。

清助　ヱ、旦那で御座ヱますか。（清助は寢卷姿にて潜り戸を明けて）オヤ旦那、どうして今頃入ッしやいました、（内に向ひて）オイ／＼藏前の旦那が入ッしやつたぜ、皆が早く起きねヱか。

曉雨　コレサ清助、皆を起すにや及ばねヱが、少し此釣鐘親方と話しがあるから、奥の座敷を貸してくれい。

清助　承知いたしました。（と透し見て）オ、釣鐘親方で御座ヱましたか暗ヱのでお顔は知れず、御挨拶も致しませんで、御免なせヱまし……オヤお跣足で御座ヱますな、只今水を差上げまする。

（ト清助直に盥を持出す。曉雨は指圖して清助に庄兵衞の足を洗はせ、駒下駄を履かせて、）（但し此洗足の時に、庄兵衞煙草入を落す。）

曉雨　それから清助。面倒だらうが、早く酒を出して呉い。

清助　直さま御酒は差上まするが、生憎お肴が何にも御座

エませんので……
曉雨　肴なんぞは何でも宜いよ。旨い不味は言はねエから、……
清助　ヘイ宜しう御座エます。（潜り戸の内には入り、上手の門を明て）どうぞ、おはいり下せエまし。
曉雨　釣鐘。さア一緒には入なせエ。
（ト先に立つて門の内に入れば、庄兵衛も默然として續いて入る。）
（此道具半廻に成る）

三　同釣鐘切腹の場　同夜

此は立田屋の奥座敷、中二階造りの離れ座敷、正面上手の一間は塗壁にて織部板を打ち、眞中に花籠を掛け、早咲の牡丹を挿たり。其の次の二間は下手寄に一尺五寸ばかりの小壁を見て、つのがらにて一間二枚の太鼓張の襖（出入）上手横は三尺の小壁に下地窓。下手横は一枚の障子を入れ、庭（平舞臺）には沓脱、飛石、植木等ありて前場に上手に見たる梅軒門は、今は下手に成つて其内を見る。石燈籠つくばひ等よろしくあり。此に亭主立田屋清助は先に立ち案内して、曉雨、庄兵衛は入來りて着座する。
（清助が燭臺を置き、奥に入るを呼止て。）

曉雨　今いつた通り、釣鐘親方と内證の話があるから、女中なんぞをよこさずに御苦勞だが、お前用を達してくんなゝ
清助　宜しう御座います。（奥に入り直に煙草盆を持出して）マア御一服なせエまし。只今お火鉢を差上げますから。
曉雨　ナニ暖いから火鉢は入らねエよ。其代りに酒を早く出してくれい。
清助　直さま御酒を差上げます。（庄兵衛の着服の破れ綻びたるを見て）親方、どうなすつたので、御座エますね？
（ト尋ぬるを。曉雨は引取つて。）
曉雨　ナーニ實は今少し間違があつて、親方の着ものが此通に成つて、見ッともねエが、清助、おめえの餘所いきがあるだらうから、早く持つて來て上げてくだつし。
清助　承知いたしました。どうで、碌な着ものは御座エませんが、ほんのお間に合せで御座エますよ。
（ト奥に入る。釣鐘庄兵衛は、腕組して始終無言なり。
曉雨は煙草盆を引よせ、煙草を吸ひて。）
曉雨　庄兵衛どん、一服やらねエか。（と煙草盆を前に出し庄兵衛が煙草入を捜しても腰に無きを見て煙草入を出し。）
曉雨　ヤア先きの騒で煙草入を落しなすつたね。サア是で

一服やんなせエ。
庄兵　有がたう御座エます。
（ト挨拶したまゝにて、煙草入に手を觸れず。清助は奥より小袖羽織を持出して。）
清助　親方、垢ツ臭エか知れませんが、お着替なせエまし。
庄兵　清助どん、親切は忝ねエが、是で可よ。
曉雨　折角清助が持つて來たのだ。それぢやア見ツともねエから、マア着替ると仕なせエよ。
庄兵　それぢやア、お借り申すと仕ようかね。
（ト着替る。清助は庄兵衛が脱いだる着ものを持つて奥に入らうとする。）
曉雨　オイ清助。ついでにお前の煙草入を親方へ上げてくんな。
清助　承知しました。
（ト奥に入り、直に煙草入、並に盃臺に酒肴等をのせて持出して、煙草入を庄兵衛に渡し、盃臺を前に出して。）
清助　只今なにかお肴をこしらへますから、先づ是で一杯お願エ申上ます。
曉雨　御苦勞々々。それで用があつたら、手を叩くから、此へ附いて居なくツて可ぜ。
清助　よろしう御座エます。
（ト奥に入る。曉雨は盃を取上げて。）

曉雨　釣鐘、わしが毒味をするぜ。（手酌にて飲みて）少し燗がゆるい樣だが、仕方が無エ。サア一つ遣んなせエ。（酌を仕て）一つ取替に仕ようぢや無エか。
（ト自分の盃を庄兵衛にさし、庄兵衛の前にある盃を取らうとする。庄兵衛は其手を押へて。）
庄兵　オツト待ちなせエ。此釣鐘庄兵衛が身分の素性を、お前は知つて居なさるだらうが……
曉雨　オ、知つてるとも／＼、宇都宮の粂八と云つては、野州から奥州掛けて、人も知つた〇〇頭、疾からよツく知つて居るよ。
庄兵　ム、それを知つた此盃、受けて飲まうとさつしやるは？
曉雨　ハテ野暮を云ふ男だなア。〇〇だらうが、大名だらうが、同じ樣に生を受け、此世界に生れた人間、何の變りがあるものか、それに差別を立てたのは此世の中の得手勝手。この曉雨とても其通り、町人に生れて來た悲しさは大名どころか、小名も小名、十五俵の安御家人、其奴等にさへ頭の上らぬ札差稼業、いくぢの無のが嫌になり、家督を讓つて今の境界。大小さした侍に頭を下げぬ其代り、世界の人は皆兄弟、士農工商〇〇〇、世間の奴等が勝手に附けた身分の符牒、それに頓着する樣な曉雨ぢやア無エよ。〇〇と云つちやア煩せエから、何所までも稻

妻組の釣鐘親方、サア打解て一杯飲みなせエな。

（ト庄兵衞が飲んだる盃を取り、手酌にて飲みて庄兵衞に差す。庄兵衞は我を折って。）

庄兵　わつちも是まで大勢に附合ッたが、お前さん見た樣に、肝玉が大きくッて胸の廣エお方にやア、臍の緒きッて三十四年目、今日初めて逢エました。旦那、眞平御免なせエまし。今迄のわつちが罪科、この通り兩手を突いて詫りました。（と平伏する）

曉雨　ナンノ詫る事も何にも無エワ。併し釣鐘、お前ほどの好漢が、何で逸見鐵心齋に一味して、わしに喧嘩を仕掛なすつたい？

庄兵　サア、それも是も皆わつちが足り無エから。旦那、此身の上の懺悔ばなし一通り聞いておくんなせエ。御存じの通り、わつちやア原が宇都宮の○○頭、糸八でごぜエますが、金はあつても人並に世間へ出られぬ身の悲しさ、悔しい餘りに跡をくらまし、名前を變へて江戸へ出て、町奴の稻妻組、上見ぬ鷲の羽をのして、啖呵が得手の釣鐘庄兵衞。ふと松葉屋の丁山を買馴染だが遺恨の起り、お前さんの男だて、五丁町で評判の高いがわつちの心の嫉み、丁山には煽られて、修羅を燃して居た所。鐵心齋に賴まれて、お前さんをば暗打に、疊んでやる氣に成つたので御座エまする。

曉雨　さうだらうと察して居たが、シテ其鐵心齋が、わしに遺恨を含んだ理分をお前は何と聞きなすつたい？

庄兵　サア仲の町での今夜の喧嘩、そりやア後から沸いた話し。其前賴みには、此鐵心齋は敵持、親の敵と狙ふは女、恐ろしい事は少しも無が、殊に寄つたら肩を持ち、助太刀するのはあの曉雨、喧嘩に事よせ殺して仕舞へば、懸念が無くて此身の安心。釣鐘、どうか手を貸してくれめエかと、折入つての賴みゆゑ、男の顏づく、厭といつた理でごぜエます。

曉雨　扨こそ敵は鐵心齋。シテ其女の名前、討たれた人の姓名を、お前は知つて居なさるか？

庄兵　討たれた人の名は知らぬが。敵と狙ふ女の名前は……（云ひ淀めば）

曉雨　その女の名前と云ふのは？

庄兵　事の起りは兎も角も、男と見込んで其身の大事を、明された上からは、名前を云ふのは、旦那堪忍しておくんなせエまし。

曉雨　そりやア尤もだ。それぢやアおれの方から明さうか、その女と云ふのは、松葉屋の薄雲であらうがな？

庄兵　どうしてそれをお前さんが？

曉雨　大方それと察して居たよ。それで討たれた浪人は、阿部川町に住居した、今西玄之進と云はうがな？

庄兵　阿部川町の浪宅で殺したとは聞きましたが、その御浪人が、アノ今西玄之進今西様で御座ェましたか？……ェ、、、ェ。（と大に驚く）

曉雨　如何にも、阿部川町の浪宅にて、女房もろ共、人知れず殺された浪人は、薄雲の兩親、今西玄之進御夫婦だ。

庄兵　スリや鐵心齋に殺されたは、今西さまでごぜェましたか。知らぬ事とて、無念の御最期をお遂げなせェましたなア。

（ト落涙して無念の思ひをなす。曉雨は不審して。）

曉雨　その今西玄之進を、お前は知ッて居なさるのか？

庄兵　知ッてる所か、命の親、忘れも仕ねェ十年前、小山の宿の大喧嘩、おッ取卷かれて、打殺さるゝばかりの所、通り掛ったお侍ェ、わつちを救つて其場をきりぬけ、命を助けて下さつた、其お方のお名前は、水野隼人正様の御家來、今西玄之進様。水野様御沒落の後は、往方知れず、お尋ね申すあては無く、御恩返へしが仕てェ／＼と、常に思ッて居ましたが、鐵心齋に殺されて、敢ねェ御最期なされましたか。

（ト悲嘆に沈む。曉雨ははたと膝を打つて。）

曉雨　ハテ鐵と云ふものは不思議だなア。シテ見ればお前も言はゞ恩人の敵。心を變へて薄雲に力を添へて、敵を打たせる所存は無ェか？

庄兵　イーヤ無ェ、御座ェません。恩は恩、頼みは頼み。薄雲の助太刀は、お前さんが立派にして、敵を討たせておやんなせェ。

曉雨　そりやお前に頼まねェが。困ると云ふのは、鐵心齋、今西玄之進夫婦の衆を殺した證據が上らぬゆゑ。見す見すそれと知りながら、手出しのならぬが殘念だ。

庄兵　その證據にわつちを出さうと思つても、わつちも男だ、一旦頼まれた上からは、石を抱いても言ひは仕しねェよ。

曉雨　それぢやア汝。今西玄之進に受けたる大恩、口先ばかりで言つては居れど、心は忘れて居やがるなア。

（トきつと成つて云へば。庄兵衞は決心の體にて。）

庄兵　イ、ヤ些とも忘れて居やア仕ませぬ。其證據を上ぐるには、鐵心齋が門弟で、しかも其晩共々に、手を卸したは、入谷丹五郎、根岸松兵衞、田畑彌九郎其外あまたの町奴。その中にて田畑彌九郎、見掛に似合はぬ臆病やつ。彼奴を引よせ一責すりやア、證據の上るは案の內。

曉雨　ム、、シテ其彌九郎を引よせる手段は、どうして？

（庄兵衞は傍に置きたる脇差の笄を取出して。）

庄兵　この笄は仲間の割符。これを見せて言附りやア、わつちが子分の撞木の權藏、龍頭の龍太、突座の丸五郎、乾度手先を働いて、口を明かせて上げませう。

暁雨　ム、忝ない。（割符の笄を収めて）　それほど心を入れながら、自分で力を入れぬとは？

庄兵　ハテ悪人ながら、鐵心齋に、一旦肩もつ上からは。

（と脇差を抜き腹に突立て）

庄兵　此命を、くれて遣りまする。

暁雨　（介抱して）　早まつた其切腹。何で命を捨るのだ？

庄兵　鐵心齋が今西様を殺した證據、その手掛りを敎へた上は、男を捨てた釣鐘庄兵衞、なんで生きて居られませうか。

（ト此時奥より亭主清助走り出て。）

清助　旦那。釣鐘親方の子分の衆が。（切腹の體を見て、悔りして）　ヤア親方、こりや何となせエましたなア。

（同時に、撞木の權藏龍頭の龍太突座の丸五郎は、清助の後より打揃ひて出で來ッて。）

權藏　親方の往先、所々方々と搜して見たに、

龍太　此家の表に落してあつた煙草入、

丸五　的きりこゝと勘付いて、は入つて見れば此場の仕儀、

權藏　こりやどうした理で、

三人　御座エますなア？

（ト何れも驚き寄添て介抱するを、押止めて。）

庄兵　これには段々仔細のある事。コリヤ今からしては曉雨さまが、余のお頭。

三人　そんなら喧嘩の中解けて、

庄兵　ム、みんなの事までお頼み申した。旦那、何分お頼み申しまする。

（ト手を合せて拜み苦痛に迫る。）

暁雨　承知した。釣鐘親方、後は少しも案ぜずに、心置なく往生なせエよ。

庄兵　ありがたい。

（ト脇差を引廻す。曉雨涙を流して。）

暁雨　あつたら男を。（と涙を拭ふた木の頭にて）　死なしたなア。

（庄兵衞落入る、皆々悲嘆に暮るゝ折から、曉の鷄の聲聞ゆる。）

―― 拍子　幕 ――

第六幕　大　詰

一　薄雲忍出の場

享保十六年四月十七日午後

此は新吉原松葉屋の店先の上り口にて、正面には（二間高足二重）四枚建の襖を設け（出入）前には三尺の式臺を設け、玄關模樣の上り口なり。此上り口の上手は（二重）一段下りて若衆の溜り（常足）一間二枚の

杉戸を（出入）建てたり。上り口の下手には朱の内塗格子（簾）にて其止りは宜しく見切るべし。此に若衆溜には、松葉屋の若いもの源七藤吉は腰を掛け、平治は程よき所に立掛り、話の體なり。（幕明く）

平治　エ、源どん。此節の忙がしさはどうだい。御同然に目が廻る樣だぜ。

源七　さうよ。忙がしくつて繁昌するのは結構だが、かう夜晝なしにお客が立込んでは、息を吐く間もありやア仕ねよ。

藤吉　併し此町内にやア、今月に成つてから、ずつと閑で、お茶ばかりの家もあるぜ、其中でこちらばかりが、こんなに繁昌するのは、有がてエ譯だのウ。

平治　そりやアお前の言ふ通り。二階が忙がしけりやア、こちとらの實入も、おのづと殖えるに依て、愚痴を云ふ事アちつとも無いのさ。

源七　是と云ふのも、此方にはおいらん方が玉揃ひで、まづ第一に葛城さん、その次が丁山さんに鳰鳥さん、それから突出の薄雲さんと來て居るから、お客のこむのも尤もさねエ。

藤吉　その葛城さんで思ひ出したが、薄雲さんの突出の初日から、山口巴で葛城さんが相方で、夫から折々お出なさる、香具山さんと云ふお客、ありやア何者だらう？

平治　さうさね。いつもお茶屋の二階ッ切で、此方へは、遂しか見えた事も無く、それに薄雲さんがいつも一座。妙なお客もあるものだねエ。

源七　お前たちはあのお客の素性を知らねエのか。香具山さんと云ふのは假の名、まことは小川町で四千石のお旗本、天野民部樣と云ふお歷々だぜ。

藤吉　さうか、道理で人品がすてきによくつて、一體が寛活だと思つて居た。シテ其歷々の天野樣が、何でこの吉原へ繁々お出に成るのであらう？

平治　お茶屋ツきりでお歸りなさる所を見りやア、葛城さんの色香に迷ひ、通つて來なさる理でもあるめエし。

源七　サア深い事はおれも知らぬが、此間も山口巴の店先で、お供待の奴さん黑内とか云ふ人の、問はずがたりを聞いて見りやア、何でも薄雲さんのおとつさんが、浪人もので、天野樣とは懇意の中であつたと云ふ事。

藤吉　そんなら、薄雲さんを相方にお仕なさりさうなものだ、其上にあの香具山さんは、曉雨さまと一座にお成なさる樣だね。

平治　シテ見りやア、揃ひに揃つて、遊び好の女嫌ひ、

源七　變つたお客も、

三人　あるものさねエ。

（ト香具山と云へるは、天野民部が事にて、葛城を呼

出して遊べる事を不審して居る。)

(此時正面より葛城の禿畝火、出で來りて。)

畝火　平どん。おいらんの客衆が歸らつしやるから、お履物を……

(平治は承知して下足の紐をときて、草履を式臺の前に直す。)

(正面より番頭新造豐花、先に立ち、次に薄雲（日陰し頭巾、羽織、袴の男姿）そのあとより葛城（部屋着の胴拔）にて出で來る。是を見て。)

源七　ヘイお早う御座います、お靜かに。

三人　入らつしやいまし。

葛城　(薄雲の肩に手を掛て) それぢやア明日の晩は、きつと來なましよ。嘘を吐と聞イせんよ。

豐花　おいらんが、あんなに氣をもんで居さつしやるから、

葛城　きつとざますよ。

(ト云へば、薄雲は無言にて首諾き、葛城豐花に左右を圍はれて、式臺に下り、草履をはかうとする。)

(此前より平次、源七、藤吉の三人は、土間（平舞臺）に立ちて、薄雲の樣子を、變なりと眼を付けて居たりけるが、源七それと目にて知らすれば、平次は直したる草履を取る。葛城はつと思ひて。)

葛城　平どん、お履物をなぜ取るのだねエ?

源七　イヤ浮ツかりと此草履、はかせる事は、

三人　成りません。

葛城　何といふのだえ?

藤吉　昨夜あがつたお客さま、身なり姿は其儘なれど、

平次　からだの恰好もの越は似ても似つかぬ、くはせもの、

源七　その替玉を食ふやうな、わつち等ぢやア、

三人　御座エませんぜ。

葛城　フウすりや、客衆が違ふと云うてぢやのう?

源七　いかにもさうで

三人　ござエますよ。

葛城　ホヽヽホ、山口巴の看板で、馴染のお客の香具山さん、わちきが座敷に居たお方、違はう理は無い筈ぢや。サア早うお草履を、お上げなまし。

藤吉　イヽヤ、いくらおいらんが、客人だとおつしやツても、三人揃つて此通り目星を附けた怪しいかたち、

平吉　云はずと知れた女の姿、頭巾で顏を隱しても、目許は慥に覺えがある。

源七　その頭巾を引ぱいで、お客の正體あらはさにやア、役目の表が、

三人　立ちましねエ。

(ト三人にて薄雲を取卷き、頭巾を取らうとする。葛城は押隔てゝ、薄雲を後に圍ひて、きツとなりて。)

葛城　何を仕なんす、皆の衆。人目を包む袖頭巾、顔を隠すお歴々の、世を憚かりの里通ひ、夫を見ようと無作法な、お前がたの手込には、わちきが決してさせぬぞえ。見るから否な女郎でも、松葉屋の葛城、かうなるからはわちきが相手、指でもお客にさしたなら、此の喧嘩に疵が附かう、ハテ目はしの利かぬ若衆では御座んすぞいなア。

（ト云へば、三人は少し尻ごみ仕たるが、猶も進みて。）

源七　おいらんのお詞立は、御尤でごぜエますが、此儘に其お客、

藤吉　お出し申す事ア、

三人　出来ません。

葛城　さうなら、わちきが命に掛けても、出しますぞえ。

（ト薄雲の手を引き、土間に（平舞臺）下りようとするを、源七等三人は遠くより取巻く。）

（此前より松葉屋の亭主與兵衛は、若衆部屋の（上手二重）杉戸を細目に明けて見て居たりけるが、此時大小、網笠、および袴脇差を風呂敷に包みたるを挾みて、走り出でて、式臺に來り、會釋して。）

與兵　これは〳〵善兵衛様、モウお歸りで御座いますか。お預りのお腰のもの、お笠も是に御座りまする。（差出せば、葛城は花を取て薄雲に支度させる）コレ早くお履物を差上ねエか。

源七　旦那さま。あの客人は慥に似せもの、

藤吉　しかも女の喰せもの、

平次　あの目許の様子では、

三人　薄雲さんに……

與兵　（と云ふを冠せて）何を馬鹿な、薄雲は二階にちやんと居るぢやア無エか。

三人　デモ……

與兵　エ、早くお草履を出さねエか。

（トきつく云へども、三人が猶ためらひて居るを見て、與兵衛は心せき其所にある駒下駄をはき、土間（平舞臺）に下りて、平次が持つたる草履を引たくりて、式臺の前に直して。）

與兵　サアお召しなさいまし。

（薄雲草履をはく。）

葛城　旦那さんの御親切、きつと恩に着ますぞえ。

與兵　なんの是しきの事。……イヤ迚もの事に、此與兵衛が大門外まで、お供を致して參りませう。

葛城　スリヤ旦那さんには委しい様子を……

與兵　ハテ廓の魂膽出入の掛引、わしに任せて置きなせエ、萬事は渾て此胸に……

（ト心の中を悟らすれば。）

葛城　旦那さん、嬉しうござんす。

（ト拜む。與兵衞は薄雲をつれて出ようとする。三人猶も障へんとするを、與兵衞は睨め附けて。）

與兵　エヽ、何をするんだ（ト薄雲の手を取るを、ホツ掛にて。）サアお出なせエまし。

（ト與兵衞は薄雲を連出し。葛城は豐花と倶に見送る）

（此道具廻る）

二　今戸八幡敵討の場　同日の夕方

八幡の社を正面斜に見て（中遠見の書割）其周圍は杉の立木なり、上手には柿葺の庇を附けたる別當所（三間の常足）板椽附、前づらは障子を立切る。下手には藁葺葭簀張の茶店、床几を前に並べ。別當所より奧に掛て藤棚ありて花盛り。都て今戸八幡境內後の光景なり。此に天野民部の家來、片山又四郎齋藤孫市（大小、袴）床几に腰を掛け、下手には釣鐘の子分龍頭の龍太（町奴）立掛り咄の體なり。（道具止る）

龍太　シテ田畑彌九郎の口は明きまして御座エますか？

又四　サア貴樣の骨折で。かの彌九郎を引捕へ、町奉行所の手に渡し、內々詮議に及びし所、兎や角、初めは陳じたなれど、

孫市　手强き責に堪へ兼ね、鐵心齋が手に附て、今西玄進夫婦のもの、殺したりとの彼が白狀。

又四　それで我等が御主人の天野民部樣、御奉行衆へ內々御相談、敵を討たせて苦しう無いとの御內沙汰。

孫市　後の祟は少しも無いぞ。

龍太　そりやアよい御都合で御座エました。それに附けても目指は逸見鐵心齋、今日は三社の御祭禮、見物をした其後で、此境內に待合せ、子分をつれて吉原へくり込む手筈は兼ての約束、撞木の權藏が慥にそれと聞出して、親雨さまへお知らせ申し、又今しがた此龍太、樣子を見屆け參りましたが、鐵心齋は馬道の甲子屋の二階にて酒もりいたして居りました。

又四　段々の骨折、御苦勞御苦勞。今にもあれ鐵心齋、門弟子分を召連て、此境內に參つたら、……

（ト龍太に囁けば。）

龍太　承知しました、そんなら彼奴が子分の奴らは……

又四　コレ。

（ト制して再び囁きて申合せ、龍太は諾いて下手に入る。引違へて向より天野民部、同靱負は、家來三浦大次郎、三木喜右衞門、奴黒內引連て出來れば、又四郎、孫市は出迎へ、民部靱負は直に舞臺に來り、床几に腰を掛る。孫市は自分にて茶店に入り、茶を汲みて民部靱負に差出せば。）

民部　それなる茶店の女は何がいたした？

孫市　何かに附けて邪魔であらうと心附き、又四郎と申合せ、今日一日借切に致し置き、女は宅へ引取らせて御座りました。

民部　ムヽよく心附いて計らッた。シテ都ての手筈は屆いて居るか。

又四　ハツ、萬事は曉雨が指圖にて、手筈は都て相屆き、逸見鐵心齋、三社の祭の歸り掛け、此境內に立寄りますると、慥に內通、それに相違は、

兩人　御座りませぬ。

靱負　鐵心齋が手下のもの等、多人數なりと存ずるが、それを防ぎの用意はどうぢやな？

孫市　其儀は曉雨、一切心得居りますれば、都てお任せ下さりませ、と達ての詞に御座りまする。

民部　ムヽ、音に響いた俠客、藏前の曉雨、必ずぬかりは有まい程に、同人に任せ置け。併し曉雨はまだ此所へ參り居らぬか？

曉雨　アイヤ疾うから參つてお待申して居りまする

（ト曉雨（羽織、袴、一刀）松葉屋の亭主與兵衛（羽織、袴、一刀）引連て下手の葭簀張の中より出で來り、民部靱負に會釋して。）

曉雨　コリヤ天野の殿樣、若殿樣、わざ／＼の御出張、恐入ッて御座ります。お蔭を以てお鶴の敵討、今日首尾よく致す事に相成まして、有がたう存じまする、

民部　イヤ其禮は此方より申す事、今西玄之進が非業の最期、原はと申せば忰よりして起つた災難。

靱負　それに付てお手前には一方ならぬ世話を掛け、段々との心遣ひ、

兩人　忝う御座るぞ。

曉雨　そのお詞では恐入まする。ナンノお賴が御座りませいでも、お鶴は顏を見知ッた中、況して年來御出入の天野樣、お詞が掛つた上は、是位の骨折は當然で御座りまする。

民部　今に始めぬお手前が義心、民部大慶に存じ申すぞ。シテお鶴は參つて居るかな？

曉雨　是に居りまする與兵衛が情、葛城が計にて、先刻廓を立出て、既に參つて居りまする。

民部　何れへ參つて居るか？

與兵　ハツあれなる人家へ立忍ばせ、休息いたさせ置きまして御座りまする。

民部　それは重疊。それに附けても敵と云ふは逸見鐵心齋、鍛鍊なくとも一流の劍客、お鶴ごときかよわき女の細腕に、討たるゝ樣な男では、よもあるまい、其助太刀は、いかゞ致すな？

曉雨　その儀は別に仔細も御座りませぬ。喧嘩に事よせ、鐵心齋と立合つて、十分になした其上で、お鶴に止を刺せるつもり。

靱負　成ほど左樣な手管と推量いたした。夫に附けては其喧嘩、ナント曉雨、手前に讓つて下さるまいか？

曉雨　ナント仰しやりまする？

靱負　向島にて出會た鐵心齋。今西玄之進の助太刀にて、其場の耻辱はのがれしが、心に殘るは彼奴が過言。其上にまたお鶴の助太刀、お手前に任せては後日に靱負の顏が立たぬ。

民部　ム、よく申した、それでこそ民部が悴。こりや曉雨、どうか左樣いたしてくれぬか？

曉雨　御尤もで御座りまする。鐵心齋に私が打れましたる遺恨の仕返し、此程すでに濟みましたれば、今度はあなたの御存分になさりませい。

靱負　早速の承知忝ない。併し配下の奴等が、一所に掛ッて參つた時には？

曉雨　そりや御氣遣は御座りませぬ。門弟の侍は、又四郎殿はじめとして、御家來衆へお任せ申し、……

民部　その外の町奴は？

曉雨　ナンノ、私が一腕で動かす事では御座りません。若殿樣、御懸念なしに鐵心齋を、思ふ存分さいなんで、向島の鬱憤を十分お霽しなさいまし。

民部　然らば曉雨、あれなる別當所にて、待合すと致さうか。時に曉雨、異な事を云ふ樣だが、お鶴は慥に女の操は破るまいな？

曉雨　其儀は是に居まする與兵衞が、慥に引受けて、大丈夫で御座りまする。

與兵　既に先頃、曉雨樣より、お鶴が身受の御相談も御座いましたが、葛城が丁山との張合から、是非お鶴をば一旦は、突出たいと達ての望み、それに又敵の手掛り探る爲にも成るであらうと、曉雨さまの思ひ附、それで傾城には出しましたが、男に肌を觸れませぬは、此與兵衞がお受合申上まする。

民部　夫は大慶。然る上は孝女のお鶴、首尾よく敵を討つたる後で、靱負が妻に……

曉雨　その橋渡しは失禮ながら此曉雨が……

民部　お賴み申すぞ。

與兵　有がたう存じまする。

民部　サア曉雨お手前も我等と一所に……

曉雨　有がたうは御座りまするが、お鶴の身支度、その外用事も御座りますれば先づお入りなさりませい。

（民部靱負は、上手別當所の緣より、障子の中に入り。又四郎其外は上手の奥に入る、曉雨は殘りて。）

鞍負樣のお國前、樫であらうと思つて居るが、何をいふにもお年若、相手は逸見鐵心齋。

（床几に腰を掛け、手を叉て案じて居る。此時八幡の鐘の音聞ゆれば、與兵衛は指を折つて數へて。）

與兵　旦那さま、アリヤ七つの鐘で御座いますぜ。

鳴雨　もう相手の來る時刻だ。ム、、。

（ト頷いて下手葭簀の中に入る。向うより逸見鐵心齋、入谷丹五郎、根岸松兵衛を引つれ出來り、）（花道に止りて。）

鐵心　ヤツ、祭禮と云ふものは、相も變らず、さう／＼しいものだのウ。

丹五　今日の三社の御祭禮、白柄大小神祇よしや、其外諸組の連中が、我劣らじと出立つたが、

松兵　中にも目立つた神傳組一きは優れて見えましたは、是ぞ全く先生の御威光、

兩人　恐れ入ッて御座いまする。

鐵心　何時もつれて混雜の中を悠々と練り出したは、よい心持ちであつたのウ。何はともあれ、子分のものが、此へ參つて揃ふまで、

丹五　あれなる茶店で暫時の間、

松兵　御休息、

兩人　遊ばされませう。

（ト（舞臺に來りて）鐵心齋床几に腰を掛くる。丹五郎は下手の茶店に向ふて横柄に。）

丹五　オイお客樣だぞ、お茶を持ッて參らぬか。オイ／＼誰も居ねエのか。ヤアからあきだ。氣の利かねエ茶店だなア。

（トつぶやきつゝ煙草盆を鐵心齋の前へ出す。）

鐵心　構ふな／＼。茶も唯今は欲しう無い。時に兩人、門弟の田畑彌九郎、先月廿七日に外出いたした其れ切で、今に歸宅いたさぬが、如何いたした事であらうな？

丹五　大かた千住あたりにしけ込んで、現をぬかして、遊んで居るので御座いませうが？

鐵心　イ、ヤ女にうかれて遊ぶと云つても、もはや夫より廿日の日數、子分の者に捜させても、更に行方の知れざるは、其筋の手に掛り、もしや捕はれたのではあるまいか？

松兵　日頃かうして鼻ッ張は強い樣だが、心底弱い田畑彌九郎、阿部川町の一件を白狀でも仕た日には、

丹五　先生はじめ、我々共が身の大事。

鐵心　ハ、、アそんな事はありも仕まいよ。

（ト平然たる顏付をして居る。）

（此時上手より天野鞍負、奴黒内をつれて出て來り、床几の前に突立ちて。）

鞍負　イカニ逸見鐵心齋、先ごろ向島にて出逢うたる天野

靱負、面體忘れは致すまいなア？

鐵心　ム、如何にも見覺えある大若衆、性こりも無く此所へ酒の相手に參つたのか？

靱負　いかにも相手に參つたぞ。其時の喧嘩の遺恨、サア立上つて勝負いたせ。

鐵心　ハテしをらしい心だて。しかし前髮立の子供上り、この鐵心齋の相手で無い、痛い目見ぬ其中に、早く此場を引いたがよいワ。

靱負　イ、ヤ引かぬ、靱負におそれて尻込いたすか？

鐵心　それ打つてしめい。

丹五／松兵　心得ました。

（靱負に掛るを。黒内押隔てゝ。）

黒内　助太刀やアなんねエぞ、懸ッて來るなら、おれが相手だ、向島にて、よくもおれを川中へぶち込んだなア。其意趣ばらし、かうして呉れべい。

（ト兩人を相手に烈しくたち合て、終に黒内は兩人を追うて下手に入る。舞臺にては鐵心齋靱負の兩人立向ひ、足場をはかりて、互に刀の柄に手を掛て睨み合ふ。）

（同時に上手より天野民部は片山又四郎、齋藏孫市、三浦大次郎、三木宮右衛門を引つれて出で來り、下手よりは曉雨、薄雲（白裝束）をつれ與兵衛も附添ひて出來り。）

曉雨　待つた／＼、其鐵心齋は是なる女の親の敵。

鐵心　ナント。

薄雲　ヤア逸見鐵心齋、いつぞや阿部川町の浪宅にて、そなたの刃に相果てた今西玄之進が娘のつるぢや。兩親の仇、立上ッて勝負しや。

鐵心　フウ誰かと思へば、松葉屋の薄雲だなア。敵呼ばはり尾籠千萬　そんな覺えは曾て無いぞ。

民部　卑怯なり、鐵心齋。向島にてそれなる伜の靱負が難儀、參り合せて救うたる今西がはたらき、其不覺に遺恨を含み、門弟子分を引つれて、今西夫婦を闇討に致せし惡事、田畑彌九郎、奉行所にて白狀なし、遁れぬ證據が上つてあるぞ。

鐵心　證據があがりやア百年目。薄雲、覺悟しろ。

（ト拔放つを、押止めて。）

靱負　ヤア待て鐵心齋。こちらの勝負を附けたる上で、其女の相手になれ。

鐵心　エ、面倒な小娃めが。

（ト是より鐵心齋、靱負の太刀打に成つて、靱負は受太刀に成る。又四郎等が出ようとするを、民部は止めて出さず。既に危く成るを見て、曉雨は薄雲を引つれて、尺八を持て進み。）

曉雨　お鶴が助太刀。鐵心齋受けて見ろエ。

（ト靱負に代りて鐵心齋と戰ひ、利腕をしたゝかに打ち、ひるむ所を打据れば。鐵心齋は刀を落して撞とすわる。）

（此時前後より（東西の花道より）鳶頭金兵衛先に立ち、曉雨の子分等多人數が揃ひの浴衣、祭禮の體にて、出で來りて。）

金兵　旦那、鶺鴒組の町奴、一人も殘さずぶッ締まして、

皆々　御座エました。

曉雨　ム、御苦勞〱。此方(こつち)も目出度う敵を討つぞ。

靱負　サア鐵心齋、立合はぬか。

（ト切て掛る、鐵心齋再び立上れども頗る弱つて太刀筋亂るゝを、靱負附込んで大袈裟に切下れば、鐵心齋どうと仆るゝ。曉雨刀を薄雲に持たせて。）

薄雲　親のかたき、覺え居つたか。

（ト留めを刺す。）

民部　目出度い。

曉雨　お目出度う御座りまする。

（皆々悦び祝ひて。）

――拍子　幕――

大森彦七

茲は伊豫國松山近傍の山道にて向う正面には連山の峨峨たるを望み半ば朽ちたる古き地藏堂（舞臺上寄）には地藏尊としるしたる額の左右に奉納の面二ツづゝを懸けたるを掲げありて其一面は鬼女の面なり、堂の傍には古き石の手水鉢青面金剛の碑等ありて後は樹木生茂る頃しも三月二十五日深更（午前三時頃）の景色なり。（幕明く）

武士菊間五郎太（編笠、四布袴、道服、腰帶、大小）郎黨猿又（太刀附、一刀）供男新太郎（大曲物と白木箱を天秤棒にて荷ふ）百姓男寅彦、熊六松明を持て立掛り途中にて出會ひ話の體なり。

菊間　イヤ其方共は久米村の百姓ではないか、此深更に打連れて何れへ參る？

新太郎　是は〳〵久谷の御領主菊間五郎太樣で御座りまするか、暗さは暗し思ひ掛無きお渡りゆゑ。

寅彦　お會釋も致しませず御無禮の段。

熊六　何とぞお許し。

三人　下さりませい。

（ト三人一同に下座すれば、）

菊間　其挨拶には及ばぬ事だが何で是へ罷り居るな？

新太郎　ヘイ外でも御座りませんが明日から三日の間は御堂の御庭に舞臺を掛け猿樂とやらのお催しがあるとの事。

寅彦　私共の御領主大森彦七樣も其猿樂の役者になりお舞ひなさると聞き及び。

熊六　どうか拜見致したいと存ぜしゆゑ申合せて三人が。

新太　夜中に村を立ちまして是まで參つて。

三人　御座りまする。

菊間　ム、扨はさやうであつたか、何にも明日よりして三日の間は御堂の猿樂去々年五月大森どの湊川の合戰に南朝方の張良孔明九郎判官義經の再來と迄言はれたる楠正成と云ふ大將に詰腹切らせて大手柄その恩賞にはあまたの知行所を下し置かれて身の譽れ其祝ひとして今度の猿樂大森殿は云ふに及はず大井今治越智丹原其外の大小名皆招かれて參る程に殊の外なる大賑ひ。

猿又　おらが所の殿樣は大森樣とは取別けて日頃からの御懇意ゆゑ此中よりしてお手傳ひ樂屋の世話はお持切で是から御堂へお越の所だ。

菊間　其方共も早う參つて詰掛なければ見物致す芝居は無

いぞ。
新太　ヘイ左樣なわけで御座りまするか、それぢや殿樣何とも以て恐入りまするが。
賓彦　どうぞ私共三人を。
熊六　お供にお連下さるやう。
新太　お願ひ申し。
三人　上げまする。
菊間　其願ひ聞屆けた然らば我共が後に附添つて參ると致せ。
三人　有がたう御座ります。
新太　お供のお方何分宜しくお願ひ申まする其所でお供をするからは其お荷物は私共が擔ぎませう。
猿丸　ナーニそれにやあ及ばねえよ、ほんの輕い荷物だから。
賓彦　でも御座いませうがマアお出しなさいまし。（ト奴より荷物を受取りかつぐ）
菊間　サア參ると致さう。
皆々　先づ入らつしやいまし。
（ト皆々打連れ山道を（上手へ）歩みゆく。）
（床の淨瑠璃になり）
竹本〽時は建武三年の春の暮二十五日の小夜深て往來絶る深山路の路邊に立てる辻堂の扉をそつと打開き
（ト地藏堂の中より扉を押開きて楠の息女千早姫（染物の着付、付帶の上に織物の裲を壺折に着ける）辻堂の緣に立出で菊間等の一行の後を見送りて、）
千早姫　今も今とて道行く人の噂を聞けば思ふに違はず大森彦七御堂の能に參るとて此道へは掛かるよな其通りを待受けて（ト思案の中に額の面を見て思ひ付たりと云ふ氣色にて）ム、それぢや。（額の鬼女の面を取下し鰐口の緒を切て面の紐と成し袂の中に入れ堂の緣に坐り柱に凭れ病人の體を粧ふ。）
竹本〽折しも此に道後の左衞門松明持たせて來りしがそれと見るより心に怪しみ
（ト道後左衞門近信（烏帽子、水干、附太刀、騎馬）家來○△兩人（半素袍、一刀、股立）一人は松明を持ちて（上手より）來掛りしが姬が緣側に惱める體を見て家來にそれと指圖して松明を突付けたれば姬は袖にて顏を隱す左衞門は馬より下りて近く寄つて。）
左衞　それなる女姓御身何人なれば唯一人此山中の小夜中に斯る所に居らるゝな？
姬　これは旅路に惱む賤の女道に迷ひて詮方無く是にやすらひ居りますもの。
左衞　シテ何れの人にて何れの旅路をせらるゝな？

姬　身は播磨路のものなるが亡き兩親の後世の爲高野の大師に願ひを掛け四國の靈場巡禮申す道すがらで御座りまする。

竹本〽云ふに左衞門小首を傾け。

左衞　ハテ賤の女に似合しからぬ詞遣ひ殊に容顏のあでやかさ其上にまた弘法大師の靈場を巡禮なすには用無き街道。

姬　エ、。

左衞　播磨路とは云はるゝが紛ふ方無き都方身柄も重き上﨟の供をも具せぬ一人旅何人にて御座あるな包まず素性を明されよ。

姬　成程詞遣ひの京訛りは都に奉公致せしゆゑ氏も素性もしらゆふの機織る業に日を送る言ひ甲斐も無きはしたもの必らず御不審遊ばしますな。

左衞　其言譯が猶更以て請取惡い今此國は治まつて兵亂無しとは言ながら五畿北陸の國々は南北に立別れ鎬を削る合戰最中此四國とて土居得能越智の一族其外南朝方の味方をなせば更に油斷ならぬ世の中察する所女姓には吉野の都の落人か？

姬　エ、。

左衞　左無くば新田楠の指圖を受け此國の樣子を窺ふ間者の類ひか？

姬　中々以て左樣なものでは御座りませぬ。

左衞　何にもいたせ風體烏亂の怪しき女引立て詮議に及ぶ。と申すは表面見るからやさしき上﨟姿何んで手荒き事を致さう身共は道後の左衞門近信とて近鄕近所に聞ゆる武士身が屋敷へ同道いたし篤と痛り送つて歸すサア身共と一所に斯うお出なされい。

竹本〽顏に似合ぬ猫撫聲いざさせ給へと手を取れば姬は
　其手を振拂ひ

姬　思召の程難有うは御座りまするが夜明を待つて松山へ參るものどうぞ御免なされて下さりませ。

左衞　其松山へ參りたくば身共がきつと送つて參るサア強情を申さずともマア一所に御座れと申すに。

姬　折角の御詞でもあなたと一所に參るのは否で御座ります。

竹本〽膠無き答に左衞門ハツタと眼を怒らせて

左衞　女と思ひ優しく申せば無禮の返答さう申すなら仕方が無い此左衞門が引立て當國伊豫の守護細川殿の檢斷所へ差出す、それ家來ども其女召捕れ。

家來　畏りました。

竹本〽畏まつたと左右より取らんと寄るを振はどき立
　樹に身を寄せきつと構へ

姬　ヤア理不盡なり道後の左衞門靈場巡禮致す女南朝方の

廻し者芳野の御所の落人と覺えも無い當推量細川殿の檢斷所へ引かるゝ罪はかつて無い道を明けて通さばよし違て手荒く扱はゞ武士たりとて容赦はせぬぞや。

左衞　口賢しき其詞イデ左衞門が生捕くれん。

（ト負けず劣らず爭ひしが遂に左衞門姫を取て押へ繩を掛けんとす。）

竹本へ斯る所へ伊豫國の住人大森彦七盛長御堂の庭に急がんとまだ夜深きに出立ちて道の露芝踏分けて山路をたどり來りしが夫と見るより進み寄り

（ト大森彦七盛長（烏帽子、直垂、附太刀）家來三人（不素袍）一人は松明を持ち二人は裝束櫃を荷ひ向ふ揚幕より出で來り互ひに松明を上げて顏見合せ。）

彦七　ヤアこれに御座るは道後の左衞門近信殿か？

左衞　大森彦七盛長殿で御座るよな？

彦七　此場の樣子と申すは？

左衞　さればなり大森殿是な女南朝方の間者と見たゆゑ唯今召捕る所で御座る。

彦七　ナニ南朝がたの間者とな？

竹本へ松明ふり立て盛長は姫の面影ぢつと見て態と驚き進み寄り

（ト彦七は自ら松明を取つて姫を見る。姫も亦大森彦七と聞きてぢつと見る彦七少し思案なしわざと驚きたる體にて。）

ヤア和御寮は住吉の神職津守の息女鈴姫殿では御座らぬか？　どうして當所へは參られた？　此彦七を尋ねてか？　エ、鈴姫殿左樣で御座らうがなア。

竹本へそれと悟りて調子よく

（ト彦七目配せにて知らすれば姫も漸く合點して。）

姫　いかにも妾は津守が娘大森殿思はぬ所でお目もじ致しお嬉しう存じまする。

彦七　此盛長も大慶至極しかし遠路の所をお越しとならばなぜ前以て御案内されざりしか？　いかに左衞門殿是なる女性はお聞きの通り住吉の神職津守の息女某とは近しき親類今度見舞の爲某方へ參るもの不審の筋は曾て無ければ某只今請取つて同道致す。

左衞　ム、貴殿の親類身寄とあらばお引渡申すであらうが何だか怪しい此場の樣子南朝くさいと知りながら。

彦七　ム、然らば年來忠勤なし湊川の合戰に楠判官正成を討取たる剛のもの北朝無二の忠臣たる大森彦七盛長を南朝方へ心を寄せ二張の弓ひく武士と疑はれてか左衞門殿。

竹本へ太刀に反うち詰寄れば

左衞　是は仕たり大森殿左樣には腹立られな貴殿のお身寄とあるからは近信敢て疑ひ御座らぬ畢竟は其女性播磨あ

りの賤の女と素性をお包みなされたゆゑつい某も怪み申した必らずお氣に懸けられな女性大きに失禮仕つた大森殿さらば是にてお別れ申す。

彦七　左衞門殿近日御意を。

兩人　得るで御座らう。

竹本へ怪しと心に思へども勇氣に恐れ左衞門は別れを告げてぞ去りにける

（ト左衞門は猶も怪しと思ひながら家來引連れ行過ぎる。）（下手に入る。）

竹本へ後見送りてしとやかに姫は形を改めて

姫　噂に聞いた大森どの思はぬ姿が此場の難儀お救ひなされし厚いお情有がたう存じます。

彦七　近づきも無き女性なれど日頃よりして邪推深く色好の左衞門近信大方それと察せしゆゑ早速の詞でお救ひ申したシテ御身には此夜深に何方へお渡りあるよな？

姫　サア御堂の庭にて猿樂のお催しがあると聞き拜見いたしに參るもの。

彦七　ハテ左樣で御座るか此彦七も其猿樂に列るため夜を冒して參る所。

姫　とてものお情大森殿御堂までの道すがらお連れなされて下さりませ。

彦七　オヽ何より以て安き頼み、いざ同道致すで御座らう

姫　有難う存じます。

竹本へ夜道をたどりゆきにけり

（ト家來松明を持ちて先に立ち次に大森彦七次に千早姫其跡より家來は櫃を荷ひて山道を歩みゆく。）

（舞臺上手の奥に入る此中辻堂を上手の奥に引込みて道具替る。）

（茲は以前の山道續き遙かに連山の起伏するを望み所所に青葉繁れる深山木殘んの櫻等ありて正面少し上手寄の岩間より山川流れて川中には飛々に石あり。）

（上手に竹本の座を設け下手に常盤津の座を設けたり。）

常盤へ彌生の末の若葉だち殘んの花の白雪も朧に見ゆる小夜中に雲の脚さへむら立てこだまに響く水の音。

（此淨瑠璃の中に大森、姫向うより出で來りて舞臺に來る。）

彦七　しなしたり昨日の雨にて此谷川に水增せしな川底淺き流れゆゑ歩渡りは安けれど女性の御身には便無き事汝等は松明荷物に手はふさがり。ハテ何と致したものであらうか、ムヽ好い事がある、いかに女性某が御身を負うて渡して進ぜう。

姫　ハテめつさうなあられも無い事見れば幸ひ川中に飛々

立てる石あればあれを傳うて參りませう。

常盤へ身もかろ〳〵と川岸の石を傳うて川中に立てば危き瀨枕に押流されん風情なり

(ト千早姬は裾をとり石を傳ひて川中に進み押流されんとす彥七は袴の裾を括りけるが之を見て川中へ入りて之を支へ。)

彥七　それ御覽なされい小川なれども此水勢女性の御身で歩渡りとは及ばぬ事サア我等が脊におかゝりあれ。

姬　それぢやと申してあなたのお背中を穢しましては餘りの憚り恐多う御座りますれば。

彥七　ハテ由無い遠慮お掛りなされと進め申すに。

姬　それでは恐入りまするがお仰にあまへてお背中に。

彥七　サア思ひ切てお掛りあれ。(と姬を負ふ)

竹本へどう〳〵と瀨り落つる谷川の流れを渡る折こそあれさつと吹來る夜風の空にきらめく北斗の光り不思議や姬の相好は忽ち變る惡鬼の姿鐵杖ならで氷の刃盛長目掛て切つてかゝる

(ト彥七は姬が乘たる石の前に背中を向けて負ひ一人の家來は松明を持て先に立てば二人の家來は荷物を擔ぎて後より續く此時烈しく風吹來り(風の音)千早姬は最前の般若の面を顏に冠り懷劍を右の手に持ちすつくと立つ是を見て三人の家來は分れて(上下に)逃込む彥七は身を替して。)

彥七　おのれ曲者。

(ト姬を水中に振落せば姬は身輕に石を傳ひて原の川岸に下立ちて、)

姬　父上の敵まつた大切の寶劍を奪ひ取りたる大森彥七そこ動くな勝負せよ。

常盤へ女ながらも稀代の早業かなたへはなれこなたへ飛びかげろふ稻妻蝶千鳥下弦の月影水の面岩に碎けてちら〳〵

竹本へコハ恐ろしき手並やとさすがの盛長驚きしが素より聞ゆる無雙の勇士右へかはし左にはづし隙間を見込んで躍り入りやう〳〵姬を取て押へ

(ト千早姬は懷劍彥七は持ちたる扇にて差上る月の光をたよりに烈しく立廻り彥七遂に姬を取て押へて)

彥七　ヤア何者なれば此盛長を父の敵寶劍の盜人と惡名付けて欺し討たんとは謀るよなイザ尋常に名乘を上げ仔細を語れよ聞くであらうぞ。

姬　イヽヤ斯く不覺を取る上は名も名乘らねば仔細も言はぬ只首討てよ大森彥七

彥七　言はぬとならば强ても聞くまい。

常盤へ照る月影に篤とながめ

今名乘らずとも御身の素性盛長大かた推量いたした此上

は仔細つぶさにお語りなくば繩打て都へ召連れ楠判官正成の息女云々なりと訴へて京洛中を引廻し御身に面恥さらさせようか？

姬　ナニ妾をば楠殿の息女とな？

彥七　お隱しあるな御身の目元鼻筋まで正成殿に生寫し殊には又某を父の敵寶劍の盜人なりと言はるゝからは疑の無い楠家の御息女。

姬　さう知られし上からは卑怯未練に包隱しは致すまい、いかにも妾は楠河內守正成が娘の千早何ゆゑあつて去年五月湊川の合戰に父上には詰腹切らせ菊水の寶劍其場にて奪ひ取ては立退きしぞ其恨を霽さんと待設けたる今宵の出會叶はざる其時には返討は兼ての覺悟いざ尋常に一命とられよ。

竹本へけなげな覺悟に盛長ハッと感じ入り

彥七　あつぱれの御覺悟男子も恥る御心底左りながら戰場の儀は格別なりと思されよ御身の恨を解かんため其日の軍のあらましを盛長語り申すで御座らう。

常盤へそれにて御ン聞きあられかし

竹本へ引起してかたへにすゑ

頃は建武二年五月二十五日の合戰に某手勢三百餘騎兵船に打乘つて經が島に打上たれば折しも合戰半過ぎ楠判官正成殿には左馬頭殿の御勢を引受〱打破り殘る所は七十餘騎湊川の北手なる一村ありける在家へ駈入り息を休めておはしたり。斯くと見るより某は願ふ所の楠殿いざ一戰と押寄せ見れば楠殿には御物の具を脫がせられ正に最期の御支度某をば御覽じてそれに寄せしは大森殿よないで正成が最期の道づれ來れや應と立上り再び鎧を召さんずありさま、某遙かに押止めコハ勿體無し楠殿御着長を取られし上は盛長何とて手向ひ申すべき唯此上は尋常の御最期御心靜かに遊ばされよまツた今生に仰せ置るゝ御事あらば御使を立てさせ給へ路次の程は盛長が無事に計ひ候はんと申したり。

姬　シテ其時父上は何とお答へなされましたなア？

彥七　楠殿はニッコと笑ひ忝し大森殿故鄕へは旣にはや最後の使を立たれば申置く事更に無し此上の御芳志には臨終の際は雜人の妨げ無きやう願ひ入るとの御詞。心得たりと某が手勢を以て守護せしに楠殿は容を改めいざや盛長介錯あれと首差延て待たまふ。あな用がましや御生害の後にこそ御首級を賜はらめ日本一の智勇の大將其生首をかゝん事天の冥罰恐ろしと御辭退を申せしぞ。

姬　シテ御最期の御狀況は？

彥七　楠殿はうなづかせ、しからば最期を急がんと臨終の正念お心靜かに唱へさせ、いざ正季冥土の旅づれ打立たんと御刺違へて御生害御首級は某これを賜はつて足利殿

の御實檢に備へたり。

姫　シテ〳〵菊水の寶劍はいかゞなされて御座りましたな。

彦七　寶劍なりとは心付かず楠殿の御冑太刀刀と諸共に足利殿の御前に出せし所足利殿には其刀御手に取つて戴きたまひ、いかに盛長此刀こそ菊水の御劍忝くも先帝御手づから正成に賜はらせらるゝ稀代の寶劍戰ひ治まるそれまではしかと汝に預け置く大切に守護せよと將軍家よりお直の御沙汰。

姫　扨は足利尊氏殿よりお預りになりましたか？

彦七　いかにも預り奉り肌身放さず守護いたして罷在る。

姫　フム。

彦七　斯る次第であるなれば楠殿の御首級を賜はつたる此盛長御身の爲に敵と言はるゝ身柄にあらず又菊水の寶劍とても其如く足利殿より預かつたる御品尤も楠家に取ては無くて叶はぬ家の重器御執心も道理ゆゑ進ぜ度は候へども心に任せぬ武門の意氣地事の仔細は斯の通りお分りありしか千早姫。

竹本へ事をわけたる物語り聞くに涙も瀧津瀨や咽べば川の水増して胸もただよふばかりなり姫君御聲曇らせて

姫　其お物語を聞くからは女心の淺果に御身を父の敵と怨み寶劍の盜人と思ひ込んだは妾があやまりお許しあれよ大森どの。

彦七　遉がは楠殿の御息女御落意あつて某も大慶夫に就ては此伊豫は南朝方の御敵地長居あつては御身の上甚だ以て氣遣ひなれば片時も早く御立ちあつて疾々河內へ歸られたまへ。

姫　やさしいお詞有がたう御座りまするが、そも御身を敵と思ひ菊水の寶劍取返さんと一途にはやり思ひ立たんとせし折節母上それと御察しあつてか由無き事を望むなと事によそへて御意見ありしを女心の一筋に仇になしての妾が家出責ては寶劍手に入れて弟の正行正儀に得させんものと願ひし事の水の泡どの顏さげておめ〳〵と今更河內へ歸られませう、とてもの御芳志大森どの御身の手にかけ此場にて妾を殺して下されよ。

彦七　切なるお心お察しは申せども死は易く生はかたしと古人の金言失禮ながら女性の御身で遙々四國へ押渡り此盛長に面會あつて楠殿の御最期の仔細を御聞ありし事遖れ一ツのお手柄なれば短慮を押へてちツとも早く御立ちあれよ。

姫　殺さぬと御意あらば妾が賴みもハヤ是まで。

常盤へさはさりながら恥かしや身は片よりの苧環に繰りてかへらぬ朽糸のみだれてたゆる玉の緒を兼て覺

悟の上なれば岩屋の中か淵の底せめて死骸を隠し置き恥を包むが身の言譯お暇申す大森殿。

常盤へ心の覺悟死出の旅力なく／＼立ちたまふ御有様ぞ痛はしき

竹本へ盛長暫と押止め

彦七　アイヤ待たれよ千早姫御身正しく御生害とお覺悟あるを知りながら見殺しするは無情の至り御身の孝心義烈に感じ大森彦七盛長が今改めて菊水の御劍御譲り申すと致すで御座らう。

竹本へ腰の刀を取りぬきて恭しく差出せば

常盤へ姫君ぢつと見たまひて

姫　まことや情を知るを武士と名るものと聞きつるに今ぞ知つたる大森殿のお情け飛立つ許りにお嬉しうは御座りますが足利殿より預りの寶劍後日にお尋ねある時に御身は何と言譯をなされまする御所存か？

彦七　サアそれは。

姫　人に情のあるからは我にも情の無うてならうか妾が願ひの叶ふため御身に災難掛けましては情を仇にて報うも同然お志しは忝ないが其寶劍のお譲受け御辭退申すで御座りませう。

常盤へ情の義理にしがらむは男まさりの氣象なり

竹本へ盛長殆ど感じ入り思案にもろ手をこまぬきしがはたと忽ち膝をうち

彦七　其御辭退無用／＼楠家の息女千早姫に此菊水の寶劍を譲らばこそ惡しからめ幸ひなるかな鬼女の面楠判官正成殿死靈現じて惡鬼となり神變不思議の通力に此盛長を惱まして寶劍奪ひ去つたりと世間に披露いたさんに何の障りが御座らうやサア其面を再びかけ惡鬼と成て此寶劍奪ひ取られよ正成殿の御息女。（と寶劍を差出せば）

姫　有難や忝なや大森殿生々世々の御厚恩お禮は詞に盡されませぬ。

常盤へ再び掛くれば忽ち變る鬼女の形寶劍取てすつくと立ち

姫　楠判官正成が朝敵調伏せん爲め奪ひ返すぞ大森盛長。

彦七　出かされたり千早姫併し其打着にては人目を包むに便りなし、コレ着かへて早う／＼。

竹本へ櫃の中より取出す衣は黒雲稻妻や變化を縫ふ唐織を

常盤へ忝なしと身に纏ひ曉近き明星のきらめく光りにちら／＼と

竹本へ見えつ隱れつ惡鬼の姿

常盤へ見失ひてぞ失せにける

（と彦七は櫃の中より猿樂に用ふる唐織の法被を出して與ふれば千早姫は此前に脱たる袿衣を其儘に捨置き

右の唐衣を冠り鬼女の面を掛け寶劍を手に取り惡鬼の樣に成て（向へ）立去る彦七は千早姫の姿を見送つて、）

彦七　アツ驚き入たる姫の孝心。（捨石に腰打掛け案じ入る）

（此時向うにて道後の左衛門。）

左衛　大森殿〳〵彦七殿は何れに御座る〳〵？

竹本〽聲を限りに道後の左衛門家來小者を引連れて馬に鞭打ち駈來る

（ト道後左衛門馬上にて長刀を持ち家來兩人松明を持ちて先に立ち其後より家來數人大森の家來も打交り出來れば彦七はわざと茫然となりて居る左衛門は彦七を抱起し介抱なして）

左衛　大森殿如何なされた〳〵變化にお出會ありしと聞き道後の左衛門近信が加勢として駈付けたり氣を慥かにお持ちあれよ大森殿。

竹本〽傅けり介抱なしければ彦長活と眼を開き

彦七　おのれ正成此寶劍に執心殘り鬼女と成つて奪はんとは我も名に負ふ大森彦七盛長なるぞ、やはかおのれに渡さうや。

竹本〽虚空をにらんで獨言身を構へてぞ立たりける。

（ト俄に狂氣の體に成る、是に驚いて）

左衛　コレ大森殿何をなさる氣を鎭めて委細の樣子此左衛門にお語りなされい。

彦七　オ、承知いたした。

（ト又茫然成る左衛門は傍に落ちたる姫の袿衣を見て、手に取上げ、）

左衛　ヤア此袿衣こそ先程出會ひし怪しき女が着用なしたる品なるかム、扨は變化の鬼女と言うたは。

（ト怪しむを彦七ははつと驚き起上りて其袿衣を已が頭に冠り左衛門が障るを突退て其袿衣を川中に投込み扇を開いて狂亂の振事になる。）

竹本〽此頃都にはやるもの夜討強盜僞綸旨召人早馬うそ騷ぎ

常盤〽俄大名迷ひもの安堵恩賞うそ軍本領放るゝ訴訟人文書入れたる細つゞら

竹本〽追從讒人禪坊主下剋上する成出もの器用の安否沙汰も無く漏るゝ人無き決斷所

常盤〽きつけぬ冠り上の衣持も習はぬ笏持ちて內裏交はり珍しや

竹本〽賢者顏なる傳奏は我も〳〵と見ゆれどもたらしなりける僞りは愚なるにや劣るらん

常盤〽なま中美物に飽みちてまな板烏帽子ゆがめつゝ氣色めきたる侍が黃昏時に成りぬれば浮かれて步く色好み

竹本〽内裏をがみと名を付て人の妻とも浮れ女はよその
　見る目も心地あし
(ト此中彦七は左衞門其外の者を相手に狂亂の振あり
　果は左衞門が乘て來りし馬に目を付けて。)
彦七　ヤア其前に立たは盛長が祕藏馬よな?
(ト乘らんとするを左衞門支へて。)
左衞　コリヤ理不盡なり大森殿身共が逸物何と召さる?
彦七　ナニお身さまの逸物とな?
常盤〽一もつ二もつ大物の浦に漕ぐ船エッセ〳〵〳〵お
　つゞら馬がシットン〳〵シットン〳〵イヤシット
　ン〳〵〳〵。
(ト狂ひながら左衞門を突退けて馬に乘り。)
常盤〽なまり作りの大刀太刀より大きくこしらへて前下
　りにぞさしほらす
竹本〽ばさら扇の五ッ骨ひろごし瘦馬薄小袖日錢の質の
　ふる具足
常盤〽一座そろはぬゑせ連歌在々所々の歌連歌
竹本〽點者にならぬ人ぞ無き
常盤〽天下一統めづらしや
竹本〽御代に生れて樣々の
常盤〽事を見聞くぞ不思議なる
竹本〽京わらんべの口ずさみ
同音〽十分一をもらすなり〳〵
(ト馬上にて狂亂の態ありて。)
竹本〽大森またもや虛空を睨み
彦七　ヤア卑怯なり楠正成寶劍奪つて逃去らんとは穢き振
　舞正なうも盛長に鎧の總角見せたまふかオーイオーイ。
竹本〽返せ戻せと指招き何地を當と白眞弓矢聲を掛けて
　ぞ馳せにける
(ト彦七は扇を擧げて虛空を招きながら向うに入る左
　衞門は立て見送る。)

――幕――

榎本虎彦篇

名工柿右衛門　（三幕三場）

序　幕

肥前伊萬里有田屋の場

役　名

有田屋五兵衛、同女房おいま、同悴平三郎、同娘おしげ、番頭與九郎、手代傳六、寅助、榮吉下女おまる、丁稚松太郎、松浦舊臣中里兵太夫同妻淺茅、同娘おちよ、柿右衛門娘おつう等。

肥前伊萬里有田屋の場　本舞臺上手に倉の戸前を見せ、入口より裏口突通して向う明るき海の遠見、土藏に續きて一間の暖簾口、此の下手四間常足の屋體、正面陶器を陳べたる戸棚、眞中大阪格子の錢入、下手へ折廻して檐の出入、二重に火鉢、座蒲團等の設備よろしく、都て肥前伊萬里の陶器問屋有田屋中の間の體。手代傳六、二重のよき處に住ひ、仕切の書附を書き、手代榮吉、寅助、倉の前にて荷造りをして居る。流行唄に祭禮の鳴物を冠せて幕開く。

榮吉　寅助どん、あのダンジリの囃子を聞かつしやれ。餘所はお祭で遊んで居るのに、用をして居るのは内ばかりぢや。

寅助　こなたは先刻から溢してばかり居るが、横町の女とお祭を見に行く約束でもしたのであらう。

榮吉　そんな意氣筋ぢやア無いが、あんまり内のだんながわからないから、愚痴も出るのさ。

寅助　モウ少しだ我慢さつしやい。

傳六　榮吉どん、大黒丸は今夜出帆の筈だ、大儀だが、船へいて、長崎へ送る荷物がまだ殘つて居ると、さういうて下さい。

榮吉　承知しました。

（ト榮吉は荷物をかつぎ、倉を通り拔けて入る。下女おまる銚子を持つて、正面暖簾口より出て、二重の奥へ往きかけるを呼び止めて。）

傳六　お客樣はまだ中々歸りさうにも無いかな。

まる　どうしてどうして、大旦那とおかみ樣が下へも置かぬお持成し、夜にならねば、お歸りには成るまいわいな。

（ト言ひ捨てゝ入る）

寅助　奥のお客樣はありやどなたで御座いますな。

傳六　もとは平戸の松浦樣の藩臣中里兵太夫樣で、御一緒

に來て御座るのがお孃樣と奧樣ぢや。
寅助　そんなら、アノ振袖が若旦那のお嫁樣を極つたので御座いますか。
（ト此處へ下手より丁稚松太郎出で來りて。）
松太　うまいなうまいな。あのぽちやぽちやとした美しい振袖と若旦那とが御祝言の杯。モシ傳六さん。やけますな〳〵。
傳六　エヽ、ませめ。何をぬかすのぢや、やけてからが、どうなるものか。
松太　だからお前樣はアノおつうさんになされませ。氣立もよし、器量もよし、好いお家さんに御座りますぞえ。但しさきでうんといふか、どうだか、一寸考へものだ。
傳六　おのれ、どこでそんな生意氣な事を覺えてうせをつた。
寅助　今時の子供は是だから仕樣がない。私も年中內の餓鬼に馬鹿にされて居ます。シタが傳六さん。アノ振袖が若旦那のお嫁になるはよいが、おつうさんはどう成るのでせうな。
傳六　サア氣の毒なはあの子だ。もとは大旦那もおつうさんを嫁にするつもりで、柿右衛門の家から引き取つて來たらしいが、身上がよくなるにつけ、內の職人の娘を嫁にするのがいやになつたのだらうよ。
松太　怪しからん譯ですな。一體內のだんつくが惡い。（ト思はず大聲なして）オツト內證々々。
（ト口の端を抓りながら下手へ入る。此の時奧にて。）
いま　おつうは何をしてぢや。おつう〳〵。
寅助　やかましやのお家さんが又怒鳴つて居ますぜ。
傳六　きまりをやつて居る。寅助どん、手を貸して下さい。
（ト兩人は荷物を運びて、倉の中へ入る。合方になり、下手の正面よりおいま、四十五六の女房の拵へにて、娘のおしげを連れ、キヨロ〳〵しながら出で來り。）
いま　奧はお客で忙しいに。おつうは何處へいつた。おつう〳〵。
しげ　モシお母樣。おつうさんは臺所で用をしてゞ御座んせう。そんなに呼ばないがよう御座んす。
いま　何をして居るか、わかつたものぢやない。おつうおつう。
（ト呼ぶ。正面の暖簾口よりおつう、島田髷、縞物の着付、前垂掛にて、出で來りて。）
つう　ハイ、おつうは此處に居ます。
いま　此處に居るも、よう出來た。もちつと目端を利かしたが宜い。お祭りの時などは、常の日よりも忙しいが、奉公人の習ひぢや。サア〳〵、早う奧へいて、お給仕をしや

（ト追ひ立てる。此の時、奥より平三郎、羽織、着流し、商家の息子にて、出で來り。）

平三　お母様。おつうは内の奉公人ぢや御座りませぬぞえ。

いま　平三郎、お前はをかしな事を言ふ。おつうが、奉公人でなくて、内の何ぢや。

平三　此の有田屋には、大の恩人、柿右衛門の娘御、内のおしげと同じ扱ひに致さねば成りませぬ。

いま　何を言やるぞ。おしげは内の娘、おつうと同じやうには成りませぬ。

平三　すりや、お母様は、此の身代が誰のお蔭で出來たと言ふ事を忘れておしまひなさいましたか。それでは濟まぬでは御座りませぬか。

（ト是にておいまはぐッとつまる。おつうは前へ出で。）

つう　ア、まうし、私の不束から、お家様にお腹を立てさせては濟みませぬ。私が奥へ參り、お給仕をしさへすれば、宜しいので御座ります。

（ト立ちかけるを止めて。）

平三　おつうさんばかり行く事は無い。おしげも一緒にいて、お客の取持ちをしやれ。

しげ　ほんにさうで御座んした。奥は私一人で澤山ゆゑ、おつうさんは仕かけた用をして下さんせ。

つう　イエ、私がお給仕にまゐります故、お前様は矢ッ張り此所に。

しげ　ハテマア、臺所へ御座んせと言ふに。

つう　それではお願ひ申します。

（トおつうは暖簾口へ、おしげは奥へ入る。入違ひに、五兵衛、羽織・着流し、老いたる町人にて出で來りて。）

五兵　コレ悴、今聞いて居りやア、柿右衛門を有田屋の恩人ぢやと言うて居たな。

平三　ハイ、左様申しました。

五兵　たはけ奴、柿右衛門の焼いた皿を長崎へ持つて行きオランダ人に賣つたは、此の五兵衛の眼が利いて居たからだ。そのお蔭で、異國までも名を知られるやうに成り居つた。それに又十五年此の方は、明朝の萬暦赤繪を日本で造らうと言ふ及びもない望を起し、月日を送る柿右衛門其日の糧に困り、飢ゑて死なぬは、五兵衛が情た。

いま　其の上に、娘まで引取つて、世話をしてやつて居るのぢやもの、下女同様にこき使はねば合ひませぬ。

平三　それはお母様、餘りで御座ります。お父様だつて、おつうさんを内へ引取つて來た時には、下女にして使ふと言ふ約束では無かつた筈。

五兵　エヽ、それをおのれが知つた事か。

平三　デモ、あなたのおため故、申さねば成りませぬ。

（トキッとなる。此處へ、奥より中里兵太夫、羽織、袴、身分ある武士にて、出で來り。）

兵太　是は、お内輪の御内談中へ罷出で、お邪魔致した。

五兵　イエ、とんと差構ひは御座りませぬ。（ト奥に向ひ）コレ誰ぞお蒲團を持つて來ぬか。

兵太　イヤ、構はつしやるな〳〵。

（ト此の時下女おたき、座蒲團を持つて來る。兵太夫着座して。）

倅、今日はお手厚きお持て成しにて、娘も愚妻も、殊の外喜んで居りまする。

五兵　土地の祭禮に付き、お招ぎは致しましたが、何の風情も無く、御迷惑で御座りませう。

いま　どうぞお心置き無く、御ゆるりとお遊び下さりませ。

五兵　奥様もおちよ様もさぞお退屈であらう。そちも忰も奥へ行つて、お相手したが宜い。

いま　ほんに、私とした事が、御客様を捨て置き、申譯が御座りませぬ。

平三　私は一寸店に用が御座りますゆゑ、お後からまゐります。

いま　それでは御免下さりませ。

（トおいまは兵太夫に會釋して奥へ、平三郎は店の方へ別れて入る。）

兵太　倅、五兵衛殿、先日もお話し致した通り、娘ちよは家内の連子にて、武名かくれ無き成松遠江守の曾孫にあたり、立派な系圖を所持致して居る。今度御所望に依り、娘を差上ぐる御約束はいたしたが、此方よりも申し出でたる箇條は御承知下すつたで御座らうな。

五兵　箇條と仰しやりまするは、お支度金の事、並びに御兩親様へ御養老金を、差上げまする事で御座りますか。

兵太　眞に赤面の至りなれど、我等が不如意、お察しが願ひたい。實は娘ちよには、相當な武家から縁談も屢々御座つたが、主君より頂戴の知行にて暮しを立てる武家へ嫁がせ、不自由を致させるよりは、縦へ町人でも、富裕な方へ縁付かせるのが、當人のためと存じ、妻にも得心致させた様な次第で御座る。

五兵　願うても無き今度の良縁。かやうな仕合せは御座りませぬ。身分こそなけれ、金銭には事を缺きませねば、すべて仰せの通り差上げまするで御座りませう。

兵太　それは千萬忝けなう存ずる。然らば、系圖の一巻は婚禮の節、お手渡し致さんが、一應御覧に入れて置かんと、今日是へ携へ參つた。イザ御披見なされい。

（ト包みの中より系圖を取り出して、五兵衛に見せる。）

五兵　成程、立派なお家筋で御座りますな。

兵太　遠江守事は、鍋島家に取つては大の忠臣。この系圖を以つて願ひ出づる時は、武士にお取立あるは必定で御座る。

（ト見て居る。此の時、下手より以前の平三郎出で來りて。）

平三　唯今、南川原の柿右衛門さんが店へ見えられました。

五兵　又、金を貸せと言ふのであらう。

平三　ハイ急に入用ぢやと申しました故、私が持合せを用立て返しました。

五兵　いくら貸してやつたのか。

平三　十兩貸してくれと申しましたが。それでは不足と存じまして、十五兩持たせて返しました。

五兵　名人貧乏とは彼奴の事ぢや。時に倅、よい折柄ぢや。是を拜見しやれ。

平三　コリヤ系圖で御座りますな。

五兵　オヽ、さうぢや。其方の妻と呼捨てにするのは勿體ないが、此方からお願ひをして、御承知下すつたおちよ樣の系圖ぢや。ナント町人には過ぎた嫁女であらうがな。

平三　仰しやる通り結構すぎた縁談。是は拜見せずともよろしう御座ります。

（ト系圖を返す。）

兵太　然らば輿入の節まで、我等が預かり置くで御座らう。

（ト懷中する。奥よりお丸出で來りて。）

まる　奥樣がお待兼ねで御座りまする。

兵太　いかさま、此方の話に氣をとられ、とんと忘れて居た。然らば、五兵衛殿。

五兵　どうぞ奥へお出で下さりませ。

（ト兵太夫におまるついて奥へ入る。）

平三　お父樣、おちよさんを嫁に貰ふのは、私が不承知で御座ります。

五兵　そんなら、まだおつうを思ひ切れぬのか。意氣地の無い奴だな。

平三　ハイ、私は意氣地が御座りませぬ。兼々お願ひした通り、どうぞおつうと夫婦にして下さりませ、迚も私にはお父樣の仰言る樣な不人情な眞似は出來ませぬ。

五兵　わりや不人情と言ふ事をば、知つて親に不孝と言ふ事を知らぬか。中里さんのお孃樣をわれの嫁に貰はねば、五兵衛が望みは叶はぬが、それでも親に楯を突くか

平三　あなたのお望みを破るのは、重々不孝では御座りまするが行末どのやうにも孝行をつくしませう程に、おつうと添はせて下さりませ。

五兵　スリヤどうあつても親の詞は聞かれぬか。

平三　是ばつかりは、許して下さりませ。

五兵　モウ宜い。勝手にせい。おつうと添ひたけりや、添へ。

其の代り、勘當ぢや。二度と内へ足踏みはならぬぞ。たつた今出てゆけ、置く事は成らぬ。トツト此所を出てうせい

平三　出て行けと仰言るなら、出てまゐります。

五兵　可愛いおつうを連れて、乞食をしろ、其の時に成つて、ア、親の言ふ事を聞けば、我身のためにも、おつうのためにも、よかつたと後悔するなよ。

（ト言はれて、平三郎は差俯いて居る。五兵衛は言葉を和げて。）

さうは言ふものゝ、われが憎うて言ふのぢやない。胸に手を置いて親の言葉をよく聞けよ。二十年來仕合せよく分限には成つたものゝ、町人は何處まで行つても町人ぢや。此の上は身分をたかめ、ゆく／＼はそちを侍になさんものと、隨分金を遣つて見たが、素性系圖が無い故に何時も望みが叶はなかつた。處が、アノ中里さんが浪人なさつて、伊萬里へ御座つた。そのお孃樣は、成松遠江守と言ふ歷い武士の血筋で、鍋島家のお家にもゆかりのある家柄と聞きお勝手向の不如意を幸ひ、系圖を目當てに申込んだ今度の緣談。大事の／＼緣談ぢや。それをわれが厭ぢやと言へば、日頃の望みは打ちこはれた。親の志破るも、遂げさせるも、われの心一つ、おつうは五兵衛が引き受けて、爲になるやうにしてやるから、否でもあらうが、聞いてくれ。コリヤ平三郎。親が頼む／＼。

（ト說得する。平三郎はだまつて居る。此の時上手より以前の榮吉出で來りて。）

榮吉　今大黑丸まで行つてまゐりましたが、潮時の都合で、直に出すと言つて居ました。

五兵　オヽ、大黑丸は長崎へゆく筈であつたな。（ト五兵衛思入あつて）平三郎今の返事はどうするのだ。否か應か。早くしろ。

平三　お父樣の仰有る通りに致します。其の代り、おつうが行末を、何分よろしうお願ひ申します。

五兵　そりや、わしが引受けた。能く承知してくれた。（ト店の方に向ひ）番頭どん／＼。

（ト呼ぶ。店の方より番頭與九郎出で來りて。）

與九　御用で御座りますか。

五兵　直に大黑丸へ使ひを走らせて、長崎へ便船する者が一人あるに依つて、それがゆくまで、船を出しては成らぬと言つてやつて下さい。

與九　畏りましたが、長崎へは誰がゆくので御座りますか。

五兵　當分、伜をあちらの店へやつて置くつもりぢや。

平三　そんなら、私は長崎の店へ。

五兵　そちの料見がきまつたからは、離れて居るが互ひのためだ。

與九　サア若旦那、すぐにお支度をなされませ。

（ト與九郎、平三郎を促して奥へ入る。おいま此の前より立聞して居たが、此の時出で來りて。）
いま　どうなる事かと心配しましたが、よい鹽梅に平三郎が得心して、是で私も安心をいたしました。
五兵　わしの腕前はこんなものぢや。ハヽヽヽヽ。
いま　それでは、平三郎が出かける前に、おちよ樣に一寸逢はせておかねばなりますまい。奥へいつて申し上げて來ませう。
（トおいま奥へ入る。上手より與九郎出で來り。）
五兵　番頭どん、平三郎の支度はモウ出來ましたか。
與九　今奥でお支度中で御座ります。就ては私は船までお送りいたしませう。
五兵　どうぞさうしてやつて下さい。
（ト此の時下手より兵太夫先に、妻淺茅、武家の女房、娘おちよ、振袖姿、おいま、おしげ、おまる、ついて出で來り。）
兵太　平三郎殿には、俄に長崎へお立の由。今日はゆつくりお話をいたさうと存じたに、殘念な事で御座る。
淺茅　運合よりは、娘がどのやうに本意なう思うて居るか知れませぬ。
ちよ　平三郎樣は何時頃お歸りなさるので御座んせうな。
五兵　二三ヶ月經てば、キット歸つてまゐりまする。
兵太　いづれ祝言は、今年の暮。
淺茅　娘、嬉しからうなう。
ちよ　アイ。
（ト此の時奥より平三郎、着替をして出で來り。）
平三　それぢや、お父樣。奥樣。おちよ樣。お姑樣暫くお目にかゝりませぬ。
兵太夫樣。奥樣。おちよ樣。是で失禮いたします。（ト挨拶して思入）コレ妹。おつうさんが見えぬ樣だが、見て來てくれ。
しげ　ハイ。おつうさん〳〵。
五兵　おつうなどは何うでも宜い。出船を急ぐ。早うゆきやれ。
（ト急き立てられて、平三郎立上る。暖簾口よりおつう泣顏をかくして出で來り。）
つう　平三郎樣、御機嫌よろしう。
（ト精一杯に思ひ入あつて言ふ。）
平三　おつうさん。
（ト言ひながら近寄る。此の時おちよ香箱を持つて前へ出で。）
ちよ　此の香箱を私と思うて持つていつて下さりませ。
（ト差し出されて、平三郎當惑の思入。）
兵太　娘の餞別、お氣には入らぬか。
五兵　何故、頂戴してゆかぬのだ。

平三　然ら戴きます。(ト餘儀なく受取る)

與九　サア御出でなされませ。

(ト與九郎、平三郎について上手へ行きかける。一同は見送る。おつうは脇を向いて泣き入る。此の體よろしく木無しにて。)

――幕――

二　幕　目

柿右衛門内の場

役　名

酒井田柿右衛門、同姉おつう、同妹娘おたね、弟子栗作、有田屋五兵衛、番頭與九郎、丁稚松太郎

柿右衛門内の場　本舞臺眞中四間の處草葺屋根、上手二間常足の二重、琉球表の疊、正面暖簾口、續いて一間の戸棚、中仕切、上は二枚の小襖、下は陶器を亂雜に入れてある、横手壁、二段に棚を設け、素焼の陶器が置いてある。下手二間落間、正面壁、此の處にも架を設け、上の架には古葛籠下の架にはまだ燒かぬ壺茶碗等を並べる、横手に竹の櫺子窓、落間の隅に轆轤を据ゑ、その傍に土を搗く臼杵、本舞臺上手に後へ下げて離れ家の入口。眞中三尺の開き戸、上手の窓は障子を締め切る、此の前に赤く熟した實のなつて居る柿の樹、其の下に板を横にして轤皿や鉢の形をした土器を干してある、いつもの所に門口、竹の編戸、柴垣、此外奥の方へ坂道、向う紅葉したる雜木林、都て有田燒右衛門内の體。午後三時頃、爰に栗作轆轤の正面に居坐り、仕事をやめて土を見て居る、おたね臼の上に上り竹竿、五布風呂敷を括りつけたるを架と鴨居の間に渡しかけて居る。此の體よろしく在郷唄にて幕開く。

栗作　おたねさん。うつとしいからお止しなさい。

たね　それでもお前が私の方ばかり見て、嫌な話をしかける故、見えぬ樣に斯うして置くのだよ。是で宜い。(ト下りようとして)　オヽあぶない。

(ト臼の上にしやがむ。栗作立つて、おたねを親切に助けおろす。)

たね　かうして置けば、お前の方から見えツこはない。日が短い故、精出して仕事をおした。

(トおたねは二重の上手へ坐り、素燒の花瓶へゴスで畫をかく。)

栗作　なんぼ精出せと言つても、おたねさんの顔が見えないぢやア、仕事をする張合が無い。

たね　ぐづ〳〵言つて居ないで、彼方(あつち)へいいて仕事をおしと

言ふに。

（ト栗作を風呂敷の蔭へ連れ行き、元の所へ坐りて、花瓶を取り上げ、畫の位置を見て居る。栗作風呂敷の綻び目より覗き。）

栗作　おたねさん。モウ一言いはせて下さい。是つきり話はしないから。

たね　まだ何か言つて居るのかえ。

栗作　お前に此方向かせようと思つて、それで聲をかけたのぢや。

たね　アレ綻びから覗いて居るのだね。本當に困つた人だ。そんなら斯うしよう。今日の夕方まで一言でも話をしかけたら、是から一月の間お前と口をきかない故、さう思つておゐで。

栗作　それは大變だ。仕方がないから、壁と睨みつこだ。

（ト轆轤をまはして居る。おたねは花瓶に畫を描いて居る。向うより有田屋五兵衛、羽織、着附、ぱつち、雪駄にて出で來り、直に舞臺に來りて。）

五兵　ハイ御免よ。（ト内へ入る）

たね　有田屋の旦那様。ようお出でなさいました。

五兵　親爺は内に居りますか。

たね　ハイ、細工場に居りまする。

五兵　又赤繪の工風か。無駄な事を。（ト苦笑ひして）時に利右衛門の内へ使ひをやりたいのだが、誰ぞいつて來ては呉れまいか。

たね　内の栗作をやりませう。栗作。

（ト呼ぶ。風呂敷の蔭より栗作出て。）

栗作　お出でなされませ。

五兵　利右衛門の内に番頭の與九郎が來て居る故、わしが此處で待つて居る事を一寸知らせて來てくれ。

栗作　承知しました。（トおたねに向ひて）それぢやアおたねさん。一ッ走りいて來ます。

（ト下手の坂道へ入る。）

たね　むさくろしうは御座りますが、此方へおあがり下さりませ。

（ト平舞臺へ下りて、離れ家の開戸を叩き。）

父さん／＼。お店の旦那様がお出でおやぞえ。父さん父さん。

（ト幾度も叩き、此方へ來りて。）

今に出てまゐるで御座りませう。どうぞお敷き下さりませ。

（ト座蒲團を出して。）

ドレお茶でも入れてまゐりませう。

（ト奥へ入る。下手の坂道より番頭與九郎、羽織、着附、ぱつち、尻端折にて出で來り内へ入り。）

與九　お待遠うさまで御座りました。

五兵　オ、番頭どん、例の談はどんな工合であつたな。

與九　お喜びなされませ。有田中の窯主を買ひ占める談が出來ました。此の上は約束書へ判を捺せば宜しいので、一同利右衛門の内へ集り、旦那のお出を待つ事になつて居ります。

五兵　それは御苦勞であつた。併、番頭どん、俺も身代半分をかけてする大仕事故、よく考へてかゝらねばならぬ。

與九　御尤で御座りますが、兼て申上げました通り、有田の陶器を積み出す高は年々十萬あまり、其の利得の何萬兩を一手で握らうと言ふ旨い話。危い所は御座りませぬ。

五兵　今日の所では少しも氣遣ひは無いが、此處の親爺が工風を凝して居る赤繪の皿が本當に出來た日にや、今の樣な有田燒は二束三文ぢや。それを考へると買占めも中々危いものぢやて。

與九　失禮ながら、旦那樣のお言葉とも覺えませぬ。あのうつそりの柿右衛門に赤繪が出來てたまりますものか。又出來たなら、其の時は金の五十兩もやつて祕傳を傳授さすのは譯の無い事で御座ります。そこらは此の與九郎におまかせなされて下さりませ。

五兵　成程こなたの言ふ通り、金に渴ゑて居る柿右衛門、どう共話はなるであらう。

與九　其の替りには此の與九郎に今度の御褒美として、店をお出し下さりませぬか。

（ト言ふ顏をヂツと見て。）

五兵　番頭どん、好い加減にして置かつしやれ。有田屋の暖簾の光りを頂いて居るだけで澤山ぢや。店などはとんでも無い。嗜まつしやれ〳〵。

（ト右の唄にて下手より有田屋の丁稚松太郎出て來りて。）

松太　旦那樣。此處にお出で御座りましたか。

五兵　オ、松太郎、何ぞ急な用でも出來たのか。

松太　ハイ、利右衛門さんの内に皆の顏が揃うたによつて、早う旦那に來てくれと云つて居ました。

五兵　オ、さうであつたか、御苦勞々々。そなたは使が早くつてかしこいによつて、今日は褒美をやりませう。

（ト紙入より小錢を出し、紙にひねつてやる。）

松太　これは有難う。それではお供いたしませう。

五兵　イヤ供には及ばぬ。わし一人で行く程に、おまへはすぐ何なりと好きなものを買うて、先へ歸るがよい。

松太　大きに、お供は旦那に限りまするなア。

（ト喜んで足早に下手へ入る。五兵衛思入あつて。）

五兵　今聞く通り松太郎が呼びに來たによつて、わしはこれから利右衛門の内へ行き窯主一同に逢つて來ます。此

方は此處に殘つて居て、柿右衛門が赤繪の樣子を篤と探つて見て下され。

與九　よろしう御座ります。細工場へ押込んで見定めてまゐります。

五兵　これぢやア、頼みましたぞ。

（ト五兵衛下手へ入る。）

與九　あの樣子では、いつまでたつても、店を出してくれさうにも無い。若し柿右衛門の赤繪が出來たら、先廻りをして金儲けをせねばならぬ。

（ト此の時奥よりおたれ茶碗を盆へ持て出て。）

たれ　番頭さん、お出でなされませ。さうして旦那はもうお歸りなすつたので御座んすか。

與九　たつた今出かけてお出でなすつた。お茶はわしが戴きます。

（ト茶碗を取つて飲む。此の時開戸をあけて、酒井田柿右衛門、老いたる拵へ、仕事着にて考へ乍ら出で來り、柿の木を見上げて。）

柿右　秋が來れば、自づと柿まで色がつく、然かも其の色が生々として、目が覺めるやうぢや。造化の力と人間の業は、かうも違うたものか知らん。

（ト云ひながら、外へ行きかけるゆゑ。）

たれ　モシ、父さん。與九郎さんがお出でぢやぞえ。

柿右　與九郎さんとは。

（ト思ひ出せぬ體にて振返へり。）

オヽ、お店の番頭さんか。うつかりして居たので、失禮をしました。御免なさい。

（ト二重に腰をかける。）

與九　成程、是でなけりやア、人を驚かす仕事は出來ぬてナ。

たれ　今しがたまで、お店の旦那樣もお出で御座んしたぞえ。

柿右　呼んでくれればよいに。

たれ　アレ程戸を叩いて呼んだのに、聞え無かつたかえ。

柿右　ちつとも知らなんだ。

たれ　それぢやに依つて。町の人は父さんの綽名を夢右衛門と云ひますぞえ。

與九　時に、柿右衛門さん。例の赤繪は出來さうかナ。

柿右　わしが一生涯の仕事としてやつて居りますが、まだ何時の事ともわかりませぬ。

與九　あの離れはこなたの細工場か。

柿右　ハイ、彼處には大切な赤繪の見本や工風の雛形、俺の内證をしまつてあるのぢや。

與九　一寸わしに見せて下され。

（ト上手へ行きかけるを。）

柿右　細工場の中へ人を入れる事はなりませぬ。

與九　ハテ、素人とは違つて、わしが見たら、又どんな好い智慧が出ようも知れぬ。

（ト振拂ひ、開戸に手をかけるを、柿右衛門は取つて突きのけ、戸の前に立ふさがりて。）

柿右　柿右衛門の細工場には神々の護りがある。出這入りを許したは、娘のおつうたつた一人、其の他は誰で有らうと、踏み込ませる事はならぬ。

（トキッと言ふ、與九郎是に氣を呑まれ起上り。）

與九　さう言ふ事なら、もう見ようとは言ひませぬ。腹を立てずに居て下され。（ト二重に腰をかける。）

たね　何處もお怪我は御座んせぬか。一酷な父さん故、どうぞ堪忍して下さりませ。

與九　今のはわしが惡かつた。全くわしが惡かつたのぢや。

（ト此の内柿右衛門戸に錠をおろして、その錠を帶に付ける。）

そこで、柿右衛門さん。若しも赤繪が出來たら、一番に誰に見せさつしやるつもりぢや。

（ト此の時栗作下手より出で來り、門口に立ち聞きして居る。）

柿右　それは言ふまでも無く、二十年此の方お世話になつた五兵衛さんへ一番に見せるのがあたり前ぢや。

與九　イヤ、それは惡い。先づわしに內々話をさつしやれ。他で金主を拵へて、こなたにしつかり儲けさせるがどうぢや。

柿右　折角の御親切ぢやが、金儲けよりも、浮世の義理が大切で御座ります。

與九　そんな流儀は今時流行らぬ。とかく、義理よりも、金儲けが大切ぢや。いづれ又其の時の話にしませう。ドレお暇といたしませう。

たね　もうお歸りで御座りまするか。

與九　大きにお邪魔をしました。

（ト下手へ入る。）

柿右　あつたら時を費した。わしは上の山へ窯を見に行つて來るぞや。

（ト行きかける。此の時栗作內に入り。）

栗作　親方、一寸待つて下さりませ。わつしがちつと話したい事が御座ります。

柿右　何の話か知らんが、閑の時にゆつくり聞かう。

（ト行きかける。）

栗作　親方が閑の時とは、一生の間にありやアしない。ほんの僅かの間故、どうぞ聞いて下さりませ。

（ト是にて柿右衛門餘儀なく腰をかける。おたね、栗作の傍へ來りて。）

たね　今日は思ふ樣、父さんに言つておくれ。
粟作　人身御供に成つた氣で、何もかも言ひませう。（ト平舞臺へしやがんで。）コレ親方、いつまで有田屋に使はれて居なさる氣だ。年中汚ない形をして、好い物を拵へよう、後の世にも殘る品をと、夜の目も寢ずに工風して造つた陶器は、皆有田屋の金儲け。こつちの手に殘つたものは、只借金と汗水ばかりだ。其の上に、五兵衛さんの事を、ヤレ伊萬里の王様だの商人の鏡だのと、人が褒めるに引かへて、親方の事を何と言ふと思はつしやる。彼奴は夢右衛門だ、馬鹿親爺だと言つて居りますぞえ。
柿右　何とでも言ふものには言はせておけ。
粟作　ソリヤ、親方はかまふまいが、おつうさんやおたねさんが氣の毒故、少しは人間並の心になり慾を知つて下さりませ。
柿右　能う言うてくれた。われの意見、仇には聞かぬぞ。併、能う思うて見い、金を拵へる人は廣い世間に幾人もあるが、百二十年以來、世に絶えた赤繪の皿を造らうと心を碎く者は、たつた一人。また粟作には、柿右衛門の心は分らぬ。おたねにも分るまいが、唯俺を知るものは、おつうばかりぢや。
（ト言ひながら門口へ出て、後をも見ずに坂道へ入る。）

たね　コレ粟作、大出來であつた。有難う。
粟作　どうぞ此方の氣に入るやう、旨く言ひたいと思つたので、此の通り汗になりました。（ト汗をふく。）
たね　氣に入る段か、わしや口の中で、ヨウ／＼粟作々々と賞めて居ました。
粟作　久振りで、おたねさんの笑ひ顏を見て、斯んな嬉しい事は無い。今日の樣な日に言はずば、又言ふ時が無い。俺の口からは言ひ憎いが、此方の事なア、あれも氣に入つたと、ツイ一寸言うて下さらぬか。
（ト是にておたね急に變つて。）
たね　嫌で御座ります。折角だがお斷り申します。
（ト向うをむく、粟作むつとして。）
粟作　そんなに、此方はわしが嫌かえ。
たね　お前は嫌ひと言ふぢやないが、其の話を始めると、急に嫌氣がさして來る故、二度と言はないやうにしておくれ。
粟作　それほど、嫌なわしが買つてあげた其の帶を、何故毎日〆めて居さつしやるぞ。
（トおたねの帶を指して言ふ。）
たね　他の帶は汚れると悪い故、これで此の帶ばかり〆めて居るのぢや。
粟作　わしは又、こなたに心があつて、明暮〆めて居てくれ

るのかと、かげで喜んで居たに。(トがつかりして)さうして、其の帯の栗梅は、どんな心か知つて居さつしやるか。
たれ　オヤ、是が栗梅と言ふのかえ。
栗作　ア、情ない。それさへ知らずに居やつしやるのか。其の色の栗梅は、こなたの身にまとうて居る心で、思ひを色によせ、買つて進せた其の帯ぢや。
たれ　そんなんでくれた帯なら、片時も〆めて居るのは嫌ぢや。(ト帯を解き叩きつける。)ソレ返しましたよ。
(ト片側の内より他の帯を出して〆める。栗作は眺めしさうに。)
栗作　いよ／＼是でおたれさんの心が分りました。わしは今から出て行きます。
たれ　どうなと勝手にしたがよい。(トおたれ花瓶に畫を描いて居る。)
栗作　わしが出て行つたら、親方が困るであらうが、もう我慢が出來ぬ。昨夜も此方が餘り故、もう飛び出さうかと思つて、荷拵へをして置いた。
(ト架にのせた古葛籠をおろし、襦袢や足袋をつめ込んで、振りかたげ、帯を丸めて片手に抱へ。)
それぢや、もう出かけますが、どうせわしは生きて居ませぬ。あとで親方があの栗作を殺したは、何處の誰だと聞かしやつたら、私が殺したとお前返事をして下さい。是から先は、首をくゝるか氣違ひになるか。おたれさん、左樣なら。
トしを／＼として向うへ入る。おたれは立つて門口へ來て見送り、又二重へ上り仕事をして居る。向うよりおつう、風呂敷包みを抱へて出て來り、直に舞臺へ來て、內へ入る。)
たれ　おゝ姉さん、よう御座んした。
(トおつう二重に住ひて。)
つう　今、其處で栗作の姿を見かけたが、又お前いさかひをしたのぢやないか。
たれ　マア、聞いて下さんせ。あの栗作が私をつけつ廻はしつして、仕樣が無い故、叱つてやつたので御座んす。
つう　あの栗作がお前の氣に入らねば、どんな人がよいのかえ。
たれ　わたしやあんな阿房は嫌ひ、お店の平三郎樣見た樣な好い男が好きで御座んす。私も姉さんの樣に綺麗な人の居る側で暮したいとは思ひますが、斯んなお多福だから仕方が無いとあきらめて居ます。
つう　それはお前の心得違ひ、今、私の言ふ事をお聞きよ。
(ト合方に成り。)
綺麗だとか、姿が好いとかは、ほんの花の一ト盛り、仇に散り行く。それに引替へ、優しい心と正直な男の値打、

女の命ぢや。あの怜悧な栗作が、阿房とか、たはけとかに見える程思ひ込んだのは、お前の仕合せ。もしも今に歸つて來たら、必ず優しい言葉をかけ、父さんの許を受けて夫婦と成つて、仲好う暮しや。あれ程の男をば、不足に思うては成りませぬ。

（ト是を聞き、おたれ思入あつて。）

たれ　つひぞ是までそんな話をした事の無いお前が、今日に限つて、わたしへ意見。姉さん、どうかしたので御座んすかえ。

（ト言はれて、おつうはハツと心附き、さあらぬ體にて。）

つう　どうもしたのでは無いが、心得違ひの無い樣と、先を案じた今の話。意見などとは思はぬがよい。其の替りお前に喜ばせるものがある。（ト風呂敷包みの中より花やかなる振袖を出し。）此の間お前に逢つた時、振袖が着て見たいと、羨ましさうに言うて居た故、好いのでは無いけれど、私の振袖、是をお前にあげませう。

たれ　あら、姉さん、わたしやお前の振袖を貰はうと思うて、言うたのぢや御座んせぬ。どうぞ持つて歸つて下さりませ。

つう　わたしはまだ何枚も持つて居る故、遠慮せずに取つてお置き。

たれ　さうかえ。それぢやア、すまぬけれど、戴いて置きませう。（ト受け取つて、押戴き）立派な振袖だね。わたしに似合ふだらうかねえ。

つう　一寸其の上へ着て御覽。

たれ　着て見ても好いかえ。

（ト振袖を着て見る。おつう、鏡袋を出して、映して見せ。）

つう　箸折れ鏡の姉妹二人。（ト思入にて言ふ）

たれ　馬士にも衣裳とは、此の事だねえ。（ト喜んで、振袖を脱ぎ、手早くたゝみ）姉さん、有難う御座ります。（ト禮を言ひ、思入あつて）シタが、姉さんは是をわたしに下さるばかりに、わざ〳〵歸つて來たのかえ。

つう　イ、エ、父さんに少し話があつて來ました。

たれ　生憎、父さんは、上の山へ窯を見にゆかしやつたが、もう歸つて來る時分で御座んす。（ト日脚を見て）もう八つ時前、わたしは、父さんの酒買うて來ねばならぬが、お前また急に歸るので御座んすまいな。

つう　今日はさうして居られぬ故、お父さんにお目にかゝつたら、直に歸ります。

たれ　それぢやア、今日はもう逢へないかも知れないが、四五日中にお店へ行つて逢ひませう。（ト振袖を奥へ仕舞ひ、徳利を下げて、平舞臺に下り）姉さん、ゆつくり

してお出でなさい。
（ト向うへ入る。おつうは後を見送りて。）
つう　もうお前と逢ふ時はありませんよ。
（ト顔を押へる。此の時坂道より柿右衛門元氣よく笑ひを浮かべ出で來り內に入り。）
柿右　オヽ、おつうか、よう來たなア。喜んでくれ。今日までわしがやつて見た赤繪の燒方は、十の九通り悉く皆やり損うたが、今日上の山へ行き、始めて窯の築き方が悪かつたに心づき、どうして今まであれが氣づかなんだか。此の祕傳を見出したからは、わしが仕事も成就に近づいた。喜んでくれ〳〵。（トしきりに言ふ）
つう　それはまア、嬉しい事で御座んす。さうして、何時頃出來ます。
柿右　さうだなア。窯を築くに一ト月。（ト考へて）今から三月拵へて火を入れるには二タ月。も經てば、明朝の錦手にも劣らぬ赤繪が、日本で出來るであらう。今年の暮には、そなたにも欲しいものを買つてやるぞ。
つう　私は何にも入りませぬが、妹や栗作に良い着物を着せてやつて下さんせ。
柿右　着せてやるとも〳〵。併、二人の事よりも、まづそなたの嫁入支度からせねばならぬ。長持、簞笥は七棹、八棹、縫模樣の振袖や綾縮緬の打掛け小袖。併、そなたは祝言の白小袖が、一番能く似合ふであらう。
つう　スリヤ、あの白無垢が。（ト思入）
柿右　早うその姿が見たいわえ。何にせい來春からは、運が開き、仕合せの鉢合せぢや。
つう　父さん、わたしやもう歸らねばなりませぬ。
柿右　わしもゆつくり話して居たいが、今日は是から大事の仕事をせねばならぬ。五六日中に又出直して來てくれ。
つう　とても五六日中には出て來られませぬ。
柿右　そんなら、來月の十日は、そなたの母の七回忌、朝から待つて居るぞや。
つう　イエ〳〵、待つて居て下さりますな。事に寄ると、來られぬかも知れませぬ。
柿右　母の忌日に來られぬと言ふは、ア、聞えた。五兵衛さん夫婦の家へ氣兼ねしてゞあらう。それなら、おたねを斷りにやる程に、遠慮無しに出て來やれ。そんなら、わしは細工場へ行くがそなたもおそうならぬうち歸りや。
（ト平舞臺へ下り、上手へ行き、錠を出して、細工場の戸を開ける。此の時內にて瀬戸物の落ちて破れる音聞える。）
つう　何かこはれましたぞえ。
（ト平舞臺へ下りる。柿右衛門細工場へ入り、こはれ

た茶碗を持つて出で。)

柿右　おつうや。コレ見や。燒物はもろいものぢや。

つう　其のよい話に引きかへて、私が此處へ來る途で、新村の牛兵衛さんが門口に立つて居ましたがあの人も娘さんに別れてから、急に年を取りましたなア。

柿右　それでも牛兵衛は生きて居られるだけがえらい。わしならとても命はつゞかぬ。

つう　あの娘さんは、私の手習朋輩。おとなしい人であつたが、思ふ男に棄てられて、有田川へ身を投げたは、よく／＼の事で御座んせう。

柿右　ア、氣の毒ぢや。併、生き長へて、人に笑はれ、親にまでも恥かゝせ、不孝の上塗りするよりも、死んだ方がはるかに優ぢや。

つう　スリヤ、死んだ方が、優で御座んすか。

柿右　とても死ぬなら、遠くへゆかいで、ツイ鼻の先きの川へ身を投げると云ふ事があるものか。(ト思入あつて)もう其の話は、やめにしよう。あの娘も、お前と同じ名であつた。

つう　ほんに矢ッ張りおつうで御座んしたなア。

柿右　おつうはおつうでも、俺のおつうとは大違ひぢや。

(ト是にて、おつう思入あつて。)

つう　それよりも女の方が。

柿右　必ずこはれぬ用心ぢや。ハヽヽヽ。

(ト笑ひながら細工場の戸を内より締める。)

つう　父さん。許して下さんせ。(ト柿の木に倚りかゝりて泣く)　瀬戸物よりも脆い／＼女の心。わたしやもうこはれて居ますぞえ。お前に恥をかゝせぬやう他國へ行つて死にまする。今日からおつうは世に無い者と思うて居て下さんせ。(ト二重に上りて)　斯う言ふ事に成つたのも皆わたしが心得違ひから、死んだ後で、父さんのかなしいお顔が目に見えるやうぢや。悲しい譯は書かずとも、有田屋さんに居られぬ譯、一筆書いて父さんへ、奥には硯も筆もあらう。

(ト奥へ入る。向うより栗作葛籠を振りかたげ、帯を抱へて出で來り、内を覗いて入り葛籠を元の架へあげ、帯を二重の戸棚へ仕舞ひ、轆轤の前へ坐りて、仕事にかゝらうとして立ち上り風呂敷の幕を一杯に張りて、姿の隱くろやうにして仕事をして居る。よき程に、奥よりおつう書置を持つて出で來り神棚へ右の書置をのせ、平舞臺へ下りて、上手へ向ひ。)

父さん、御恩を仇にしてすまぬが、どうぞ許して下さんせ。

(ト伏拜む事あつて、足早に向うへ入る。栗作風呂敷の蔭より出で來り細工場の戸を烈しく叩き。)

粟作　親方々々。
（ト呼ぶ。戸を開けて柿右衛門顔を出し。）
柿右　借金取りなら、斷つて歸せ。（ト又戸を閉めようとする故）
粟作　親方、借金取りぢやないよ。今おつうさんが出かけて行つた。
柿右　おつうは伊萬里へ歸つたのぢや。何を仰山さうに騒ぎ居るのぢや。
粟作　唯歸つたのならよいが、どうも樣子が變で御座りました。
（ト是にて柿右衛門思はず前へ出て。）
柿右　おつうの樣子が變であつたとは。
粟作　一寸お待ちなさい　神棚へ何かのせたやうであつた。
（ト粟作神棚より書置を持つて來り）　親方、手紙だ。
（ト是を柿右衛門受け取り、口の中で讀み俯りして。）
柿右　斯う言ふ苦勞があつたとは、今の今まで知らなんだ。われはおつうのあとを追駈けろ。
粟作　合點だ。
（ト駈け出して向うへ入る。此の前より五兵衛下手より出て來り、垣根の蔭に立聞きして居て、此の時内へ入り。）
五兵　おつうが家出をしたと言ふが、全くの事かい。

柿右　オヽ、五兵衛さんよい處へ來て下さりました。どうぞ是へ上つて下さりませ。
（ト兩人二重に住ひ。）
五兵　此方の持つて居るは、おつうの書置か。シテどんな事が書いて御座るな。（ト心許なき思入）
柿右　委しい譯は書いて御座りませぬが、自分の心得違ひから有田屋さん親子の仲に不和を起させて濟まぬ故、遠方へ姿を隱すと書いた後は、親不孝の詫言ばかり。全體是はどうしたので御座ります。
（ト是にて五兵衛安堵の思入にて。）
五兵　三里離れた有田と伊萬里。こなたは何も知るまいが、平三郎とおつうとはとうから好い仲になつて居たのだ。
（ト是にて柿右衛門驚き。）
柿右　スリヤ、あの不義をして居ましたか。（ト面目無き思入）
五兵　それ故、平三郎を長崎の店へやつたが、それ故おつうが家出したのであらう。
（ト此内柿右衛門思案をして。）
柿右　娘の不埒は幾重にもお詫を致します。それに就て、お願ひが御座ります。どうぞおつうを助けてやつて下さりませ。
五兵　どうして助けようと言はつしやるのだ。

柿右　他に道は御座りません。おつうと平三郎殿と祝言させて下さりませ。親の口からは申し憎うは御座りますが、わしには過ぎたあの娘、まんざら釣合はぬ夫婦でも御座りませぬ。
五兵　成る話なら、さうもして助けてやりたいが、是ばかりは親の自由にも成らぬ。
柿右　そんなら、平三郎殿が不承知故にならぬと言はつしやりますか。さう言ふ譯なら、平三郎殿に逢ひお願ひ致して參ります。
五兵　平三郎に逢つた所で無駄な話だ。實は、他から緣談が整ひかけて居る所ぢや。
柿右　エツ。
五兵　それぢやに依つて、二人を添はせる事が出來ぬ。其の替りおつうの手切金として百兩、此方に進ぜよう。
柿右　イヤ、金で賣る娘では御座りませぬわえ。（ト財布より金を摑み出して）此の間平三郎殿から借りて來た金の殘り。持つて居るさへ心の汚れぢや。（ト平舞臺に叩きつける）
五兵　さう言ふこなたの心では、わしも話の仕樣が無い。ドレ歸りませう。
（ト立ちかけるを柿右衛門止めて。）
柿右　待つて下さりませ。何處の親も子故の闇に迷ふ習ひ。意地も張りも棄てました。平三郎殿に氣に入らぬ娘なら一生涯妻に持つて下されとは言ひませぬ。一年か半年でもかまひませぬ故、おつうを嫁にすると、どうぞ仰言つて下さりませ。其の一言が娘の命で御座ります。其の代りにわしの一生は、此方に差上げます。額の汗も手の力も五本の指が骨になるまで、此方のために働きませう。慈悲ぢや。情ぢや。五兵衛殿。どうぞ叶へて下さりませ。
（ト疊に頭をすりつけて賴む。）
五兵　假令何と言はつしやつても、それ許りはお斷りぢや。
柿右　サ、此方の氣には入るまいが。親子二人を助けると思ひ、添はせてやつて下さりませ。
五兵　無駄な話ぢや。止しにさつしやい。
柿右　スリヤ、是程にお願ひ申しても。
五兵　氣の毒ぢやが、お斷りぢや。
柿右　ム、。
（ト此の時向うより栗作出で來り直に内へ入り。）
栗作　おつうさんの姿がさつぱり見えませぬ。
柿右　そんなら、もう行方が知れぬか。
五兵　わしも早速心あたりを捜して見よう。（ト平舞臺へ下り）併、柿右衛門さん、もし二人を夫婦にしないで、おつうを助ける道があらば、何時でも話に來さつしやれ。どんなにも骨を折りませう。わしも他人の事とは思はれぬ。

（ト五兵衛向うへ入る。）
栗作　今の口振りで大方分つた。有田屋の身代何十萬兩拵へてやつた上、大事のおつうさんを獲物にされ、此方は何と思はつしやるのだ。
柿右　恩も義理も知らぬ五兵衛。今日限り手を切つて、柿右衛門が腕一本であの身代を潰してくれるわ。
（ト平舞臺へ下り、きつと向うへ思入。此の時おたね向うより酒を買つて出で來り、此の體を見て。）
たね　父さん、どうしたので御座んす。
柿右　おつうは家出をした。
たね　エツ。
（ト德利を落す。柿右衛門は書置を投げ遣り、振り向きもせず細工場へ入る。栗作とおたねは書置を讀む。舞臺は段々暗く成り、柿の葉しきりに落ちる。此の仕組よろしく。）

——幕——

大詰

有田皿山丸窯の場

役　者

酒井田柿右衛門、同娘おたね、弟子栗作、有田屋五兵衛、番頭與九郎、手代傳六、窯主利右衛門、同善五郎、同次藏。

有田皿山丸窯の場　本舞臺上手寄にだら／＼山、平舞臺より山の上へかけて斜めに丸窯を拵へ、屋根の板をはづし、柱のみ殘つて居る松薪少々窯の中に燃えて居る、平舞臺下手に藁葺の屋根を見せ、向う一面皿山、所々に陶器窯灯入の書割、後に上手の空へ火の手あがる誂へあり、都て有田皿山丸窯の體。茲に柿右衛門、前幕よりはずつと老けたる拵へ、頭髪も大方は白くなり、著附も汚れ餘程疲勞したる體にて窯の焚口に寄り、もれ出る眞赤な火を半身に受け火の色を見詰めて居る。舞臺を闇黑になし、時の鐘に、一としきりサッと本雨の音を聞かせ段々かすめて幕開く。
ト雨音全く止み、木枯の音凄じく聞える。
柿右　よい鹽梅に時雨は止んだが、いかう冷えるので火氣がのろい。此の工合ではまだ二タ時程焚かねば成らぬ。
（ト下手に向ひ）　おたね／＼。
（ト呼びながら薪を窯の口に燻べる。火氣又強く成る。此の中正面の上手ポッと明るくなり舞臺も段々明るくなる。此の時おたね下手より出で來り上手の正面を指して。）

たれ　父さん、あの明るいのは何で御座んせうな。
柿右　月が出るのであらう。
たれ　何言はしやんす。今夜は闇ぢやわいな。
柿右　そんなら火事であらう。あそこで無駄に焚く火を此處へ貰ひたいものぢや。
たれ　ほんにさうで御座んす。さうして今呼ばしやつたのは、何の用ぢやえ。
柿右　急いで源助の内へゆき、松薪を百束許に[illegible]してくれるやうに頼んで來てたも。窯があがらば、薪代を倍にして拂ひますと、譯を話して頼んだら貸してくれぬ事はあるまい。
たれ　そりや、父さん、無駄だから止した方がよう御座んす。薪問もさう言つて頼んだけれど、現金なら賣るが、貸す事は成らぬと愛嬌の無い返事。幾度言つても同じ事で御座んせう。
柿右　そんなら、源助の所へ行き、幾ら高くてもかまはぬと言つて頼んで見や。
たれ　幾ら頼んで見てもお金の無いのを知つて居る故、聞入れてはくれませぬ。
柿右　假令何と言拵へてなと、薪を買はねば、大事の窯があがらぬわい。
たれ　そんな苦しい思ひを仕ようよりは、いつそもう打やつてしまはしやんせ。
柿右　何を言ふぞい。片時忘れぬおつうの敵、取つてやらねば成らぬ。
たれ　ほんに今日は姉さんが家出をしてから百日目、何處に居やしやんす事ぢややら。
柿右　ハテ、何處に居るものか。死んだ者と思つて居よ。
（ト兩人思入あつて。）
先つきにから栗作が見えぬが、何處へ行き居つたぞ。
たれ　栗作は内で寢てぢやわいなア。
柿右　何ぢや。寢て居る。
たれ　三日三晩ちつとも寢ずに、父さんの手傳ひをしたので、綿の樣に疲れて休んでおぢや。
柿右　今日は幾日ぢや。
たれ　十二月の二十日ぢやわいな。窯へ火を入れる五日前から、父さんは一度も眠らず、血氣盛りの栗作でさへ、倒れて仕舞うた位故、ヒョッとお前が倒れでもしたら、わたしや何としませうぞ。
柿右　さう心配せずともよい。此の窯があがらぬ中は、わしは死なぬ。そんな事を言つて居る中に、薪はずん／＼燃えてしまふ。一ッ走り行つて來てくりやれ。
たれ　叶はぬまでも、頼んで見ませう。
柿右　早うせぬと、間に合はぬぞよ。

（ト是にておたれ急ぎ下手へ入る。柿右衛門薪をくべる。火氣又立つ。正面の火の手明るくなるに從ひ舞臺もまた段々明るくなる。よき程に向うより番頭與九郎羽織、着附、尻端折、ぱつち、雪駄にて出で來り、直に舞臺に來りて）

與九　柿右衛門さん、窯はまだあがりませぬか。

（ト言ひながら四邊を見まはして思入。）

柿右　薪さへあれば、二時ばかりであがる所を見て下され。此の通りの始末ぢや。

（ト僅かの薪を指して言ふ。）

與九　さて〳〵、氣の毒な事ぢや。なんとわしが薪代を貸しませう

柿右　イヤ〳〵、有田屋さんから鐚一文でも借りませぬ。

與九　イヤ〳〵、有田屋では御座らぬ。此の與九郎が金ぢや。併、商人がたゞで貸すと言ふ譯には行かぬ。こなたが燒いて居る赤繪をわしの手一つで賣らせてくれるなら十兩でも二十兩でも、右から左へ貸して進ぜる。大方さうと思つたから、證文を書いて來た。（ト懷中より書附を出し）是へ、金高と此方の名を書き、判を捺せばよいのぢや。ソレ見さつしやれ、薪はもう是だけしか無い。此の證文へ判を捺し此の窯の品物を活かす心は御座らぬか。

（ト證文と金子を突き附ける。柿右衛門手を出しかけて思ひ直し。）

柿右　折角ぢやが、止しにしませう。

與九　此方も餘程分らぬ人ぢや。（ト向うを見て）彼所へ來るは、どうやら内の旦那らしい。柿右衛門さん、今わしが言つた事は、旦那へ言はずに置いて下さい。

柿右　五兵衛さんに物言ふ用は御座らん

（ト窯の火を見て居る。與九郎安心せし思入にて證文と金とを納める。此の時有田屋五兵衛、羽織、着流し、頭巾を頸卷にして出で來り、與九郎を見て、意外の思入。）

五兵　番頭どんは何しに此處へ來やしやつた。

與九　ヘイそれは、柿右衛門の窯の樣子。どんな事かと心配して、一寸見に參りました。

五兵　此の寒いのに夜道をわざ〳〵御苦勞であつた。（ト上手の捨石に腰をかけて）時に柿右衛門さん、聞けば此方も大層詰まつて居るさうぢやが、長年の間店の仕事をしてくれて爲にもなつた此方故、餘處に見て居る譯にはゆかず、わざ〳〵出かけて來ました。もう大概に我を折つて、元々通りに成らつしやらぬか。

柿右　此方に會ふのはまだ早い。會つてよい時には、わしの方からあがります。

五兵　其の痩我慢は止しにさつしやれ。現在薪を買ふ金に

差支へ、此方の娘が藤助の内で頼んで居るのを見かけて來た。そんな苦しい思ひをせずとも、わしに頼むと一言言へば、松薪の千貫や二千貫は、立ちどころに積んで進せる。アレ見さつしやれ。方々に火を焚いて居る有田中の窯も今では五兵衞の品物ぢや。其の中に、此方一人四方に敵を受け、何でやつてゆかれるものか。身の爲め思はゞ、早く甲を脱がつしやれ。其の代り此方が造つた燒物は、皆わしのものとして一年百兩の給金で生涯此方を抱へませう。ナント番頭どん、わしの扱ひは惡うは御座るまいがの。

與九　お手厚いお扱ひ、流石大店の旦那で御座ります。是では柿右衞門さんも折れぬ譯にはゆきますまい。

五兵　柿右衞門さん、それで承知をさつしやるか。

（ト言へども、柿右衞門は返事もせずに脇を向く。與九郎思入あつて。）

與九　もし旦那、鳥渡お顏を拜借。

（ト五兵衞を連れて花道よき處まで行き。）

お止しなされませ。餘程變で御座ります。來年の春になり陽氣がぽかついて參りましたら、立派な氣違ひになりまする。

五兵　併、心配なは彼奴の赤繪だ。

與九　それは大丈夫、何時まで經つても出來る氣遣ひ無し。矢張り夢右衞門の夢で御座ります。

五兵　それならよいが、もしその夢が實となつたら、何萬兩と言ふ損ぢや。

與九　何の御運のよい旦那樣、その御心配には及びませぬ。

五兵　わしもさうとは思ふがの。（ト正面の火の手を見て）あの火の手は火事らしいが、伊萬里ぢやあるまいか。

與九　もちつと近くで御座りませう。

五兵　何にしても氣になつてならぬ。そなたは大急ぎで歸つて下され。

與九　さうして、旦那樣は。

五兵　わしはまだ柿右衞門に話がある故、かまはず先へ行つて下され。

與九　何なら、お待ち申して居りませうか。

五兵　それには及ばぬ故、少しも早く行かつしやい。

（ト是にて與九郎後に心の置ける思入にて向うへ入る。五兵衞、柿右衞門の上手に腰をかけ。）

今、わしが話す事聞いてびつくりさつしやるな。おつうは先月二十日の夜文字ヶ關の沖合で舟から身を投げ死んだぞや。

柿右　そんなら娘は死にましたか。（トジツと思入）

五兵　それも今日まで何處の誰やら知れなかつたが、其の舟の船頭が鏡袋を持つて來て、こんなものがありました

と言ふを見れば、おつうの品、何より確かな身投の證據。あの傘袋はわしの方へ貰つて置き、寺へ納めて供養をしてやりますぞ。

柿右　さうして平三郎殿は、どうさつしやりました。

五兵　倅は近い内によん處ない都合で、ある武士の娘と祝言をするつもりぢや。

柿右　スリヤ祝言を。ム、。

（ト口惜しき思入。五兵衛は柿右衛門の様子をジッと見て。）

五兵　おつうが死んだと聞いた時には、わしでさへ涙が出たに、なんで此方は泣いてやらぬ。

柿右　わしは涙が御座らぬ。心も眼も乾き切つて居る。今はせねばならぬ仕事が御座る。その仕事を仕遂げた時、娘の爲めに泣いてもやり、又此方に會ひに行くも其の時ぢや。それまでは、五兵衛さんに物言ふ用は御座りませぬ。

（ト窯の口に向ひ火を眺めて居る。）

五兵　娘の死んだを嘆きもせず、一心不亂に凝り固つた此の様子では、もしやすると。

（ト不安の思入。此の時下手よりおたれ出で來りて。）

たれ　お店の旦那様。お出でなされませ。

（ト挨拶する。柿右衛門振向きて。）

柿右　オ、、おたれ。どうであつた。

たれ　何處へ行つて頼んで見ても、一把の薪も貸してはくれませぬ。

柿右　矢張りいけなかつたか。

（ト落膽の思入。又五兵衛は下手へ來て。）

五兵　一寸來さつしやれ。（トおたれを下手へ連れ行きて）柿右衛門とは長年の馴染故、何事も勘辨して元の通り仕事をさせ、百兩の給金やらうと、今親爺に話した所ぢや。

たれ　旦那様。そりや無駄で御座ります。父さんが承知をする氣遣ひは御座りません。

五兵　でもわしが言ふ事を聞かぬ時は、そなたも共に饑死せねばならぬぞよ。幾ら強情な親爺でも、其方がなんとか話したら、心も和らぎ其の氣にならう。後に又わしが來る故、それ迄によく話して置かつしやれ。其方は中々怜悧な者ぢや。

（ト五兵衛あとに思入あつて向うへ入る。おたれ思案して柿右衛門の傍へ寄り。）

たれ　モシ父さん、其の窯があがらなかつたら、是から先はどうさつしやるえ。

柿右　又遣り直すのぢや。幾度でも出來るまでやり直すのぢや。

たれ　三度竈を燒損へば、どんな身代でも潰れると言ふぢや御座んせぬか。いくら遣り直すと言はしやんしても、家は人手に渡して仕舞ひ、有つたものは賣つて仕舞ひ、明日の命も覺束ないぞえ。

柿右　それほどにつまつて居るのか。

たれ　あいなア、せめて燒き損うた物なりと、お金にさせて下さんすりや。又どうにか成るけれど、夫れは成らぬとお前の言葉故、此の上仕樣は御座んせぬ。大事の大事の此の竈さへ屋根の板は焚いて仕舞ひ、見に來る人の物笑ひ、所詮叶はぬ望なら、今の中に心を替へ、五兵衞さんの言ふ事を聞き、氣樂に暮して下さんせ。

（ト是を聞き、柿右衞門口惜しく又腹立たしき思入にて。）

柿右　五兵衞さんの言ふ事聞けとは、敵に魂を賣れと言ふのか。怨も望も棄てゝ仕舞へと言ふ事か。人の娘をなぐさんで殺して仕舞うた悴の親。助ける術もありながら、見殺しにしたあの鬼から給金貰うて氣樂にせよとは、わりやどの口でぬかし居つた。またわれは知るまいが、おつうは海へ身を投げて魚の餌食に成つたぞえ。

たれ　そんなら、姉さんは死なしやつたかいなア。（ト泣き伏す。）

柿右　オヽ、おつうは死んだが、平三郎は生きて居る。五兵衞も生きて居る。此の柿右衞門も生きて居る間、有田屋の暖簾あのまゝにして置かぬ。いかに心が無ければとて、そなたもわしが娘ぢやないか。敵に從へとは、何と言ふ料簡ぢや。一つ種の姉妹でも、かうも心が違ふものか。

（ト言はれて、おたれ柿右衞門にすがり付き。）

たれ　父さん、許して下さんせ。お前に樂がさせたさに、惡い事を言ひました。皆私が至らぬ故、是から心を入れかへて、死んだ姉さんの樣に父さんに優しうします。勘辨して下さんせ。

柿右　よう言うた。それでこそ、わしが娘ぢや。こちへ寄れ。

（ト竈の火の影にておたれの顏を見て。）

一對揃うた姫皿も、一つは先へ缺けて仕舞ひ、掛替の無い親の祕藏、大切にしてくれよ。

（ト親子の愛情こまやかなる體よろしくあつて、竈口を見やり。）

斯うしては居られぬ。わしが薪屋へ出かけて行つて、何とか言うて頼んで見よう。其方は栗作を此處へ呼び、火を消さぬやう二人で番をして居やれ。

（ト立ちあがり。）

此の竈の火が燃えて居る間は、わしが望みも燃えて居るのぢや。必らず火を消してはならぬぞよ。

（ト言ひ捨いて下手へ入る、おたねは下手の奥に向ひ。）

たね　栗作、早う起きておいで。

（ト呼ぶ。此の時下手にて。）

栗作　オーイ。

（ト返事する。窯の前に腰をかけて。）

たね　姉さんに貰うた振袖が、今は形見と成つたかいなア。

（ト泣いて居る。栗作眼をこすりながら出て來り。）

栗作　おたねさん。お前はなんで泣いて居るのぢやえ。

たね　姉さんが亡くなつたぞえ。

栗作　エヽ、おつうさんが死んだ　南無阿彌陀佛々々々々々々。

たね　父つさんが歸るまで此處に番をしておいで。

（ト立ちかけるを栗作止めて。）

栗作　わし一人ぢやア、薄氣味がわるい。お前も此處に居て下さい。ハテマア、此處に居て下さいと言ふに。

（ト兩人窯口に差向ひて腰をかけ。）

おたねさんはわしをげぢ／＼か毛蟲の樣に嫌はつしやるが、わしはお前を誰より大事に思うて居るぞえ。ソリヤ、猫でさへ毛嫌ひするのだから、人に好き嫌ひのあるのはあたり前だが、其の代りには、又人は思ひなしで、どうでも成るものぢや。こんな男のわしでも、何處（どつか）に好い處があるかも知れぬ。そこを見つけて好きになつて下さらぬか。是程思ふわしが心を少しは察して、優しい言葉をかけて下さらぬか。

（ト此の間おたねは火かきで窯の火をかき起しながら聞いて居て。）

たね　わたしや又思へば思ふ程お前が厭になるのぢやもの。

栗作　わしはよく／＼因果な生れだ。（ト腕組をして考へ込む）

たね　栗作さん、薪を取つておくれ。

栗作　よし／＼。

（ト氣輕に立つて、ありつたけの薪を窯の口にくべて。）

おたねさん、もう薪は是れだけしか無いぞや。

（ト是を聞いて、おたね思入あつて。）

たね　わたしやお前が好きに成つたと言うでは無いが、もう毛嫌ひをしては居られぬわいなア。

栗作　何と言はつしやる。

たね　惚れた同士が夫婦になると限つた譯でもない事故、ツイ一通りの夫婦になるには、お前とわたしでなられぬ譯も御座んすまい。

栗作　エツおたねさん、ソリヤ本氣かえ。

たね　お前に根負けがしたわいな。

栗作　わしと夫婦に成つて下さるかえ。（ト喜んで傍へ寄る）

たね　成る事は成るけれど、わたしの頼む事も聞いて下さんすか。

栗作　聞く段かいな〳〵。お前の頼みとは分つて居る。よい着物を拵へて、我儘をさせてくれであらう。そんな事は何でも無い。朝はわしが先へ起きて、寝所の中で御飯を喰はせますぞや。

たね　イエ〳〵。わたしの事ぢやない。父さんが一心砕いて居る赤繪、お前は出來ると思ふかえ。

栗作　わしはどうだかと氣遣ひでなりませぬ。

たね　わたしもさうは思うては居るが、父さんが止める心が少しも無い故、お前と二人で父さんを助けてあげねばならぬぞえ。

栗作　ソリヤ、言はずとも知れた事ぢや。お前の父さんはわしにも父さんぢや。

たね　よう言うて下さんした。それが本當なら、お前と夫婦に成りませう。

栗作　忝い〳〵。併し、あれ程嫌つて居たお前がかう急に變つて來たは、おつうさんの引き合せかも知れぬ。

たね　併、今直ぐではないぞえ。

栗作　急ぎはしません、そんなにえらう急ぎはしません、

たね　其の替りあれを貸しておくれ。

栗作　あれとは。

たね　お前が内證で溜めてあるお金を父さんに貸してあげておくれ。

（ト是を聞き栗作當惑の思入にて。）

栗作　持つて居さへすりやア安い事ぢやが、わしの金はもう一文も無い。

たね　あのお金を何時何に使うて仕舞うたのぢやえ。

栗作　言うては成らぬと親方に口止はされたが、言はねばお前の得心がいくまい故、打ち明けて言ひますが、わしが溜めた金は殘らず親方の手へ渡し赤繪の元手に成つて仕舞ました。

たね　そんなら出來ぬと知りながら、溜めたお金を父さんへ貸してあげて下さんしたか。（ト思入あつて）栗作さん、今こそ本當にお前の女房ぢや。

栗作　おたねさん、何にも言ひませぬ。

（ト兩人手を取り合ひて思入。此の話の中に窯の火消えて仕舞ふ。二人心づかずに居る。此の時下手より柿右衛門腕を組みながら出て來る。兩人分れて。）

たね　父さん、どうで御座んしたえ。

柿右　何處へ行つてもことわられた。町の人はわしが事を

氣違ひぢやと言うて笑ひをつた。わしが此の南河原へ始めて窯を築いた頃は、此の有田はさびれ果て、見る影もなかつたを、南京燒の秘傳を教へ再興した有田の繁昌。此の土地に取つてはわしは恩人ぢや。その柿右衛門を氣違ひ呼はり。あゝ義理も恩も無い世の中ぢや。

（ト窯の火の消えたを見て。）

二人は何をして居つた。此の窯の火が消えたら、柿右衛門が望も消え、命も消えるを知りをらぬか。

（ト是にて兩人もびつくりして薪を取りにゆき。）

栗作　もう薪が無かつた。

柿右　そこらの古木を持つて來い。

栗作　合點ぢや。

（ト柱を引きぬいて、窯にくべる。けれど濕つて居て燃えあがらず。）

たれ　さつきの雨でちつとも火氣がたゝぬわいな。

柿右　今一時か二時となり、僅かな薪のないために、我が望も叶はぬか。可愛い娘は海へ身を投げ、千辛萬苦の窯の火は落ち、神も佛も天道樣も御座らつしやらぬか。

（トどうと成る。おたれ傍により。）

たれ　父さん、しつかりして下さんせ。

（ト介抱して居る。此の時向うより以前の五兵衛、窯主利右衛門、善五郎、文藏を連れて、足早に出で來り。）

五兵　柿右衛門、さつきの返事はどうぢや。それ次第で薪を運ばせようと思ひ此の衆をつれて來た。

利右　コリヤ、窯の火が。

利右・善五　落ちたぞよ。

（ト是にて柿右衛門きつと成り。）

柿右　假令窯の火は消えても、此の胸の火が消えぬ中は、五兵衛さんから一把の薪も貰ひませぬ。

五兵　まだ痩我慢を言つて居るのか。

善五　愈々こなたは。

善五・文藏　氣違ひぢや。（ト嘲り笑ふ）

たれ　モシ父さん、お前が一心籠めた窯。ヒヨッと一つでも出來て居たなら、勿怪の幸ひ。

栗作　さうぢや〳〵。念晴しに口を開けて見ませう。

（ト栗作、おたれにて目塗を剝がし、窯の口をあけ、出來損ひの燒物を取り出して見て、がつかりして居る。此の前から正面の火の手愈々盛んに成り、今は天を焦す程に成る。向うより序幕の手代傳六、向う鉢卷にて片肌ぬぎ、提灯を持つて息を切つて走り來りて。）

傳六　旦那樣、大火事で御座ります。

五兵　伊萬里が火事か、さうして內は。

傳六　お店は大丈夫で御座りますが、中里様が丸燒で、私が御見舞ひに參りましたら、系圖を燒いて仕舞つたと仰言つてゞ御座りました。

（ト是を聞き、五兵衛びつくりして。）

五兵　系圖を燒いた。アノ系圖を。

（トがつかりした思入。）

傳六　まだも一つえらい事が御座ります。若旦那が燃えさかる火の中へ飛び込んで。

五兵　燒け死んだか。

傳六　ハイ。

五兵　アノ火の中へ。

（ト正面の火の手を見て、ぼんやりと成る。）

たれ　父さん、平三郎さんも死なしやつたといなア。

柿右　オヽ、おつうは海へ、平三郎殿は火の中。ムヽ。

（ト思入あつて立ちあがる。此の時栗作窯の中より金銀五色にて畫きたる皿を見附けて持ち來りて。）

栗作　親方コレ見さつしやれ。

（ト柿右衛門に渡せば受け取り見て。）

柿右　オヽ、是ぢや。

五兵　エッ。

柿右　十年此の方、夢に見た赤繪が出來た。

（ト嬉し泣きに泣く。五兵衛ツカ／＼と寄るを睨みつけて。）

五兵衛さん、此の皿は娘の命。わしが涙、千萬無量の思ひを籠めて燒き上げた日本の寶、末代の光り、赤繪の祕傳と諸共に、こなたの命はわしが握つた。

五兵　柿右衛門さん、重々わしが惡るかつた。

（ト平舞臺に坐る。柿右衛門は眼の前におつうを見る如き思入にて。）

柿右　おつう。われが敵は取つてやつたぞ。

（ト皿をおたれに渡し兩手を面にあてゝ泣く。おたれ、栗作は其の左右に縋る。五兵衛は懺悔の思入にて突伏して仕舞ふ。火の手はます／＼強く舞臺一面眞赤に見える。上手の奥にて遠く早鐘を聞かせて。）

――幕――

女歌舞伎（三幕六場）

序　幕

境町祇園屋の場
待乳山茶の場

役　名

大納言烏丸通廣、本多中務少輔忠時、家臣堀口右京、醫者松崎周庵、歌舞伎役者都傳内、同江戸勘八、祇園屋亭主與兵衛、中務室千姫、歌舞伎太夫側大内藏、同幾島左近、女舞小藤、同八重野、女中おふく、同おきよ、同おちせ、他女中數多等。

祇園屋座敷の場　本舞臺一面の平舞臺、正面上の方四間の處座敷の心にて、向う一間の床の間、掛物、香爐飾いて地袋、塗壁、丸窓、此の向う隅田川の遠見、上手折廻して襖の出入り、下手に境界の仕切緞子張りの障子、此の外廣椽緣、手摺、正面下手へ折廻して同じく手摺、向う障子の出入り、手摺の外中庭の心にて、雪吊りを成したる松の梢を見せ、都て境町の料理茶屋祇園屋座敷の體。此處に女中おふく、おきよの兩人燭臺に燈を點し、煙草盆を運び、客の支度をして居る體。流行唄にて幕開く。

ふく　サア〳〵、是で宜い。時に、おきよさん、あしたから始る彌生町の芝居は、大内藏さんと左近さんの顔合せぢやと、開かぬ前から、えらい評判ぢや御座んせぬか。

きよ　どちらも、名題の歌舞伎の太夫。左近さんはお屋敷方の御贔屓多い其の上に、本多様の御氣に入り。

ふく　又、大内藏さんは町方に贔屓が多いばかりで無く、第一、藝道の名人。出雲のお國もあれ程では無かつたらうと思ふ位。

きよ　オヤ〳〵、お前は大内藏さんがきつい御贔屓ぢやが、私は又、左近さんが大贔屓ぢやわいなア。

ふく　何の、お前のは贔屓の引き倒しぢやわいなア。

きよ　お前ぢやとて、矢張り引き倒し仲間ぢやないか。

ふく　さう言ふなら、今度見物する時には、大氣張りで遣ひ物をするぞえ。

きよ　私とても、お前に負けては居ぬ。ハテ、遣ひ物は何がよからうか。

ふく　市川屋の蕎麥切か。

きよ　伊勢屋の壽司か。
ふく　それとも、越後屋の吳服ものか。
きよ　いつその事よしにしようか。
ふく　矢つ張り、其の方がよからうわいな。
兩人　ホヽヽ。
（ト笑ふ。此の時、下手の襖を開け、女中おちせ出で來りて。）
ちせ　お客様で御座んすぞえ。
ふく　オヤ〳〵、もうお越しかえ。
（トあわてゝ二人はおちせと共に上手の奥へ入る。合方に成り、下手より亭主與兵衛、羽織、袴にて先きに立ち、烏丸通廣卿、茶筅髷、小袖、羽織、大小の拵へにて出で來り、上手に住ひて。）
與兵　生憎今晩は本多様のお忍び遊びで奥座敷は殘らず塞がり、お氣には召しますまいが、少々の間是にて御辛抱を願ひまする。
通廣　イヤ〳〵、是で結構ぢや。シテ、其方が申した本多様とは中務殿か。
與兵　左様で御座りまする。歌舞伎太夫の幾島左近を殊の外の御贔屓で御座いますが、お屋敷には立派な奥様がおありとの事。何か御不足で、茶屋小屋遊びを遊ばすので御座りませうな。
通廣　サア、身もよくは存ぜぬが、本多殿の奥方は誰あらう、當將軍家の姉君千姫殿とて、最初は豐臣秀頼殿の御臺所であつたが、大阪落城の後、江戸へ歸られて、今の本多殿へ片附かれたのぢや。さう言ふ譯ぢやに依つて、とかく、通合の本多殿、何かに附けて控へ目にして御座る。大方その憂さ晴らしの遊興であらう。
與兵　それで、様子が分りました。あまり奥様のよいのもよしあしで御座いますな。
通廣　それはさて置き、大内藏は如何いたした。
與兵　使ひを走せましたれば、程無く見えるで御座りませう。どうぞ御緩りと遊ばして下さりませ。
（ト與兵衛挨拶して下手の奥へ入る。）
通廣　大内藏が參る間、香でも焚いて待つといたさう。
（ト是にて、下座の獨吟に成る。）
〽同じ空なる影かと思うて、見ればあやしや、月さへ様と共に見る目で變るげな。
（ト此の内、通廣卿香爐を前へ出し、懐中より香包を出して焚く。此處へ以前の女中酒肴を持つて出る。よき程に、下手より桐大藏、兵庫髷、染物の着附、歌舞伎太夫の拵へにて、女中おちせ案内して出で來り、女中は引返して直ぐ入る。）
大内　通廣様。

通廣　オヽ、大内藏か。待つて居たぞ。
大内　噓で御座んせう。
通廣　イヤ、質ぢや。質の證據は此の香を見やれ。
（ト是にて、大内藏下手へ住ふ。）
大内　ホンニ、是は先達て變らぬ契の形見にと、あなたへお上げ申した香。
通廣　肌身離さず所持なして、焦るゝ時は柴舟を焚いて心を慰むる。是が噓で無い證據ぢや。
大内　嬉しう御座んす。此の上ともに、結んだ契り仇にしては、誓に立てた神佛へ濟まぬぞえ。
通廣　ハテ、それは氣遣ひいたすな。われ等の運が向いて來て、都に歸る曉は二ッ連立つ鴈の嬉しい旅路と思はれよ。其の替りに、此の通廣の貧しい暮しを承知か。
大内　それも承知で戀した仲。假令關白樣であらう共、焦るゝ私ぢや御座んせぬ。そもぬし樣と馴染んだはいつか芝居の歸り道、惡侍に取込められ難儀に及ぶ其處へあなたが御座つて、相手をば追散して下さんした。其のお情が身に染みて初めて覺えた戀ぢやもの。貧苦と富貴は最初から心に置いて御座んせぬ。唯ぬし樣と暮すならどんなに面白からうぞと今から樂んで居りますわいな。
通廣　さて／＼、此方は變り者。われ等が貧苦をすき好み、戀したとは忝い。三千世界に一人の君さま。
大内　テモ憎らしいお口ぢやわいなア。
（ト又獨吟に成る。）
〽玉の杯底無きとても、迚も契らば二世と結ばん結ばん常陸帶。さて好い仲。
（ト此の内兩人よろしく有る。よき程に、下手より女中おちせ案内して都傳内、派手な着附、歌舞伎役者にて出來り、女中は直ぐ引返して入る。）
傳内　エヘン／＼、（ト咳拂をして）太夫これにおわすか。傳内で御座る。
大内　傳内殿ならかまひませぬ。此方へ入らしやんせ。
傳内　さらば御免なされ。（ト障子を開けて入り、下手に住ひて）何方かと存じたら、通廣樣、その後はとんと拜顏をいたしませぬが、何時も變らせられいで、重疊に御座りまする。
通廣　此方も健かで恐悅ぢや。
大内　傳内殿。一つ過しなさんせ。
傳内　忝うは御座れども、わしはさうして居られませぬ。此方に用があつて來ました。
大内　ナニ、私に用とはえ。
（ト合方に成り。）
傳内　通廣樣の御座る前で此方へ意見がましい話、差控へては居たいのぢやが、明日に迫つた芝居の初日、今度は

此方の相手は左近。どちらも人氣の太夫株。開かぬ前から町中の評判。イヤ左近ぢや、イヤ〳〵大內藏ぢやと、贔屓々々の見物が肩肱張つてえらい意氣込み、二人に取つては大事の舞臺、其の前方に合間を見ての小隱れは油斷がすぎて氣が知れぬ。嫌でもあらうが、太夫殿。早う芝居へ行つて下され。

大內　私のためを思へばこそ、お前がわざ〳〵來ての意見、忝う御座んす。然し、舞臺に油斷はしませぬ故、安心して居て下さんせ。

傳內　其の安心が出來る位なら、こんなに氣は揉みませぬ。通廣樣にお斷りして、もう一度芝居へ歸つて下され。

通廣　傳內が親切、無にしては惡からう、少しも早う行きやれ。

大內　そんなら、私が歸つて來るまで待つて居て下さんすか。

通廣　ハテ、都育ちのわれ等、雲隱れの月の出るまで氣長に待つて居るであらう。

傳內　通廣樣もあの通りぢや。早う御座れ。

大內　デモたつた今來たばかり。

傳內　ハテマア御座れと言ふに。

（ト傳內無理に大內藏を引張つて下手へ入る。）

通廣　大內藏が歸つて來るまで斯うして居るも退屈ぢや。好い思ひ寄りがありさうなものぢや。

（ト此處へ以前の與兵衛出で來り。）

與兵　定めし御退屈で御座いませう。幸ひ數寄屋に釜も懸つて居ますれば、粗茶一服如何で御座りまする。

通廣　それは忝い。さらば案內賴み申す。

與兵　左樣なれば斯うお出で下さりませ。

（ト與兵衛先に立ち通廣卿附いて上手襖の內へ入る。此の時、松崎周庵坊主頭、醫者の拵へにて下手より出で來りて通廣卿の後姿を眺めて。）

周庵　今のは烏丸通廣卿。お忍びの茶屋遊びと相見えるわい。

（ト此の時、下手より勘八、派手な着附、左近の弟子にて出で來りて。）

勘八　モシ、周庵樣、よい處で御目にかゝりました。

周庵　誰かと思へば、左近が弟子の勘八。何の用かえ。

勘八　少し物がお聞き申したう御座ります。

周庵　シテ、何を聞かつしやるのぢや。

勘八　他では御座りませぬが、太夫の用で、（ト考へて）ハテ、なんとか申しました。何んでも枇杷葉湯の樣なお名前のお方をお尋ね申して居りますが、誰に聞いても知れませぬ。あなた御存じで御座りまするか。

周庵　それは烏丸通廣卿であらうな。

勘八　それ〳〵、烏丸樣で御座りまする。
周庵　さうして、太夫の用と言ふは、
勘八　手紙をお屆け申すので御座りまする。
周庵　ナニ、手紙を、（ト思入あつて）よし〳〵、烏丸卿なれば今一寸出られたが、直に是へお歸りに成る。其の手紙は拙老が預かり置いて、お渡しいたさう。
勘八　イヤ、お目にかゝつてお渡しせいと、太夫の言付で御座りますれば。
周庵　ハテ、餘人なら知らぬ事、日頃、太夫と懇意にいたす周庵、氣遣ひには及ばぬ。
勘八　左樣なれば、どうぞお願ひ申しまする。
（ト勘八、懷中より左近の文を出して、周庵へ渡す。周庵しめたと言ふ思入。）
周庵　確かに愚老が預かり申した。
勘八　左樣なれば、周庵樣。
周庵　きつと御手渡しいたすであらう。
（ト是にて、勘八引返して入る。）
うまいぞ〳〵。通廣卿へ左近の手紙。どんな事が書いてあるか、一寸内見いたさうか。（ト手紙の封じ目をそつとはがし抜き見る）何に〳〵。急ぎ文して申上まゐらせ　さてとや、今宵五ツ時を合圖に、待乳山の寮にて、お目もじ仕度候間、必らず〳〵お出で下され候やう首尾して待上まゐらせ、廣樣まゐる。御存じより。（ト手紙を讀んで元の通り卷き、封じ目をして）さては、左近奴、本多殿より拜領の別莊で、通廣卿と忍び會はうとは大膽者。日頃、此の周庵を邪魔者扱ひにいたし、癪に觸る彼奴の素振。此の仕返しを仕てやるには、コリヤ、好いものが手に入つたわい。
（ト手紙を懷中する。此の時、下手正面の障子を開け、小藤、染物の着附、歌舞伎女の拵へにて出で來りて。）
小藤　周庵樣、殿樣がお立ちで御座んすぞえ。
周庵　南無三、お立ちの前方に申上げる一大事がある。
小藤　今、此處へお出でぢやわいなア。
（ト是にて、合方に成り、本多中務、羽織、袴、忍びの形にて、八重野、歌舞伎女の拵へにて刀を持ちて附添ひ、其の後に、茶屋女二人附いて下手正面より出で來る。）
中務　周庵、是に居たか。左近が參らぬので、遊興も蕪果てた、今宵は是で歸るであらう。
周庵　其の左近の儀について申上げたい事が御座りまする。
中務　然らば、是で承はらう。
周庵　恐れながら、お耳を拜借。
（ト周庵、中務の傍へ寄り、囁く事よろしく。）

斯様な譯で御座りまする。
中務　相手は通廣卿ぢやと申すな。
周庵　御意に御座りまする。
中務　然らば斯様いたさう。耳を貸しやれ。
（ト中務、周庵に囁く事つて。）
相分つたか。
周庵　ハツ。畏りました。
中務　網は張らねど、計らずも囮にかゝつた烏丸、あはよくば只つた一討。
周庵　エツ。
（ト驚き、中務の面を見る。中務氣を替へて。）
中務　憎い女め。シテ、供の用意は。
周庵　ハツ。
八重　殿様の御立。
（ト是にて、中務に周庵、女形附いて下手へ入る。此の合方にて、上手より通廣卿先きに女中おふく附いて出で來り。）
通廣　亭主が手前結構であつたと申してくりやれ。
ふく　畏りました。
（ト女中直に引返し入る。周庵、下手より出で一寸内を覗きて。）
周庵　御滯在中の御憂さ晴らし、お忍びの御遊興とは恐れ入りましたな。
通廣　さう言ふ聲は。
周庵　松崎周庵で御座りまする。（ト障子を開けて入る）
通廣　意外な所で面會いたし、赤面の至りぢや。
周庵　イヤ、何もかも其眼通にて承知の愚老、必ず御氣を措かれますな。即ち、左近よりのお文、お手渡し仕ります。
（ト文を出して、通廣卿に渡す。）
通廣　スリヤ、左近が此の文を貴老へお頼みいたしたか。
周庵　ハツ。
（ト是にて、通廣卿は右の文を披見して、袂に入れ。）
通廣　モウ、何時であらうな。
周庵　程無く五ツで御座りませう。
通廣　然らば、もう參らずば成るまい。
（ト手を鳴らす。奥より女中おちせ出で。）
ちせ　御用で御座りますか。
通廣　急いで駕籠を申附けてくりやれ。
ちせ　畏りました。
（ト下手へ入る。）
周庵　スリヤ、君には是より直に。
通廣　のがれ難い手紙の趣、參らねば相成らぬ。
周庵　然らば、その内、高倉屋敷へ。

通廣　ゆる〳〵話に參られい。

（ト此處へおちせ出で來りて。）

ちせ　お駕籠は裏口へ廻しまして御座りまする。

通廣　然らば、周庵老。

周庵　御免下さりませ。

（トおちせ案内して、通廣卿上手へ入る。）

上首尾々々々。かう藥が利けば、樂しみなものぢやて。ドレ、愚老もそろ〳〵出かけるといたさう。

（ト立ちかゝる。合方に成り、下手より初大内義、女中おきよ附いて出で來る。）

大内　誰かと思へば、周庵様。あなたも此處にお出での上からは、定めし御存じで御座りませう。烏丸様は何處へお越しで御座んすか。それを教へて下さんせ。

周庵　通廣卿なら、只つた今、待乳山の左近の宅へ、大急ぎでお出でなされた。

大内　何で、彼方が、左近の宅へ。

周庵　ハテ、[illegible]おや。左近の文を見ると、其の儘、直に駕籠で參られた。

（ト是にて、大内義は嫉妬の思入よろしく。）

大内　それ聞く上は、私も是から待乳山へ。

周庵　デモ、今宵は、貴方にも都合がある故、よしにしやれ。

大内　都合があらうが、あるまいが、それに構うて居られぬわいなア。

周庵　さうでもあらうが、今宵は止しにしやれ。（ト止める）

大内　エヽ、わたしや氣が氣で。

（ト振拂うて突くな、道具替りの知らせ。）

無いわいなア。

（ト下手へ入る。周庵呆れて見送る。此の仕組よろしく。）　（道具廻る）

待乳山茶屋座敷の場　本舞臺下手寄りに二間半の高座敷、常足の二重、茅葺屋根、正面床の間、違壁、上下共障子、行燈を灯し、脇息、莨盆を置く、平舞臺上手寄りに奥深く中足二重位の築山、爰に九尺の大丸堂、前の扉開閉あり、軒に金燈籠を吊し、燈をつける、築山の周圍泉水、正面に石橋、上下樹木の張物にて見切る、都て待乳山下茶屋座敷の體。こゝに千姬、下髮、白地縮緬模様の着附にて、上手に佇ひ、幾島左近、歌舞伎太夫の拵へにて、下手に佇ひ居る。時の鐘、合方にて道具止る。

千姬　今鳴る鐘は、アリヤ、五ツ。もう見えられさうなも

のぢやなう。

左近　今宵は、境町の料理茶屋へお入りの由を聞きました故、文を差しあげましたれば、程無くお越しで御座りませう。

千姫　シタが、左近や。彼方は妾が事を何と仰しやつてぢやぞや。

近左　ハイ、御前様の御情は忘れは置かぬと、それは〱悦んでゞ御座ります。それも其の筈、誰あらう、将軍家のお姉君様に戀ひ慕はるゝ彼方こそ、世にも得難き果報なお方。

千姫　それでも、彼方はいつも打解けたお物語はなされぬわいの。

左近　そんな筈は御座りませぬが。

（ト考へて。）

夫れでは、かう遊ばして御覧じませ。彼方が所持の祕藏の品を何なりと御所望遊ばしませ。

千姫　ほんにさうぢや。男の心を引いて見るには、良い手段。

左近　必ずおぬかり遊ばしまするな。

（ト此の時、薄き風の音に成り、合圖の柝の音する。）

お越し成されたと見えまする。ドレお迎へ申してまゐりませう。

（ト左近平舞臺上手へ入る。）

千姫　かうも、戀路は果敢無いものか。

（ト待わびる。此の時、上手より前場の通廣綱、左近に案内されて出で來る。）

左近　御前様お連れ申しました。

千姫　大儀であつた。

左近　わたくしは是で御免を蒙りまする。お歸りは、何時もの切り戸から、よろしう御座りまするか。

（ト千姫へ思入あつて。）

御ゆるりとお話し遊ばしませ。

（ト左近下手へ入る。）

通廣　左近が文に、駕籠を急がせ參りしが、如何なる御用で御座るよな。

千姫　サア、あなたへ妾が制無き無心、何と御聞き入れは下さりませぬか。

通廣　ハテ、奥方へ一大事頼み申した此の通廣。身に叶ふ事ならば、何なりとお望みあれ。

千姫　左様なれば、お言葉にあまえ、あなたが御所持の名香を妾にお譲り下さりませ。

通廣　何事の御望みかと思ひの外なる香の御所望。いと安き事では御座れど、仔細あつて、此の香は他人に譲れぬ家の祕藏。是ばかりは御容赦下されい。

千姫　大方さうと存じまして、誰と御無心申した名香。その仔細と仰しやるは、言ひ交した女房より取り替はした戀の形見。何とさうでは御座りませうがな。
通廣　是は又、迷惑な御邪推、決して左樣な譯では御座らぬ。
千姫　イエ／＼、それに違ひは御座りませぬ。それと知つて、猶はきつい情知らず。綺麗に思ひ諦らめました。其の替り、妾にも心得が御座りまする。
（ト思入にて言ふ。）
姫通　左樣までに御所望なれば、身に替へ難き香なれど、差上ぐるで御座らう。
（ト懐中より香包を取出し、千姫に渡す。）
千姫　然らば御座りまする。是をあなたと思ひなぞらへ、大事に掛けるで御座りませう。
（ト押戴いて、懐中する。）
通廣　それはさて置き、奥方へ兼てお話し致した我等が存意、將軍家へ御申し入れ下されしや。如何で御座るな。
千姫　其の儀はお氣遣ひ遊ばしまするな。德川家より京都への御仕向け改めらるゝ事は素より、あなたが御歸洛御許しの事までも詳しく文に認めて、將軍家の御手許まで差上げ置いて御座りまする。御存じの通り、妾は將軍家の實の姉、其の姉が一期の願ひとあれば、必ず良い御沙汰があるで御座りませう。シタガ通廣樣。お望み叶うた其の時は、是程思ふ此の身の願ひ。なア。
通廣　ソリヤ、其の時は、通廣に、不義の契を。
千姫　戀ひ慕はれたが因果ぢやと、お諦らめ下さりませ。
（ト扇を開き面を隱す。通廣思入あつて。）
通廣　此の通廣を、それ程までにお慕ひ下さる御情、決して忘れは致さねど、何を隱さん、我等には二世と契りし女が御座る。
千姫　エッ。（ト驚き）
シテ、其の女は何處の誰で御座りまする。
通廣　通廣が忍び通へる女、明けて、其の名は申されぬ。
千姫　さては、其の香の出所も。フム。
（ト思入。此の時、下手の奥にて。）
中務　左近は何處に居るぞ。左近々々。
（ト烈しく呼ぶ聲聞える。千姫驚きて。）
千姫　アノ聲は、確に我夫。
通廣　此處にあつては、御身の大事。
千姫　見られぬ中に、裏口から。
通廣　少しも早う。
（ト通廣卿は千姫の手を取り、平舞臺に下り、上手へ行かうとする。此の時、上手よりも人の來る跫音する故。）

千姫　裏口からも人の跫音。
通廣　前後の道を塞がれては、最早、遁るゝに所無し。
（ト此の内、千姫は四邊を見廻して、人丸堂を見て。）
千姫　幸ひ、あれなる人丸堂。姿を隱すに屈竟の場所。
通廣　然らば、與方はあれへ。我等はウム。
（ト通廣卿は上手樹木の蔭へ入る。千姫は人丸堂の中へ逃込み、燈明を消し、扉をしめる。合方に成り、下手より周庵、雪洞を持ち先にたち、續いて中務、前場の拵へにて、家來堀口右京を從へ出で來りて。）
周庵　此處には、誰も居りませぬ。
中務　さては、通廣、早くも逃げ失せ居つたるよな。然し、左近は人丸堂へ隱れる姿を見とめしぞ。周庵老には、彼處へ參り、錠前シカと改して參られい。
周庵　承知致した。
（ト周庵、人丸堂の緣へ上り、鍵を見つけて、錠前を下す。）
中務　右京、近う參れ。
右京　ハ、ッ。（ト前へ出る）
中務　關東の御爲には、目の上の瘤とも思ふ通廣卿。兼て將軍家より内命の旨もあれば、只一討と思ひしに、逃げ失せたるは、殘念至極ぢや。
右京　假令、逃げ失せたればとて、まだ遠くは參りますまい。跡追駈けて引捕へん。
中務　斯る折は、又あるまい。必ず共に怠るまいぞ。
周庵　シテ、是なる鍵は如何いたしませう。
中務　其の鍵は貴老に預け置く。左近めを取逃がさぬやうに致されい、右京參れ。
（ト中務に右京、周庵附いて下手へ入る。大内藏は上手より出で。）
大内　通廣樣のお跡を慕ひ、急いで此處まで來て見れば、折よく裏口が閉いて居た故、はいる事ははいつたれど、勝手知らぬ御庭内。人離したを心當てに、忍んで窺ふ今の樣子。さては、左近は此の社へ隱れて、錠を下されたか。それにつけても、通廣樣、何處へお隱れなされたやら、エヽ、氣の揉めた事ぢやわいなア。
（ト此の時、上手の樹蔭より通廣卿出で來りて。）
通廣　通廣は此處に居るが、其方は如何して參りしぞ。
大内　エヽ、どうした處では御座んせぬ。貴方にお怨み申し上げようと、お跡を追うて參りました。
通廣　其方の怨はさる事ながら、我等が是へ參りしは深い仔細のある事ぢや。
大内　仔細が無うてなろうかいなア。私にあれ程堅い約束遊ばしながら、アノ左近と言ひ交はし、人目を忍ぶお出會はお恨みで御座んすわいなア。

通廣　其方が左近と思ふは誤り。實は通廣が一大事を頼みたる女性にて、決して我等が戀ではないのぢや。

大内　そんなら、左近では御座んせぬか。

通廣　人目に掛るを憚かる御方、今の間に逃がさずば、通廣が大事の破滅。

大内　ヱヽ大事の破滅と何言りまするか。

通廣　如何にも何は兎もあれ、是へ參れ。

大内　シテ、大事と何言りまするは。

通廣　大事と申すは、餘の儀ならず。我等事は謀叛の御不審に依り、江戸へ召されて、はや、三年。嘸々伊豆守にも面會たし、朝廷尊敬の名實を明らかにいたすやうと說き聞かせども、何故か將軍家にはお聞き入れ無く、如何はせんと思ふ折柄、さるべき女性に出會ひ、是幸ひと、大事を頼み申した。アノ社に隱れたるが。卽ち、其の女性なるぞ。

大内　それまでお聞き申せし上は、さつぱり心が晴れました。シタが最前おろしたあの扉、どうして開ける事が出來ませう

通廣　然らば、扉を打破つて。

大内　イエ／＼、扉を破る物音に、人が參らば、御身の上。（ト思入あつて）人に盡すもあなたのおため。此處は、私が引受けて、乾度お逃がし申しませう。

通廣　スリヤ、其方が働きにて。

大内　一念こもる女の力。キット仕遂げて見せませう。その代りに、あなたは此處を早う逃げて下さんせ。

通廣　其の志は嬉しけれど、事仕損ずる其の時は、其方に難儀がかゝるであらう。

大内　假令、難儀がかゝらう共、少しも厭ひは御座んせぬ。本多樣が、モシ此處へ引返して來らるゝ時は、折角の御心盡しも水の泡、少しも早う。

通廣　然らば、其方はわれに代り。まさかの時には一命までも。

大内　アイ、棄てる心で御座んすわいなア。

通廣　それ程までに、通廣を。

大内　思はいで、何としませう。

（ト兩人寄り添ふ。此の時、人の跫音する故。）

人の來ぬ中、少しも早う。

通廣　然らば、乾度頼みしぞ。

（ト通廣卿は上手へ入る。合方に成り、下手より周庵急ぎ足にて出で來る。）

周庵　今、此方が話して居た相手の男は誰ぢや。

（ト是にて、大内藏ギックリしたる思入あつて。）

大内　アノ、私が話して居たは。

周庵　サア、誰ぢや。

大内　それは、アノ。
周庵　誰であつたか。
大内　サア、それは。
（ト此の時、傳内、前場の拵へにて出で來り。）
傳内　わしで御座りまする。
周庵　オヽ、此方は傳内、いつの間に來て居たのぢや。
傳内　太夫が此處へ來たと聞き、あとを附けて來ましたのサ。
周庵　イヤ、此方が話して居たのなら、何も咎める處は無い。シタガ、傳内が是へ參りしは、もつけの幸ひ、愚老は此處に居られぬ餘儀ない急用がある故、何んと傳内、替つて番をしてくれまいか。
傳内　お預りとあるなれば、わしが番をいたしませう。
周庵　ナニ、替つてくれるか。有難い〳〵。然らば、此の鍵は傳内へ預けて置くぞよ。
（ト鍵を出す。大内藏是を見て。）
大内　其の鍵は妾が預かつて置きませう。
周庵　然らば、其方に預けて置く。本多殿の來らるゝまで、必ず開けては成らぬぞよ。是にて、愚老は引上げると致さう。今にも本多殿が參られたら、宜いやうに取り成して置いてくりやれ。ヤレ〳〵、生き返つたやうぢや。
（ト周庵下手へ入る。）

大内　傳内殿、忝う御座んした。
傳内　何の其の禮に及ばうぞ。有りやうは、明日の芝居の事に付き、此方に教へる事があつて、再び祇園座へ行つた處、血相變へて、是々だと聞くより、直に駈付けて、木藏で聞けば、此方の難儀。とんだ狂言をしましたわい。
大内　そんなら、お前は通廣樣の話を聞いて居なさんしたか。
傳内　薄々聞いて居ましたが、必ず心配しなさんな。此方のためには、火の中へもはいらうと言ふ傳内ぢや。金輪際此の事は人に話す事で御座らぬ。何は、ともあれ、此處は左近の寮。人の來ぬ中少しも早う。
大内　承知で御座んす。傳内殿。見張つて居て下さんせ。
傳内　合點ぢや。
（ト傳内下手へ入る。）
大内　人目を憚かるお方とあれば。
（ト二重の行燈の火を吹き消す。本釣鐘。蟲の音に成り、大内藏再び平舞臺に下り、闇黒を探り歩く體にて、人丸堂の上にあがり、鍵を出し、錠前を開けて。）
氣遣ひ無い者で御座んす。此處お開けなされませ。
（ト此の時、扉を開けて、千姫顏を出し。）
千姫　妾を救うてたもるのか。
大内　四邊に誰も居りませぬ。邪魔の無い中、お逃げなさ

れませ。サア、お手を取りませう。
（ト大内藏、千姫の手を取り、平舞臺に來る。）
千姫　誰かは知らぬが、此の情忝いぞや。
大内　通廣樣が一大事をお頼みあつたあなたぢやもの。是しきの事に、何のお禮に及びませう。
（ト是にて、千姫思入あつて。）
千姫　それを知つた此方こそ。扨は、アノ。
大内　通廣樣と言替した者で御座んす。
千姫　スリヤ、其方が通廣樣と。
大内　恥しながら、二世かけて契を結んだ仲で御座んす。
千姫　だまりや／＼。通廣卿には妾こそ言ひ替した仲ぢやわいなう。
大内　エヽ、何と仰言ります。
千姫　後の契とは未かけて、變らぬ誓を立てた仲ぢや。それを妨げする者は誰彼の用捨は無い。乾度憂き目を見せるぞよ。
大内　スリヤ、あなたは恩を仇で御返しなさるお心か。
千姫　其方如きに恩の仇のと言はる可き妾で無い。後日の覺えに、其方の顔。
大内　あなたのお顔も。
（トキツト成る。此處へ下手より傳内走り出で來り。）
傳内　早くせぬと本多樣が、是へお出でぢや。
千姫　エツ、コリヤ、此處には。
（ト驚き、上手へ行きかゝるを、大内藏留る。此の間に、傳内からみ、一寸だんまり模樣の爭ひあつて、トヾ千姫扇子を落し、上手へ逃げてはひる。此の時、正面の書割ホーッと白み、月の上る體傳内扇子を拾ひて。）
傳内　今の女が落した扇。
（ト大内藏に渡せば。）
大内　エヽ、見るも怨みの。
（ト言ふを木の頭。）
種ぢやわいなア。
（ト扇子を見て、恨めしき思入。此の體よろしく合方にて。）

—幕—

二　幕　目

吉田御殿樂屋の場
同歌舞伎舞臺の場

役　名

烏丸通廣卿、本多中務少輔忠時、歌舞伎役者都傳内、同村山又兵衛、同玉川主馬之助、頭取大

和屋重助、衣裳方、床山、中務室千姫、桐大内藏、同弟子菊枝、幾島左近、同弟子芳江、奥女中磯浪、同伏屋、同朝霧、同夕風、同明石、同三吉野、其他腰元大勢。

吉田御殿座敷樂屋の場　本舞臺通し平舞臺、正面上下總て花の丸の金襖、同じ大欄間、舞臺一面に薄縁を敷き詰め、宜き處に衣裳葛籠を横になし、鏡臺を四臺程並べ、臺の上に臺を乘せ、小道具、大小等を取り散らしある。總て吉田御殿座敷樂屋の體よろしく。此處に上手に傳内、遠藤武者の顔を拵へ、其の次に、玉川主馬之助、渡の顔だけして、兩人共部屋着の姿にて、立ち掛り、立廻りの稽古をして居る、此の次に、村山又兵衛、老母の顔だけして、是も部屋着、衣裳方を呼び附け談じて居る、其の下手に、鏡臺一ツ明けて、桐大内藏、臺下、部屋着姿にて、鏡臺の前に坐り、書拔を讀んで居る、傍に菊枝、弟子の拵へ、化粧の支度をして居る、男衆、衣裳附、床山等いづれも派手な着附にて、下手後へ下つて、茶を飲んで居る、此の體よろしく。大小入の踊地にて幕開く。

傳内　ソラ、ヨイ〳〵〳〵。大きく割つて、ドッコイショで極まるのだ。どうもお前の呼吸が惡い、私は袈裟の首を渡の首だと思つて居るから、お前に後へ引戻され、少し變だと思ふ此處の息を呑込んでくれぬ故、合はぬのぢや。

主馬　お前はさう言ひなさるが、暗闇の立廻りで、おまけに、渡は宵に寢酒を飲み、よく寢入つた處だもの、急に飛び起きての立廻りに、盛遠の息などが何で分るものかい。

傳内　サア、其處が狂言ぢや、少しは嘘でも、面白う見せねばならぬ。

主馬　それでも、わしには此方の樣な誂へは出來ぬわい。

傳内　何んぢや。出來ぬ。コレ、お前も俳優ぢやないか。出來ぬですむまいが。

主馬　どうせ私は俳優が下手故、お前の樣な譯には行きませんのさ。

（ト主馬之助は彼方を向く。）

傳内　勝手にしをれ。

（ト傳内も脇を向く。又兵衛聞き兼ねて、仲裁に入る。）

又兵　是はしたり、どうしたもの。傳内さんも怒らずに、氣長に教へてやらつしやい。又、主馬さんも短氣を出さず、傳内さんの息に合ふやう幾度でも遣り直し、教はるのが、是、藝道の務と言ふものだ。

衣裳　親方、衣裳は是で宜しう御座りますか。

又兵　よくは無いが、今と成つては仕方が無い。それで我優をして置かう。時に、傳内さん、今の内に御座敷を拜見して來ようぢや御座らぬか。

傳内　イヤ、わたしはもう最前拜見して來ました。

又兵　そんなら、主馬さんはどうぢや。

主馬　傳内さんが行かないなら、お前と一緒に行きませう。

傳内　エヽ、其の尊詞が癪にさはる。

（ト立ちかゝるを又兵衛留めて）

又兵　ハテ、若者の言ふ事ぢや。打つちやつて置かつしやれ。（ト振り返りて）サア、お前方も一緒に御座らぬか。

庄山／男衆　ヘイ、お供いたしませう。

（ト又兵衛、主馬之助に庄山、男衆等附いて下手へはひる。傳内四邊に思入あつて、大内藏に向ひ。）

傳内　時に、太夫、今度の芝居は褒めぬ者無い大出來し、相手の左近はひどい不評。見事に此方の勝となり、喜ばねばならぬ處、どうしたものだか、五六日此方は、ふさいでばかり御座らつしやるが、心配事が御座るなら、わしに話してお聞かせなさい。

大内　いつも親切によう尋ねて下さんす。わたしが心の内の苦勞、まア聞いて下さんせ。（ト合方に成る）お前も知つての通廣樣、此の間の晩、待乳山でお目にかゝつたその翌日、高倉屋敷を引拂ひ、此のあき御殿へお移りなされ、それから後は御文も無く、人は死なうと生きようと、勝手にせよ、との御心かと怨めしいやら悲しいやら、さう言ふ内にも御無事か、お病ひでも出はせぬかと、其の苦勞まで一ツになり、憂身の窶る瀨が御座んせぬ。是を思へば、世の中に、戀程つらいものは無い。（ト菊枝に向ひ）菊枝なども若い身空、必ず人に戀をしやるな。

菊枝　太夫さんのお胸の中、よう察して居りまする。修業中のわたし、そんな心は御座りませぬ。

傳内　わしも通廣樣が此の御殿にと聞いた故、さつきにから、御殿中を聞き合せて見ましたが、中々御番が嚴重で、いつかな逢はれる事ぢやないげな。事によつたら、是とても、此の間の扇子の主がさせる業では無からうか。

大内　それに付けても、通廣樣。お心までが移りはせぬか。

傳内　わからないのは、女の素性。

大内　どうぞ聞きたい。

傳内　ものだなア。

（ト兩人よろしく思入。此の時、頭取大和屋重助、袴、着附にて出て來り。）

重助　もし太夫さん、もう此の幕が切れるから、早く支度に掛つて下さい。傳内どのも早く衣裳を附けさつしやれ。

それから床山は、頭はどうしたのぢや。衣裳は着附をどうしたのぢや。エヽ、床山は衣裳をどうした。衣裳は床山、イヤ、忙くまい〳〵。エヽ、氣の揉める。

（ト額の汗を拭ひながら引返してはひる。）

傳内　つまらぬ話で邪魔をしました。早く支度にかゝらつしやれ。ドレ、又兵衞さんを呼んで來ようか。

（ト傳内下手の奥へはひる。）

菊枝　もし、太夫さん、一寸襟を直しませうかえ。

大内　イエ〳〵、わたしが直すわいなア。

（ト化粧にかゝる。此の時、止木の音聞え、シヤギル。）

菊枝　アレもう、切れたさうナ。

大内　切れたとは縁起でも無い。

菊枝　御免なされませ。

大内　手鏡を取つてたも。

菊枝　アイ〳〵。

（ト言ひながら、鏡臺の傍を探し居る。）

大内　何をしてぞ、早うしや。

（ト叱られて、菊枝隣りの鏡臺の上に、のせてある手鏡を取つて、大内藏に渡す。大内藏氣附かずに使つて居る。此の時、上手の奥より幾島左近、染模樣の着附、名古屋帶、紫足袋、女舞の姿。次に芳江、弟子の拵へにて、小道具を持ち、そのあとに、片はづしの奥女中磯浪、伏屋、朝霞、夕風附いて出て來り、左近は鏡臺の前へ、奥女中はその左右を取卷いて坐る。

磯浪　時に、左近や、いつも愚はない中に、わけて今日の舞の出來榮え詞にも言へぬわいの。

伏屋　此方程舞を舞ふ者、江戸はもとより京大阪にも又と二人はあるまいわいナ。

左近　それはあなた方の贔屓目と申すもの、大内藏どのがツイそこで嫌な顔をしてゞ御座んす。

（ト大内藏の方を見て、自分の鏡を使つて居る故、ぐツと癪にさはつたる思入。）

朝霞　大内藏とやら盆くらとやら、何程上手か知らぬけれど、千姫樣の御前では、歌舞伎太夫は左近一人ぢや。

夕風　一度御殿へ召されると、歸りには長持幾棹、拜領物で一ぱいぢや。大内藏などもちつとあやかりや。

左近　それと言ふも、殿樣、御前樣、久松樣の御贔屓故、よう御禮を申上げて下さりませ。其の拜領で思ひ出した、御前樣から戴いた大事の鏡、此の所へ載せて置いたが、見えぬわいナ。

（トわざと探す事よろしく。）

芳江　盗まれたら、知らぬ事、無くなる譯が御座んせぬ。

（ト是にて、菊江はとんだ事をしたと言ふ思入にて、モヂ〳〵して居る。左近、芳江思入ある。）

まア、呆れた者ぢやわいなア。（ト大内蔵の傍へ行き）もし、太夫さん、此の鏡、誰に断つて使ひなさんすえ。

（ト是にて、大内蔵初めて心附き。）

大内　ほんに、コリヤわたしの鏡では無い。コレ、菊枝、わたしの鏡はどうしやつた。

菊枝　ありやうは、内を出がけに、餘り急いで取り忘れて参りました。

大内　是は粗忽なッサ、早うお返し申しや。

菊枝　ツイ手近にあつた鏡、断り言ふにもどなたも居ず、あとで、おわびをする積りで一寸お借り申しました。どうぞ勘辨して下さんせ。（ト鏡を返してわびる事よろしく）

芳江　何ぼお前がしをらしく詫言しても、人の物を断り言はずに使ふ此方、此の後、何をしやるも知れぬ。油断のならぬ事ぢやわいなア。

菊枝　ソリヤ、此方あまりぢや。是までたゞの一度でも横着な事をした身に覚えのない此の菊枝、油断のならぬなんのとは盗みでもする様で、人の聞えも恥かしい。氣を附けて物を言や。

芳江　コリヤ、をかしいわいなア。盗みする者たけ〴〵しいと、己の横道は棚へ上げ、人前のよいつくろひ事、柔和な顔はして居ても、恐ろしい此方の料簡、以後の懲しめ、いつそかうして。

（ト前にある鏡を取つて立ち上る。）

左近　芳江、待ちや。

芳江　デモ、日頃の恨。（ト言掛けて、心附き）恨は無けれど、餘り小癪に觸る故。

左近　エヽ、立ち騒いで見つとも無い。控へて居や。

（ト是にて、芳江下に居る。左近思入あつて。）

大内藏さん、一寸其處まで。

大内　出よと言ひなさるのかえ。

左近　如何にも。

（ト合方に成り、兩人前へ出て。）

お前も立派な歌舞伎の太夫。其の道一ト通りの心得は知つて居るで御座んせう。鏡は女の魂とて、大切に扱ふもの。分けて、歌舞伎のわざをきには侍の大小同様、若しも武士の腰の物に断りも無く手を附けたら命さわぎであらうぞえ。事は變れど道理は一ツ。お前が使つた私の鏡、その納りはどうつけるので御座んすえ。

大内　お前に何と言はれても、言譯の無いこちらの粗忽。私が手を突いて詫びる程に、どうぞ許して下さんせ。

左近　イヽエ、お前が詫びた位では濟まされぬ。此の鏡は千姫様より拜領品。言はゞ彼方の魂ぢや。それを此方の手に掛けて汚した事を表面向き御前様へ申上げたら、コリ

ヤ大事にならうぞや。

（ト是にて、菊枝前へ出で。）

菊枝　さう言ふ鏡とは露知らず手をつけたのが私の越度、舞臺の意趣を晴さんと言ひがゝりする喧嘩買、詫言しても聞れぬなら、何處へなりと出ようわいな。

（ト腹立たしき思入にて言ふ。左近は取り合はずに莨を呑んで居る。）

磯浪　だまつて聞いて居れば、よい事と心得て。

伏屋　左近をさみする憎てい口。

朝霧　私等とても贔屓の太夫。

夕風　コリヤ、聞き捨てには成らぬわいなア。

菊枝　ならずばどうなとなさんせ。太夫さんは知らぬ事。粗忽の主は此の菊枝。私が相手ぢや、相手で御座んす。

（ト聲高に言ふ）

大内　是はしたり、どうしたもの。爰を何處ぢやと思うて居る。吉田御殿の御座敷ぢやぞや。

菊枝　デモ、餘りで御座んす故。

大内　靜にして居やいなう。（ト制する）

左近　何と皆さん、あれを御覽じたかえ。

霧浪　揃ひも揃つた。

四人　弟子師匠。ホヽヽヽヽヽ。

（ト聲高に笑ふ事よろしく、此の時奥女中龍田上手より出で。）

齋田　磯浪殿、今此處へ御前樣が御出で遊ばしまするぞえ。

霧浪　それは大變ぢやわいな。

龍田　尤も役者は部屋着の儘で苦しからぬとの御詞で御座んす。

（ト是にて、急に鏡臺を上下へ片寄せ、大内藏、左近、菊枝、芳江等は下手へ、奥女中等は上手へ分れて居並ぶ。合方に成り、正面の襖を開け、千姫、下髮、襠姿。腰元四人脇息を持ちて附添ひ出で來り、千姫に眞中へ。腰元は正面へ居並ぶ。）

千姫　コレ左近、妾は芝居の樂屋と言ふ事兼ねて聞いては居たれ共、目に見るのは今が始めて。テモ興のある所ぢやなう。

左近　是は御殿の假の樂屋。眞は至つてむさくろしい粗末な所で御座りまする。

千姫　左近の隣りに居るのは、聞き及ぶ大内藏なるか。

大内　ハツ、お見知り置き下さりませう。

千姫　今日は大儀ぢや。

大内　數なりませぬ私まで、晴の御召に預つて有難う存じまする。

千姫　今日設けのお客と言ふは烏丸通廣卿、積る御憂さ慰めんと思ひ立つたる妾が持成し。尤も是には仔細のある

事。此の館は妾が昔大阪より立歸り、暫しの住居に設けし所。其の後本多家へ輿入して住ふ者も無かつたを、今度台命にて通度場の假の宿となされし次第。さすれば妾にも由緒あり、將軍家の御許受けて今日一日の歌舞伎の催し。皆も心を附けたがよいぞや。

（ト皆にて、大内も思入あつて。）

大内　大將軍様にも御覽とあれば、一入氣をつけ勤めまするで御座りませう。とは言ひ思ひがけない、（ト言ひかけて、心付き）仕合せに御座りまする。

（ト此の内千姫は大内藏が聲を聞いたやうぢやと言ふ思入。）

千姫　妾はチト大内藏に尋ねたい事もあれば、磯浪始め女共は遠慮しや。

磯浪　ハツ。

（ト奥女中下手へ、左近、菊枝も共に入る。）

千姫　左近は苦しう無い。そこに居や。

左近　ハツ。

千姫　大内藏に言ふは今が始めてなるが、聲は確に聞き覺えがあるやうぢや。ハテなア。

（ト考へる思入。大内藏も聞いた樣な千姫の聲ぢやと言ふ思入にて。）

大内　私もどうやら。

（ト考へる事よろしくあつて、双方一度に思ひ出した體にて。）

兩人　オヽ。

（ト兩人顏見合せ、きつと成る。合方かはり。）

大内　恥しながら戀路の姉み、燃え立つ心を抑へ兼ね、目指した宿の夕顏の、花にはあらで口無しの、匂ひばかりを心あて。

千姫　あやめもわかぬ宵闇に、妾は見えぬ夜の鳥、たゞ聲のみを覺えにて、留める袂を振拂ひ。

大内　見失ひたる秋の夜の、月無き怨。

千姫　心の闇。

大内　それにつけて、御前樣へ御覽に入れる品が御座りまする。

千姫　なに、妾に見せる品と言やるは。

（ト鏡臺の引出しより前茶の扇を出して。）

大内　即ち是で御座ります。

（ト千姫受取て。）

千姫　ムヽ。

（ト思入。左近寄り添うて。）

左近　コリヤ、御前樣の御扇子。

大内　お覺えが御座りまするか。

千姫　妾の扇子に相違ない。シテ、此の品は何處で拾うた。

大内　只今仰せの七日前、左近の寮の庭先にて。
千姫　そんならあの夜出合ひたる。
大内　戀の敵と思ひしは。
千姫　さてはそなたでありしよな。
大内　御前樣にておはせしか。
千姫　テモまア意外な。（ト屹度なる）
大内　アイヤ此のお扇子はお返し申上げまする。
（ト大内藏扇子を差出す。千姫は受取つて妬ましき思入。）
千姫　此の禮は追つて遣はすぞえ。（トキツと言ふ）
左近　さて呆れたと申さうか、法外と申さうか。大内藏風情が大納言家へ戀をするとはとんでもない身の程知らぬも加減のあるもの。まして御前樣と割無き御仲。それを知つた上からはふつつり此の戀捨てゝしまや。
（ト言へ共大内藏は默つて居る故。）
返事をせぬは不得心か。イヤサ猶も彼方に楯を突き意地を通す心なるか。
千姫　コレ左近、さう沒義道には言はぬものぞ。（ト大内藏に向ひ）なう大内藏、其方は世界の果報者、氏も系圖も無い身を以つて、雲井に近い御方の露の情を受くるは冥加に餘る喜ぞ。それに引替へ妾は又將軍家光の姉と生れ光りある身でありながら、何の因果で其方風情を戀の敵に持つたる事ぞ。本多中務と言ふ夫なければ苦勞はせぬ。大納言でも關白でも思ふが儘に添うて見せる。それがならぬは世の聞え人のそしりを氣遣ふ故、そなたにまでも心置く妾が不肖、それに引替へ其方の果報、ても下ざまは羨ましい。併し、所詮は及ばぬ戀、通廣卿の御事はあきらめたがよからうぞや。
大内　そりや御無理ぢや。御前樣、いやしい身でも上ツ方でも戀に變りは御座んせぬ。雲井に高い位貴い御名に眼がくらみ惚れた彼方ぢやないものを。たゞ捨てよと仰言るは御胴慾で御座んすわいなア。
左近　スリヤ、御前樣があれ程に、事をわけて仰言つても、其方はいやぢやと言やるのか。
大内　死なねば直らぬ戀の病、どうぞ許して下さんせ。
左近　御前樣、これでは迚も手のつけ樣が御座りませぬ。
千姫　モウよい〳〵。焦れ〳〵て望み通り焦れ死をするがよい。何ぼ其方が慕ふ共、其通廣卿は妾が手のもの。此の館へ移したは其方の通ひ路絶たんがためぢや。
大内　さては通廣卿を押込め、此の大内藏に憂目を見せ、意趣を晴らす御心ぢやな。
千姫　だまりや、大内藏、押込めとはなんの事。あなたがいとしい夫故に、惡い蟲のつかぬやう、家來に張番させて置く。大抵でない妾が心勞。それも皆大内藏故、思へ

ば憎い。（ト言ひ掛けて我が身に心附き、怒りを抑へて）
憎からぬ戀の道よなア。
（ト優しく言ふ。大内藏は無念の思入よろしくある。
此の時礒浪上手より出で來て。）
礒浪　ハツ、申上げます。大納言樣にも御出座にてお待兼
ねに御座りまする。
千姫　なに妾をお待兼ねとや。
（ト大内藏へ聞えがしに言ふ。）
左近　左樣ならば設けの御席へ。
千姫　まゐるであらう。
（ト是にて、礒浪は手を叩く。上手より以前の奥女中、
腰元皆々出で來る。）
左近は妾と一緒に來や。
左近　ハツ。
（ト是にて、千姫立ち上がり大内藏を見やり。）
千姫　コレ、大内藏、最前も申した通り今日のお客は通廣
卿ぢや。一期の見納め。隨分心をつけたがよい。
礒浪　御前樣には先づ。
皆々　入らせられませう。
（ト唄になり、千姫先きに奥女中、腰元皆々正面へ入
る。左近、大内藏へにつたり思入あつて入る。大内藏
あとを見送り立ち上りて。）

大内　コリヤ、身を棄てゝも戀の怨みを。
（ト言ひかける。菊枝下手より走り出て。）
菊枝　太夫樣。勘辨して下さんせ。
（トあやまる。大内藏氣を替へて。）
大内　オヽ、衣裳方を。
（ト言ふを木の頭。）
呼んでたも。
（ト此の時以前の傳内、又兵衞、主馬之助、男衆、衣
裳方、床山等皆々出で來り、口々に床山、衣裳附を呼
ぶ。此の體よろしく拍子幕。）　（返し）
（ト幕引付けると調べにてツナギ。道具出來次第に引
返す。）

同歌舞伎舞臺の場　本舞臺平舞臺、中程より上手斜に
金襖、花鳥の繪、中程より下手斜に三間の間常足の二
重、板羽目の蹴込、二重の正面五色の幕を張り、下手
に揚幕の出入り口、平舞臺一面高麗縁の薄縁を敷詰る、
都て吉田御殿廣間假舞臺の體。此處に、平舞臺上寄に
通廣卿、烏帽子、狩衣、指貫、中啓、下手に千姫。前
場の拵へにて、何れも椅の上に住ひ、奥女中礒浪を始

め前場の女中、腰元其の他大奥の女中多勢何れも片外し、打掛姿にて左右に別れて住ひ、左近は千姫の傍に控へる。此の體片シャギリにて幕開く。

（ト直ぐに唄淨瑠璃になり。）

〽去る程に、都のほとり鳥羽の里、葎が宿の破れ廂。あるじの老女は衣川、よる年波に後世願ひ、珠數爪ぐりて歸らるゝ。

（ト此の內に村山又兵衛、老女の拵へ、珠數を持て、橋掛より出で來り。）

又兵　けふは袈裟が見える筈、御寺を急いで歸りしが、程無く是へ見えるであらう。ドレ待受けませうか。

（ト二重上手に控へる。）

〽爰に遠藤盛遠と音に聞えし勇者あり。心は猛き武士も、戀には溺る習ひにて包めど何時か穗に出づる、薄尾花を踏分けて、伯母が家をぞ訪づるゝ。

（ト此の內、傳內、遠藤武者の拵へ、大小をさし、橋掛りより出で來り、よろしくあつて止る。）

〽盛遠門に立ち寄つて、

傳內　伯母御前は內におはすか。

〽音のふ聲に伯母は立ち出で、

又兵　珍らしや甥の殿。折角の入來なれど、けふはちと取込みがある。重ねて來ませ。

傳內　〽入らんとなすを引き止め、さても情無し。盛遠は早やけふあすの命に迫つて御座るぞよ。其の敵は伯母御前よ。

〽渡邊黨の習ひにて敵はかうぞと太刀拔きそばめ伯母が胸倉むづと取る。

（トよろしくあツて。）

又兵　コリヤわしを何とするぞ。

傳內　伯母御前が一命貰うた。

又兵　テモ理不盡な甥の殿。和主は氣ばし狂うたか。

傳內　氣は違はねど、盛遠こそ戀の病にかゝつて御座る。

（ト又兵衛が胸倉取ッたる手をゆるめ。）

イカニ伯母御前。盛遠が命助けんと思さば、御身の袈裟御前を我が妻に給はるべし　イヤと仰あらば汝諸共冥途の道連れ、伴ひ行かん。

〽返事如何にと眼を怒らせ、肩肱張つて詰め寄する。伯母は魂身に添はず、ガタ／＼ふるへておわせしが、心を鎮めて言ひけるやう、

（ト此の內兩人よろしくあつて。）

又兵　兎にも角にも、和主にかうと見込まれた娘の袈裟、直に此方に進ぜうと言ひたけれ共、今には渡と言ふ夫ある身。母が說得した上で。

傳內　返事をすると仰言るのか。

又兵　いかにも。
傳內　その拔袴が伯母御の生死(しやうし)。
又兵　後程來ませ。
傳內　龍度者左右待ちまする。
又兵　盛遠。
傳內　伯母御前。
兩人　さらば。
　ヘ詞をつがへて、盛遠は己が宿へと歸り行く。
（ト傳內は橋掛へ、又兵衛は上手の後見口へはひる。此の時、上手より腰元女中三吉野出で來る。長唄暫時止める。）
三吉　申上げます。殿樣是へ渡らせられまする。
（ト是にて、千姫案外の思入。）
千姫　渡らせられず共、よい事を、テモお物好きた事ぢやた。（ト不興の體。）
通廣　イヤ、鄙にも知らぬ者無き本多殿。我等もお近附きになり申度し。御獻酌には及び申さぬ。
（ト此の時、上手より本多中務、肩衣、袴、小刀にて前髮の小姓附添ひ出で來る。女中は褥を運び出て、通廣の下手へ座を設ける。）
中務　御遊興の最中へ無禮の推參。御容赦下されい。
千姫　ようこそ渡らせられました。

通廣　其許(そこもと)が本多殿でおはすよな。我等は烏丸通廣。奧方が今日のお持成し忝う存ずる。
中務　ゆる〳〵御見物下されい。（ト左近に向ひ）狂言始めさせい。
左近　ハッ。（ト舞臺に向ひて）ソレ始めませい。
（ト指圖する。是にて、又長唄始める。）
　ヘ實にや、芙蓉(ふよう)の眥(まなじり)に丹花の唇麗はしく、姿は野邊の女郎花(をみなへし)、人目をよける蓮笠の中ぞ床しき袈裟御前。誰が妻菊と聞くさへも、未だ恥かしの森すぎて、何時か我が家の軒近く漸く歩み着き給ふ。
（ト此の內大內藏(おほくら)、袈裟御前の拵へ、塗笠を持ち橋掛りより出で來り、道行の振よろしくある。此の間に千姫、左近を呼び、密かに文を出し、是を通廣卿へ差上げよと仕方にて言ひ附ける。左近呑込み文を懷中して上手通廣の後に住ふ。）
大內　なう母上。袈裟にてはべるぞや。
　ヘ娘の聲に母刀自は一間を走り出で、
（ト又兵衛後見口より出で來りて。）
又兵　待兼ねしぞや。是へ〳〵。
　ヘ奧へ通して聲ひそめ、
其方(そち)へ話は山々あれど、差掛つて尋ね度きは、幾程も無い母が命助けようと思やるか。又殺さうと思やるか。

〽思ひも掛けぬ問ひ事に、娑婆は母御を打守り、

大内　知れた事を問せ給ふな。須彌大海より恩多き母御の命を絶んと願ふ、不幸の娘のあるべきか。

又兵　其の詞眞ならば、遠藤武者盛遠に假の契を許してたべ。

大内　スリヤ妾に夫を重ね操を棄てよと仰るのか。

〽驚き給へば母御前は、

（ト大内藏は千姫の方をきつと見る。）

又兵　けふ甥の盛遠が久し振りで尋ね來て、和御前を宿の妻に寄越せ、いやと言はゞ刺殺さんと白刃を差附け無理難題。事を分けたる言ひ譯もいつかな聞かぬ無法者。否む時は母は素より此方までも殺す奴、一夜の逢瀬は母への情ぞ。

大内　曲も無や。母上、妾には渡と言ふ良人ある身ぞ。何として盛遠殿に會はるべき、許させ給へ。

又兵　そんなら母を見殺しにしやるか。

大内　さら／＼さうでは無けれ共、

又兵　さうでなくば、操を棄てろか。

大内　サア夫れは。

又兵　母を殺すか。

大内　サア。

兩人　サア／＼／＼。

又兵　娘、返事はどうぢやぞいなう。

〽母刀自怒り責めらるゝ。娑婆は思ひに掻き暮れて、何と岩間の流れ水、せかれて咽ぶばかりなり。

稍あつて顔を上げ、

（ト此の内左近に千姫の文を誰にも知れぬやう道具棚の襖の下へ入れる。舞臺にては大内藏屹と是を見てよろしく思入あつて決心の體。）

大内　なう母上、妾は心を極めて侍る。

又兵　スリヤ盛遠に會うてたもるか。

大内　あな淺間し、天に二ツの日輪おはさず、女に二人の夫無しとは、古へよりの人の道、其の教へを知りながら、晴れての夫と隱し夫、右と左に見較べて、嘘と眞の双面、遊び女のする業が何で妾に出來ようぞ。

（ト千姫に當付けて言ふ。又兵衞は呆れたる思入。千姫は愈々不興の體。）

氏系圖と言ふ錦にて汚なき心は包む共、包むに餘る煩惱の不義の匂ひは沈香でも伽羅でもいつかな消えぬぞや。

（ト是にて、千姫は自分の惡口と心附きて立腹と共に中務へ知れては一大事と氣を揉み、左近と顔を見合せ兩人思入よろしくある。）

榮華の光りを笠に被て、人の戀を横取りなし、人を見下す眼の中に夜叉の惡相顯はれて、すぎし昔、いとしの夫

を焔の中に裸業て逃げ歸られた事までが思ひ出されて、身の毛もよだつ。ても恐ろしい如菩薩様。

（ト悶口する内、後見出て注意する。此方は千姫大いに怒りし體にて。）

千姫　大内藏は狂氣せしぞ。左近〳〵。

（ト烈しく呼ぶ故、左近丈の事は忘れて前へ出る。）

左近　ハッ。

千姫　狂言止めさしや。

左近　ハッ。

（ト立ち掛るを中務止めて。）

中務　止るな〳〵。あれが狂言綺語ぢや。

左近　ハッ。

（ト左近當惑の思入よろしく。舞臺にては大内藏愈々落着たる體にて。）

大内　罔つない戀の神をせく情知らず恩知らず、せかれて逢はぬ身になれば、晝は幻、夜は夢、其の夢さへも泣きあかす、夜毎の枕に結びもせず、身も世もあられぬ此の思ひ、此の苦しみは誰が業ぞ、此の苦みは。

（ト言ひ掛けて、大内藏卒倒する。最前より心配して居たる兵衛駈寄りして介抱する。）

中務　大内藏には何と致した。

通廣　誰ぞ介抱して遣はせい。

（ト立ち上る。是にて、後見口、橋掛りより菊枝を先に渡の拵へしたる主馬之助、頭取重兵衛出で介抱する。千姫は妬ましき思入にて、通廣卿の傍へよるを中務隔て、舞臺に落たる文を乾度見る。左近右の文を拾ひ逃げんとするを中務取つて押へる。千姫は南無三失敗つたと言ふ思入。此の仕組よろしく木無しにて。

――幕――

二　幕　目　返し

吉田御殿緣側の場

役　名

烏丸通廣卿、將軍德川家光、本多中務忠時、中根伊豫守、堀口右京、近習等。

吉田御殿緣側の場　本舞臺通し中足の二重、六尺の本緣、正面雨戸をたて切り、上下の揚杉戸の出入り、都て吉田御殿緣側の體。うすき風の音、蟲笛にて幕開く。

ト二重下手の杉戸より茶道雪洞を携へ先に立ち、後より烏丸通廣卿白の着附に小袴、中啓を持つて出で來る。

茶道　月夜なれば、お庭の景色はよい眺めで御座りまするが、生憎、今晩は暗夜にて眞に風情が御座りませぬ。

通廣　イヤ〳〵、月は無く共、千草にすだく蟲の音を聞くが樂しみ、われは此處等をさまよひて興が盡きなば、勝手に臥戸に就くであらう。其方はわれにかまはず休息致せ。

茶道　ハッ、それではお明りは是へ置きまする。御免下さりませ。

（ト茶道雪洞を置いて上手へ入る。此の時、前幕の堀口右京、黑の覆面、凜々しき拵へにて平舞臺下手より忍び出で來り、石燈籠の蔭に佇立して窺ふ。日覆には雁が音笛。通廣卿は空を仰ぎて。）

通廣　雁の聲が致すな。通廣江戸へ召されてより今年で三度目の秋ぢや。數ふれば月日の立つは早きもの、九重の都をあとに、吾妻の旅に上りしは昨日の樣に思ひしが、秋去り秋來り今日まで永へしが、當館へ移りしより諸事今までとは打つてかはり、守りの人數を數多つけ、いと嚴重なる有樣は近々に命を召されんためか。雲井を渡る雁が音も、心あらばわが便りを悲しき人に傳へよかし。

（ト此の時、右京拔刀にて二重へ上り雪洞の明りを吹き消す。）

何奴なるぞ。

（ト身構へる。右京切りつける。通廣中啓にて右京の眉間を打ち、左右に立ち別れて屹度見得。これより臺詞を言ひながら、闇試合よろしくある。）

通廣　われを闇討にせんとする曲者、聞く共名は言ふまじ。關東にはかゝる事もあるべしと兼ねて用心は致したるぞ。通廣が一命は公の道を以つて召さるべし。さもなくば、假令われを害す共この後數多の通廣が京都に跡を絕たじ。それを一々失はゞ、德川の政事は虐政。此の江戸城も狐狸の棲家とならん。眞、通廣如き痴者の跡を絕たんと思ふなら、京都への御仕向改められねば相成らぬ。申すも恐れ多けれど、禁裏の御賄とては僅かに二萬三千石、小大名に及ばぬ御高、是が日の本の神の御末の御有樣か。苟も德川將軍君臣の道を正し、尊敬の意を表はされなば惜むに足らぬわが命、まづそれまでは朝廷へ捧げたる通廣ぞ。己等如きに討たれうや。（ト右京を組敷いて）面體は知れね共、物腰格好まだ三十に成らぬ其方、中々健氣な者、通廣が膽を寒からしめしぞ。汝如き若者がせめて十人京都にあらば、又せん術もあらうものを。彼の弄齋が謡うた通り、思ふが成らぬで持つた浮世ぢや。ハ、ハ、ハ、。

（ト通廣卿は右京を突き放し悠々として上手杉戸の内へ入る。右京は通廣の行きたる方を見送りて。）

右京　今宵を期したる大事の宿命。不覺を取つたる申譯イデ此の處で切腹なさん。

（ト腹を切らうとする。此の時、中務、袴、一本差、片手に手槍、片手に手燭を持つて下手より出で來り。）

中務　コリヤ待て、右京。委細はあれにて聞いたるぞ。

右京　スリヤお聞き遊ばしましたか。

中務　オヽ、日頃は武勇自慢の我も槍を小脇に立ちすくみしぞ。誠忠無二の通廣卿、君を諫めて助けるが、討つに勝つた忠義であらうぞ。

右京　仰せには御座りますれど、上様には烈しき御氣性、お聞入れが御座りませうや。

中務　兎角はわが胸にある事、氣遣ひいたすな。われは今宵の中に將軍家へ拜謁なし、申上る旨もあり、其方は直に屋敷へ歸れ。

右京　仰せを背くは恐れあれど、君命遂げざる某。おめ〳〵お屋敷へ歸られませうや。弱年ながら武士の端くれ、兩刀手ばさむ身の本意相立てたう存じまする。

中務　スリヤ其方は何處までも切腹いたす覺悟なるか。

右京　ハツ。此處にては憚りあり、父の墓前で腹かき切り不忠のお詫仕らん。何卒お許し下さりませ。

中務　健氣なり右京、汝が心次第にいたせ。

右京　有難う存じまする、左様なれば我君様。

中務　行け〳〵。

右京　ハツ。

（ト右京しを〳〵として平舞臺下手へはひる。此の時、上手杉戸より中根伊豫守、繼上下、一刀にて出で來りて。）

伊豫　それにおはすは本多殿か。

中務　さう言ふは伊豫殿か。

伊豫　唯今是へ上様のお忍びで御座るぞ。

中務　ナニお忍びとな。

（ト此の時、正面の雨戸を三間程あける、二重正面張り壁、爰に家光、羽織、袴、小刀、繼上下の近習二人一人は刀、一人は手雪洞を持ち附添ひ居る。）

家光　今宵の首尾心許無く是まで忍びでまゐつた。シテ、彼の一義は如何ぢや。

中務　不覺を取つて御座りまする。

家光　左様に彼の卿は武勇勝れた方であるか。

中務　アイヤ武勇に恐れは致さねど、正義に向ふ刃は御座りませぬ。

家光　何と申す。

（ト合方になり。）

中務　朝廷尊敬の御爲には命を惜まぬ國家の忠臣、討取るに忍びませぬ。況んや忠時が帶せし刀は曇を生じ、物の役に相立ちませぬ。今日限り某へお暇下し給はる様、何卒願ひ奉る。

家光　仕損じたる面目なさに退身願ふはさる事ながら、心得難き汝が言葉、仔細ぞ有らん、包まず語れ。
中務　アイヤ、忠時が身の恥辱、お聞きに入るゝは憚り有り、何事もお尋ね無く此のまゝお暇下さらば有難う存じまする。
伊豫　君へ直々の言上憚りが御座るなら、某へ内々にて仰せきけ下されい。
中務　忝うは御座れ共、某が一家の私事お話は相成りませぬ。
（ト是にて、家光思入あつて。）
家光　其方達は暫時遠慮せい。
伊豫
近習｝ハツ。
（ト伊豫守は近習兩人と上手に入る。）
家光　是にて餘人を交へざる身内同士ぢや。其方が内證われへ話して聞かせい。
（ト打解けて言ふ。）
中務　其の御懇の御言故に猶更ら申上げられませぬ。
家光　さては其方が妻の事か。
中務　ハツ。
（ト平伏する。合方變り家光思入あつて。）
家光　此の程より内々にて通廣御歸洛の儀われへ申迫る故、いかなれば斯くまでに心を盡さるゝ事なるかと密かに疑ひたるが、今日大奥にての噂を聞けば、桐大内藏が戀の意恨を狂言の言葉によそへて千姫殿を諷せしと申す事。さては姫には、彼の卿に欺かれて御座つたかと、始めてわれも心附きしが、其の不義の相手をば何故其方はかばい申すぞ。
中務　イヽヤ、通廣卿に汚れたる心おはさぬは、此の文にて相知れまする。
（ト懐中の手紙を差出せば家光は見て。）
家光　言はうやう無い姉君の亂行、德川の家の恥辱、キツト成敗なさでは叶はぬ。
（ト立腹の思入にて手紙を中務にかへす。）
中務　アイヤ、妻の成敗は此の忠時が仕ります〻。不貞の妻が血汐にて刀の曇り洗ふのが武士たるもの〻意地なれど、君には御一人の姉君なり、常より御愛慕深き御仲。武士の意地が立てばとて、君へ嘆きをかける時は主從の道相立たず、進退谷まつたる某が願ひと申すは外ならず、通廣卿歸洛の御許し、又京都への御仕向改めさせらる〻やう、此の兩條御聞き濟みの程願はしう存じまする。
家光　思ひ込んだる其の願ひ、シテ、假に家光が聞き濟むと申しなば、其方の道は相立つか。
中務　兩條お許しあるに於ては是わが妻が豫ねての願ひ、

即ち、叶ひ申せしなり。一旦不義の戀にくらみ、あらぬ方へ迷ひし共、天下の賢才を愛し、朝廷尊敬の志深く、徳川家の御爲にこよなき功を立てたる千姫、討つべき刃は御座りませぬ。さすれば、君にも御運拙きを失ひ給ふお嘆きなく、紅葉山の御霊前に願らせ給ふ御方の御夢驚かす事も無く、某が家來の道も全うさるゝと申すもの。

家光　シテ又其方の武士道はいかゞ致して相立つぞ。

中務　某は直に卿を打擲じたる不覺の御詫。前にも申上ぐる如くお暇給はる心故、最早兩刀はたばさみませぬ。

（ト此にて、家光思入あつて。）

家光　忠勝が傳へたる武士道棄てゝのわれへの奉公。家光禮を言ふぞよ。

（ト家光よろしくある。中務は懐中の手紙を出して。）

中務　此の上は跡に殘らぬやう。

（ト引裂いて雪洞の火にて焼捨てる。家光は手を鳴らす。上手より以前の伊豫守と近習出て來る。）

家光　伊豫。其方は是より直ちに伊豆守が屋敷へ赴き、千姫が願ひにより烏丸通廣卿歸洛の儀聞き屆けた。又京都の御所向へ二十萬石差上ぐるやう、此の兩條直に取はからへと申し傳へい。

伊豫　委細かしこまりました。

家光　千姫が願ひと言ふ事失念致すな。

伊豫　ハツ。

中務　スリヤ、十層倍にあまりたる御増高。

家光　京都にても御滿足であらうな。

中務　ハツ、千代田のお城は萬々歳。

家光　シテ、其方は是より如何いたすぞ。

中務　世を棄て坊主の雲水に。

家光　任せて諸國を行脚いたすか。

中務　ハ、ツ。

（ト平伏するを木の頭。兩人氣味合の思入あつて。）

——拍子幕——

三幕目

桐大內藏宅の場

役名

烏丸通廣卿、醫者松崎周庵、歌舞伎役者都傳內、頭取大和屋重兵衛、供侍、歌舞伎太夫桐大內藏、弟子菊枝、同弟子玉枝。

桐大內藏宅の場　本舞臺四間の間常足の二重、廂、緣側附、正面上の方床の間、掛物、籠、花活に菊の花を入れ、續いて地袋、違ひ棚の上に小鼓を飾り、其の次

に襖の出入り上手の軒に風鈴、二重よき處に爐を切り、自在に吊り釜、小机の上に書技其の他茶道具、煙草盆等を備へ置く、上手に桐の立木、葉の落ちる誂へ、此の向う大川を見せたる朝の背景にて見切る、下手に枝折戸、建仁寺垣、都て桐大內藏が濱町の住宅の體。此處に菊枝、島田髷、染物の着附にて三味線を彈き、玉枝は踊の稽古をして居る。端唄にて幕開く。

へ夕さみしき通ひ路、戀に朽ちなん袖の港の捨小舟、月はもとより隅田川、流れ〳〵ていざ言問はん都鳥。

（ト玉枝踊る事よろしく。）

菊枝　玉ちやん、夫れでは惡う御座んすぞえ、袖の港のと言ふ所はかう云ふ恰好に、ゆかねばなりませぬ。（ト菊枝踊つて見せる）サア、も一度今の所をやつて御覽。

玉枝　アイ〳〵。（ト踊る事よろしく）

菊枝　それでよう御座んすゞ其の振を忘れては成りません。

玉枝　有難う御座んす。

（ト合方に成り、奥より傳內、好みの着附、羽織にて出で來り。）

傳內　朝からもうお稽古かい。

菊枝　太夫さんの名代に私が稽古して居た處で御座んす。

（ト玉枝に向ひて）玉ちやん、三味線をしまつておいてよ。

玉枝　アイ〳〵。

（ト玉枝は三味線を持つて奥へ入る。兩人下手へ住ふ。）

傳內　今朝太夫の言傳に太夫元まで行つて來たが、私が來た事を太夫へ知らせて下されい。

菊枝　一寸此處で待つて居て下さんせ。

（ト立ちかゝる。此の時上手の奥にて。）

大內　傳內さんが來なさんしたら、今其處へ行きますぞえ。

（ト大內藏、玉枝に手を引かれて出て。）

オヽ、傳內さん、御苦勞で御座んす。とても此の體では勤まりませぬが、太夫元の挨拶はどうで御座んした。

傳內　されば、太夫元も餘程困つた樣子で御座つた。代りと言つては、左近より外には無いが、常からの折合ひと言ひ、殊に昨日の御殿のいきさつに、左近へ手を摺り、頭を下げ賴んだ所が、どうあらうか。マア、何にしろ一應は話して見ようと言つてゞ御座つた。

菊枝　モシ太夫樣。私にお前の代りをば勤めさせて下さりませ。

太夫　何として其方の未熟でわしの代りが勤まらうぞ。傳內どのゝ手前もある。テモ、無遠慮な子ぢやわいな。

菊枝　其の未熟も知つては居れど、お前の病氣を案じる故、

身の程知らぬ私のお願ひ、どうぞ許して下さりませ。
大内　返しても及ばぬ事、第一、太夫元さんが何で承知をなさらうぞ。
傳内　夫れにつけても、左近の挨拶を早う聞きたいものぢやわい。
（ト皆々當惑の思入。此の時前幕の頭取大和屋重兵衛奥より出で來りて。）
重兵　御免下さりませ。
傳内　オヽ、重兵衛さん、お前さんの來るのを待つて居ました。
重兵　傳内さん、左近の方はけんもほろゝの挨拶ぢや。夫れにつけても、今蔭で聞いて居りやア、菊枝さんが師匠思ひ、涙が出るやうな美しい話。コリヤモウ、他人の手を借りるよりは、菊枝さんに勤めさせて下さりませ。其處で、太夫元の方は私が内意を聞いて來ました故、大丈夫で御座ります。
傳内　重兵衛さん、よく計らつて下すつた。さう言ふ譯なら、わしが後見をして、舞臺でヤンヤと言はせる故、安心したがよう御座るぞや。
大内　とは言へ、其の子の未熟では。
重兵　ハテ、後見には傳内どのが附いて御座る故、少しも心配は入りませぬ。
傳内　サア、是で代りの話は極つた。菊枝さん、悦ばつしやれ。
菊枝　是も皆師匠のお蔭、有難う御座ります。
重兵　話が極まつたら、菊枝さんは私が連れてゆきませう。
傳内　成程、稽古の都合もあるから、先へ行きなさい。私も直にゆきますから。
菊枝　アイ〳〵。（ト大内藏に向ひ）太夫さん、行つて參ります。體を大切にしなさんせ。
大内　後の事を氣遣はず、早う行きや。（ト書拔を取つて）ソレ、書拔を持つて行きや。
菊枝　イヽエ、臺詞は空で覺えて居ます。
大内　それでも大役ぢや、ヨウ臺詞をくつて置きや。
菊枝　ではお借り申して參ります。
重兵　サア、菊枝さん、行きませう。
（ト重兵衛は菊枝を連れて奥へ入る。）
玉枝　モシ太夫さん、お藥をこしらへませうかえ。
大内　大儀ながら、さうしてくりや。
玉枝　アイ〳〵。
（ト玉枝は奥へ入る。是より床の淨るりに成り。）
〽ひとつかは立つて入りにける。後見送りて大内藏は心に餘る嬉しさを、包み兼ねたる師弟のよしみ。
大内　幼い時から仕込んだ菊枝、太夫元の手前を兼ね叱つ

ては遣つたものゝ、師匠の替りを勤めるまでに成つたかと思へば、わたしや心で嬉しう御座んす。

傳内　イヤ、わしも斯んな嬉しい事は御座らぬ。何しろ年がゆかぬ故、此方の目には未熟の樣にも見えやうが、どうして／＼行末は、立派な者になるに違ひは御座らぬぞや。時に、太夫、こなたの病氣は當座の煩ひ、四五日經てば全快せうから、案じる事は御座らぬが、それより遙か大きな病を此方は求めさつしやつたの。

大内　ナニ、大きな病とは。

（ト是を床の合方に成り。）

傳内　昨日御殿の狂言に、此方が袈裟の臺詞にて千姫樣の内證を當こすつた大膽さ。不斷の柔和には似もやらず、樂屋で聞いて居た私までが思はず冷汗をかきました。花のやうなお顏でも、心は如夜叉の千姫樣。昨日の祟りはきつと今にあるであらうと、わたしや心配でならぬわい。

大内　どんな祟りがあらうとも、少しも厭はぬ覺悟で御座んす。それに私も思ふ存分怨を言うた上からは、早う死にたう御座んすわいな。

〽女心の遣瀨なく絶入る嘆きに傳内も萎るゝ心引立てゝ、

傳内　尤もぢや／＼。誰しも戀は切無いもの。私の樣な者ですら、若い時には覺えが御座る。然し、其の苦しい所を我慢して月日が立てば、初めには死ぬる程の苦しみも、後には馴れて常となり、どうやらかうやら生きて居られる。此方も心を取り直し盛りの花をわれから散らさず、行末ある身を歌舞伎に盡し美名を末世に殘して下され。赤の他人のわしなれど、舞臺の上では親と呼び。

〽父と言はれて恩愛の絆は、變らぬ眞の血筋。

親子の樣に思つて居るのぢや。此の後ともに悲しい話をわしに聞かせて下さるな。

〽親身も及ばぬ傳内が意見に、大内漸氣を取り直し、

大内　嬉しう御座んす。傳内どの、お前の意見に從つて、ふつつり心を入れ替へませう。

傳内　そりや此方眞實か。

大内　通廣樣の事は、わたしやあきらめましたわいな。

傳内　よく聞き入れて下すつた。此の上は事無い内暫く江戸を去らねばならぬ。それはわたしが太夫元とよく相談をしませうわい。

〽先から先へ傳内が心を奥の一間より、玉枝は香箱携へて二人の前へ出來り、

（ト奥より玉枝蒔繪の筐を持つて出で來りて。）

玉枝　つひに見馴れぬお使ひが太夫樣へ此の箱をあげてくれいと言ひ置いて、其の儘歸りましたわいなア。

大內　シテ、其のお使ひはどちらからぢや。
玉枝　烏丸樣で御座んす。箱は此處へ置いて行きますぞえ。
（ト奥へ入る。）
〽取る手おそしと打見れば、內ぞゆかしき高蒔繪。
大內　そんなら是を通廣樣から。フム。
〽開けんとするを止むる傳內。
傳內　其の中のは何か知らぬが、折角思ひあきらめた彼方から寄越した物、中を見ずと其の儘に返した方がよからうぞや。
大內　さうでもあらうが、一寸蓋を開けさせて下さんせ。
〽心ときめき蓋取れば、あたりに薫る香包。恨めしさうに打守り、
傳內殿、見て下さんせ。忘れもせぬ今年の彌生、通廣樣と言ひ交はし。戀の形見と此の香を彼方へあげしが、八日前お目にかゝつた其の時に其方が祕藏の名香故、桐壺と名を付けて、肌身離さず所持すると聞いた時の悦びが失せもやらぬに、ハヤ今朝。
〽秋風立ちて捨てられし扇の怨の夫れならで、夕は主の枕に薫り、朝に灰とすがれゆく。
〽哀れの果てやと掻きくどく、聞く傳內も慰め兼ね、顏をそむけて居たりしが、氣を取り直し涙を拭ひ、

傳內　オヽ、話に實が入り肝腎の稽古を見てやるのを忘れて居た。私はもう行く程に、こなた氣をしつかりと持つて御座れよ。
大內　後の事は氣にかけず、早ういて見てやつて下さんせ。傳內殿、何分賴みましたぞや。
傳內　わしが確かり請合ひました。いづれ歸りに又寄りまする。
〽眞實こめし言の葉をあとに殘して出て行く。
（ト傳內奥へ入る。）
〽後姿を打ち眺め、涙にうるむ目を押拭ひ、
大內　傳內殿や菊枝までが親身も及ばぬ親切さ、添うて涙がこぼれる。其の親切に引換へて、戀の形見の此の香まで返して寄越した通廣樣、かねての契りも皆僞り、今は見るさへいやな此の香、烟とすれば心は殘らぬ。
〽たたう諸共火の中へ投げ入るれば、立ちのぼる香の煙に大內藏は暫し茫然たる折から、枝折戸開けて通廣卿、縁先に佇立み給ひ、
（ト此の內、大內藏香包諸共に火の中へくべる。煙立ちて能花活の菊萎れ、大內藏ウツとりとなる。此の時、烏丸通廣卿、烏帽子、狩衣、指貫にて供侍を從へて出で來り、枝折戸を開けて。）
通廣　オヽ、大內藏、これにか。烏丸通廣ぢや。

〽言ふに此方は心付き、見るもいぶせき御姿と立た
んとするを止むる通廣。
（ト大内藏驚き奥へゆかんとするを通廣止めて。）
コリヤ、大内藏、そなたは何處へ。

大内　心の變つた通廣樣。詞かはすもいやで御座んす。

通廣　其の腹立は無理ならねど、今朝我等が來りしは其方に詫をなさんがためぢや。

大内　イエ〳〵、それは僞りぢや。お公家樣は色手歌と諺にも言ふ通り女をだますがきついお上手。もう大概にして下さんせ。

通廣　神以つて欺かぬ。われ等が意中を一通り聞いてくりやれ。大納言通廣が女の袖に取縋り大事を圖りしと後日の批判思はぬでは無けれども、是朝廷の御爲と千姬に大事を頼み色情の誘惑を愼みたるわれ等が苦心、其方が推量の及ばぬ所ぢや。きのふ御身が千姬の前にて怨を述べたる時は、聞き居るわれ等が心の中刺されるやうに思ひしぞ。それを忍びし甲斐あつて、今度京都の御賄三十萬石に增高せられ、また此の通廣今朝歸洛を許されたるぞ。

大内　そんなら、あなたのお心は變つたのでは御座んせぬか。

通廣　何の其方に嘘僞り、神かけ變らぬ仲では無いか。

大内　そんなら、眞實。

通廣　盡未來まで變りはせぬぞ。

大内　エヽ、嬉しう御座んすわいな。
〽俄かにかはる喜びの笑顏に、胸を撫下し安き心ぞ
道理なる。

通廣　われ歸洛と極る上はかねての契り、御身は通廣が宿の妻ぢや。

大内　スリヤ、賤しい此の身を北の方に。

通廣　都へ伴ひ歸る心ぢや。

大内　テモ有難い思召。歌舞伎太夫が出世して、大納言樣の北の方とは昔が今に至るまで、いまだ例しの無い話。まるで夢の樣ぢやわいな。夢たら醒めな、醒めてくれるな。
〽勇める顏も何處やらに、沈み勝なる五音の調子、
（ト此の内、大内藏毒氣廻りたる思入。）
通廣卿は打案じ、

通廣　いつもに似ぬ御身の顏色、いと惡しく見ゆるは氣分でも勝れぬか。

大内　氣分に變りは御座んせぬが、あまり泣いた其の後が天へも上る喜びに、一足飛びのわたしの仕合せ、お腹の中まで顚倒したか、少し動悸がする樣で御座んす。

通廣　案じらるゝ其方の樣子。病の起り心當りはあらざるか。

大内　別に心當りは御座んせぬが、最前あなたのお使ひが持つて來られた香箱の香を焚きしに、何時もと違ひいやな氣持で御座んした。

通廣　ハテ、合點のゆかぬ。われ等に於ては使を寄越した覺えない。シテ、其の香箱はいづれにあるぞ。

大内　是ぢやわいな。

通廣　つひに見た事も無き此の香箱。

大内　それでも中には覺えの香。あなたのお筆で疊紙へ桐壺と遊ばしたは切れる印と思はれて、腹立たしくもあつたれど、今から思へば吉左右を知らせの香で御座んした。

〽聞くに、若しやと通廣卿。

通廣　シテ、焚殘しの香はあるか。

大内　殘らず焚いてしまひました。

通廣　アヽ麁相な事をいたした。

〽心の惱み、懸念の浮雲。立ちあがりて彼方に向ひ、

通廣　誰ぞ侍の者は居るか。

供侍　ハツ。

（ト門の内より侍一人出で來る。）

御用に御座りまするか。

通廣　款冬局殿が宅は此の最寄りと聞き及ぶ。呼迎へて參れ。

供侍　ハツ。

（ト侍下手へ入る。）

〽毒氣の惱み、大内藏が見る間に變る息遣ひ、

大内　急に熱が出た樣子、わたしの顔を見て下さんせ。

通廣　唇の色變り、眼の中曇りて參りしは。（ト言ひ掛けて心附き）イヤ、左したる事で無からうぞ。

大内　わたしもさうは思うて居たれど、急に變つた此の樣子、千筋の髪も一時に燃えるやうな頭の邪熱。そればかりか、心まで當にもあらぬ狂はしさ、取りとめもない妄想が眼先にちら付き見えるのはコリヤ氣が違うたと言ふのか知らん。是では戀しい通廣樣の北の方には成れぬわいな。オヽ、北の方ハテ、どなたの北の方であつたぞいなア。

通廣　コリヤ、大内藏には放心せしよな。

〽言へど大内藏呆然と、

大内　今あなたの仰言つたは何の事で御座んすえ。

通廣　われ等が顔を覺えて居るか

大内　ソレ忘れて成るものぞ。百人一首でお馴染のお公家樣ぢやわいな。

〽取つても附かぬ挨拶に、不便いやます大納言。折から軒の風鈴の風につれて鳴る音に、大内藏すつくと立ちあがり、

（ト風鈴しきりに鳴る。大内藏緣側に進み出で。）
けたゝましく鳴るアノ鈴の音は鳴神上人が今勤行の最中ぢやの。アノ上人を墮落させる女は罪の深いもの、其の絶間姫を勤めるわたしは未來は地獄へ落ちようぞ。其の落ちるが怖いとて此の戀がやめられうか。

通廣　是は何事ぞ。氣を確に持ちやれ。

大内　エヽ、邪魔しやんな、是から舞臺へ出る所ぢやわいな。

ヘ袂拂ひてゆかんとす。足もしどろに、氣は上ずり、何を目あてに幻の追へば消えゆく秋の螢。ただうつとりと佇みて、

（ト此の内に舞臺半廻しになり、屋體の横を見せ、桐の立木前へ出る。是と同時に奥より玉枝藥茶碗を盆にのせて持つて出で來る。大内藏は向うを見て。）

大内　テモ夥しい見物ぢやわいな。

玉枝　申し太夫樣。お藥が出來ました。

大内　エヽ、舞臺ぢや。靜かにしや。

玉枝　エヽ。（ト驚く）

大内　何驚く事があらう。忘れもせぬ今年の彌生。

ヘ櫻にまさるお姿を垣間見てより踏迷ふ、嬉しの森の下蔭に結ぶ契りも恥かしや。

（ト大内藏は玉枝をとらへてサワリ模樣の振よろしくあつて。）

二世をかけて契つたあなた、何處に見物して御座るやら。オヽ、あそこの棧敷に居てぢや。嬉しや〳〵。此方を見て御座るわいな。舞臺の棧敷、中を隔つる人の山。それでも眼と眼が物を言ふ。必ず脇目をして下さんすな。其のやさしいお前の眼が、わしの戀路の闇を照らす光明で御座んすぞえ。（ト後へ下りて、桐の木へ寄りかゝりてニッタリ。）

ヘうつゝたわいも無き折柄、使と共に息を切り駈けつけ來る松崎周庵。

（ト此の時、バタ〳〵になり序幕の周庵、侍の案内にて下手より出で來りて。）

周庵　ヤア此の體は、大内藏殿。どうさつしやれた。

ヘ尋ぬる顔を打守り、

（ト大内藏は周庵を見て。）

大内　オヽ、あなたは上人樣。エヽ、つれ無いぞえ。何ぼ佛の御弟子でも竹や木では御座んすまい。是程こがるゝ妾が願ひをどうぞ叶へて下さりませ。

ヘくどきたて〳〵、なげき縋れば、驚く周庵。

（ト大内藏は周庵を鳴神上人と間違へて口說く事よろしく。）

周庵　イヤどうも薄つ氣味がわるい。コレ大内藏殿。愚老

が脈を見て進ぜようから、彼方へ御座れ。
（ト手を取れば、振拂ひて前へ出て）

大内　アレ／＼あの棧敷へ女が一人見えた。男の膝によりかゝり阿諛情かる囁き聲。見苦しい。聞きや。何んぼ小聲で囁いても、此處までちやんと聞えて居る。エヽ、口惜しい／＼。いつそ彼所へ踏込んで此の怨み言はいで置かうか。
〽悋氣の形相凄じく、行かんとなすを止むる周庵。
玉枝は取りつきおろ／＼聲。

周庵　大内藏殿には如何致した。

玉枝　太夫樣。氣をたしかに持つて下さりませ。
〽取付き嘆けど、氣はそゞろ、あなたこなたとかけ廻る。
（ト大内藏物狂はしきこなし。玉枝よろしくからむ。床のメリヤスにて狂ひよろしく。周庵は呆れしこなしよろしく止める。）
〽見るに堪へ兼ね通廣卿、大内藏の袖しつかとらへ、
（ト通廣も棧敷を出で、周庵と共に大内藏を抱き止める。）

通廣　コリヤ大内藏。何とて正氣には返らぬぞ。此の通廣が聲は最早其方に通ぜざるか。
〽心を籠めし一聲の耳に通じて、大内藏は二人の面を打守り、
（トよろしく思入にて。）

大内　あなたは通廣樣。こなたは周庵殿。
〽力も拔けた空蟬の、
（ト大内藏悶絶する。周庵容體を見る事よろしく。）

周庵　最早存命は覺束無う御座りまする。斯して暫らく置く方が氣が落ちついてよく御座らう。併、餘程重體で御座りまする。
（ト是にて、通廣玉枝に向ひて。）

通廣　ゆかりの者もあるならば、疾呼びに遣はせ。

玉枝　アイ、承知で御座んす。
（ト奥へ入る。）
〽涙ぬぐうて急ぎ行く。周庵四邊を打眺め、圖らず目に入る蒔繪の香箱。

周庵　此の香箱は如何いたして此の所に。

通廣　仔細あつて大内藏が手に入つたる品なるが、貴老見覺えが御座るか。

周庵　いかにも存じて居りまする。

通廣　シテ、いづれにて見られしぞ。

周庵　千姫樣の御前にて拜見したる覺えの香箱。中には南蠻祕法の毒藥。
（ト是にて、通廣思入あつて）

通廣　それで樣子が相分つた。ゆめ人に語りたまふな。
　ヘ受けし情を無にせざる、通廣卿がはからひは實に當代の賢者なり。斯る所へ傳内が立ち歸つて仰天なし。
　（ト以前の傳内、玉枝附いて奥より出で來り。）
傳内　コレ太夫、どうさつしやれた。傳内で御座る。此方(こなた)には親兄弟も同然の傳内ぢや。
　ヘわれを忘れて呼び立つれば、大内藏は眼を見ひらき、
　（ト大内藏は疲勞せし體にて傳内の顏を見て。）
大内　傳内殿、悦んで下さんせ。わたしや通廣樣の北の方で御座んすぞえ。
　ヘ淋しき笑顏をつく／＼見て、
傳内　出世をしたは嬉しいが、見違へる樣な此のやつれ。斯くも急に變るものか。もし、お醫者樣は參りませぬか。
通廣　周庵老が見えたれども、存命覺束無しとの事。
傳内　コリヤ太夫は此の儘に。とても叶はぬ命なら、わしが代つてやりたいわい。
　ヘ嘆けば此方(こなた)は近づく死期(しご)、次第につのる苦しみに、
　（ト此の内、大内藏段々疲れて苦しむ思入。）
大内　通廣樣はいづれにぞ。わたしや今死ぬるはいや。切(せう)て五年か三年。それがならずば、一月なりと生きてお側に居たう御座んす。二十五の春秋を苦勞に送つて、是からさき戀しいお方と二人して樂しい月日を迎へる際(きは)に何で死んでゆかれよう。わたしや生きたい、生きながらへたい。
　ヘ取り縋りては立ちあがり、又倒れては身をもだえ、輪廻(りんゑ)に迷ふ儚さに。
　（ト大内藏よろしくある。通廣あけて言はれぬ切無き思入あつて。）
通廣　其のくり言は尤もながら、最早此の世に頼み無き其(そ)方(た)。冥土と娑婆は隔つるとも、變らぬ契りぞ。
大内　嬉しう御座んす。
　ヘ悦ぶ聲を名殘にて、今を限りの斷末魔。
　（ト此の時、以前の菊枝奥より走り出て。）
菊枝　太夫樣。菊枝で御座んす。太夫樣々々々。
　ヘ呼べど答へは枯れてゆく、桐の葉落つる朝嵐、覺めてはかなき夢の世や、哀れを後の物語、今に傳へて。
　（ト三重にて。）

――幕――

來山

今宮十萬堂來山(らいざん)庵の場

役名

土岐伊豫守、有村一學、小西來山、嶋清兵衞、番頭忠右衞門、太鼓持頓八、五人組九兵衞、平七、長助、作藏、彌吉、藝子小ふじ、仲居おまち、子守おまつ、駕籠屋兩人。

今宮來山庵の場　本舞臺眞中に四間常足の二重、三方竹椽、藁葺屋根、よき處に白字にて、十萬堂、と書いた木の額、正面上手床の間、續いて塗壁、下手二枚の襖、光琳の繪、竹椽、上手へ折廻して九尺の附屋體、障子にて切る、矢張り藁葺屋體、風雅を極めたる建物、平舞臺いつもの庭に枝折戸、垣根、此の外正面今宮の在家を見せたる秋野の書割、枝折戸の內、庭の心にて飛石、燈籠、秋の七草の下草等よろしく、二重に文臺、料紙、硯箱、茶道具等を置く、よき處に燒物の女人形を置く、都て今宮の來山庵の體よろしく。時刻は七ツ下り、古風な唄にて幕開く。

ト下手より仲居おまち、太鼓持頓八茶臺の住吉踊を持つてウロ〳〵しながら出で來り、

頓八　なア、おまちはん。有村の旦那は小ふじはんを連れて駕籠でさきへ急がせ、島屋の寮を尋ねてあとから來いと言やはつたが、此方(こなた)その島屋の寮を知つてか。

まち　あたいも來た事が無いに依つて知らんのや。

頓八　なんのこつちやいな。私は又お前がよう知つて居るのやと思うたに依つて聞かずに附いて來たのや。そんなら、此處で問うてやらう。

（ト枝折戸の傍に立ち寄りて。）

モシ、一寸お尋ね申します。此の近所に島屋と言ふお茶屋の寮がある筈。其處へ行く道を敎へて下さいませ。モシ〳〵。

（ト枝折戸を開ける。此の時、奧より忠右衞門、商家の番頭の拵へにて出で來りて。）

忠右　此處の主人は今留守で、私は他所から來合せた者故、此の界隈の事はとんと私には分りません。

まち　頓八はん、聞いてか。此のお方も知らぬと言やはるが、どうしたものやらうな。

頓八　かう成つたら、もう仕方がおまへん。一軒々々聞い

て歩きませう。
（ト行きかける。此の時、子守おまつ子守唄を唄ひながら出で來る。）
まつ　ねんねこ〱ねんねこせい、ねんねのお守は何處へ行つた。
頓八　ア、コレ、其處へ行く子守はん。此方（こなた）島屋の寮を知つて居やるか。
まつ　ア、知つて居ます。其の家ならツイ此の後ろぢや。
まち　其處へ行くにはどう行けばよいのか。
頓八　賢い子ぢや。敎へておくれ。
まつ　敎へても上げようが、徒（たゞ）ぢや嫌だなア。
頓八　テモ慾張つた守ッ子ぢや。
まち　一寸お待ち。是を上げる。
（ト錢を出して遣る。）
まつ　をばさん、是をわたいにくれるのかえ。
まち　なんなと買うておあがり。
まつ　有難う。飴を買はうか、饅頭にせうか、何方（どつち）にせうか、思案橋、ホイ。
（ト節を附けて唄ふ。聽ておまつは二人を連れて下手へ入る。）
忠右　廓の人を見るにつけ、困つた者は家の若旦那樣。戀慕る御放埓。今日は旦那樣のお歸りを待つて是非共若旦那へ御意見をお願ひ申さねばならぬ。
（ト待ち受ける。合方に成り、向うより來山、光つたる坊主頭、黑の十德の拵へにて、手錠をはめ、五人組九兵衞、平七、長助、作藏、彌吉、いづれも平袴、羽織にて附添ひ出で來り、すぐに舞臺へ來りて。）
九兵　來山殿。それでは私等は是で別れませう。
來山　まア、內へ入つて茶でも飮んで歸つて下され。
平七　イヤ〱、此の內で造作になるのは氣の毒ぢや。
長助　此方（こなた）もさぞ口惜からうが、昔から泣く子と地頭には勝たれぬ譬。
作藏　いくら此方（こつち）に理があつても、相手がお奉行樣故、仕方が無いと諦らめさつしやれ。
彌吉　是からもある事ぢや。發句をするにも隨分共に心を附けさつしやれ。
來山　イヤモウ、心の無いお奉行に出られては閉口ぢや。
九兵　サア、それが惡い。とかく何事も言はざる見ざる聞かざるぢや。
平七　そんなら、來山殿。
來山　御苦勞で御座りました。
九兵　サア、歸りませう。
（ト五人は打連れて下手へ入る。來山は枝折戸を開けて入る。）

來山　花に咲ひ月に啼く此の身にも思はぬ災難で此の手錠。別に辛いとも思はぬが、明日から自然が出來ぬので是ばかりが當惑ぢや。

（ト此の時、忠右衛門奥より出で。）

忠右　旦那樣、お歸りなさいまし。モシ、其の手錠はどうなされたので御座ります。

來山　此の手錠は俳句のために受けた責めぢや。

忠右　何と仰しやります。

（ト合方に成り。）

來山　今日番屋へ此の來山を呼び寄せ、お役人が出張して、コリヤ、來山、其方はお奉行を嘲つた科に依り七十五日の手錠申付けると寢耳に水の申渡し、何故のお咎めと聞いて見たら其の譯と言ふのは去年の暮、お奉行の名さへ覺えず年暮れぬ、と言ふ句を詠んで人に見せたが噂となり、遂にはお奉行の耳に入つて以つての外のお怒り。大阪三郷に住居して奉行の名さへ知らぬとは上役人をさみする寓意の俳句と、思ひ設けぬ難題。イヤ、左樣では御座りませぬ。世を遁れた俳人の心を詠んだ句で御座りますると言譯しても、其の甲斐無く此の通り手錠を受けて歸つて來ました。

忠右　とんだ御災難で御座りました。とは言へ、あまり分らぬお奉行故、手蔓を求めて御城代樣へお願ひをして御赦免に成るやうにいたしませう。假令何程金錢を費してもお助け申さねばなりませぬ。

來山　其の心配は止しにさつしやれ。浮世遁れた來山、木の端か石の缺に等しい命。貴い金錢を費し、人に心配を掛ける値打は御座らぬ。番頭どん、棄てゝ置いて下され。

忠右　どうして棄てゝ置かれませう。小西のお家には今でも大黑柱のあなた樣で御座ります。それに又棄てなされた浮世の面倒を、もう一度見て頂かねば成らぬ事が出來て參りました。

來山　よく／＼心配らしい其方の樣子。一體まアどんな事で御座るぞ。

忠右　其の譯と申しますは斯うで御座ります。あなた樣が御身代を今の旦那樣にお讓り遊ばして、此の今宮へお引籠りなされてより、後は及ばずながらも此の忠右衛門内外に心をつけ、お店も繁昌いたして居りますが、若旦那には先達中より廓通ひ。それも唯のお遊興なればとや斯う申すのでは御座りませぬが、近頃では追々遊びに實が入つて、島の内の小ふじと言ふ藝子を受け出し、御家内に直さうとの思召し。取り敢へず其の藝子の素性を調べて見ますると、母親は知れてあれど、父親は何處の誰とも知れぬとの事。いかに若旦那の御執心でも、父無し子の御新造樣は小西のお家の瑕瑾で御座りますとお止め申

上げましても、一向にお聞き入れが御座りませぬ。此の上はあなた樣の御意見より、外に良いお藥が御座りませねば、お願ひに上がりまして御座います。

（ト思入あつて賴む。來山は首を振つて。）

來山　あの小西の身代はわしが大方仕上げた身代。一旦甥の淸兵衞に讓つたからは倒さうと起さうと淸兵衞が心次第ぢや。藝子でもおやまでも氣に入つた女を內に入れたがよい。世間離れた此の來山そんな事にはとんとかまはぬ。

忠右　成程、一旦讓つた御身代。どう成らうとかまはぬとは、あなた樣の御氣象、御尤もでは御座りますが、道修町の藥舖で一二を爭ふ小西のお家。人に指さし笑はれぬやうにいたしますが、憚りながら御先代へ盡すあなた樣の義理では御座りませぬか。

來山　イヤ、浮世に交らねば、人に立てる義理も無い筈ぢや。

忠右　それでは、どう成らうと構はぬと仰りますか。

來山　ハテ、成行に任しておかつしやれ。

忠右　困つた事で御座りますなア。

（ト腕組して思案に暮れる。此の以前より土岐伊豫守、羽織、袴、大名微行の拵へにて、下手より出で來たり、枝折戶の外に佇みて居たが、此の時、內に入る。）

伊豫　來山殿。御免下され。

來山　誰かと思へば雨江殿。ようお出で下された。

（ト是にて、伊豫守二重に住ひて。）

伊豫　承はれば、此方には思ひ掛け無い今日の災難。町奉行の暗愚にも驚き入つて御座る。

來山　イヤ〳〵、俳人が俳句のために、お咎め受けたは本望で御座りますぢや。ハヽヽ、ハヽヽ。

伊豫　其の雅量が無うては風流の娯みには分りませぬ。併し風流もあまり深入いたすと、遂には家も人も忘れるやうな事に相成るもので御座る。

來山　さては雨江殿には隣人の話をお聞きなされたか。

伊豫　唯今、是へ參り合はせ垣根越しに思はず承はつた。番頭殿の眞心感心いたした。

來山　それで、今の樣に當つけて言はしやつたか。

伊豫　來山殿。假令浮世を他所になすとも、義理の絆は斷たれませぬぞよ。

來山　何と言はつしやる。

伊豫　此方が受けたるそれなる手錠こそ、世間のほだしは切つても切れぬ證據では御座らぬか。世外に遊ぶ俳人と自ら極めて居られても、町奉行の支配を受け、其の下知には背かれぬ如く、此の世の義理は棄てられませぬ。それ共其の手錠斷ち切つて棄て召さるゝか。

來山　サア、それは。
伊豫　いかに心强い來山殿でも其の戒めはよも切れまい。さすれば、世間の義理とても生ある身には棄てられず。番頭殿が主家を思ふ忠義に愛で、再び浮世の面倒を見てお遣りなされずば、眞の風流人では御座りませぬぞ。
（ト是にて、來山默つて居る、忠右衞門前へ出で。）
忠右　私事は小西の召使ひ忠右衞門めに御座ります。段々お言葉をお添へ下され有難う存じまする。シテ、あなた樣は何方樣で御座りますか。
伊豫　われ等事は月に一兩度づゝ此の庵を訪ねて、風月を樂しむ雨江と申す者。心安だてらに入らざる口出しをいたした。來山殿。惡う思うて下さるな。
（ト此の時、來山は自分の非を悟つた思入あつて。）
來山　イヤ、雨江殿の御意見で心得違ひを覺りました。
忠右　そんなら、お願ひ申した事をお聞き入れ下さりますか。
來山　清兵衞が迷ひの夢の覺めるまでは、又元の小西四郎兵衞。浮世の夢を又見ようわい。
忠右　忝う御座ります。是と言ふも、雨江樣のお蔭、なんとお禮を申上げてよいやら、有難う存じます。
伊豫　何の禮に及ばうぞ。然し、來山殿が兩手を戒められて居ては不自由で御座らう。われ等が解いて進ぜよう。
（ト來山の傍に寄る。）
來山　アイヤ、此の手錠は町奉行のお許しが無い中はいつかな取れませぬ。
伊豫　其の町奉行へはわれ等より既に申談じて赦を受けて參つた。
來山　そんならあなた樣が御厚情で。
伊豫　必ず共に心配召さるな。
（ト伊豫守來山の手錠を外してよき處に置く。）
來山　お蔭で戒めが取れて、天地の間に自由の身となりました。
忠右　重ね〴〵のお情け有難う存じまする。シタが、唯今のお言葉の樣子と言ひ、お羽織の御紋と言ひ、モシヤ御城代樣ぢや御座りませぬか。
伊豫　ホヽオ、番頭殿は天晴れ目が高い。如何にもわれ等此の日頃俳名の雨江にて來山殿と心安くいたしたが、實は城代土岐伊豫守ぢや。
（ト來山、忠右衞門は驚く。）
伊豫　風流の友垣は大名町人隔ての無いが樂しみぢや。
來山　流石は雨江殿、感心いたしました。（ト忠右衞門に向ひて）時に、番頭どん。其方は大急ぎ家に歸り、清兵衞を連れて來さつしやれ。わしが會うて、まづ意見をしてやりませう。

忠右　大方若旦那様は今日も島の内で御座りませうに依つて、直ぐお連れ申しまする。（ト伊豫守に向ひて）左様なれば、御城代様。
伊豫　イヤ、此の庵で城代は申さぬ事ぢや。
忠右　是はうつかりいたしました。雨江様、御ゆるりと遊ばしませ。ドレ一走り行つて參りませう。
（ト忠右衞門一さんに向うへ入る。）
伊豫　小西の家では良い番頭を持つて仕合せぢや。とかう言ふ中最早夕景。われ等もお暇いたさう。
來山　お構ひ無くば、薄茶でも獻じませう程に、御ゆるりとなされませ。
伊豫　折角ながら、又こそ參るで御座らう。
（ト平舞臺に下りる。鉦の音聞える。）
ハテ、床しき音がいたす。
（ト來山一寸考へて。）
來山　今宮は蟲所なり蠶なり。
伊豫　ウム、感吟ぢや。
（ト此の時、下手より供人多勢挾箱等を持ち出で來り。）
供人　お迎ひ。
伊豫　オヽ、大儀ぢや。
供人　ハッ。
（ト平伏する。伊豫守は花道附際まで行く。）
伊豫　今宮は蟲所なり。
（ト後句を考へる。來山引取りて。）
來山　蠶なり。
（ト兩人顏見合せ。）
兩人　ハヽヽ。
（ト笑ひながら伊豫守は供を隨へて向うへ入る。來山思入あつて。）
來山　浮世を棄てた來山も、又俗人に成らねばならぬか。
（ト文臺を脇へ寄せる。此處へ下手より小ふじ、菓子の鉢へ、跣足にて走り來り、枝折戸を開けて、内に入り。）
ふじ　少しの間隱して下さんせ。モシ、お願ひで御座ります。
（ト跡を氣遣ふ思入。）
來山　見れば廓の人さうなが、どうして、逃げて御座つた。
ふじ　お客に連れられて島屋の茶屋へ來ました處、其のお客が嫌がる私を手込めにせうとしました故、逃げ出して參りましたが、あとから追駈けて來るかも知れませねば、何處へなと隱して下さんせ。お慈悲で御座んす。
來山　それは氣の毒な。さう言ふ譯なら隱して進ぜませう。其處に雜用があるに依つて足を拭いて此方へ御座れ。

（ト道具半廻しに成る。小ふじは足を拭いて、來山に附いて上手の附屋體に入る。此の時、下手より有村一學、大小、袴、薩摩侍の拵へ、小ふじの後を尋ねる體にて出で來り、思入あつて、內に入る。）

一學　チト物をお尋ね申す。此の內へ若い女が逃げ込んで參りはいたさぬか。返答を聞き申したい。

（ト此の時、奧より來山行燈を下げて來り。）

來山　イヤ、女と言うては女猫一疋も參りはいたしませぬが、外口をお尋ねなさりませ。

一學　確かに此の方角へ逃げて參つた女め。隱れる所は此の廂より外には無い。某が念晴らしに家搜しのさせておくりやれ。

（ト二重へあがるを來山止めて）

來山　それは成りませぬ。火打箱の樣な家でも小西來山が住居ぢや。踏込めるものなら踏込んで御覽なされ。

一學　吹けば飛ぶ樣な老耄め、入らざる留立てせずとすつ込んで居よ。

來山　女に眼のくらんだ侍、一足も奧へはやらぬぞ。

一學　小癪な事を。

（ト留める來山を突きのけ足蹴にする。上手の障子を開けて以前の小ふじ走り出で。）

ふじ　有村さん。待つて下さんせ。

一學　其方は小ふじ。遁れぬ所と觀念して、某が戀を叶へてくれるか。

ふじ　イ、エ、主さんに此の身を任す心は少しも御座んせぬが、お慈悲深い此處のお方に怪我をさせてはすまぬ故、それで私が出て來たのぢや。お年寄を足蹴にせずと、私を存分打たしやんせ。死んでも主さんの心には從はぬぞえ。

（ト小ふじ一學に身體を突きつける。）

一學　可愛さ餘つて憎さが百倍とは、小ふじ其方の事ぢや。某が腰に差した氷の刃よりもそつと冷たい其方が胸を一突きにしてくれう。

ふじ　そんなら、主さん。私を切る氣で御座んすか。

一學　オ、、おいどんも國の習ひ。仕かけた戀が叶はずば一思ひに切つて仕舞ふのぢや。

ふじ　イエ、わたしや外に戀しい殿御が御座んす故、一學さんの刃にはかゝりませぬ。

一學　おのれ、その頰げたを切り下げくれん。

（ト刀を拔く。小ふじ平舞臺に下りる。來山刀の下を掻くゞつて一學を留め。）

來山　まア〳〵待たつしやりませ。武士の嗜み重代の業物は、女を切るためのお差料で御座りますか。

一學　ヤツ。

來山　侍の意地づく、乘りかけた舟。女めを一打ちとお心早るは御尤もなれど、よう考へて御覽じませ。女一人を切る時はあなたは切腹。親御は人に笑はれて、先祖代々の御位牌に瑕が附きませうぞや。それ程高價な代物を拂ふ程の女はめつたに御座りませぬ。世間一通りの女は此の人形の樣に上に五色を彩つて美しう見せかけても、中は土塊同然。それに男の魂を打込んであたら命をさゝげるは大きな阿呆。此の來山も譯あつて浮世の女は皆水臭いものぢやと見限つて、土人形の色娘、此の方が餘程罪が無うて良う御座ります。あなた樣もまだお年若、お國には親御さんも御座らう。さりとては御不料簡。拔いた刃は血を見ずに元の鞘へ納まらぬと云ふ事なら、此の人形を眞二ツ、それで御勘辨なされませ。なんとで御座りまする、お武家樣。

（ト此の內、一學だん／＼氣が碎けて、果ては頭を垂れ、下に坐りて。）

一學　よく相分つた。然らば其方が言葉に任せ、おいどんはまかり歸る。

來山　そんなら、御會得が參りましたか。

一學　眞二ツにと存ぜしに命冥加な女めぢや。

（ト唄に成り、向うへ入る。）

ふじ　お蔭で危い所を助かり、命拾ひをいたしました。お禮は言葉に盡されませぬ。

來山　どう成る事かと心配したが、流石は薩摩の武士。竹を割つた樣な氣象ぢや。それはさうと、此方は何方の娘子ぢや。

ふじ　アイ、私は島の內の小ふじと言ふ者で御座んす。

來山　あの此方が小ふじ。ム、。

（ト思入。行燈をつける。此の時、向うより小西清兵衞、商家の若旦那の拵へにて、駕籠に乘り、以上の忠右衞門附いて出來り、直ぐに舞臺に來り。）

忠右　此處でよい／＼。

清兵　モウ此處が今宮か。考へながら來たせゐか、何時もより近かつた事なア。

（ト言ひながら、駕籠を出る。忠右衞門酒手を駕籠屋に遣り。）

忠右　御苦勞であつた。

駕一　有難う御座います。今にも泣出し相な空工合ぢや。

駕二　降らぬ中に早く歸らうぜ。

（ト駕籠屋は空駕籠を舁いで向うへ入る。）

清兵　泣出し相とはわしの心を言うたのか。

忠右　イエ、今に晴れて參ります。（ト枝折戸を開けて、內に入り）旦那樣をお連れ申して御座ります。

來山　丁度好い處であつた。サア、此方へ通らつしやれ。

（ト此の時、清兵衞は小ふじと顏見合せて。）

清兵　ヤツ、其方は小ふじ。

ふじ　若旦那。

（ト兩人寄添ふを、來山中に割つて入り。）

來山　ア、コレ、二人共必ず傍へ寄るまいぞ。所詮添ふ事ならぬ縁と諦らめて、綺麗に別れて下され。思ひ思うた若い同士、別れる今は辛からうが、つまりは矢張り二人のためぢや。コレ、清兵衞。まづ其方から返事を聞かう。

清兵　長年の其の間小言一つ仰言らぬ叔父樣が御意見背いては濟まねど共、小ふじとは堅い／＼約束した仲、其の言葉を反故にしては此の清兵衞男が立ちませぬ。

忠右　御尤もで御座りますが、素性も知れぬ流れの女を御家内になされましては、それこそ世間へお顏向けが成りませぬ。約束した義理が立たぬとなれば、金で話はつきまする。取返へしの成らぬお家の名折れ、ようお考へ遊ばしませ。

清兵　いくら考へても、わしの心は一つぢや。どうあつても、小ふじを女房に持つ事が出來ぬと言ふたら、コリヤ、一層わしが小西の家を出て行かう。さすれば、差支へは無い筈ぢや。忠右衞門、其方から叔父樣にわしの勘當を願うてたも。

忠右　そんなら、あなたの方からあの御勘當を。

清兵　オヽ、其の方が餘程氣樂でよい。サア、小ふじ、行かう。

（ト清兵衞小ふじの手を取る。來山思入あつて。）

來山　清兵衞、待つた。おのれ勘當受けて女を連れ、明日からなにをして口過ぎをする積りぢや。勘當せいと言ふおのれに涙は無からうが、此の叔父が胸は一杯ぢや。業屋の商ひ一イ通りの道は知つて居ても、腕一本で稼いだ事も無いおのれ。何をして命を繫ぎをらうかと思へば、涙がこぼれるわい。今更ら言ふまでも無いが、此の來山はおのれが父清右衞門の弟ぢや。兄が無くなつた時、おのれはまだ年齡が行かなかつたので、わしが家督を相續したが、兩親共に失うたおのれを不便に思ひ、忙しい中で人手にかけず育て上げ、二十五に成るを待ち兼ねて身代讓つて、ヤレ、安心と思ふ間も無く身持放埒。よからぬ噂も度々聞けど、成行次第と棄てゝ置いたが、忠右衞門がたつての頼みに、二度ともう世間の事にはたづさはらぬと心で極めた誓を破り意見をするは何のため。更々身代の減るを惜しんでするでは無い。おのれを人に笑はせまいと思ふ眞身の情ぢや。いくら勘當してくれと其方で頼まう共、此の叔父は勘當せぬ。身代減らす極道の清兵衞何故叩き出して仕舞はぬ。來山は阿房ぢやと笑はれても大事ない。是程思ふ叔父の心が少しでも其方の胸に

通ふなら、小ふじ女郎を思ひ切り、堅氣の嫁を迎へてくりやれ。遊女の涙が身に浸みて、叔父や番頭が眞の涙は身に浸まぬか。さりとては、情けないぞよ。

（ト落涙の體。小ふじ思入つて。）

ふじ　エ、聞えませぬ。叔父御様。遊女の涙と眞身の涙出る所が違うてか。同じ眼から出る涙を別け隔てするは餘りな。とは言へ、父様の素性も知れぬ私は、所詮若旦那と添はれぬ縁と諦らめました。今日から綺麗に別れまする。

清兵　それでは、今までの約束が皆嘘の皮ぢや。

ふじ　イ、エ、嘘では御座んせぬ。私は今までの睦言を明日からの思ひ出に生きる積りで御座んす。

清兵　今までの事を思ひ出にして生きようとはよう言うてくれた。嬉しいぞや。わしは其處に氣附かず、其方と一緒に暮せるだけは暮し、愈々つまつた其の時こそは共に死ぬ積りであつたが、賴みにならぬ來世の契り。それより互ひに永へてさへ居たら、花の匂ひだけは何時までも樂しめよう。

ふじ　そんなら、お前も諦めて。

清兵　今後ふつつり逢ひませぬ。とは言へ、比翼と契つた二人が仲、今より後は獨寢の。

ふじ　夢だけは許して下さんせ。（ト泣伏す）

來山　そんなら、あの得心して下さるか。

ふじ　アイ。眞實得心ぢやわいなア。

來山　よう聞き分けて下された。忝い／＼。

忠右　若旦那も天晴お出かしなされました。小ふじ殿、何にも言はぬ。是ぢや／＼。

（ト忠右衛門小ふじに向ひ手を合せて拜む。）

來山　斯う話が極つた上は一つ所に居ないがよい。清兵衛は忠右衛門と一緒に奥へ行きやれ。又、小ふじ女郎は島の内へ。わしが其處まで送つて進ぜませう。

忠右　イエ、私が送つて参りませう。

來山　イヤ、道々話したい事もあれば、わしに駕籠屋まで送らせて下され。

忠右　それでは、お願ひいたしまする。サア若旦那、奥へお越しなされませ。

（ト是にて、清兵衛立上り、奥へ行きかけて。）

清兵　コレ、小ふじ。もう一度顔を見せてたも。

ふじ　アイ。

（ト兩人寄り添ひて思入。此の内雨の音。）

忠右　名殘りは盡きねど、大降りにならぬ中。

來山　小ふじ女郎、出かけようか。

（ト奥より雨傘を持つて來る。小ふじを連れて、門口に出る。此の内、雨益々降り出す。）

是はえらい降りぢや。少し止めて行かつしやれ。
（ト兩人二重に上る。）
坊主頭をして、譯の分らぬ老爺ぢやと、今こそ顔も立たうが、わしも若い時に覺えのある事。謠講の歸るさ、友達に勸められて、北へ遊びに行つたが病つきで、ある女と深う成つた。所が其の女が心變りからふつつり思ひ切つて、商ひに身を入れ身代を直した。後で思へばよう別れたと思うた。然し、わしは二十越しての上の事、此方は若いに似合はずよう聞き分けて下された。せめて、此方の心を慰めるやうにして進せたいが、望みがあるなら言はつしやれ。

ふじ　有難うは御座んすが、何にも望みは御座んせぬ。若旦那に別れたは悲しいが、私が母さんの事を思へば、まだまだ諦めよう御座んす。

來山　そんなら、此方の母御も同じ樣な憂き目に逢はしやつたのか。

ふじ　アイナア、母さんも流れの身。私の父さんと夫婦約束したゞけで、浮世の義理に迫られて、心にも無い愛想盡し、あきもあかれもせぬ仲を別れた後で私が生まれ苦勞を重ねた憂い母さん、それによう似た私の身の上。義理を立てゝ若旦那に別れ、是から先を寂しく暮す涙がせめての心遣り。義理程辛いものは御座んせぬ。
（ト此の內、來山昔を思ひ出す事よろしく。）

來山　全體此方の母御は何所で勤めをして御座つた。

ふじ　曾根崎で浪花屋小梅と言うた藝子とやら。
（ト是を聞いて、來山吃驚した思入。）

來山　そんなら、此方は小梅の娘で御座るか。

ふじ　さう仰言るからは、私の母さんを御存じで御座んすか。

來山　此の老爺が若い時分小梅には度々逢うた。

ふじ　そんなら、もしや私の父さんを見知つては居やしやんせぬか。

來山　オヽ、知つて居る共、朝夕逢はぬ日とては無い。

ふじ　扨は御無事で居やしやつたか。シタガ、私の生れた事は夢にも知らぬ父さん、必ず言うて下さんすなえ。それが私の母さんの遺言。

來山　何で又其方のある事を、父御へ知らしては成らぬのぢや。

ふじ　其の譯は母さんが無くなる前に私へ寄越した此の手紙。是に委しう書いて御座んす。
（ト守袋より手紙を出して見せる。）

來山　わしに見せてはたもらぬか。

ふじ　讀んで下さんせ。
（ト手紙を來山に渡す。來山眼鏡をかけて。）

來山　なに〳〵、今度の病氣所詮全快の見込無く、近き中には此の世のお別れと存じ候まゝ、お前樣に日頃隱せし事を書き殘し候。私事二十年以前にお前樣の御父樣と別れ候事私の心からにては無之。實は父樣の兄御より內々の賴みにつき、義理に迫りて心にも無き愛想盡しはいたし候へ共、未だに其の人を慕ふ心に變りは御座無候。嘸や此身無き後は世に便り無きお前樣、誰を力に世を送るべきと思へば、胸迫り、一層御父樣にお前樣を設けし事を打明けたいと思ふ心は山々なれど、それにては賴まれた人にも義理立たず。又、何にも知らぬ御父樣に生涯苦勞をかけるが痛はしく候まゝ、今以つて知らさずに置き候。母の心を汲みて、此の身無き後も御父樣に知らす事堅く御無用に御座候。此の一事言ひ殘し度。あら〳〵かしく。

（ト幾度も目を拭きながら讀み終りて、）

そんなら、わしに苦痛をさせまいとて、娘の生れた事を知らさなんだのか。エヽ、斯うと知らず、薄情な女めと怨んだ昔が恥かしいわい。

ふじ　手紙を讀んで泣かしやんすお前は、モシヤ私の父さんでは御座んせぬか。

來山　オヽ、此の老爺が其方の父ぢや。

ふじ　そんなら、父さん。

（ト思入あつて、立ちかけると。）

來山　ア、大事無い。此方へ寄りや。よう母に似やつたなう。

ふじ　アイ。

（ト兩人手を取り合うて泣く。此の時、淸兵衞先きに忠右衞門奥より出で來り。）

淸兵　委細の樣子はあれにて承はりましたが、さては、小ふじは私の從妹であつたか。

來淸　此の來山が若氣の誤り、斯んな娘を設けた事は今まで少しも知らずに居た。番頭どん、笑つて下さるな。

忠右　笑ふ所か、お悅び申します。斯う小ふじ殿の胤が分つたからは一家同士の御緣組、若旦那と御夫婦になされては如何で御座りませう。今度は私から此の事をお願ひ申し上げまする。

來山　番頭どんの心盡しは嬉しう御座るが、それではわしが餘りわが身勝手になるに依つて、小ふじを內へ入れる事は成りませぬ。

忠右　其處を何卒忠右衞門が一生のお願ひ、是が叶ひますればどんな御奉公でもいたしまする。

來淸　何と言はしやつても、此の來山が不承知で御座る。

（ト此の前より以前の一學下手より出で來り、門戶口にて立聞きして居たるが、此の時、內に入り。）

一學　イヤ、小ふじはおいどもが妹にして、清兵衛どんの嫁に遣はしたいが、なんと御承引は下さらぬか。
來山　オヽ、此方は最前のお侍樣。
ふじ　打つて變つた今のお言葉。
一學　不審に思ふは尤もぢやが、一學前非を後悔いたした。先刻來山殿が留めて下さらずば、小ふじを打ち果し、おいどもも腹掻つ切る所であつた。イザ、鎌倉と言ふ時は君の御馬前で討死すべき此の命、女故に棄てずに濟んだのは、全く來山殿の情、千萬忝う存ずる。（ト丁寧に辭儀をして）取り敢へず、一禮申さいではと引つ返して是へ參つて、計らず聞いた此の場の樣子、小ふじをおいどもが妹にいたさうと言ふも、來山殿へ聊か返禮の心ぢや。
清兵　今までは戀の敵の一學樣が小ふじを妹にして、此の清兵衛に添はせて遣らうとは、二人のためには命の恩人。
忠右　初めてお目にかゝるお武家、よい處へお越し下されまして有難う存じます。是では旦那樣も御得心で御座りませう。
來山　一學殿が妹とあるからは、いかにも嫁に取りませう。
一學　スリヤ、御承引下さるか。
忠右　それで、私の願ひも叶ひ、有難う存じます。
（ト皆々喜ぶ。）
來山　一學殿、私は今日まで女と言ふ者はむさい者とのみ思うて居ましたが、それは私の思ひ違ひ、優しい姿の中に立派な心を持つて居る者ぢや。此の手紙を見て下さりませ。（ト以前の手紙を一學に見せる）
一學　シテ、此の手紙の主は何人。
來山　是なる小ふじが母の遺言。
（ト是にて、一學讀んで見る。）
一學　スリヤ、此の手紙が。（ト思入あつて）一字々々皆涙。
忠右　所で、お二人樣は嬉し涙。
來山　二色に氷らぬ袖の涙かな。（ト清兵衛に向ひて）清兵衛。
清兵　ハイ。
來山　此方は生きた女房、わしは土人形の色娘、ア、浮世の夢は、
（ト言ふを木の頭。）
味なものぢやなア。
（ト土人形を見て思入。清兵衛と小ふじは嬉しき思入。忠右衛門は安心の思入。一學は手紙を繰り返へし見る體よろしく。）

―― 幕 ――

鼓の里（三場）

大和櫻井鼓師内の場
同　本陣座敷の場

役　名

綾小路三位有信卿、諸太夫白川監物、金春六之丞、鼓師安房勘兵衛、同娘倉子、弟子捨藏、弟子三之助、下女おさん、名主十市兵衛、鼓の職人多勢、青侍多勢。

鼓師勘兵衛内の場　本舞臺上寄りに四間常足の二重、上の方二間は疊を敷く、正面暖簾口、棚に新木の鼓の胴を並べたる書割、下手二間は一段低く板間の細工場、正面に戸棚、その中に道具箱、櫻の用材等を置く、何時もの處に門口、是に御鼓師安房勘兵衛と書いた看板を掛ける、平舞臺上手に櫻の古木、井戸、側釣瓶、門口の外遠く多武峯を望み、近く倉橋川を見せたる書割、時候は彌生半頃、所は大和國櫻井の片端れ鼓師安房勘兵衛内の體。此處に所の若者多勢いづれも縞の着附、中には股ヒキを穿きし者も交り、鼓の職人の拵へにて、二重に腰を掛け、或は立掛り居る。此の體よろしく在郷唄にて幕開く。

皆々　老爺どのは内にか。勘兵衛殿々々。

（ト皆々口々に呼び立てる。奥にて。）

勘兵　勘兵衛は内に居るが、多勢で何の用ぢや。

（ト言ひながら、主人勘兵衛、老けたる體、何事にも頓着せぬ名工の拵へにて、暖簾口より出で來り。）

晝飯に一杯やつたら、思ひの外によう利いて、好い心持に浮世の苦患を忘れて居た所を、意地わるい、火のつくやうな聲を出して、何でわしを起したのぢや。

○　ソレ見た事か。老爺どんが腹を立てゝぢや。是ぢやに依つて、わしは大きな聲をするなと言うたのに。

□　嘘を言はつしやれ。其方が一番大きな聲を出した。

（ト他の者に向ひ）ナウ、皆の衆。

○　イエ〳〵。われが銅鑼聲をあげたのぢや。

□　何をぬかすぞい。おぬしの破鐘聲が。

（ト言ひ爭ふを勘兵衛うるさ相に。）

勘兵　エヽ、喧しい和郎達ぢや。そんな爭ひより用向を先へ言はつしやれ。

○　ホンニ、さうであつた。俺、老爺どの、かう皆が打揃

うて來ましたは、此の衆中から皆が骨を折つて居る大內御用の鼓、誰の作が一番にたるか。愈々今日中にきまるのぢや。

□　それに就ては、此の家の娘御の婿樣も愈々きまると言ふ譯ぢや。

△　そこで、其の婿殿が誰ときまつた曉に、アノ男はいやだとか、アノ和郎は蟲が好かぬとか、親子の衆が言ひ出して、變更されては一大事ぢや。

×　誰が何と言はうとも、娘はきつとやると言ふ老爺どのの誓言をもう一度。

◎　皆の前で。

皆々　聞かして下され。

勘兵　それなら安心しやれ。わしは此の年に成るまで一度も嘘をついた事は無い。言ふまでも無いが、此の櫻井は鼓の細工で名高い所。千年前の百濟と言うて、今の朝鮮ぢや。其の國の樂人味摩之と言ふ人が、日本へ來て勅命うけて、此の地で樂を傳授したのが、抑も我が國に鼓の傳はつた始まりぢや。其の時分から、吾々の先祖が鼓の胴を打つ事に心を籠め、其の技術が段々と進んで、世の寶と言はれるやうな好い鼓を造つた名人も、此の土地に生れた。私共、此の節の細工人は、利慾に走つて、腕を磨かうと心がける者が無く成つた、ア、、是では、土地の由緒もすたつて仕舞ふと、明暮、苦勞にして居た所、先達、綾小路三位樣が、わしを召されて、世の寶とも成る好い鼓を打つて差上げい、大內の御用に成さるのぢやとの御言葉。いや私は老年でも御座りますれば、土地の若い者共に打たせませう程に、其の中で、出來の好いのをお取り下されませと申上げたれば、然らば、百日中に打たせろとの仰せであつた。其處で、皆に其の譯を話して、好い鼓を打つた者には、わしが娘もわしが家も皆やらうと約束したは、和主達を勵まして、廢れ行く業を盛り返さうためぢや。何の嘘を吐くものか。

○　さうであらうとは思うたが、此の家にも捨藏、三之助と言ふ二人の弟子がある事故、若しや其の中の一人を婿にする內心ではあるまいかと、それで、皆が氣をもんで、念を押しに。

皆々　來ましたのぢや。

勘兵　和主達は、何を言ふぞい。皆が打つた胴をお見分けなさるのは、三位樣。それがため、わざわざ櫻井までお越しに成つて居る。彼方樣に依怙贔屓があつて好いものか。それにまた、此の勘兵衞とても、親子の情を先にして、家業を後にする程に、まだ老耄はして居ぬわ。

△　此方は、さうでも、一人娘の倉子どの、選り嫌ひをしまいものでも無い。

勘兵　オヽ、其の時は、娘を追ひ出して仕舞ひ、わしが魂皆に見せう。
皆々　きつとさうぢやな。
勘兵　念には及ばぬ。
○　それ聞いて、皆も安心しました。そんなら是から三位様のお宿へ行き。
□　丹精籠めて打つた胴を御覧に入れ、誰のが大内の御用に成るか。
△　皆揃うて出かけよう。さうして内の弟子達は。
勘兵　後から、わしが連れて行かう程に、かまはず行かつしやれ。
○　そんなら勘兵衛殿、本陣で。
皆々　會ひませうぞや。
（ト在郷唄に成り、六人の若者は下手へ這入る。奥より、倉子、華手な振袖、年若き娘の拵へにて、出て來り。）
倉子　モシ父さん。お前は、どんな悪人でも、鼓の胴さへ上手に打てば、娘の連合にするお心かえ。
勘兵　悪い奴に上手は無い、何故と言や、細工は腕でするのぢや無い、心でするのぢや。
倉子　それでも、死んだ母さんが、名人に怠け者が多い、朝寝をして、酒ばかり飲んで遊んで居て、家の暮しのためにはならぬと常々に言うてゞ御座んした。
勘兵　そりや、遊んで居るのぢやない。考へて居るのぢや。我が身は、いかう不足らしい顔をして居るが、娘と家を投出して、さびれ行く土地の名を盛り返さうと言ふわしが志、誰一人賞めぬ者はないぞよ。
倉子　父さんは、褒められてよからうが、わたしやつまらぬ。わたしや矢ッ張りいとしい人に添ひたう御座んす。
勘兵　アノ三之助に添ひたいか。
倉子　あいなア。
勘兵　あいつもわしが弟子故、仕事は下手ぢやないが、まだ至らぬ所がある。あれよりもモット優れた細工人がまだ外にあるかも知れぬ。わしはさう言ふ隠れた名人が欲しいに依つて、家と娘を投出したのぢや。
倉子　その替り、父さんは私を殺すのぢや、娘の戀を殺すのぢや。私の様なお多福でも、それ相應に望が御座んす。ひよつと内の捨藏見た様な片輪が養子に極つたら、わたしや何としませうぞ。
勘兵　さうなれば、至極結構ぢや。
倉子　エッ。
勘兵　何、驚く事があるものか、成程、彼奴の片足は短い、併し腕は揃うて居る。鑿を持たせば、神の子ぢや。山猿見たやうな顔はして居るが、腕には立派な魂を持つて居

る。寶を入れた箱はどんなに汚なからうとも、價値は中の寶にあるのぢや。瓦を入れた蒔繪の箱がいかに立派であらうとも、何で貴い。わしは捨藏位立派な男は此の村にあるまいと思うて居るのぢや。

倉子　そりやア、私も常々捨藏を褒めて居ます。八年前の大雪の日、アノ捨藏が破れ鼓を打つて門に立ち物貰ひに來たを、父さんが呼び込んで、夫れから内へ置いてやり、お前の弟子にして、仕事を教へ、上達はしたけれども、あれは乞食ぢや、孤兒ぢやと皆が嫌ふ其の中で、私一人お不便を加へ、痛はつてやつて居ますが、戀のあらう譯は無し、あんな男と夫婦になるのは私はいや。

勘兵　モウ〳〵、我が身の言草聞きたう無い。戀があらうがあるまいが、親の決めた男を夫としてかしづくが、是子たる者の道ぢや。我のお蔭で、酒の醉がさめた。ドレ奥へいて、飲み直さうか。（ト奥に向ひ）おさすや、酒の燗をして置けよ。

（ト言ひながら奥へ這入る。在鄕唄に成り、向うより三之助、色白の優男にて、黒塗の鼓箱を提げて出で來り、枝折戸を開けて内に這入り。）

三之　倉子さん、どうしたのぢや。又、親方が酒の上で無理を言はつしやりましたか。

倉子　ムヽ、好い處へ來てたもつた。今、父さんに割つ口說いつ賴んで見たれど、父さんは誰彼の差別無く、好い鼓を打つた者を、婿に取るのぢやと言ひ張つてぢや。

三之　それでは、大方、わしが望も。（トがつかりした思入）

倉子　エヽ、其方は水臭い。わしが望と言はずに、わしら二人が望と、何故言うてたもらぬぞ。

三之　コリヤ、私が惡かつた。成程、わしら二人が望ぢや。其の望を繫ぐ是なる鼓の胴、見て下さりませ。（ト箱の中より鼓の胴を取り出して）櫻の木にも心を用ひ、鑿のクリ一ツにも命を縮めた苦心の仕事。篤くと見て下さりませ。

（ト鼓を倉子に渡す。）

倉子　私の魂と此方の魂を一ツにして出來た鼓、何處に一ツの疵も無い好い出來ぢやなア。

（ト嬉しき思入。）

三之　イエ〳〵、安心は成りません。

倉子　そんなら、是に優つた鼓がまだ外にあると言やるか。

三之　誰のにも負けぬ積りで心に誇つて居ましたが、只恐ろしいのは、アの捨藏。

倉子　何と言やるぞ。

三子　昨夜多武の峯へ詣り、その歸りに、倉梯川の渡しへ來ると、月もおぼろの遲櫻、花の陰で、捨藏が聞く人あ

りとも知らずして、自作の鼓を調べて居たが、更け行く夜半に、音も冴え渡り、流れに響く鼓の音に、思はず聞とれ、後でわしは獨りで泣いた。どうしても彼奴は鑿で仕事をする者よりは遙かにすぐれた職ぢや。とてもわしの敵では無い。多分、此方は捨藏と夫婦にならねばなりませぬぞや。

倉子　心細い事を言うて下さんすな。假令、捨藏の打つた鼓の胴が一番であらうとも、何の夫婦に成らうぞ。又。捨藏とてもそんな夢を見ては居ぬ。只名を揚げたい一心であらう。

三之　イヤ〳〵、さうでは御座りませぬ。彼奴が此方を見る目附はどうしても戀があるのぢや。

倉子　ハテ、さう見えるは其方の邪推、若い男が私に物を言ひかければ、其方の目には皆戀人と見えるのであらう。安心しや。年頃不便を加へて世話をした捨藏ぢや。私がいやぢやと言へば、それでも夫婦に成らうと迫るやうな道知らずでは無い。

三之　イヤ〳〵、一心凝つた男の戀は義理も絲瓜もかまうては居ぬ。摺つた揉んだの揚句の果が、此方が折れて祝言する。何時の間にか子供が生れる。わしは忘れられて仕舞うて、身投をするか、坊主になるが落ぢや。

倉子　コレ、我が身は私をそのやうな弱い女子と思うてか。父さんが不承知で其方と夫婦になれぬ時は、一生外の男は持たぬ。

三之　サア、今は其の心で御座つても、捨藏が譽を擔ひ、里人に持て囃されて歸つて來るを見たなれば、アノ跛も滿足に見えよう。石のやうな堅い心もツイとろけて仕舞ふ。

倉子　エヽ、聞えぬ三之助、此の胸に燃ゆる思ひが。（ト自分の胸を指ざして）此方のすゞしい目には見えぬか。（トジツと男の顔を見上げ）神かけて、何時までも仇し心はわしは持たぬ。此の優しい手でいつものやうに。（ト三之助の手を取り）シツカリと抱いてたも。

（ト男に縋りつく。此の時、向う揚幕の内にて多勢の子供の罵る聲聞える。）

子供　跛が逃げる樣を見イやい。

皆々　ワアイ〳〵。

（ト口々に言ふ聲聞える。合方に成り、向うより捨藏、ボツト髪、至つて醜男、木綿の着附、草履をはき、跛を引きながら、走せ來り、門口に驅け込み、ホツと息を吐く。此方の二人は、忙てゝ飛び退き。）

三之　オヽ。我が身どうしたのぢや。

捨藏　又、村の惡太郎どもが大勢寄つてたかつて、わしをからかひ居つた。是も片輪に生れた不承ぢや。

（ト額に手をあてる。血紅少し流れる。）

倉子　其方は怪我をしやつたか。

三之　何處で其の傷を受けて來た。

（ト是にて捨藏手に附いた血を見て。）

捨藏　子供に追はれて逃げた時、轉んだはずみに石で打つたのであらう。

三之　いまいましい餓鬼共ぢや。以後の懲しめに引掴まへて來てやらう。

（ト行きかゝるを捨藏止めて。）

捨藏　よして下され。わしさへ勘辨すれば、それで濟む。

倉子　私が其の血を拭いてやりませう。

（ト手水鉢に水を汲んで來て、自分の手拭を濡らし、額の血を拭いてやる。後で、捨藏右の手拭をそつと戴く、是を三之助ジツと見て腹の立つ思入。）

血は止まつたが、痛みはせぬかや。

捨藏　エヽ、もう何とも無い、有難う御座いました。

（ト此の時奥より下女おさん出で來りて。）

さん　三之助さん、親方が呼んでぢや。早う奥へ行かつしやれ。

三之　今直に參りますと、さう言うて下され。

さん　直に行かぬと叱られるぞや。

（ト言ひながら、引返して入る。三之助思入あつて。）

三之　コレ、捨藏。今一時か二時の中には、わし等が身の行先が定まるのぢや。是までのやうに友達同士で居るか。又、敵同士に成るか。それまでは、オヽ、さうぢや、傀儡師の人形箱ぢや。

捨藏　相弟子同士で角の立つた物の言ひやう、仕事の敵は不斷の友達ぢや。

三之　イヽヤ、わしが言ふのは、此の仕事の敵ぢや無い。

（ト鼓の箱を叩きて）戀の敵ぢや。

捨藏　エツ。（ト思入）

三之　鬼になるか、佛になるか。運次第でわからぬが、大方、おぬしとわしとは、手を取つては歩かれまい、一つ道は行かれまい。

（ト言ひ乍ら、奥へ這入る。捨藏は跡を見送りて。）

捨藏　何の事か、わしには薩張わからぬ。

倉子　今にわかる時が來る。それはさうと、其方の打つた胴はよい出來ぢやと言ふ噂ぢやが、私に一寸見せてたもらぬか。

捨藏　サアサア、見て下さりませ。

（ト細工場の戸棚より白木の鼓箱を取り出し、蓋を開けて、鼓の胴ばかり出し。）

陰陽の鑿のくり方、今までの鼓の胴に斯う言ふくりは一つも無い。四つの調子を調べて、天地の間のあらゆる聲

を此の中に潜ませた。年頃、晝夜の別ち無く學び、試み、考へたわたしが苦心で、やつとの事、此の胴が出來たので御座ります。

（ト此の中、倉子ヂッと鼓の胴を見て。）

倉子　名人と言はれる父さんでさへ、及ばぬやうな鼕の使ひやう、今日の勝は其方の物ぢや。

捨藏　喜んで下さりませ。是も皆、親方や此方のおかげぢや。わしのやうな片輪者でも、事に寄つたら、櫻井一番の人に成れるかも知れぬ。

倉子　オヽ、其方は一番の人に成つてよからうが、アノ人は。

（ト小聲で言ひかけ、思ひ迫つて、ワッと泣く。捨藏は氣を揉みて。）

捨藏　此方は何で泣かつしやるのぢや。今、わしの言うた事が氣に障つたのぢや御座らぬか。

倉子　イエ〳〵、さうでは無い。打遣つて置いてたも。

捨藏　譯も無いに、泣かつしやるは。ア、わかつた。コリヤ、嬉し涙であらう。わしの鼓が思ひの外によう出來た故、それで泣いて下されたか、ア、忝い。此方の涙を倉梯川へ流して、わしを悪く言ふ奴に飲ませてやりたい。周圍は皆敵の中に、此方はたつた一人のわしの味方ぢや。八年前に、わしが此所へ來た始めから、親身も及ばぬ此方の親切に、わしは人の情の味を覺えました。シタが、こんな片輪の生れに恥ぢて、今日まではおくびにも口へは出さなんだが、倉子さん、わしはとうから此方に惚れて居たのぢや。

（ト是を聞いて、倉子驚きたる思入。）

サア其の驚きは尤もぢやが、わしは片輪の上に、此の通りの醜男故、此方から可愛しがつて貰はうと思ふのは、無理かも知れぬ。然し、わしのために泣いてまで喜んでくれた此方、涙は嘘に出ぬものぢや。

倉子　待つてたも〳〵。其方は思はく違ひをして居やるのぢや。私が涙は其方のためでは無い。外に泣かねば成らぬ殿御のためぢや。

（ト是を聞き、捨藏びつくりして。）

捨藏　エヽ、何ぢや。外の男のためぢや。

倉子　腹を立てゝたもるな。私はとうから言ひ替した男がある。其の男も同じ鼓の胴打ちなれど、其方より劣りし業に、われを忘れて泣いたのぢや。

捨藏　オヽ、それで漸と謎が讀めた。許して下され。わしは今まで此方と三之助が深い仲と言ふ事は知らなんだ。

（ト絶望落膽の思入。）

倉子　そんなにふさいでたもるな。皆、私が悪いのぢや。此の上、我身の力で三之助と添はせてたもと、何として

頼まれうぞ。腕の優れた其方の勝はあたり前ぢや。どうぞ名を擧げ、譽を顯はしてたも。（ト立ち上る）

捨藏　さうして、此方はどうさつしやる積りぢや。

倉子　私はアノ尼寺へ。

（ト振袖に顔にあて、泣きながら奥へ這入る。）

捨藏　ア、、わしは足だけが片輪ぢやと思うて居たら、二ツの眼も見え無かつた。どうでもわしの戀は棄て、三之助と倉子さんを夫婦にせねば、道が立たぬ。

（ト考へながら、三之助の鼓箱に目を附け。）

オ、、此處にあるは三之助の鼓箱。此の中の胴とわしの胴とを入れ替へて置いたなら、三之助の勝となり、倉子さんの戀も叶ふわけぢや。

（ト四邊を見廻し、黒塗の箱を開け、中の鼓の胴を取出して、跡へ自分の胴を入れ、稍暫らく眺めて。）

わしが一心籠めて打つた胴、人のためにならうとは、今朝までも知らなんだ、

（トホロリと思入あつて、蓋を成し、自分の箱へは三之助の鼓を入れる。此の時、宮神樂を遠く聞かせ、上手の座敷より勘兵衛、小紋の羽織に袴をつけ、一本差して出で來り。）

勘兵　もう時刻ぢや。出かけねば成らぬ。捨藏も支度はよいか。三之助は何處に居る。三之助々々

（ト呼ぶ。三之助奥より出で來り。）

三之　親方、お待ち遠で御座りました。

勘兵　我身達の鼓はよいか。

三之　此の黒い箱に入れたのがわしので、あちらの白木の箱が捨藏ので御座ります。

勘兵　多くの數の中で、たつた一ツの鼓の御用。成らう事なら、わしの弟子の二人の中から出したいものぢや。（ト耳をて、）アリヤ、氏神のお神樂。他所でも祈誓を凝らすと見える。我身達も出がけに寄つて、祈りをあげて行くがよいぞや。

三之　そんなら、わしは一足先へ出かけます。（ト捨藏に向つて）捨藏も一緒にゆきやるか。

捨藏　わしは足が悪い故、行くのは止めにしませう。此方大儀ぢやが、わしのも一緒に持つていつて下され。

三之　安い事ぢや。持つていてやりませう。

捨藏　忝い。そんなら頼みます。名前は紙に書いて箱へ貼り附けて置いた。

（ト自分の鼓箱を三之助に渡す。）

勘兵　おくれぬ中に早うゆきやれ。

三之　それぢや、お先きへまゐります。

（ト三之助は二つの箱を提げ、向うへ這入る。）

勘兵　今日のやうな大事の日に、何で我身はゆかぬのぢや。

捨藏　サア、斯んな身體で高位の前へは恐れが御座ります故。
勘兵　イヤ〳〵、苦しう無い。わしと一緒に來やれ。
捨藏　デモ、斯んな片輪で。
勘兵　ハテ、職人は姿より、腕ぢやわい。
（ト是にて。）

道具廻る

同本陣座敷の場　本舞臺四間の間常足の二重、三方折廻して木緣、正面床の間、地袋、違ひ棚、金砂子に山水の繪の襖、平舞臺に飛石、石燈籠、樹木等よろしく、下手に枝折門、都て本陣座敷の體。此處に綾小路三位有信卿、茶筅髷に指貫の拵へにて、中啓を持ち褥の上に坐り、下手に金春六之丞、着附、袴にて住ひ、鼓を打つて居る。その前、烏帽子狩衣の諸太夫白川監物、青侍一人、二重のよき所に住ひ、名主十兵衞は緣側に平伏し、平舞臺下手に幕開きの若者六人名々鼓の胴を持つて控へ居る。此の體鼓の音、合方にて道具止まる。

有信　もう、好い〳〵。
（ト是にて六之丞、鼓を下に置き。）
六之　唯今のは如何で御座りました。
有信　其方は上手に打つたが、其の割に音の好く無かつたは、胴のくりに疵があるのであらう。改めて見よ。
六之　ハツ。
（ト六之丞は調べの緒を解き、胴をよく見る。）
□　何と作十、今のを聞いたか、和主が自慢の鼓も御用には成らぬやうぢや。
○　ならずばならぬまでぢや。一ト割に叩き割つてくれうと思ひ、此の通り鉈を持つて來た。
△　よせ〳〵、御前ぢや。
（ト若者○の鉈を取り上げる。此の内、六之丞は鼓の胴を改め見て。）
六之　御前の仰せられました通り、胴のへりに些細な疵が御座ります。
有信　さうであらう〳〵。其鼓下げて遣はせ。
六之　ハツ。
十市　是も御用には成らぬ。
（ト右の鼓を名主に渡せば。）
○　なんとせう。是非が御座りませぬ。
（ト若者○は名主より鼓を受け取り、怨めし相に眺めて居る。）
太夫　先程より御覽に入れた鼓の數は百に近いが、最早是

で終りか。
十市　イエ、此の外に安房勘兵衛の弟子に捨蔵、三之助と申す二人の者が御座りませ。
太夫　其の者共は如何致したか、見せに遣はせ。
十市　畏りました。直ぐに使の者を遣りませう。
（ト立ちかける。此時、下手の奥にて。）
三之　イエ、お使には及びませぬ。
（ト合方に成り、三之助が両手に鼓箱を持つて出づ。）
十市　オヽ、三之助、待つて居た。さうして、捨蔵はどうした。
三之　多分、是へはまゐりますまいが、彼の打ちました胴は私が持つてまゐりました。どうぞ御前に御覧に入れて下さりませ。
（ト二つの箱を脇側にのせる。）
十市　何方の箱が其方のぢや。
三之　其の黒い箱が私ので、白木の方が捨蔵ので御座ります。（ト指さして言ふ。十市兵衛うなづき、二つの箱を御前に差出し。）
十市　此の二番が勘兵衛の弟子共の作に御座ります。
（ト是にて六之丞は黒塗の箱より鼓の胴を取り出し。）
六之　是は、三之助、其方の胴ぢやな。
三之　左様で御座ります。
有信　調べて見よ。
六之　ハツ。
（ト皮を掛けて〆める。此の間に。）
○　愈々あと二番と成つた。三之助と捨蔵との勝負ぢや。
□　聞けば、三之助と倉子さんは、日頃、相愡の仲ぢやと言ふ噂が立つて居る。そこで、勘兵衛どのが内々手を貸して、其方の胴の仕上げをしてやつたらうと言ふ噂もあるのぢや。
三之　何を言はつしやるのぢや。アノ物堅い親方が何で其の様な事をしてくれるものか。よしんば、手を貸してやらうと、親方が言うても、わしは断わる。自分の腕一つで我物にしたと思へば、嬉しいが、人の手を借りて遂げた戀は嬉しう無い。下手は下手ながら、魂こめて打つた胴ぢや、鳴るか、鳴らぬか、よう聞いて下され。後日に親方の手を借りたなどゝ言はれてはわしの恥ぢや。断わつて置きまする。
△　さうなら、さうで好い、さう向きに成つて怒らずとも好い。
三之　それでも、お前方はわしを疑ぐるに依つて。
△　それも太郎吉が心安だてらに言うたのぢや。堪辨さつしやれ、堪辨さつしやれ。
（ト三之助を宥める。此の中に、六之丞鼓の調べをなか

けて〆め、支度をして打つ。是を有信聞きて。)

有信　流石は勘兵衛が弟子の作ほどあつて、天晴れ鼓ぢや。今までの中では一番是が名作ぢや。今度はそちらのを試みて見よ。

六之　畏りました。(ト今度は白木の箱より鼓の胴を取り出し)是はそちの相弟子捨藏の作か。

三之　左様で御座ります。

(ト思入にて言ふ。六之丞は皮を掛ける。此の間に。)

△　三之助の打つた胴が、今までの中で一番の名作ぢやと仰せられた。

□　大方、札は三之助に落ちるであらう。倉子さんとの戀が叶うてお目出度い。

◈　イヤ〳〵、今一番でどうなるか知れぬわ。

(ト此の中、六之丞、鼓を〆めて打つ。すぐれて能く鳴る。)

六之　如何で御座りますか。

有信　今、一度打つて見よ。

六之　ハツ。

(ト又右の鼓を打つ。有信卿感心の思入にて。)

有信　なんと言ふ名作なるか。是程に整ひし鼓はまだ曾て聞いた事が無い。誠に天下の寶ぢや。調べの緒を解いて、我に見せよ。

六之　ハツ。

(ト是を聞き、三之助は吃驚したる思入、六人も呆れたる思入にて。)

○　何と聞いたか。捨藏の鼓が今日の一番ぢや。

□　アヽ、美しい倉子どのの花婿は。

△　人並外れた醜男(ぶをとこ)の片輪ぢや。

皆々　片輪ぢや〳〵。

(ト此の内六之丞は鼓の胴を有信卿に見せる。)

有信　巧妙を極めた鑿のくり目。人間業とは思はれぬ。奈良の雷師や有名な瓦胴(がどう)にも劣らぬ希代の名作ぢや。是なる鼓、大内へ差上げるであらう。

三之　スリヤ、其の鼓が御上の御用に。(ト思入)

十市　打人(うちて)の譽れ、土地の面目、斯樣な有難い事は御座りませぬ。

(ト此の時、下手より勘兵衛、捨藏出づ。)

オヽ、勘兵衛どの。其方の婿は捨藏ぢや。

勘兵　何と言はつしやるぞ。

十市　捨藏の鼓が御用に成つた。

(ト是を聞いて、捨藏は吃驚する。)

勘兵　そんなら、アノ捨藏の鼓が一番の出來で御座りますか。

十市　奈良の雷師や瓦胴などと言ふ、世の寶にも劣らぬ名

作ぢやと、三位様は仰せぢや。

勘兵　それほどに捨蔵の胴がよく出來ましたか。

捨蔵　アイヤ、親方、わしは懺悔を致しまする。其の胴はわしの打つたのでは御座りませぬ。眞實は、此處に居る三之助の作で御座りまする。

三之　どうして、我身はそれを。

（ト驚いて、尋ねる。）

捨蔵　此方に勝を取らせようとて、我身の胴とわしの胴を入れ替へて置いた。

三之　エッ。（ト又、驚く）

捨蔵　わしは我が技に誇つた。此方の腕よりもわしの方が遥かにすぐれて居ると思うた。それ故に、鼓を入れ替へて、此方達の切無い戀を遂げさせてやらうとしたは、昔、わしが慢心の成す業ぢや。されど、悪意では無い、思ひすぎてのわしが罪、どうぞ許して下され。

十市　そんなら、アノ鼓は三之助の作であつたか。

（ト名主を始め六人の胴打皆々呆れる。此處へ下手より倉子走り出で。）

倉子　コレ、三之助、わたしや生き返つたやうぢや。父さん、私の戀が叶うたぞえ。

勘兵　是はしたり、高位のお方の御前ぢや、控へて居ぬか。

（ト叱る、此の間、三之助思入あつて。）

三之　イヤ〳〵、倉子さんは矢つ張り捨蔵に添はねば成りませぬ。

倉子　何を言やる。我が身の打つた鼓が一番と極つたからは、父さんの誓言通りわたしやお前の女房ぢや、天下晴れて宿の妻ぢや。

三之　イエ〳〵、あの鼓はわしのでは御座りません。矢ッ張り捨蔵のぢや。

倉子　何と言やるぞ。

三之　アッ、悪い事は出來ぬものぢや。唯、倉子さんに添ひたい〳〵の一心から、先刻、捨蔵に頼まれて、二つの胴を提げ、此處へ來る途すがら、フト悪い企みが浮ひ、倉掛川の渡し小屋、人の居ぬを幸に、中へ這入つて、薄くらがりで、手早く鼓を入れ替へて、御前へ差出したわしの罪は即ち罰ぢや。折角、捨蔵が入れ替へて置いてくれた情を仇にして、わしは又、元の通りに入れ替へたのぢや。とは知らずして、捨蔵が此處へ來て、我が身を捨てた打明け話に、初めて知つた人の親切、つく〴〵悪い事は出來ぬものぢやと悟りました。わしは戀に眼が眩んで、人の眼まで眩まさうとした。わしは人の手柄を盗まうとした盗賊ぢや。わしは我が手で我が戀を破らうとした。倉子どのは捨蔵に助けられて、わしのために殺されたのぢや。アヽ、済まない。済まない。サア、捨蔵、お

ぬしの心のいくやうに、わしを仕置してくれい。

（ト捨藏の前に身を投げ出す。此の時まで默つて居た勘兵衞は思入あつて。）

勘兵　われが仕置は追つての事ぢや。（ト向き直りて）弟子共の不埒、恐れ入つて御座ります。

有信　苦しう無いぞ。三之助が惡心も、戀故なれば、優しう聞える。さまで咎むるな。

勘兵　御情すぎた御言葉で、尙々痛み入りまする。就きましては、それなる鼓は矢張り捨藏の作に御座ります。御用に相成りませうならば、有難い仕合せに御座ります。

有信　いかにも大内へ差上げるであらうぞ。

（ト是にて六人の胴打ちは思入あつて。）

○　サア、勘兵衞殿、此の上は約束ぢやに依つて、倉子殿は、何と言はうと、親の威光で、捨藏に添はせて、跡式一切を讓るであらうの。

□　先刻、あれ程立派に言うた此方、言葉は反故になるまい。

△　今夜は一同で悅びにゆきますぞや。

（ト是を聞いて、倉子思入あッて。）

倉子　父さん、わたしや捨藏に添うのは嫌で御座んす。どうぞ尼寺へ遣つて下さりませ。

勘兵　又しても、我儘を言ひ居るか。大内御用の鼓を打つた捨藏を亭主に持てば、女の果報ぢや。

倉子　イエ〳〵、わたしや名人より戀人に添ひたう御座んす。父さんは鼓が命であらうが、女子は戀が命ぢや。アア、母さんが生きて居たら、賴みやうもあらうものを。

勘兵　エヽ、だまれ。娘、口が横に裂けたればとて、ようも〳〵死んだ嚊を不孝の引合ひに出し居つた。情を知るは死んだ親ばかりで、此の世にある親は慈悲を知らぬと思ひ居るか。名人上手を夫に持たせようとするも、おのれを人に褒めさせたい親の情ぢや。戀を捨てよと言ふ親の言葉は、おのれを殺す劍では無い。我子可愛い〳〵の餘りに出づる心の叫びぢや。酷い〳〵言葉の中に甘露のやうな淚があると知り居らぬか。三之助を思ひ切つて、捨藏と添ふとぬかせ。高位の御前ぢや。里人の見る前ぢや。流石は勘兵衞の娘、立派に言ひ居つたとお褒めに預つてくれ。サア、何とぢや〳〵。

（ト言へ共、倉子は泣いて居るのみで、返事なければ。）

是程言ひ聞かせても、返事の無いのは、不承知か。憎さも憎し。どうしてくれう。オヽ、さうぢや。

（ト其處に在つた鈍な手に取り立ちあがる。此の時まで默つて居た捨藏きッと思入あつて。）

捨藏　親方、待たッしやりませ。其の鈍は他に使ひ道が御座ります。

（ト勘兵衛の手より鉈を取りツカ／＼と二重の側に寄り、自作の鼓を二ツに割る。勘兵衛驚き。）

勘兵　何をするのぢや。

（ト捨藏を突退ける。捨藏ドウとなり、又立ち上らんとするを。）

エ、、おのれ、氣が違うたか。（ト睨みつける）

捨藏　イ、エ、正氣で御座ります。わしが鼓は不祥の前兆があるに依つて、こはしました。なんで是が世の寶に成りませうぞ。（ト下手に下つて）何卒、三之助の丹精こめて打つた胴を都へお持ち歸り下さりませうなれば、有難う存じます。

有信　オ、、相分つた、捨藏は腕ばかりか、心までがすぐれた細工人ぢや。いかにも三之助の鼓、御用に相なるぞ。

三之　スリヤ、此の身の犯せる罪を、

倉子　上には何のお咎め無く。

有信　無事に結ぶ鼓のしらべ。

勘兵　とは言へ、あたら名作を。

捨藏　なアに、鼓は割れても、人間二人助かりました。

（ト是を聞いて、勘兵衛は手を合せて拜む。六人の胴打ちは立ち上る。倉子、三之助は切無き思入。捨藏淋し氣に笑ふ。）

―幕―

右田寅彦篇

生嶋新五郎（二幕）

序幕

城内長局江嶋部屋の場

舞臺常足の二重、上手一間の附屋體、銀地の縮模樣骨の障子など結構に構へ、蒔繪の衣桁には綺羅びやかなる裲布を掛け、其傍に朱塗の丸行燈を灯し都ての出道具立派を極む、平舞臺には地ガスリを敷詰め下手寄りに紅葉の立木萩芒の栽込み生茂り雪見燈籠あり、此向う數寄を盡したる柴門など宜しく千代田城中長局のうち月光院附表年寄江嶋部屋の體、誂への鳴物にて幕開くと、こゝに江嶋の腰元おちせ、おなぎ、物縫ひお妙茶の間おせん、おはしたお時等立ちかゝり、吳服物の長持を手昇きにして部屋の隅へ押直し居る。

ちせ　ヤレ〳〵重い事で御座んした、斯うして置けば旦那樣も嘸ぞお喜びで御座んせう。

たへ　ホンニいつもの手筈の通り本鄕の伊豆倉から差上げた御用の反物、都合五棹參つた中で目印のある此長持。

なぎ　跡は不用と言立てゝお廣敷へ下げて仕舞ひ、お留置きの一ト棹は誂へ向きの吳服物。

せん　お目に懸けたら旦那樣が飛立つやうに思召す、匹田鹿の子の紫も、

とき　ホンニゆかりの紋所すはまに染めてお好みの、

ちせ　伊達な模樣の數々もお名に因むは汐干潟、

なぎ　曙染めの霞引く舟は三つ四つ、

たへ　嶋は幾嶋、

ちせ　アモシ。

（ト押へて皆々あたりへこなし、是にて鳴物になり、二重下手より同じく月光院附お城女中櫻井、藤田の兩人好みの拵へにて出來り）

櫻井　コレ女中方、江嶋樣御機嫌は如何で御座んす。

藤田　櫻井、藤田打連れてお見舞に參りました。

ちせ　是れは〳〵お二人樣好うこそお尋ね下さりました。

なぎ　何卒お通り、

皆々　下さりませ。

（ト是にて櫻井、藤田程よく住ふ。）

櫻井　承はれば江嶋樣チト御氣分が惡いとやら、當將軍家の御ン母君月光院樣のお附きでは出頭第一の御身分にて御家老職と御同格、表向き御用の節は御老中の方々も御慇懃のお言葉にて應對をなされるほどに御威勢のある江

嶋樣、お風邪位の御病氣かと輕々しく存じて居ては相濟まぬ儀で御座ります。

藤田　それゆゑ御用の暇を見て今宵はわざ〳〵此お見舞。トサこのやうに申しては切口上で角が立つ、有樣は山村の長太夫座の芝居噺しで江嶋樣を慰めようと遊びがてらに來たのぢやわいなア。

櫻井　ホンニいつぞや增上寺の御代參を假託に江嶋樣のお誘ひで芝居を見物してからは、モウ〳〵何ンにも手に附かず、二度が三度と重なる度に唯々夢中になるばかりで、わたし達は云ふもおろかお拾樣おかん樣も氣拔けになつて居なさんすが、そなた衆も贔屓があらう、何座の誰ぢや云うて見や。

（ト我れを忘れて膝を進める、皆々モヂついて顏を見合せながら。）

ちせ　ハイ〳〵左樣で御座りますか、一年二度のお宿下りに見物致すばかりゆゑ詳しい事は存じませぬ、唯モウ敵役と親仁がた、道化形を除けましたら、

皆々　みんな贔屓で御座りまする。

櫻井　イヤ〳〵そのやうに氣の多いは贔屓と云ふものではない、此役者こそと見込んで脇ひら見ぬのが誠の贔屓ぢや、わたしなぞは第一が團十郎、其次きが新五郎、左もなければ。

（ト指を折る。）

藤田　ア、モシお前樣も同じやうに氣が多いでは御座りませぬか。

櫻井　オヽほんにオホヽヽヽ。

藤田　それに新五郎は江嶋樣がきつい贔屓、團十郎の次ぎに置いてはお腹立ちで御座んせうぞえ。

櫻井　オヽさうで御座りました、役者達が淺草へ參つてお盃の相手の時も、新五郎に限つては格別御念の入る事は釣簾を掛けたやうに見え透いて居るものを、コリヤ櫻井の粗相で御座んす、デハ新五郎は除けて置いて瀧川半四郎にしませうわいなア、是なら江嶋樣に差合ひは御座んすまいがな。

藤田　オヽその江嶋樣で思出した、肝腎のお見舞が芝居咄しで何處へやら。コレ女中方、お取次ぎを。

（ト急に眞面目になつて櫻井と顏を見合せ。）

兩人　オホヽヽヽ。

（ト扇を口に打笑ふ。）

ちせ　畏まつて御座りまするが、只今は主人事好う御寢なつてゞ御座りまする。

なぎ　何ンなら鳥渡お起し申して。

（ト立ちかゝるを櫻井押止め。）

櫻井　イヤ〳〵それは却つて失禮、お寢かし申して置くが

好い、此秋狂言に新五郎の本田善光、アノ出端の立派さを若し夢にでも御覧のうちお目が覺めたら悔しからう。ナア申し藤田樣そんなものでは御座んせぬか。

藤田　ホンニ毎度の見物も月光院樣お附のお匙奥山交竹院の馳走ぢやと聞及んで居りまするが、其の實は淺草の町人鞘屋と申す分限者が御本丸西ノ丸の炭薪木の御用達しを一人ンの手に引受けたさに追從するとか申す事、コリヤ全くで御座りますかえ。

櫻井　サア只今の御政治向きは何に付けても御母公樣のお鬱掛りが肝腎ゆゑ、御出頭の江嶋樣へ手蔓を求めて取入る者があるまいとも申されませぬ、其所があるのでわたし等も相伴役の山村座。

藤田　又此次ぎの顔見世も交竹院に肝煎らせ、

櫻井　棧敷で伽羅を、

兩人　焚かうかいなア。

（ト兩人思入宜しくある、此時女小姓歌次手に雪洞を持つて下手廊下に出來り、）

歌次　櫻井樣、藤田樣これにお出で御座りまするか、急のお召しに御座りまする。

櫻井　ナニわたし等へ、

兩人　御用とな。

歌次　月光院樣仰せには秋の夜長のつれ〴〵に合奏物でも聞きたいが、諸藝に長けし江嶋事病氣とあれば是非がない、櫻井、藤田、お捨、おかん、江嶋に代つて勤めませいとお申附けに御座りまする。

櫻井　お召しとあらば、

兩人　直樣御前へ。

ちせ　お役目御苦勞に、

皆々　存じまする。

（ト櫻井、藤田立上り、）

櫻井
藤田　江嶋樣へ宜しう申しや。

歌次　サ、お越し遊ばしませ。

（ト合方になり三人靜々と下手へはいる、おちせ始め江島附の女一同辭儀をして居る、此途端上手塗骨の障子を細目に開け、江嶋片はづしの好みの拵にて無言の儘これを見送る、物縫ひお妙心付き、）

お妙　オヽ旦那樣お目覺めで御座りまするか、櫻井樣藤田樣がタッタ今お見舞に。

江島　ア、イエ知つて居るわいのう。

（ト靜かに出來りて褥に坐る、皆々脇息、鼻紙臺などを傍に直す事宜しくある、江島思入あつて、）

虚病を構へて引籠り人待つ宵のわびしさに、どうして夢を結ばうぞ、芝居咄しに花が咲き長座をされては難儀ゆ

ゑ、押つゝ居ながら起きもせず、わざと餘所目に見て居
たのぢや。
ちせ　スリヤお仲の好いお二人も、
なぎ　今宵は邪魔と思召し、
江嶋　ハテ察したが好いわいのう。
（ト少しく嬌羞を含む。）
ちせ　恐れ入りまして、
昔々　御座りまする。
江嶋　サ、皆の者、モウこゝに用事はない、次ぎへ下つて
休息しや。
お婷　左様なれば御意に任せ下りまするで御座りませう
が、本鄕の伊豆倉より御誂文の呉服物御覧の時は。ナ、
モシ。
（ト思入にて合鍵を渡す、江嶋そつと受取るうち茶の
間おせんは蒔繪の煙草盆と銚子などを取出し、）
せん　御遠慮なるまでいつものやうに召上る事と存じまし
て、用意を致して置きました。隨分ともに御緩りと。
江嶋　好う氣がついた、休みや〳〵。
昔々　御免なされて下さりませ。
（ト一同思入あつて下手へはいると、直に唄になる。）
〽物思ふ、秋の野邊らの萩花、むさし鐙のさすがに
も、こゝは名所の花芒

江嶋　僅かに響くアノ音色に、月光院樣お好みに女中方の
合奏物、逢ふとは嬉しい辻占の、其の合ひの手の面白さ、
此の間にちよつと。ム、。
〽戀に出る程の戀しさも、二つはなきに二つ星、願
ひの糸をくりかけて、さゝがに姬のつま迎へ。
（ト手早く鏡に對ひ髮を繕ふ事などあつて、衣桁の被
布を丸行燈にかけ薄暗くしながら、長持の傍へ立寄つ
て聲をひそめ、）
長い間嘸ぞ窮屈、コレ勘忍してたもいのう。
〽契りも稀れな貸小袖。
（ト四邊を見ながらピンと錠を開けると本釣鐘を打込
み、生嶋新五郎好みの拵へにて長持の蓋を押上げ其身
を現はし、）
新五　江嶋樣。
江島　アコレ。
（ト合奏物、下方入り早間の鳴物にて、兩人左右へ別
れ前後を窺ふ。）
新五　モシ、モシ江嶋樣、大丈夫で御座りまするか。
（ト新五郎わな〳〵慄ふこなし宜しくある。）
江島　イエ〳〵案じる事はない、氣を落付けてこゝへ〳〵。
新五　ハ、ハイ、ハイ。
〽雲凄まじき風音の、野分の行衛あともなき、萩の

花づま男郎花。

（ト此内双方こなし宜しく好き所に住ふ。）

江嶋　首尾よくこゝへ忍んだ上は召使ひも皆同腹、ちッとも氣遣ひない程に早く心の落付くやう、此酒一つ過しなさんせ。

（ト盃をさす、新五郎猶もオド〱しながら。）

新五　イエ〱何ッと致しまして御酒も咽喉へは通りませぬ、御公儀を憚りながら掟嚴しい御城内の長局へ入込むとは、身の毛も慄立つ御法度破り、是れと申すも御贔屓の鞘屋の旦那へ恩返しと交竹院樣の取持ちで、ツイお情を受けてから慕る思ひに兩三度この長持へ忍びましたが牢屋のやうな氣持ちがして。ア、鶴龜〱、私はモウ怖しさに少しも歯の根が合ひませぬ。

江嶋　ハテ折角辛抱してわたしに顔を見せながら由もない事ばッかり、酒の力を借りたなら茶屋の藤屋の氣になつて、御城内と云ふ事を忘れまいものでもない、これぢやに依つて是非とも一獻。

新五　如何さまナアこりや御酒でも戴かねば、いよ〱慄へが止りますまい、イヤモシ江嶋樣同じ事なら大きな物で頂戴致すで御座りませう。

（ト椀の蓋を取る。）

江嶋　ドレ酌をして上げようわいのう。

新五　は、は、憚りで御座りまする。

（ト手先益々わなゝく。）

江嶋　このマア慄へる事わいなア。

〽散るや花野の露の白玉。

（ト盃事宜しくあつて、新五郎胸を撫で、）

新五　何うやら少しは落付きました。今一つ下さりませ。

（ト又一息にグイと飲む、江嶋ぢッと打成りいぢらしいと云ふ思入あつて、）

江嶋　ホンニ戀とは云ひながら明長持の窮命を一つ遁れてまた二つ、

新五　此無理酒の毒になる忍び逢瀬の命掛け。

江嶋　忘れは置かぬ、嬉しいわいのう。

〽正木の紅葉色づけば、小鹿も戀の女夫巾、媒せねど月影の、盃事に二世かけて、堅めを祝ふ相生の、名もなつかしき松の聲。

（ト此文句にて江嶋クドキ模樣宜しくある、此間も新五郎手酌にて飲み漸次に醉ひが廻る。）

新五　お蔭樣で私も氣が大きくなりました、今の今まで露程も耳に這入らぬ琴三味線、やつと聞えて來ると云ふも不思議なもので御座りまする。

（ト膳先へ躙り出して聞耳立てる。）

〽實にざゞんざと聞く時は、操の色の面白や。

イヤ當節はお城でも仇な音締を聞く世の中、弓は袋で御座りまするなア。

江嶋　ホンニそなたが落付いて、此江嶋もやう／＼安堵、序にわたしも酒一つ。

新五　然らばお酌に參りまする。

〽萬代までの竹の葉や、酌めども盡きぬ味酒の、池の汀に結れて立つ、あし元もよろ／＼と、臥待月の片庇。

（ト此唄にて立上り蹌踉としたる足取りに、役者の藝の自然に顯はるゝ仕こなしを見せながら、江嶋の傍へ坐つて酒をつぎぢツと其面を見て、）

上つ方でも此頃は派出になるのも無理はない、踊り指南の婀娜者が今はお城のお年寄。

江嶋　何ンと云やる。

（ト合方キツパリとなる。）

新五　モシ江嶋樣イエサ大阪町のお師匠さん、大した出世で御座いますねエ。

江嶋　チヤア親方は知つてお出でか。

（ト急に碎けて態度變る。）

新五　イエナニ座元の長太夫がお前樣の素性を探りこれこれだと内證の耳打ち、ハヽア道理で最初からお見掛け申したお方の樣に不審を立てたも其害だと小膝を打つた新五郎、御身分柄を考へて今まで默つて居ましたが、計らずロの辷つたも酒が云はせる事と思つてお聞流しを願ひますのさ。

江嶋　マア親方、さうでしたか若竹左平治さんのお仕込みで碌に出來もしないけれど十九の年から踊りの師匠、伽羅の初音と異名を取り大阪町に居た事までお前さんに知られて居ると、どんなに話が仕いゝだらう、モウ江嶋だと思はずに打解けておくんなさいよ。

新五　イエ／＼さうは仰しやつても昔は昔今は今、役者づれの私が。

江嶋　何ンですねエ野暮らしい、小普請組の白井さんを取親にしてお城へ上り、武家出のやうに見せかけても身分を洗へばお前さんも同じ事ぢやアありませんか、御存じだか知らないが葺屋町の市村座で一頃樂屋を働いた達磨のさぶが娘の初音、藪鶯も笹鳴きのお里が知れて居るのだから藝人同士の附合ひだと氣安く思つて下さいねエ。

新五　イヤそのやうなお心なら四角張つても居られまい。そんなら師匠。

江嶋　親方さん。

新五　話が持てゝ來ましたナア。

〽千種の宿もいつ馴れそめて、閨の戸に寄るきりぎりす。

（ト双方打解けたる思入。）
江嶋　ホンニ昔を思ふにつけ變つたわたしの身の上、親方聞いておくんなさいよ。
（ト合方になり蟲笛をあしらふ。）
不圖した事でお狂言に召出されたのが御緣になり、伽羅の御香の緣高が六百石の御奉公、一年十二度のお四季施に鼻紙代五十兩、腰元茶の間物縫ひを十人も使ふほど羽振りの利くところから、交竹院と網屋の世話でお前さんとも斯うなつたが、實を明せば師匠の頃から何卒と思つた岡惚の願ひが屆いた今の仕合、ホンニ女の一念は必ず徹るものとやら、モシ親方お氣が附きやア仕ないかえ。
新五　サア怖いのは念力よりも御法度破りで御座います、又言出すではは御座いませんが、今にも露顯致したならお前さんは何うなさる、危ない橋を渡らぬやうに工夫を替へねばなりますまい。
江嶋　苦勞にすれば切りがないから言ひッこなしに仕ませうよ、ナアニまさかの事があつても御幼少の上樣をお膝の上に乘せながら、御大老にも指圖をなさるお腹樣の身贔屓で今を日の出の此江嶋、滅多に指も差せないのが七分の强味と云ふものさねエ。
新五　それが賴みになれば好いが。
（ト腕を組んで思入、是にて風音になり蟲の音バッタリと止む。）
俄かに蟲の鳴き止んだは。
江嶋　アモシ。
〽漏る稻妻の影消えて、尾花の袖も騷ぐ夜嵐。
（ト江嶋は丸行燈の被布を取つて新五郎へ冠せ傍へ潜ませながら、其身は灯りを吹消して障子屋體の內へ摸傳ひにはひる、是と同時に捕手の役人四人平舞臺蒐込みの萩芒を掻分けながら立出で探り〳〵二重緣側へ窺ひ寄る、新五郎被布を冠りたる儘逃げ隱れようとして探り合ひの立廻りになり、足も地に附かぬやうに打慄へつゝ摺拔けるを、トゞ取つて引据ゑられると月の光明かに差す、一人の役人被布を引ッたくると新五郎は顏を背向ける、役人はソレとばかり無言の儘下手へ引立てる、新五郎はわな〳〵としながら是も無言の儘宙に吊られしが如くに引かれ行く。
是にて合方になり下手廊下口より老役の局戸川雪洞を持つて先に立ち、御用番松前佐渡守社杯の拵へ、白の襷鉢卷にて十手を持ちたる奥女中數人を隨へて出來り、點頭き合ふ事あつて直ぐ部屋の內へ通ると戸川上手障子の方へ向ひ。）
戸川　江嶋殿はいづれに御座る、御不審の廉あつて御支配御用番松前佐渡守殿是れへお越しで御座りまするぞ。

女中
皆々　江嶋殿〳〵。

松前　遺恨なくば是非に及はず踏込んで引立てませうや。

（ト屹と云ふと附屋鐙の内にて、）

江嶋　ア、イヤそれには及びませぬ、只今お目もじ致しまする。

（ト合方キッパリとなり江嶋補襠姿に護り、手に水晶の珠數を掛けて端然に立出で程よく坐つて一禮する。）

松前　仔細は別に申さずともそこもとに覺えが御座らう、芝居に於ての身持放埓、役横敷の目に立つて遂に町奉行の沙汰と相成り、坪内能登守の達しに依て御老中の御評定、本院の儀ゆゑ某も内々心を配りしところ重々の不行跡、御吟味の筋これある間イザお廣敷へ同道召されい。

江嶋　畏れ入りまして御座りまする、月光院樣御恩にあまえ今の今まで心迷ひ不調法を働きましたが、此場に及んで先非後悔、秋の哀れを今ぞ知る庭の千種は踏みしだかれ人の行方も白露の。

（ト新五郎の引かれ行きたる方にぢッと思入あつて氣を替へ、）

ア、イヤ消えねば濟まぬ罪科のお仕置、覺悟は斯樣で御座りまする。

（ト珠數を示す。）

松前　心得違ひは有りながら、流石は總女中の頭とて悔悟の一言殊勝で御座る、片時も早くお廣敷へ。

江嶋　イザお召連れ下さりませ。

（ト立上ると奥女中これを取卷く、こゝへおちせを始め皆々奥より走り出で、）

ちせ　マアお情ない。

皆々　この體は。

戸川　ア、コレ傍へ寄るまいぞ、そなた衆も何日何時御吟味があらうも知れぬ、屹と蟄して控へて居や。

皆々　ハアイ。

（ト萎れる。）

江嶋　おちせ是れへ。

ちせ　ハア。

江嶋　お前樣の御指南でどうやら覺えた手爾遠葉の覺束なくは思へども、名殘の腰折執筆しや。

ちせ　畏りました。

（ト文臺短册を持出で筆を取つて控へる。）

江嶋　浮世にはいつ歸らめや武藏野の月の光も影も恥かし

（ト考へ〳〵續ける、おちせ墨つぎかたの如く認め、）

ちせ　浮世にはいつ歸らめや武藏野の。

江嶋　月の光の出頭も迷ひの雲の恥かしさモウ此の世では

（トほろりとして珠數を落す。）

なぎ　アモシ
（ト是を拾つて手に渡し双方思入。）
松前　サ、江嶋殿、お急ぎなされい。
江嶋　皆の者にもモウさらばぢや。
（ト行きかゝつて躓くのを木の頭、皆々はハアと泣伏す、伊豆守始め奥女中一同警固して立ちかゝる、江嶋裲襠を捌きながら名残惜しげに見返る、此仕組宜しく）

――幕――

二幕目

豆州八丈島配所の場

舞臺正面二重の岩組、上に草葺丸木の柱、壁の代りに萱を編みて圍ひ古蓆を下げたる流人小家あり、軒に磯山櫻哀れに花を着け此幹を便りにシデを結び水瓶用の大きな壺を据付ける、（シデとは藁を三つに編んで輪をつくり是を樹木の幹に結んで其端を壺に入れ雨垂を導いて貯水するものを云ふ）此向う一面の荒海遙かに伊豆の山々淡く見ゆる、平舞臺上下岩組立木にて見切り地ガスリの上に海藻及び貝殻を散らすなど物寂しき道具立、都て八丈島配所の體宜しく浪の音にて幕開くと新五郎板附にて髮亂れ衣類破れたるむざんの拵へ、小家の柱に身をもたせ疲れ切つて眠り居る。是れにチラチラと櫻の花を散りかゝらせ直ぐ床の滑ろりになる。

〽荒磯に、鳥も通はぬ八丈の、島守の身と成果てゝ
つらき命を生嶋が、世は悟らねど板びさし、黒木の小家を夢殿の、夢驚かす松の風。
（ト風音を打込み新五郎目を覺したるこなしにて額を擡げ。）
新五　ア、なつかしい東の空、こゝで眺めて居るうちにトロ〱すれば江戸の夢、覺めれば又も見たくなる稀の便りの文殼も、日に幾度も讀返せば手垢が付いて皺だらけ。
〽獨言して取出す、文殼の皺引伸し、
（ト懐より手紙の古き紙片を出し。）
流されてからタッタ一度江戸へ便りの出來た時成田屋の親方へ、末筆ながら一句の述懐、初鰹辛子はなくて涙かな、と書添へて上げたところ一年振の便船で屆いた返しの十七文字。
〽十尋に餘る狀よりも、濃き墨色の志し、
見れば歎きの種なれど見ずに居られぬ輪廻の迷ひ、その辛子きいて涙の鰹かな。聞いて涙の鰹かな、
〽讀むも涙に伏沈む
（ト新五郎紙片を抱占めて泣落しドウとなると島の唄聞える。）

唄へ帶に綯ふとてひッつうの、めならべ達は打枝の、
　またらに色も蘇枋染。

アリヤ此島の流人達が八丈訛りを取り入れて地唄に作つて謠ふ一トふし、ひッつうとか云ふ事は髮化粧ひする言葉とやら、夫れに付けても此わしは春になつても秋になつても鬢を撫でた事もない、嘸や變つた面影を久方振りでムヘ、

(ト水溜めの壺に目を附ける。)

ヘ立寄る足も力なく、櫻がもとの水鏡、花も色香も散る風に、遠山寺の鐘の聲。

(ト本釣にて花を降りかゝらせ、新五郎無量の感慨を抱いて我影を目戍り、)

是れが生嶋新五郎か。

ヘ昔は戀に柚褄を、引かれて今の身の破れ、罪を江嶋の仇浪に。

唄ヘ逢はぬ其夜は氣めいがめいて、のう明日もわせ御座んせや。

(ト此内いろ〳〵こなしあつて又壺を覗き、)

淺猿しい身になつたなア。

ヘ前後正體泣き居たる。

(ト悲嘆宜しくあつて、此前より醫者奧山交竹院矢張流人の拵へにて笹に二三尾の魚を通したるを提げ、小家の蔭に窺ひ居て此時ズツと出來り。)

交竹　オイ新五郎、おぬしは又泣いて居るのか、こゝへ流罪になつたのも昨日や今日の事ぢやなし、モウ大概に諦めろ體の爲めに好くなからうぜ。

新五　オ、交竹院樣で御座いますか、あなたはお醫者樣だけあつて何時お見上げ申しても御丈夫さうで御座いますねエ。

交竹　ナニ丈夫な事があるものか、飲水もない伊豆七島雨が降ればアノ通りに瓶や桶に貯へて、やつと咽喉を濡した上、松魚鳥だのしろづだのと得體も知れぬ鳥を喰ッたり海松や若芽を嚙ッたり、乙な餌食で暮すから一日增しに瘦せるばかりだ。

新五　夫れにしても軟弱い手前がまだ死に切れずに居りますは、能く〳〵深い罪障かと一ト入悲しう御座りまする。

交竹　ダガ新五郎、愚老なぞに比べると、おぬしは餘程果報者だぞ。

新五　何と仰しやいます。

(ト合方になり、交竹院は傍の岩へ腰をかける。)

交竹　コレしらを切る事はないわ、おぬしは島へ渡つた時お定まりの振舞金をタンマリ出した所から、地役人や世話役の息が掛つたものと見え、此磯端に好い住居だ、元は天下の御扶持取り交竹院は可哀さうに世話役方にごろ

ついて喰ふや喰はずの見じめな境界、おぬしも知つて居るだらうが流人のうちでも勸進仲間と安くせらるゝ俺達は、世話役の指圖を受けて朝と晩に一度づゝ村々の門に立ち合力受けるが定法だ、ノウ新五郎氣の毒だが交竹院の勸進に使ひ殘りをちッとばかり貸してくれても好いではないか。

新五　滅相な事を仰しやいますな。思出しても情ない、竹法螺の音を聞かされて佃の沖を出船の時、お役人のお許しで金三十兩米八俵用意に持つて來ましたが、長い月日の事なれば何ンの殘つて居りませう、御免なされて下さりませ。

交竹　イヤ無い事があるものか、持つて居ながら隱したら愚老に義理が濟むまいがな。

（ト屹と云ふ、新五郎不審の思入にて、）

新五　フムヽ、あなたに義理が濟まぬとは、

交竹　オヽ知らなきやア云つて聞かさう。

（ト合方キッパリとなり、）

江嶋殿の一件で櫻井藤田は御追放、或は遠島江戸構ひと大勢仕置の其中で、愚老とおぬしが八丈へ流されたのは腐縁、元を糺せば用達の龝座の爲にはずみ過ぎ御城內まで忍んだ故、かゞつた糸もバレ出して手の附けられぬ表沙汰、怨みを云へば長袖の愚老を島へよこしたも誰の仕業と思つて居るのだ、義理がないとは云はれまいがの。

新五　その御法度を破つたも、ツマりはあなたの匙加減、お城女中の見物を戀の病とお見立の御配劑ぢやア御座りませぬか。

交竹　成程龝座に賴まれて取持つ事は取持つたが、當の通りの煎じやう茶屋の出逢ひで濟したなら苦しい思ひもあるまいに、素人療治の悲しさは餘り藥が強過ぎて手重になつた長局、トウ／＼脈を上げながら愚老に罪を塗るとは百味簞笥の抽斗違ひだ。

新五　醫は仁術とか聞きましたにゆすりのやうな言懸り、それでもあなたは大奥のお附のお醫者と申されまするか。

交竹　洒落臭え事をぬかし居るな。

（ト新五郎の詰寄るをドウと蹴倒して足下にふまへ、）

鄕に入つては鄕とやら押借ゆすり居尻切、ありとあらゆる白浪の島に寄せ來る八丈絹、クサダミの木で染めずとも朱に交はれば赤くなる、此奥山をいつまでも昔のお匙と思つて居るのか、小家を微塵にブチ壞して金子の有無を探して遣るわえ。

（ト蹴放す、新五郎身を起しながら、）

新五　有りもせぬのに餘りの御無體。

（ト遮ぎる。）

奕竹　邪魔をすると叩き殺すぞ。
（ト有合ふ枯木の杖を取つて島渡立廻りになり、新五郎を打伏せると直ぐバタ〳〵にて、向うより流人なまこの八助、根ッ子の松藏を先に島人大勢一散に驅來り）
八助　泥坊醫者の奕竹院め。
松藏　サア見付けたぞ。
兩人　動きやアがるな。
奕竹　ヤア誰かと思つたら海鼠の八に根ッ子の松藏、同じ流人でありながら島人達を引連れて、わいらは愚老を何ンとするのだ。
八助　何ンとするたア知れた事だ、顎の干上る所から內々村を荒して居た手前の惡事が知れたから、みんなで陣屋へシヨ引いて行き、
松藏　地役人の指圖次第で海の深みに沈めにかけ、
八助　島通りの、
皆々　仕置をするのだ。
奕竹　モウさう聞けば破れかぶれ、わいらも生けちやア置かねえぞ。
八助　ソレ引ッかつげ。
皆々　合點だ。
（ト下座の鳴物にてゴッチヤの立廻りになり、トヾ大勢は手取り足取り奕竹院を引擔いで下手へはひる。）

〽跡見送つて新五郎、息苦し氣に身を起し、
新五　ア、ひどい事をする人だ、今一ト足遲かつたら打殺されて仕舞ふところ、お蔭樣で助かりました、モシ有難う御座ります。
〽伏拜む手に節々の痛みを撫でゝ居たりける。斯るところへ向うより、
（ト濱唄になり島の娘なか、によご、くすの三人地木綿の袷（靑梅縞の類、年中綿を用ゐる事なきは此島の風俗なり）蘇枋染の帶（幅一尺、丈五六尺を常とし紬にて單（ひと）へなり）を前にて結び、髮を束ねて手拭を冠り、貝拾ひの笊などを持つて急ぎ足に出て來ると、其跡より達磨三郎兵衞海鼠襟の合羽脚絆草履にて振分の荷物をかつぎ、菅笠を片手に持つて出る。）
三郎　コレ娘御達、新五郎といふ人の住んでゐる小家とやらは、まだ餘ッ程御座いますかね。
なか　何ンのモウ向うに見えてぢや、草臥れても居やしやらうが辛抱して步きんせ。
三郎　イヤ有難う御座います、能く知つてお出なさるお前さん方にお出逢ひ申して道を聞いたは大仕合せ、おまけに小家まで送らうとは辱けないお志、イヤ島育ちは格別に御親切で御座いますねエ。
によ　さう云ふ事をいはしやるうちも手間が取れるぢやな

いかいな、サア案内をする程に、
くす　わしらに附いて、
兩人　御座んせ〳〵。
（ト前の合方にて皆々本舞臺へ來る。）
なか　コレお前の尋ねなさんす新五郎さんがソレ其所に。
三郎　ナニ此人が、アノ。
（ト餘りの窶れ樣に見違へたるこなしにて躊躇する。）
なか　モシ新五郎さん、お江戸の方の人さうなが、お前を尋ねて見えたぞえ。
〽江戸と聞くより新五郎。
新五　ドレ〳〵何處にお江戸から。
〽心を容に這ひ出す、顔つく〴〵と三郎兵衛。
三郎　オヽ親方だ、親方に違ひない、コレ新五郎さん、能く健康で居ておくんなすツたねエ。
〽涙落せば眉に皺。
新五　さうして足下は。
三郎　御尤もで御座います、お前さんは此親父をお見忘れでも御座いませうが、こちらは忘れぬ花形役者、遠島になつてからも記念に殘る錦繪の目先にちらつく舞臺顔、それほど變つて居ようとは思懸けない所から、今も今とて一旦は疑ふ程の窶れやう、いかい苦勞をなさいますなア。

新五　御深切なそのお言葉先づ以て辱けない、そして何方で御座りましたな。
三郎　私やア久しい後ちツとの間市村座の樂屋に居つた事のある達磨の三婦で御座いますよ。
新五　オヽホンニ三婦殿か、その三婦殿は江嶋樣の。ア、面目ない〳〵。
〽逃げにかゝれば取縋り。
三郎　サヽヽヽ江嶋の事でお前さんを怨みに來やア致しませぬ。チトお頼みの筋あつて掟嚴しい此島へ忍んで參つた入譯を、親方聞いて下さりませ。
（ト新五郎を下に居させると床のメリヤスになる。）
大島かけて御藏島へ廻船の往來があると人の敎へで思立ち、島へ渡つて漁師を手狎け此八丈へ來るまでに日數も積る船路の艱難、やつとの事でお目に懸り、嬉しい江戸の便りでも聞かせる事か情ない。
〽娘江嶋が身の上も土產話と成行の、
果敢ない事を思ふにつけ、どうも口へは出されませぬ。
〽語らぬ先の溜淚。
（ト愁嘆のこなし宜しくある。）
新五　その江嶋樣は罪顯はれ、一旦死罪と極つたを月光院樣のお計ひで、信州高遠の內藤樣へ永のお預けと聞きましたが、足下の歎きの樣子では。

三郎　ハイ亡くなつて仕舞ひました。
新五　エッ。
三郎　サア高遠へお預け中、塞の師走に木綿布子夏もやうやう麻帷子、朝夕一汁一菜の外はならぬと公儀の嚴命、座敷牢に入れられて日の目も見ねば身も弱り、お前さんの事ばかりを思ひ死に死んだとやら、囚人の身の悲しさに看取の親でも立寄られず、風の便りを聞く度に唯泣いて居た胸の内、親方察して下さりませ。
新五　ア、そんな事に成行いたも、元はと云へば此身の誤り、知らぬ事とは云ひながら、唯一遍の回向もせず、許して下され江嶋樣。
〽合掌の手に降りかゝる、涙の玉は百八の、珠數に紛ふぞ哀れなる。
(ト新五郎彼方の空を眺めて弔ふ事宜しくあろ。)
三郎　イヤモシ親方、その誤りは娘も同前、返らぬ事ぢやア御座いますが、師匠の初音で一生涯暮した方が安穩だらうと親が異見を加へた時、氣嵩のあれが申しまするには、何だねエ阿父さん、お前は御說法を聞嚙つて悟りめいた事を云ふから、達磨と綽名をお取りだが、そりやア引込思案だよとお城へ上つてアノ不始末、ア、高い木は風に折られる、餘り出世を仕をつたから魔が差すだらうと思つた通り、飛んだ事になりましたが、罪人になつて死ぬ程にお前さんを慕つた譯ゆゑ、娘の未來の助かるやうに一つの願ひが御座いますが、何ンと聞いては下さりませぬか。
新五　ナニ後世の爲め、お賴みとは。
三郎　サア高遠で投込み同樣埋められたと云ふ事で記念の品は手に入らず、師匠の頃に大事がつた踊衣裳のあるを幸ひ、代々の菩提所へ葬むる手筈で御座いますが、同じ事ならお前さんと其衣裳に盃させ夫婦の積りに仕て遣つたら、行く所へも行けようとわざ／＼持つて參りました、マア御覽じて下さりませ。
〽取る手も携き旅荷物、紐は解けども解けしなく、身を知る雨の振袖は、目に立花の香も失せぬ、昔ゆかしき縫模樣。
此振袖が我子の初音、親方どうぞ盃を。
〽賴みまするど差し出せば。
(ト此文句の通り泣く／＼踊衣裳を取出す。)
新五　親御のお心察しまする、いかにもこゝで三々九度。
三郎　スリヤ聞入れて下さいますか。コレ娘、喜べ／＼是れで極樂へ行かれようがな。
(ト泣落して氣を替へ。)
アハ、、、おめでたい婚禮に涙は大きに不吉であつた、土地も伊豆の嶋臺に、

新五　散來る櫻の蝶花形、
三郎　鮑の殼の土器も、
新五　壺の雨水汲入れて、
三郎　哀れに目出度い、
兩人　祝言ぢやなア。
〽縫ひの袂の花嫁が、彌陀の淨土の輿入れに、嶋の娘も貰泣き、色なき衣も紅の、涙に袖や染るらん、三郎兵衞は心付き。
（ト皆々愁嘆の仕打あつて、三郎兵衞小膝を打ち）
三郎　オヽさうだ、祝言は祝言でも相手は心のない振袖。ノウ娘御達、誰ぞ此衣裳を引掛けてわしの娘の名代に、聟殿の盃を飲干して下さらぬか、コレ頼みます〳〵。
〽云ふに娘は目を見合せ、おぢつく計り應へなし。
如何さまナアどれを見てもはにかむ年頃、そんなら俺がと云はれもしまい。コレ〳〵そちらに居るお娘御、お前は何ンと云ひなさるね。
（ト三人の內なかに目を付ける。）
なか　アノわたしかえ、私は大賀のなかぢやわいなア。
三郎　フムお仲さんと云ひなさるかね。
新五　アヽイヤ三婦殿さうではない、こゝは變つた習はしで二番目の娘の事を、なかと云ふが島の通り名、總領をによごと云ひ三人目をてごと云つて、女も男も名前を呼ばず、ヤレ七ちやうだの八ちやうだのと數で濟して居りますのさ。
三郎　ヘエ左樣で御座いますか、併しこッちで呼びいゝやうにお仲さんとして置きますよ。イヤナニお仲さん、先刻から見て居るに死んだ娘とお前さんは、他人の空似で瓜二つ、似たのを因果と諦めてどうか代りに、
なか　そんなら私が新五郎さんと。
三郎　後生の爲めになりますから迷惑だらうが、サア島渡。
なか　それでもどうやら。
三郎　ハテ眞個の事ぢやアない。ソレ友達衆、早く着物を着せて下さい。
〽サア〳〵早うと娘達、恥かしがるを無理無體、着せかへるやら、鞠るやら、顏も茜の單帶、しやんと結ぶの神樣も、思懸けなき嫁御寮、名をかりそめに仇花の、綻びかゝる風情なり。
（ト此內によご、くすは踊衣裳を着せる、新五郎と三郎兵衞は鮑に水を汲んで捨石の上に置くなど、婚禮の支度をする。）
によ　サア〳〵嫁御が出來た〳〵。
くす　早うそこへ、
兩人　出なさんせいなア。
〽突出されても後毛の、額の汗に上氣して、踊衣裳

の胸踊る。
(ト逃げにかゝるをによご、くす搦んで仕打あり、引戻して押据ゑると、三郎兵衞思入あつて、)
三郎　その振袖を着たせゐか、一倍娘に生寫し、お城女中の江嶋より昔の初音をそつくり其儘。が手拭は此場で不作法、サ、早く取つて仕舞なさい。
ない　イエ／＼外出をして居るうちは、冠つて居るが嶋の習はし。
三郎　ア、イヤ祝言の濟むまでは八丈嶋の人ではない、達磨の三婦の娘だから江戸の風儀が肝腎要、ドレわしが取つて遣りませう。
(ト手拭を取ると、束ねた髪が捌けて身の丈に餘る八丈女の特長を見せる。)
新五　そんなら三婦どの、盃を。
三郎　サア嫁が飲んで差した／＼。
〽手先も慄ふ盃に、波は立てども夕風に、八丈の海靜かにて、枝も鳴らさぬ時津風。
(ト盃事宜しくあろ。)
オ、目出度い／＼、男謀好兼帶に祝儀の謠と云ひたいが、此三婦は不案内。コレ友達衆、何ンでもいゝから祝つて下さい。
によ　何ンのマア減相な、わしらの知つて居るものは梭の響を柏子にて、
くす　機織唄があるばかり、
三郎　サアその唄を所望だ／＼。
によ　それで好ければ聞かしやんせ。
くす　嶋の女子が
兩人　一ト節に。
唄〽絹の竹でも八ちよにますな、八ちよ貴人弓とば八ちよう、サウサひさめよ／＼、サウサひさめよ
(ト下座の唄に取つて此兩人振あり宜しく納まる。)
三郎　ヤンヤ／＼目出度い／＼。
〽祝ひなかばに漁師の七ちよう
(ト濱唄になり、向うより漁師七郎出でゝ直ぐ舞臺に來り。)
七郎　オ、お客人、ぬしは其所に御座つたか、此客合の按排では風向きも直りますべえ、其上地役人の目を兼ねて磯の岩蔭にもやつて有るから氣が揉めて堪らねえ、此間に舟を出すべえから、用が濟んだら御座れ／＼。
三郎　オ、船頭さんか、丁度用も濟んだから、直樣舟へ出掛けませうよ。
七郎　待つてゐるから早くさツしやい。コレ娘達、舟へ飲水を入れたいが世話をしてはくれめえかの。
によ　オ、それは易い事、ツイそこらまで連立つて、

くす　好いやうにして上げようわいなア。
七郎　そりやア大きに辱けない。コレお客人聞かしやる通りだ、跡から急いで來て下さい。サア娘達何方へ行くのだ。
によ　今來たところを眞直に、
くす　松原傳ひの一本道、
七郎　ム、呑込んだ〳〵、さういふ譯ならぬし等も一緒に。
によ　サア〳〵急いで、
兩人　お出でなさんせ。
（ト同じく濱唄にて此三人捨ゼリフ宜しく向うへはひる。）
〽始終の樣子に萎るゝ生嶋。
新五　それぢやアモウ舅御はこゝをお立ちで御座いますか。
三郎　お名殘惜しいは山々だが雇ひの漁師もあんなに云ふから、迚も長居は出來ますまい。サアお仲さん御苦勞で御座いました、ちよツと着物を脱いで下さい、サアお仲さん。
（ト手を出すとなかは唯冠りを振る。）
是はしたり何うしたもんだね、お仲さん、お仲さん。
（ト又促すと矢張冠りを振る。）
お前も訝しな人ぢやアないか、わしは心が急ぐのだから早くそれを返して下さい。アレ又冠りを振つて居る。手間が取れちやア困るから不躾だがわしの手で。
（ト立ちかゝつて脱がせかゝると、なかは袖袂を一つにかゝへて確りと抱き占め、）
なか　マア〳〵待つて下さんせ、わたしはどうも脱ぎともない。
〽譯も白齒を喰〆めて、聲を憚る忍び泣き。
（ト新五郎の方へ思入あつて涙に暮るゝこなしある。）
新五　ハテ心得ぬ此場の有樣。
三郎　こんな解らぬ事はないわえ。
なか　御尤で御座んすが、疾うから慕ふ新五郎さん、言ひそゝくれて居るうちに今日は如何なる吉日やら、名代なれども祝言に心飛立つ盃も。
〽磯の鮑の片思ひ、嶋に育ちし女子でも、此振袖を着て居れば。
新五郎さんも女房ぢやと。
〽心で思うてくれもする、身を放したら他人同士、何ンと是れが脱がれうかと、始めて明す下心。
（ト振り宜しくある。）
三郎　聞いて見れば尤も千萬、お前さんの胸の内は能く能く察して居りますが、最前も云ふ通り江戸の檀那寺へ葬つて後世を營む品だから、どうもそれは手放せない、斯

う見たところがお前さんも發明らしいお娘御、呑込みの好い様子だから其所らは分つて居ませうがの。

〽と云ふ顔つれ〲打目戍り。

なか　お前様も好いお年、便りのないお江戸より此嶋に落着いて、新五郎さんと此なかを聟、嫁と云うて下さんせ。

〽隨分わたしも孝行に、八丈絹の織つむぎ。アシタ草をも摘み溜めて、黄染め樺染めきく田摺り、女業でもおふたりに樂させますで御座んせう、嘘から誠も出る習ひ、此儘添はせて下さんせ。

〽添はしてやいの父様と、縋り歎けば兩人が。

三郎　エ、いぢらしい事を云つてわしを困らす事はいな。コレ聟殿。

新五　舅御様。

三郎　ひよんな事に、

兩人　なりましたのう。

〽持餘してぞ居たりける。

（ト是にてバタ〲になり以前の海風の八助、根ッ子の松藏一散に駈來り、）

八助　サア〲新五郎どん、大變な事が湧いて來た。

兩人　大事だ〲、

新五　ナニ大變と云ひなさるは。

八助　必ず吃驚せまいぞよ、今日の順風で御用船が三宅を廻つて一足飛び、陣屋へ着いての御沙汰には上様が御早世で、御代がはりになるに付き流人大赦と云ふ事だ。

新五　ヤアそんならば大赦のお觸れが。

三郎　エ、、、ッ。

（ト三人ながら一度に驚く）

松藏　しかも天氣は上都合、程なく風が變るから時の間に流人を乘せて直樣出船せねばならぬ、みんな陣屋に集れと眉に火のつく大騷ぎ。

八助　竹法螺の音の響かぬうち乘込まなきやアなるめえから、

松藏　サア新五郎さん、

兩人　急いだ〲。

新五　有難いお上のお慈悲、舅御も聞く通り夢のやうな御沙汰だから、わたしは陣屋へ一ト走り。

三郎　成丈急いでお出なさい、わしも一旦漁船で御藏嶋へ渡つた上、便船次第で歸るから跡構はずと少しも早く。

新五　ドレ嶋奉行のお邸へ。

〽杖を力に五足六足、縋る娘の眞情に引戻さるゝ後髮。

（ト枯枝の杖を取つて駈出すと、なか追縋つて引戻し、）

なか　マア〲待つた待たしやんせ、どうでも行くなら此

なかを殺して置いて行かしやんせ。
新五　スリヤ左程まで此わしを。
〽跡は言葉も泣く涙。
（ト取縋りたるなかの背中に手を掛けて愁ひに沈む。）
八助　コレ／＼新五郎どん、乘後れたら何うするのだ。
兩人　早くしなせえ／＼。
新五　トハ云ふものゝ此娘が。
八助　エヽ何を云つて居るんだ、あけても暮れても戀焦れた江戸の迎ひが來てゐながら、愚圖つく奴があるものか。
松藏　交竹院の泥坊なぞは惡の報いで取殘され、お赦にならぬと聞いたばかりで、ウンと氣絶をした位えだ。
八助　今御用船に捨てられたら、先づ生涯は此嶋守。
松藏　それぢやアおめえも、
兩人　諦めえぜ。
新五　ムヽさうだ、戀しい江戸には易へられぬ。
（ト向うを見込んで思入れ。）
なか　そんならどうでも。
新五　娘御さらば。
（ト突放すと、岩角にて肋を打ちウンと倒れる、新五郎ハツとしながら氣を替へ、）
三婦殿、江戸で。
〽言捨てゝこそ。
（トよろめきながら一散に向うへ急ぎ行くと、海鼠も根ッ子も續いてはひる。）
三郎　コレ舅殿、海上無事に暮して下さい、親父も程なく歸りますから目出度く再會するやうに、體を大切にしませうぞ、ア、アレ／＼雲を霞と行つて仕舞つた。イヤそれにしても此娘を打ッちやつては置かれまい。コレお仲さん、氣を確に持ちなさい、娘御やアイ、お仲さんやアイ。
〽呼び生けられて、目を見開き。
なか　新五郎さんはドレ何處へ。
三郎　その新五郎は行つて仕舞つた、更々以てお前さんを嫌ふといふ譯ぢやアないが、大赦に逢つた流人の身でどうして殘つて居られるものか、故郷へ急ぐも其筈ゆゑ、薄情などゝ怨みなさんな、諦めなさい／＼。
なか　イエ／＼嘘にも夫婦になり盃までも交した中、お江戸へはモウ遣るまい。コレ新五郎さん歸りなさんせ、最一度歸つて下さんせ。ア、モウ聲も届かぬか、此上は跡追うて引戻さずに置かうかいなア。
〽足もふら／＼立ちかゝる。
（ト向うへ行かうとする、三郎兵衛周章てゝ袂を押へ）
三郎　ア、コレ飛んだ事を云ふ、御用船の出船間際に穩やかでない事があると、出來る歸國も出來なくなつて、新五郎の身の難儀、三婦が留める、舅が留める、待つた／＼待

ツしやい。
なか　そんならお前は此なかの戀の邪魔をさんすのかえ。
三郎　あゝ云へば斯う云ふと、それぢやア親仁も話が出來ぬ。オ、お仲さん斯うしませう、わしも故郷へ急ぐからお前さんを衣裳と一緒に是から江戸へ連れて行き新五郎に逢はせませう。さうして念が晴れたなら、それで好いぢやアあるまいかねえ。
なか　そのお江戸には美しい女子がたんと居さんすげな。
三郎　サア居る事は居ますがのう。
なか　その人達に八丈の水汲女と笑はれて、果は殿御の愛想づかし。
三郎　そりやアあンまり取越し苦勞だ。
なか　他國で恥を晒さうより、此振袖を身につけてわたしはこゝで焦れ死。
三郎　エ、ッ。
なか　モウどつこへも行くまいわいなア。
〽思ひ切ッたる耳許へ。
（ト僅かに竹法螺を吹立てる。）
三郎　オ、竹法螺は出船の知らせ。
なか　アノ岩角で帆影でも。
三郎　コレサ危い、待つた〱。
〽振切り〱半狂亂。

（ト小家の背後より續く磯山の巨岩を目がけて攀ぢ登ると、舞臺半廻しとなり、磯馴松のほとりに漁師の網干してあり、下は一面の浪幕にて點々たる石の上には漁具を程よく干し並べ、苫など引散してある、娘なか岩を傳ひ岩角に現はれると、三郎兵衛も跡より續いて出て來る。）
エ、危いと云つて居るに、途方もないどうしたものだ、サア〱下へ降りなさい、まだ相談の仕様がある、コレサ〱お仲さん、それぢやア情がこはすぎやうぜ。
〽云ふも聞えぬ一心に。
なか　オ、こゝからは數々の岬の端が邪魔になる、大賀の入江は何處やら、帆影はどこにあるぞいのう。
〽戀しの人の行方やと領巾振山を眼前り。
（トこなしいろ〱ある。）
三郎　サア見えなけりや猶の事、早く降りて仕舞ひなさい、ナゼ聞分けがないのだナア。
なか　イヤ〱向うの松影に、船の白帆がア、あれ〱。
〽綱を便りに伸上る、綱手は切れて仇浪の、
（ト干網の網仕掛にて切れる、なかは綱を摑みしまゝドンと浪幕の切穴へ落入る。）
三郎　アツ。
（ト驚き尻餅をついて狼狽する。）

〽哀れなりける。

（ト千鳥笛、浪の音、空は夕映（ゆふやけ）になる。）

此もやう宜しく　幕

紀國文左大盡舞（三幕）

序幕

紀の國屋寮の場

常足の二重本緣附正面襖繪の襖、床の間違棚等數寄を凝らし、上手には袖垣、石燈籠、下手には梅と椿の立木及び切目あり、都て二代目紀國屋文左衛門の假住居に當てたる橋場の寮の體にて、驕奢の痕は見えながら、置物其他裝飾品の出道具は少しも置かず、一見明店同然の體よろしく、流行唄にて幕開くと、こゝに寮番親仁龜七竹箒を持て庭を掃き、召使ひお杉緣側に雜巾掛けをしてゐる。時候は春のなかば。

龜七　ア、草臥れた〳〵、今日旦那樣が此寮をお立退きになると云ふので、荷造りやら運送やら働き通した其上に、跡片附けの掃除までも脊負込んで仕舞つたから、人一倍疲れ果てた、ア、腰が痛んで堪りやアしねえ。

（ト箒片手に腰をたゝく。）

お杉　オ、爺イやさん、お疲れだらうね、わたしも雜巾掛けを仕舞つたから、こゝらで一息つきませうよ。

龜七　お前はモウ肩拔けかね、實はおいらも息つぎにお茶一杯と思つても、道具はみんな送つて仕舞ひ、何んにもねえから始末にいけねえ、ドレ一服遣りながらチット骨を休めようか。

（ト緣に腰を掛け巾着の燧を打つて莨を吞む。）

お杉　そして爺イやさん、今度お引越しの御新宅も矢張り大きなお內かえ。

龜七　コレ串戲を云つちやア行けねえ、百萬兩の大身代をめちや〳〵にした擧句の果、こゝに逼塞した旦那樣が、又も逼塞する譯だから、今度といふ今度こそ見すぼらしいお住居さ、先づ此寮に比べると、燧箱の樣だから、おらアお荷物を運びながら、幾度泣いたか知れやアしねえ。

（ト龜七ホロリとなる。）

お杉　そんな譯では、わたしらもどういふ事に成行くやら。ホンニ古川に水絶えずで、今日までは五六人もお召使ひになつてゐたが、是から先が氣になるねえ。

龜七　その古川の水だつて、いよ〳〵切れちやア仕方がねえ、併しお立退きの用意だけは、チヤンと出來て居りながら、旦那樣も御新造樣もまだ此寮にお出なさるから、イザといふ時になつたら、お前方の身に付いても、何んとかお話があるだらうよ。

お杉　それを聞かねばならないとは心細い事だねえ。

（ト兩人顏見合せぞッとなる。是にて合方になり、奥より紀の國屋文左衞門羽織着流しにて、手文庫を片手に持ちながら出來り）

文左　オヽ龜七、モウ掃除は仕舞つたかの。

龜七　ヘイ〳〵大概片附きましたが、旦那樣は唯今からモウお引移りで御座りますか。

文左　立つ鳥跡を濁さずとやら、拭き掃除が濟んだなら、わしもそろ〳〵立退きませう、就ては奉公人一同に話したい事があるゆゑ、みんな此所へ呼びたいものぢや。お杉、おぬしに賴むから、好い樣に傳へてくれ。

お杉　畏りまして御座ります。

（トお杉辭儀をしながら、雜巾桶を持つて、廻り緣よりはひる。文左跡を見送り）

文左　ノウ爺イや、幾度もわしが云うた通り、人手に渡した家だから、跡はどうでも構はぬと取散して置く時は、買主の心が知れて、後々までも大きな恥辱、おぬしに如才もあるまいが、見苦しい品物など必ず取落してはなりませぬぞ。

龜七　そりやアお氣遣ひなされますな、運べと仰しやつたお荷物だけは、お指圖通り一つに纒めて、裏庭の棧橋から舟で深川へ運びました。

文左　オヽ、そんなら此家に殘つたものは、何んにもないな。

龜七　ヘイ外には御座りませぬが、御新造樣のお手荷物を積込んだ小舟ばかりは、繫纜つた儘で御座ります。

文左　フムさうか、ナゼその舟は出さぬのぢや。

龜七　それは斯樣で御座ります、御新造樣の仰しやるには、表門から立退いては、近所の手前も恥しい、わたしも荷物と一所に乘つて深川へ行きたいと、內々のお話しゆゑよろしい段ぢや御座りませぬ、お支度さへ出來たなら、いつでも舟を出させませうと申上げて置きました。

文左　成程それも尤も千萬、この紀文に請出されて、永らくこゝに住んでゐた三浦屋の几帳太夫、表門から大手を振つて立退く譯にも參るまい、あれが望みと云ふことなら、舟で行くのも至極好からう。

龜七　それにつけても旦那樣、江戶で名高い紀文樣がいかに落目と云ひながら、淺猿しい此成行、お情ないぢやアござりませぬか。

文左　ナニ情ない事があらう、親父樣が一代にお仕上げなされた身代を、伜のわしが潰せばこそ、百萬兩といふ金が世間へ出て働くのぢや、わしに視勝りの智慧があつて、百萬兩の身代を千萬兩にも伸せるなら、其丈資本を下す故、世の融通も附くであらうが、その器量もない上は、いつそ貯へを散した方が、マア人助けといふものぢや。

龜七　イエモシ人は心の持ちやうで、どうでも理窟は附きますが、餘りと云へば餘りの御不運。

文左　サ、そのやうに思ふのも、矢張り心の持ちやう一つ、貯めた金なら遣ふが好いと、親父様も草葉の蔭で嘸かし笑つて御座らうと、心で極めればそれでも濟む、何とさうではあるまいか。

龜七　そりや旦那様はそれほどに。

文左　ハテ二代目の文左衞門、百萬兩の番人に産付けられた覺えはない、アハヽヽヽ。

（ト大きく笑ふ、龜七呆れる、こゝへ以前のお杉を先にお松、お駒、お留、飯焚權助出來りて、皆々下手に控へる、權助だけは立ちはだかつて居る。）

お杉　ハイ旦那様、朋輩一同罷り出まして御座りまする。

文左　ヽ、みんな來たか、御苦勞々々々。權助、貴様はナゼ坐らぬ。

權助　ハア坐るべえ事は坐るべえがね、おらア馴れねえもんだから、眞ツ四角に坐るとぶツくり返るだよ。

龜七　この飯焚は何を云ふのだ、サア早く坐らねえか。

（ト龜七目まぜして緣を叩く、權助ふところ手の儘にて坐り。）

權助　ソラ坐つたが、何ぞ用かね。

龜七　コレサ〳〵何んのざまだ、手を出しねえ〳〵。

權助　エ、喧しい、ソラ出すぞ。出した此手をどうするだね。

龜七　膝の上にチャンと置くのだ。

權助　ア、いろ〳〵と難しいこんだ。おらに窮屈がらせて置いて、旦那さまア何をこくだね、直に痲痺が切れるだから、お早くお頼み申しやすよ、

お松　憚りながら旦那様、御用の筋を一通り、

お駒　お聞かせなされて、

皆々　下さりませ。

文左　サアその事はお前方も大抵推量して居ようが、云はねば濟まぬ此場の仕詰、マア兎も角も聞いてくれ。

（ト合方キツパリとなり。）

長者二代なしとやら、わしが家督を嗣いでから、まだ幾年も立たぬうち、材木町の家庫より諸方の地面も賣拂ひ、世におちぶれた文左衞門、たゞ一軒だけ取留めた此寮に逼塞して、几帳と共に暮しながら、奢りの癖が拔けぬゆゑ、人も多勢使つてゐたが、實を明せばこの住居も、とうに他人の物となり、今日を限りに立退く約束、それに付ては皆々にも永の暇を取らせるゆゑ、銘々堅めた荷物を引取り、心のまゝに離散して身の落着きを計るやう、改めて頼みますぞ。

お杉　スリヤわたし等へ、

皆々　お暇を、
文左　オヽ古參でも新參でも別れとなれば悲しいが、世の成行は是非がない。
（ト手文庫より多くの金包みを取出し、）
これは誠に些少ながら、此寮を賣拂つた代金の内を分け、ホンの當座の手當として、一人の頭に五十兩づゝ、若し給金の引殘りを算用したなら不足か知らねど、お前方も不承して、どうか納めて貰ひたい。
お杉　エヽ滅相なそのお言葉、僅かばかりの御奉公で、此大金を戴いては、
お松　神や佛に對しても冥利が惡う御座りますゆゑ、
お駒　どうもお受けが、
皆々　出來兼ねまする。
文左　さう云はれてはわしが困る、七度までも吉原の大門を打つた文左衞門、世が世であれば仕樣もあれど、心に任せぬ今の境界、僅の金を取出して手當といふも恥しい、必ず笑うてくれまいぞ。
お杉　そんならどうでも、
皆々　このお金を、
文左　オヽ志ざしは松の葉ぢや、マア／＼納めて置くがよい。
お杉　エヽ有難う、
皆々　御座りまする。
（ト一同金を納める、權助橫手を拍ち、）
權助　ムヽ此所だテ、こんなに金づけえが荒れえから、百萬兩の大身代をぶつ潰すのも無理はねえだ。
龜七　コレサ權助、何を云ふのだ。
權助　サア金遣えは荒れえけんど、人遣えは和らけえ旦那樣だ、そつちで暇をくれたつて、矢張くッついて行きやすよ、おらアハア何時までも奉公する積りだから、此金は要りましねえ。
（ト金包みを差戻す。）
文左　その親切は嬉しいが、今日立退いて行く先は、富ケ岡八幡の一の鳥居に程近い蠣殼屋根の片折戶、夫婦二人の暮しでさへ、手狹な位の住居ゆゑ、奉公人は無用の沙汰ぢや。
權助　そりやア定めし狹かんべえが、おまんまア誰が焚くだね、廓言葉とか何んとか云つて、妙な物言ひの拔け切れねえ御新造樣にやア焚けやすめえ、深い事は知んねえが吉原に御座つた頃は、全盛の太夫さんで几帳とか云はしやつたさうだが、あんな氣前のいゝ人は、おらア一度も見た事がねえ、實のところを云ふと、おらア旦那樣よりも御新造樣の方が好きだ、その御新造樣に焚けねえおまんまを焚かせちやア、この權助が濟みましねえ。

文左　イヤその事なら案じてくれるな、婆爺の龜爺が永年の馴染甲斐に深川へ一緒に行き、面倒を見ようと云ふから、跡の事は構はずに引取つてくれるがよい。

權助　ハアさうかね、爺やが居るなら安心だ。そんなら此お金を貰ふべえよ。

（ト金を取つて懷に納める。）

お杉　左樣なれば旦那樣、是から御新造樣のお目に懸り、

お松　お禮申した其の上で、

お駒　宿へ下るで御座りませう。

文左　オ、そんならモウ行くか、隨分ともに息災で、

お杉　お名殘惜しう、

皆々　存じまする。

（ト愁ひのこなし。）

龜七　サア權助も女中達と連立つて行きなせえ、おいらも掃除の殘りがあるから、彼方へ行つて一精出さうよ。

權助　それおやア旦那樣、御機嫌よろしう。

文左　錢が盡きずば又重ねて、

權助　何んだかハア悲しいこんだ。サア阿魔ッ子達來なせえ〱。

（ト皆々挨拶宜しく、龜七は切戸口へ權助及び女中は元來し口へ入る。あと文左衞門歎息のこなしあつて、）

文左　ア、世の中はさま〲ぢや、有るに任せて數寄を凝らし奢りを極めた此家も、今日は早や他人の持物、しかも相手の買主は御身分柄の御仁とやら、元の番頭庄三郎が賣買ひの世話序に表向きの名前主、モウ程もなくその お方をお連れ申すと云ひをつたが、內證づくの事なればお目に懸る事も出來まい、立退く前に今一度、此家に名殘を惜んで置かうか。

（ト惜れながら立上り、正面の襖を左右へ開くと、向うは中庭を見越して間毎々々を書割りたる中遠見となる、文左は背向きに坐りぢッと奥を見込むと共に本釣鐘を打込み、獨吟になる。）

唄〽簷の端に。妻も籠む筑波根の。薄むらさきの匂鳥。人來と告げて枝うつり。

（ト此內文左はあたりを見廻しながら正面に向き直り、膝に片手を置いてぢッとこなし、下手奥より几帳、勝山髷華美な樣の着附にて一幅の懸物を袖の下に抱へながら出來り、）

几帳　ぬしは此所に居なさんしたか、殘して置けとお云ひなんした一蝶さんの此懸物、マア何うするので御座んすえ。

文左　されば几帳聞いてくれ、家を人手に渡すほど落目になつても紀の國文左、町家ながらも床の間に懸地一幅掛

けて置くは買主へ禮儀の寸志、それはわしが掛けようから、そなたは用意の花瓶に時の花を何なりとツイ投入れて置いてたもれ。

几帳　アイ〳〵合點で御座んすわいなア。

唄へ今宵の宿の居心も。まだ白梅の花笠に。降るは涙か春雨か。ゆく〳〵定めぬ人の身と。水の流れや隅田川。

（トこの内に懸軸を差出すと、文左是に手を掛けて双方思入、是にて文左床に懸物を掛けると、几帳は襖の蔭より活花の道具を取出し、花鋏を片手に平舞臺へ下立ちて椿の花を切る。）

文左　思へば床の一軸も前後ふたりの持主に、いづれか緣の濃き薄き墨繪の筆の置土産。

几帳　時知り顔の一枝も、眺める人が變るとは、知らぬが花の玉椿、

文左　その八千代には引替へて、

几帳　淺い月日の假住居、

文左　果敢ない夫婦の、

兩人　身の上ぢやなア。

唄へ世をうし嶋と夕烟。たなびく末のさゞ波に。二つか三つか都鳥。

（ト是にて几帳花を持つて二重へ上る。）

文左　オヽ見事に能う咲いた、早く活けて床へ直し、跡は爺（ぢい）やに任せて置いて、新宅へ急ぐが好からう。

几帳　アイわたしは裏手から舟に乘つて行きますわいな。

文左　そんならわしは一足先へ。

（ト立かゝりながら又思入あつて、）

ヘトは云へ此身の物數寄に、寶晋齋の日深へで造りあげた築山泉水、赤い馴染の草も木も、

几帳　今を限りに一期の見納め、

文左　几帳、

几帳　アイ、

文左　ア、何事も夢ぢやのう。

唄へ浮寢の床の。夢うつゝ。

（ト兩人手を取合ひ歎く。）

イヤ思ふまい、愚痴であつた、ふたりで住めば此所よりも侘びた小家が又風流、

几帳　せめてはそれを樂しみに、手鍋提げるで御座んせう。

文左　デハ深川で待つて居るぞよ。

几帳　能う氣をつけてお出でなんし。

唄へ岸の柳も糸に撚る。その別路のうしろ髮。

（ト此文句の内文左廻り緣よりはひる、几帳ちツと見送り、）

几帳　どんな事にも屈託せぬ紀文さんではあるけれど、お

氣に召した此寮ゆゑ別れがつらう御座んせう、ツイお心を推量してわたしも一所に此泣顏。

（ト襦袢の袖口にて涙を拭き）

若しも人が見なんしたら、未練らしい女子ぢやとおさげすみなんすで有らう、ドレ心を取直して早う花を活けようわいなア。

唄へ風や思ひを。亂すらん。

（ト獨吟の上げにて、再び花瓶の前に直り投入れの花を挿して居ると、下手切戸口より白子屋庄三郎大家の町人の拵へにて出來り）

庄三　オヽ、御新造さん、こゝにお出でゞ御座りましたか。

几帳　何方かと思うたら、庄三郎さんで御座んしたか、マア〳〵そこへお掛けなさんせ。

庄三　そんなら御免を蒙りませう。

（ト緣側に腰を下し）

時においらん。デハ無かッた御新造さん、もう旦那樣はお立退きで御座りますかね。

几帳　アイ明家とは云ひながら、床には花を活けて置けと吩咐けて置いてタッタ今。

庄三　スリヤお出掛けで御座りましたか、流石は紀文の旦那だけにお心入れはまた格別、表向きだけ買手になつた名前人の私さへ感心する位故、程なく眞個の買主が是へお出になつたなら、床の間を見たゞけでも嘸ぞ喜ぶで御座りませう。

几帳　さう云へば庄三さん、此度はいろ〳〵とお骨折りでござんした、お蔭で寮も早く賣れ、好い都合で御座んすわいな。

庄三　何んの〳〵お前さん、御挨拶ぢやア痛み入ります、實を申せば私も紀文樣御繁昌の頃番頭の數に入つて、御奉公をしたればこそ材木商賣に取附いて、今では白子屋庄三郎と、仲間内にも名を知られ樂な身分になりましたも全くお蔭で御座ります、就ては以前の御恩返しに好い買手をお世話しようと心掛けてゐましたところ、お名前は申されませぬがお出入屋敷の殿樣が橋場あたりの川添ひに内々遊山の出來るやうな下邸を求めたい、何分賴むと仰しやるゆゑ手前が買取る分にしてお話を纒めた次第、何も仰しやる程の働きでも御座りませぬ。

几帳　そして今日は殿樣がこゝへお出でゝ御座んすかえ。

庄三　へイ御案内は致しましたが、二千石のお旗本故世間體を思召しお忍びで寮の樣子を御覽になると申す事、モウ彼是れそこらまでお越しの時分で御座りませう。

几帳　それではお目に懸るのもおはもじなわたしの身の上、あれが三浦の几帳かと顏見られるが辛う御座んす、丁度花も出來たゆゑ急いで引取りませうわいなア。

(ト右の對話の內、活上げたる花を床に直す、此時切戸口より旗本貝賀三郎兵衞(緞子大盡の事)元祿風の羽織袴、奴角內鎌髭、角鍔の一本差しにて出來り、兩人ながら立木の蔭に隱れ、三郎兵衞は立身の儘白扇にて半面を掩ひ、角內は主人の目せき笠を持つて中腰になり、こなたの樣子を窺ふ。)

庄三　イヤモシ御新造さん、お心急きでも御座りませうが、鳥渡お待ち下さりませ。

几帳　待てとは用でも御座んすかえ。

庄三　サア外でも御座りませぬが、人には顏が合されぬとお前さんの今のお言葉、吉原一の全盛と晉に聞えたおいらんに肩身を狹くさせたのは、そりやア誰で御座りませうな。

几帳　何んとお言ひなんす。

庄三　庄三郎が斯う申すと失禮かは存じませぬが、御先代の旦那樣が蜜柑船で暴風雨を乘切り、命掛けで積上げた山のやうな大金を湯水同樣使ひ捨て、落目になつた紀文樣は自業自得で仕方もないが、罪科もないおいらんまで貧乏暮しのつきあひとは、此セチ辛い世の中に正直過ぎやア致しませぬか、衞ひた襟には見切りを附け出世をなさるお心なら、此白子屋が引受けて必ずお世話を致しませう、まだ拔け切らぬ廓訛り婀娜なところに打込んで引取る相手は世間に山々、こつちで口を探さずとも望むお方がそこらにも。

几帳　エ。

庄三　イエナニそこらの事も考へて慾を知らねば身が立たぬ、又二つには紀文樣、今寢返りでも打たずば中々夢が覺めますまい、モシ御新造イヤサおいらん、そんなものぢやア御座りませぬか。

几帳　ソリヤマア本氣で御座んすかえ、云ふまでもない事ながら緞子羽織で名の高いお武家樣の大盡と、此几帳を張合うた紀文さんの身請から、大盡舞の文句にも唄はれてゐる二人の中、いとし可愛の其上に意氣地もあれば張りもある、死んでも切れて好いものかマア積つて見ておくんなんし。

庄三　まだ丁の氣でお出なさるから、ヤレ意氣地だの張りだのと難しい事を仰しやるが、マア世帶染みて御覽なさい、此白子屋の親切が始めて分るで御座んせう。お氣に障るか知らないが、お前さんも旦那樣も媒妁を立派に立てゝ高砂謠つた中ではなし、兩爲めになる事ならば別れた方が好からうと口を出すのも浮世の義理惡く思つて下さりますな。

几帳　それが義理で御座んすかえ、浮世の義理と云ふものの野暮らしいと云ふ事をお前のお蔭で知りイした、シタ

が庄三さん、紀文さんとわたしの中には好い媒妁(なかだち)が御座
んすぞへ。
庄三 コリヤ面白い、聞きませうか。
几帳 アイ媒妁は出雲の神樣。
庄三 ヤ。
几帳 サア人間の媒妁(なかだち)より結ぶの神が直き〱にお引合せ
の女夫中、それを傍から水を指し、出世の世話をしよう
とは庄三さんの仲人口。
庄三 當てにならぬと仰しやるか。
几帳 當てになつても當てにせぬ几帳に心を懸けるとは、
若しや緞子の。
(卜こなたを見て緞子大盡の三郎兵衛と顏を合せる、
几帳ハツと思入あつて氣色を變へ。)
庄三さん、さらばで御座んす。
(卜立ちかゝる。)
庄三 ア、モシもつとお話しが。
几帳 エ、聞く耳は持たぬぞえ。
庄三 そこをモ一度。
几帳 アレモウしつこい、置きなさんせ。
(卜抑へる裾を振拂つてツイと奥へはひる、庄三郎は
呆れたまゝ茫然と見送る、此途端三郎兵衛ツカ〱と
前へ出て。)

三郎 コリヤ庄三郎。
(卜扇子にて輕く肩を叩く。)
庄三 ヤ、殿樣で御座りましたか、そんなら今の有樣を。
三郎 オ、。
(卜點頭(うなづ)くを木の頭。)
庭でも一覽致さうか。
(卜此模樣宜しく道具ぶん廻す。)

同く 裏庭棧橋の場

舞臺正面風雅なる庭上より寮を見たる書割、前面には
四阿(あづまや)及び柳の立木あり、石垣、亂杭、渾布など宜しく
位置よき所に棧橋を見せ、この棧橋の下に苫舟一艘繋
いであり、都て墨田川に臨みたる寮の背後の體にて道
具留ると、以前の龜七棧橋の上に立ちかゝり船頭三次
艫の方にて莨(たばこ)をふかし居る。
三次 これぢやア爺さん、モウ出掛けても構はねえかね。
龜七 ム、いつでも漕出してくんな、おらア白子屋さんと
云ふ人に寮の引渡しを濟した上で、深川へ行く都合だか
ら一所に乘るにやア及ばねえ。
三次 さう極つたら、ちつとも早くもやひを解く事にしや
せうよ。
龜七 云ふまでもねえ事だが、氣を付けてくんなせえよ。

三次　ナニ案じなさる事アねえ、わつちが呑込んでゐやすのさ。

鶴七　そんなら三次頼んだぜ。

三次　おめえも用を仕舞つたら、早く彼方へお出でなせえ。

鶴七　イヤモウ用が多いので忙しくつてなりやアしねえ。

（ト捨臺詞よろしくあつて、鶴七は庭の奥へはひる、三次船縁にて吸殼をはたきながら。）

三次　日が傾いて來たせゐか、筑波おろしが身に沁みて、豪氣に寒くなつて來た、ドレそろ〳〵と出掛けようか。

（ト船のもやひを解かうとすると、下手袖垣の蔭より前の奴角内足早に出來り。）

角内　コリヤ〳〵船頭暫く待て。

三次　ナニ待て。待てと云ふなア誰だい。

（ト上を振仰ぐ。）

見馴れねえ奴さんだが、何んぞ用でもあるのかね。

角内　オ、今日から此家の主個になつた殿樣が舟を止めろと仰有るから、それで聲を懸けたのだ。

三次　ヘエさうで御座いますか、譯は何んだか知らねえが待てといふなら待ちませうよ。

（ト三次控へる、角内下手へ向ひ。）

角内　殿樣へ申上げます、仰せの通りアノ舟を止め置きまして御座りまする。

三郎　オ、。

（ト鷹揚に答へながら以前の緞子大盡、白子屋庄三郎を引連れて出來る。）

三次　殿樣が御用と云ふなアおめえさんで御座いますか、今出かゝつた所だから、お早くお願ひ申しまする。

三郎　イヤ左したる事でもない、追つゝけ申し聞かせるゆゑ、マア〳〵それに控へて居やれ。

三次　氣の長え事を仰しやいますが、わつちやアさうしては居られませんのさ。

三郎　ハテ好いからマア控へい。

三次　それだと云つてお前さん。

三郎　エ、控へて居れと申すに。

三次　ヘーイ。

（ト船頭はふくれる、三郎兵衞四邊を見廻し。）

三郎　コリヤ庄三郎、墨田川の風景はいつ見ても面白いのう。

庄三　御意の通りに御座りまする、このやうな風景を我物顏に取入れて奢りを盡した紀文の家もお手に入つたは何より仕合せ、今日から殿樣のお下屋敷に遊ばしてもコリヤ手入らずで御座りますな。

三郎　いかさま文左の好みも見え、普請も庭も行屆き能く出來ては居るやうぢやが、かくいふ身共の氣には適はぬ。

庄三　スリヤ是程の物數寄も、
角内　思召しには、
兩人　適ひませぬか。
三郎　オ、氣に入らぬ仔細があるゆゑ、その四阿に休息しながら一通り話すであらう。
（ト四阿に立入つて程よく住ふ。）
庄三　シテその仔細と仰しやりますは、
三郎　イヤ庄三郎、斯樣な譯ぢや。
（ト合方になり。）
二千石の旗本たる此貝賀三郎兵衞も廓では浮氣の綴子大盡、三浦の几帳を張合うて後れを取つた腹癒せに文左衞門の衰徴を附込み、彼が熱心致して居る此寮を買取つて見すぼらし氣に追出し憂目を見せたは當座の面當、そちまで同腹といふ事を後日になつて聞知らば一入無念に思ふであらう、其時の文左の吠面今も目先にあるやうで少しは溜飲が納つた、併し築山泉水も意趣ある奴の物數寄ゆゑ思ひの儘に擲返し模樣替へを致さねば下屋敷には相成らぬ。右の譯ゆゑそれがしの氣に適はぬと申したのぢや。
庄三　成程意氣づくのお話しなら御無理とは存じませぬが、餘り手強く遊ばしたら几帳さんの氣受までも惡くなりは致しませぬか。
三郎　それも先刻の容子では滅多に心は動くまい、人我れにつらければ我れまた人につらしとやら、大盡舞にうたはるゝ綴子の二字のあるうちは。
庄三　ソリヤ殿樣には、
庄角　左程まで、
三郎　戀の意趣を他人が知らうか。
（ト屹と云ふと兩人テレて默る、三次思入あつて）
三次　イヤモシ殿樣、先刻から聞いてゐりやアお前さんの方の勝手ばかり、そんな事アいつだつて話しが出來るぢやア御座いませんか、わつちやア紀文さんに雇れて荷物を運ぶ矢先だから用があるならあるやうに片を附けておくんなせえ。
三郎　オ、その用は外でもない、庭は心に適はずとも天地自然の風景は又格別な橋場の見晴し、春とは云へど夕暮は鴉の聲も浪音もどうやら哀れに聞ゆるゆゑ、その棧橋のあたりにも笘舟一艘繋いでなければ墨田川が繪にならぬ、殊には此家を追出されみじめな身分に相成つた紀文の荷物を積めば外の舟とは事變り寂びがあつて面白い、それぢやに依つてそれがしが景色を眺めてゐる間控へて居れと申したのぢや。
三次　何んだとえ、景色に寂びをつける爲め舟を止めたと云ふんだね、お旗本でも殿樣でも太平樂はよしなせえ、わつちも小舟乘の三次だよ、馬鹿にされて堪るもんか。

（トむつとして舟を出さうとする。）

三郎　コリヤ待て。

三次　エヽ箆棒めえ、待てるもんかい。

三郎　イヤサ船頭ナゼ待たぬ、此義も只今はそれがしの下屋敷、そちや何者に斷つて其所に舟を繋ぎをつた。

三次　エ。

三郎　逹て乘出す了簡なら持主へ挨拶致し、許しを受けた其上で勝手な方へ漕いで參れ。

三次　それをわつちが知るものか、理窟があるなら紀文さんに何んとでも云ふが好い、わつちの口からお前さんに挨拶するのはお門違ひだ。

三郎　いかにもそちは船頭ゆゑ知らぬと云へば知らぬでよいが其舟の笘の蔭には正しく人が居るではないか。

三次　ヤツ。

三郎　しかも得ならぬ名香の笘を漏れて薫ずるは心憎い致し方。ソレ角内、あの笘を引きのけい。

角内　ハツ。

（ト立ちかゝる。）

三次　ヤイ／＼奴ふざけるな、棧橋がそつちの物なら、此舟はこつちの物だ、指でも差すと承知しねえぞ。

角内　何を。

（ト奴方意氣込む、此途端笘の内より几帳簾をかける。）

几帳　モシ船頭さん、笘をあけておくんなんし。

三次　へイお前さんがさう云ふならイサもクソもありやアしねえ、何んだか面倒で仕樣がねえから顏を出しておくんなせえ。

（ト船頭笘を刎除けると、几帳船中に端坐し香爐に香を燻らして居る、三郎兵衞扨こそといふ思入にて。）

三郎　案に違はず几帳であつたか。

几帳　アイ綴子さん、お久振でありんすねえ。

三郎　如何にも久しく逢はなんだが、落目になつた男に添へば心配苦勞が絶えぬと見え、そちや面窶れを致したのう。

几帳　サア面窶れをする程の苦勞の中の樂みが戀の命ぢや御座んせぬか、笑うてつらい座敷でも粹の通らぬ人さんに泣いて嬉しい傾城の心が知れて好いものかいなア。

三郎　イヤ又してもその強情、そちの腹には相變らず惡い蟲が居ると見えるな。

几帳　わたしに惡い蟲があれば、綴子さんのお腹にも惡い蟲が御座んすぞえ。

三郎　何んと。

几帳　さればいなア、お聞きなんし。

（ト合方キツパリ。）

いかに意趣ある中とは云へ、名前を包んで寮を買取り後日にそれと覺らせて悔しがらせる積りとは男らしうも御座んせぬ、知らぬ事とて紀文さんが我身の仇の買主へ馳走心の一軸をお前は何んとお見なんした、その心根を察しもせずアノ泉水も築山も掘返すのが腹癒せぢやと舟の中のわたしにまで聞えよがしの當付けはあんまり意地の立てやうが穢なうは御座んせぬか。またそれに居る庄三さん、お前にもこの几帳はたんと言分が御座んすぞえ。

庄三　ナニわたしにも言分とは。

几帳　マア知ら〴〵しい顏はいなア、能うも〳〵大恩あるお主樣を袖にして緞子さんの襟に着き夫婦に恥をおかゝせなんした、屹とお禮を云ひますわいなア。

庄三　ア、イヤさう云ふ譯ではない、實はそのお出入り屋敷の。何もみな商賣づく。別段惡氣はないのだが。

（ト言ひ澱む、几帳これにかぶせて。）

几帳　イエ〳〵何んにも云はしやんすな、腹の黑いお二人さん、云ふ程の事が穢なうて聞けばわたしの耳が汚れ見れば此目も汚れるゆゑ、一炷き燻ゆる名香に此身を淨めて舟出の挨拶マアさう思うて下さんせ。

三郎　香まで焚いて今の懸體、それを此場の挨拶とは聞きごたへがあつて面白い、イザ此上は立歸つて文左めに申さうは緞子大盡意地づくにてさしも名高き此寮の模樣替へを致すゆゑ、一月二月(ひとつきふたつき)相經ちなば餘所ながら差覗き叽面かはきにうせるやうそちに言傳て致したぞよ。

几帳　ホンニ根強いお前の言葉、たとへ言傳てと云はしやんしても取次いで好い事と取次いでならぬ事がある。そりやモウわたしの勝手で御座んす。

三郎　イヤ〳〵是非とも申し傳へい。

几帳　ハテ云はうと云ふまいと几帳の口は几帳の自由、お前のお世話にやならぬわいなア。

角内　しぶとい女め、コリヤモウいつそ。

（ト立ちかゝり刀の柄に手をかける。）

几帳　奴さん、野暮ざんすよ、オホヽヽヽ。

角内　その舌の根を。

（ト意氣込むを三郎兵衛止め。）

三道　角内控へい。

角内　おやと申して。

三郎　ハテマア好いわ、捨置け〳〵。

角内　ネーイ。

（ト餘儀なく控へる、几帳皆々をさげすみたる思入宜しく。）

几帳　テモマア不粹な。

三郎　ム、。

几帳　サア船頭さん。

（ト香爐を置直すを木の頭。）
やつておくんなんし。
（ト佃樣の早めたる合方になり、三次早くもやひを解いて棹をおやつり舟を下手へ引く、三郎兵衞始め一同は四阿の下より忌々し氣に是を見送る、此仕組みにて。）

— 幕 —

二幕目

本材木町白子屋の場

舞臺上手に寄せて白子屋店の體、暖簾口の出はひり及び帳場格子諸國狀差などあり、正面より下手へ掛け材木置場の入口を設けその左右には繩からげの四分板其他諸種の材木を立並べ、都て本材木町材木問屋の構へよろしく流行唄にて幕明くと、番頭佐助帳場の內に控へ、同じく手代貞七、喜次郎、丁稚長松など程よく住ひ、上り框には前幕の奴角內腰をかけて居る。（時候は秋の末）

佐助　イヤモシ角內さん、每度御苦勞樣で御座りますな。

角內　ナニサ奉公の事だから別段苦にもならねえが、お店の主個の庄三どのとお屋敷の殿樣は餘ツぽど馬が合ふと見え能くお忍びでお出になるが、そんなに話しのあるものかと實ア不思議に思ふくらゐさ。

長松　そりやアその筈で御座います、貝賀の殿樣がお出になるといつでも御馳走がありますから、足が近いので御座いませうよ。

佐助　コレ〳〵失禮な事を云うてはならぬぞ。イヤ角內さん碁敵は憎さも憎し何とやらで殿樣と旦那とは丁度頃合ひのお相手だから、双方とも懷かしがつてこちらからも伺へば、そちらからもお忍びで繁々お立寄りになりますが、外と違つて碁打ちのお供は手間取れるから迷惑でせうな。

角內　へエ何んと云ひなさる、そんなら碁盤と首ツ引でツイ長ツちりになるのかね。いかさまなア、碁と云ふ奴に夢中になると親の死目にも逢はぬと云ふから、角內の欠伸位は先づお茶の子といふものだ。

貞七　實は內の旦那の方が大分上手と聞きましたが、そこを首尾よく瞞着して白を取つたり取られたり。

喜次　御機嫌取りが旨いだけに、稼業の方も拔目がなく、二三年の其間にメキ〳〵仕上げた此身代。

佐助　元の主人の紀文でも纔て一日置く程の大きなものになりませうよ。

角內　さう云へば紀の國屋も二代の文左で潰れたが、却て

番頭の庄三どのが此白子屋の見世を出して立派になつた所を見ると、天下は全く廻り持ちだテ。
長松　それも内の親指が番頭さんで居た頃に帳面尻をごまかして、お店の金をタンマリとくすねたからだと云ひますぜ。ネエ番頭さん、天下廻り持ちなら今度はお前さんの順番だね。
佐助　馬鹿を云へ、おれは正直一遍の白鼠だ。
長松　頭だけは黒いだらうね。
佐助　うぬ、もう吐濤しやアぶんなぐるぞ。
（ト算盤を振上げる。）
長松　ヤア御免なさい、桑原々々。
（ト袖を頭に冠つて隅に縮まる。）
角内　こいつは丁稚が大出來だ、番頭どんも一句もあるまいアハヽヽヽヽ。
皆々　アハヽヽヽヽ。
（ト一同笑ふ、是にて合方になり暖簾口より仲働きの女中お種出來り。）
お種　モシ旦那様のお供さん、お手間が取れます程にお前さんには御酒を上げろと、旦那様の吩咐ゆゑ奥へ通つて下さりませ。
角内　ナニ奴めに御酒を下さる、イヤそれは辱けない。
（ト云ひかけてお種と顔見合せ。）
ヤアそなたは誰袖どのぢやア御座らぬかの。
お種　ホンニ綴子さんのお供の時、お顔馴染の奴どの。
角内　變つた所で出逢つたが、以前は花の吉原で几帳太夫の振袖新造、華美（はで）な姿に引替へて思掛ねえこの形（なり）は。
お種　アイお恥しう御座んすわいな。
（ト差俯向く、佐助進み出で。）
佐助　ヘイ左様なら角内さんはこれとお近づきで御座りましたか、これはホンの新參でお種といふ仲働き。
貞七　まだ碌々に身の上を聞いた事も御座りませんが、その話しの樣子では。
喜交　近い頃まで丁に居た勤め上りの女とやら。
長松　こゝ一番聞きどこだい。
（トぐつと前へ出る。）
佐助　ヤイ〳〵長松、われはそつちへ引込んで居ろ。
長松　ダツテみんなも乘出す癖に。
佐助　エヽ子供の知つた事ではない。シテお種どんの、
皆々　身の上はな。
お種　サア先刻も奥の閑ひで綴子さんにお目に懸り、今またこゝで奴どのに顔を合せた上からは何も包みは致しませぬ、その頃は誰袖と申しまして三浦屋の几帳さんにつかはれてゐた振袖新造、能く〳〵深い御緣と見えて紀文さんが殊の外可愛がつて下さりましたが、おいらんを身

請の時この子も一所に落籍(つか)せてやらう、自體內氣な性れゆゑ色里に置くよりも堅氣にしたいと仰しやつて親許へお戻しなされた御恩の程は忘られず、身の落つきの出來るまで手堅いお家へ仕込んで曲輪の癖を抜きたさに一二軒ほど奉公した上、改めてこちら樣へ上つた譯で御座りまする。

角內　それで樣子が分つたが、几帳の身請のハケ序に堅氣の方が向くだらうと、一所に足を洗はせた紀文の目鏡(めがね)はどうだか知らぬが、年は若し標致はよし是からといふ稼ぎ盛りを町家に置くのは惜しいもんだ。

貞七　イヤ角內さんのお言葉だが、おたねどんを曲輪に置けば人の詠めになるばかり、お店者のわし等には滅多に口も利かれませぬ。

喜次　そこでこちらに居て貰ふと、いつでも顏は見放題。

長松　年は若し標致はよし、曲輪に置くのは惜しいもんだ。

佐助　又出しやばるか蒼蠅い小僧だ。サ角內さん、早くあちらへ。

角內　ドリヤ御馳走になるとしようか。

（ト立上る。）

お種　それではそちらの置場から、お庭先の切戶口へ廻つてお出でなさんせいな。

角內　へ、お廻はソなんしとは云はねえの。

お種　モウ其癖はおざりイせぬ。

長松　さういふ下からソリヤ出たわ、おざりイせぬとは有難いツ。

佐助　エ、騒々しい、餘計な口を叩かずと御案內でもするがいゝ。

長松　そんなら奴さん、かうお出なんし。

（ト惡身振をする。）

佐助　何をするのだ、きり〳〵行かぬか。

長松　アイー。

（ト長松禿の假聲にて先に立つ、角內跡に附きながら）

角內　イヤ氣の輕い小僧どんだ。

（ト捨臺詞あつて村木置場の入口へはひる、佐助思入あつて、）

佐助　イヤお種どん、お前が目見得に來た時から好い女だと思つて居たが、それでは廓に居なすつたのか、道理で垢抜けがしてゐるが此お店(たな)には若い者が多勢奉公してゐるから、嘸ぞ袖褄を引くだらうが番頭左助の目を盜んで內證話は禁物だよ。

お種　番頭さんとした事が、眞面目なお顏で阿呆らしい。

貞七　イヤ〳〵さういふ番頭さんが先づ第一に怪しいもんだ。

佐助　イ、ヤ手前達が危(あぶ)ないからおれが釘をさして置くの

だ。それはさうと此お店は材木問屋の事だから、日が暮れると表を締め帳合さへ濟して仕舞へば、跡は隨分暇があるから俺にはお種どんの曲輪話を是非とも聽聞したいものさ。
お種 アレそのやうなお話が、どうしてわたしに出來ませう、堪忍して下さんせ。
喜次 コリヤどうあつても聞きたいが、晩と云へばモウ飯時腹は北山になつたやうだ。
貞七 お膳の支度も出來た頃ゆゑ、一杯搔ッ込みに出掛けようか。
佐助 そんならおれも一所に行かう。コレお種どん、ちつとの間店を見てゐておくんなさい。
お種 アイ〳〵合點で御座んすわいな。
佐助 サア〳〵みんな來なさい〳〵。
（ト捨臺詞あつて皆々暖簾口へはひる。跡おたれ、ホット思入あつて、）
お種 御縁あつて白子屋さんに奉公住みはしたものゝ、旦那と云ふは其以前紀文さんの番頭で餘り良くないお方とやら、彼身上が見え透いて何處やらみだらなお內ゆゑ、こゝにも長くは居られまいホンニ思へば思ふ程浮世は辛氣なものぢやなア。
（ト火鉢の灰を搔均しながら思案に暮れる、是にて流行唄になり、向うより馬方土手の甚兵衛正直なる親父の拵へにて出來り、）
甚兵 アアモウこゝが白子屋さんだ、ちよつとお種に逢ひたくて山谷くんだりから出て來たが、何んとか首尾が出來れば好いが。
（ト店先へ進み寄り。）
オ、其所にゐるはお種ぢやアないか。
（ト聲をかける、思案中のお種急に振向き、）
お種 さういふお聲は阿父さんぢや御座んせぬか。
甚兵 オ、おれだ〳〵、甚兵衛だ。
（ト頰冠りの手拭を取りながら、）
手前もマアまめで好かつた、おれも體だけは丈夫だが貧乏暇なしで無沙汰をしたから、久振りで顏も見たしお店の樣子も聞いた上手前が落付く了簡なら米饅頭でも土産に持つて旦那樣やお內儀樣へ御挨拶に出ようと思つて、今日は內々逢ひに來たのだ、今度の御主人樣は定めて結構なお方であらうの。
お種 それが思ふやうに行かぬゆゑ今も今とてわたしの心配。オ、ホンニ今日は內證でお出でといふに此店先で話をしては人のおもはくも何んとやら。
甚兵 ム、違ひない、さうであつた、無事な顏見た嬉し紛れにコリヤ甚兵衛が大きなぬかりだ。

お種　そんなら材木の蔭へ行つて積る話をしようわいな。
甚兵　オヽそれがいゝ〳〵。
お種　サア〳〵阿父さん、かう御座んせ。
（トお種下駄を穿いて下手寄り材木の傍へ連行き、）
マアこの丸太へお掛けなさんせ。
（ト横に並べたる杉丸太の塵を手拭にて拂ふ。）
甚兵　それならちつと休まうか、ヤアどつこいしよ。
（ト腰を下し、）
ところで今度の御主人樣も思はしくない樣子だが、兎角これはと思ふやうな主取りの出來ぬと云ふは手前の運が惡いのだ。
お種　アイ全くで御座んすわいな、高い聲では云はれねど此白子屋の旦那と云ふは元紀文さんへ奉公中、筋の好くないお金を貯めお主の恩を仇にして俄かに仕上げた材木問屋、しかも紀文さんの身に取つては敵と云つても好いやうな殺子大盡に取入つて慾心ゆゑの追從たら〳〵、聞けば聞く程腹の立つ薄情者で御座んすぞえ。
甚兵　フム、そんなら白子屋も元は紀の國屋さんの奉公人か、おぬしの話の通りならこんな屋體骨をしてゐても、落目になつたお主樣をヨモヤ貢ぎはしをるまい、ヱヽ、業の煮える事だなア。
お種　マア〳〵靜かに話しなさんせ、人が聞いて惡いわいなア。
甚兵　サアそこに如才はねえが、どうも小癪に障つて來るとツイ聲が大きくなるのだ。サアおたね、おれが承知だから暇を取れ。
お種　ソリヤモウ長うは勤めぬわいな。
甚兵　さうだ〳〵構ふ事はねえ、いつ何時でも出て仕舞へ、親子二人が大恩受けた紀文樣に對しても、どうしてこゝにゐられるものか、思へば憎ツくい此白子屋。
お種　アモシ。
（ト制すると甚兵衛口を押へて四邊を見廻し、）
甚兵　ホイ又大きな聲になつた。
（ト頭を掻く、お種思入あつて、）
お種　それにつけても氣に懸るはおいらんのお身の上、紀文さんと御一所に深川八幡の一の鳥居に侘住居と云ふ事は風の便りに聞いてゐますが、お前その後の御樣子を聞合せて下さんしたか。
甚兵　オヽその事も話したさに今日はわざ〳〵尋ねて來たのだ。が併しおかはいさうで話しをするのも辛え位だ。
お種　そしてお二人さんの御樣子は。
甚兵　サアお種、聞いてくれ。
（ト合方になり、）
アノおいらんを身請の時おぬしまでも請出しておれに戻

して下されたお情深い旦那様も、お心柄とは云ひながら見る影もないおちぶれやう、贔屓の代にも困る程貧しい暮しの其中で几帳さんの永煩ひ、今ではモウ藥代にも行詰つてゐる樣子ゆゑ、神も佛もない事かと泣く〳〵歸つた其時の甚兵衞が胸の內コレ推量してくれるが好い。

（ト泣く、お種も淚を拂ひ。）

お種　スリヤおいらんはそのやうに煩うてゞ御座んすか、さうと知つたらお金を調へ御恩がへしをしたう御座んす。

甚兵　そりやア手前が云はずとも、疾うから承知してゐるが、何を云ふにもおれは馬方、アノ淺草の見附から大門口まで通つても並の駄賃の極りと云ふはタッタ百と三十三文、若し大盡に雇はれて白馬を飾り立て小室節を唄つても二百五十が關の山だ、乘せたお客は一晩に百兩もつかふであらうが、日本堤の露を踏んで馬を引ッ張る身分ぢやアどうにもかうにも足掻きがつかねえ。

お種　さう云へば此わたしも以前の勤めに引替へて今は堅氣の奉公人。

甚兵　受けた御恩を送るには丁度時節が來てゐても、

お種　儘にならぬはお金の才覺、

甚兵　むすめ、

お種　阿父さん、

甚兵　ア、情ない、

兩人　身の上ぢやなア。

（ト兩人愁ひのこなし、此時暖簾より長松顏だけを出し。）

長松　お種どん〳〵、お內儀さんがお召しなさるよ、お種どんお種どん。

（ト呼ぶ。）

お種　ハイ〳〵只今參ります、ちよッと待つて下さんせ。

長松　何んだ、そこにゐたのか、お內儀さんが御用だとよ。

（ト其儘顏を引ッ込める、お種捨臺詞宜しく思入あつて。）

お種　阿父さん、わたしは奧へ行つて御用を達して參りますが、まだ〳〵たんと話しがあるゆゑお前歸つて下さんすなえ。

甚兵　ム、歸るなと云へば歸るまいが、こゝで待つのも變なものだ。

お種　それには好い事が御座んすわいな、村木置場の內へはひると、人の目棲にかゝらないから彼所でゆるりと休みなさんせ。

甚兵　そんなら休みながら待つとしようか。

お種　どうぞさうして下さんせ。

（ト双方捨臺詞にて甚兵衞は村木置場の入口へはひ

る、お種はあとを見送りながら）

阿父さん、どうぞちつとの間待つてゐて下さんせ、そこには鋸屑が御座んすゆゑ其上なら坐つてゐても汚れることでは御座んせぬ、直きにわたしが來ますから待つてゐて下さんせ。ホンニおいらんの御病氣が早くお癒りなされば好いが、若しもの事のある時はわたしは實身の姉さんに別れるよりも悲しい身の上。イヤ／＼愚痴を云ふ內に又呼ばれては難かしからうドリヤ急いで奧の間へ。

（ト上框の方へ行きかゝると下駄の鼻緒切れる。）

エ、折も折、時も時、新しい横鼻緒の急に切れたはいやな辻占、ひよつとおいらんの死ぬといふ知らせではあるまいか、エ、モウこんな事を思出すと奧の御用も手につかぬ、ア、案じられた事ぢやなア。

（ト上框にトンと腰を下し鼻緒の切れた下駄を片手にさげたまゝポンヤリと案じ込む、時の鐘シンミリとした合方になり、向うより紀の國屋文左衞門小女郎手の編笠、肩入の着附、草履穿き見すぼらしき姿にて出來り、無言の儘笠に手をかけて白子屋の體を見やりはひりかねるこなしにて跡へ引ッ返し、又考へ直す思入あつて行きつ戻りつする、お種この樣子に心附き傍らの草履を穿直して平舞臺の前に出で不審の體にて編笠の內を見ようとする、文左衞門はこれを避けようとする事よろしくあつてトゞお種顏を差覗き、）

お種　ヤ、あなたは紀文樣ぢや御座んせぬか。

文左　さう云ふそなたは。

お種　ハイ誰袖で御座んすわいな。

文左　オ、ホンニさうであつた、餘り姿が變つた上こちらも顏を背けたゆゑツイ心が附かなんだが、今では何處に居やるのぢや。

お種　ハイ此程から白子屋さんへ奉公致して居ります。

文左　スリヤ白子屋へ奉公とな、それは愈々不思議の奇緣、わしも庄三に用事があつて尋ねては來たものゝ何んとやら四邊が見られ、賴みませうとも言兼ねてツイうじ／＼として居たが、そなたに逢うたは丁度幸ひ文左衞門の來た事を鳥渡取次いでくれまいか。

お種　取次ぐだんでは御座りませぬが、マアそれよりもあなたには種々とお話しが。

文左　イヤ／＼それはゆるりと聞かう、わしの方にも話しがあれど。マア／＼庄三に對面して用事の濟んだ上の事、兎にも角にも取次ぎを。

お種　ソリヤ呑込んで居りますが聞きしに違はぬ此お姿。

文左　エ。

お種　ドレお取次を致しませう。

文左　そんなら誰袖賴みましたぞ。

お種　畏りまして御座りまする。

（ト文左の姿を見遣り、ちよつと涙ぐむこなしあつて暖簾口へはひる、文左あとに殘り店構へを見廻しながら。）

文左　元主從の間ゆゑわしの方から尋ねたは今日始めての事なれば店を見るのも始めてぢやが、聞きしに増る大家の構へまことに人の浮沈みは掌裏反すやうなものア、世の中は。

（ト石に躓いてよろ／＼となり傍への材木に寄りかゝりながら。）

夢ぢや／＼。

（ト其儘材木に身を持たせ懷手をしたる儘首を垂れてシヨンボリと立つて居る、こゝへ長松を先に貞七、喜次郎其他若い者二三人暖簾口よりひそ／＼と立出で、文左を怪しむ體にて目引き袖引きさゝやきながら銘々締木棒切などを手にして平舞臺へ下り立ち。）

長松　ヤイ／＼うぬア何奴だ。

貞七　下駄泥坊か、ちよツくら持ちか、明巣狙ひか、晝鳶か。

喜次　お店に人が居ねえと思つて、野暮な眞似をしやアがつたら、

貞七　たゞその分にやア、

皆々　置かねえぞ。

（トいづれも締木、棒切にて地びたを叩く、文左以前の態度を少しも崩さず、沈着きたる樣子にて笠を脱ぎながら。）

文左　ア、コレ騷がしい、わしは庄三に用があつて、わざ／＼こゝへ來た者ぢや。

貞七　ナニ庄三に用がある。庄三といふのは何處の誰だ。

文左　ハテお前方が怪しからぬ、現在自分の主人の名を忘れて濟むと思ひなさるか。

喜次　そんなら庄三と云つたのは、

文左　オ、白子屋の庄三郎ぢや。

貞七　ヤイ／＼／＼橫風な口を利きやアがるな、吹けば飛ぶやうな形をして白子屋の庄三郎も凄まじい。

喜次　憚りながら内の旦那をうぬらのやうな野郎から呼捨てにされて堪るものか。

長松　下駄泥坊だと見られたからお店の名前を勘付いてさうぬかすのはテレ隱し、

若一　ふざけた事を云はうより、

若二　まだ足許の明るいうち、

若三　サア何處へでも、

皆々　行つて仕舞へ。

（ト又もや地びたを叩く。）

文左　ハテ白子屋の庄三郎と呼捨てにしても好い程の身分柄があればこそ庄三郎と云うたが惡いか。
貞七　まだあんな事を云やアがる、構はないから撲つて仕舞へ。
皆々　合點だ。
（ト勢ひ込んで立ちかゝると材木置場より甚兵衞一散に駈出でゝ、皆々を突除け刎除けながら文左をうしろに圍ひ、）
甚兵　ヤイこいつらア途方もねえ、滅多な事をしやアがると此おやぢが許さねえぞ。
（ト屹となる。）
長松　ヤア下駄泥坊の加勢が出た、
貞七　一體うぬア、
皆々　何者だ。
（ト意氣込む。）
甚兵　オ、おれは此旦那に御恩を受けた土手の馬方、娘に逢ひてえ用があつて折よくこゝへ來合せたお種の親の甚兵衞だ。
文左　ホンニお前は甚兵衞どの變つた所で逢ひましたが、靜かに云うても分る事を年寄の身であぶないあぶない。
甚兵　ナニお前さん、こいつらが靜かに話しをつけたつて分るもんぢやア御座りませぬ、話しの分る面付はモツト氣が利いて居りますのさ。
貞七　ヤアぢゞい奴がこつちの事をよくも叩き下したな、
喜次　憎まれ口を利く上はそウ了簡が、
皆々　ならねえぞ。
甚兵　オ、了簡が出來なけりやアおれ達をどうするつもりだ。
貞七　うぬはもとよりそつちの野郎も袋叩きにしてやるのだ。
甚兵　ム、面白れえサア叩け。
（ト其儘大地に胡坐を掻き、）
おれはしがねえ馬方でも正直律儀の名を取つて仲間に知られた土手の甚兵衞、うぬらのやうに主を見習ひ根性骨の曲つた奴が締木の先を一寸でも此五體に當てたなら天道樣が許さねえぞ、縱しんばそれは濟むにもしろそこにお出での旦那樣に塵一つでも掛けた日にやア罰が當るからさう思へ。
皆々　何うしたと。
甚兵　全體うぬらア此旦那を何處のどなたと思つてゐるのだ。
貞七　何處のどなたもあるものか。
長松　下駄泥坊だと、
皆々　思つてゐるんだ。

甚兵　エヽ情ねえ事を云つてくれるな、時世時節でこのやうなお身形はなすつても三ケの津に隱れのねえ日本一の大盡長者、手前達の身に取つてもお主筋の紀文樣だぞ。
皆々　ヤア。
甚兵　それを怪しい者かと思つて棒三昧とは太え奴等だ、濟ねえ事だと氣がついたら、どいつもこいつも土下座をしろえ。
皆々　ヤア。
甚兵　サア棒切を捨てねえか。
皆々　ムツ。
（ト不承々々に棒や締木を捨てる。）
甚兵　ヤイ鉢卷を取つて仕舞へ。
（ト是にて皆々殘念な見合せながら鉢卷を取り端折つた尻をおろす。）
サア此上はこゝの亭主に羽織袴で迎ひに出るやう、手前達から吩咐けろ。
貞七　マサカどうもそんな事は。
甚兵　ナヽ出來なけりやア儘にしろ。イヤモシ旦那樣、なんの御用でこんな內へお出になつたか知りませぬが、畜生のやうな奴等ばかり寄集つて居りますから此儘お歸りになつた方が、却てお爲めで御座ります、どうかさうなすつて下さりませ。

文左　サアさうでもあらうが此儘わしが歸つては當にしてゐる無心の金が。
甚兵　エ。
文左　イヤナニ蟲の居どこの惡い爲め、かうなつたのも當然の間違ひ、實は庄三に談合せねば辨じ兼ねる內用ゆゑ、是非とも逢はねばなりませぬ、お前も年寄りの一徹で腹の立つのは尤もぢやが、此人達の不作法はわしも了簡しますからお前も堪忍するがよい。
甚兵　それもさうでは御座りませうが、こゝの亭主の事に付いては此甚兵衞も內々で聞込んだ事が御座ります、どうして／＼旦那樣の相談對手になるやうな賴母しい人ぢやア御座りませぬ、なまなかの事を言出してお口に風を引かせぬうちどうぞお歸り下さりませ。
文左　デモ庄三に唯一言。
（ト前の方に立出るを入替つて押止め）
甚兵　ハテ惡い事は申しませぬ。
（ト屹と云ふ、此途端暖簾口の內にて）
庄三　アイヤお待ち下さりませ、白子屋の亭主庄三郎只今お出迎ひ申しまする。
（ト庄三郎靜かに二重へ立出で、）
これは／＼紀の國屋の旦那樣で御座りまするか、能うこそお越し下されました。

（ト丁寧に辭儀をする。）
文左　オヽ庄三、その後は久しう逢ひませぬがいつも堅固でめでたいのう。
庄三　お前樣も御息災でおめでたう存じまする。イヤナニそちらの親父どの、お種の父ッさんとはこなたかの。
甚兵　ハイ土手の甚兵衞といふ馬方親父で御座いますよ。
（トつんとして答へる。）
庄三　如何さま律儀さうな親父どの、今も樣子は聞きましたが店の者の不作法を能うこそ叱つて下さつた、改めて禮を云ひます。コレ貞七、喜次郎、長松、お前方はどうしたものだ、以來は屹と嗜みませうぞ。
皆々　へーイ。
（トしよげる。）
庄三　サア旦那樣お構ひなくお通りなされて下さりませ、只今お種の取次ぎでお出の事を存じたゆゑ、急いで是へ參つて見れば思懸けない大きな騷動、行違ひとは申しながら濟まぬ事で御座りました。サア／＼若い者一同もお座敷までお附き申してみんな揃つてお詫びをしなさい。
貞七　ヘイ／＼畏まりまして、
皆々　御座りまする。
庄三　さて甚兵衞どのとやら、お前にも改めてお近附きになりたいからモット歸らずに居て下さい、直ぐにお種をこゝへよこし御案内をさせますゆゑ勝手へ廻つてゆつくりと。
甚兵　成程表面はやさしいものだ。
庄三　エ。
甚兵　イエナニこつちの事さ。
庄三　そんなら紀文の旦那樣。
文左　ドレ造作になりませうか。
庄三　サア斯うお越しなさりませ。
（ト合方になり、文左二重へ上ると庄三郎案内をなし、若い者皆々あとについて奧へ入る、甚兵衞これを見送り）
甚兵　アノ亭主めが猫撫聲、おらア蟲唾が走るやうだ。
（ト癪に障る思入、此時材木置場よりお種出來りて傍へ寄り）
お種　モシ阿父さん。
（ト脊中を叩く。）
甚兵　エヽ、お種か、吃驚りするわい。
お種　お前に逢はうと來かゝつて樣子は殘らず聞きましたが、紀文さんの御用といふはいづれ無心で御座んせう、シタが對手が對手ゆゑ聞入れようとは思はれず。
甚兵　さうなる時は旦那樣も御病人のおいらんも嘸々以て御難澁。

お種　そのお貢ぎの才覺にはわたしが又も吉原へ。阿父さん耳をお貸しなさんせ。

（ト耳許へ口を差寄せる。）

甚兵　エヽ捺ぐつてえ。

（ト飛退くを道具替りの知らせ、）

サアお種、なんの用だ。

（ト耳の穴をほぢくりながら身を寄せる、お種さゝやく、此件宜しく舞臺廻る。）

同く　奥座敷　宴の場

舞臺常足の二重、上手寄りに床の間あり、襖其他とも美麗を盡し贅澤なる出道具を並べる事、平舞臺上手は袖垣等見燈籠に紅葉の立木、下草には萩、小菊などをあしらふ、下手枝折戸、四ツ目垣などよろしく都て白子屋奥座敷の體、こゝに燭臺を置き文左衛門袴に坐り庄三郎、同じく妻お常並に女中二三人控へ、前には馳走の酒肴あり、道具止まると庄三郎の娘お熊扇を開き踊りを踊つてゐる。

唄へ上手の道芝夜露に鳴いて。人を松蟲轡蟲。馬に召せ／＼白馬の。耳に念佛叩き鉦。その道哲を跡にして。よしなの思ひ一筋に。われも戀路の徒はだし。さんさ月夜の徒はだし。こゝは木幡にあらねども。君を思へばのう手編笠。さして行手が急がるゝ。中々今はなか／＼に。

（ト小唄宜しくあつて振納まる。）

文左　さて／＼面白い事であつたが、そなたの名前は何と云ひます。

くま　アイお熊と申しまする。

文左　イヤ色白でよいお子ぢやが合點の行かぬ事がある。コレ庄三どん異な事を聞くやうなれどお前が紀の國屋を出た後にお內儀さんを呼び迎へ、それから出來た娘にしては年配が釣合はぬ、こりや貰ひ子と云ふ譯かの。

庄三　お目立ちました上からは何も包みは致しませぬ、まだ御奉公を致した時分、こゝにゐる女房お常を新道に圍ひまして此お熊を擧げましたが、當所に店を持ちまして親子二人を引取るまでは內證の事で御座りますゆゑ、その御不審は御尤もイヤハヤお恥かしう存じまする。

文左　成程お前の働きではその位の事もなくては叶はぬ、道樂者の文左衛門も是には殆ど閉口しました。

庄三　面目次第も御座りませぬ。

お常　ホンニ私も其頃は日蔭の身分で御座りますゆゑお目通りも叶ひませず飛んだ失禮を致しましたが、今宵は斯樣に打解けたおめでたい座敷ゆゑ、差合ひ繰らぬ娘の遊藝必ずお笑ひ下さりますな、サア／＼何んにも御座りま

せねどモツトお過し下さりませ。
文左　イヤ〳〵最前から馳走になつてわしは大きに喰べ醉ひました、モウ〳〵さうは飲めませぬ。
庄三　いかさまあんまりお強ひ申して、御氣分でもお惡くなつたら却て御無禮と申すもの、丁度御機嫌の好いところで御用の筋を伺んなりと。
文左　オヽその話しが何より肝腎、それに付いては氣の毒ながら少しの間人拂ひを。
庄三　ヘイ〳〵承知致しました、今日は朝から幾遍も鳥影のさしたせゐか、あちらの部屋にもお客來、お種にお取持をさせてあれど召使ひでは心許ない、お常もお態も御免を蒙りお話し相手に行くが好い。
お常　そんなら紀文の旦那様、暫時御用捨下さりませ。
文左　その斟酌には及びませぬ。
お常　勝手の様には御座りますれどわざと御遠慮申しまする。コレ〳〵お態そなたも共に。
くま　アイ〳〵。
お常　女子達も一所に來や。
女一　お附き申すで、
皆々　御座りませう。
（ト此人々いづれも奥へはひる、庄三郎思入あつて）
庄三　サア〳〵邪魔は拂ひました、御用の筋を一通りお聞かせなされて下さりませ。
文左　そんなら話しをしませうが、此春お前のお世話にて橋場の寮を賣つた後、薄々聞けば買主はわしに楯突く人とやら取戻さうとは思つても、モウその金に手をつけて下女はしたにも遣つたゆゑ、ツイ其儘の泣寢入、それに付いては庄三どんに言分がないでもないが、此身の因果と諦めて愚痴な事は云ひますまい、その代りには今度の頼みを聞いて貰はにやなりませぬ。
庄三　シテお頼みと仰しやりますは。
文左　サア庄三どん、かういふ譯ぢや。
（ト合方になり）
その後わしは深川で小家同然の侘住居、坐して食へば何やらと世の俚諺にも云ふ通り、日に増し不如意になる中で、几帳の病氣何や彼や搗てゝ加へて物入續き、紅葉の色の染まる頃肌寒さうな形りをしてこゝに尋ねて來る程に落ぶれ果てた文左衛門、言惱い事を云はさずとも賢いお前の事ぢやもの一目見たら分つてゐように。
（ト丸火鉢の縁を撫廻しながら術なげに云ふ。）
庄三　成程大概分りました、世の成行とは申しながら大身代の旦那様が元の家來に御無心とはお情ないぢや御座りませぬか、味なところで庄三郎が御異見では御座りませぬがお前様は僅かの間に百萬兩をおつかひなされて、何

がお身に附きましたかそれが聞きたう御座りまする。

文左　さう生眞面目に聞かれてはどうやら返事も出來惡いが、先づ其角の弟子になつて俳諧を覺えました、俳名を千山と云うて少しばかりは遣りまする、それから廓の居續けに几帳から習ひ覺えた小唄の數が二つ三つ、戀慕のかはり細り盡し夢の通路ひらくづし、マア其の外の物と云へば酒が強うなつた位ぢやハヽヽヽ。

庄三　ソレ御覽じませ、そんな他愛のない事が百萬兩の値ひとは高いものぢや御座りませぬか、そのお心の直らぬうちはいくらお貢ぎ申しても燒石に水で御座りまする。

文左　そんなら無心は聞かれませぬか。

庄三　イヤ左樣では御座りませぬ、以前の御恩がある事ゆゑ御合力は致しませうが、今度は御商賣にありつくやうに願つて置くので御座りまする。コレ〳〵手代共はそこらにゐぬか、用意の品を早く〳〵。

（ト聲をかける、襖の蔭にて）

手代　ハイ〳〵畏りました。

（ト手代兩人千兩箱を持來り、程よき所に置く、庄三郎は顋にて行け〳〵と指圖する、兩人其儘はひる。）

庄三　さて旦那樣、先刻お出での時分から大抵斯樣の事であらうと、失禮ながらお察し申して取出し置いた此一箱、御用に立てゝ下さりませ。

文左　それは千萬辱けない、まだ甚兵衞がこゝにゐるなら深川まで運ぶやうにわしが直き〳〵頼みませう。

（ト立ちかゝる。）

庄三　ア、イヤお待ち下さりませ、金子をお持ちにならぬうちチツト望みが御座りまする。

文左　ナニこのわしへ望みとな。ム、一札でも書けと云ふのか。

（トむツとしたる思入。）

庄三　イヤお貢ぎの此金子に證文はいりませぬ、が只今も申した通り大金の此千兩御用立て申すからは、御改心の印として几帳と別れて下さりませ。

文左　何と云やる。

庄三　サアお前樣の體には几帳と申す魔がさして、永い間の御不行跡、親旦那樣に對しても御不孝になります故是を汐に緣を切り、どんなところへ片附いてもモウ言分はないと云ふ男らしい御誓言を承はりたう御座りまする。

文左　折角なれどソリヤ成らぬ。

庄三　成らねば金子は用立てませぬぞ。

文左　オ、貧苦には迫つても紀の國屋文左衞門、さやうな金には用はないわい。

庄三　スリヤ御無心をなされて置いて。

文左　コリヤ庄三郎能う聞けよ。

（ト合方キッパリとなり、）

たとひ路頭に迷うても屈託をせぬ文左なれど、几帳の病氣が苦になつて目下の者へ無心合力、切れて仕舞へと云ふ口でナゼ薬代の足しにもと情らしう云うてくれぬ、二十兩や三十兩でも志しの貢ぎなら快く納めもするが、千兩ばかりの端下金を枷につかッて大金呼はり是が欲しくばサッパリと夫婦別れをしろと云ふ心の底が淺猿しい、縱し千兩が大金でも几帳の爲めにならぬとあれば石ぢや瓦ぢや用は御座らぬ。

庄三　左様ならお前様は几帳の事を左程まで。

文左　オヽ思はいで何んとせう、見合ひばかりで祝言した初々しい夫婦でも馴染むに連れて情が出る、況して几帳は勤めの身の上引手も多い中ながら初の御見の其の夜から次第に心を知り合うて身請までした夫婦中、金銭づくでは儘ならぬ女郎の誠と云ふものを百萬兩で買うたのは二代の紀文が大きな商賣、その頃わしと張合うた不粹者の大盡やお前方には分らぬ事ぢや。

（ト屹と云ふ、此時襖の内にて、）

お常　アレマアお待ちなされませ。

三郎　イヽヤ止めるな、對面致すぞ。

女中　マア〳〵殿様、お待ち遊ばせ。

三郎　エヽうるさい、止めるな〳〵。

（ト人聲騷がしく聞える。）

文左　ヤ、けたゝましいアノ聲は。

三郎　オヽ不粹者の三郎兵衞ぢや。

（トつか〳〵と出て立身の儘屹となる、お常と女中あとに付いて居流れる。）

文左　さういふこなたは緞子大盡、

三郎　一別以來の紀の國文左、

文左　變つたところで、

三郎　變つた對面、

文左　ヤこれはしたり。マヽお下に御座りませ。

（ト氣味合ひよろしくある、是にて三郎兵衞思入あつて座につき、）

三郎　コリヤ文左衞門、只今も承まはれば不粹者の大盡には分らぬ事ぢやと戀の講釋、近頃以て聞苦しい、猶此上とも口に任せ當付けがましい事を申さば刀の手前打捨て置かぬぞ。

文左　ソレ〳〵それが不粹と云ふもの。當付けならばこなたこそ橋場の寮の意趣晴し、まだ其上に意地を張り几帳とわしの戀中を裂かうとするも正しく差金。

三郎　ム、差金なら何んと致す。

文左　イヤ何んとも致すまい、唯いつまでも睦しく添うて暮すがこつちの本望、それを飽くまで根に以つて法界悋

氣をさつしやるを吉原では野暮と云ひ浪花ではぐれちと云ふ、他國の事は知らねども柴屋町でも木辻でも室、下の關、長崎でも横紙破りの行方を褒める所はよもあるまい、こなたも心を入れ替へて粹になる氣は御座らぬか。

三郎　返す〴〵も不屆千萬。モウ此上は。

（ト刀を拔きかける。）

庄三　ア、モシ殿樣、暫くお待ち下さりませ、こゝで若しもの事があれば此白子屋が大きな迷惑。

お常　お腹の立つはお道理ながら、此場の事は幾重にも。

三郎　勘辨し惡い奴なれど、夫婦の者の言葉に免じ、今日のところは許してくれる、サアきり〳〵と立去りをらう。

文左　オヽ立去れと云はずともモウ用のない此白子屋、いつまでこゝに居りませうぞ。

庄三　成程それが何より肝腎、そこに草履がありますゆゑ此庭口から早く〳〵。

文左　イヤ〳〵今の云ひじらけで飲んだ酒は理に落ちてもどうやらあぶない千鳥足、急いでは歸るまい、靜かに參るおさらば〳〵。

（ト冷笑の口調にて立上ると足許定まり兼ねて、三郎兵衛の方へ蹌けかゝり其儘踏留めて立身になる、三郎兵衛は刀を突いて屹となり、双方氣味合ひの見得、此途端誰袖のお種バタバタと走り出て、）

お種　モシ紀文の旦那樣、ちよいと待つて下さんせ。

文左　オヽ誰袖、何んぞ用事か。

お種　お聞き申せばおいらんが御病氣でお出でとやら、心ばかりのお見舞ひにこれを上げて下さりませ。

（ト小さき紫の包みを出す。）

文左　シテ此品を見舞ひとは。

お種　サア是は日頃から此誰袖が信心する妙見樣のお守りゆゑ、早くおあんばいが癒るやうおいらんのお枕許へどうぞ供へて下さんせ。

文左　スリヤ有難いお守を。

（トホロリとなり。）

辱けない志し、誰袖禮を云ひますぞや。

お種　エヽお嬉しう御座りまする。

（トお守を渡しながら双方愁ひの思入。）

庄三　ハテ見舞ひとやら何とやらお種が餘計な義理立に長居をなさればなさるほど、

お常　あなたのお爲めに、

兩人　なりませぬぞ。

文左　成程直に立歸り、此お守を病人の枕許へ供へませうか。

（ト懷に納めながら緣側へ立出でゝ、再び蹌け片足踏外してトンと下に居る。）

お種　アレお危なう御座んすわいなア。

文左　サア危ないのも無理はない、人の情の嬉しさに沈んだ醉ひが一時に發し目はチラ〳〵としてゐても氣の引立つた文左衛門、家庫地面を手放しても何んの貧乏しませうぞ。千萬兩にも替へ難い此誰袖の心地をこゝに納めて居るからは、内懐が温かく以前に變らぬ紀文大盡。

（ト緣に腰掛けたるまゝ三郎兵衛に當てゝ云ふ。）

三郎　ヤアさま〳〵のよまひ言聞いてゐるさへ片腹痛いわ。コリヤ角内はいづれに居る、ちツとも早く是へ參れ。

角内　ネーイ。

（ト以前の奴上手より急ぎ出來る。）

三郎　オヽ角内、そやつめを引立てゝ垣根の外へほふり出せ。

角内　心得ました。

（ト文左を平舞臺へ引下すと文左これを突廻してちよツと支へ。）

文左　コレ奴どのお騷ぎあるな、機嫌よう歸る者を引立てるには及ばぬ〳〵。

三郎　イヤ又しても減らず口、大枚千兩を振捨てゝ反古に等しき守りを貰ひ、猶負惜しみをぬかすとは引かれ者の小唄も同然、それでもおのれは機嫌が好いか。

文左　好いとも〳〵極上機嫌、義理と情の福運を身に授かつた喜びに踊つて歸る大盡舞、唄の唱歌も何とやら。オオそれ〳〵、そも〳〵お客の始まりは、

（ト白扇を開いて振りになる。）

唄へ高麗唐土は存ぜねど。今日の本に隱れなき。紀の國文左にとゞめたり。

（ト極る、角内つツと寄り。）

角内　トコロな奴が。

（ト大手を擴げて抱いてかゝるを文左掻拔けながら奴をカラミにつかうて踊る。）

唄へ緞子大盡張合ひに。三浦の几帳を身受けする。緞子三本、紅絹五疋。綿の代まで相添へて、揚屋牛四に贈らるゝ。二枚五兩の小脇差。今に牛四がかたから物。ハアホヽ大盡舞を見さいな。

（ト此間三郎兵衛無念の思入あつて。）

三郎　角内、ソレ。

角内　うぬ。

（ト再びかゝるを振放すと奴はドウと尻餅をつく。）

唄へ春は曙。初買に。寄せて曲輪のどんどめく。何れどんどや鷺の首。格子々々をぞめかれて、散茶むめ茶も賑やかに。もんし〳〵と呼子鳥。たつきも知らぬ山口や。さても三浦の大銅壺。フツ込むちゐりの上林。

（ト早間になつて文左踊りながら、だん／＼枝折戸の外へ出る。角兵衛呆れてゐる、二重の皆々はそれ／＼の思入にてぞツと見送り居る、此もやうよろしく木無しにて。）

——幕——

大詰　深川侘住居の場

常足の二重こけら葺板庇竹の濡緣附、正面鼠壁暖簾口、上手切張りだらけの障子屋體、平舞臺の上手には蔦紅葉の搦みたる立木あり、いつもの所竹の折戸編殼のつきたる鹿朶垣、此外は河岸を隔てたる町家の遠見、都て深川八幡一の鳥居に程近き紀文侘住居の體、賑やかな鳴物にて幕開くと子守娘、男の子など多勢打群れ折戸の外にて遊んで居る。

子皆々　開いた／＼なんの花開いた、げんげの花開いた、開いたと思つたらやツとこさとつぼんだ。

（ト大きな聲にてワイ／＼と騒ぐ、暖簾口より前幕の龜七おやぢ立出て直ぐに穿物を穿いて、折戸の傍へ來り。）

龜七　コレ／＼子供達靜かにしねえか、逆せ上つてしまふやうだ。騒ぐなら遠くの方でいくらでも騒ぐがいゝ、サア行つてくれ／＼。

子一　ナニコ、だツて往來だから好いぢやアねえか。サアサアみんな今度は鬼ごツこをして遊ばねえか。

子二　ム、それがいゝ／＼。

子三　サアじやん拳で鬼を極めようぜ。

皆々　シツ／＼／＼シツ／＼／＼。

（ト又々騒ぐ。）

龜七　エ、餓鬼めらアなぜ云ふ事を聞かねえのだ、内には御病人があるんだぞ。

子一　ヤアあんな事を云つてゐらア。内には御病人があるんだぞ。

（ト口眞似。）

龜七　イヤハヤ忌々しい惡太郎だ。サアお袋に云ッつけるから伯父さんと一所に歩べ。

子一　ソラ怒つたぞ、逃げろ／＼。

皆々　ワーイ／＼。

（ト囃しながら子供一同逃げて行く。）

龜七　チヨツこいらは子供まで風が悪くてどうもならねえ、今度またうせ居つたら、どうするか覺えて居ろ。

（ト口叱言を云ひながら二重へ上つて其儘暖簾口より奥を差覗き。）

モシ／＼誰袖さん、お前もお手すきになつたら、お茶で

も一つ上らないかね。
（ト聲を掛ける、奥にて誰袖のおたね。）
お種　アイ〳〵只今そこへ行きますわいな。
（ト白地手拭の姉さんかぶりに赤色の片襷、手に糊刷毛と糊の入りたるお盆を持て出來り。）
サア〳〵爺イやさん、お障子の切張は殘らず出來て仕舞うたぞえ。
（ト座につく、龜七古火鉢の澁茶を入れながら。）
龜七　いろ〳〵お世話で御座いました、お前さんも御存じの通り旦那様はおちぶれても箸より外何一つ重い物はお持ちなさらず、また御新造様は長煩ひ、いくら爺やがあくせくしても手の廻らねえ所からほッたらかして置いたのだが、今日お前さんが來てくれたので大助かりと云ふものだ。サア澁茶だが上つて下さい。
（ト茶を出す、おたね手拭ひを取りながら。）
お種　これは御造作になりますわいな。爺やさんいたゞきます。
（ト茶を呑む事あつて。）
わたしも疾うから伺ひたいと思はぬでは御座んせぬが手前にかまけてツイ〳〵御不沙汰、今日といふ今日やッとの事で上る事が出來たゆゑ、序にお障子を繕つたも寒さに向ふ時節を案じて御看病の心ぢやわいなア。

龜七　イヤモウ世間は廣いけれど深切にして下さるのは、お前さんタッタ一人だ、御病氣見舞に來たばかりでお藥を煎じるやら障子の破れを繕ふやら、是でも色里で生立つた振袖新造かと考へると、おらア涙が溢れるのさ。
（トうろみ聲になる。）
お種　ホンニ丁には向かないわたし、素人が水に合つて世帶染みたで御座んせうねエオホヽヽヽ。
龜七　さう云へばお前さんも主人持だといふ事だ、人の内の手助けをして油を賣つちやア惡くはないかね。
お種　イエ〳〵今までの奉公先はモウお暇をいたゞいて外へ住込む都合ゆゑ、何んの半日や一日は誰に遠慮も御座んせぬ、必ず案じて下さんすな。
龜七　さういふ譯ならゆつくりと遊んでゐておくんなせえ、御新造様も久振りでお前さんに逢つたので御氣分がいゝと見え、スヤ〳〵お寢つた樣子だから、おらアお醫者様のところまでお藥取りに行つて來ようよ。
お種　アイ日暮までは居りますゆゑ、どうぞさうして下さんせ、ホンニお醫者様と云へばお見立はどうで御座んす、氣遣ひのない病ぢやと仰しやつてゞ御座んすかえ。
龜七　それがどうもいけねえのだ、コレ誰袖さんお病人のお耳にやアこれンばかりも入れられねえが、かういふ譯だ、聞かッしやい。

（ト障子屋體の内へ思入あつて、）

朴庵様も巧者な醫者だがとうに匙を投げて居るし、旦那様も心配して富ヶ岡へ日參したり占ひを見て貰つたり並大抵の事ぢやアねえのさ、それでも御新造様は勝氣だからドッと床に就くでもなく、折々起きてお出でなさるが實を云ふと此程から二三度も血を吐いたので、目に立つ程のお窶れが旦那様やおれには能く分る、誠にいやな話だがどんなに骨を折つたつて此方のものぢやアあるめえよ。

（トぢつとこなし。）

お種　エヽ何んと云はしやんす、そんならアノお醫者様も見放してお出でかえ。

龜七　そこが病氣の事だから藥を盛つたなら、見直す事もあらうかと力を付けちやア下さるけれど。

お種　僞にならぬとは云はしやんすか。

龜七　今の旦那の御身分でどうする事も出來やアしねえ。ドリヤ張合のねえお灸でも加減をして貰つて來ようよ。

お種　マアそんな事を云はうよりちッとも早う行つてござんせ。

龜七　さう云ふ内には旦那様もお歸りにならうから、何分ともに頼みます。

お種　アイ呑込んで居るわいな。

龜七　ヂヤア一走り行つて來ますぜ。

（ト龜七力なき體にて下手へはひる、お種も捨臺詞にて見送り折戸に手をかけ思入宜しくある、是にて床の淨るりになる。）

淨へ跡にはひとり誰袖が。思案に暮るゝ夕風の。身にしみ〴〵とかこち言。

お種　悲しい話を聞くにつけ御恩報じは今此時、三浦屋さんに談合して再び元の吉原へ身を賣る事にはなつたものの、打明けたなら御夫婦ともヨモ御承知はあるまいと御病氣見舞に假托けてそつとお金を置くやうに親子ふたりの言合せ、若し泣顔を見付けられ覺られてはならぬゆゑ、ヂッと辛抱して居れど永の別れの切なさにわたしや涙が先立つわいなア。

淨へ歎きに沈むこなたには。力も弱き咳の聲。

（ト障子屋體の内にて咳の聲聞える、お種是にて氣を替へ。）

お種　オヽおいらん。イエナニ御新造、アノお目覺めで御座んすか。

几帳　さう云ふは誰袖さんか、こゝ開けて下さんせ。

お種　アイ〳〵。

淨へ涙隱して引あくる。障子の骨も朽木形。一重の紙の反古張りも。今は几帳が玉の床。

（ト此内おたねひそかに泣顔を繕ふ事あつて障子をあけると、内には几帳紫の病鉢卷にて床の上に坐り括り枕に片肱を持たせて居る。）

几帳　けふはお前が久々で訪ひ慰めておくれゆゑ、いつになく氣分もすぐれツイすや〳〵と寢たわいなア。

お種　それはマア〳〵お嬉しい、何んならわたしがそろそろとお肩を揉んで上げようかえ。

几帳　誰袖さんとした事が古い馴染と云ひながら、いつに變らぬその深切、辱けなうは御座んすが、モウ〳〵構うて下さんすな、それよりは其所へ往て話しでもしようわいな。

お種　ホンニうつたうしい小座敷よりもお氣が晴れるで御座んせう、サア〳〵こゝへお出でなさんせ。

浮へ手を取り〳〵の氣配りに。誠見ゆるぞ頼母しき。

（ト お種座蒲團を敷き、几帳を介抱して二重好き所に住ふ。）

それはさうと御病人がそんな薄着でお出では風が當つてよくあるまい。さうかと云つてアノ夜具を掛けてあげたら重たからう、なんぞ外に搔卷でも。

几帳　それさへ疾うに賣拂ひ、不自由勝ちな侘住居。

お種　そんならばあの搔卷まで。

几帳　誰袖さん、お察しなんし。

浮へ顔を背けて一雫。こなたは笑ひに紛らして。

お種　オホ、、、要い辛い目を辛抱して紀文さんに添遂げるお前樣は戀の果報者、お羨ましう御座んすぞえ、さう云へば旦那樣のお羽織でも御座んせぬか、早う掛けて上げたいわいなア。

几帳　サア旦那樣も着のみ着の儘、別には何も御座んせぬが廓のかたみと秘藏してまだ今日までも賣殘したわたしの部屋着が唯一枚、葛籠の中に御座んすゆゑそれでも出して下さんせ。

お種　ソリヤ好いものが御座んした、鳥渡待つて下さんせ。

浮へ立つて取出す袖の香は、花橘にあらねども。昨日の昔おもはれて、色も床しき染模樣。

（ト此文句の内お種傍の古葛籠より部屋着を取出し、其儘ひろげて見て思入。）

お種　オヽ、これには覺えがある、廓にゐさんす時分にも大事にかけた此召物。

几帳　旦那樣のお好みで淺妻船に思ひ寄せ、鼓と浪のあしらひは一蝶さんのお書きなんした下畫を其まゝ染模樣、疋田鹿の子の筆跡も其角さんが物數寄に發句の贊の散し書。

お種　オヽ、ホンニ、「思ふ事捉節は誰れ月見船」

（ト讀下す。）

几帳　その淺妻のあさましや、過ぎし榮耀の佛を偲ぶ便りは是一つ。
お種　私も元の氣になつてお着せ申すも時の興、サアおいらんちつとも早う。
淨へ着て見やしやんせと。打掛る。
（ト是を着せる事あつてヂッと眺め入り。）
そのお姿を見る時はこゝが三浦の二階かと疑ふほどの伊達好み、すッきりとした物腰しは矢張り以前の太夫さん、わたしも戀て吉原で。
几帳　エ。
お種　いゝえいナア花の曲輪の全盛に几帳太夫の返り咲きどうぞ病ひも好くなつて元の體に返るやう隨分ともに精出して御養生をなさんせいなア。
几帳　アイ能う云うて下さんした。私も勤めてゐた頃は素見ぞめきの客衆にまで勝氣な女郎と目ざされた評判の負嫌ひ、なんの／＼病氣にも負ける事では御座んせぬ。トハ云へお醫者のお藥も驗も見えぬ長煩ひ、今度お前の來る頃はいづれ白木のお位牌に。
お種　エ、なんと云はしやんす。
几帳　サアお位牌にならぬやう、藥の外に加持祈禱神信心をもしようわいなア。
淨へ口には云へど心には、これが別れとしのび泣き。
こなたも同じ暇乞ひ。
お種　サア此次ぎのお見舞はいつの事にならうやら、最前も申したやうに今度住込む奉公先はそれは／＼堅いお屋敷、掟が嚴しう御座んすゆゑ滅多に外出も出來ますまい。たとひ離れてゐようとも神佛に願をかけ、廊下でお百度を上げます程に氣强う思うて下さんせ。
几帳　是はしたり誰袖さん、又いぢらしい事を云うて、わたしを泣せて下さんすな、ホンニ思へば二人とも憂身の中ではなけれども此身は姉の心持、
お種　私はまた妹と互に思ひ思はれて、どんな苦勞もたのしみも、
几帳　半分づゝを身に受けて笑へば笑ひ泣けば泣く、
お種　仲の好いのも因果づく、
几帳　誰袖さん、
お種　おいらん、
几帳　不思議な御緣で、
兩人　御座んすなア。
淨へ共に引寄せ抱占めて。思ひの海に風騷ぐ。淚々は深川の。洲崎の濱に浪越えて。眞砂を洗ふばかりなり。折から告ぐる暮の鐘。
（ト兩人愁歎の內時の鐘鳴る。）
お種　オ、あの鐘はモウ暮六つ。わたしはお屋敷へ行くに

つけ、今宵は用事も御座んすゆゑ是でお暇申しまする。
几帳　そんならお前は行かしやんすか、悲しい事を言出して互に泣いた此矢先、別れがつらう御座んすわいな。
お種　アイお名殘の惜しいのは山々で御座んすが、モウ歸らねばなりませぬ。オヽそれで思出した。この誰袖とした事が先刻こちらへ上つた時、拭掃除やら切張やら餘計な事に氣を取られ、トント今まで忘れてゐたお見舞の此菓子折。
（ト傍の風呂敷包みを解いて、菓子折を差出し）
申し後れて濟みませねどお納めなされて下さりませ。實を申せば親子二人が心入れの此一品、旦那樣へも好いやうに御披露なされて下さんせいなア。
几帳　スリヤお心に掛けられて辱けない見舞の菓子折、今にも旦那樣が戻つたならお目に懸けるで御座んせう。
お種　そのお言葉で親子の義理も。
几帳　エ。
お種　ドレお暇にいたしませうわいなア。
几帳　そんなら隨分身を厭ひ、まめに奉公しなさんせ。
お種　お前も癒つて下さんせ、そればつかりがわたしの氣がかり。
几帳　イエ〳〵あとの事ならば必ず案じて下さんすな。
お種　その一言を力にしてわたしは內へ歸るわいなア。

淨へいふも泣く〳〵誰袖が。打明け兼ねし片折戶。後姿もしよんぼりと。行惱みたる憂思ひ。見るに几帳は堪り兼ね。
几帳　誰袖さん。
お種　アイ。
淨へ走せ戾つて緣の端。見上げ見下す顏と顏。
（トお種行きかゝるを几帳呼戾すと急ぎ立戾つて緣側に手をかけ、双方顏を見合せて思入、几帳思ひ切つたるこなしにて）
几帳　おさらばで御座んす、ハア、、、、。
（ト泣落し、身を背けて打伏す。）
お種　お前がそんなに泣かしやんすとわたしは立場がござんせぬ、丁度爺やも留守の事、立戾つたを幸ひに灯りをつけるもお手助け、ドレ行燈をともさうわいなア。
淨へ淚にしめる附木さへ。裂いて二つに別路の。心の闇に灯す火の。光り漏れ行く門の口。親甚兵衞が忍足。
（ト此文句の如くお種行燈の灯をともすうち、甚兵衞窺ひ出て垣根より差覗き。）
甚兵　お種々々。
（ト小聲で呼ぶ。）
お種　アモシ。

淨〽押へて出る誰袖も。そつと目褄を拔足の、身に冷汗を垣の外。

（ト お種打伏したる几帳に氣を兼ねて、竊やかに拔足しながら折戸の外へ立出で。）

オ、阿父さんでは御座んせぬか、お前はどうして此ところへ。

甚兵 サアおぬしの氣が弱く、若し覺られて居はせぬかと年の加減で苦勞になりわざ／＼樣子を見に來たのだ。

お種 イエ／＼案じて下さんすな、お金と一所に書置きをそツと殘して來たわいなア。

甚兵 ム、さうか、それでおれも落着いた。

（ト こなしあつて大地に手を突き。）

イヤ申し御夫婦樣、甚兵衞親子がおふたりをお欺し申すのぢや御座りませぬ、切ない義理の御恩返しお察しなされて下さりませ。

（ト 歎く。）

お種 ア、モシ內へ聞えては心盡しも水の泡、そんな事を云ふ手間で少しも早く三浦屋へ。

甚兵 オ、合點だ、如才はないわえ。

淨〽いふも竊々破垣に。涙の露を置添へて。

（ト お種又も內の方へこなしあるを甚兵衞入替つて手を取り。）

サア來い。

淨〽行方知れず。なりにける。

（ト 兩人急いで向うへはひる。是にて起上り四邊へこなしあつて。）

几帳 モウ誰袖さんは行かしやんしたか。迚も癒らぬ病氣ゆゑ餘所ながらの暇乞ひ、さうとは夢にも知らぬ身の能く養生をなさんせとくれ／＼も書置いたその心根がいぢらしさ。オ、さう云へば深切に見舞うてくれた此菓子折、旦那樣の戾るまで病間へ仕舞うて置かうわいなア。

（ト 菓子折を取上る途端、バッタリと取落すと中より金包みと手紙一通轉び出る。）

コリヤマア飛んだ麁相な事を。ヤ、これは。

淨〽手に取る一通金包み。

（ト 二品を兩手に取上げ。）

オ、思懸けもない百兩包みと封じ文、御夫婦樣へ誰袖より。ドレ。

淨〽封を切る手も悶かしく。讀行く文體心の仰天。

ヤ、、、この文言の樣子では藥代の貢ぎの爲め再び元の三浦屋へ。モシ誰袖さん、こりやマア何事で御座んすぞいなア、折角身請けしたものを又も苦海へ沈めては旦那樣のお顏も立たぬ、わたしもお前の身の代で存らへたうは御座んせぬ、まだ其所等にゐなさんすならモ一度歸

つて下さんせ、誰袖さんは何處にゐる、誰袖さんイのう。

淨〽行かんとしてはだうと伏し、病苦に惱む息づかひ。

エ、どのやうに思うても病みほうけた體ゆゑ、追ひ行く事は偖置いて呼返さうにも此息切れ、いつそ此儘死んだなら斯うした思ひはあるまいに情が仇の手紙にも悲しい事を書いたのはわたしに泣けと云ふことか。

淨〽むごいわいなと立ッつ居つ。文を片手にうろ／＼と。我家の內を迷ふ身の。讀んでは泣き見ては泣き。

コリヤマアどうせう／＼ぞいなア。

淨〽歎きの數のありたけを。また幾度か返す書。エ、モウ今は字性さへ霞んで見えぬ溜淚。

淨〽讀めぬが增しか。見たいが因果か。

淨〽心苦しや悲しやと。狂氣の如く身を悶え。前後不覺に泣沈む。

（ト几帳悲嘆の仕種いろ／＼あつて、葛籠に身を持たせしまゝ淚に暮れて居る、是にて下座の流行唄になり向うより文左衛門出來る。）

文左　ア、秋の日の釣瓶落し、今日もモウ暮れて仕舞うた。上手な八卦見があると聞き下谷三界遍めぐつて思ひの外遲うなつたが、易の表の悪いにつけ案じられるは几帳の容態、ドリヤ早く家へ歸つて看病でもしませうか。

（ト折戶をあけて內へはひる。）

コレ龜七は居ないかの、今やう／＼戾りました。

（ト其儘緣に腰をかけ手拭を取出して、足の埃を拂ひながら。）

今日は遠道をして來たゆゑ裾も足も砂埃りで眞白ぢや、モウ／＼氣味が悪いので疲れやうも猶一倍ア、草臥れた草臥れた。

（ト膝を擦つて居る。）

淨〽夫の聲に氣の附く几帳。

（ト几帳身を起し。）

几帳　オ、旦那樣か待兼ねて居たわいな、ぬしに見せたいものがある、上におあがりなさんす間も待遠しう御座んすゆゑ、此手紙を早う／＼。

文左　コレ／＼几帳どうしたものぢや、餘りに行燈が暗いゆゑいつもの通り龜七が宵の口から居睡りかと思ひの外に此しだら、病人がこんな所へ出て居るといふがあるものか、そして又けたゝましい何をそんなに騷ぐのぢや。

几帳　イエそれどころぢや御座んせぬ、早う是を見なさんせ。

文左　ハテマア靜かに云つても分る、草臥れ拔いて歸つた者をさう急き立てる事はない。

几帳　イエ〳〵落着いては居られぬわいな、先刻まで誰袖さんがこゝに來て居なさんしたが、歸つた跡に此書置。
文左　ナニ誰袖の書置とは。
几帳　サア〳〵讀んで下さんせ。
　淨〽聞くに不審と文左衛門。一通取つて繰ひろげ。
文左　一筆書殘しまゐらせ候、偖とや御夫婦樣へ萬分一の御恩送り致したく又も吉原へ身を沈め申し候、どうぞ〳〵此金子にて御養生遊ばされ御病氣おなほし下され候。エヽ是はマア飛んだ事ぢや。一つ甚兵衛申し添へ候、誰袖再勤と申す事世間へ知れ候らへば一旦お請出し下されし紀文樣のお名前にかゝはる事と是のみ心苦しく候、夫ゆゑ三浦屋樣とも談合の上この度は名を更へさせ、双子または年子の姉妹とも言觸し以前の誰袖では是なき樣に取繕ひ候ゆゑ御安心下され度候。コレ〳〵斯んなに屆いてゐながらナゼ最初から打明けて相談はしてくれぬ、瘦せても枯れても文左衛門、血の出るやうな此金で几帳に藥は飮まされぬ、志しは過分ながらコリヤ親子とも早まつたなア。
　淨〽涓は何とせん淺猿しやと。悔む夫の傍へより。
几帳　サア〳〵そこで御座んすわいな、此お金と引替へに證文は入れたにせよ、今歸つたばつかりゆゑ三浦屋さんへ引取るまでは少しは間が御座んせう、是から直ぐに追うて行き甚兵衛殿に譯を云うて破談にさせたらどうで御座んす。
文左　成程それは上分別、元金の百兩だけでは身儘にさせぬと云ふやうな三浦の四郎左ではあるまいから、先づ甚兵衛を納得させ、誰袖を引止めねば文左衛門の男が立たぬ、わしは直樣一走り。
　（ト金を取つて懷に納める。）
几帳　急いでお落しなさんすな。
文左　イヤ案じるな大丈夫ぢや。
　淨〽馳出せしが。
　（ト文左折戶口まで行き、）
几帳だめぢや、內が知れぬ。
　（ト茫然と佇む。）
几帳　オ、ホンニ甚兵衛殿の宿許は、山谷あたりと聞いたばかり。
文左　しかも夜分の事なれば、是から出掛けて行つたとて雲を掴むも同じ事。
几帳　どこを當途に尋ね行き話をつけて好い事やら。
文左　ハテサテ困つた事ぢやなア。
　淨〽腕拱いて一ト思案。
　（ト文左腕組を爲し考へる事あつて、）
オ、好いわ、工夫がついた。

（ト小膝をポンと打つ。）

几帳　さうしてぬしの工夫とは。

文左　サア几帳聞いてくれ、アノ甚兵衞の商賣は吉原通ひの馬方ゆゑ、馬道から大門まで一夜に幾度も行つたり來たり、日本堤に待受けたら出逢はぬ事はよもあるまい。

几帳　ホンニ夫れは好い御思案。

文左　なんと文左は智慧があらうな。

几帳　それもさうでは御座んすが、廓にはお顏を知られた御身、お氣をつけねばならぬぞえ。

文左　いかさま曲輪の大門を七度までも打つた身が、紙衣に劣る姿にて衣紋坂にも立たれまい。

几帳　往來の者も見返りの柳の下の行燈に氣兼苦勞の片明り。

文左　あれは誰也と人間はゞ痩浪人の身の恥辱。

几帳　餘り近うは寄らしやんすな。

文左　オヽ道哲で待合はさう。

几帳　そんなら土手へ少しも早う。

文左　ツイ行つて來る、待つて居やれ。

淨〽言捨てゝこそ。

（ト文左帶に手をかけて見得になり、一散に向うへはひる。几帳緣の端まで躙り出でながら。）

几帳　モシ餘ンまり急いではお危なう御座んすぞえ、石にでも躓いて必ず怪我をなさんすな。ア、世が世ならこのやうな假初めの御用ではなんの御自身にお出でなさらうしかも夜道を唯おひとり馬にも駕にも乘る事か息を限りに一走り、浮世の義理とは云ひながらお氣の毒ではあるわいなア、それを思へば此几帳も臥つて居ては濟まねども、重い病氣の事なれば旦那樣のお歸りまで暫らく奥で休みませう、モシ堪忍して下さんせ。

淨〽心に詫びて立上る。足もしどろに俄かの苦痛。

（ト几帳よろ〳〵となつて柱に縋り。）

コリヤどうやら變つた氣持。さては最前からいろ〳〵と心配が嵩じたゆゑ病氣に障つたものと見え、常と違つて胸先が。ウム、ウーム。

淨〽忽ち變る面の色。その儘だうと伏轉ぶ。

（ト几帳苦しむ事宜しく誰袖の手紙を握み、我口を押へたるまゝ俯向けに打伏す、極々かすめたる風の音、遠くにて火の番の拍子木を聞かせ、これに按摩の笛と雁の聲をあしらひ舞臺シンとなる。同時に月影あらはれ青白き月光屍體に差込み、几帳の體を照らす、都て淒然たる光景宜しくあるべし、好き程に以前の龜七急ぎ足にて出來り、直ぐ折戸をはひりながら。）

龜七　ヤレ〳〵遲くなりました、途中で古い友達に出逢つたところ其奴が氣の利かねえ野郎で長話しをするもんだ

からツイ〳〵手間を取りました。

（ト表を締めて二重へ上り、）

オヤ誰袖さんはモウお歸りかね、モシそこにお出でなさるのは誰袖さんぢやア御座いませんねエ。オ、御新造様〳〵。のやうだ。モシどうかなさいましたか、御新造様〳〵。

（ト引起すと几帳の手に持つ手紙には吐血べつたりと染つて居る。）

コリヤ御新造が、ヤ、、、、。

（ト驚いて手を放し仰向けに引繰り返ると、几帳又もばつたりと倒れる。）

コレ御新造様、確かりしておくんなさい、爺（ちい）やが歸つて參りました。御新造様〳〵。

淨〽呼生けられて目を見開き。

几帳　オ、爺やか、わたしはモウ今が最期、旦那様へ此事を。

龜七　ヘイ旦那様は今以てお歸りぢやア御座りませぬか、お迎ひと云つたところで何處にお出でなさるやら。

几帳　オ、旦那様の居どころは日本堤の道哲あたり。

龜七　ヘイ左様で御座りますか、どうも様子が分りませぬ、モシお氣は確かで御座りますか、どうぞしつかりして下さりませ。

几帳　イヤ〳〵行きさへすれば分る、サ、早う吉原土手へ。

龜七　デモお前様お一人をどうしてこゝへ殘されませう。ア、コレ人を頼みたいにも身一つぢやア、どうにもならねえ、こんな困つた事はないわえ。

几帳　サ龜七、なぜ行かぬ、早う〳〵。

龜七　ヘイ〳〵直に參ります、只今行くところで御座りまする。

淨〽返事はすれど龜七が、行くに行かれず唯うろ〳〵。

（ト龜七只管うろたへる。几帳益々苦みながら、）

几帳　コレ龜七、龜七。

龜七　ヘイ〳〵、ヘイ。

几帳　若し甚兵衛殿にも出逢うたなら、親子の衆のお志し喜びながら死にますと、几帳が臨終の一言を必ず傳へてたもいのう。

淨〽頼むわいのと云ふ聲も。今を限りの斷末魔。

コリヤモウこの世で旦那様の顔見る事も叶はぬか。

（ト息づかひせはしくなる。）

龜七　なんまい陀佛〳〵〳〵。

淨〽哀れなりける。

（ト本釣鐘を打込み愁三重にて、几帳終焉の體になり龜七は稱名を唱へる、此仕組にて　幕）

ツナギにて直ぐ引返す

同返し　吉原日本堤の場

舞臺正面苅入時の田畑の書割、黄熟したる稲に鳴子繩を引渡し、諸所に雜木林藁屋根など散見す、此前草土手に立木をあしらひ遠く切出しにて灯入の吉原見える土手道哲庵横手の心にて烏瓜の搦みたる生垣壞れ、其傍は深き竹藪にて見切ろ、好き所に大いなる古卒堵婆を横へ置く事、下手藪疊尾花など都て古代の吉原通の夜景宜しく、木魚入りの鳴物にて幕開くと、こゝに文左衞門立身になり、右左には乞食大勢或は赤子を素肌に背負ひたる女、又は子供の手引きを連れたる盲目など附纏ひ居る。

非人○　お願ひで御座います。

同△　お願ひで御座います。

女乞食　モシお願ひで御座います。

文左　ア、コレ附くな〱、お前方へ遣るやうな鳥目は持合はさぬ、附くな〱。

女乞食　イエモシ御繁昌の旦那樣、そんな事を仰しやらずに一文遣つておくんなさい。

めくら　お手許は御面倒には御座りませうが、どうぞや一文お遣りなされて下さりませ、盲目や小僧が助かります。

（ト節を付けてねだる。）

文左　ハテ聞分のない人達ぢや、夜目ゆゑ能くは知れまいが、此わしも有樣は尾羽打枯した痩浪人、合力したいと思うても生憎今は持合せがない、附いても駄目ぢや附くまい〱。

（トばツちりと目を開けて文左の風體を見る。）

小供　チヤンや、おめえ目を開けちやアいけねえぜ。

めくら　箆棒めエお貰ひがねえと極りやア、盲目の眞似もいらねえ話しだ。オイ〱みんなちよッと來ねえ。

（ト少しく脇へ退く。）

皆々　何んだ〱。

（ト一同傍へ寄ると、盲目乞食は文左を指さし、）

めくら　手前達はアノ人を知らねえか、七度までも大門を打つた大盡樣の身の果だぜ。ノ、ソレ本材木町の。分つたか。

女乞食　オヤさうかえ、今ぢやア落ぶれたといふ評判だが、お氣の毒な事だねエ。

○　それぢやア一文にもなるめえから、口を酸ツぱくするよりもアノ藪陰で、いつもの通り寐て居た方が増しだらうよ。

△　さうだ〱菰一枚を引掛けて寐込んだ家が極樂だ。此上落ぶれようと思つても落ちやうのねえ身分だけに大安心と云ふものさな。

めくら　ム、上を見りやア方途がねえが、下を見りやア行ッとまりだ。

女乞食　そこで三ッ蒲團の氣になつて、焚火でもしてあたりませうよ。

子供　おいらが上手に焚付けてやらうか。

めくら　コレ放火を覺えちやアいけねえせアハ、、、。

○　サア〳〵父ッさん行かう〳〵。

（ト捨臺詞よろしくあつて皆々文左をジロ〳〵見ながら上手の薮い中へはひる。此間文左は始終甚兵衛を待つ心にて前後に眼を配り居る、乞食一同はひる跡を見送り歎息の思入あつて、）

文左　ア、袖乞の非人にまで氣の毒がらるゝ身になつたか

（ト思はず跡へ下る途端、古卒堵婆にトンと腰を下す、是をキッカケに雲間より月影あらはれ遠く吉原騷唄の三味線聞える。）

オ、彈きをるわ〳〵、微かにひゞく三味線の音色を聞けば思出す紀文の榮華も一ト盛り、この吉原を眺めながら朽木の卒堵婆に腰をかけ、馬士の往來に氣を配る道哲庵の垣の外、夜寒に震ふ身の上も變れば變る此ありさま、わしは男の卒塔婆小町ぢや。

（トおつと思入、是にて馬士唄聞える。）

小室節へさても見事な。そんれはおつゞら馬や。

オ、あの唄は小室節、さては世にある大盡が是見よがしの白馬にて日本堤を通ふと見えた、今度こそは甚兵衛が馬を追うて來るかも知れぬ、よく氣をつけて。ム、。

（ト立上つてこなたを窺ふ。）

小室節へ七ッ蒲團に。そんれは曲彔すゑて。

甚兵　ハイ、ハイ、ハイ。

（ト馬方甚兵衛白馬の手綱を取り、馬上には編笠に面を包み伊達な羽織を着たる若衆風の買手打乘つて、上手より出來り、其儘行過ぎようとするを文左目をつけて呼止める。）

文左　コレ〳〵甚兵衛殿では御座らぬか。

甚兵　ハイわしは甚兵衛だが、さういふこなたは。

文左　オ、わしぢや〳〵。

甚兵　ヤア旦那様で御座りましたか、お前樣はどうしてこゝへ。

文左　サア最前わしの留守中に殘して置いた書置で詳しい樣子は分りましたが、どうも誰袖の身の代をオイソレと受取つては、以前の事を恩にかけ義理詰めにでもしたやうで天道樣に濟みませぬ、それでわざ〳〵返しに來ました。

甚兵　御尤で御座ります、お前樣のお氣質では素直に受けちやア下さるまいと初手から知つて居ればこそ押付がま

しい魂膽もアノ子が眞實の姉のやうに平生から慕つて居る御新造樣の御病氣を癒したいのが精一杯、モシぶしつけな仕方だとお腹が立つたら堪忍して愚痴な親子の心に免じ、どうぞ受けて下さいませ。

文左　その心根の嬉しさには書置を見た其時からわしも几帳も泣いて居ります、サアさうなると此方にも矢張り義理が出來るゆゑどうも金子は受けられませぬ、是で藥を飲ませるよりも早く三浦屋の手へ戻し、サッパリ埒を明けた方が病人の氣も休まる道理、浴るほどの人參よりそれが却つて利目がある、サア〳〵此金は返しますぞ。

（ト財布の儘差出す。）

甚兵　イエ〳〵どうか是ばかりは受けて置いて下さりませ

文左　デモそれでは濟みませぬ。

甚兵　濟むも濟まぬも御座りませぬ。オ、さうだ〳〵、お客樣を待せて置いて押問答をして居ては商賣が出來ませぬ。お客樣只今參ります、ハイ〳〵お待たせ申しまして、なんとも濟まねえ事で御座いました、ドウよ〳〵。

（ト馬の手綱を取直し。）

旦那樣、御免なさりませ。

（トズン〳〵行き懸る、文左は周章て轡面を引止め。）

文左　甚兵衞殿待たつしやい、馬の上の客人も切ない譯を推量して暫くお待ち下さりませ、此身も覺えの廓通ひお心急ぎでも御座りませうが、宿を知らぬ此馬方こゝで逢うたを幸ひに話をつけねばなりませぬ、モシ御承知で御座りませうな。

（ト馬上に向つて賴むと、無言の儘にて唯うなづく。）

御返事はなけれども首肯いて御座る上はお待ち下さるお心ぢやな。コレ甚兵衞殿、客人にはわしが賴んだ、サア金子を戻さぬ内は此馬一寸も遣りませぬぞ。

甚兵　ハテ是程に申すのに親子二人の志しをナゼ受取つちやア下さりませぬか。モシお客樣嘸ぞお急ぎで御座いませう、そんな話はほッたらかしてちつとも早く遣るがいいと思つてお出でに違ひはねえ、モシさうで御座いませうね。

（ト思入にて云ふ、馬上にて矢張無言にて首肯く。）

ソレ首肯いてお出でなさる。それぢやア旦那樣急ぎますから此儘お別れ申します。

（ト又行きかゝるを又引止め。）

文左　ソリヤあんまりな甚兵衞殿、お前の方は義理を立てわしや几帳は不義理になつても構はぬと云ふ心底か。

甚兵　イ、エさうでは御座りませぬ。

文左　さうでなければこのやうにナゼ氣を揉せて下さるのぢや、どう思うてもあの几帳は長く此世に居られぬ命、モウ先が見えて居りながら僅かな恩義に誰袖を再勤させ

て何とせう、その身も日へは出さねども覺悟を極めて居ればこそ、苦海へ沈めて下さるなとそれは〱きつい心配、コレ甚兵衛殿、お前も推量するが好い。

甚兵　ヘイ。

（ト泣く。）

文左　唯ヘイでは濟みませぬ、サア此金を取つて下され。

甚兵　スリヤお二人とも左程迄お諦めで御座りまするか。

文左　甚兵衛殿是非が御座らぬ。

（ト齒を喰ひしばつて歎く、是にて馬上の客も堪りかね。）

お種　ハアー。

（ト泣落す、文左驚きたる思入にて。）

文左　ヤ、今のは女の泣聲。

甚兵　イヤモシ旦那樣、チト仔細が御座りまして男姿に身をやつした馬の上の客人は娘のお種で御座りまする。

文左　ナニそのお方が誰袖とな。

（ト不審のこなし。甚兵衛は馬上に向ひ。）

甚兵　サア〱お種、モウお明し申したから早く下りて旦那樣へ御挨拶を申すが好い。

お種　アイ〱お目に懸らうわいな、阿父さん下してくださんせ。

甚兵　オ、呑込んだ、下りろ〱。

（ト抱きかゝへて馬より下し、甚兵衛はその儘馬を木蔭へ繋ぐ、お種は編笠を脱ぎながら。）

お種　モシ紀文の旦那樣、堪忍して下さりませ。

（ト打萎れる。）

文左　オ、ホンニそなたは誰袖、思懸けないその姿は。

お種　サアこのやうな形振も、旦那樣の御外聞を厭ふが爲めの男姿、足らはぬ女子の思案から致した事で御座りまする。

甚兵　イヤその跡はこのおやぢが申し上げるで御座りませう。

（ト蟲笛をあしらうたる合方になり。）

三浦屋さんと約束して今晩丁へ參るに付き、これがしみじみ申しまするには、馴染の多い土地柄ゆゑ突出し前に顏を見られ誰袖の再勤ぢやと早く噂の立つ時は紀文樣へ相濟まず、双子とか年子とかこつちで名乘つて出るまでは隱れて居たいと達ての頼み、そこで人目を包む爲め八方を算段して借集めた羽織大小、若衆姿で身賣に行くこのお種の胸の內察してやつて下さりませ。

（ト涙を拭く。）

文左　聞けば聞く程氣の毒な親子の衆の心づかひ、そのしをらしい心根が文左夫婦に通じたゞけでもモウ恩返しは濟んである、サ、此金を三浦屋へ返し誰袖の身賣の事は

どうぞ破談にして下され。
お種　それもさうでは御座んせうが折角の志し、無理にも受けておいらんの御用に立てゝ下さんせ、モシお願ひで御座りまする。
文左　イヤ／＼今も云うた通り金銭づくでは活きられる几帳の身ではない程に、百兩といふ此金も詰るところは水の泡、むだに勤めをさせるのがわしは憖然でならぬのぢや。
お種　サアそれなれば猶の事、此お種の身の代を水の泡にして下さりませ。
文左　ナ、ナ、何んと云やる。
お種　旦那様おいらんも覺悟をなされてお出でゆゑ、それで好いわと捨置くのが浮世の義理で御座んせうか、無い命と極つたなら愈々御介抱を遊ばして御臨終の際までも力限りのお手當が御夫婦の御情合、また御恩を受けたる者の身の勤めで御座りまする、僅かなれども其お金を水の泡になされた上、甚兵衛親子の義理だけはお立てなされて下さりませ、偏にお頼み申します。
甚兵　オ、娘、よく云つた、御新造樣のお命を取留めようが取留めまいが御恩返しに二つはない。
お種　義理といふ字も唯一つ。
甚兵　そこを思うて旦那樣、
お種　お受けなされて、
兩人　下さりませ。
（ト双方より手を合せて拜む、文左術なき思入よろしくあつて、）
文左　それほどまでに云はしやるなら几帳の心は知らねども、文左衛門の一存で此金子を受取りませう。
甚兵　そんなら納めて、
兩人　下さりますか。
文左　誰袖の勧めに任せ、几帳が息を引取るまで手當につかふ情の金子。
兩人　エ、有難う御座りまする。
（ト親子とも大地に兩手を突いて喜ぶ、文左はぢつと財布を目戍り、）
文左　コレ親子の衆見さつしやれ、千萬兩の大金でも物の數とは思つて居ぬ紀の國屋文左衛門が、百兩といふ金を涙ながらに戴いて懐中するは生れて初物。
（ト押頂きながら懐に納める。）
甚兵　ホンニ以前の御身分なら、幇間末社や遣手にも百兩位は一夜の御祝儀。
お種　纏頭にも散らす其金を今はいたゞくおいとしさ。
文左　ア、イヤ小判は百枚でも義理の籠つた皮財布、この懐が重う御座る。

（ト思入にて云ふ、甚兵衛歎息のこなしよろしくあつて。）

甚兵　それも時節で御座りまする、百萬兩の御身代をパッパと散らした其お手に、僅かな金をお受けなされお禮を仰しやるお心がお氣の毒でなりませぬ。が併し、親子の念も屆いたからはあんまり遲くならぬうちノウお種。

お種　アイそんなら三浦屋さんへ少しも早う行かうわいなア。

甚兵　ドレ馬を引出さうか。

（ト木に繋いだる馬の口を取つて引出す。）

文左　そんなら二人はモウ行きやるか。

お種　お名殘り惜しうは御座んすが、これでお別れ申しまする、返す〲もおいらんの御介抱を頼みますぞえ。

文左　何んにも云はぬ辱けない、そなたも其身を大切に。

お種　アイ有難う御座りまする、旦那樣もお氣をつけ看病疲れの出ぬやうに。

文左　その看病も僅かのうち、長い事ではヨモあるまい。

お種　悲しい事で御座んすわいなア。

（ト泣落す、甚兵衛も馬の世話をしながら打萎れ。）

甚兵　そんな話を聞くにつけこの甚兵衛も胸が一杯、どうやら今までの張りも拔け、これから先はトボ〲と馬を引くさへ力なき日本堤の土手八丁。

お種　わたしとても生中に旦那樣に逢うたゆゑ、覺悟して居る身賣りでも又今更の物思ひ。

甚兵　おぬしが泣けばこのおれも涙聲では唄はれぬ、曲輪通ひの小室節、

文左　それを遠音に聞くよりも聞かぬが増しの憂別れ、

お種　ホンニ思へば思ふ程、

文左　つらい浮世の、

三人　成行ぢやなア。

（ト皆々愁歎の思入、是にてバタ〲になり上手より以前の龜七息を切つて驅來り、文左に突當つて踉めきながら。）

龜七　モシ堪忍しておくんなさい、心急ぎの者で御座いますからツイ粗相を致しました、眞平御免下さいまし。

（ト言捨てながら行過ぎようとする。）

文左　ア、コレさういふ聲は龜七ではないか。

龜七　ヤア旦那樣で御座りましたか、好い所でお目に懸りました、モシ大變で御座います〲。

文左　エ、騷がしい、大變とは何が大變ぢや、靜かに物を云ふが好い。

龜七　イエ〲全くの大變で御座います、アノ御新造樣がタッタ今お亡くなりで御座います。

文左　ヤア何んと云ふ、アノ几帳が。

龜七　ヘイ左樣で御座います、急に吐血をなさいまして其儘絆が切れました、大變で御座います〳〵。
文左　そんなら死んだか。ム、。
（ト臂居に倒れて打驚き氣拔けのやうになつて涙も出です、向うを見詰め大息をついて居る。）
お種　オ、お前は龜七さん、アノおいらんがお隱れとはソリヤ全くで御座んすか。
甚兵　何んだか夢を見るやうで、本當のやうには思はれませぬ。
龜七　オ、甚兵衞さん誰袖さん、おれも夢かと思つて居るからお前方の驚くのも更々無理のない事だが御新造樣は死んで仕舞つた、しかも旦那樣の居所を此龜七に敎へながら卽座に息を引取る時、お前方にも一言の御遺言がありましたぞ。
甚兵　ナニわしらへの、
兩人　御遺言とは。
龜七　サア苦しい息の下から親子の衆の志し、喜びながら死にますと傳へてくれろと仰しやつた御新造樣はそれッきり、ア、なんまい陀佛〳〵。
（ト歎く。）
お種　スリヤ息を引取るまで阿父さんやわたしの事をお氣にかけて下さんしたか、儘になるならわたしも死んで三途とやらへ追うて行き一言お禮が申したい、阿父さんどうせう〳〵ぞいなア。
甚兵　オ、尤もだ〳〵、我慢強いおれでさへ胸が張裂くやうだから、をなたは一倍悲しからうが何もかも先の世の約束づくなら仕方がない。イヤモシ旦那樣、承はれば御新造樣にも飛んだ事で御座りました。
お種　お覺悟で御座んせうが、お力落しはいかばかり、嘸御愁傷で御座りませう。
甚兵　往來ぢやア御座りますが、親子二人が改めて、
兩人　お悔み申しまする。
（ト涙ながら弔ふ、文左目を拭ひ。）
文左　オ、親子の衆祭して下され、急な事とは云ひながら死目に逢はいで殘念千萬。オ、それで氣がついた。お前方にもいろ〳〵と御苦勞を掛けましたが、几帳が死んで仕舞うては最早不用の身の代金。
（ト財布を取出して礑と大地に置き。）
サア三浦屋へ返して御座れ。
（ト萬事休したる思入、此時下手の木蔭にて。）
三郎　アイヤ暫らくお待ちなされ。
（ト前幕の緞子大盡貝賀三郎兵衞曲輪通ひの華美な着附、奴角内化粧枕に草履を挾みたるを擔いで出來る。）
文左　オ、さう云ふは緞子大盡、お手前は何しにこゝへ。

（ト少しく意氣込む。）

三郎　イヤ紀文殿先づ〳〵お控へ下されい、先年中より數度の失禮御腹立も去る事ながら、申入れたき次第も御座れば必ずともにお急き召さるな。

文左　フム變つた物の言樣、意趣を含む文左衛門に申入れたい次第とは。

三郎　サヽ一通りお聞き下され。

（ト合方キッパリとなり）

それがしは此頃も頻に曲輪へ通へども張合ふ者もなきままに、兎角不興を覺ゆるも性れつきたる我が片意地、今宵は殊に不機嫌にて揚屋の留むるも聞入れず罷歸る途すがら、思懸けなく樣子を立聞き几帳の最期を承はつて戀も怨みも是までと三郎兵衛も我を折り申した、殊にまた御身夫婦と誰袖親子の義理立てに世の人情を始めて汲分け、我が沒義道の行ひを只今悔悟致せしゆゑお詫びの爲に此對面、以前の事は幾重にも水にお流し下されよ。

文左　オヽそんならば是までの意趣も遺恨も打捨てゝ、

甚兵　お詫びなさると、

お種　仰しやいまするか。

三郎　オヽサ如何にも後悔致した、就ては曲輪へ取つて返し三浦屋四郎左に面會して、誰袖の身の代をそれがしの手より拂まへ再勤させずとも濟むやうに取計ふべき我が心底、紀文殿には差合ひなれど是も一旦馴染みたる几帳太夫へ手向の追善、失禮ながら財布の金子は唯その儘に御受納あつて葬禮其他の入費に宛て、親子の者の親切を立てゝ遣つてはいかゞで御座るな。

（ト筋道を立てる、紀文はたゞ差俯向いて居る。）

甚兵　イヤお言葉を承はれば、御無理のないお捌きで親子の心も屆いた上、三方四方は片附けども、

お種　紀文樣のお心がどうあらうやらナア阿父さん、

甚兵　それゆゑ口が出されぬのだ。

（ト考へ込む。）

角内　奴の差出る場所ではねえが、紀文殿も一旦は受納めた金子だから別に否やはねえ筈だ。

龜七　先づ百兩のお金があれば御新造樣のお葬ひも立派に出せると申すもの。

角内　コリヤ殿樣の仰せに隨ひウンと云はにやア、

兩人　なりますまい。

文左　コリヤ龜七何を云ふ、慾も德も外聞も戀の一字に思ひかへ悟つて死んだ几帳太夫、花を飾つた葬禮を茅屋から出したとて往くところには往かれまい、今は此世に落ぶれた痩浪人の分相應、差擔ひの早桶でも文左衛門の自力ならそれが即ち極樂の蓮の臺の上品上生。

三郎　然らば金子は、

皆々　受けられませぬか。
文左　イヤ受けまする、受けて其儘非人へ施行、
甚兵　スリヤ御新造のお供養に、
お種　その百兩を、
皆々　施行とな。
文左　オ、道哲の藪蔭に非人共がいくらも居る。ソレ甚兵
　衞殿呼ばッしやい。
甚兵　ヘイ合點で御座ります。
　（ト甚兵衞立上つて藪蔭に向ひ）
　ヤイ非人共みんな來い、紀文樣の施行だ〳〵。
　（ト呼はると共に以前の乞食大勢バラ〳〵と立出で）
乞食
皆々　お有難う御座います〳〵。
　（トロ々にガヤ〳〵云ふ。）
文左　最前までは合力にも手支へて居た文左衞門、所もか
　へぬ土手先に今は小判を散らすとは夢の中なる夢心地、
　さらば施行にかゝりませう。
　（ト財布を片手に提げて眞中に立つと、本釣鐘を打込
　み又シンミリとなる。）
三郎　過ぎし曲輪の全盛に噂の殘る年男、その節分には引
　替へて、
お種　佛の爲に撒く金も地獄の鬼の追儺ひ、
甚兵　施行が濟まば此馬で直に親子が旦那のお供、
角内　また殿樣は三浦屋へ取つて返して御談合、
繩七　その吉原と深川へ、
文左　戀と無常の、
皆々　別れ道。
文左　俗名几帳、頓生菩提。
　（ト金を摑むを木の頭。）
　ソレ撒くぞよ、拾へ〳〵。
　（トばらり〳〵と金を撒く、乞食は爭つて拾ふ、甚兵
　衞は馬の口を取る、三郎兵衞誰袖等それ〳〵の見得よ
　ろしく、吉原騷唄の三味線を聞かせキザミにて）

――幕――

岡村柿紅篇

傾城三度笠（三幕五場）

登場人物

龜屋忠兵衛
忠兵衛母おなぎ
三輪の里の新七
おなぎ姪おとら
手代三郎兵衛
新町の歩き藤助
若い者　權太郎
同　久三
馬士　茂作

序幕

上本町飛脚龜屋店の場

本舞臺四間通し常足の二重、正面一間大阪格子の出入、上手一間の押入、この前に帳場格子、續いて三尺の小壁、下手九尺の板羽目、それに諸國狀差し、或は帳面などをかける。上手一間の附屋體、障子を立切る。續いて板羽目の見切、下手一間の土間、この正面暖簾口、土間の上へ八間を釣る。いつもの處に格子戸の門口、この外町家の遠見、すべて大阪上本町飛脚屋店先の體、帳場格子の中には手代三郎兵衛帳合をなし、土間には若い者權太郎、久三の兩人荷造りをしてゐる。二重には新町の歩き藤助腰をかけ、煙草を喫んでゐる體にて幕開く。

藤助　これさ手代の衆、あだ事はさて置いて、江戸の狀は屆いたのか屆かんのかい。米樣たちがえらい急ぎぢやほどに、早う返事をせにやならぬわい。

三郎　はてせはしない。大阪中の息子たちを、まだたらしたらいでか、江戸三界へ無心狀か呼出し狀、そのやうにせく事はないではないか。

權太郎　それよりはこちとらへは、この頃廓で流行唄か、心中ばなしか何ぞ又、

久三　變つた廓の噂をば、年の正月に聞きたいものぢや。

藤助　それは廓の歩き藤助、色の世界の水を飲めば、米の內證鬘子の色事、お家の出入心中沙汰、祭文淨瑠璃に語らぬうち、生の處を知つてはゐれど、使は使ぢや、江戸の狀の事聞かぬうちは、はなす事はなりませぬわい。

（ト、この中三郎兵衛帳場格子の中より出で來り）

三郎　その江戸の狀も今日か明日、こちの旦那が戻らるゝ筈故、その時屆くに違ひない。

藤助　ふむ、こなたの旦那忠兵衞殿には、久しう新町へも見えなんだが、そんなら江戸へ往てゞあつたか。

權太郎　それももう直き戻つたら、狀より先へ旦那さんが、

久三　一番駈けに廓へ飛ばう。

三郎　これ、お袋樣へ聞えたら何とする。ちと嗜まぬかい。

藤助　忠兵衞殿が戻らしやつたら、さぞ腹を立てられて、こりや一騷動起らうわい。

（ト、獨りごとのやうにいふ。）

三郎　なに、旦那が腹を立てるとは、そりや一體どういふわけぢや、藤助どん聞かして下され。

藤助　いや〳〵、お前方にいうてもわからぬ。それよりは江戸の狀の事早う返事をして來ませう。

（ト、立ちかける。）

三郎　これ〳〵藤助どん、狀の沙汰を聞かしたら、廓の咄しをしようといふたではないか。ましてやうちの旦那の事、腹が立つとはどうやら氣がゝり、

權太郎　そこがお主と家來の身、

久三　忠義の爲に聞きたい〳〵。

藤助　そんならこなたたちの忠義にめんじ、一通り聞かさうか。

（ト、又腰をかけ、）

こちの旦那忠兵衞殿には、こなたたちとは違うて粹な生れ、久しい後から新町通ひ、槌屋の梅川殿といふ天神に馴染んで、今では二世と誓うた中、廓中で誰知らぬ者もないに、近頃如何した事ぢややら、ふッつり見えぬその中に、忠兵衞殿の大仲好し、堺筋の若狹屋利右衞門殿といふが、梅川殿を身受する筈で、もう三十兩の手附まで打つたとやら、忠兵衞殿が聞かれたら、只事では濟むまいと、廓中でのこれ沙汰ぢや。

三郎　成程うちの旦那と梅川との深いわけは知つてゐる。又利右衞門殿といへばこれも旦那の極隨仲好し、こりや聞かれたら日頃の短氣、

權太郎　藤助殿のいはしやる通り、只事では濟みますまい。

久三　それこそ廓に血の雨か、明日の晩の祭文淨瑠璃、芝居にしたら大當りぢや。

三郎　えゝ又しても差し出口、

久三　おつと東西々々。

權太郎　見物の衆はしづまらつしやい。

三郎　したが、なんぼ二世と交はしても女郎は女郎ぢや。今日は向うの岩に咲いて、利右衞門殿に受出されるとはさりとは知れぬ人心、それを思へば飛脚屋の手代は、金銀は腰につけても、我物にして抱いて寢た事がなく、日

に正月をさせるばかり、新町が北やら南やら、知らぬがいつそましでござるわ。

藤助　ほんにこなたのいはしやる通り、嘘も誠もその時次第。二一天作ではわからぬが廓の諸わけぢや。どれわしも早ういんで、江戸の狀は今つきますと、嘘でもついて置きませうか。大きにお世話になりました。

三郎　これは御苦勞でござりました。ついたら直ぐに屆けませう。

（ト、藤助歸つて行く。權太郎久三の兩人も荷造りをしてしまふ。）

三郎　これ〳〵、今の藤助どんのした新町の噂、必ずともに誰にもいふまいぞ。

兩人　はい〳〵、誰にも申す事ではござりませぬ。

三郎　時に久三、荷造りがすんだなら、藏屋敷へ往て、御用を聞いて來い。

久三　はい〳〵、畏りました。

三郎　權太郎は上町へ長崎の狀を屆けて來い。

（ト、二三通の狀を權太郎に渡す。）

二人とも又濱の芝居へなど寄つてはならぬぞよ。

兩人　おつと合點でござりまする。

（ト、兩人出て行く。）

三郎　ひよんな談に身が入つて、爲替の金の諸拂帳合が遲うなつた。おつつけ旦那も戻るであらう。

（ト、又帳場格子へ入り帳合をする。）

（向うよりおとら頭巾を被り續いて新七悄々として出て來る。）

おとら　もし新七さん。こゝが忠兵殿のお宿、はいり難いは道理なれど、お袋樣は眞實の伯母樣、わけをいうて頼んでみませう。ちつとの間こゝに待つてゐて下さんせ。

（ト、新七無言でうなづき、後の方へ控へる。おとらは門口を覗いて三郎兵衞を小手招く。三郎兵衞見付けて。）

三郎　はて、合點の行かぬ。面を包んだ女房がこの三郎を小手招くは、何にもせよ。

（ト、門口まで行き。）

はい、誰方でござりまするな。

おとら　あの、忠兵衞樣はお留守でござりまするか。

三郎　成程旦那はお留守ぢやが、何の御用でお出でかな。

おとら　そんならお袋樣にお逢ひ申したうござんす。お傳へなされて下さりませ。

三郎　はて、これは算用が違うた。旦那に逢ひたがりさうなものが、お袋樣に逢ひたいとは……うむわかつたさては旦那が子でも孕ませて、便りのなさの腹立ちまぎれ、お袋樣にぶちまけて、恥をかゝさうとの事か。それでは

あんまり曲がない。これはわしが飲み込んだ。今にも旦那が歸られたら、取持つて薑料も取つて進ぜよう。

（ト、ふと新七の姿を見つけ、）

ほう、ついてござつたは家主殿か、それとも相ずり殿か、ゆすりなど食ふ三郎兵衛ではないぞ。出やうが好くば一歩や二歩はたてかへても進ぜようと思ふもの。何分今日は歸つたが好うござらう。

おとら　いえ〳〵、私どもは左樣なものではござんせぬ。大和の姪でござんす。伯母樣にお逢はせなされて下さりませ。

（ト、頭巾を取る。三郎兵衛顏を見て、）

三郎　ほんにこれはおとら樣でござりましたか。これはこれはいかい御粗相申しました。先づ〳〵お通りなされませ。

（ト、表に向ひ、）

もうしお連れの方も、どうぞお通り下さりませ。

（ト、おとら新七會釋して中へ入る。三郎兵衛奥に向ひ、）

もうしお家樣、大和の姪御がお越しになりました。

（ト、これにて奥より忠兵衛母おなぎ出て來る。）

おなぎ　これは〳〵おとら、久しぶりに好う來やつた。今日は忠兵衛も江戸より戻らるゝ筈……おゝ戻るといへばこれ三郎、風呂の下も焚きつけるやう、飯は炬燵へ溫めるやう、そなたいひつけておいて下され。

三郎　はい〳〵かしこまりました。その間に私も夜食をやつてまゐりませう。どなたもごゆるりなされませ。

（ト、奥へ行く。）

おなぎ　まあ〳〵おとら、久しぶりに、何と思うて好うおぢやつた。

（ト、ふと打惝れた新七を見て不審の思入。）

好うおぢやつたといひたいが、これは何とも合點が行かぬ。前方は伯母なり姪なり、輕々しう往來もしたが、今では忠兵衛といひなづけ、表向に賴みにもやつたからは、もうこちの秘藏嫁、迎へにもやらぬうち、先觸れもなく來るといひ、然かも見馴れぬお連れもある。さりとては心許ない。樣子は如何ぢや。如何したわけぢや。

（ト、これにて新七おとらは顏見合せせつなき思入、新七思ひ切つて前へ出で、）

新七　お前樣がおとらの伯母樣でござりまするか。初めてお目にかゝりまする。私は新七と申しまして、三輪のほとりに居りまする者。これなる女とは、ふとしたことより三年以前より、人知れず夫婦の契約いたしましたが、隱す事なれば親たちにも御存じなく、先頃こちらの御子息忠兵衛殿と婚禮極り、印の樽も納つた上は、私はふッ

つり思ひ切りましたが、女心の一筋に、私に添はずば死んでものけうと歎きます事がふびんさに、二三日以前に近所を退き、二人さまようてをりましたが、思案する程一大事、私は元より內證の男、忠兵衞殿の爲には公の妻女、その分にはしてはこさられぬ筈。見付けられ次第科にも行はれるは知れた事。さうなる時は一門一家の恥辱と思ひ、覺悟極めし上恥を捨て、今日こゝへ參りましたも、他人なれば異見も及びませぬが、伯母樣といふを力にして、一たんのお詫に參りました。二人の者の一命は、生きようとも死なさうとも、御二人樣のお心まかせ、御存分になされても、血で血を洗ふ道理故、伯母樣のお情に、どうぞお免しなされて下さりませ。

おなぎ　どなたかは存じませぬが、發明さうな御口上、若い同士の事なれば、有るまい事でもござらぬ故、過ぎた事は咎めませぬ。が、今では吾が子の女房と、名の付いてあるおとらをば、連れて退いた御所存は、不義でないとは申されますまい。忠兵衞宿にゐるならば、こなたを只は歸すまい。然したつた一人の姪が不びんにござりますれば、隱密にして進ぜませう。必ずともに思ひ切り、おとらを早う親里へお戻しなされて下さりませ。

おとら　もうし伯母樣、今日こゝへ參りましたは、恥しいやら恐いやら、胸がどき／＼いたしまして、御挨拶さへ申さなんだに、思ひの外の御量見で、二人の命拾ひました。ありがたいやら嬉しいやら、申さうやうはござりませぬ。この上甘えた慾なれど、とてもの事に埒をあけて下さりませ。

おなぎ　埒をあけよとは、そりやおとら何をいふのぢや。

おとら　さあ、忠兵衞さんも本心は、私を女房に持つ事は嫌がつてぢやと聞いてゐまする。それもその筈新町の、梅川といふ傾城と、二世の起請を書いてぢやとやら、その水くさい忠兵衞さんと、新七さんのいとしいと、如何まあ思ひ替へられませう。主は男の事なれば、思ひ切らうとおつしやれど、私やどうでも思ひ切れませぬ。伯母樣お察しなされて下さりませ。

（ト、これにておなぎ腹立たしき思入。）

おなぎ　これおとら、久しうみなんだそのうちに、いつ、そのいたづらは覺えましたぞ。なに、忠兵衞は嫌にして、新七殿がいとしいとは、伯母が前ではてくろしい、好ういへた事ぢやのう。みめ好う生れついた故、人が惚れると思はうが、今の世界の渡りもの、顏形より敷金に、惚れる男が多いぞや。さういふ男の癖として、博奕打つやら女子狂ひ、金銀のみか寢道具衣類、揚句の果は無體な事をいひかけられ、裸で逃げて戻らうぞや。思ひ切らうが切るまいが、この伯母が切らして見せう。

おとら　それはあんまり胴慾な、思ひ返して下さりませ。
新七　これおとら何をいやる。今の伯母御の一言に、ちといひ分もあるなれど、たかゞ吾等が無理なれば、いひわけはいらぬ事、所詮かなはぬ上からは、かねての覺悟ぢや。思案はいらぬは、
おとら　ほんにさうでござんす。なまじ未練を出せばこそ。
新七　なほ伯母様にお氣を揉ます。長居は無益、さあ立ちや。
おとら　あい。
（ト、二人手を取り、悄然として門口まで行きかける。）
おなぎ　やれ二人とも待つてたも、往くならこれを持つて行きや。
（ト、おなぎ懸硯より紙筆を取出し、去り狀を書いて二人に渡す。二人は受取りみて。）
新七　こりやこれおとらへ暇の狀、
おとら　そんなら私の縁切つて、
おなぎ　新七殿と添はせませう。あり樣は二人とも、浮草盛りの青ども故、一花ぞめの色ならば、褪める事もあらうかと、叱つた事も憎くて口も、憎くうて何のいひませう。伯母が心の察がずば、死なう覺悟と見た上は、先々長い二人が命、どう見殺しになりませう。二人が科も忠兵衛の、恨の品も年寄つた、我身一つに引受けて、この去り狀をやるからは、必ず／＼氣を長う、二人目出度う添ひ遂げう。
おとら　お情厚きそのお言葉。
新七　二人が命御赦免の、御教書代りのこの去り狀。忝うござりまする。
おなぎ　久しぶりの姪夫婦。泊つて行きやともいひたいが、その中忠兵衛が戻つては、物事がむづかしい。
新七　そんなら伯母様。
おとら　御恩は死んでも忘れませぬ。
（ト、二人はいそ／＼として出て行く。おなぎ見送つてゐる。奥より三郎兵衛出て來て、）
三郎　お家さん。ひよんな事になりましたなあ。
おなぎ　そんなら今の樣子をば、
三郎　來かゝる店でひそ／＼ばなし、惡い事とは存じながら、殘らず聞いてをりましたが、今のおとらの仕儀といひ、さつきに聞いた廓の噂。
おなぎ　廓の噂といやるからは、そんなら何ぞ梅川とやらの、
三郎　さやうでござりまする。こちの旦那の馴染んでござる、梅川とやらは堺筋の、利右衛門樣が受出す手筈で、手附の金子三十兩、もう打つたとやら渡したとやら、
おなぎ　すりや何といやる。あの梅川といふ傾城は、忠兵

衞とは仲の好い、利右衞門殿が受出すとか。

三郎　さつき江戸の狀の事を聞きに來た、新町の步きの噂でござりまする。おとら殿といひ梅川まで、人に取られた旦那樣、人一倍に短氣なお生れ、案じられる事でござりまするなあ。

おなぎ　よい〳〵。私から忠兵衞にいはぬうち、必ずとも に何事も、

三郎　合點でござりまする。申すことではござりませぬ。

（ト、下手より久三歸り來り、）

久三　只今歸りました。

三郎　おゝ御苦勞〳〵。してお屋敷の御用は如何であつた。

久三　明日纏めて申付けると、このやうにいうてござりました。

三郎　そんならそこらを片付けたら、灯をともす支度をせい。お家樣もまあ奧へ、

おなぎ　そんなら奧で一休み、

（ト、おなぎ奧へ入る。三郎兵衞は又帳場格子へ入り久三は行燈を出し、店の八間へ灯をともしなどする。）

（こゝへ權太郎、向うより走りながら出て來り、）

權太郎　これ久三どん、旦那のお歸りぢや〳〵。今向うの角に馬が見えた。

三郎　なに旦那がお歸りぢや。そこらは好う片づいたか。

久三　はい、好う片づいてをりまする。

（ト、向うより龜屋忠兵衞、旅姿にて、荷をつけたる馬に乘り、馬士茂助ついて出て來る。皆々出迎へて、）

三郎　へい、お歸りなされませ。

權太郎
久　三　お歸り、〳〵、

忠兵衞　おゝ三郎か、權太も久三も留守中は何かと世話であつたらう。

（ト、馬より下り。）

先づ荷物を下してたも。

三郎　かしこまりました。馬士殿大儀であつたのう。

茂作　はい〳〵、誰方樣もお留守中は、何かと御苦勞でござりましたらう……ちよつとお手をお貸し下さりませ。

皆々　おい〳〵。

（ト、三郎兵衞、權太郎手傳ひ、荷物を馬より下し、暖簾の奧へ入れる事などあり、久三は洗足の水を取りに入る。この時奧よりおなぎ出て來て、）

おなぎ　おゝ忠兵衞戻りやつたか。

忠兵衞　母者人、只今戻りました。留守中御無事で、變つたこともござりませなんだか。

（ト、この中久三洗足を持つて來る。忠兵衞脚絆草鞋を解き、足を洗ひ二重へ上る。）

おなぎ　おゝ〳〵、無事なとも〳〵、こちには變りはなかつたが、そなたも無事に道中しやつたか。

忠兵衞　はい、變つたこともござりませなんだが、さてさて今年のやうな寒い年はござりませぬ。箱根の吹雪にあてられて、夜晝三日腹を痛めて難儀いたしました。

おなぎ　おゝ〳〵、それはいかい難儀をしやつたのう。

（ト、忠兵衞は首にかけし革財布を取出し。）

忠兵衞　おゝ、この財布は伊丹の爲替金四百十兩、今夜仲間の衆から取りに參じまするやら知れませぬ。それまで戸棚へ入れて置いて下さりませ。

おなぎ　合點ぢやわいのう。

（ト、おなぎ受取り戸棚へ入れ錠を下す。）

何はともあれ、旅戻りで氣味が惡るからう。早う風呂でもはいつて着物を着かへ、ゆるりと夜食にしたが好い。

忠兵衞　そんならさういたしませうか。母者人御免下さりませ。

（ト、忠兵衞はおなぎの浮かぬ樣子に不審を抱きながら、奥へ入る。）

（この中、茂作、荷物を片づけ終りし心にて暖簾口より出で來り、馬の始末をする。久三は洗足、脚絆、草鞋などの始末をしてしまふ。）

おなぎ　おゝ、馬士殿大儀でござりました。片づいたら馬をしまうて、臺所で一つやつて行つて下され。

茂作　はい〳〵、ありがたうござりまする。

久三　さあ〳〵、こちらへござれ〳〵。

（ト、久三案内して、茂作馬を曳き下手奥へ入る。）

（おなぎ一人殘りて、ぢつと打ちしをれてゐる。）

（忠兵衞着物を着かへ、奥より出て。）

忠兵衞　もし、母者人。

（ト、これにておなぎびつくりして、涙をかくし。）

おなぎ　おゝ忠兵衞、もう風呂をしまうたのか。

忠兵衞　いえ〳〵、何やらお氣の浮かぬ御樣子に、お氣合でもお惡いか、誰ぞ御機嫌でも損ねましたかと、餘り心にかゝりましたほどに、風呂は後の事にいたしました。

おなぎ　何の〳〵、久しぶりにそなたの戻りやつたに、何の機嫌の惡るからう。こりや嬉し涙かも知れませぬわいの。

忠兵衞　いや、お隱しなさるは水臭い。何ぞ樣子がござりませう。どうぞお聞かせ下さりませ。

（ト、おなぎ切なき思入、思ひ切つて。）

おなぎ　どうでいはねばならぬこと、目に立つ上は何を隱さう。まあ聞いてたも、いやも與の覺め果てたこと、嫁に貰うたおとらめが、とうから在所で腐り合うた、その男めとたつた今、連れ立つてうせをつたわいのう。

忠兵衛　え丶、何とおつしやります。あの大和のおとらが男を連れ立ち、

おなぎ　おいのう。悋くうて〳〵、おのれやれ、摑みつかうとも思うたが、年寄りは涙もろい。死ぬるの生きるのと嘆かれては、たつた一人の姪のこと、見殺しにも出來もせず、つい勘忍して歸しましたが、そちには腹も立たうけれど、心の腐つた女のこと、量見して思ひ切つて下されや。

忠兵衛　女と思ひあなどつて、死ぬるなんどのおどかしの、ゆすりを一ぱい參られたな。悋くさも悋くし、追ついて引戻し、目に物見せてくれう。

（ト、血相變へて駈出ようとする。おなぎ止めて、）

おなぎ　やれ待つてたも、今のことではないわいのう。もう半時も間がある。

（ト、いひにくさうに、）

然かも量見した上に、そなたに代つてこの母が、暇の狀をやつたれば、最早返らぬ昔ぢやわいのう。

（ト、これにて忠兵衛びつくりして、）

忠兵衛　なに、暇の狀をやりましたとな。あの去り狀を……え丶母者人には聞えませぬ。私女房持つことは、仲間の者も知らぬはなく、祝儀の樽も四五軒から、參つてゐるではござりませぬか。今更盜まれたというて、私の一分が立ちませうか。私は子と申しても元は他人のお前樣、おとらめは眞實お前樣の姪なれば、私が捨てたる一分より、とらが難儀が御ふびんでござりませう。そりやお胴慾でござりまする。

おなぎ　お丶尤ぢや道理ぢや。よしない者を哀れんで、口惜しい詞を聞きまする。そなたが五つの時よりも、二十年餘り親といひ、子と馴れなじんだその中に、何の隔てがあるものぞ。二人の者に憂き目見せ、そなたの手柄になるならば、何しに只は歸しませう。いひわけするではなけれども、そなたと祝言した上なら、不義とて人も笑はうが、知らず知られぬ前方より、馴染といへば悋くうもなし、一門中のことなれば、互にとがをかくしあひ、波風たゝぬが好い筈と、心一つにはからうたも、眞實の子と思へばこそ、心安さの餘りぢやに、そなたが心にこのわしを、常も他人と思へばこそ、思はぬ恨みも受けまする。母のまゝにもならぬ上は、親子の緣もこれ限り、あぢきない世でござるわいのう。

（ト、立上らうとするを、忠兵衛袖に縋つて止め、）

忠兵衛　あゝ申し、あんまり腹の立つまゝに、よしないことを申しかけ、御機嫌を損うて、千萬後悔いたしまする。誠の親と存じますればこそ、かやうな慮外も申しまする。成程心の腐つたとらめがことはとにかくにも、お指圖次

第にいたしませう程に、どうぞ御量見なされて下さりませ。

おなぎ　おゝ〳〵、それでこそわしが子の忠兵衛ぢや。あのいたづらなとらめより、百層倍も好い女房を呼んでやりませう程に、そなたも機嫌直してたも。

（ト、忠兵衛思入あつて、）

忠兵衛　お詞にあまえ早速なれど、ちとお願ひがござりまする。

おなぎ　改つて何の願ひ、こちからも無心いうたれば、そちの願ひもかなへる筈。願ひとは何の事ぢや。

（ト、忠兵衛いひにくさうに、）

忠兵衛　はい、私ことさる頃より、さる女郎といひ約束、夫婦やうな義をいたしてをりました。ならうことならその女を、おゆるしなされて下さりませ。

おなぎ　そちが馴染んだ女郎とは、噂に聞いた梅川とやらか。

忠兵衛　どうしてそれを、

おなぎ　それを知らいでなりませうか。とうより聞いてをりました。然しその梅川とやらには、そちが入懇の利右衛門殿と、いつの間にやら深うなり、身請の相談極つたとやら。

忠兵衛　え、何とおつしやります。あの梅川を利右衛門が、

おなぎ　おいのう、手附の金も三十兩、打つたとやらも聞きました。そなたがちつと見えぬ間に、友達に乘替へるこの女郎めはおとらより、十倍越して憎くい奴、それでもこなた女房に持ちやるか。

（ト、忠兵衛わざと笑ひにまぎらして、）

忠兵衛　はゝゝゝ、たかゞ賣物店屋物、これもさらりとやめました。年あけてからわつさりと、遠方のかたから呼びませう。

おなぎ　おゝ〳〵、それよ〳〵、好ういうてたもつた。もう何事も春の事。寢て果報をば待ちませう。

（ト、起ち上り、）

そなたも早う夜食をしまひ、今宵はゆるりと休んだが好い。

忠兵衛　左様ならば母者人には、もうお休みが好うござりませう。私も後から參りませう。

おなぎ　おいのう。そなたも早う。

（ト、おなぎ奥へ入る。）

（後に忠兵衛ぢつと思案し、腹立たしき思入、終に決心して奥へ入り、脇差を持出て、表へ出ようとする。ふと思ひ返し又しをれる。次に戸棚の金の事を思ひ出し、これを取出さうとして、錠のあるに氣附き、ぞつとして飛退き、更に思ひ切つてその錠を捻ぢ切る。）

（こゝへ店の暖簾口より權太郎睡むさうに眼をこすりながら出で來り。）

權太郎　旦那さん。風呂の湯が沸き切りましたが、早うお入りなされませぬか。

（ト、これにて忠兵衞びつくりして戸棚を後にかこひ。）

忠兵衞　おゝ權太か。私はちよつと出て來る程に、はき物を早う〳〵。

權太郎　はい〳〵。

（ト、暖簾口へ入る。）

（其間に手早く戸棚の中より以前の革財布を取出す。權太郎出る。）

權太郎　あい、おはき物。

（ト、雪駄を上り口へ揃へる。忠兵衞あわてゝ財布を懷へ捻ぢ込み。）

忠兵衞　おゝ、それから大儀ながら、提灯をつけてくれ。

權太郎　そんならお風呂は、

忠兵衞　そなたたち先へはいりや。それより早う提灯を提灯を。

權太郎　あい〳〵合點でござりまする。

（ト、權太入る。）

（この間に忠兵衞脇差を差し、表へ出で一散に向うへ入る。）

（權太郎提灯をともし出て來り、四邊（あたり）をうろ〳〵と探す。この模樣よろしく拍子。）

――幕――

二幕目

新町島屋裏口の場
同　裏座敷の場

龜屋忠兵衞
若狹屋利右衞門
島屋喜平次
横瀨喜馬太
槌屋梅川
仲居おふく
同　おくら
藝子おたつ
座頭淸市
飛脚屋仲間五人
禿
島屋若い者

本舞臺一面の平舞臺、土塀の張物、この後へ二階の前面、塀越しに松柳などの立木見え、上寄りにあつらへのくゞり、出入りあり、下手寄りに用水桶、この後に人かくれるあつらへあり、下の方隣の塀の張物にて見切り、柳の立木などよろしく、すべて新町島屋裏口の體、廓の騒ぎにて幕あく。

(ト、上手より禿文箱を持ちて出で下手より茶屋の男島屋と印せしぶら提灯を提げて出る。この兩人は無言のまゝ、舞臺中程にて摺れ違ひ、上下へ入る。程なく塀の中にて「おいてくれ／＼」といふ聲聞え、直ぐにくゞりを開けて、藏屋敷の侍横瀬喜馬太、羽織無し丸腰にて庭下駄を穿き、醉うて出て來る。續いて曾根崎の藝子おたつ、羽織と大小とを持ち、島屋の仲間おふく雪駄を持つてついて出る。)

喜馬太　いやならぬぞ／＼。およそ武士たる者を女郎たる者が、嘲弄いたいて好いものと思ふか。

おふく　それぢやに依つて仲居たる者が、このやうにおわびをしてゐるではござんせぬか。

喜馬太　いやだ／＼。なんぼ仲居たる者がわびたとて、武士たる者が、

おたつ　えゝもう好いではござんせぬかいなあ。いつもの處でさつきのやうに、

おせん　それぢやというてお連れ様に悪いに依つて、ま一度お座敷へ行て下さんせいなあ。

喜馬太　いやだ／＼。武士たる者がいひ出したら、戰場のならひだ。一寸も後へは引かぬわ。

おたつ　あゝいひ出したら聞かぬお客、一先づ連れていにませう。

おきん　お客を止めるは仲居の役、これ程止めてゐるものを、そんなら連れて行かしやんすか。

(ト腹立たしき思入。)

おふく　藝子といふは名ばかりで、飯盛か茶立て女、如何とも勝手にしやしやんせ。

おたつ　こりや聞きにくいお仲居さん。さういはしやんすりやこつちのお客、お前の家には用はない……さあ／＼旦那參りませう／＼。

喜馬太　參るとも／＼、返す／＼も憎ツくき女郎(からう)、武士たる者のこれが目にはいらぬか。

(ト、いひながら腰の廻りを探す。)

おたつ　もし、大小ならこゝにお預り申してをりますわいなあ。

喜馬太　おゝさうだ。およそ武士たる者が大小を忘れて好いものか。これにちやんと預けてあるわい。

(ト、大小を受取って差す。)

今日はこれにて立歸れど、又のいひ分、
（ト、羽織を着て、）
覺えてをれ、
（ト、行かうとする。）
おきん　若しお歸りならお雪駄を、
（ト、雪駄を投げ出す。）
喜馬太　おつと、これは憚り
（ト、庭下駄と雪駄とを穿きかへ、）
いやなに、覺えてをれ。
（ト、おたつに手を引かれ、捨て白にて向うへ入る。）
（おふく庭下駄を取り、後を見送りて、）
おふく　ほんに／＼、いつも／＼世話ばかり焼かすお侍
（ト、奥にて手が鳴る。）
あい／＼、おゝしんき、又かいなあ。
（ト、おふく、くゞりより入る。この時くゞりを締めすに行く。）
（ト、獨吟になり、）
唄へ忍ぶ山。忍びかねたる人目の關を、道しるべせよ
忍ぶ草、いつそ露とも消えなば消えよ、あるにかひなき捨小舟。

（ト、この唄の間に忠兵衛向うより出で來り、くゞり戸へ寄りかゝる。くゞり戸開く。忠兵衛少しよろけて中へ入る。この模様時の鐘にて知らせなしにこの道具廻る。）

本舞臺二間常足の二重、土緣土庇、正面三尺の瓦燈に後へ下げて三尺の床の間、續いて腰張の茶壁、上の方平舞臺、建仁寺垣、石燈籠、つくばひなどよろしく、下手いつもの處屋根附の柴折門、續いて奥の方へ四つ目垣、この下手給心に前の場の土塀の裏を見たる書割の遠見、二重上寄りにあつらへの炬燵、この切穴へ後に人のかくるゝことあり。傍に二枚折の枕屛風、すべて島屋裏座敷の體、利右衛門只一人、後向に炬燵に突伏し、あたつてゐる體にて道具止る。
（ト、瓦燈口より仲居おふく、酒肴を持ち、同じくおくら、座頭淸市の手を引いて出て來る。）
おふく　これはしたり利右衛門さん、又しても睡つてゞござんすかいなア。いま、川さんは髮を直して、程なうこれへ來ませうほどに、まあそれまではわつさりと、お酒なと上げうと持つて參じましたわいなア。
おくら　それにお氣に入りの淸市殿、長崎のお客から覺え

た珍らしい小唄、利右衛門さんに聞かしたいとて、二人で連れて來ましたわいなあ。

利右　これは／＼、好う氣がついてたもつた。三日日の目を見ずの居續けに、氣も心もはつとした。淸市の小唄も今二階で歌うてゐたはたしか「忍ぶ山」あれ聞きながら好い心持に、ついうと／＼とねむつてのけた。小唄も小唄おやが、それよりはお心入れの盃を、まあ頂戴いたさうか。

（ト、盃を取上げる。）

おふく　ほんにこれはさうありさうなこと、三日三晩の水入らず、そのお睡けさましに、さあお一つ。

（ト、酌をする。）

淸市　そんなら私は川さんの、お身受けの時に何ぞ又、目出度い唄でも唄ひませう。まづそれまではお預りといたしませうか。

おみよ　これは淸市殿出來ました。そのお身受けも明日か明後日、

おふく　その時こそは私等も、

利右　祝ひに飲まさにや置かぬぞよ。

（ト、懐より紙を出して捻つて淸市にやり、）

これは當座の紙花ぢや。

淸市　それは忝うござります。この紙花も蕾のまゝ、開かぬことのないやうに、

利右　氣づかひには及ばぬ。その紙花も今日明日の、雨露の惠みに正直の、盛りをぱつと見せてやるわ。

おふく　そんならそれまでお盃も、

おくら　お預けといたしませうか。

おふく　利右衛門さん、後に又來ませう程に、一人で上つてゐて下さんせ。

おくら　この川さんは何してやら、私が見て來て上げませう。

淸市　ゆるりとお上りなされませ。

（ト、三人捨白にて奥へ入る。）

利右　梅川が身受けのことも、もうあのやうに沙汰せられては、後へ引かれぬ男の一分、手附金の三十兩、盗んで出た故首尾損ひ、心にもない居續けに、後金の工面もなく、こりや如何したら好からうなあ。

（ト、この時奥より島屋の亭主喜平次出で來り、）

喜平治　こりや利右衛門さんお一人でござりますか。川はどこぞへ行きましたかえ。

利右　おゝ御亭主か。川は髪を直しにとて行きましたが、何ぞ御用でも御座るのか。

喜平治　ほかのことでもござりませぬが、先程用事あつて出ましたら、梅川の親方、槌屋の半兵衛が呼込んで、こ

れ島屋、川が身受けは何とする。口のかゝつてある肥後のお客の方へつかはせば、明日にも小判の顔が見えるにそなたがたつてといふに依つて、これまで待つてはゐたなれど、餘りといへば埒があかぬ。今晩中に後金見ねば、この約束は變更へぢやと、それは〱きびしいいひやう、尤もこなた樣から三十兩といふ手附は受取つてあること故、私も變更へにいたされたうもござりませぬ。何とぞ今宵か明朝まで、銀子お渡し下さりませ。

利右　いや尤ぢや尤ぢや。このやうに延引する筈ではなかつたが、親父の手前不首尾になつて、家から金が出しにくさに、今日まで不埒いたしました。しかし、先程さる方へ、無心をいうてやつたれば、明日は用に立てようとの返事、先づ喜んで下さりませ。

喜平治　おゝさやうでござりましたか。それは〱おめで度い。これでさらりと夜が明けたやうでござりまする。梅川もさぞ喜びませう。おゝ、女房にもこの通り咄して安堵させませう。そんなら御免なされませ。

（ト、立つて行かうとして瓦燈口を開ける。そこに梅川立つてゐる。）

これ梅川か。さあ、何をうじ〱してゐやるのぢや。さらりと身受けの埒があいた。早う利右衞門さんの傍へ行きや。

（ト、梅川を中へ入れ、喜平次は捨白にて出て行く。）

梅川　利右衞門さん。さりとは急なことになりました。どうぞ思案はござんせぬかいなあ。

利右　當座のがれに潔くいうて、今宵の處はのがれたが、所詮はどうも詰まらぬこと、今更悔んで返らぬが、內が不首尾になつたばかりに、僅の金に手づまること、こなたの思はくも恥しい。梅川、どうぞゆるしてくれ〱。

梅川　利右衞門さんの何いはしやんす。必ず斯樣な羽目になつて、障りの出來るものかして、年の中には五度三度、心中するも金銀の、爲めぢやと聞けば斯ういふことも、世にあるならひぢやござんせぬか。身にも人にも恨はさらさらござんせぬが、私故にこなさんがお宿の首尾を損ねさしましたが、何より私は悲しうござんす。

（ト、この間に下手より忠兵衞忍び出で、柴折戸の外で樣子を聞いてゐる。）

利右　さういはれると面目ない。今にも忠兵衞の戻らぬ間に、何とぞ埒が開けたいものぢや。

梅川　淺からぬお志、いつの世にかは忘れませう。利右衞門さん、私やうれしうござんすわいなあ。

（ト、梅川、利右衞門を拜む。忠兵衞たまりかねて荒荒しく柴折戸を開けて入る。）

忠兵衞　梅川が身受けのお大盡はこのお座敷か。太鼓持の

忠兵衞が參じました。

（ト、この間に利右衞門この屏を開いて驚き、屏風の後へ隱れる。梅川は忠兵衞の傍へ走り寄り、）

梅川　おゝ忠兵衞さん、待ちかねてゐましたわいなあ。

（ト忠兵衞に取付く。忠兵衞振り放し、無言のまゝ散散に蹴る。梅川呆れたる思ひ入にて、）

もうし忠兵衞さん、久しぶりに顏見せて、怪しからぬ機嫌ぢやが、こなさん氣でも違はしやんしたか。わしや氣づかひでござんすわいなあ。

忠兵衞　おゝ、おのれが曲つた根性からは、氣ちがひとも見える筈、おのれがやうないたづら者を、切つても突いてもこの私が、すたり果てたる一分の、なか／＼相手にはならぬわい。さあ、受出すといふ男めをどこへ隱した。いひ分があるこゝ引出せ。

（ト、梅川、これにて合點の行きたる思入にて、）

梅川　さては身受けのあらましを、聞きはつッての腹立ちでござんすかいなあ。そんならさうといふたが好い。それについては利右衞門さんに、段々とのお世話にて、お宿の首尾もかまはずに、夜晝(よるひる)こゝにござんすに、好う禮いうて下さんせいなあ。

忠兵衞　おゝ、好う打あけて白狀した。たとへおのれが逢はせぬとて、のめ／＼このまゝ歸らうか。

（ト、屏風を蹴返す。利右衞門は氣の毒なるこなしにて、顏うつむけてゐる。）

さても初心なお大盡、顏そむけるは梅川との、口說を私に取持てとか……やいそこな不屆者、義理差合をわきまへるが、傾城買の誠ぢやぞ。人の餘りを食ふ好色(かうしよく)は、面(めん)桶狂(つうぐる)ひと名をつけて、人間なれば乞食の所作、畜生なれば犬か猫、好いけだものもたしなむぞ。おぬしも男の端しくれなら、かう雜言をいはれては、よもや勘忍ならぬ筈、覺悟をきはめて返答せよ。

（ト、利右衞門騷がずに、）

利右　あつたら男に面目を失はせた私なれば、あてことはうが叩かうが、さら／＼腹は立てぬわい。

忠兵衞　ふむ。思ひのまゝに踏みつけにして置いて、結構らしい挨拶は、私をなぶるか乘(の)せるのか。又は氣色(けしき)に恐れをなし、この場を逃げて退く爲めか。勤めなれども女房と、契つた中を知りながら、女を盜んだは間男同然、首をこゝへ並べてくれる。

（ト、脇差へ手をかける。）

利右　やれ待てそれは量見ちがひ、そなたと私がつきあひは、兄弟よりも深い仲、身の大事をも語りあひ、心の底も知りながら、不義なんどとは曲がない。そなたが江戸への留守の中、肥後の客が梅川を、身受けをするといふこ

とを、聞いた時には身が燃えて、小判の二百や三百は、夜が夜中でもとゝのふと、いふを自慢でしかゝつたが、うちの不首尾にまゝならず、仕かけたまゝのこのしだら、話しをするも恥しさに、返答もせなんだが、取のぼしたか心から、氣の廻つたも道理ぢやが、

（ト、紙入より一札を取出し、）

こりや、この一札はな。梅川が親里へ、路銀を持たせ親を呼び寄せ、娘をそなたにくれるとの、證據に取つた證文の、宛名は龜屋忠兵衞と、書かせて置いたもそなたが爲め、さ、これでもおれがあやまりか。

（ト、一札を投げ出す。忠兵衞一讀して面目なき思入。）

忠兵衞　かねてそなたの所存は知りながら、持病の短氣が差し起り、いひたいまゝの惡口雜言、あゝ面目ない〳〵。

梅川　もし忠兵衞さん、これでも我が身のいたづらかいなあ。

忠兵衞　はて忙しない、そちが恨は內證ごと、利右衞門への詫言を、どうぞそちからも賴んでたも。

梅川　利右衞門さん、忠兵衞さんもあのやうにいうてぢや程に、どうぞ勘忍して上げまして下さんせいなあ。

利右　何の〳〵、お主と私がその中に、どうしたことをいはうとも、心にさはることはない。したが思案する程梅川を、外へやつてはどうも一分立たぬわけ、たとへ五年が十年でも、身受けの埒のあくまでは、廓は出まいと思うたが、さて後金の工面に盡き、思案に餘つてゐる處ぢや。

忠兵衞　おゝ、その段なれば氣づかひに及ばぬ。身受けの金は餘る程、今日こゝへ持つて來た。

（ト、以前の財布より金を出して見せる。利右衞門不審の思入にて、）

利右　その大分の金子をば、そなたが分で何として、しては來やつたのぢや。

忠兵衞　さればこの金子には話がある。さて天道は人を殺さずぢや。今度上りの道連れに、さる歷々と一緒になつたが、長道中の憂さ晴らし、酒の對手から淨瑠璃小唄、色所の話でとんと取り入り、身の上のこと話したら、二言といはずこの金を、使へというて貸してくれた。

（ト、切なさうにいふ。）

利右　それは重疊……まづ一刻も早う亭主を呼んで埒あけう。

（ト手を鳴らし、）

亭主々々。

（ト、これにて奥より、）

喜平次　はい〳〵。

（ト、返事をしながら出て來り、忠兵衞を見て、）

おゝ、これは忠兵衛様お久しい。いつお越しになりましたやら、御挨拶にも出ませなんだ。

忠兵衛　いや、つい裏口から来ましたのぢや……時に御亭主、利右衛門が手附した梅川が身受の後金、こゝへ出す程に、さらりと埒をあけてたもれ。

（ト、金を出す。）

喜平次　これは／＼お目出度い。御祝儀のお盃は、奥の廣間にいたしませう。

利右　そんなら私は先へ行かう。久しぶりの二人ゆるりと話して後から来やれ。

梅川　何から何まで、お禮は言葉につくされませぬ。

（ト、涙を拭ふ。）

利右　それもわつさり目出度い笑顔。

喜平次　よう／＼嬉し涙様／＼……さ、ござりませ。

（ト、利右衛門と亭主とは奥へ入る。）

梅川　うれしや／＼。かういふことになると云ふも、日頃念ずる觀音様、母さんのいはしやんす。誠他力の本願寺様、あ、南無阿彌陀佛々々々々。（ト、拝む）

（忠兵衛たまりかねて、）

忠兵衛　やれ女房、その念佛ももう直きぢや、思ひ合はしたその時に、そなたの口から手向けてくれ。

梅川　えゝ忌々しいそのお言葉、何ぞ覺えがござんすか、手向けなどゝは氣がゝりな。

忠兵衛　おゝ、嘆くは道理ぢやことわりぢや。今は何をか包むべき、最前渡した身受の金、人に借りたと話したはな。皆いつはりの爲替の金。

梅川　えゝ。

（ト、びつくりする。）

忠兵衛　さゝ、その驚きは無理ならねど、最前江戸より戻るやいな。そなたを身受けの金にせうと、心に濟まぬことながら、大分の金を持つて来るとの、はなしをあてに大和から、女房貰ふ胸算用も、桁がちがうて母者人が、去つてしまへばあてはなく、その上利右衛門がそなたを受出すと聞いた時は眼くらみ、伊丹へ屆ける爲替の金、盗んで家を出たからは、もう仲間へ知れた時分、とても生きてはゐられねば、死ぬる覺悟でゐたものを、さうとは知らずそなたには、龜屋忠兵衛が女房と、頼みにしたがふびんなはやい。

梅川　えゝ恨めしいそのお心、お前が死んでこの私を、誰に添へとてこのやうに、命の仇の金盗んで、身受けと思ひ立たしやんした。一言なりとも女房と、呼ばれたを只思ひ出に、とても逃れぬ道なれば、隠れ忍んで添ふとても、人目にかゝり生恥かき、未練者よと笑はれうより、潔う最期を急いで下さりませ。かなはぬ時は斬ら／＼と、

疾うから覺悟はしてゐました。

（ト、懷から剃刀を出して見せる。）

忠兵衞　おゝ、それはうれしき志、男の私が未練にて、一寸なりとも生き延びて、かへつて憂目を見ようとした。一緒に死んでくれるそちの志迷ひの雲も晴れ渡つた。嬉しう笑うて死ぬならば、未來とやらも氣安からう。

梅川　そのお心で安堵しました。私も後の見にくうないやう。

（ト、梅川は帶を締め直し、衣紋を正し、忠兵衞は髮を掻き上げなどする。）

（その中、後に四五人の聲にて、「忠兵衞はどこぢや。」「たしかにこゝにちがひない。」「逃がすな。」「ぬかるな」「合點ぢや。」などいふ聲が聞える。忠兵衞聞耳を立て、）

忠兵衞　ありや確に仲間の衆。もうこゝにゐることが知れたのか。今見つけられては恥の恥。

梅川　そんなら早うこの中へ、

（ト、梅川は忠兵衞を炬燵の中へ隱す。）

（その中、利右衞門先に立つて出で來り、梅川一人なるを見て、安堵したる思入にて、後に從ふ飛脚屋仲間五人を入れる。利右衞門思入あつて、）

利右　うむ。忠兵衞はこの座敷にはゐぬさうな……そこにゐやるは梅川か……これ仲間の衆、私は梅川を詮議する。庭のしげみが心もとない。二階座敷へも手分けしてこなた衆はさがして下され。

仲間一　ほんにこゝにはゐぬさうな。

同二　梅川の詮議は利右衞門殿とやらに、

同三　こちとらは庭をさがさう。

同四　そんならこつちは二階座敷。

同五　わかれ〳〵にさがすとしよう。

利右　さあ〳〵拔からず、さがした〳〵。

皆々　合點ぢや〳〵。

（ト、三人は庭へと下手へ、二人は二階へと瓦燈口へ入る。）

（利右衞門はこの間に炬燵の布團をはねのける。）

（忠兵衞出て、）

忠兵衞　はや仲間へ知れたからは、最早かなはぬことこれまでのこと、利右衞門さらばぢや。

（ト、脇差へ手をかける。梅川も剃刀を以て忠兵衞に引添ふ。利右衞門二人を止めて、）

利右　まあ待て忠兵衞。死ぬるはいつでも出來ること、一先づこゝを退いて、一日なりとも梅川を、女房に持つて榮華をせよ。後はこの利右衞門が受取つた。

忠兵衞　段々の恩を受けた、こなたに難儀をかけては生き

てゐるかひはなし。

梅川　はなして殺して下さんせ。

（ト、二人身をもがく。）

利右　やい忠兵衞。我を我とも思はぬ故、かほどのことを最前に、包んだ心が恨みぢやわやい。おぬしがこんどのあやまちも、いはゞこの利右衞門が、受出し損ねた故なれば、貴樣のとがはおれがとが、是非々々止まらぬ覺悟なら、おれから先へ腹を切らうか。

（ト、利右衞門が脇差へ手をかける。）

梅川　まあ〳〵待つて下さりませ。

忠兵衞　命にかへての志。

梅川　むにいたしてはなはすまず。

利右　そんなら落ちてたもらうか。

梅川　というて裏へは追手の人々。

忠兵衞　所詮のがれぬこの場の仕儀。

利右　えゝ、鈍くさい。

（ト、炬燵櫓を取り、炭櫃を外し、）

こゝへ〳〵、こゝから投けて緣の下傳ひ、數寄屋を出れば裏の木戸口、内からおれは見張つてやる。

梅川　何から何まで。

忠兵衞　何にもいはぬこれぢや〳〵。

（ト、拜む。）

さらばぢや。

（ト、緣の下へ姿をかくす。）

（利右衞門炬燵の穴よりのぞき。）

利右　足弱連れぢや。口論などせまいぞや。道を急いで夜道して、わづらひやなどしてくれるな。

（ト、最早緣の下より遠くへ行つた心で、緣のはなへ出て下手を見送る。）

（こゝへ下手より庭をさがしに出た二人、奥より二階をさがしに出た二人出て來る。）

仲間一　どうも二階にはをらぬさうな。

同四　庭にもかいくれ姿は見えぬ。

利右　そんなら表へ逃げたらしい。

（ト、その中一人の飛脚屋仲間、炬燵の穴を見つける。）

仲間五　や、この穴は、

利右　はて危い、

（ト、手早く櫓を乘せ、）

冷炬燵ぢやなあ。

（ト、蒲團をかける。この模樣よろしく知らせ無しにこの道具道廻しにして元の塀外となる。）

（ト、木戸口をあけて忠兵衞梅川の手を引いて出る。兩人手拭で面を包んでゐる。向うより人の來る心にて天水桶の蔭へ小がくれする。）

（下手より飛脚屋仲間の一うろ〳〵出て來る。）

（木戸口より利右衛門出て覗ふ。）

（仲間の一、利右衛門の胸倉を取るをふりはなして引付け向うを見込む。）

（この間に兩人は天水補の蔭より出て、手を引きあひ急いで向うへ入る。）

（この模様よろしく拍子。）

―幕―

大詰

三輪里新七内の場
同　村外れの場

龜屋忠兵衛
新七
新兵衛
庄屋六左衛門
大枡屋喜兵衛
百姓十作
同　作兵衛
忠兵衛女房お梅（梅川）
新七女房おとら
捕手大ぜい

本舞臺四間中足の二重、一段下げて竹の緣側、丸木の蹴込、藁庇、正面一間の暖簾口の出入、上手一間の障子屋臺、下の方竹のれんじ窓、この後野遠見を見ること、暖簾口の上手一間の押入、三尺の鼠壁、いつもの處粗朶垣の境界、一間の下屋、この中に百姓道具などある。下手後へ下げて正面に門の入口、竹藪などある。すべて大和の國三輪の里、新七内の體、こゝに村の百姓十作、大阪の飛脚屋仲間大枡屋喜兵衛緣に腰かけ、新七女房おとら茶を出しなどしてゐる體にて幕開く。

十作　そんなら新七殿も新兵衛殿も、庄屋殿方へ往てお留守ぢやの。

おとら　もうよつぽどの時刻になれど、何がお庄屋樣の話し好き、いつ戻らるゝやら知れませぬが、御用は何でござりまするな。

十作　いや〳〵用は私ではない、今私は野良の歸り、この大阪の客人が、この三輪の里の新七の內はどこぢやと、尋ねるばかりかお前のうちの、それ、どこやら粹らしい女夫者の客人の、樣子を細々聞くに依つて、私には分らぬ、連れて行つて上げようと、こゝまで連れて來ましたのぢや。

喜兵衛　いかいお世話になりました。新七殿がお留守なら、そのお客人とやらはおいでゝござりまするか。

おとら　あい。いえ。そのお客さんも昨日は三輪。今日は長谷と、參詣やら見物やら、保養がてらの氣散じに、家にゐることはござんせぬわいなあ。

喜兵衛　してそのお客人は、大阪の町人でござらうな。

おとら　何の〳〵、中國邊の田舍の者、こちの人の遠緣でござんすが、女夫連れで年籠りの參宮がてら、久しぶりに寄られたのでござんすわいなあ。

喜兵衛　なに大阪の者ではござりませぬか……いや、いかいお邪魔をいたしました。……お前樣にもお世話になりました。

十作　そんならもう用事はござらぬのか。そんなら私も歸りませう。

喜兵衛　私はこれから庄屋殿へ寄りませう。面倒ながら、又道を敎へて下さりませ。

十作　よし〳〵、そこまで送つて進ぜませう。……おとら殿、邪魔しました。

おとら　好うおいでなされました。

（ト、喜兵衛、十作は捨白にて下手へ入る。）

（おとらあたりを片付けながら、）

合點の行かぬ人さんぢや。この頃は何ぞといふと代り代り奥のお二人の身の上を、探るらしい胡散のふるまひ。油斷のならぬことぢやなあ。

（ト、この時暖簾口より梅川のお梅、世話女房のこしらへにて出て來り、）

お梅　もしおとらさん。もうお客さんはお歸りなされたのでござんすかえ。

おとら　おゝお梅さん。お客さんは歸つたれど、合點の行かぬ根問ひ葉問ひ、こちの人も常々いはしやんすには、お二人ともに世を忍ぶ身、あんまり端近へ出ぬやうと、心をつけてをりますほどに、奥にゐて下さんせ。

お梅　それは好う合點ぢやけれど、お前がた御夫婦親父樣まで、それはそれは好うして下さるにつけ、奥にばかりお客でゐるも氣づゝなく、何かなお手傳ひでもしたいと、今の先私は、その素麺の臼を碾きかけてゐたのでござんすわいなあ。

おとら　なる程、あんまり奥にばかりゐても辛氣でござんせう。そんなら人に目立たぬやう、氣まかせが好うござんすが、馴れぬことして、肩など張らして下さんすなえ。

お梅　いえ〳〵大事ござんせぬ。大分上手になりましたぞえ。

（ト、臼を碾く。）

おとら　そんなら私も素麵を、この間に切つて置きませうか。

お梅　その素麵ならこちの人が、切りかけてゞござんしたが、馴れぬ業とて太うなつたり短う切れたりしてならぬ故、おとらさんに習ふのぢやと、いふてゞござんしたぞえ。

（ト、この間に忠兵衛手拭にて片襷をして出で來り、）

忠兵衛　その素麵は私が切りかけぢやが、如何しても好う切れぬ。お前に習はうと思うてゐました。

おとら　ほゝゝゝ。たかゞ素麵を切ることぐらゐ、習ひも傳授もいることでござんすかいなあ。

忠兵衛　そんなら庖丁を如何持つて、

（ト、庖丁を取る。おとら持ち添へ、）

おとら　斯う持つて、斯う當てゝ、

忠兵衛　斯う持つて、斯う當てゝ、

（ト、二つ三つ切るうち、手が滑つて忠兵衛の小指を切る。）

忠兵衛　あいたゝゝゝ。

おとら　これは粗相をしましたなあ。

お梅　こちの人、何とぞしやしやんしたか。

忠兵衛　何の〳〵、ほんの庖丁が滑つたばかりぢや。

おとら　どうぞ量見して下されませ。今括つて上げませう。おゝ血が流れて來ましたなあ。

（ト、血を吸ひ、紙を引裂き括りなど、夢中になつて傷の始末をしてゐる處へ、新七、新兵衛親子歸つて來る。）

（新七親子これをみて、新兵衛は無言のまゝ上手障子屋體へ入る。）

（新七苦り切つて眞中に住まふ。）

（これにて三人初めて氣づき。）

おとら　おゝ、こちの人お歸りなされませ。

（ト、新七おとら忠兵衛を睨みつけ、）

新七　これさ忠兵衛、飼犬に手を嚙まるゝとはお主のこと、たゝずむ方もない處を、かくまひ置いた恩を忘れ、なぜ女房に不義しかけた。圖に乘つて後悔するな。

忠兵衛　これは近頃迷惑千萬、大恩あるそなたの內儀に、何しに不義をしかけよう。なじみが過ぎてこの仕合せ、どうぞ疑晴らして下され。

新七　いや、不義でないとはいはれまい。そなたとおとらはいひなづけ、祝言こそせなんだが、互の心に一もつあつて、晝日中ほてくろしい、二人傍へ引ッついて、そなたが小指を切つたのも、誓紙でも書かう爲めか。恐らく見た目はちがふまい。

忠兵衛　見られたことに微塵覺えはないことなれど、さう

思ふ心底からは、疑ふのも尤、母者人の去り狀で心がゝりなら、いよ／＼心殘らぬとの、證據の爲めに、うむ。

（ト、硯を取出し、去り狀を書いて新七の前へ出し、）

改めて暇の狀。さあ受取つて疑ひ晴らして下され。

（ト、新七見もせずに引裂き、）

新七　只今暇をやるまでは、不義しても大事ないとのいひ分か、梅川などは遊女の果、さうしたこともあらうか知らぬが、私が女房は在所者、不義仲間には入れられまい。いよ／＼たはけたいひ分ぢや。

（ト、これにてお梅むつとしたる思入。）

お梅　これ新七さん。遊女の果ては不義するとは、お前はいかい粹樣でござんす。京大阪の色町で、たんと御修行なさんしたやら、大和へ置くは惜しいもの。最前からの御無禮を、つく／＼聞いてゐまするが、どうやら物がありさうな。のう忠兵衞さん、御思案はござんせぬか。

（ト、これにて忠兵衞思入あつて新七の前へ進み、）

忠兵衞　聞えぬぞや新七、隱まうまいと思うなら、なぜ打あけてはいうてくれぬ。わしに無き名を立つるのみか、女房がことまでも、無念な詞を聞いたなあ。いひ分は山ほどあれど、片時も養はれた恩がある故、のめ／＼と出て行くわ。さ、仕度しや。

お梅　あい。

新七　これおとら、厄介人がいなるゝさうな。笠でも杖でも出してやれ。

（ト、いひ捨てゝ奥へ行かうとする。おとら止めて、）

おとら　まあ／＼待つて下さりませ。たとひ如何程心にさはつたことがあるとて、それ程までにお二人を、むごう情ないはしやんすは、心の底がいぶかしい。いふまでもないことなれど、私とお前が死なうとした、命二つを伯母樣に、助けられたる恩返しと、思うた故にお二人を、かくまうたのも身の祈禱、どれ程大事にいたしても、飽き足らねども御遠慮が、あつてはならぬと朝夕に、手馴れぬ業をさせますのも、お心安さでござんすぞえ。素麵切るを手傳うて、指にお怪我をなされたを、不義ぢやの何のあんまりな。思ひ返して下さりませ。

新七　名を取らうより德取れぢや。こまことぬかさず控へてゐぬか。

（ト、突放す。）

おとら　今の詞を聞くからは、最早御思案なされませ。邪險な男持つた故、私が心も一緒かと、思はれるのがそれが悲しい。添ひ果てうとも思ひませねば、時節を待つて御奉公、今日の辛らさをお詫びしませう。命があれば世の中に、辛いことばかりもござんせぬ。御息災に遊ばしませ。

忠兵衞　夫婦の間に斯程まで、ちがうた心底あるものか。賴む木蔭に雨洩つて、さし行く方も覺えねば、野原の土とならうより、そなたの情の一言を、みやげとなしていつそこの場で、

お梅　まだこの上にどのやうな、憂き目を見ようも知れぬ世に、早う殺して下されませ。

忠兵衞　ほんにさうぢや。とうになき身はかねての覺悟。……さうぢや。

（ト、押入より脇差を取出し、白刃をお梅の胸元へ差しつける。）

新七　そんなら爰で死ぬるのか。

（新七走り寄つて無言のまゝ拔身をうばひ投げすてる。）

忠兵衞　むゝ、我々こゝで命を捨てれば、難儀のかゝるを恐るゝか。氣づかひするな。

（ト、拔身を拾ひ、鞘に納め、）

さあお梅、一二丁そろ／＼歩め。

（ト、二人手を引いて立上る。）

新七　そんなら忠兵衞、村境で死ぬる氣か。

忠兵衞　おゝ、そなたに迷惑はかけぬわい。

新七　むゝ、好い覺悟。冥途の土産に見せるものがある。

（ト、上手障子屋體より、新兵衞を連れて來て肌を脱がせる。新兵衞小手を縛られてゐる。）

忠兵衞　やゝ、新兵衞殿には何故の縛り繩。

おとら　こちの人がついてゐて、

お梅　これは一體どうしたわけ。

おとら　樣子聞かして下さんせいなあ。

新兵衞　親子二人の胸にひめ、語るまいとは思へども、死なうとある故一通り申しませう。今朝より親子を庄屋へ呼びつけ、二人の衆を村中で、何でも胡散と怪しんで、先立つて早や飛脚屋仲間へ、あらましいうてやりましたとやら。

忠兵衞　やゝ、そんなら二人の身の上を、

新兵衞　さあ、取逃がしては村中が、いかい迷惑する事ぢや、必ず沙汰をいたすなと、熊野の牛王のその裏へ、判まで捺さした氣の入れやう。

新七　然し、わしが心中には、たとひ神罰受くるとも、おのれさう／＼落さうと、思ふ色目を悟つたやら。

新兵衞　そこで庄屋が智慧自慢、新七には孝行者、親の難儀を見捨てゝは、よもや落しはいたすまいと、兩人を渡すまでと、このやうに繩をかけたが、

新七　道すがら親人のおつしやるには、そちが家を思ふより、親がそちを思ふ方が、百倍千倍まさつたぞや。わしが難儀を苦しんで、恩ある友に義理を缺くな。この樣子

を語る時は、共にこちらをかばはれて、落ちもせいたぞといふ時に、忠兵衛になる。どうぞ庄屋を謀らせといはれし嗣子先を、親父様に同心して、手前の得とはいひながら、心にもない存外の段、

喜兵衛　さて〳〵情ないを思し召さう。新七夫婦はこなさんの、母人の爲に助かる命、お二人さんに成り代り、如何なる憂き目を見るとても、元より厭はぬ彼等のこと。

新七　私もあの親人が、子の爲にとて年寄りの、難儀を忍びお二人を、落さんといふ志、一禮いうて落ちて下され。

（ト、これにて忠兵衛、二人の前に手をつき。）

忠兵衛　日頃と違ふ親人とも、比べやうなき御高恩、おのれが身儘な心から、さま〴〵な恨みごと、

お梅　今更詫は恥しい。どうぞ免して下されませ。

忠兵衛　何よりも喜兵衛様、親もたき忠兵衛を、さほどまでのお心づかひ、お禮は詞につくされませぬ。

喜兵衛　何の〳〵、以前の情今日の恩、損徳なしの鸚鵡返し、禮いふこともいはれることも何にもない。時刻移れば氣づかひな。さあ〳〵早う支度〳〵。

忠兵衛
お梅　｝何から何まで。

（ト、新七、おとら、笠、杖、草鞋などを出して支度させる。）

忠兵衛　新七夫婦、あれば御恩はこの時、

お梅　おとらさんも、どうぞ達者で、

おとら　お前も御無事で、末長う。

新七　その挨拶も時刻が延びる。さあ〳〵早う。

（ト、忠兵衛、お梅門口へ出る。）

新兵衛　いや、その道は氣づかいな。裏の藪から流れに添うて、

（ト、これにて忠兵衛等裏口から出て行く。）

（皆々見送つてゐる處へ、庄屋六左衛門、以前の飛脚屋大樽屋喜兵衛。捕手四五人連れて出て來る。）

六左　新兵衛、新七、最前の約束ぢや、落人を貰ひに來た。さあ〳〵早う渡してくれ。

新兵衛　おゝお庄屋様、今こなたから歸つてみれば、夫婦の者は風をくらひ、おとらのすきをうかゞうて、有金攫ひ逃げうせました。

喜兵衛　えゝ、もう逃げてしまひをつたか。

新七　折角親父様まで縛らせて、思へば〳〵憎くい奴、どうぞとらへて下さりませ。

六左　今の間なら遠くは行くまい。それ手分けして、さがした〳〵。

（ト、皆々どや〳〵と出て行く。）

新兵衛　道を違へて出したれば、一寸のがれにのがれたが、何とも今は心もとない。それ新七おとら、早う樣子を見屆けてくれ。

新七　おゝ合點ぢや。おとら、來い。

おとら　あい。

（ト、忠兵衛夫婦が出て行つた方へ追ひかける。新兵衛氣のもめるこなし、この模樣よろしく道具廻る。）

三輪の里村はづれ、森蔭の體にて道具止まる。上手寄り小蔭に忠兵衛、お梅死んでゐる。その少し前に笠、杖など棄てゝある。もはや日が暮れて、少し雨が降つてゐる。

（ト、上下より捕手一人づゝ出て眞中で行きあひ、あたりをうかゞひながらわかれてはひる。）

（花道より百姓作兵衛、蓑笠、鍬をかついで出る。）

（上手より大樹屋喜兵衛、あたりをさがしながら出て來る。小蔭の忠兵衛等の死骸には氣がつかず、花道好き處にて作兵衛と行逢ふ。）

喜兵衛　おゝお百姓、このあたりで二十五六の男と、二十ばかりの女夫連れは見かけなんだか。

作兵衛　そりや新田の吾作夫婦であらう。今むつましさうに歸つて行つた。

喜兵衛　いや／＼そんなものではない。男は役者かと思ふやさ男、女も何處か色町風、あかの抜けた女夫連れぢや。

作兵衛　そんなものは、知らぬのう。

（ト、すまして行き過ぎる。）

（喜兵衛も仕方なく向うへ入る。作兵衛合點のゆかぬ思入。）

最前から見馴れぬ衆が、逢ふたびごとに變つた物の問ひやうぢやが、はて何事が起つたのか。

（と、歩くうち、以前の笠をみつける。）

えゝびつくりした。見れば眞新しい笠のやうぢやが、どうしてこんな處に落ちてゐるのぢや。

（ト、四邊をすかしみて、死骸を見つけ、腰をぬかすばかりに驚き、無言のまゝ上の方へ逃げて行かうとする。）

（上手より新七夫婦出て來り、突當り。）

新七　御免なされませ。つい心が急いでをりました故。

おとら　どこぞお怪我はござりませぬか。

（ト、作兵衛これに答へず、無言にて死骸の方を指差す。）

（新七合點のゆかぬこなしにて、）

新七　え、何ぞござりましたか。

（ト、傍へ寄り、死骸を見つけてびつくりする。）

やゝ、梅川と。

おとら　忠兵衛さんには、

（ト、兩人死骸を抱き起す。）

作兵衛　し、し、心中ぢや。

（ト、どうとなる。）

（新七夫婦は死骸に取ついたまゝ泣き伏す。）

（作兵衛はふるへる。）

（この模様よろしく）

——拍子　幕——

悪太郎（一幕）

一　悪　太　郎
一　智　蓮　坊
一　伯父安木松之丞
一　太　郎　冠　者

長　唄　連　中

本舞臺松羽目常の通り
片シヤギリにて幕あく

（ト下手揚幕より、伯父安木松之丞、長上下小さ刀、太郎冠者を從へ出て來る。）

松之　これはこのあたりの者でござる。某一人の甥を持つてござるが、生來大御酒を好み、その上酒狂をいたして人に難儀をかけまするに依つて、度々意見をいたせども聞入れませぬ。この度は召使ふ者を呼出いて、談合いたいてみようと存ずる。太郎冠者あるか。

太郎　はあ、お前に。

（トこれにて太郎冠者前へ出て。）

松之　その方を呼出すは別の事でもない。つれ／＼その方も知る如く、甥の儀は大御酒を好み、その上大の酒狂人でござるに依つて、人呼んで悪太郎と申す。今日はかねがね申しつけた如く、再び御酒をえ飲まぬやうにいたさうと思ふが何とあるぞ。

太郎　仰せの如く悪太郎様の御酒狂には、多くの人が難儀いたすに依つて、かねて申合せた如く、はからひ申したが好うござりませう。

松之　それについては彼の品々はとゝのひ居るか。

太郎　一々とゝのひ居りまする。

（ト後見より衣裳類などとりて見せる。）

松之　よい／＼。これならばよもや御酒も止るであらう。

太郎　げにと、止るでござりませう。

松之　さらば來い／＼。

太郎　參りまする／＼。

（ト兩人下手揚幕の中へ入る。しらせにて松羽目を引いて取る。唄出しにて松のみ殘り、月傾く[illegible]る。）

（向う揚幕の中にて。）

悪太　あゝ醉うた／＼。

ういつ

（ト揚幕唄出しになる。）

（ト悪太郎燕尾頭巾、繻袢、縞熨斗目の着附、厚板の

〔着附、狂言袴、一本差し、薙刀を担ぎ酔うたるこなし
にて出で來り。〕
ウタヒ〽錦帳のもとは魯山の夜の雨、草庵のうちぞ
思はるゝ。
長唄〽夕風に、髭鬚髭をなぶらせて月さへ二つ三
つ四つに、ちらつく目もと足もとも、ちろ
り〳〵と千鳥足、踏しめ〳〵來かゝる醉手。
〔ト本舞臺へ來かゝり、〕
惡太　あゝ醉うたことかな〳〵。今朝さる方で大分酒をた
べてござるが、我は醉はぬと思へども、これはきつう醉
うたさうな、道法も筋にも見えて歩かれぬ、誰ぞ道づれ
がほしいものぢや、ちと休息して待ち合はさう。
〔ト薙刀を杖につき休む。〕
長唄〽見やる向うへ修行者が、心も輕く身も輕く、
いそ〳〵として過ぎ行くを。
〔ト修行者智蓮坊、頭巾を被り墨染の衣、手に珠數と
鉦とを持ち出で來る。〕
惡太　のう〳〵御坊、
智蓮　やあ〳〵、こちのことでござるか。
惡太　なか〳〵、御坊はどれからどれへ行かします。
智蓮　某は西近江の者でござるが、東近江のさるお寺へ參
詣いたすものでござる。
惡太　エイ何ぢや、西近江から東近江におぢや。
智蓮　いや〳〵さうではござらぬ、西近江の者でござるが
東近江へ參りまする。
惡太　何ぢや、西近江の者ぢやが東近江へ參る、
智蓮　なか〳〵。
惡太　ではお供いたさう。
智蓮　いや〳〵、見受けますれば御人體でござる、身ども
は坊主の儀でござれば、似合はぬ連れでござる程に先づ
某は先へ參りませう。
惡太　きつと連れになるまいといふ事でおぢやるか。
〔ト薙刀にてとめる。〕
智蓮　いや、左様ではござりませぬ。似合はぬやうにござ
るに依り、かやうに申しまする。
長唄〽逃げんとすればなほ募る、酒を力のちろち
ろ目。
〔ト薙刀をからめ、坊主下手にきまる。〕
惡太　似合はぬ道ぢや、いや〳〵昔より出家侍というて、
坊主と侍とは仲好うせねばならぬものぢや。どうしてあ
らうとまゝよ、是非に御同道申さう。
智蓮　其儀でござりませうなれば、お供いたしませう、先
へござりませい。

惡太　いや〳〵、法師を供に連れるといふ事はない。わごりよ先へおぢやれ。

智蓮　は、それなれば參りまする。ござりませい。さあ〳〵參られい〳〵。

長唄へいかんとすればやんちや聲薙刀そばめねめつくる。

（ト坊主上手に行くを惡太は目先に薙刀つきつける。）

惡太　わごりよは人の同道申さうといふに何として先へ行きやるぞ。先へ行き度くば、さあ先へお行きやれ。

（ト目先に薙刀さしつける。）

長唄へ廻す薙刀水車、それにはあらで醉ひどれの、足もながれてよろ〳〵と、片輪車のとめどなく。

（ト惡太郎薙刀を振りまはす。）

智蓮　わあ――何がさてお供いたしませいでは。

惡太　は丶丶丶丶、これはざれごとでござる。

智蓮　こはいおざれごとでござる。

惡太　さあ〳〵先へ行かしませ。

（ト惡太郎の薙刀を氣味惡るがりながら、こは〳〵先へ立つ。）

惡太　さあ〳〵ござれ〳〵。さて御坊はどれからどれへやら行くとおしやれたの。

智蓮　西近江から東近江へ參りまする。

惡太　それ〳〵、西近江から東近江、西近江から東近江。○御坊、この薙刀をかうかいかうだ處は、早やからうか遲からうか。

智蓮　出家の事でござるに依つて、早うござらうも遲うござらうも存じませぬ。

惡太　一手使うてみせう。

智蓮　いやおかしやりませ。

（ト止める。惡太郎二三度薙刀を使ひ、とゞ尻餅をつく、智蓮坊は始終はら〳〵するこなし。）

惡太　あゝ使はうと思うても、醉う醉うたに依つて使はれぬ。○御坊、どれからどれへ行くというたの。

智蓮　西近江から東近江へまゐりまする。

惡太　おゝ、それ〳〵、西近江から東近江。○御坊折入つて所望申すものがござるが。何と聞いてはたもるまいか。

智蓮　何事の御所望かは存じませぬが、見らるゝ通りの貧僧、上ぐるものとてはござりませぬ。

惡太　いや〳〵平に所望申す。

智蓮　所望とは何事でござる。

惡太　物でござる。

智蓮　物とは。
（トだん／＼薄氣味惡き思入れ。）
惡太　はなしでござる。
智蓮　何と。
惡太　御坊の佛道修行のはなしこれにて聴聞いたしたい。
（トこれにて智蓮坊やう／＼安堵せし思入にて。）
智蓮　それはいとより安い事、その代り物語りいたいたら、どうぞ道連れはゆるいてくれさしめ。
惡太　その儀は心得た。物語りさへいたされたら、何とあらうと心まかせぢや。
智蓮　さらばおはなし申さうか。
長唄〽もとよりこの身は本來の、一物もなき假りの世に、斗藪行脚を思ひ立ち、堂塔門院古寺古跡、拜み廻れば面白や、さゝひも渡る彼の岸の、柳はみどり紅の花にまよひの雲晴れて、眞如の月の照りそへば、樹下石上を宿として、彌陀の御國を夢にみる出家の身こそ氣安けれ。
（トよろしく振ありてなさまる。）
惡太　やんや／＼、面白い／＼。
智蓮　これにてゆるいて下されい。

惡太　いや、この度は某が薙刀の物語をつかまつらう。
智蓮　また薙刀でござるか。愚僧はこれにてお暇申す。
惡太　いや／＼、酒ぢやとて差さば戻す、大事ない程に先づお聞きやれ。
（トこれにて智蓮坊よんどころなく下にゐる。）
ウタヒ〽さても西塔の武藏坊辨慶は、
長唄〽着たる鎧は黑革の、おどしにをどせる大鎧、草摺長に着なしつゝ、刃も四尺、柄も四尺、合せて八尺、元より好む大薙刀、まんなか取つて打ちかつぎ　ゆらり／＼と出でたる有樣、如何なる天魔鬼神なりとも、面をむくべきやうあらじと、我身ながらも物頼もしく、手に立つものゝ、あゝほしやと、板橋とゞろと踏みならす。
惡太　なにがしは平家の侍、惡七兵衛景清と、名乘りかけ名乘りかけ、
長唄〽三保の谷が着たりける、兜のしころを引つつかみ、えいやと引けば、これは何するえいと引く、引くに引かれぬ戀の意地、かい込むそれにあらね共、そのなぎなたのほうづきも、主をまつ間のうさはらし、通ふ戀

晩も朝から晩まで、山坂こえてこれこの通り草履まで雉刀なりの笑止さよ。

智蓮　やんや／＼。面白い事でござつた。○さらばこれにてお暇申す。

（トよろしく振ありてたちまろ。）

惡太　さらば下向を待ちまする。

智蓮　さらば／＼。

惡太　さらば／＼。

長唄〽毒蛇の口をのがれし心、命ひらうて走り行く。

（ト智蓮坊はほつとしたる思入にて走り行く。）

惡太　はゝゝゝ、面白い坊主ぢや。好いなぐさみであつた。○はて、これよりいづかたへ參るのであつたかしらん、はてなあ。

長唄〽思案なかばへ主從は、尋ね／＼て、

（ト惡太郎腕組をして考へてゐる處へ、以前の松之丞太郎冠者出で來り。）

松之　これはしたり、惡太郎ではないか。

太郎　方々と尋ねました。

惡太　おゝ伯父者人、太郎冠者、只今こなた樣へ參らうと存じた處でおりやる。

松之　何ぢや身共の處へ參る。身共もそなたの處へ意見のいたしに參つたのぢや。

惡太　何ぢや意見ぢや。

太郎　こなた樣は又御酒を上らせられたと見えまする。

惡太　何と酒を[illegible]はうと仰せられまするか。

松之　いや／＼さうではない、餘程すぎたと見えて、好い機嫌ぢやと申すことぢや。

惡太　好い機嫌と見えまするも道理、これでござりまする。

（ト雉刀をつきつける。兩人あとへしさり。）

松之　危い／＼先づ御待ちやれ。

惡太　さる方で、この雉刀をもらひました。金具の使ひやう、鍔元のやうす、石突の好み、

（ト石突をかへして太郎冠者へつきつけ。）

どこからどこまで、名作物ではござらぬか。

（ト左右へ振りまはす。兩人は後じさりしながら。）

松之　げにと名作物さうなが、必ず／＼人に當つるな。

惡太　なか／＼當つることではござりませぬ。

太郎　人に怪我ばしさしまするな。

惡太　怪我などさすることではない。が一手使うてみせませう。

松之　いや／＼それには及ばぬ。

惡太　さらば伯父者人、一つ舞はしめ。

松之　何ぞ舞へ。

惡太　好い機嫌ぢや程に一つ舞にしませ。

太郎　好い機嫌はこなた樣ではござりませぬか。又その樣な御機嫌を仰せらるゝか。

惡太　いやく、是非舞はしませ、舞はぬとあれば、薙刀を使うてお目に懸けませうか。

松之　いやくそれには及ばぬ。何としよう是非がござらぬ。さらば太郎冠者連れ舞にいたさう。

太郎　よんどころござりませぬ。

惡太　舞はしめませく。

長唄へこゝはいつこと問ふたれば、こゝは駿河の鞠子の宿よ、さては嬉しや鞠子まで來たか、宇津の山邊を歌でやる、手綱ゆりかける馬追ひ來れば、こゝは下露下の坂、宇津の山邊のゆめうつゝ。

（ト振りのうち、惡太郎はやんやくと聲かけながらいつの間にか肘まくらして寢てしまふ。）

松之　さあく舞うた程にもう好うおりやらう。

太郎　これは如何なこと、人にさんぐ舞はさして置いて、餘念もなう寢てござる。

松之　いやく太郎冠者、惡太郎の寢たを幸、かねてしめし合せたやうにいたさうではないか。

太郎　心得ました。

松之　かならず目を覺まさぬやうにいたせ。

太郎　その儀はお氣遣に遊ばしますな。

（ト兩人にて寢てゐる惡太郎を坊主にし、袖折をぬかせて、枕元へ衣と珠數を置き、薙刀と刀を持ち。）

長唄へさゝやきうなつき兩人は、小蔭へこそは忍びゐる。

（ト兩人さゝやき松之丞は上手太郎冠者は松の木の蔭へかくれる。）

長唄へ後には一人惡太郎、とりのこされて松の下、ふけゆくかねに目をさまし、

（ト惡太郎目を覺まし、大あくびをし。）

惡太　茶をくれい、茶がのみたいぞ、茶をくれいく。

（ト手を叩く。）

さてもく好う寢たことかな。

長唄へあたりみまはし、こりやどうぢや。

惡太　これは如何なこと、宿に寢たくと存じたれば、これは街道でござる。○やこれは如何なこと。某は薙刀を持つて參つたが、薙刀もなし刀も見えず、はてなあ。

長唄へ松の露さへ襟元の、さむさ身にしむ夜の風。

（ト頭をおさへ坊主になりゐるので、びつくりなし、）
惡太　やあ〳〵坊主になつた〳〵。はあやれ〳〵こりやどうぢや。
長唄へかたへを見れば墨染の、衣ばかりか薙刀の、氷にあらぬ水品の、珠數さへ添へて置いたるは、もしや佛のお告げかと、氣がつくほどに、こはけたち、
惡太　盗人のわざならば、かやうな物は置くまじに、合點の行かぬ事でおりやる。
（ト衣、珠數を手にとり合點の行かぬ思入、）
長唄へいつくともなく怪しの人聲。
（ト太郎冠者松の小蔭にて、）
太郎　やい惡太郎。
惡太　はあ。
太郎　日頃よりして大御酒を好み、惡業をのみいたすに依り、今よりそちが名を南無阿彌陀佛とつくるぞえい。
惡太　はゝあ。
長唄へいとも尊き聲ばかり、姿は見えずなりにける。
（ト平伏する、上手より松之丞うかゞひ腹をかゝへる。太郎冠者笑ひながら上手へ行き、松之丞と共にかくれる。）
あゝ、ありがたや〳〵、某若年の時より大御酒を好み、酒狂のみいたすに依つて、佛のふびんに思召し、向後酒をのみ止り、善心になつて、成佛いたすやうとのお告でばしござらう。最早この上は疑ふ事もなく、佛道修行いたさうと存ずる。
（ト衣を着、珠數を持ち立ち上る。）
長唄へ昔に變る姿さへ、心も今は青道心。
今よりして某が名は、惡太郎ではなうて、〇おゝそれ〳〵南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。
（ト拜む。）
長唄へ折からこゝへ念佛の
（ト上手より鐘の音聞え、南無阿彌陀といふ聲聞える。）
はや某が名を呼ぶ者がある。返辭をせずばなるまい。〇やあ〳〵〳〵。
（トこれにて以前の智蓮坊鐘を叩きながら出て來る。）
智蓮　南無阿彌陀佛〳〵。
惡太　やあ〳〵。
智蓮　南無阿彌陀佛〳〵。
惡太　やあ〳〵〳〵。
智蓮　さても可笑しい事を申すものがござる。愚僧が念佛

を申せば、やあ〳〵と返事をいたす、定めて氣狂でござらう。○この度は調子をかへて申してみませう。○南無阿彌陀佛〳〵。

（ト一調子張り上げる。）

惡太　これは如何なこと。この度は調子をかへて呼ぶ。某も調子をかへて返事をせずばなるまい。○やあ〳〵。

（ト調子をかへたり、早めたりゆるめたりすること二三度あり、終に浮かれ拍子になり、踊りながら兩人行きあひ。）

兩人　あはゝゝゝ。

智蓮　さ、こなたは最前の醉ひどれ殿ではござらぬか。

惡太　や、たれかと思うたら最前の法師殿か、某も最前の醉どれの惡太郎ではござらぬ。

智蓮　何とおつしやる。○みれば姿形も變つてござるが、それにしても御僧が念佛を申せば、やあ〳〵と返事をさしますは如何やうな事でござる。

惡太　さればでござる。某が名は惡太郎ではござらぬ。南無阿彌陀佛と申すのぢや。夢の間についたる名ぢや。

智蓮　何ぢや南無阿彌陀佛・さても〳〵うらやましいありがたいことでござる。南無阿彌陀佛と申すは、忝くも西方極樂世界の教主の名でおりやる。

惡太　ほう。

智蓮　現に一念彌陀佛即滅無量罪と申してさま〴〵の功徳の深いことでおりやる。この上は思ひ切つて佛道修行いたさしませ。

惡太　どうぞ好いやうに引きまはいて下され。

智蓮　何かさて引きまはすでおりやらうとも。○先づ念佛を唱へさせられい。

惡太　念佛とは。

智蓮　念佛を忘れたれば、我が名を呼んでみさしませ。

惡太　南無阿彌陀。

智蓮　南無阿彌陀。

惡太　南無阿彌陀。

智蓮　さうぢや〳〵。

長唄〽あらありがたや尊やな、夢につきたる我名をば、稱へ〳〵て一すぢに、念佛申して歸りける。

（トこのうち三味線の合方につれ、兩人南無阿彌陀を稱へながら、空也やうの踊りになる。上手より以前の松之丞太郎冠者の兩人も念佛踊りに浮かれ出で、共に踊ること模樣よろしく。）

――幕――

幻椀久（一幕）

一椀久法師
一松山太夫の幻
一引舟松風の幻
一禿重野の幻
一座頭菊市の幻

清元連中

住吉の松原見越しに燈籠浪打際など見ゆ。松と松との間にはモツ張りの仕掛あり、幕明くと直ぐ清元の淨瑠璃になる。

〽榮華は昨日の夢覺めて現に迷ふ今日の身は、法師法師は木端と思ふは野暮よ譯知らず心の花の色も香もしらせたいぞやはつちはち

（ト花道より椀久少し破れたる衣投げ頭巾鹿の角のつきたる杖に瓢簞を下げすべて鉢叩きの拵らへ、狂亂の體にて出で來り。）

〽いつの頃より逢初めていとし〳〵の其末の末の松山思ひの種よ今は心も亂れ候さりとはさりとは死なうかのどうともせよとかく戀路の濡れ衣干さぬ淚の露の玉

（ト振りありて花道よき所に止り）

椀久　是は御存じのはつちはち衣は濡に濡れども主は例[illegible]の香は消えやらぬ傾城買のなれの果[illegible]法師のはつちはち椀久法師のはつちはち

（ト瓢簞を叩く。ふと本舞臺の方へ耳を傾け）

ヤ何やら聞ゆるおゝ〳〵騷ぐは洒落れるは波の鼓に松風の音や、とんと面白さうぢやわいどれ我等もそれへ、推參申さう。

〽狂ひ亂れて他愛なく松を日當てに來りける

（ト本舞臺へ來り松の立木を見て、）

椀久　ヤ松ぢや〳〵〳〵太夫ぢや〳〵〳〵。ヲヽ、松山太夫であつたよのう。

〽我身は變かはれどもかわらぬ松の緑濃き色も嬉しなつかしの君が顏只一ト目見たい逢たい戀しさの搆じ〳〵て物狂ひ

（ト此間に上手よき程の松と松との間のモツ張の中へ松山太夫の幻現はる。）

松山幻　椀久さん、ようござんしたな。

（幻の臺詞はすべて清元でつける。）

梚久　ヲヽ太夫か。久しや〳〵久し振りの逢ふ瀬に。

（ト四辺を見廻はす。下手よき所の松と松との間モジ藪の中に菊市の幻草履の侭らへ、背に三味線を負ひて現はる。松山の幻消える。）

ヲヽそちや菊市か。

菊市の幻　お三味は松山に入りの扇六景の蒔絵の大盃。

梚久　酒あすべく早へ受けう。

（ト菊市盃をすげ但し盃で無く手にてさす心、梚久盃を受ける心。菊市の幻も盃の中にて放ちしまふにて注ぐ、梚久飲む。）

イヤ昔馴々々コリヤを忘れた昔覚え、昔ながらの菊市の三味線も久しいのう。唄へ聞かうぞ。

（ト菊市背より三味線を下ろし弾く。）

〽昔は花かや花なら散るに続く紅葉の色まさる目覚

つもれば色まさる

〽松の青葉にかけて君のたことさに操させたや青葉の侭に萌めたや

（ト菊市宜しく振りあつて納まる。）

梚久　ヲ面白い〳〵コレ太夫面白いと云ふもそなたに逢ふた東の間の楽しみ。

（ト此うち菊市の幻消え、松山の幻現はる。）

〽此梚久はすぎし頃破れし柄の襟衣ないて別れし其後は逢ふ夜に只ひとり床はなれゆく暁の其きぬぎぬの面影を問へど答へずしよんぼりと昨日は今日の昔にてそも我ながら浅ましや

（ト宜しく梚久振り。）

〽のう其かこち言われも亦同じ思ひの寄辺に月にたよりを松山の浪越すばかりうき涙願ひ叶ひし此逢瀬隔れし糸の彼れ衣裳も情も捨法師かはり果てたるなりかたち御ンいたはしのお姿やとたゞさめざめと泣くばかり

（ト下手に菊市の幻現はれる。）

菊市の幻　其おなげきもこうお逢ひなされる上は御無用々々サア此上は昔の通り。

松山の幻　ほんにさうぢやわいな。今さら云ふても詮ない事。

〽伏屋の軒に見る月も廓の窓にさす影も光りは同じ法の道姿はかはれども心々は二世三世かはらぬ色と誓ひてし

〽青の葉草も一々に忘れかねては繰りかへす千束の文の数々をそらで覚えて懐かしく

（ト松山梚久宜しく振り。但し幻の松山と梚久とはいつも一定の距りを越えずして弱みたる如き振り。）

菊市の幻　出来た。是で御きげんが直つたか松風さん。

（ト好き所へ松風の幻引舟の拵らへにて現はれる。）
重野さん。
（ト同じく重野の幻禿のこしらへにて現はる。）
華車どのもこゝへ。
（ト華車の幻赤前垂の拵へにて現はる。）
太夫様と椀久様の御きげんの直つた祝ひにわつさりとやりかけませうか。
椀久　ヲヽ、菊市よう氣がついてたもつた。ソレ花ぢや皆にやりや。
（ト落散る松の葉を拾ひ集め開きし扇の上へのせ皆々に撒いてやる。）
〽花と雪とはどれがよし野の眺めやら花やら雪やら
それがよし野の眺めやら
〽松と浪とはどれが雲やら飛沫やら別れの袖は
〽どれが露やら涙やらどれが松やら松山の姿も廓の夕暮もありし形はまぼろしの寄らんとすればたよりなくすがらんとすれば泡沫の消えて殘るは松風かむせぶが如き浪の音泣いつ笑ひの狂亂の狂ひつかれて足たゝず芝を褥に伏したるは目も當てられぬ風情なり
（ト一同宜しく振りあり。椀久は是に突りて扇の松の葉を皆々に撒いてやることあり。其うち幻一人〳〵消える。最後に松山一人殘り椀久追ふ。松山の幻消える。次第に暗くなり空には宵の明星輝く椀久松の根方に泣き沈む。）

──鐘の音聞えて　幕──

（大正十二年作）

松居松翁篇

秀吉と淀君（一幕）

人　物

豊臣秀吉
淀　　君
近習名古屋山三

場　所

桃山御殿の一室

時

第十六世紀の末つかた

（朝鮮王献上の螺鈿の大食卓を中央に、青磁の大鉢へ茹卵を盛り、銀の皿の上にてそを貪り食ふ秀吉、之に對して黄金の箸もて卵の殻を剝く淀君、秀吉の顔には青き筋二條三條現はれ、淀君の面には不安の色漂ふ。）

秀吉　此卵は生ぢや、茹かたが足らぬ。

淀君　殿下は昨日茹過ぎたとて御不興でござりました。

秀吉　昨日は堅すぎた。今日は生過ぎる。おれは堅すぎるのも嫌ひなら、生過ぎるも好かぬ。恰度よいのがよいわ。

淀君　殿下の御思召にかなふ様には、なか〳〵難かしうござりまする。此卵は南蛮渡来の時辰儀の長い針が、三桁半動く間湯の中へ置いたのでござりまする。しかも妾が自身でいたしたのでござりまする。御意とあれば致しかたがござりませぬ、妾がいたゞきまする。妾は斯様なが大好でござりまする。殿下には別に煮てさし上げませう。

秀吉　いや、もう遅いわ。夙に向ふまへには卵の煮やうを知らぬだけは生ぢや。これからは臺所で煮させえ。

淀君　臺所で致したのでは殿下の御気にはいよ〳〵合ひませぬ。温かなをさし上げようと思へば、殿下は遅いと叱らせられまする。殿下の御叱りを受けぬ様にと、前かどから持つて參れば、今度は冷えてゐたと御叱りがござりまする。

秀吉　おれにはその様な事を云うた覚えは無い、夙に何時間人にさせえ、俺は卵の煮かたを扱う心得て居る。

淀君　明日からは左様致させませう。

秀吉　世は太平と云うても、いつまた兵馬を動かす事にならうも知れぬ、おまへほどの女が卵の煮やうぐらゐ知らいでは、心元ない事ぢや。（やゝ感傷的に）あゝ寧々（北の政所）は卵の煮やうが上手だつた。

淀君　（忽ち嫉妬に美しき目を輝かせ）寧々？　本丸さまの事を仰せられまするか。

秀吉　左様ぢや、其は上手に別な褒てくれたわ。

淀君　甚さまは御上手な者でございます。母御が大住の姉でございますもの。

秀吉　そりや誤も無い事ぢや。母は津島者の富豪の娘ぢや。

淀君　富豪でも下賤なものはいくらもござりまする。

秀吉　藤井又右衛門の妻の實家ぢや、下賤な者は無い。

淀君　藤井殿とてもとは津島の土百姓でござりまするがな。

秀吉　そりや嘘ぢや、藤井は郷士ぢや。

淀君　何にせよ、藤井様とわたしとを一緒に思うて下されては情なうございまする。淀は今こそ斯様になり果てましたが、これでも故内大臣信長公の姪でござりまする。卿の思すうには存じませえでも、國家を治むる御輔佐は見事致しまする。

秀吉　もう分つた／＼、おれはたゞ事々が卿や褒る事が上手がやつたと申したゞけぢや。

淀君　いゑ、あなたは御褒と他の事を云はうとして居られたのでござります。寧さまには妾に出來ぬことも出來ると云はうとして居られるのでござりまする。

秀吉　これは又淀殿！　卿好を思うたら何事でも爲遂げ得る秀吉では無い。強いて口でいふ事に何の遠慮。おれはたゞ永つにい開は假へ言や、そして今朝の卿は生おそつたといふたまでぢや。

淀君　（つと身を起して室を出でんとしながら）もう何もかも分りました。あなたはたゞ妾に御暇を賜はれば、それでよろしいのでござりまする。而して寧さまなりどなたなり、卿の褒やうを御存じの方と御暮しなされば、よろしいのでござりまする。

秀吉　まあ靜かにせえ！　おれはおまへに褒れたゝさうでていうたのでは無い。おまへが卿の褒やうが上手なことも能う知つて居るわ。

淀君　（座にかへり）殿下はその口前で天下を御取りなされました。併し淀はそのお口には乗りませぬ。もう／＼どの様な事がござりましても、淀は生涯卿は褒は致しませぬ。

秀吉　それもよからう。時に淀、おれは昨日能をまた一つ拵へた。喜多七太夫めにやらさうと思ふが……

淀君　七太夫は利口ものでござります。殿下のお作でも平氣で舞ひますする。

秀吉　金剛とて舞うて居るわ。

淀君　「芳野詣」や、「明智」、「北條」は金剛が舞うたのではござりませぬ。金剛の弟子の七太夫が舞うたのでござりまする。

秀吉　七太夫もその頃金剛を名乗つて居つた。

淀君　それを殿下は寵かせられて一家を興させられ、春日の四座が五座になりました。七太夫は利口者でござりまする。

秀吉　左様皮肉に申すな、兎に角おれは昨日「明智征伐」といふを作つた。

淀君　また例の御自慢でござりまするか。

秀吉　自慢では無い、有りの儘を語るのぢや。（懐ろより紙を出し讀まんとす）

淀君　それにしても「明智征伐」といふ名が誇らしうきこえませぬ。

秀吉　ど、どこが悪い？

淀君　わたくしならば「明智討」と致しまする。征伐といふ字があまり堅くるしうござりまする。

秀吉　しかし明智は逆徒ぢや、たゞ「討」とだけでは物足らぬわ。

淀君　逆徒にもせよ、ものが小さうござります。あれしきの侍一人二人討取るに征伐とは餘り物々しい様に思はれまする。

秀吉　（膝をうち）したり！　淀。さすがは總見院さま（織田信長のこと）の姪だけある。よし「明智討」と改めう。

淀君　（忽ち秀吉の收攬策にのせられ、うれしげに）してその文句と申しますのは。

秀吉　最初がワキの出ぢや。「時は今天が下知る五月かな五月かな……」

淀君　「そも〳〵これは明智日向守惟任光秀なり……」でござりまするか。

秀吉　左様腰を折つては困る。まあこゝはあとで聞かう。シテの出を聞いてくれえ。「五月蠅なす荒ぶる神もおしなべて、今日は名越のはらひする、時しも水無月十三日……」

淀君　（嘲みたる調子にて笑ふ）はゝゝゝは。

秀吉　な、なにが可笑しい。

淀君　名越の祓は水無月晦日でござりまする。十三日ではござりませぬ。

秀吉　それなら祓の日を變へてもかまはぬ。

淀君　左様にはまゐりませぬ。「水無月の名越の祓する人は千年の命のぶとこそすれ」といふ古い歌もござりまするほど、紀では大事な祭事でござりまする。いくら殿下の御威光でも、左様はまゐりません。

秀吉　それは困つたな。そこを直すと次の文句も皆くづれる。軍も謡も先手が崩れたらあとは骨灰ぢや。

淀君　そんならば如斯なさりませ。「五月蠅なす荒ぶる神もおしなべて、名越の祓するといふ、時しも水無月十三日……」

秀吉　いしくも申した。卵の抜儞とはいかい違ひぢや。
淀君　しかし藻さまには敵ひませぬ。
秀吉　もう其の事に申すな。それから如意ぢや「流す茅の輪の何とかの罪、敵にぞ思ひ知らせんと、加茂の御神を遙かにも額づく髪や神風の……」
淀君　御待運ばしましたか「額づく髪の」の髪は、つむりの髪の事でござりまするか。
秀吉　左様さや、額づくというて髪を呼出し、髪といふて神に集いた字の働きは一段にあらう。
淀君　そのシテは殿下御自身の事でござりまするか。
秀吉　いふ迄も無い。
淀君　それならば「額づく髪」は可笑しうござりませう。
秀吉　何故かな。
淀君　でも、その殿下の御頭には髪が無かつた筈でござりまする。
秀吉　（わざと空とぼけ）はて不思議な事を聞くものゝ。
淀君　明智方の四方田に迫つめられ廣徳禪寺で御頭を丸められたは、水無月の十日ではござりませぬか。
秀吉　あはゝゝゝは。（哄然大笑す）
淀君　（わざと相手にならず）水無月十三日までは三日しか經ちませぬ。何ぼ蓮の魔法でも左様早う髪は延びますまい。

秀吉　はゝゝは、まだその様な事を申すか。あの時髪を落したはおれでは無い。替玉の淺野七郎左衞門ぢやと、幾度も申しきかせたでは無いか。
淀君　いく度承はりましても、まことらしうは思はれませぬ。
秀吉　強情な奴め。
淀君　これが織田家の血を分けた罪でござります。強情は織田家の紋處でござりまする。
秀吉　左様の、しかし織田家の強情は遂げぬ強情ぢや。鼻先の強情ぢや。
淀君　えつ。（と、目尻逆立つ）
秀吉　三七どの（信孝）が左様であつた。秋田へ行かれた常眞どの（信雄）も左様であつた。いや信長公が第一左様ぢや、その爲めに惟任めに殺られたのだ。
淀君　あ、あなたは叔父上——あなたを草履取から今日の御身の上まで引上げられた叔父上をさへ、その様に仰有りまするか。
秀吉　（一時額の筋の太さを増したりしが、やがて額の筋肉を緩め）「額づく髪の神風や、……」
淀君　もう承はりますまい……
秀吉　まあ、左様云はずと聞け。「吹靡けたる其つ草、苗代水も豐かなる山崎にこそ着きにけり、山崎にこそ着きに

けり」

淀君　「着きにけり」では違うて居りまする。

秀吉　能う異論を申す女ぢやの、なにが違うて居る。

淀君　「山崎にこそ」と申せば、「着きにけれ」と申さねばなりませぬ。「着きにけり」とは申されませぬ。

秀吉　怪體な事を聞くわ、何故云はれぬ。

淀君　「こそ」といへば「けれ」と受け、「ぞ」と申せば「る」と結ぶ。これが倭言葉の掟でござりまする。

秀吉　ふむ、してその掟は誰が定めた。

淀君　誰が定めたかは存じませぬが、天然自然神代のむかしより定まつて居りまする。

秀吉　しかし、謠には「こそ」と云つて「れ」と承けぬ事も度々あるわ、既に「三井寺」の謠に、「月こそ多きに今宵しも」とある。

淀君　それは無學のものが作つたのでござりまする。畢竟謠なぞは無學下賤の作るものでござりまする。

秀吉　汝はおれを無學下賤ぢやといふの？

淀君　あなたは妾をば鼻先の强情ぢやと蔑みなされました。

秀吉　そちは自分から强情ぢやというたぢやないか。

淀君　いゝえ、あなたが仰せられたのでござります。

秀吉　それに嘘はあるまい。

淀君　倭言葉を知らぬ人を無學たというたにも、嘘はござりますまい。

秀吉　倭言葉は知らいでも天下は治まるわ。

淀君　でも大和人とは申されませぬ。

秀吉　おれは唐土の王になるのぢや、唐土の語には「こそ」にでも「ぞ」でも、皆「り」で結ばせる。

淀君　拾丸（秀頼）の代になつたら、唐土でも倭言葉を用ひさせまする。

秀吉　そりやならん。

淀君　何と仰せられても、拾丸には妾の言を用ひさせまする。

秀吉　それはおれが許さぬ。

淀君　許されえでも背きまする。

秀吉　なに、おれの言に背く？

淀君　背きまする。

秀吉　もう我慢がならぬ。（つと立上り、奥の方を見て高らかに呼ばる）山三、伴作、曾呂利は居ぬか。

（近習名古屋山三登場。）

山三　御召にござりまするか。

秀吉　奉行は誰が詰めて居る。

山三　石田殿居られまする。

秀吉　さらば治部に申しつけえ。西をば入牢申しつくる準

備いたせた。

山三　(不安らしく首傾け)西? 西? 御西さま、西丸さまの事でござりまするか。

秀吉　たはけめ! 分らぬか、西丸の事ぢや。こゝに居る淀の事ぢや!

(山三呆れて淀君を見れど、存外落着いたものなり、秀吉ちらと見て。)

秀吉　其方から諸事に左樣申せ、何時でも式(しき)期の出來る樣準備をいたす樣觸れて。

山三　委細、趣旨を申しまするで。

秀吉　首肯いて。

山三　(淀君を見て顏色も失せ)はゝあ。

秀吉　(立かゝる山三を呼止め)それから幽齋に逢うて、婚の支度には、萬事細川殿の意が入用か如何か、尋ねてまゐれ。

山三　ハ、ア。

(山三退場、日暮れて陰森の氣場に滿つ。)

淀君　諸にばかりではない、倭言葉は何にでも入用ぢや。

(淀君言ひ棄てゝ立上る。)

秀吉　何處へ行く。

淀君　死んだ後にも見苦しからぬ樣、身のまはりをとゝのへ、日も足りませぬ、給仕にも一目逢ひたうござります。召仕のものもそれ〴〵言置をつけねばなりませぬ。

秀吉　それにしても左樣急く事は無いわ。

淀君　折角ではござりますが、片時でも惜うござります。書置も澤山かゝねばなりませぬ。

秀吉　別れの盃をせう。

淀君　(口惜しげに)時は少なうござります。爲べき事は多うござります。

秀吉　まあよいわ、一獻酌まう。

淀君　妾の御相手は御無に召さぬ筈でござります。妾の上命は短かうござります。酒の位に考へねばならぬ事がたんとござります。

秀吉　(不安らしく笑ひながら)淀、ありや嬉戯ぢやよ。汝が左樣眞面目に取らうとは思ひもかけなんだよ。

淀君　妾にはその樣な嬉戯はわかりませぬ。

秀吉　まあ可いわ〳〵。過ぎた事は過ぎた事ぢや。兎に角一獻やらう。

(白銀の如き月光二人を照す。)

秀吉　心地よい月ぢや、汝の琵琶を所望せうかの。

(山三入來る。)

山三　石田どの微かに頭痛退出致されました。尚幽齋どの仰せには、諸には倭言葉強ちに入用ではござりませぬとの事にござります。

秀吉 （勝利の色をつゝみかねて） よい〳〵、其方はもう退つてよい。治部明日登城致しても、何も申すには及ばぬぞ。（山三一禮して退場） さあ、之から月見御殿へ行て琵琶を聽かうぞ。琵琶は汝に限る。「山崎にこそ着きにけり、山崎にこそ着きにけり」

淀君 「こそ」といへば「着きにけれ」でござりまする。

秀吉 （小兒を賺す如き甘たれたる調子にて） 左樣ぢや左樣ぢや、そちの云ふ通りぢや。「着きにけれ〳〵」さ、月見御殿へ行て一獻酌まう。

（二人手を携へ奥へ入る。）

――幕――

淀君と三成

人物

お　茶　々（後に淀君）
お　　發（其妹）
石田治部少輔三成
織田上野介信包（御茶々等の叔父）
織田三十郎信重（其長子）
松　雪　尼
小川平左衛門（石田の家臣）
侍女四人
石田の家臣大勢

時

天正十七年九月朔日

處

伊勢阿濃津　織田信包が城内の庭園

勢州阿濃津
織田上野介が城内の庭園

舞臺稍下手寄りに松の大樹、枝は舞臺一杯にのびて、それにまつはる蔦は、霜こそ帶びれ、稍色づきて、風情ことに面白し。松より下手には幅一間ほどの小川、その上に赤き擬寶珠づきの欄干ある橋を架く。その岸に一本の梧桐。正面の背景は、木立を通して贄崎の海を見るこゝろ。下手は橋を越えて、淺井備前守長政が遺愛の息女お茶々その他の居間の一部を示す。松の下には毛氈を敷きて、松に近く風爐其他の茶器を置き、長政の長女お茶々、茶を點て終り、茶碗を洗ひ居る心。上手の方には尼僧松雪、お茶々の妹お發の兩人坐り居る。いづれも一種の暗雲に鎖されて、顔を擡ぐる力さへなし。此人間の苦惱を嘲けるが如く、秋の色鳥樂しげに樹間に囀り居る。

幕明くと一同しばらく無言。松雪尼まづ口を開く。

松雪尼　只今拜見致しましたその茶入と云ひ、そのお釜と云ひ、此尼には如何やら見覺えの有る樣に存じられまするが。

お茶々　左樣もあらう。この品々は妾たちが二度目の父と頼んだ柴田どのが遺愛の茶器ぢや。

松雪尼　それなれば、若しやあの大國の茶入れと……

お茶々　左樣ぢや。釜は姥口ぢや、

松雪尼　併しその二品は、北の庄御落城の折、中村文荷齋が拜領致しましたのを、冥土の御供致す身には不要な品と、柱に打あて微塵に碎きましたやに承はつて居りまするが。

お茶々　その折は、妹たちもわらはも、賺す樣に和められて、落延ひた後の事故、人傳てに左樣聞いては居たなれど、まことは其時筒井順慶の使者に來た島左近とやらへ、柴田殿から贈られたを、その後左近が主取りした石田治部少輔といふものより、叔父上へ贈つてくれた亡き父上の遺愛の品、母上も折々は手をかけ賜うたと思ふにつけ、懷しうてならぬのぢや。

松雪尼　わたくしも久振にて御兩方に、おめもじ致す心地して、有りし昔がおもひ出でられてなりませぬ。（指を折つて）あの折は姫君にはお十三、（お德に向ひ）あなたさまにはお十一、ほんに恐ろしい事でござりましたな。

お德　そなたに手をひかれ、姉上とたつた三人、城門の外にのがれ出たあの時の悲しさ怖さ、今見る樣にあり／＼と、此兩の目に燒きつけられては居るもの丶、わたしの稚い心には、この樣な品々は少しも殘つて居らぬのぢや。

松雪尼　あの折は相手が名にし負ふ、秀吉どのでござります故、どの樣な事にならうかと、この婆も大概案じた事ではござりませなんだ。したがあの關白といふおひとは、あなた方とは前生から仇敵どしでがなござりませうか。生みの父御さま、育ての父上、お母さままで、あの人の爲めに無念の御最期……

お德　ばゞ、そればかりか、今度は姉上を欲しいというて無態の戀慕ぢや。

松雪尼　ほんに其御話は、先程上野介さま御親子からうかがひました。なんぼ御運が拙なければとて、あなた樣は誰あらう、江州小谷の城主淺井備前守長政公の御息女、故右大臣信長公には御姪御、あの樣な成上りの……（云ひさして先刻織田上野介より注意されし事を思ひ出し）併し以前は以前、相手はもう關白といふ偉い身分、御我慢のなる事なら、御不承遊ばすがよろしうござりませう。

お茶々　（屹となつて）ばゞ、世は如何に澆季になつたればとて、そちまで其樣な賤しい心はあるまいと思うたに、その樣な事を恥かしうも無う云ふ口で、能う亡き父上の御位牌にお經を讀んだな。あゝ、淺ましい人心ぢや。

松雪尼　（涙に咽び）お心に障られたに御無理は無い。したが第一はあなたの御身の上、御姉妹や上野介さま御親子の御迷惑、それがお氣の毒で胸がつぶれ、とんだ心に

もない事を申しました。頭に對しても面目ない、おゆるされて下さりませ。

お茶々　それは妾とても思はぬではなけれども、あの草履つかみの猿面めには……

松雪尼　賤い時から官位の高い姫君樣、左樣思召すも御道理でございます。

お茶々　それについて、そこ、少し聞きたい事がある。そちは母上が小谷に在城し遊ばす時から、おつき申して居たといふ事であつたな。

松雪尼　左樣でござりまする。わたくしの父は鶴松太夫といふ能の役者、あなた方にはお祖父樣、下野守久政公の御贔屓うけ、御自害の折には御介錯を申上げたほどの身の上、わたくしも小谷落城には、御母さまや、姫君のお手をひき、まだ當歳のお君さまを背に負ひ、信長公の御陣所へまゐつたのでござりました。

お茶々　それならば、母上とは同胞の織田どのと、父上とが何故にお仲違ひになられたか、そのわけを知つてゞあらうな。

松雪尼　それは長政公といふあなたのお父さまが、今の世に珍しい義の堅いお方で、信長公が戰での約束を反古に遊ばし、越前の朝倉どのを攻められたを氣の毒に思し召され、義理ある兄弟仲も顧られず、御加勢なされた爲めでござりまする。

お茶々　その樣な表面の事は妾も聞いて知つて居る。併し御二人の仲がその樣な事になつたについては、外に何ぞ仔細があらう。それを聞かせて欲しいのぢや。

松雪尼　（稍當惑する容子にて）　いえ〳〵その外には何の理由もござりますまい。

お茶々　無いとは云はさぬ。そちは今、生みの父上が無念の最期を遂げられたも、あの猿面めが爲めぢやというたな。

松雪尼　えい。

お茶々　妾は今日まで妹たちにさへ打明けなんだが、折々妙な夢を見る事がある。それは恰度北の庄落城の前の夜と同じ景色ぢやが、その中に出る人たちは母上の外はみな違ふ。かすかに目の先に殘つて居る父上とも覺しいお方が、いつも妾を手招ぎされて、「猿めを忘れな、猿めを恨め」と、それは〳〵怖ろしいお顔を遊ばすのぢや。昨夕も叔父上や叔母上から、一家の浮沈、妹たちの身の大事と、さま〴〵に掻口説かれて心も弱り、いつそ此身を犧牲にと、思ひかけてまどろむ中、又同じ夢におそはれたが、「猿を恨め」と云はれた其お聲の物凄さ、その悲しげなお顏の怖しさ、まだまざ〳〵目に殘り心に殘る。そちの先刻の語を思ひ合はすれど、父上の仇は猿面めに

相違あるまい。さ、ばゞ、頼む。その時の一部一什、どうぞ打明けて聴かせてくりや。

松雪尼　その時は今の關白殿下も木下藤吉郎といふ信長公の侍大將、それ程の御器量はござりませなんだ。若しわたくしがその様な事申しましたら、ほんの一時の云ひ損じ、御氣に止められぬ様に願ひまする。

お茶々　左様か、そちはそれほどに云ひたうないか。叔父上や、信重殿も、その事になれば祕しがくしに包んで居られる。それだけに聞きたうは思へども、云はぬものから強ては聞くまい。（つと身を起し、下手橋の方へ行き、欄干によりかゝりながら吐息して）いづれにしても呪はれて居る此からだ、仇であらうと、敵であらうと、行きさへせねばそれまでぢや。

（松雪尼あとを追ふ樣にして。）

松雪尼　でもその爲めに、御一族に禍殃がかゝりましたら……

お茶々　それを思へば此胸に燒鐵をあてられる思ひもすれど、さりとて夢の中の父上のあのお語と云ひ、そちの今の話が定ならば、あの豐臣は重なる仇……

松雪尼　（傍へより袖をひかへ）これ、御聲が高い。その樣な事は口にはおろか、心にも御浮め遊ばすな。梧桐の葉影に覆はれて居る今の世の中……

（風の音、岸邊の梧桐はら／＼と散り、橋の下をくゞって、お茶々の目前を流れ去る。）

お茶々　緣にほこりし其桐も、秋風吹けば散り初むる。あれあれ行方も知れず流れて行く。

（ぢつと水面を見つめ居りしが、やがて愁然として。）

お茶々　なまじ人にすぐれた、此面があればこそ、秀吉づれに淺ましい、無態の懸想もせられるのぢや。えゝ、此雪の肌がうらめしい、此黒髪が腹立しい。

（悲しげに見まはす中、風爐の火が目に入りしか、づかづかとそばに來り、矢庭に矢箸を火の中に差込み頰にあてんとする。お袋は驚いて、姉の手にすがりつく。）

お袋　姉上には何としてその樣な…お心ばし狂はれてか。

お茶々　いや／＼如何なる憂目のつもればとて、心の狂ふやうなわらはでは無い。たゞこの面を燒けたゞらせ、われから秀吉がもとへ推かけて、あの色好みの浮かれ男の、驚く顏が見てやりたい。

お袋　それぢやというて、此樣な玉のお顏をきずつけるは、あまりといへば可惜らしい。

（松雪尼はおど／＼して、橋の近くにありしが、涙ながら其前に打伏し。）

松雪尼　何をおかくし申しませう。このばゞも上野介樣御親子の御頼み受け、出來るものなら豐臣家へお輿入のあ

るやうにと、思うては見ましたれど、それまで堅い御決心、却つてこの身が恥かしい。それならば姫君さま、我が田へ水を引くやうなれど、いつそ其黒髪を御絶ち遊ばし、此世を御棄てなされては如何でござりまする。

お茶々　それも此程より思うては居たなれど、浮世を外に行ひ澄して居られた冷泉家の姫君をさへ還俗させて、色慾の犠牲としたといふあの秀吉、左樣なつたらいよく此身の恥辱と思うて……

松雪尼　さういふ御心配がござりますなら、わたくしが何處までもお伴して、世界の果へも隱れませう。

お茶々　よう云うて賜つた。幸ひ今日は亡き父上の祥月命日、その靈前で佛の道へ……

お發　(思ひ入つて) 姉さまが其御心なら、妾も一緒に浮世を棄てゝ、いづこへなりとお伴がしたい。妾には此淺ましい世の樣がとうから忌でならなんだ。

お茶々　これはしたり、そなたには罪もむくいもない世の中、勝手なことをいふ樣なれど、後へ殘つて叔父上の育ての恩をお酬い申し、相應しい緣しがあつたなら、何處へなりと緣組して、細々ながら淺井の家名を立てゝ下され。

お發　いやく、世に恐ろしい生死の境を、二度までもくぐりながら、姉妹二人つい一度、手をはなした事もなかつたに、今更姉上に別れたら、妾は明日から何とならう。死ぬも生きるも一緒にと、いつかも誓うた事がある。死んでもお側は離れませぬ。

お茶々　成程左樣であつた。たゞ一向にそなたの身をばかばはうと思うた爲め、誓うた語も忘れて居た。野分にまさる浮世の風に、吹さいなまれて枯れようより、どうで運拙なう生れた姉妹、なまじ盛りの春を知らで、此世をおくるが身の幸福であらうも知れぬ。ほゞ、そんなら妾の居間へ行て……

松雪尼　是非ない事でござりまする。

(一同身を起すと、下手より侍女一入り來り、松雪尼に向ひ。)

侍女一　庵主さまへ申上げます。

松雪尼　何事でござりまするな。

侍女一　四天王寺の大般若の時が迫りました故、早うお出でが願ひたいと、お迎へにござりまする。

松雪尼　おゝ、姫君たちの事のみに心が塞がり、大事の約束を忘れて退けた。それならば姫君さま。四天王寺よりの歸途……(日脚を見て) 日暮れぬ中に參じませう。

お茶々　待つて居るぞや。

(松雪尼挨拶して下手へ立去る。女中送つて行かんとするを呼びとゞめて。)

お茶々　ばゞを送つて行たら、三四人でこゝへ來て、此の御茶の道具をしまうて吳りや。

侍女一　畏りました。

（下手へ去る。あとにて二人は愁然として茶の道具を形づけ初める。よき程に女中たち來りて、器物を下手橋の向うに持去る。茶入と釜とは特にお簽に注意して持去らせる事などあり、お茶々も最後に茶巾を懷ろにして去らんとする時、下手橋のあなたより織田上野介信包と其伜三十郞信重出で來る。）

お茶々　叔父上や信重さまには、何れへお出でなされまする。

信包　どこへ行かう、そなたに逢ひたうてこゝへ來たのぢや。

お茶々　何の御用で。

信重　そなたの嫁ひな、又例の話ぢや。

お茶々　（思入れあつて）それならば、いく度伺うても詮の無い事、御免なされて下さりませ。

（橋を渡りて立ち去らんとす。信包袖をひかへ。）

信包　そなたも嘸くはつらいであらう。われらとて語るは心苦しい。然りながら秀吉公より再三の御使者、その度毎に數ならぬ此信包に不相應なる恩賞、織田の一族次第に凋落し行く此節がらに似もやらず、近くは從三位に叙せられ、左近衞中將に任ぜられた。それもこれもそなたを手に入れたさの關白殿下の御追從、老朽の身の信包には、冥加過ぎて勿體ない。

信重　それ程の御恩を蒙りながら、此程よりの云ひたい三昧、此上否やを申したら、退引させず此阿濃津の城も召上げられ、織田の家も取潰さうといふ恐しい僉儀ぢや。

お茶々　誰がこの樣な事を申しました。

信包　また、使者が見えたのぢや。

お茶々　して、その使者といふは？

信包　當時出頭第一の石田治部少輔ぢや。

信重　それ／＼、あの姥口の釜と大國の茶入とを贈つて下された親切なお方ぢや。

お茶々　治部少輔といふのは、豐臣の家中にても才智すぐれた利者にて、五奉行の一人と聞きましたが、戀の使ひをする樣な意氣地なしでござりまするか。

信包　これ／＼その樣に聲高には申さぬものぢや。向うの書院でわれらの挨拶を待ち受けて居られるのぢや。

信重　（聲を潜め）彼人の心に障るは、關白殿下の御心に障るも同然と、諸大名さへ憚かる威勢、あの人の使者に立たれたがわが家の不運、今は早や絕體絕命、茶々どの、何も申さぬ、たゞ承引が願ひたい。

（信重は手をついて頼む。お茶々は烈しく煩悶、やが

　て亡き父の幻影目の先へちらつくに、心を取直して。）
お茶々　これ迄の御養育の御恩に對しても、快うお受をせねばなりませぬが、女子の身には義理にも情にも易へまじい大事の操、心にもない男には貢られませぬ。頑な娘をもたれた御身の不幸と、お諦めを願ひまする。
信包　さりとて、如何あってもわれらの頼みを……
信重　聞入れては下さらぬな。
お茶々　お赦しなされて下さりませ。
信包　此上は是非がない。
　（信包差添を抜き腹をきらんとする。お茶々は目を瞑じたまゝ見向きもせず。信重は慌てゝ其手を抑へ。）
信重　父上には御心が狂はれたか。お茶々どの承引なき上は、兎でも角でもまぬがれ難き我家の非運、此上はたゞ尋常に關白殿下の御仕置を待つまでの事、立騒いでは見苦しうござりまする。
信包　とはいへ、見す／＼此家を絶つ、それ、剰さへ落首なんどの憂目に逢はうより……
お茶々　（決心の面に現はし）その治部少輔とやらに逢ひませう
南人　はゝ、
お茶々　秀吉の腰巾着、此頃流行る貢茶では無けれども、一を聞いて十を知る程の才子とやら、少しは話も分るであらう、あなた方の御迷惑にならぬ様、たんどり話をしませう程に、どうぞ逢はせて下さりませ。
信包　併しその様な勢ひで、あの使者を怒らせたら……
お茶々　その様な御心づかひには及びませぬ、乾度首尾よう爲ます程に、是非お逢はせ下さりませ。
信包　さらば、兎も角も逢うて見やれ。われらは先へ行て、石田殿に程ようい うて置かう。衣服を換へて書院へ直ぐに。
お茶々　いや／＼、これへ御呼び下さりませ。
信重　それにしても相手は治部少輔、殊に關白殿下の御使を……
お茶々　彼方よりの願ひ、庭面はおろか、門外にても故障はない筈。
信包　如斯云ひ出したら、誰がいふ事も耳へ入らぬ此茶々殿、そんならそなた迎へに行て……
お茶々　わらは一人で逢ひたうござりまする。御兩方はあちらへ行て。
信包　さりながら萬一無禮の事でもあっては……
お茶々　あなた方へ御迷惑は乾度かゝらぬ様に致しまする。さあ、これへ御遣はしを願ひまする。
　（南人詮方なく下手へ去る。胡蝶一つお茶々の周圍をめぐる。お茶々之を追うて椅の上へ行く。三成下手よ

り來る。お茶々心つかざる如く、蝶を追ふまねして三成の顏のあたりを煽ぐ、やがてわざと驚きたるまねして。）

お茶々　これは麁忽ぢや、許してたも。

三成（同じく橋の上にて）これは姫君でござりましたか。それがしこそきつい御無禮。

（慇懃に挨拶する。お茶々橋の欄干に腰打かけ。）

お茶々　茶坊主上りの三成とはそなたか。

三成（惡怯れたる顏もせず）身を匹夫に起せしそれがし、當時を御承知これあるとは此身に取つて本懷至極。

お茶々　そなたは秀吉どのに三杯の湯を薦めて、とう／＼今日の身の上になつたと聞いたが、それが定なら、不思議な出世の仕方もあるものぢやな。

三成　如何にもそれがし十歲の折から、江州石田村なる眞言寺にて、わが君の御目にとまり、引つゞき今日まで山海の御恩を蒙つて居ります。

お茶々　これ故佐和山十九萬石を領しながら、はしためなどに相應はしい戀の使ひもしやるのぢやな。

三成　仰せまでも候はず、一身を鵞毛に比し、君のためには如何なる勤務も厭はぬ微衷、事の大小輕重なんど素より差別はござりませぬ。

お茶々　心憎い申し樣ぢや。是までの使ひは兩度ともに、生溫い素湯の樣なものゝみで有つたが、そちは少しは人の舌をさす樣な熱度をもつて居やるの。

三成　溫熱さま／＼の御湯を獻じて、わが君の御寵愛を得てより、はや二十年、三成の頭腦もいかう鈍う相成りました。が、此度の使ひは、たゞわが君が姫君に對する御執心の程を申上るが眼目、小田原の北條を除くの外は、一天四海を片手に掌握し給ふわが君も、戀には上下の隔てなく、たゞ一向に姫君に憧がれて、寢食をだに安んじ給はぬいぢらしさ。見るに見かねて此三成、われから使者の役目を承はり、これまで推參致しました。あはれ願はくばわが君の眞心をお汲みあつて……

お茶々（哄然として笑ひ出し）あはゝゝゝ。三成とやらそちはもう少し賢い男かと思うたに、噂ほどでも無い鈍い阿郎ぢやな。何の、あの秀吉にまことの戀があるものぞ。虎狼が腐つた肉を漁る樣に、女の操を破る外には愛も情も知らぬ秀吉、その樣な白々しい巧なし口を利いたとて、誰がまことにするものぞ。

三成　これまでの浮いたる戀は兎も角も、姫君に對しては、ありし昔の若々しきみこゝろに立還られ……

お茶々　能う恥かしうもない其眞顏、したが縱令それを眞實としても、妾は贈正三位右大臣織田信長公の姪ぢや。草履つかみの成上り、あの猿面冠者の側室なんどに……

三成　昔の素性を云はうならば、松丸どのは京極宰相高次公の御妹にて、京極家こそは姫君の御父君淺井備前守が御主筋……

お茶々　（ちよつと困惑して）他はともあれ、此茶々はあの秀吉は大嫌ひぢや。

三成　動かし難きは人の心、お嫌ひとあつては是非なけれど、思へば思はるゝもまた人の心、落花心あれば流るゝ水にも情ある喩……（不圖思ひついたる體にて松にからめる蔦をぢつと眺め）姫君、あの蔦をば何と御覽せらる？

お茶々　此姫蔦が、（少し考へて）如何したといふのぢや。

三成　この姫蔦は其名に因む女性、便る男の松が枝なくば、如何に青雲の志ありとても、大地をのたうち廻るが究竟の術、されど一旦かゝる大樹にまつはる時は、春の緑、秋の紅、多くの人に賞でられもし、仰がれも致しまする。今は早、昔の意地を伊勢の海にさらりと棄てられ、天にもとゞく人臣の極み、關白殿下に便られなば、まづ此蔦の如くにて、あらゆる天下の人々を見下し給ふも容易い事。

お茶々　いや〳〵妾は人に便る蔦にはなりたうない。姫蔦の、よし、その蔦はかよわくとも、空をば凌ぐ大樹をささへ支へる力になりたいのぢや。

三成　と、仰せられまするは？

お茶々　男の作つた高御座の上に、わが物顔にすわるは厭ぢや。男を扶けてもろともに、天下を見おろす高御座が作つて見たい。

三成　（深く感じ入りし體にて）誠にわが君の御氣象を、二つに分かし如き御精進、畏れながら如何にも似合はしき御伉儷、姫君にして御入輿あり、君の御輔佐をなされんには、世界一統の御大望もいかでか成就せざるべき。

お茶々　世界一統の大望とは？

三成　これぞわが君が、一兩年以前より、ひそかに思し立たせられし囘天の大事業、まづ三韓を打靡け、大明までも手に入れて、おのれは其皇帝とならせ給はん御思し立ち、さりながらかゝる大事は、樞機の裡に内助の女性が最も肝要、唐土にては漢の呂后、わが朝にては尼將軍、それにもまさる烈女もがなと、探ねもとむるわが君の目鏡にかなひしおん姫君、蝸牛の角の上なる爭ひは、全く思ひ忘られて、世界の妃となり給はむ御心はござりませぬか。

お茶々　天つ御神の仰せなりとも、人の側室になるやうな妾では無い。秀吉まことに此身を思はゞ、北の政所といふ田舍者が今の身分を追ひ退けたその上にて、妾を迎ふるが道では無いか。まづそれまでは聞くも煩さい、語る

も無益ぢや。

三成　北の政所は御身分こそ賤しけれ、わが君とは三十餘年の御語らひ、それを動かさんなどゝは、木に攀り魚を求むる譬喩、さりながら政所にも、其他にも、御胤さへもなき今の有樣、若君一人有ち給はお御方こそは、やんがて双手に此世界を掌握し給はむ御運勢。

お茶々　さりながら秀吉どのには秀次といふ養子もあれば……

三成　表晴れては申されねど、右大臣家の行末は、その故將の御所業にて大概見極めはつき申した。されば遠からずわが君の御胤と生れ給はん御方こそは、誠に大千世界を知ろしめす果報の君王。

（お茶々は目前につきつけられたる事實の爲めに、心ミ陸むばかりに動搖し初む。）

お茶々　そんなら世界を此細腕に……

三成　（嬉しげに）さらばそれがしの語をお用ひあつて…

（風の音。日光稍暗し、お茶々は又幻影の父の詰問なく心、忽ち顏色變り、われにも非ず目を覆るゝ鋭き語。）

お茶々　「讐めを忘れな、讐めを恨め。」

三成　（驚いて）やゝ、この御有樣は。

お茶々　あの秀吉は此身の仇敵、父母の仇ぢやし。眞實にもならぬ榮華の語に、片時たりとも、此心を亂したのが恥かしい。三成、そちが何というても、妾の心はもう動かぬ。餘計な舌を動かさうより、早うこゝを立去らうぞ。

三成　强てとの仰せなれば是非なけれど、關白殿下を御兩親の仇敵と仰せらるゝは、三成近頃不思議に存じ申す。

お茶々　又してもぬけ〳〵とした其眞顏、いくら頭腦が鈍うなつても忘れやうはない筈ぢや、今より丁度七年前、二度の父と仰いだる柴田修理亮勝家どのは、生みの母上小谷の方と諸共に、秀吉の爲めに北の庄の城を圍まれて、無念の最期を遂げられた。

三成　それを怨ませらるゝは、また御無理かと存じられまする。

お茶々　何、何故？

三成　故柴田どのは、わが君が藤吉郎の昔より、高恩を受けし大事の恩人、決して疎略のお思召はなかりしに、勝家どのこそいはれもなき嫉妬の爲め、無名の戰を挑まれて、却つて武運をすぼめられ、恐しき最期を遂げられ申した。その最期の際にさへ、わが君には殊の外に、勝家どのに降參を勸められ、北の方にも御助命の御沙汰はあつたれど、御兩方共御用ひなく、思ひしまゝ夏の夜の夢路はかなき郭公と、辭世のお歌を殘されて、强てあの世へ打ち連れられた。其上わが君に於いて、御一家に對して何の宿意もなき事は、姫君はじめ御姉妹の方々を、慈みたく、御助

け申し、當館に御渡しありしが、何よりの證據、それらこれらを御熟慮あらば、君に對する御疑ひは春の氷と釋くべき筈。

お茶々　いや〳〵、妾の疑ひはその一事許りで無い。生みの父上淺井備前守の滅亡も、彼の秀吉めが、反間苦肉の犠牲ぢや。

三成　（わざと大きく驚き）姫君にはその祕密をまで御存じありしか。（烈しく感慨に沈みし體にて）ふむ。それを御承知ある上は、如何つくろうてもせんなき事ぢや。（獨語のやうに云ふ）

お茶々　（ちつと思入あつて）そんならそなたも當時の事を……

三成　御存じとある上は隱しても詮ない事、いづれは豐臣家へ御輿入あつて、打釋けたる御語らひのあるべき御身の上、互ひに祕密の魂膽あつては、却つて後日の齟齬の種……げにそれこそは天正元年九月の朔日、信長公の先手を承はつたる木下藤吉郎秀吉公、八千餘騎の手勢を引連れ、京極太の切處に登り、御祖父君久政公が守られし小谷の城の二の丸と、御父上長政公の本丸との間を立切り、揉みに揉んで攻め立てたり。

お茶々　ふむ、して祖父上は何となされた。

三成　秀吉公の謀計にて、磯部丹波守を初めとし、三田村、大野木、善祥房、日根野が如き客分まで、みな淺井家に裏切りさせたる後の事とて、城内の人數至つて少なく、忠義に心は逸れども、わが君の鋭き鋒先さゝへん樣なく、あはれや下野守久政公、行年こゝに六十一歲、腹かき切つて死し給ふ。

お茶々　して〳〵父上の長政公には？

三成　さすがに長政公には妹婿、殊には世に比較なき長政公の忠勇義烈、敵とはいへど、やみ〳〵と討死させんは口惜しと、不破河内守を以て降參の儀を勸められしに、父上にも承引あり、旣に和平と見えし時、我君には何故にか、信長公の下知に負き、無二無三攻め入つたり。

お茶々　なに、あの秀吉が理不盡に。

三成　長政公も今は是非なく、御母上のお市の方と、姫君やお妹御を信長の陣所へおくられ、その身は程なく御自害ありしが、「恨めしきは猿面冠者、憎くきは木下」と、最期の呼吸にて云ひ殘され、二十九歲を一期として、花花しき最期を御遂げありしと承はる。

お茶々　さてこそ思ひ當つた幻影の御言、「猿めを恨め」の御一言こそ、二十年以前の今月今宵、此世に殘せし父上の御遺言。

三成　まだそれのみかはわが君には、長政公の御嫡子――姫君には一人の兄君、萬福丸と仰せられし、いたいけ盛

りの若君を江州木の下にて探出され、聞くも恐ろし串刺の仕置にかけしと當時の噂。

お茶々　そりや頭是ない兄上まで、えゝ、ようも／＼酷たらしう殺したな。おのれ、殘忍非道の猿男め、いで此の上は京洛へ赴き、兄の怨み、母の仇、父上が最期の一念、晴さいで置くべきか。

（お茶々物狂ほしき形相となり、下手の方へ走り出でんとす。三成驚きたる容子にて。）

三成　予心にも餘りの無殘と、肺腑に徹せる當時の思ひ出、われにも非ずうか／＼と、云ふまじき事までいうて退けた。さりながらそれもこれも二昔に近き昔の夢、今は早や御諦めこそ御身のためと存じまする。

お茶々　聽かぬ中は兎も角も、如斯知つた上からは、聚樂とやらへ赴いて、重なる恨を晴すのぢや。

三成　（哄然と笑ひ）　女性に似氣なき御聰明と、噂にも承はり、先程よりの御對談に、いよ／＼感じ入つたりしが、初めには似ぬ不覺な御語。

お茶々　何と。

三成　秀吉公こそは關白太政大臣、勇將猛士御前を警護し、樊噲孟獲此世に出づとも、指一本もさゝせまじき御威勢、姫君一人御出であるとも、忽ち警固の武士に捕へられ、一言のお怨も、わが君の御耳には達せずして、空しく刑場の露と消え給はむ。

お茶々　やつ。

三成　誰憚らずわが君に逢はせらるべき機會の有るを、われから强ひて打棄てゝ、危うき橋を渡らんとは、姫君、心ばし狂はれたか、三成笑止に存じ申す。

（お茶々たゞ茫然として三成を見詰む。）

三成　とてもかくても只今の物語は、三成が稚き頃の思ひ違ひ聞き損じ、誤りもあるべきに、萬一わが君の御耳にても入らむには、此三成が一期の浮沈、何卒阿濃川の水にお流しあり、何もかも御聞き棄てを。

（お茶々は怨恨と一種の希望とに心迷ひ、煩悶し居る。此時侍女一人、三成の家臣小川平左衛門を、上手よりともなひ出で來る。）

小川　わが君、これに御出でござりましたか。

三成　何故にかゝるところへ推參致した。

小川　增田左衛門尉長盛どのより火急の御書面。

三成　何事か心元ない。姫君御免。

（開封して讀み行く一句毎に驚く心。讀み畢つて思案の後。）

三成　それがしが御勸めも、未だに御承引なかりしこそ互ひの幸ひ、少々取急ぐ次第もござりますれば、これにて御暇賜はる樣御願ひ申し上げまする。

お茶々　手の裏かへすそちの狼狽、どの様な事が起つたのぢや。

三成　申上ぐべき筋ならねど、申上げぬも心苦しい。實は北の政所には、わが君が此度の御執心、いつしか耳に入れられて、一方ならぬ御嫉妬沙汰、その儘に棄て置いては、如何なる珍事の起らんも測り難し。それ故御承引の有無に拘らず此方より御辭退申上げ、匆々に歸洛させよと奉行たちより此急使、勝手ながらこれにて御暇を賜はりたう存じまする。

お茶々　して秀吉どのはわらはに未練が無いといふのか。

三成　その儀はしかと分りませねど、あれ程までに深くも思ひ込ませられし我君、さう容易う思ひ切らるゝ筈とてはござりませぬ。なれども姫君の御輿入りが御家の亂れのもとゝあつては、達つてもお止め申す外はござりませぬ。

お茶々　愚かしい事は云はぬものぢや。かよわい女一人の爲め、豐臣の家が亂れる。ハ、、、、豐臣の家といふはその様に根ざしの淺い、脆いものか。

三成　唐宣に引かんも無禮ながら、唐土には妲妃褒姒のためしもあり、本朝にもその先蹤は少なからず、先刻の御疑ひをこのまゝに、重なる恨みを胸にいだかれ、怖ろしき復讐の邪念を懷につゝんで、豐臣家へ御輿入あらせられては、御家の禍亂はまのあたり、況して君臣親子の間にも心の許せぬ今の時節、姫君に心を合はせ野心を遂うするものにても現はれなば、關白殿下が心をくだき骨をけづつて、わづかに治めし此天下も、忽ち動亂なさんも知れず、思へば三成が今日の使命は油を負うて火を覓むるにも似たる危さ。姫君、御免。

（三成立かゝる、お茶々呼止め。）

お茶々　そちや、其野心とやらを腹の底に潛めては居ぬといふか。

三成　（わざと情なげに）こは口惜き御語かな。三成こそは先刻も申上げたる身の上より、今日迄の御引立。皆是殿下の高恩と片時たりとて忠義を忘れし事なきに、野心などとは心外千萬。

お茶々　さらば豐臣の家には、天下を望む英雄は一人も無いといふか。

三成　わが君既に御身づから、器量次第運次第、天下を提る手本をば示されたれば、心の底には刃を磨ぎ、時運の到來待構へ居らむもの、皆無とは存ぜねど、君の恩澤しげければ、流石に然る不所存を表へあらはすものとてはござりませぬ。

お茶々　恰度そちの様にな。

三成　これは又迷惑千萬、只今も申上げたる如く……

お茶々　（笑つて）　轉劫ぢや、左様むきにならいでもよい。もう行け。

三成　はゝあ。

（下手へ立去る。お茶々は一種の野心胸中に横溢して、三成を呼戻さんとすれど聊か躊躇の色あり。此時侍女一人入來る。）

お茶々　三成を呼戻せ。

（侍女下手へ立去る。三成又出で來る。）

三成　何か御用にござりまするか。

お茶々　思ひ浮べた仔細もある。妾は聚樂へ行くであらう。

三成　そりや俄かに思し變へられて。

お茶々　おう。

三成　折角の仰せながら、わが君を恨ませらるゝ姫君の先刻のお言、剰へ北の政所の思召もある上は、一先歸洛致した上……

お茶々　そちはたゞ妾を迎取つて歸ればよいのぢや。それが秀吉どのよりの使ひの趣きであつた筈ぢや。

三成　とは云へ……

お茶々　そちの爲めに行くのでは無い、關白殿下の爲めに行くのぢや。

三成　……、此書面はわが君の御存じなき私の消息……さらば御伴致し申さう。

お茶々　それにしても妾は、贈正三位右大臣織田信長公の姪の茶々ぢや。行列其他もその格式にて。

三成　いや、それにては畏れ多し。性急なる關白殿下の御下命とて、姫君の御召物取り揃へて持參致しました。すべては關白太政大臣の北の臺。

お茶々　何、關白の北の臺。

三成　此春新たに造營ありし淀の御城を姫君の御殿として、御名も淀君と申し奉らむ殿下の御思召。

お茶々　そりや何から何まで其樣に。

三成　（家臣小川平左衛門に）　姫君のお召物直ちに御居間へ持參致せ。

小川　はゝあ。

三成　姫君にも御召換を……

お茶々　さらば後に逢はうぞ。

（侍女に目配し、先に立たしめ、橋を渡つて奥へ入る。小川もあとより續いて奥へ入る。上手より信重出で來る。）

信重　萬事はあれにて洩れなく聞いた。活殺自在のおんみの辯舌、信重たゞ〱感服致した。それにしても、執念ぶかく、意地強く、負け嫌ひのあの茶々どの、おんみのおだてに乘せられて、關白殿下を仇敵と怨まんには、如何なる珍事の起らむも測りがたし。其期に及び何とせら

れぬ御思召ぢや。

三成　杞人は天の墜つるを憂ひしとか。それにも劣らぬ織田殿が苦勞性。草履をつかみしその手をもつて、天下を自在に丸め込んだるわが君なれば、たかゞ女性の一人二人、如何なる悍馬も一年ならぬに、心のまゝに乘りこなされん。御氣づかひは御無用ぢや。

信重　それ聞いて安堵致した、さらば石田殿には彼方へ御出で、麁末ながらも餞けの一盞……

三成　先刻より輕口の御相手致し、咽喉の渇きを覺えてまゐつた。さらば御雜作に預かり申さう。

信重　御案內申す。

（兩人上手へ去る。舞臺はしづかに上手へ廻る。）

（舞臺は中足の二重の屋體、高雅なる建築、すべてお茶々の居間の心。上手よき處に經机。その上に位牌。香爐などを供ふ。その側には姥口の釜、大國の茶入などを置く。）

（お茶々は侍女たちに裝束をつけさせ居る。）

（終りに近づく頃妹お發正面襖の中より出で來りて驚く。）

お發　やあ、姉上には思ひもかけぬ其御姿。先刻の御語とは打つて違うて。

お茶々　その不審はことわりぢや。妾はこれより豐臣秀吉公の許に輿入して、御臺處となる心ぢや。

お發　あれ程に嫌うて居られた姉上が、いそ〳〵と粧しげに、剃ると云はれた黑髮も、濡羽の色の艶を增し、墨染衣にひきかへて、目さへ綾なる五衣。これにも深いわけがあらう。打明けて下さりませ。

お茶々　おう、いうて聞かさう。（侍女たちに向ひ）そちたちは暫らく遠慮しや。

（侍女等敬禮して立去る。）

お茶々　（經机の前に坐し）お發どの、こゝへ。（自分の側にすわらせ、位牌に香を炊き）南無德勝院殿天英宗淸大居士、俗名淺井備前守長政公、並びに自性院殿松月宗貞大禪尼、俗名淺井お市の方、遺れ佛の娘お茶々、今日只今、父上の御最期の御有樣を石田治部少輔三成と申すものより承はり、悲憤の炎に胸を焚かれ、復讐の念止みがたく、御兩親が修羅の妄執晴らし奉らんその爲めに、此五體を犧牲とし、此魂を血潮に染め、五體は豐臣の家に投げ棄てゝも、魂は永久に怨敵となり、あの家のあらん限り呪うて呪つて呪ひ申さむ。

お發　（烈しく驚いて）姉上、その樣な恐ろしい事を思ひ立たれうより、矢張先刻の誓ひの通り、松雪尼の導きにて穢れた浮世を棄てませう。

お茶々　此姉の心には亡き父上の言が俄かに力づよう焚え

て來た。そちはそちの道を行きや。妾はわらはの道を行く。（姥口の釜をとり出し）これはそなたへの記念ぢや。此の大國の茶入と御位牌とは姉が肌身に添へてもつて行く。これ何故泣きやる。姉が一生の出世の門出、不吉の涙は見せてたもるな。

（お茶々は強く云ひながら、おのれも顔を背向ける。）

お發　はえゝ。

（云ひながらも泣く。此時信包と信重とは土器、銚子、熨斗昆布などを女中にもたせて入り來る。）

信包　明日よりは當家の運命、如何になり行く事やらんと、安き心もなかりしに、茶々どのゝ芳志により此皺腹一つ拾ひ申した。

信重　忍びがたきを忍ばれし御身の苦心、信重たゞ〳〵御察し申す。

お茶々　此上は妹の身の上、叔父上御願ひ申しまする。

信包　それはいふまでもない事ぢや。それにつけても心ばかりの身の喜び。

鳴海の前　何はなくとも祝ひの杯。

お茶々　忝けなう存じまする。

（お茶々盞を取る。お發酌をする。此時上手より石田三成姿を改め、家臣四五人を引つれ出て來る。）

三成　追々時刻も移りますれば、御臺様には早や御立ち。

お茶々　さらば行かうぞ。

（お茶々縁側に出づ。）

三成　それお乘物を。

（家臣乘輿をもち來る。お茶々一同に挨拶して乘る。家臣たちは手がきにする。一同送つて出づ。舞臺しづかにもとへ廻ると、家臣一同それ〴〵の裝束して蹲まり居る。乘輿よろしきあたりへ來る時、松雪尼悄然として出で來り、輿の裡なるお茶々の姿を見て驚く。）

松雪尼　あなたは姫君。

お茶々　おゝ、ばゞか。（笑つて）妾は俄かに心が變つた。此世が急に戀しくなつた。（輿は恰度水の上に來る。お茶々水鏡を見て）これからは此黒髪の一筋たりとも、此身には大事な寶ぢや。日本國はおろか、大明國の國王でも、見ん事此一筋で繋ぎとめて見せうぞよ。ばゞ、そちが四天王寺へ行つてくれたばつかりで、妾の運命がすつかり變つた。やんがて妾の願ひの成就する時が來たら、そちにも一萬石の寄進をせうぞ。（云ひ終つてから〳〵と笑ひ、三成に目くばせする）

三成　（立上つて）おん立ち！

（一同立上る。輿を舁き上げる。夕風一陣。梧桐はらはらと散る。）

――幕――

阪崎出羽守（三幕）

時　元和元年より翌年に至る

所　大阪と江戸

人

徳川家康
本多佐渡守正信
其子本多上野介正純
伊達陸奥守政宗
家康の旗奉行庄田三太夫安信
同上保坂金右衛門勝
槍奉行大久保彦左衛門忠敎
先鐵砲頭坪内惣兵衛家定
先弓頭山岡主計景以
お使番横田甚右衛門重量
同上小栗又一忠政
同上柳生又左衛門宗矩
阪崎出羽守孝親
大野の家老米村權右衛門
大阪方の料理頭大住與左衛門
阪崎の家臣牧野小太夫
同上家老阪崎勘兵衛
秀頼の室千姫
その侍女刑部卿の局
同上蘆屋
女の童松坂
孝親の姉笹ケ谷
家康陣屋の小姓、儒者、同朋、孝親の家臣、兵士等大勢。

第一幕

茶臼山家康の本陣

元和元年五月七日の午後、右手小高き處に二間の急造の小屋あり、その中央を陣幕にて仕切り、奥の方は家康の居間とす。幕の前には小姓二人すわり居る。この附近は、今朝眞田幸村の猛襲を受けたる名殘をとゞめ、見る限り狼藉たり。低き處にある牙營の武士たち旗奉行庄田三太夫、保坂金右衛門、槍奉行大久保彦左衛門、

先鐵砲頭坪内惣兵衛、先弓頭山岡主計、お使番衆陣中見附横田甚右衛門等は、みな疲憊困頓の色あり、或者は地上に轉び倒れ、或者は懶げに床几により、或者は血に染みし草を茵に安座して地圖を按じ、或者は敵の遺棄せし幌の片にて、負傷を裹み居る。

血と烟と、炎とに咽せ返つて居る大空は、涙に爛れてでも居る樣な、鈍い、薄汚い、どす赤い午後の日光を、わづかに洩して居る。その一面に烟の漲つて居る空の中へ、大阪城と覺しいあたりから、太い、黑い二條の烟の柱が、眞直に立昇つて居る。矢張其方面から、折々吶喊の聲と悲鳴の聲とが打交つて聞え、金鼓の響も間歇的に傳はつて來る。

左の方へなだれになつてゐる邱の陰の方から、一しきり馬蹄の響が聞え、それがとまると、五字の旗を背にしたお使番小栗又一が、そこにある立木に馬をつなぎ、邱の裾をまはつて一同の前へ來る。

小栗　お小姓衆、伊達陸奥守どのを御連れ申しました。大御所へ申上げて下さい。

小姓一　承知しました。

（小姓一は隔ての幕を潛つて奥へ入る。）

横田　政宗の横着爺め、能くやつて來たな。

小栗　來ないなどゝ吐したら、襟髪をつかんで引立てゝ來ようと思つたに、案外おとなしく出て來ましたよ。

大久保　（負傷を卷き終つて）又大御所を丸め込まうと思つて、多寡をくゝつて來やがつたのだよ。併し今度は左樣安くはおろさないよ。

（此間に小栗又一は邱の後へまはり、伊達陸奥守政宗を伴つて來る。政宗は眇の老人ながら、所謂伊達模樣式の派手なる物具をつけて居る。）

政宗　如何だ。みんなすつかり我折つて居るな。

（一同は苦々しげに、顏を見合せて答へようともしない。）

政宗　（重ねて）眞田左衛門尉に、こつぴどくやられたさうだな。

横田　（腹立たしさうに）何を云つて居るんだ。眞田は安居天神で討死して居るぢやないか。

政宗　越前の何とかいふ奴が貰ひ首をしたといふ話だ。おみたちはくたびれ儲だつたな。（大久保の負傷を見て）それでも、おみは感心だよ。かすり傷でも受ける程の料簡があるからな。

大久保　目玉の一つも潰されゝば、もつと手柄らしく見えたでせうが、惜い事をしましたよ。

政宗　ふむ。おみの目玉は、眞田の姿を見た初めから、でんぐり返しを打つたのだらう。はゝゝゝゝ。

大久保　いくら目が眩んでも、敵味方の差別がつかない程、血迷つては居ませんでしたよ。

政宗　（冷かに）なに、敵味方の差別がつかないとは…？

大久保　船場口で味方討をやつたのは、どなたでしたつけね。

政宗　（哄笑して）なあんだ、あの事か。あれはな……

（小姓一、幕の内より出て來る。）

小姓一　陸奥守どの、お召でございます。

政宗　あゝ、左様か。

大久保　まあ、味方討の叱言でも、聞いて來るがいゝ。

（政宗草鞋をぬぎながら。）

政宗　いや、わしはあの一件で御褒美を頂きに來たのだ。

（小姓一に伴はれ、幕の内へ入る。）

大久保　どこまで圖々しい奴だ。あんな大やり損ひをしながら、手柄顔をして居やがる。

横田　（笑つて）なあに、例の負惜みだよ、腹の中はびくびくものさ。

庄田　大御所にしたところで、あんなに御立腹なすつたのだから、さう安目を御賣りになるわけは無いさ。今日の遣り口なぞは全く言語道斷だ。

保坂　可哀さうに神保出羽守は、惡い奴を後陣にひかへさせたよ。それにしても政宗の奴め、氣でも狂つたのかな、暗夜でゝもある事か、白晝中に味方へ鐵砲をぶちかける奴もないものだ。

小栗　あの時の一伍一什を見て居られた水野殿から聞いて來ましたが、神保長三郎殿は、花々しきをした擧句なので、一息入れて居たのださうです。そこへ陸奥守どのが理不盡に打かけたので、二百七十人の同勢が瞬く間にたつた五人になつたさうです。何か意趣でもあつてやつた事ではないかといふ噂です。

坪内　聞けば聞くほど卑怯な奴だな。小栗どの、構はないから御所さまへ明らさまに申上げて御覽なさい。左樣でないと、あいつ又得意の空鐵砲で、御所樣を煙にまいてしまふかも知れないから。

大久保　そんな事になれば德川の軍令も悉皆暗黑だ。政宗の奴が大手をふつて通れる世の中ならおれは片桐の奴に頼んで、あの色きちがひの大阪のお袋どのへ降參する。

（家康の腹立しげな高聲が、幕の内から洩れる。）

横田　やつてるぞ〳〵。大分癇積玉のわれ方が烈しいぞ。もつともあの位の雷が落ちなければ今しがたまでお目玉を喰つて居た越後の少將殿などは、可哀さう過ぎるからな。

大久保　しつ〳〵、靜かに〳〵。

（一同耳を聳てる。と、政宗の笑聲が突然起る。）

庄田　（憤慨して）狸爺め、とう〳〵大御所をだましてし

まつたよ。

大久保　大御所が許すと云つても、おれが許しはしないよ。大丈夫だ。

山岡　（今まで熟睡して居たらしかつたが、急に頭を擡げて）全くだ。あんな臆病者を軍令に行ふ事が出來ないで、何が三河武士だ。

横田　や、おみはよく寢て居たと思つて居たに。

山岡　狸が二疋で角力を取つてる夢を見て居たのさ。（大欠伸をする）

（又彼方に馬蹄の響。つゞいて何やら話聲。やがて御使番柳生又左衞門、之も五字の旗をさし物にして出て來る。）

柳生　阪崎出羽守を連れてまゐりました。御小姓衆、お取次を。

小姓二　承知致した。

（小姓二、幕の内へ入る。幕の内にては又政宗の笑聲。）

柳生　誰か來て居るのですか。佐渡守どのゝ聲らしくはないが。

横田　伊達陸奥守だよ。

柳生　あゝ、あの同志討の狼狽者ですか。あいつならお叱言を頂戴して居さうなものだがな。

保坂　そこがあいつの物凄いところさ。どうやら御所樣を丸め込んでしまつたらしいよ。

（阪崎出羽守孝親、三十五歳。左の手を負傷して居る。そつと姿を邸の後に現し、樹木へ馬を繫いで、性急らしく入り來る。）

柳生　出羽守、伊達どのが見えておいでなさるさうだ。一寸待つてくれ。

阪崎　（不愉快さうに舌打して）だから、後にして呉れと云つたのだ。では、今一働きしてから又來る。

（阪崎は立去らうとする。）

横田　（笑つて）出羽守どのは相變らず性急だな。おみは今朝の合戰で、十分の働きをされたのだから、そんなに功を貪るにも當らないぢやないか。

阪崎　（苦々しげに）あの位の事は、働きでも、武功でもない。どんな臆病者でもやれる事だ。

保坂　でもお身は手傷を負つて居られる。もう二度の賭けにも及ぶまいぢやないか。

阪崎　此位の手傷は、身内にたまる毒血を排つて、却て身體の爲になる。が、これをいひ立てに戰さをやめるにはちと淺過ぎるよ。

坪内　併し御所さまは大層御滿悦の樣子でしたよ。いづれたんまりとした御加增があるでせう。

阪崎　（一層苦々しげに）おれは祿が欲しさに生命がけの

仕事をして居るのではない。（柳生に）では、おれは又出直すぞ。

柳生　（又驚いて）まあ、待つてくれ。それではわしが困る。

阪崎　併し……。

庄田　戰さも大方かたがついたらしいから、そんなに焦せるには及ばないぢやありませんか。

阪崎　併し今朝の樣な敵が、何時、どこから又現れないとは云へないからね。

一同　えつ。

阪崎　左樣すると、御旗本は又今朝の通りに總崩れになるだらう。さうして大御所はまた二度も三度も御生害といふ事になるからなあ。（冷笑する）

大久保　（つと身を起して）出羽守どの、ちつとは無禮といふ事も覺えて置く方がいゝね。成程今朝はわれ〳〵とてやり損ねなかつたとは云はない。併しそれは越前の奴等が、つまらぬ事に驚いて、味方に內通のものがあるなど立騒いだ爲なのだ。敵に破られたのではないよ。

阪崎　敵に破られる前に、味方から崩れるやうなお旗本では、大御所もお氣の毒だ。

山岡　今に旗本の力を見せてやる時が來るに相違ないから、今日はもう其事では爭ふまい。兎に角、城內にはもう手に立つほどの輩はなくなつてしまつた。秀頼公も御母公も、蘆田曲輪とかへ引上げてしまはれたさうだ。

阪崎　併し油斷大敵だ。けさの卑怯なまねをくり返すまいと思ふなら……。

大久保　（詰め寄つて）もう一言云つて見ろ。卑、卑怯なまねを誰がした。

阪崎　貴公がよ。おまへ方がよ。

一同　何つ。

（一同刀に手をかける。柳生は間へはひつて。）

柳生　出羽守、ちと語が過るぞ。が、誰にしても氣の立つて居る戰場だ。さう角め立つにも及ぶまい。

阪崎　おれは思ふ通りを云つたゞけだ。おれの云ふ事を嘘だと云ひ張る奴があるなら、現の證據を見せてやる。

大久保　な、なに現の證據だ？

阪崎　うむ、今からおれが、此本陣へ攻め込んで見せてもいゝ。眞田左衞門尉よりは、少しばかり手ごはいかも知れないが。

大久保　では、では、おみは大阪方へ內通して居るのか。

（此時幕の彼方では、政宗と家康との笑聲が聞える。）

阪崎　（笑つて）おれが敵方と內通して居るといふのなら、今大御所と笑ひ興じてゐるあの男は、一體どういふ事になるのだ。

大久保　うむ。

阪崎　眞晝間味方へ鐵砲を打かけても、同志討で濟む世の中だ。いつ、もう少し手ごはい味方討が現れて來るかも知れない。其時になつて又旗奉行や、槍奉行が、主人を棄てゝ逃げまはらない用心をして置くがいゝ。

大久保　（烈しく憤つて）もう我慢がならん。

（横田と山岡とを除く外、大久保を先に、阪崎へと詰め寄る。柳生は之を支へる。小姓二、三幕を潛つて出づ。）

小姓二　上樣の御出座でございます。

一同　えつ。

柳生　どうか、まあ、靜に。

（一同靜まる、德川家康は鎧をつけず。白帷子、茶の羽織をつけて出づ。本多佐渡守も輕裝にてつゞく。小姓たち、儒者、同朋などこれに從ふ。最後に政宗出づ。）

家康　おゝ、出羽守來てくれたか。今朝は御苦勞だつた。おまへがあれだけ骨を折つてくれぬとから早く戰はかたつかなかつたらう。

阪崎　恐れ入ります。

政宗　（大久保にあてつけて）全く旗本があゝ弱くては…

大久保　無、無禮な事を申さるゝな。

政宗　旗奉行が大御所の三四町も先へ行つて、槍奉行が其あとばかりついて歩いてるのでは、いざといふ時の間には合ないよ、實際今朝は、この阪崎とわしのとこの片倉が居合さなかつたら。

保坂　併しわれ〱御旗を守護するものとしては……

家康　（笑つて）敗軍の將は兵を語らずだ。云ひ譯する程襤褸が出るぞ。

庄田　それに致しましても……

家康　これ、おれはそちたちが可哀さうだから云ひたい事も云はずに居るのだぞ。

大久保　し、しかし……

家康　餘計な事をいふな。おれは十七歲の寺部攻から此かた、大小何十度の合戰をして居るが、今度ほど間拔な目に出つくはした事はない。おれ自身さへ恥入つて居るのに、當のきさまたちが、おれの前で非を飾るといふ事があるものか。が、過ぎた事は云つてもかへらん。此次にこそ、恥を雪ぐだけの手柄をしてくれ。

政宗　併しもう左樣いふ戰をなさる程の相手がございますまい。

大久保　（主人にしかられた餘憤を政宗に洩して）左樣もいへないさ。味方討が天下御免の世の中だからな。

政宗　（一同を睨めまはして哄然と笑ふ）おまへたちはまだそんな事に執着して居るのか、さて〱悟れない男ど

もだ。實は今も大御所に申上げたのだが、此政宗が軍法には、敵味方の差別は無い。先手から同勢へ逃げかゝつて來たら味方も一緒に討ち取らないと友崩れになつて敗軍するものだ。今日も家中のものが政宗の軍法を固くまもつて、神保を討留めたので、味方の大軍が崩れにならずに濟んだのだ。おれは近頃の大働き、大手柄と思つて、今も大御所に自慢を申上げたばかりだ。おまへ方にも豫てから、これだけの辨へがあつたら、越前家の小者などが、どの樣な流言をいひ觸さうと、先手が味方へ崩れかからうと、あの樣な見苦しい敗軍にはならずに濟んだ筈だ。

横田　併しあの時は……

家康　（一同を和めて）もういゝ〳〵。陸奥守はもう歸られるがいゝ。では、あの事は何分頼みましたぞ。

政宗　それは御心配に及びません。（一禮して草鞋をはきながら、大久保に）彥左衞門、戰が濟んで京都へ引上げたら思ふさま呑むとしようかな。

大久保　勝手になさるがいゝ。わしは御免だ。

政宗　（笑つて）さう怒るなよ。では御免。

（小栗は邸の後まで送り行く、政宗の馬上の姿向うへ消える。小栗も之に從ふ。）

家康　そこで出羽守。おまへの今朝の働きについて……

（又馬蹄の音、邸のあなたに聞え、本多上野介駈け入る。）

家康　上野介か。又、何ぞ急用か。

上野介　はい、至急に申上げたい事が出來いたしまして。

家康　さうか、どんな事だ。

上野介　御免。

（家康の近くへすゝんで囁く。）

家康　（目をかゞやかせて）左樣か、其使者は。

上野介　そこへ參つて居ります。

家康　これへ連れて來い。

上野介　こゝでよろしうございますか。

家康　（佐渡守に）其方がいゝだらう。

佐渡守　無論。左樣遊ばした方がよろしうございませう。

（と、家康にさゝやく）

家康　どうも仕方があるまい。

佐渡守　出羽守どの、折角お召でございましたが、急に敵方から使者が參つたでな。（上手奥をさして）向うで控へて居て下さい。

阪崎　（不滿さうに）では、後刻又伺ひます。其方がわたくしも勝手でございますから。

家康　（笑顔を見せて）まあ、もう少し遊んで行け。こつちは其方が勝手なのだ。又左衞門、案内してやれ。

柳生　はあ。出羽守、さあ參らう。

阪崎　（不承々々に）では、御免下さい。

（兩人は上手奥へ去る。）

佐渡守　（一同に）おみ達も向うで控へて居て下さい。

一同　はあ。

（一同下手邸の後へ、小姓たちは幕の向うへ去る。上野介はこの以前に、一度邸の後へ去り、すぐに大野治長が家老米村權左衞門をつれて來る。米村は肩衣を着けて居る。）

家康　權左衞門、又やつて來たな。

米村　面目次第もございません。

家康　今頃になつて何の用だ。

米村　（懐から一通の書狀を出して）どうぞ御覽を願ひます。

家康　（佐渡守を經て受取つた書狀を見て）何だ、大野修理の名になつて居る。（開いて見て）修理の奴も臆面のない男だな。（佐渡守に渡す）蟲のいゝ事を云つてよこしたよ。

佐渡守　（一讀して）此位なら今朝上さまから、おあつかひの話の出た時に、お縋り申せばよろしかつたのにな。

米村　それには主人も後悔致して居ります。主人を始め速見甲斐守其他の御側のものは、腹かき切つて御詫を申上げます。どうか、御母公さまと、内府公御夫婦の御生命だけはお助け下さいます樣に、主人から呉々も申しつかつてまゐりました。

佐渡守　大野や速見は、腹を切つた位でお詫が出來ると思つて居るのが圖々しい。併し、こゝまでせりつめましてはどうも致し方がございますまい。

家康　おれも左樣思つて居るのだが……

米村　併し左樣なりますと、此度の事には何のお關係もない、御臺さまが、如何にもおいたはしうございますが……

家康　（われにもあらず聲をふるはせて）御臺……？

米村　はい。千姫さまのお身の上でございます。

家康　（佐渡守親子の心をかれる樣に）お姫は如何して居るな。

米村　御母公さまが例のおひがみで、寸時もお側をお離しになりませんので、おいたはしい御樣子だと承はつて居ります。

家康　（悲しげに）あ、左樣か。お袋どのは、人質に取つたつもりで居るのだらうな。

佐渡守　（わざと冷かに）それは十二年前に、お輿入をおさせ申す時から分つた事でございます。それを今更になつて……（激勵する樣に家康を見る）

家康　（態度を改めて）いや、これはおれが悪かつた。（米

村に）此度の軍務政務のあらゆる下知は昨夜から將軍にすつかりお任せにしまつた。だから德川の家に傳はる金扇の馬印も、秀忠の方へやつてしまつた。それをやつて半日經つかたゝぬに、又橫合から口を出しては、われから天下の掟を破る事になる。如何にも殘念だが、おれからは挨拶のしやうが無い。將軍に逢つてよく賴んで見たらよからう。上野介、この男を岡山の本陣へ連れて行け。

上野介　はつ。

米村　しかし城內のお方々の御生命は、御承知の如く旦夕に迫つて居ります。相成るべくは御上意によつて、一刻も早く御助け申上げたいものでございますが……

家康　おれとしても、孫は可愛い、助けてやりたい。が、天下の掟は尙大事だ。權右衞門、これが天下を治むるものゝ悲しいところだ。（愁然としていふ）

米村　それでは是非がございません。少しも早く將軍家へ御願ひ申します。どうか、上樣からも御口添を願ひます。

家康　秀忠といふ男は、表面はあの通りやさしいが、腹が極つたとなると、誰のいふ事でも聞かん奴でな。上野介、兎に角權右衞門を早くつれて行け。

上野介　畏りました。

佐渡守　伜、御所樣の御思召を、妙に取違へたりしてはならないぞ。（と、目顏で知らせる）

上野介　大丈夫です。では米村どの。

米村　御免を蒙ります。

（上野介と米村とは邸の後へはひろ、又馬蹄の遠のくひゞき。）

家康　（あとを見送つて）どうもしやうがあるまいな。

佐渡守　御胸中は御察し申しますが、こゝで弱い心を御出しになりますと、關ヶ原以來二度の合戰に血を流し、身を殺した何萬の人たちは、犬死になるわけでございますからな。

家康　うむ。（少し考へて、稍自信なげに）それはそれに相違ないが、秀賴もお袋どのも、あそこまで窮命させたのだから、生命だけは赦してやるわけには行かないかな。大抵牙も爪も引むしつてしまつたのだから、虎を野に放つても仔細はあるまい。

佐渡守　あのお二人だけなら、さして心配する事もございませんが、何と云つても太閤殿下といふ光りが殘つて居りますからな。どうせあなたも後世の歷史をかくものどもからは、惡口を云はれるだけのことをなすつたのですから、こゝは一番天下第一の惡人になつて、再び禍の芽を吹くやうな根や幹は、殘してお置きなさらん方がよろしうございます。それが御家萬代の爲でございます。

家康　しかし同時に、肉身の孫にまで斧をあてるのは、少

し荒療治だなあ。
佐渡守　敵方では、あなたの首にさへ斧をあてようとして、關ヶ原以來、今度のやうな騷ぎを二度も起して居るではございませんか。
家康　併し去年の冬からこつちの二度は、どうも押賣の氣味だつたよ。
佐渡守　(苦々しげに)あなたは近頃、兎角弱音をおふきになる。矢張お年齢の所爲ですかな。
家康　さう申せば、おれも少し善人になり過ぎたかも知れないな。佐渡守、おれはこの間から氣になつてならない事があるのだ。
佐渡守　(不安げに)な、何でございます。
家康　おれは太閤の最期の時、どんな事があつても秀頼の身體は屹度引受けたといふ誓紙を書いたものだ。氏神八幡大菩薩を始めとして、八百萬の神に誓を立てゝな。
佐渡守　ところが、其約束は向うから破らせられたやうなものでございます。
家康　相手はどうあらうと、神々に對して約束を破るのは、よくない樣だな。
佐渡守　(哄笑して)はゝゝは、あなたは神罰がおそろしいと仰有るのですか。天下を取らうといふお望みをお立てなすつた時既に、八萬奈落の底で永劫の苦みをなさる御覺悟を御つけなすつた筈でしたがな。
家康　そりや未來はどうでも構はないが……
佐渡守　現在だつて、お互ひにもう幾年も生きて居られるわけではないぢやございませんか……
家康　(急に破顏して)成程な、おれは自分の年齢を忘れて居た。おれももう七十四だ。今が今四百四病が一時に此身に發して、のたれ死に死なうとも、我慢のならない程の長い苦ではあるまい。八つの歳に今川の人質となつてから六十七年間、思へば血を吐くほどの苦を何百遍くぐつて來た事か。それに比べたら、死の苦みなどは物の數でもない筈だ。秀忠や子孫のものにさへ天罰が降らなければ、おれ一代は如何ならうと構はん。(急に平常の調子になつて)誰か岡山へやつて、將軍にいらざる仁義立てをさせない樣にしなければならないの。
佐渡守　誰彼と申さうより、わたくしが自身で參りませう。
家康　さうだな。左樣して貰はう、甚右衞門をつれて行け。
佐渡守　畏りました。兎に角若い者共を呼出しませう。(下手に向つて)みんな、もう來てもよいぞ。
一同　はあ。
(一同出て來る。小姓たちも出づ。)
家康　(小姓に)出羽守も呼べ。
小姓　はあ。

（奥へ去る。やがて阪崎と柳生と出づ。）

佐渡守　甚右衛門、わしと一緒に岡山まで行つてくれ。

横田　承知致しました。

（兩人は邸の後へ去る。）

家康　出羽守、さぞ退屈であつたらう。そこでおまへの今朝の働きについてだが……

（割合に近きところで、大砲の音が二發聞える。城内の空に黑い烟が渦をまいて立のぼる。）

家康　ど、如何したのだ。

（一同邸の小高いところへ上つて。）

山岡　誰か、城内へ大筒をうち込んだと見えます。

家康　（眉を顰めて）餘計な事をする奴があるものだ。火の手が見えるのか。

庄田　山里丸の見當でございます。

家康　さうか、それでは考へてやつた事だな。まさか佐渡の策略ではあるまいが。

（横田甚右衛門急いで歸り來る。）

家康　甚右衛門、大砲を打つたのは何者だ。

横田　片桐市正だと申す事でございます。

家康　まさかお姫の……いや秀頼の逃げ場所をねらつたわけではあるまいな。

横田　何でも、煙ののぼつて居るのは山里丸の方角だと申す事でございますから、或ひは如何かとも存じられますが……

家康　で、佐渡は如何した。佐渡は……

横田　佐渡守は取急いで岡山へまゐりましたが……

家康　そちに何か口上を殘して行つたといふのか。

横田　はい。

家康　早くいへ。

横田　かくなりました上は、せめて御臺所だけでもお助け下さる樣にとの口上でございます。

家康　（自分の耳をあやしむやうに）なに、御臺所……あの今見殺しにしろと云つたお姫の身を……

横田　はい、佐渡守申しまするには、只今は天下の大事と申す一點にのみ心がはやりまして、如何にも人情に薄い事を申上げました。御身近い方々を御愛しみ遊ばされてこそ、ほんたうに下萬民をお憐れみなさる事になるのだ。將軍家へは佐渡守より、宜しく言上致し置きますから、千姬君御救出しの御工風を御願申せとの事でございます。

家康　（心の底より湧き起る喜びを、どう隱さうかと屈託しながら）そんな事をすると、又將軍から叱られるかも知れないぞ。それに此場合、自分の身内ばかり庇ふのもどんなものかな、兄弟親子で敵味方になつて居るのも少くないのだからな。

横田　佐渡守はそれについても斯様に申して居りました。日本國中を悉く一手に掌握遊ばした今日、御孫さま御一人ぐらゐお助けなさる事が出來ない様では、大御所として御威勢が薄い事になる。其點から申しても、是非御臺所を御救ひなさる樣に、一同からも御願ひ申せとの口上でございます。

家康（如何にも當惑したらしい顏を挺つて）理窟としてはそれに相違ないが、併し……

（又大砲の音、遠く吶喊の聲。）

家康　甚右衞門、兎に角大砲の打方だけは止めさせろ。

横田　將軍家の御下知だと申して、御命令を拒みましたら如何致しませう。

家康（一寸返事に窮したが）なに、たゞ一時待てと申せばそれでいゝのだ。

横田（稍不得要領に）はつ。

（横田は急ぎ邸の後へ入る。）

家康　又左衞門、そちは將軍の陣所へ行つて大砲だけは止めてくれないか。ひよつとすると上野介め、おれの心を讀み違へて、市正の馬鹿爺をおだてたかも知れないからな。

又左衞門　はつ。

（柳生は立上つて阪崎の側に寄る。）

柳生　出羽守、場合が場合だ。おとなしくして呉れ。

阪崎（煩さげに）大御所は御急ぎだ。まあ、早く行け。

家康　又左衞門、早くしろ。

柳生　はあ。

（柳生も邸の後へ去る。）

家康（急に猫撫聲になつて）そこでと、誰にお姫を助けてもらつたものかな。

（一同默然として頭を下げて居る。）

家康　無論十二分の骨折賃は出すよ。

（一同尙答へず。）

家康（狡猾さうに大久保を見て）彥左衞門に札を落すとするかな。昔馴染だからな。

大久保（膠もなく）御免を蒙ります。

家康（一寸眉を顰めて）なに、御免を蒙る？

大久保（冷然として）はい。

家康（流石にせき込んで）な、何故にだ。

大久保　生命を投げ出して、今朝ほどの防戰をしてさへ、お氣に入らなければ御叱りを蒙らなければなりません。お孫さまの御迎へをやりそこなつたら、どんな御仕置を受ける事になるか分りません。彥左衞門には槍奉行といふ大事な役目がございます。そんな役は手あきの者へ御申付を願ひます。

家康　（いよ〳〵腹立しげに）よし、お、おまへには申付けん。三太夫、そちに申付ける。

庄田　折角ではございますが、私は大切なお旗を御預り申して居ります。先程あの樣な御小言を頂戴致しましたのも役目を大事と心がけたからでございます。お姬樣のお迎へなどと申す役はお廣敷のものにでも御命じになつた方がよろしうございませう。わたしは……

家康　わ、わかつた、お、おまへは賴まん。金右衞門、おまへなら……

保坂　御馬前の討死なら、いくら御叱りを蒙つても、喜んで勤めますが、御奥の御用には金右衞門、とても御役に立ちません。

家康　（絕望と憤怒とのこゝろを面にあらはして）誰も行きたくないといふのだな。主計、そちもさうだらうな。

（山岡も答へず。又大砲の音する。）

家康　あゝまだ止め居らぬ。甚右衞門の馬鹿め、なにをぐづ〳〵して居る。あゝ孫の生命も、もうだめになつたか。

（身を慄はす。）

阪崎　（つと身を進めて）わたくしが參りませう。

家康　（思はず前に進んで）なに行つてくれる。

阪崎　（一同を尻目にかけて）多年恩顧の御旗本の連中が只今申す上は、外様の者でもまゐるより外はございませい。

家康　出羽守、能く云つてくれた。家康忝けなく思ふぞ。

大久保　われ〳〵とて無下に行かないといふのではない。たゞ……

家康　餘計な口を出すな。貴樣たちにはもう賴まん。出羽守、お姬を連れて來てさへくれたら、屹度加增をつかはすぞ、三萬……二萬……

阪崎　（家康がかゝる場合にも加增高をせり下げる打算的な態度に一種の輕蔑な感じつゝ）お心配は要りません。祿高で御奉行の切賣りはしませんから。

家康　（立ち昇る煙に心をひかれながら、いかにも感謝の心を見せびらかして）それは左樣なければならんが、併しあの城內へはひるのは、全く生命がけの大仕事だからな。眞田左衞門尉を商人相手にするよりも、まだ骨の折れる仕事だからな。今から墨附を渡して置いてもよいぞ。

阪崎　（家康の現金な態度に愈々不快な感じて）そんなものは欲しくはございません。

家康　併しこれほどの働きに對して、相當の酬いをせんといふわけには行かん。だから……

阪崎　そんな取引商賣は、後藤庄三郎でもお相手になさる場合がよろしうございませう。出羽守は忠義をはかり賣にする商人ではございません。

家康　（少し痛にさはりながらも、例の寛仁大度で胸をおさへながら）成程そちは噂以上に潔白な男だ。（一同に）おまへ方も見習ふがいゝぞ。

大久保　（烈しき不快を面に現して）な、なんの……

（法螺の音と吶喊の聲が遠くに聞える。）

家康　（ふと思ひついたらしく）では斯様しよう。千姫をやらう。あれをそちの妻につかはさう。

阪崎　（少しく心動いて）そ、それは……

大久保　（嘲けるやうに）天下の花婿なら、二つ返事だらう。

阪崎　（忽ち持前の自尊心が慾望を壓へつけて）きさまではあるまいし、慾得づくで自分の誠を賣れるものか。（家康に）もう此御役は御斷り申します。

家康　（驚いて）や、これはおれが悪かつた。もう褒美もやらん。禮もせん。が、家康は心の底から禮をいふぞ。

阪崎　（家康は阪崎の側へ來り、扇をとつて阪崎を煽ぎ）出羽守、徳川家康心から頭を下げるぞ。

阪崎　（すつかり得意になつて）いえ、それでは却つて恐れ入ります。併しあなたの御旗下には、あなたの爲に、生命を投げ出すものが無いといふ事だけは、御記憶を願つておきます。出羽守はこれで滿足致します。

大久保　（憤慨の絶頂に達して）馬、馬鹿な事をいふな。われ／＼は生命が惜くて斷つたのでは無いぞ。

庄田　さうとも／＼。われ／＼にはわれ／＼の職分があるのだ。われ／＼は其職分を重んずるが爲に……

阪崎　主君の命令なら、火にも水にも飛び込むのが武士の第一の職分だ。死ぬのに理窟はいらない筈だ。

保坂　併し……

阪崎　心がせく。千姫さまをお助け申して來てから、改めて理非の論判をしよう。（家康に向つて）では御免。

家康　頼むぞ。

（阪崎は邸の後へ行き、樹下につなぎし馬に跨つて去る。馬蹄のひゞきしばらく、遠く吶喊の聲、煙濛々と舞ひ上る。家康はその方をぢつと眺む。四方くらくなり遠雷の聲微に聞ゆ。）

大久保　（双眼に涙をたゝへながら、家康の側へ寄り、怨めしげに見上げて）上様、あなたは、昔の事をお忘れになりましたか。わたしは鳶巣山の初陣の時から……

家康　（憐れむが如く大久保を見て）又鳶巣山の初陣か。

（微笑を含んで）手飼の犬はいくら打たれても吠えつかぬものだ。迷ひ込んだ野良犬に嫉妬をやく馬鹿な奴があるものか。（やさしく一同に）あの雲を見ろ、大戰のあとには屹度大雨が來る。さあ、早く假屋の支度をしろ。

（又遠雷の聲、日稍くらくなる――幕。）

第二幕

天王寺附近の農家

將軍秀忠の岡山の本陣と、家康の茶臼山の陣營との間にある農家の一室、繩暖簾にて次の室に通じ右手は牛小屋、左手は落間、その奥は臺所。外面は山梔子まじりの生垣、稍離れて他の農家、その向うは和泉の平野、更に彼方は大和の山脈、電光閃めく毎に、その黑き山影見ゆ。

牛小屋の中には、雌牛一頭周圍の悲劇に、何等の交渉もなく靜に横はる。落間には片隅に臼、農具あり、壁には蓑笠三つ四つかゝる。千姬は葵の紋つきたる被衣を掩ひて、さし込む癪に苦みながら打臥して居る。その枕許には殿居袋二つ三つ。その一つに、法華經ををさめし筒守を載せる。壁際には薙刀懷刀などを置く。女の童松坂は千姬の背をさすり、侍女蘆屋は蚊遣火を焚き居る。短檠の灯夜風にちらつく。

落間には料理方大住與左衛門、今しも阪崎方より贈り來りし行厨、鯛、野菜など入りし籠を、片隅の臼の上に積み在る。

前の幕より三時ばかりの後。

烈しき驟雨、折々電光、雷鳴。

千姬　（少し苦痛が薄らいだので、身を起しかける）　蘆屋、誰か來たのではなかつたか。

蘆屋　はい。出羽守さまから御使ひがございました。

千姬　そちが逢うたのか。

蘆屋　與左衛門が挨拶致しました。料理頭を召しませうか。

千姬　左樣してたも。

蘆屋　與左衛門どの、お召しです。

（與左衛門は鯛と野菜との入りし籠を手にして、にじり上る。）

與左衛門　御用でございましたか。

千姬　出羽守から使ひが參つたさうぢやの。

與左衛門　はい。御臺樣へと申して、かやうな品々を持參致しました。

千姬　それはうれしい心盡しぢや。おゝ鮮魚ぢやな。この樣な騷ぎの中で、如何して手に入れたであらうな。

與左衛門　勝いくさの御祝儀に、將軍家よりの下されものださうでございます。

千姬　なに勝戰の祝ひぢやと。（腹立しげに）　えゝ、わたしへ面あてにおくつてよこしたか。見るも胸惡い。とり棄てゝしまや。

與左衛門　は、は。（躊躇する）

千姫　牛にでもとらせてしまや。

與左衛門　(恐る／＼) 御詞をもどく樣ではございますが、出羽守さまには只管御臺樣の御機嫌にそなへたいと、御自分の口へ入れずに、折角獻上をなされたのでございます。彼方の御深切をお酌み取り遊ばして、一箸でもおつけ遊ばしたら、出羽守さまもさぞ御滿足でございませう。

千姫　(うなづいて) 成程、わたしは父上の擒れ同樣の身の上であつた。いつもの我儘も少しは控へずばなるまい。まあ、よい樣にしてたも。

與左衛門　それ承はりまして私も安堵致しました。陣中のがさつな料理では、とても御臺所にはさし上げられぬ。わたくしが御供を致したこそ幸ひ、何分よろしく庖丁を頼むと、砂糖や下地まで取そろへて、出羽守さまから贈つて下さいました。では直に支度にとりかゝります。御免下さいまし。

(與左衛門は繩をもつて、落間におり、行廚を取つて、蘆屋と松坂を顧み。)

與左衛門　あなた方へも阪崎さまからお辨當が來て居ますぞ。お上のおすきに代る／＼頂戴なさいまし。

(云ひ棄てゝ臺所の方へ去る。大雨、電光。)

千姫　(脊をさすり居る松坂に) もうよい／＼、少し休むがよい。

松坂　わたくしは何ともございません。もう少しおさすり申しませう。

千姫　身うちのいたみもいくらか輕くなつた。代る／＼夕餐をたべるがよい。

兩人　有難うございます。

千姫　それにしても何時であらうな。

蘆屋　今しがた天王寺の四つが鳴りましてございます。

千姫　もうその樣に更けたのか。それにしても刑部は何といふ遲い事であらうな。

蘆屋　お迎の人數を揃へるのに、手間取つて居るのでございませう。

千姫　(淋しさうに) 早く父上にお目にかゝりたいものぢや。

(又雨ふりしきる。刑部卿の局は簑笠に雨を凌ぎ、松明をもちたる本多上野介の家來二人に送られて出づ。)

刑部卿の局　(生垣の際にて) 御苦勞でござりました。これで引取つて下さい。

家來たち　御免下さい。

(家來たちは去る。)

千姫　(耳さとく) 刑部が戻つたのではないか。

刑部卿の局　(落間へ入り、簑をとりながら) はい、只今

もどりました。
千姫　雨の中を氣の毒であつたな。して迎へには何者が來ました。
刑部卿の局　（にじり上りながら）　さあ、そ、その事につきまして……
千姫　如何ぞしたのか。
刑部卿の局　（蔵屋と松坂に）　そなたゝちは、あちらへ退つて居て下さい。
兩人　はあ。
（兩人は心を殘して次の室へ去る。）
千姫　二人を遠ざけて、一體どの樣な事が起つたのぢや。
刑部卿の局　（躊躇して）　は、はい。
千姫　迎への者は急には來ぬのか。
刑部卿の局　は、はい。
千姫　（少しじれて）　如何したのぢや。
刑部卿の局　（涙聲になつて）　御臺樣、殘念でございます。
千姫　何が殘念なのぢや。わたしにはちつとも分らぬ。
刑部卿の局　將軍樣は御對面がかなはぬと仰有ります。
千姫　（驚いて）　なに、父上が……わたしに逢はぬと……何の爲にその樣な事を……。
刑部卿の局　將軍さまの仰せられますには、千姫は豐臣家へ輿入したものぢや。大阪を離れて三界に家といふものゝあらう筈はない。それを豐臣家危急存亡の大事の時に、夫の側をはなれ、いらぬ事を申して來るとは古今の不心得、故太閤殿下に對しても面目ない、恥を知らば城内へ還つて何故内府公の側で死なぬと、それは〱おそろしい御立腹でございました。
千姫　（烈しき愕きの表情）　なに、父上がわたしを不、不心得……（ヒステリックに笑ひ出して）　女としての道ぐらゐの事は、今更父上の說教を聞かずとも能く知つて居る。夫と生死を倶にする事ぐらゐは、人に敎へられずとも十分に辨へて居る。併しわたしは死ぬよりつらい道を選んで、夫や義理ある母上を救はう爲にこゝまで來たのた。刑部、そなたはこの位分り過ぎた道理さへ、父上に敎へて上げる事は出來なんだのか。
刑部卿の局　その事はくりかへして申上げましたが、誰が來ようと今更になつて和議の、降參のといふ事が許されるか。それ程の事さへ分らずに、大野修理などの口車にのせられてお先に使はれるとは淺ましい。それで秀忠が娘と云はるゝか、と、とつてもつけぬ、えらい御劍幕でございました。
千姫　なに、秀忠の娘！　（冷笑して）　それ程義理人情を重んぜらるゝ父上なら、何故豐臣家を滅ぼさうとなされたのぢや。鐘の銘やら、母上を人質にせうなどゝ難題を

いひかけて、無理な戰をしかけて置き、桝おとしにかけた憐れな鼠に、火をつけるやうな無慈悲なまねをなさりながら、今更和議も、降參もあるものかとは、義理を知る人のいふ事か。それでわたし丈には義理のふかい、貞節な女になれと仰有るのか。內府樣をもとの御身分にして、大阪の城をもとの通りに修繕して、あの數々の外濠も、元の深さに浚つて下さつたら、いつでも內府さまと一緒に死んで御覽に入れますと、そなたは何故云つて來なかつたのぢや。

刑部卿の局　でも、わたくしの身分では、どうして其樣な大それた……

千姬　それにわたしが御城を脫けてこゝへ來たのは、お祖爺さまから御迎へのあつた爲である事は、そなたも能う知つて居るではないか。大阪の母上は、わたしの爲命が助かり、豐臣の家も救はるゝといふ樂みはありながら、わたしの胸をこな／＼にする樣な、忌味やら皮肉やらをいひつゞけておゐでなされた。それを辛抱するよりは、此身體を千度も萬度も父上の陣からうつてよこすあの大砲の筒先にさらす方が、どの位樂であつたか知れぬ。そなたも知つて居る通り、內府さまからあの通り餘儀ないお賴みがあり、修理や饗庭などからも、血が上るほどに口說かれても、わたしはこゝへは來たうなかつたのぢや。あの城の中で死にたかつたのぢや。でも、あの出羽守からお祖父さまがわたしの爲に泣いて下さるといふ有難い思召を伺つては、其御手におすがり申して、城內の方々を救つていたゞきたい心にもなつたのぢや。餌をつけた針先で釣上げた小魚を、なぜ水を離れて來た、もとの淵へ還つて死んでしまへといふやうな、そんな無慈悲な親が、此世の中に又と二人あらうか。（極度に興奮して）そなたでは分らぬ。さうぢや。

（帶をしめ直して、千姬は落間の方へ行かうとする。電光、雷鳴、雨又しきり强くなる。）

刑部卿の局（驚いて止めながら）ど、どこへお出でなされます。

千姬　何處へ行かう。岡山とやらへ行つて、父上に御目にかゝるのぢや。

刑部卿の局　まあ、滅相な。この大雨の中を、如何してあなた樣が。

千姬　矢玉の雨の中さへ凌いで來たわたしぢや。何のこれしきの雨位を。

刑部卿の局　それにしても、あなたが將軍樣にお目通りなさいましては、却つて將軍樣の御心もちを惡くなさるばかりでございませう。それ故どうぞ……

千姬　惡くなさらうと、よくなさらうと、それは父上の勝

手ぢや。わしは天晴秀忠とやらの娘らしく、正しい義理人情といふものを父上に教へて上るばかりぢや。

刑部卿の局　まあ、その樣に一旦の氣におなり遊ばしては、却つて事の破れになります。どうぞおとどまり遊ばして。

千姬　どうせ、もう事は破れたのぢや。今更何の遠慮がいらう。

刑部卿の局　しかし、それでは折角あなたの御返事を、樂みにしておいで遊ばす、御城內の皆さま方に御氣の毒ではございませんか。

千姬　あゝ。（と、流石に躊躇する）

刑部卿の局　そればかりではございません。あなたが萬一將軍樣の御氣に逆ひ、內府樣や御母公樣の御命乞がかなはぬ事となりましたら、世間の者は何と申しませう。矢張あなたは御自分ばかり御庇ひ遊ばして、皆樣を御棄てなされた樣に申しませう。左樣なりましては、今迄の御苦心もみんな水の泡となりませう。

千姬　（心を決して）よし、それならば、もう一度御城へ還るとしよう。

刑部卿の局　（呆れて）えつ、如何して又御城などへ。

千姬　夫と一緒に死ぬといふのが、父上の御望みでは無いか。秀忠の娘にどれだけの覺悟があるか、立派に御覽に入れるだけぢや。

刑部卿の局　あの樣に邪險な事を仰せられましても、それは表向きだけの事、將軍樣とて何か外に御思案があるに相違ございません。それにあなたを御迎取り遊ばしたは大御所さまでございます。わたくしがこれから茶臼山へ參じまして、あなたの思召もよく御耳に入れませう。

千姬　さつき出羽守が、茶臼山へわたしを連れて行かうとした時に、眞直に岡山の方へ行けと仰有つたはおぢいさまぢや。而していつ迄もこの樣な賤が伏屋へ投げ込んだなりで、食事の手あてもして下さらぬのもおぢい樣ぢや。からなつて見れば、お祖父さまとて一つ穴の貉かも知れぬ。いつまで欺されて居るものか。わたしはこれから直にお城へ歸つて、內府樣の前で立派に死んで見せよう。

刑部卿の局　御もつともでございます。それは御腹も立ちませう。併し折角出羽守どのを御使者にして、あなたを御迎へなされた大御所さまが、むざとあなたを御棄て遊ばす筈はございません。兎に角しばらくわたくしにお委せ下さいませ。今度は必らず、御思召にかなはない樣な御返事をもつては參りません。御願ひでございます。どうぞわたくしを御遣はし遊ばして……（と、淚にむせびながらいふ）

千姬　（首肯いて）成程、それでは暫くそなたに委せよう。雨の中を御苦勞ぢやが、お祖父樣の御胸の中を聞いて來

てたも。途が淋しからう。蘆屋と與左衞門をつれて行くがよい。

刑部卿の局　これではあなたさまが、御困りでございませう。

千姫　いや、松坂が居る故、不自由な事はあるまい。夜中といひ物騒な戰場ぢや。つれて行くがよい。

刑部卿の局　では左様させて頂きます　もつとも行懸けに、出羽守さまにお目に掛り、御伽に來ていたゞきませう。

千姫　あゝ、ほんに出羽守が近くに居たのであつたな。どうぞ左様してもらつてくりや。

刑部卿の局　畏りました。では行つてまゐります。が、御臺さま、刑部は必らず、御心に適ふ様に致してまゐります故、どうぞきな／＼遊ばさずに。

千姫　(微笑して)　わたしよりはそなたこそ、氣をつけて行つてくりや。氣の毒ぢやの。(涙ぐむ)

刑部卿の局　(涙を拭ひ)　何のまあ勿體ない……では、兩人に云ひつけてまゐります。

(刑部卿の局奥へ入る。千姫は心が落ついて、また肉體の苦痛を感じ出せしこゝろ。胸を抑へて殿居袋にもたれかゝる。電光、雷鳴、刑部卿の局はかひ／＼しき扮裝して再び姿を現す。)

千姫　兩人は如何しました。

刑部卿の局　只今支度を致して居ります。

(蘆屋と與左衞門も落間の奥より出で來る。松坂は手燭をもつて送り來る。與左衞門は落間にかけある蓑笠をとつて、蘆屋に渡し、おのれもそれを着ける。)

刑部卿の局　では、いつて參じます。

千姫　御苦勞ぢやな。

(三人は雨を冒して生垣の向うへ去る、松坂は手燭を消して床の上へ來る。千姫は尙胸苦しき體、松坂心づいて。)

松坂　またおさし込みではございませんか。

千姫　いや、大した事ではない。

松坂　お横におなり遊ばしませ。ちと、おさすり申しませう。

千姫　いや／＼そちもけふは草臥れたであらう。あちらへ退つてやすむがよい。

松坂　いえ／＼、御臺樣さへ此樣に御苦勞を遊ばしますに、何でわたくしばかりがその樣な……

千姫　いぢらしい事をいふ子ぢや……折角の志ぢや。では、しばらくの間……

(松坂は後にまはりて、背をさする。)

千姫　そなたが餘りあとを慕ふので、つい連れては來たものゝ、思へば心ない事をしたものぢや。

松坂　お城に歸つて、御父様のお身の上を御案じ申しますよりは、此百層倍も苦勞を致しましても、お側に居られるのが、どの位嬉しいか分りません。

千姫　（肩にかゝる松坂の手を握つて）　そなたは運の拙い子ぢや。悪い主を取つたばかりで、世間の子供の知らぬ苦勞をする。

松坂　わたくしの朋輩でも、彈丸に中つて死んだ人が澤山にございます。それから見れば、わたくしはどの位運がよいか分りません。これも御臺さまのおかげでございます。

千姫　あゝ、その運もいつまでつゞく事か……

（兩人しばらく沈默。雨の音稍靜かになる。松坂は小供の事とて終日の疲勞一時に發し、思はず居眠りする。暫くして。）

千姫　松坂。

松坂　（驚いて）　は、はい。とんだ粗相を致しました。御免下さりませ。

千姫　（わざとやさしく笑つて）　わたしは大分心持がようなつた。さ、次へ退つてやすみや。

松坂　いえ。もつとおさすり申します。

千姫　わたしも休みたい。一人にして置いてくりや。

松坂　でもわたくしは……

千姫　（少しあら〳〵しく）　退れといふに。

松坂　はあ。

（不安さうに奥へ入る。又雨聲つよくない、電光、雷鳴、阪崎出羽守黑革縅の鎧をつけ、兵士二人に松明を振かざさせ、生垣の彼方より入り來る。）

阪崎　そちたちは裏へまはつて休息せえ。

兵士たち　はあ。

（番人去る。阪崎は落間へ入りて。）

阪崎　出羽守、伺候致しました。

千姫　おゝ出羽守か。よう來てくれた。さ、早うこれへ。

阪崎　それは餘りに……

千姫　待わびて居たのぢや。さあ早う。

阪崎　では御免を蒙ります。

（阪崎は草鞋を脱いで上る。千姫はすり寄つて。）

千姫　刑部から聞いたであらう。出羽守、わたしは生みの親にさへ棄てられてしまうた。

阪崎　人の親とも思はれぬ將軍家の御難題、局より承はつて驚き入りました。

千姫　かうなつてはそなたの外に賴む人とてはない。出羽守、どうぞ便りになつてくりや。

阪崎　（感激して）　恐れ多いお詞、出羽守、誓つて御奉公をいたします。

千姫　つい三時前までは、噂にさへ聞いた事のないそなたに、この様に世話になるといふのも、前の世からの深い、深い緣でもあるのであらう。それにしても出羽守、わたしはこれから、如何身のふり方をつけたものであらうな。

阪崎　されば……（と、躊躇する）

千姫　どうぞ遠慮をせずにいうて聞かしてくりや。わたしには物を考へる精も魂もつきてしまうた。わたしの胸にあるものは、たゞ父上を恨めしいと思ふ心はかりぢや。（泣く）

阪崎　御なげきはごもつともでございます。併し局が歸らるゝまでは何事も御我慢をなされませ。大御所の御返事によつて……

千姫　（引とる樣にいそがしく）御祖父さまは、わたしの事や、内府さまの事なぞを、ほんたうに思つて居て下さるであらうか。

阪崎　（答に窮して）さあ、その儀は……

千姫　心許ないいひ方ぢやな。これ、出羽守、まことの妹とも思うて、心にある通りの事をいうて見てくれぬか。

阪崎　（一層感動して）勿體ない御語を承はりまして、出羽守、感激の外はございません。此上はもう御座なりは申しません。大御所はあなたにお逢ひなさるのが御迷惑でございませう。

千姫　（萬一を恐れて居た豫感に裏書されて、驚愕の表情）あの、おぢいさまが……如何してそなたはさう思ふのぢや。

阪崎　實は將軍家の御返事が餘りに遲なはりますので、聊か心がかりに存じましたゆゑ、大御所の思召を伺ひに、茶臼山へ推參致しました。

千姫　しておぢいさまは何と仰有つた。

阪崎　ところが大御所は御逢ひ下さいません。御取込み中ぢやとあつて、大久保彦左衞門をもつて劍もほろゝの御挨拶でございました。

千姫　自分の生命を投げ出してまで、わたしの生命を救はうとして呉れた、大事の／＼そなたに對して、まあ何といふ仕むけやうであらう。

阪崎　炎の中からあなたといふ美しい玉を拾ひ出させるまでは、その樣な命懸けの危險を冒す馬鹿者にも、甘い話の一言ぐらゐはおかけにもなりますが、その寶玉が無事で炎の中から出たが最後、その馬鹿者の手が燒けようが、たゞれようが見向きもなさらぬといふのが、あなたのお祖父さまの世渡りの方便なのでございます。（千姫が悲しさうな顏を見て）やつ、これは申し過しました。併し此出羽守、決して僞りは申しません。有りの儘を申上げるのでございます。

千姫　（知つてとりなし顔に）大阪の母上も、同じ事をいひつゞけて居られた。しかしいくら人の惡いおぢいさまでも、そなたにはさう沒義道な仕向けはならぬ筈ぢや。そなたは先刻旗本の人たちと爭ひをしたと云ひましたな。それ故あの人たちが、仲に立つて邪魔をして居るのではあるまいか。

阪崎　いやそれも考へましたので、わたしとは昵懇な柳生又左衞門をもつて、折返して、あなたの儀について御伺ひにまゐつたのだと申入れました。

千姫　そしたらおぢいさまは何と御挨拶遊ばした。

阪崎　お姫の事なら、萬事將軍が承知ぢや。あの事はもうわしの自由にならぬと、手の裏をかへした樣な御返事でございました。

千姫　では、矢張おぢいさまも父上と同じ御心だつたのか。さう知つた上は、刑部の返事も聞くには當らぬ。出羽守わたしはそなたに改めてたのみがある。

阪崎　と、仰有りまするは。

千姫　どうぞ、わたしを城内へつれ戻してくりや。

阪崎　（驚いて）またあの城内へ……血と、炎と、死神とのみが、あれまはつて居るあの城内へ。

千姫　（決然として）左樣ぢや、父上の望み通り、死すべきところで死ぬばかりぢや。

阪崎　いや、それはあなたの御思ひ違ひでございます。將軍家はあなたを殺したうてあゝ仰せられたのではございません。娘は助けたし、婿は殺したし、さりとて賢君顏もして見たし、三方四方都合のよい、見場のよい舞ひが見せたい爲、あの樣な事をいひ出されたのでございます。あなたを叱つて死ねといへば、義理人情にあつい名君に見えます。今夜一晩だけあなたをこゝへ投出して置いて、城内への返事をのばせば、內府公もお袋さまも、あなたに欺された裏切られたと思召して、多分明日の朝までには御自害をなされませう。それを待つてあなたに御對面なされ「あゝ氣の短い人たちぢや。われらの心を無にして與れた」と、又名君らしい顏をして空淚をこぼさうといふ魂膽でございます。あなたもこゝで蚤と蚊にせゝられながら、短い夏の一夜をお明かしなされば、萬事は綺麗にかたがつきます。

千姫　そ、それでは父上は、おのが娘を欺してまで、賢君顏をしたいのか。おぢいさまは肉身の孫の心を賣つてまで、世間の口を塞ぎたいのか。さう聞いてはこの樣な汚はしい敵の陣所に、一刻も居るのはいやぢや。父上やおぢいさまに鼻をあかせるだけにでも、わしは城內へ還つて死ぬ。さうしたらあの人たちも、少しは僞りや飾りのない、まことの世の中といふものが分つて來よう。出羽

守、さあ、連れて行つてくれ。

（出羽守答へず。）

千姫　出羽守、そちはあの城へ入るのが、恐しいのか。

阪崎　（急に面を擡げて）な、何で、わたくしが……

千姫　（稍皮肉に）亂れ飛ぶ矢玉の中をさへ、ふりかゝる花吹雪の下でも通る樣に、頭一つさげずに、わたしを負つて來たそなたぢや。今宵の雷雨位は苦にもなるまい。德川方の者に咎められたら、わたしが叱つて道をあけさせる。

阪崎　あゝ男恥かしい御臺所の健氣な思召、憚りながら阪崎出羽守、生れて初めてかゝる雄々しい女性を御見受け申しました。よろしうございます。よろこんでおとも致しませう。正直を申せば、わたくしとても、おかげで大御所に仕返しが出來ます。有難うございます。

千姫　では、連れて行つてくれるか。したが出羽守、城内にもこゝと同じやうに、女々しい、腹黒い、大野のやうな人間が、まだ澤山に生き殘つて居ようも知れぬ。其樣な小人どもは、そなたに對してどの樣な狼藉を働かうも知れぬ。心利いた家來たちを連れて行つたがよい。そなたの身に不慮の事があつては、わたしはかなしい。

阪崎　どうせ此一命はあなたに捧げたものでございます。憖じ人數が多ければ、味方の關門がうるさうございます。出羽守たゞ一人でお供を致します。（獨語のやうに）それにしても、このやうな心も姿も麗はしい御方に慕はれて、生死を共に遊ばす秀頼公は、御武運こそ拙けれ男としては此上もない果報めでたいお方だ。生れてこゝに三十五年、世間のあらゆる女といふものに、薄目一つくれた事のない此孝親も、初めて今迄の武骨さが恥かしくなつた。（ふと心づいて自から嘲る樣に笑ひ出す）いや、あなたの御前も憚らず、男らしくもない述懷をもらしました。が、これも出羽守が一生の愚癡の吐きをさめかも知れませぬ。御容赦を願ひます。はゝゝは。（しひて陽氣に笑ふ）

千姫　（同情の涙をとゞめかねて）出羽守、わたしも初めて、男といふものが分つて來たやうぢや。

阪崎　（おのが耳を疑ふやうに）な、何と仰せられます。

千姫　出羽守、恥かしいがわたしはまだ男といふものを知らぬのぢや。

阪崎　えつ。

千姫　わたしは八つの年に、豐臣家へ嫁にやられた。それから今日まで十一年の間、内府公のお側に居た。しかし夫婦といふのは名ばかりで、二人の仲には、廣い、冷たい淵が、姑御樣の手で掘られて居たのぢや。

阪崎　意外とも、案外とも申上げやうのない御沙汰でござ

ゝます。振分髪の幼馴染が夫婦となられたお二人の中に、その様な隔りのあらう筈はございますまいに。

千姫　それもこれも畢竟は、おぢいさまの非望のためぢや。義理の母上は、豊臣の御家を覘ふ悪魔ぢやと、始終おぢいさまを睨んで居られた。（少し顔を赧らめて）その上にわたしは内府の生れぢや。夫の身を喰ふ毒蟲ぢやと思はれて居たのぢや。それだけでも、わたしは母上から嫌はれる、不運な身に産れついて居たのぢや。わたしは此年になつても内府さまと、一つ臥戸におきふしをさへ許されなかつた。

阪崎　お袋さまは兎も角も、内府公にはその様な殺到を、御承知なされたのでございますか

千姫　（一種の皮肉をもつて）ところが内府さまのまはりには、敵の孫よりもたんと美しい、若い、怜悧な側室が幾人も居た。関松といふ若君さへ儲けた寵姫は、どちらが正室か分らぬ様な大きな顔をして、内府さまの側にへばりついて居た。（如何にも憎々しげにいふ）

阪崎　（憤慨の表情）天女にもまさる、此世に一人の清い女性を恥かしめる男こそは、男の冥利を知らぬうつけ者だ、その一つの無事だけでも、身を滅ぼす價値は十分だ。

千姫　しかしそれはあの方が悪いのでは無い。みんな姑御様の策略からぢや。

阪崎　（思ひ入つて）百萬の邪剣な親を、ひねりつぶす法もあれ、一人の無垢な女性を苦めて、それが、何で男一疋だ。

千姫　（ちつと阪崎を見て、涙の落るも知らず）でも、わたしの運はもう極つた。夫でもない夫の側でわたしは人の妻顔をして死ぬばかりぢや。

阪崎　あゝ大阪の内外に焚えさかつて居るあの劫火よ。この清い、汚れを知らぬ姫君だけは燒いてくれるな。その代りには此世の中にありとあらゆる、非道な親、無慈悲な夫を、此出羽守がかたつぱしから投込んで、おまへの紅蓮の舌を滿足させてやるわ。

千姫　あゝ、何といふやさしい事をいふ人ぢや。男といふものは、むごい、冷たい、情を知らぬものとばかり思うて居たに。

阪崎　あゝ女性のなげきに底はないものでございますな。わたしは自分の姉程不幸な女はないことゝ思うて居りましたに。

千姫　それではそなたの姉御も、邪剣な姑御の……

阪崎　今では離別のうきめを見て、わたくしの許に身を寄せて居ります。

千姫　それでも其人には、そなたといふやさしい頼もしい身をよせる木蔭があるが、あゝ、わたしは、わたしは、

便るべき親にさへ見放されて……

阪崎　え丶、斯うと知つたら、大御所の語を幸ひ、あなたを宿の妻と申し受けて置いたものを、

千姫（怪んで）なに、わたしをそなたの妻にとは。

阪崎　申上ぐべき事でもないので、御耳には入れませなんだが、有様は、あなたをお救ひ申した褒美として、わたしに下し賜はらうといふ、大御所の御沙汰でございました。

千姫（恨めしげに）それをそなたは斷つたのか。

阪崎　身に寸功もなくて祿をぬすむ、旗本原への面當に、膠もなう御斷り申しましたが、今更思へば益もない痩我慢、（舌打して）武士の意地ほど馬鹿げたものはございませぬな。

千姫（身を悶えて）女の意地は尚かなしい。

（二人は顔見合せて異樣の感慨にふける。天王寺の鐘聲殷々として雨中に響く。）

千姫（心づいて）その樣なやさしい語をきくのは、却つて後世の迷ひの種ぢや。出羽守。さあ、連れて行つてくりや。

阪崎　……

千姫　思うてくれる人に送られて、思うてくれぬ人の側へ死にゝ行く。これも浮世のさだめであらう。出羽守、さあ行かう。

阪崎（決心して）お供致しませう。

（千姫は側に棄てありし被衣を取り、筒守を頸にかける。阪崎は千姫を背負はんとする。千姫はよろ〱と阪崎の膝の上によろめく。兩人手を取つてぢつと顔を見入る。）

（此刹那、突然諸方に陣太鼓の響すさまじく、法螺の音之に交る。やがて馬蹄の音、入り亂れて、勝鬨の聲天地に轟く。）

千姫（驚いて）出羽守何であらう。もしや城内から夜討でも。

阪崎（耳を澄して）いや、太鼓の音色といひ、吶喊の聲といひ、すべて陽氣を含んで居ります。もしかしたら…

（阪崎の家臣牧野小太夫、先刻の兵士二人を引つれ入り來る。）

牧野　殿、これに御渡りでございますか。

阪崎　うむ、小太夫か。何事が起つた。

牧野　愈よ味方勝利と定まりました。

阪崎　あわて者め、今更其樣な事を事新らしく申しに來たのか。

牧野　御本陣から改めての御觸れでございます。

阪崎　お觸れぢやと。本陣からの。

牧野　秀頼公もお袋さまも御自害なされ、大野親子、速見、眞田、其外二十餘人の男女、打揃つておあとを追うたと申すことでございます。

千姫　(驚いて)出羽守、どうしよう〳〵。

坂崎　(千姫ないたはりながら)萬事わたくしにお委せなさりませ。まだ〳〵致しかたがございます。(小太夫に)何者が左樣の注進を致したのだ。

牧野　片桐市正殿から、御本陣へ早馬が立つたと承はつてまゐりました。

坂崎　(憤怒の表情)あの不忠不義の裏切者が、とう〳〵豐臣家を自滅させてしまうたな。

牧野　それについて大御所より、火急の御召しでございます。

坂崎　今になつてあの狸爺に逢うたとて何になる。棄てゝ置け。

牧野　併し何とか御挨拶申上げませんでは。

坂崎　陣所に見えぬといへ。

牧野　でも、重ねて御使番が見えましたら。

坂崎　さきまでは分らん。おれのいふ通り勘兵衛へ申せばよいのだ。さあ、行け。

牧野　はあ。

(小太夫は不安げに立去る。兵士たちも之につゞく。

太鼓、法螺の聲いよ〳〵殷なり。)

千姫　かうなつては城へもかへれず、というて生るにも生られず……

坂崎　(冷かに)その代り、大御所から御迎へがまゐりませう。

千姫　おぢい樣が、御自身でおいでなさらうと、わたしは行かぬ。

坂崎　えつ。

千姫　わたしはこゝで死んでしまふ。

坂崎　(驚いて)こゝで……お死に……

千姫　生きて再び、あの無慈悲非道な人たちの顏は見たうない、

坂崎　併し秀頼公御母子が御生害ときまりましたら、あなたに對する將軍家の御扱ひもかはりませう。

千姫　わたしはそれが忌なのぢや、つらいのぢや。善いにつけ、惡いにつけ、我子をさへ我子らしく扱ふ事が出來ず、世間の顏色ばかり見て居る賢君だちの玩弄になるのはもう澤山ぢや然じ生きて居たら、又どの樣な策略の道具につかはれぬものでもない。八つの歳にさへ嫁にやられたわたしぢや。又重ねてあの人たちの野心の犧牲につかはれたら、なまじ男の心が分つたゞけに、これ迄より遙かにつらい思ひをしなければなるまい、いづれにして

も今死ぬのは、わたしにとつて、身も心も淸らかに保つたつた一つの道らしい。出羽守、頼みぢや、どうぞ介錯をしてくりや。

阪崎　（この美しい女性を他の男の手に渡したくない、不純な望みが胸一杯になつて）ごもつともでございます。たとへ名のみにせよ、右大臣豐臣秀頼公の御簾中が、名もなき匹夫下郎の妻にもなれますまい。白雪の淸いねうちは、泥土に汚されぬ中に消える處にあるらしうございます。立派に御自害なされませ。御なきがらの始末はわたしが致します。

千姫　併し左樣なつたら、そなたに迷惑はかゝりはせぬかな。

阪崎　その樣なことは如何でもよろしうございます。血に染みた御身體だけでも、御世話が出來ますればわたくしの本望でございます。

千姫　併しあの横紙破りのおぢい樣から、そなたへ筋のないお咎めでもあつてはならぬ。一筆書き殘して死にませう。

阪崎　わたくしへの御斟酌なら、いらぬ事でございますが、女儀の心とて奪ひがたいものだといふことを、將軍家と大御所へ御かき殘し遊ばすも無益な事ではございますまい。

千姫　ほんに思ふさま、女の心の強さ、堅さを書きしるして見せて上げよう。出羽守、どこぞに筆はあるまいか。

阪崎　（上帶の間より矢立を取出して）これにございます。

千姫　忝けない。

（雨又烈しくなる。千姫は懷紙に書置をかく。此間阪崎は一心に千姫を打戍り居る。千姫は父と祖父とに對する憤怒の念に心をみだされ、屢ば筆をとゞめて涙にくるゝ。やがて悲痛の感は次第に興奮して、一種の痙攣を引起し、つひに悶絶しようとする。）

阪崎　（驚いて千姫を抱き）御臺さま〳〵。

千姫　（阪崎にすがりつき）出羽守、わたしはくやしい…

阪崎　御臺さま、さうお反りなされてはなりませぬ。御、御臺さま、（千姫を膝にておさへ、鎧の引合せより藥を出し、嚙み碎きて之を千姫の口にふくませる）御臺さま御臺さま。

千姫　（かすかに目を開き）出、出羽守。（苦悶の中にも感謝の心を面にあらはし、烈しく抱きつきて）出羽守、忝けない。

阪崎　（ぢつと千姫の面を見つめ）御臺さま。

（千姫を堅く抱きしめる。又太鼓の音、法螺のひゞき。雨聲一層烈しくなる。夜風一陣燈火消ゆる。——幕。）

第三幕

坂崎出羽守が邸

右の方に床の間ある座敷、前は庭、後にも他の部屋ありて、その向うは山手の屋敷町、外濠の一端も見ゆ。右手は玄關に通じ、左手は奥の方につゞく。床の間には掛物なく、序幕に出羽守のつけたる鎧をかざり、その側には南蠻鐵の兜盔形の兜を置く。床脇にはこの頃孝親が手に入れし眞田幸村が遺愛の太刀を、刀かけに飾る。

時は元治二年九月の末、庭前の二三株の櫻、狂ひ花を着けながら、霜を經たる葉には薄き紅を彩る。色鳥の聲、折々風の音その度にはら〳〵と病葉落る。

床前には牧野小太夫を初め、坂崎の家臣十餘人、いづれも武器の手入をなし居る。甲冑、刀、槍、弓矢、旗差物、馬具などを思ひ〳〵に修繕し居る。

家臣一　全くいゝ時候になつたな。古い文句だが、ほんたうに秋高く、馬肥えたりだ。

家臣二　馬ばかりぢやない、人間も髀肉の嘆を洩さずには居られなくなつたぞ。

家臣三　まづこれでおれの鎧の手傷もすつかり療治がとゞいた。大阪の二度の陣位の働きはいつでも出來るぞ。

家臣四　（唇を舐めて）　それにしてもわれ〳〵は、このつくろつた物の具を、何の用に立てるのかな。小太夫どの、おみはほんたうの處を御存じだらう。

牧野　さあ、わしもしかとした處はな。（云ひしぶる）

家臣五　（六に向ひ）　おみは聞いて來たのぢやなかつたのか。殿は本多の小伜めに、千姫君の上げ壺を喰つたので、それを取かへしに東海道までおでかけになるといふ噂を。

家臣六　（迷惑さうに）　うむ、今朝親類のものから心づけられたのだが、世間ではそんな噂を流布して居ると見える。

牧野　（苦々しげに）　あの千姫君は、殿さへ御斷り申さねば、當然當家へ御輿入りなさる御方だつたのだ。それが突然本多家へ御入輿となつたので、事を好む世間の馬鹿者どもが、そんな根もない噂を立てるのであらうが、大御所の御沙汰をさへ斷つた殿が、人の妻になつた女儀を、わざ〳〵浚ひに行く筈もあるまい。とにかく殿に取つては御迷惑な取沙汰だな。

家臣一　併しそんな噂が立つ樣では、どうせ無事では濟みますまい。殿とは一番別懇になされた越後少將殿も、伊勢の朝熊へ山流しになられた。そろ〳〵こつちへ御鉢が

まはつて來るかも知れませんな。

家臣二　先んずれば人を制すだ。殿も毎日〳〵薄つくらい顔ばかりして居られずに、一番天下取りの大賭博を打つて御覧になるがいゝのだ。

家臣三　それには少し人數が少ないな。

家臣四　おみはまだ年が若いからあの頃の事は知るまいが、十五年前にもたつた百人で、大阪は玉造の邸へたて籠つた事がある。その時も一つ間違へば大阪中の大小名を一手に引受ける覺悟だつたのだ。

家臣五　左樣いへば、あの時も九月だつたぞ。こいつは面白くなつて來たな。何と云つてもこれからは戰をするにはいゝ時節だ。死んでも死骸がすぐには腐らないからな。

家臣　全くだ。去年の夏の樣に、大働きをして討死した奴の死骸に、片つぱしから蛆がわくのを見ると、餘り嬉しくはなかつたよ。

牧野　それでは貴公たちは、天下を引受けて一勝負するだけの勇氣があるんだな。

家臣一　（笑つて）どうせ殿だつて、加増はいらぬ、天下の婿もいやだと、すねて見せた擧句だから、この上出世のしやうもあるまい。それを承知で奉公をつゞけるからには、少し變つた事でもさせて貰はなければ、間職にあひませんからね。

牧野　（念を推すやうに）みんなも同じ心意氣かな。

家臣　目先の出世をしたい奴は、とうに鞍替をしてしまひました。あとへ殘つた二百人は、みんなつむじの曲つた變り者ですよ。

牧野　なるほど目のよる處へ玉だな。主人が意地つぱりだから、家來どもゝ意地つぱりばかり集つたのだ。（聲を潜めて）まあ、みんなそこへ集つてくれ。

（一同牧野を中心にして半圓をゑがく。）

牧野　多分今夜あたり表向きになるだらうが、殿は愈々大事を思ひ立たれたらしい。

家臣三　と、いふと。

牧野　大御所の首を取らうといふんだ。

家臣四　事は面白くなつて來たな。が、それは何といふ名目で。

牧野　名目などにこだはるのは、德川流だ。殿のはたゞ癪にさはるからあばれてやるといふのだ。

家臣五　そいつは面白い。それがうまく圖にあたつて天下が取れたら、おれたちは如何なるんだ。

家臣六　（笑つて）仕方がない。御譜代の大名で我慢をするさ。

家臣一　いや、おれは殿に對して叉謀叛を起す。

家臣二　その時はおれが討手の大將になる。

家臣三　併し、殿はほんたうに謀叛をお起しになるのですか。

牧野　貴公たちが同意をしてくれゝば、屹度御初めになる。殿が旗をお上げになれば、大きな奴が二三人直ぐに後から動き出す事になつて居るらしい。

家臣四　大阪の時よりは物が大きくなつて來たぞ。

家臣五　あの時はたゞ殿の爲に死ぬだけが望みだつたが、今度は大分樂みが多くなつたわけだな。

家臣六　左様いふわけなら、この刀にも一度研をかけるかな。（刀を見入つて）今にきさまにもうんと御馳走してやるぞ。

（家老阪崎勘兵衛、表よりかけ出づる。）

勘兵衛　こゝを片付けてくれ。今柳生又左衛門どのが見えられたから。

牧野　なに、柳生の奴が……殿は御對面なさるのですか。

勘兵衛　けふは御使者でなく、たゞ友達の格で逢ひたいと云はれる。そこで殿にも據ろなく御面會遊ばす事になつたのだ。さ、早く片づけて貰はう。

牧野　少しかういふ處を見せつけてやるといゝのだがな。

勘兵衛　（急いて）さ、早くして呉れ。

（一同、おのがじし物具、獲物を携へて奥へ去る。女中たち、客まうけの支度をする。勘兵衛も右手へ去る。勘兵衛、柳生又左衛門を案内して入り來る。柳生座につく。）

勘兵衛　直に御目にかゝります。暫時御待ちを願ひます。

柳生　どうぞ構うて下さるな。

（女中茶を運び來る。勘兵衛は右手へ、女中は奥へ去る。柳生は刀掛の太刀に目をつける。）

（阪崎出羽守、奥より出で來る。去年の夏の折とは、見違へるばかり神經的になりて、目鋭く頬こけ落つ。座につきもあへず。）

阪崎　又左衛門、どうだ、其刀は。

柳生　うむ六文錢の紋が目貫について居るな。

阪崎　眞田左衛門尉が、最期の際まで指して居た千子村正だよ。

柳生　（驚いて）なに村正だと。

阪崎　去年の五月七日には、もう少しで此刀に大御所の血が塗られるところだつた。

柳生　（笑つて）それは根もない浮説だ。おれはあの時本陣に居たが、左衛門尉は一度だつて旗本近くまで斬り込めなかつた。

阪崎　まあ、精々上手をつかふもよからう。其中には少しは祿もあがるだらう。

柳生　（むつとして）な、なにを無禮な……いくら親友の

中だからと云つて、無遠慮も大概にせぬか。

阪崎　（笑つて）　だからおれは逢ひたくないと云つたのだ。強ひて面會を求めた以上は、少しは忌なことも覺悟しろ。

柳生　（思ひ直して）　左樣か。成程、それもさうだ。併し出羽守、德川家累代に祟りをする。村正の刀を飾つて置くなどといふ忌がらせは、少し子供じみはしないか。

阪崎　それがおれの病だ。今更御意見を承はつても改心は出來ないからな。

柳生　併し……

阪崎　（おさへて）　まあ、物を見てくれ。大したものだぞ。

柳生　如何して手に入れた。

阪崎　おまへも知つて居る筈だ。安居天神で眞田が討死した時、拾ひ首をもつて行つて、大御所に怒鳴りつけられた馬鹿者があつたらう。

柳生　うむ。西尾久作か。

阪崎　あいつが今まで溫めて居たのだ。

柳生　あいつの爲さうな事だ。併しそれなら物に紛れはあるまい。

阪崎　だから兎に角見てくれ。出羽守自慢の業物だ。

柳生　一度鞘を離れたら血をみずには治まらんといふ代物だからな。まあけふは止さう。

阪崎　柳生流の達人ともあらうものが、そんな俗說に迷つて居ては困りものだな。まあ、拔いて見ろ。

柳生　（沈思して）　おれは此刀より、おみの心の中が見たいのだ。出羽守、鞘をぬいて見せてくれ。

阪崎　（冷笑して）　妙なとこからからんで來たな。併しおれの心は村正のやうに覇氣もなければ、血も好まぬ。

柳生　さう他人行儀に物を隱すな。おれは公儀のお使番で來たのではない。おみが浮田左京亮時代からの友だちの、柳生又左衞門で來たのだぞ。

阪崎　左樣思ふから逢つてやつたのだ。德川の奴なら、門前拂ひを喰はせてやるのだ。

柳生　では、どうしても打わつてものを云つてくれないな。

阪崎　云ふ種がないのだ。

柳生　左樣水臭く隱すのなら、おれの方からぶち割つていふ。出羽守、おみは本多の小倅に、あの千姬君を横取されたのを、それほどまで遺恨に思つて居るのか。

阪崎　（急所をつかれて、思はず頰を硬めたが、急に思ひ直して肩をゆすつて哄笑する）　馬、馬鹿な、あ、あんな小娘なぞを。

柳生　出羽守、それは卑怯だ。隱したところで、誰でも知つて居るぞ。

阪崎　では、誰、誰がそんな事を云つた。

柳生　此頃は世間專らの評判だ。
阪崎　併しおまへは、そんな事を誰から聞いた。
柳生　人から聞くまでもない。わしも左樣思うて居る。
阪崎　（つめ寄る樣にして）な、なぜにだ。
柳生　わしに聞くよりおみの胸に問うて見い。一座の手前、一時の行懸りで、折角の大御所の御沙汰を辭退しながら、おみは今となつてあの姫君が惜くなつたのだらう。
阪崎　お、おれが、何、何で……
柳生　左樣ごまかすな。何というても內大臣豐臣秀賴公の後家御、征夷大將軍德川秀忠公の息女だ。御身分に不足なく、御容貌は萬人にすぐれて居られる。誰にしたところで、落着いて考へて見れば斷るには惜い代物だ。況して御守殿の料が十萬石とあつては、流石のおみも心の動くに無理はない。が、自分の口から御斷り申上げた上は、所謂駟馬も追ひがたい。もう大抵にして此村正の切れ味のやうに、偽つた心を眞二つにたちわつてしまへ。
阪崎　（一言に云ひ[illegible]らうとするが、適當な語を見つけ出しかねて）な、なに、おれがあの女に未練があると……馬、馬鹿々々しい。
柳生　[illegible]ふ日の下から、おみはあの姫君を奪ひ取る爲に、[illegible]れて[illegible]しへ出かけようとして居るではないか。
阪崎　（威丈高になつて）又左衞門、おれを見そこなつたか。嘘も大概にせぬと、かへつておまへが物笑ひになるぞ。
柳生　嘘かまことか知らぬが、天に口なし、人をして云はしむるといふ本文があるぞ。
阪崎　おまへまでそんな下らん事を信じて居るから仕方がない。洗ひざらひ云つて聞かせる。あの千姫といふ女はおれの手かけも同樣の女だ。
柳生　（驚いて）えつ。（が忽ち心を落つけて）出羽守、女一疋の事で、おみはその樣にまで血迷うたか。（思ひ入つて）關ヶ原以來の武名に疵がつくぞ。氣を落着けろ。
阪崎　それがおれを見損つて居るといふのだ。あの女はな、大阪落城の晩、おれが預つて居る間に、（冷笑して）自由にしてやつたのだ。
柳生　途、途方もない事をいふ奴だ。そんな大それたうそが將軍家の耳へでも入つて見ろ。おみは亂心者の取扱を受けなければならないぞ。
阪崎　きさまたちの樣なおべつか者が、忠臣で通る世の中では、正直者が亂心者になるかも知れない。が、あの女は肉親の親には見離され、歸るべき大阪方は皆討死、便るところがなくなつたので、此出羽守に身も心も許した

のだ。それにな、又左衞門、あの女は秀頼に嫉はれ通して、あの年になるまで、人間の世の春を知らなかつた生娘だつたのだぞ。何と初耳だらう……。

柳生　馬、馬鹿な事を。

阪崎　嘘だと思ふなら、當人に聞いて見ろ。本多の小倅め、おれの御古を頂戴して、今頃は有頂天になつて居るだらう。

柳生　（稍半信半疑の態度になつて）しかし、どうもおれには……

阪崎　おまへとは可成長くつきあつて居るが、おれの口から女の話をするのはけふが初めてだ。出羽守はたんだ一度でも人の前で嘘をついた事の無い人間だ。

柳生　（すつかり鉾先が鈍つて）それだからわしも推して聞いたのだが……（沈思一番）それならばおみは、なぜあの姫君を、申し受けようとしなかつたのだ。

阪崎　（笑つて）一旦斷つた此口だ。腐つてもそんな事がいへるものか。

柳生　しかし姫君の方から、大御所へ御打明けなさりさうなものだが。

阪崎　（苦笑して）あの女は大の淫婦だ。操を知らぬ賣女も同然だ。心から男に惚れる誠のある奴ではない。おれはあの晩、つくぐ〵あいつの腹の底まで見破つたのだ。見ろ、平八郎の奴も、あの丙午にくひつかれて、遠からず身を滅ぼすに極つてるから。

柳生　さうか。（情なげに）そんな事をことさら作つて吹聽するおみではない。おみがそれ程にいふなら嘘ではあるまい。が、まことなら尙の事、どうか世間へ洩してはくれるな。

阪崎　（首肯いて）おれもこんな忌味な話は、金輪際口の端へは出すまいと思つて居たのだが、今おまへの云つたやうな噂が立てば、武士の一分默つても居られないからな。

柳生　左樣いふと、まだ未練がありさうに聞えるぞ。

阪崎　（苦笑して）京錢百文ぐらゐは、溝へ落したやうな氣がしないでも無いがな。はゝゝゝは。

柳生　（ちつと阪崎を見て）姫君に未練がないなら、出羽守、おみは何が癪にさはつて、武具馬具の手入などをして居るのだ。

阪崎　（稍どぎまぎして）え、そんな事は……

柳生　（鋭く斬りこんで）たんだ一度も嘘をついた事が無いと云つたおみの舌は、どこへ宿替をしたのだ。こゝに落散つて居る繊の絲切れ、半筒の玉藥、拭紙や打粉もここらに落ちて居るぞ。

阪崎　（おのが態度に一種の羞恥を感じて）うむ、己にも

似合はない拵へ事を云つたな。（決心して）如何にもおれは世間の事が癪にさはる。人のする事に業が煮える。

柳生　何で、どの様な事が……

阪崎　あらゆる事が癪にさはる。何でもかでもみな不平だ。見るもの聞くもの業の煮えないものは無い。

柳生　左様か。（悲しげに阪崎の手をとつて）併し出羽守、それはおみの身から出た錆かも知れないぞ。

阪崎　（其手をふり拂つて）な、何故だ。

柳生　この一年の間に、おみの朋輩はみな出世をした。さもない武功の者までも、おみより祿が多くなつた。それを見てはおみの負けず魂は業が煮えてならぬだらう。

阪崎　（聲を勵まして）く、くだらぬことをいふな、おれはそんなさもしい人間ではないぞ。

柳生　（極めて冷靜に）まあ、待て、おみは自分では左樣思つて居ないだらう。思つてもすぐにそのさもしい心を叱つて居るだらう。しかしさういふ嫉妬心といふものは、あらゆる人間がみなもつて居るものだ。太閤のあの偉業も、大御所の天下を掌握されたのも、みんなその嫉妬心があるからだ。おみはそれが人一倍烈しいだけだ。

阪崎　おれはそんな……

柳生　（靜に、しかし力強く阪崎を抑へて）だからわしはおみの今の境遇が氣の毒でならぬ。が、おみは大御所の數々の好意を一々拒けた。大御所にしても、將軍家にしても、おみの武勇には感服して居られる。武功にも相當のむくいもしたいのだが、受けつけてくれぬおみの片意地には、手のつけやうも無かつたのだ。おみさへやさしく所望したら、千姫さまとて……

阪崎　（相手に壓迫された不平を一時に破裂させて）えゝしつこい。きさまはあんな女の事をいふのか。この孝親はあの女の事なぞを考へて居るひまはない。傷物の助平女の口塞げにもらつた腰巻料を、三寶へ載せて三拜九拜して居る本多平八郎などは、おれの目からは大腰拔の大阿房だ。あいつ計りではない。譜代の外樣のと、大きな面をして居る大小名も、頭を大地へ埋めるその寸尺だけ祿を上げてもらつて喜んで居るのだ。あんな奴等はおれの目からは上下をつけた幇間に過ぎない。何でおれがあんな奴等をけなるく思ふものか。おれの癪にさはるのはそんな事ではない。不平に思ふのはまるで別な事だ。

柳生　そんなら如何いふ事が癪にさはるのだ。不平の種になるのだ。

阪崎　きさまの目にはそれが見えないのか。

柳生　如何したと。

阪崎　去年の夏大阪の城を灰にして、豐臣の一家を根だやしにしてからの、家康親子のあの傍若無人な非道の振舞

はきさまの目に入らぬか。あいつらののさばり様が不思議には見えないか。大恩のある太閤殿下の木像から、衣冠を引めくつて、頭をくり／＼坊主にしたのは誰だと思ふ。如何に外借腹だからと云つて、うぬが孫の世嗣となつて居る七つ八つの小倅を縛首にして、死骸を河原へ投げさせたのは誰の仕事だ。まだ其位なら我慢もなるが、畏くも朝廷に對し奉り、おのがいひ條が通らぬからと云つて、悪王よばはりをするのみか、事によつたら隠岐の島へ御移し申さうと云つたのは誰だ。いや其上に、禁中法度抔といふ怪しからぬ物を作つて、一天萬乘の大君の御學問の事から御召物の指圖までして居るのはだれだ。これらは悉皆下として上を冒し奉る亂臣賊子の所業だ。苟くも禁裏に對し奉り、忠誠を存ずる輩は、かゝる逆賊を仰ぎ見て、天下の將軍なぞと崇むべきでは無い。然るに此逆賊に阿りへつらふ大小名どものあのざまは何といふ事だ。おのが主人をなぶり殺し同様な目に逢はされても、指一本さす事を知らぬ福島、兩加藤などの腰拔どもは齒牙にかけぬとしても、頭に口のあいた樣な大きな事ばかりぬかして居る伊達陸奥守などは、まるで體のいゝ幇間だ。加賀の宰相などは、作り阿房か本物か知らぬが、將軍の前へ出ると尻尾ばかり揮つて居る。日本六十餘州二百餘人の大小名の中で、口先だけでも正義を唱へるものが一人でもあるか。向う面になつて徳川の政道の非を擧げるものがあるか。癇癪一つ起す者が半分でも居るか。おれはそれが不平だ。それで業が煮える。今に見ろ、この出羽守孝親の腹の中で、日々毎日大きくして居る癇癪玉を、あの家康の白髪頭へ叩きつけてやるから。

柳生　（いよ／＼悲しげに相手を見成つて）出羽守、おみは自分で自分の悪體に醉うて居るのだ。自分の心ではそれ程にも思つて居ぬ事を、口先で大きくしては、自分の心へ、其毒を吹き込んで居るのだ。

阪崎　馬鹿な事をいへ。おれは思つた通りを口に出す人間だ。今おれの云つて居る事は、おれの心に思つて居る事より一分も多くなければ、一厘も少くない。神々の前でも閻魔王の前でも、おれは自分の云つた事を、分毫も改めはしないぞ。

柳生　これ孝親、それがおみの一番悪い癖だぞ。思はず自分の口から出した語の勢ひにまきこまれて又次の悪體を出す。だん／＼悪體の渦をつよめて、しまひには自分の身を溺らせてしまふ。つまらん事だ。それよりはわしとの多年の誼みを買つてくれ。而して……

阪崎　多年のよしみ……きさまが多年のよしみといふ事を知つて居るなら、なぜ、こんな商賣じみた使者に立つたのだ。きさまは此仕事を仕果せたら、一體いくらの祿に

ありつけるのだ。

柳生　業園、どうぞ、そんな情ない事を云つてくれるな。これおみの家はおみ一人しか居らないわけでは無いぞ。奥には伊丹家から歸つて來られた姉御もおいでになるだらう。

阪崎　（嘆息して）そんな歯つぽい歌舞伎のまねはよしてくれ。おれは女では懲々した。

柳生　その上に、おみには忠義な家來たちが澤山居る筈だ。みんなお身の爲に、生命を投げ出して忠節を勵んだ人たちだ。あの人たちの出世も計つてやるべきだ。

阪崎　おれの家來には、おれと一緒に死ぬ事を知つて居る者計りだ。祿をほしがる様な卑怯な奴はおれの方から追ひ出してしまふ。（柳生太息をつく）さあこれできさまの聞きたい種も盡きたはずだ。おれの云ふべき事もなくなつた。又左衞門、もう逢はぬぞ。

柳生　それならそれとして、おみは其不平を如何しようといふのだ。其癇積玉とかを如何して投げつけようといふのだ。

阪崎　そんな事をきさまに答へるいはれは無い。

柳生　答へぬなら聞くには及ばぬ。が、おみの今考へて居る様な事なら、その癇積玉とかいふものも存外小さいものらしいぞ。應仁以來百五十年、やつと萬民の枕頭へ還つて來た太平の夢は、その癇積玉のぶちわれる音ぐらゐでは、とても醒めようにもしないぞ。

阪崎　おれがどの様な事をするか、きさまなどに分つてたまるものか。

柳生　それでもいゝ。（急に一種の感情に迫られて）出羽守、喧嘩はよさう。わしはもう理窟はいはん。だからおみもおどかすのは止して、本當の心の底を打明けてくれ。賴む。

阪崎　いやだ。

柳生　では如斯してくれ。如何したら、おみの癇積がをさまるか、不平が直るか、それだけ聞かしてくれ。

阪崎　きさまはそんな事を誰に賴まれて來たのだ。家康自身からか、秀忠からか。それとも本多親子からでも、つつかれたのか。

（阪崎はつゝと立つて左手へ入らうとする。）

柳生　出羽守待て。

（云ひつゝ先刻の村正の太刀を取上る。）

阪崎　（身構して）又左衞門、き、きさまはおれを斬る氣だな。

柳生　これを見ろ。

（床の間にありし兜盔の兜を拔打に斬つて、刀を見入る。）

柳生　出羽守、如何にもいゝ切れ味だなあ。

阪崎　き、きさまは氣が違つたか、おれが祕藏の兜盜の兜を、何、何と思つて斬つたのだ。

柳生　（刀を鞘にをさめながら笑つて）身不肖ながら、此柳生又左衞門宗矩は、將軍家の指南番だ。おみが祕藏の南蠻鐵のこの兜でも、又左衞門の手にかゝれば豆腐よりもまだもろい。（刀を鞘にをさめて）出羽守、おみが自分の惡體に醉うて、この又左衞門をあるかなしにこきおろして居る間にも、わしは何十度おみを眞二つにする隙を見出したか知れない。それにもかゝはらず、此又左衞門はおみの雜言の前にあたまを下げて、たゞおみを氣の毒に思つて居た。口先で人を罵り、世を嘲ける位の事は、狂人でも出來る事だ。出羽守、どうぞ其增上慢の狂人沙汰はやめにして、昔の阪崎出羽守に還つてくれ。けふの事はお互ひに此場限りにする。出羽守、將軍家の御前へよい土產をもつて行ける樣にどうかわしを立てゝくれ。

（思はず落涙する）

（阪崎も强く心を打たれて、思はず涙を双眼にたゝへる。）

柳生　出羽守、おみも泣いて居るな。おみの心の底には、それ程溫かい血が流れて居るのに、何故、其口から冷たい毒ばかり吐いて居るのだ。

阪崎　（忽ちもとの冷酷な態度に變じ）そんな事を聞いてももう遲い。おれは百濟人の血が流れて居るから、日本の奴等とは、どつかに合はないものがあるんだ。又左衞門歸れ、さあ歸れ。

柳生　（決意して）さうか、ではこれで別れよう。併し達者で居られるだけは、達者で居てくれ。

（柳生ははふり落ちる涙を見せず、走るが如く、表の方へ驅け出る。此以前より樣子を見て居た家老の勘兵衞は、不安げに柳生のあとにつゞく。阪崎は一種の悲哀を感じて、二つにわられた兜を眺めて居たが、つと左手の方へ行かうとすると、そこには姉の笹ヶ谷が泣き伏して居る。）

阪崎　（不快らし）姉上は今の話を聞いておいでになつたのですな。

笹ヶ谷　（涙をおさへて）聞いて居ました。惡魔の口から出る樣な、恐しいおまへの語を、みんな聞いて居ました。

阪崎　それなら繰返して御話する面倒もなくつて結構だ。わたしの考へて居る事はあの通りなのだから、もう何も云つては下さるな。

笹ヶ谷　併し如何いふ事をするのか、おまへは柳生さまに云はなかつた。せめてこの姉には打明けてはくれませんか。

坂崎　（嘯くやうに）二三日中には自然に分りませう。

笹ケ谷　つまり謀叛を起さうといふ……（云ひさして口を掩ふ）

坂崎　（煩さゝうに）そんな事かも知れません。

笹ケ谷　（呆れて）まあ、おまへ、積つても御覽なさい。相手は將軍家の旗本だけでも三萬何千騎といふ多勢ではありませんか。日輪に石なげをすると云ふのは、この事でせう。

坂崎　天下の大事に女の差出口は禁物だ。姉上の身體に火がつくやうになつたら、安穩な場所へ逃がして上げます。まあ心配をなさらんがいゝ。

笹ケ谷　わたしは自分の事などを考へては居ませぬ。それよりか、その樣な無謀な事をしたら、おまへは逆賊の名をうけて祖先の苗字に泥を塗る事になりませうに。

坂崎　（笑つて）祖先といふと大層立派に聞えますが、百濟の漁師の小倅どもが、たつた三人で國をぬけ出し、備前の小島へ漂流してからも、まだやつと四代にしかならないでは有りませんか。それに肝心な本家の宇喜多秀家を御覽なさい。關ケ原であんなみじめな末路を見せて居ます。わたしとしてからが、十五年前には秀家に憎まれてたつて百人で玉造の小さな邸へ立籠つた事もありました。その時は姉うへも一緒になつて討死の覺悟をなすつたではありませんか。

笹ケ谷　（一寸語に窮したが）併しあの時とは時勢が違ひます。殊に相手は宇喜多一家に何百倍の天下の將軍ではありませんか。

坂崎　（哄笑して）何も謀叛をやると極つたわけでもありません。萬が一、わしにさういふ野心があつたとしてからが、十五年前にわたしもあなたも、あの秀家に殺されたと思へば、今まで生延びただけでも儲けものです。それに秀家の滅んだ關ケ原の戰爭以來、わたしは自力で石州津和野三萬石の城主にまで取りつきました。異國者の子孫の成り上りが、天下の大將軍たる家康親子を向うへまはして、一泡ふかせてやるといふのは男冥利、武士冥利にかなつた面白い洒落ではありませんか。あなたも緣あつて、伊丹播磨守の奥方となりながら、亭主の間抜と、妾の賢さとから、罪もないのに追ひ出されるほどの運の拙い方だつた。今更身の仕合せを願つても、薄情な神佛は、あなたの祈願に耳をかしてはくれませんよ。

笹ケ谷　おまへは神佛までも、惡い方からばかり見ようとして居る。おまへがその樣な恐しい事を企てたら、やつと此頃心安く此新らしい町に住みついた江戸の人たちも、大阪の城下の人達の樣に、又戰爭のまきぞへを食つて、

塗炭の苦みとやらをしなければなりません。それも左様いふ破滅になるべき程の退引ならぬいはれでもあるのなら是非もないけれど、自分一人の増長我慢から、天下の主の政道が氣に入らぬと云つて、萬民の迷惑になる事を企てようとは、悉皆天魔波旬の仕業です。姉が一生の願ひです。どうぞ思ひとゞまつて下さい。此通り拜みます。

阪崎　（冷然として）小太夫、小太夫。

（家臣を呼ぶ。牧野小太夫入來る。）

牧野　御召しでございましたか。

阪崎　姉上をあつちへ御連れ申せ。

牧野　はつ。（笹ヶ谷の手を捉へて）さあ參りませう。

笹ヶ谷　放して下さい〳〵。（阪崎に）如何しても思ひ止まつてはくれませんか。

阪琦　（冷かに）まあ、あちらへおいでなさい。

笹ヶ谷　思ひ止つてくれなければ、仕方がありません。わたしは本多佐渡どのへ訴人をします。

（云ひつゝ右手の方へ行かうとする。小太夫は追ひすがつて一刀に斬り倒す。）

阪崎　（驚いて）な、何といふ馬鹿な事をする奴だ。

牧野　（阪崎の前へ手をついて）どうせ遠からぬ中に、御生命をお棄てにならなければならないお方です。それ故、殿のお手を煩はさない中に、わたくしが申受けました。本來ならば此場で腹かつさばいて、御詫を致すべき筈でございますが、わたしの生命は、殿の御最期の際まで、御預け置きを願ひます。

阪崎　そちは憎、憎い奴だが、かはいくもある奴だ。

（日稍くらくなる。勘兵衛かけ出で來り、死骸を見て驚く。）

勘兵衛　姉御さまには何として此樣な……

（牧野が答へんとするを阪崎は抑へて。）

阪崎　とう〳〵孝親の犧牲となつて御果てなされた。

勘兵衛　生涯ふしあはせな御方でございましたな。

（二人は顔見合せて泣く。小太夫はすゝり泣く。日一層くらくなり、蟲の聲微に起る。門前の方俄かに騷がしく、爭ふ聲聞ゆ。）

阪崎　姉上の死骸は、取あへず御居間へ御移し申せ。

兩人　はあ。

（二人は笹ヶ谷の死骸を舁いて去る。日愈よ暗く、落外の屋敷町に燈火ちらほら見え、十六夜の月庭樹を透して縁側にさし入る。若侍一人表の方より駈け入る。）

阪崎　何ぢや。

若侍　あの柳生さまが、又御見えになりました。

阪崎　逢はぬといへ。

若侍　御取次を致しますと申上げましても、理不盡に御通

りになります。

阪崎　怪しからぬ奴だ。引ずり出してしまへ。

（柳生又左衛門再び入り來る。火の如き興奮を、氷の如き冷靜なる態度につゝみて阪崎の側に來る。）

阪崎　何、何しに來た。

柳生　途中まで歸つて見たが、どうしても諦められぬ。それで又やつて來た。

阪崎　何度來ても同じ事だ。

柳生　併しわしはおみが惜うてならぬ。尙一度考直して見てはくれぬか。

阪崎　くどい。

柳生　（悲しげに）　これ程にいうても。

阪崎　むだな事だ。

柳生　（柳生はつと立上ると見る程に、先刻の村正の太刀をとるより早く、阪崎の肩を斬る。阪崎は小刀を拔合せしが、傷手の爲に撞と倒る。若侍は驚きながらも、柳生に躍りかゝる。柳生は一刀に斬倒す）

阪崎　斬つたな。

柳生　許してくれ。

阪崎　村正で斬り損ふとは、何といふ鈍い腕だ。それでも天下の指南番か。

柳生　呼吸のある中に、謀叛を思ひ止つたと、一言云つてくれ。

（物音に驚いて勘兵衛、小太夫、其他の家臣たち駈入り來り、一半は主人を介抱し、一半は刀を拔いて柳生に迫る。）

阪崎　（一同をとゞめながら）　柳生はおれのたつた一人の友だ。許してやれ。

勘兵衛　でも、やみ／＼と殿の仇を。

阪崎　こ、この男に罪はない。又左衛門、きさまの生命も助けてやる。その代りには、（一同の方を指し）　家、家來たちも……

柳生　（双眼より落ちる淚を拭ふいとまもなく、阪崎の手を把つて）　出羽守、ゆ、ゆるしてくれ。

阪崎　（其手を拂つて）　又左衛門、阪崎出羽守を誅した功によつて、三萬石を加增するぞ。はゝゝは。

（阪崎瞑目する。柳生と家臣たちとは、異りたる感情をもつて、阪崎の死骸に縋りつく。護國寺の晩鐘、蟲の聲、病葉しきりに風に舞ふ——幕。）

應擧と蘆雪（貳幕四場）

時　寛政元年の秋

處　京都下加茂と木屋町

人

圓山應擧（六十歳）
長澤蘆雪其弟子（三十二歳）
駒井源琦同（四十餘歳）
瑞枝其娘（二十歳）
お雪其妹（四十五歳）
お梶蘆雪の先妻（二十六歳）
お梅蘆雪の女中
お竹應擧の女中
八瀬の里人夫婦
下加茂の村人大勢

序幕

（一）蘆雪が住居

下手に寄りて、糺の森に近き百姓家、極めてさゝやかに粗造なれど、室内には大小、弓矢などあり、一部には佛像、骨董品などを置き、壁際には枠張の繪絹、まくりなど立てかけあり、下手奥は襖を開きて、他の室に通じ、その下手は、椽傳に臺所に通ふ。庭前二三本の柿、紅の實をつられ、下手の杉木立と照り映ふ。

杉の木立の彼方は、紫匂ふ比叡の峰、如意ヶ嶽。朗かに晴れたる秋の午後。かすかに加茂の河瀬の音、渡り鳥の聲、大原女の稲刈歌。室内には、長澤蘆雪と、駒井源琦とが、今しも對酌を終りし心にて、蘆雪は女中お梅に杯盤を運び去らしむ。

蘆雪　これを下げたら、此間神林から贈つてくれた、覆下をもつて來て呉れ。

お梅　はい。

蘆雪　この貧居では、酒後の茶だけが、たつた一つの自慢ぢや。

（お梅は杯盤をもつて去る。）

源琦　久振りの洗鯉の濃漿に、甘子のから揚、鰉のつけ焼、都の風味は身にしみ〴〵と嬉しかつた、此上玉露の馳走にあうたら、日向くさい茶にばかり慣れた此舌が目を舞しさうだ。

蘆雪　可愛い子に旅をさせたら、無口の殿樣も大分御世辭がうまうなつたの。

源琦　世辭どころか、心の底をぶちまけての眞實ぢや。川立ちは川といふが、都に育つたものは都を離れては、まづ第一に食物で我を折るて。

（お梅は茶道具をもち來り、直ちに去る。蘆雪は自ら湯加減して茶を入れる。）

源琦　日本一の不精者も、獨り身になつたら、大分まめになつたなう。

蘆雪　まめどころか、お身の立つ前に輪をかけた不精者になつてしまうた。男やもめ奴、蛆が湧いて居るかも知れぬわ。

源琦　では女房を一人取持たうかの。

蘆雪　女房？　（一寸考へて）　いや、女房には懲々ぢや。

源琦　羹に懲りて膾を吹くは、智慧のないものゝ爲る事ぢや。今度はよい女房を取持つてやらう。

蘆雪　まあ、ゆつくりに願はう。

源琦　ひどく諦めたものぢやなう、實はあのお梶どののぢやが、今迄の放埒を懺悔して、是非もとの鞘へをさめて欲しいとのきつい依頼ぢや。如何ぢや。一番覆水を盆にかへして見る心はないか。

蘆雪　お身はあいつに逢うたのか。

源琦　祇園の一力に寄食者になつて居るさうな。今朝縄手でひよつこり逢うて、いや、もう執拗う頼まれた。

蘆雪　あいつ、色々なところへ持込むらしい。素絢も、文鳴も頼まれたさうなが、皆な途中で嚙み殺して呉れたらしい。お身も好い加減に棄てゝ置いて呉れたがよい。

源琦　さうか。わしには初めてらしい事をいうて居たが、それでは未だ例の癖が止まぬのか。してお身も逢うたか。

蘆雪　二度ばかりこゝへ訪ねて來たが、いつも居留守をつかうて歸してやつた。三年前にわしを捨てさせた男にも、もう捨てられてしまうたらしい。

源琦　併しそれで目が醒めたら、雨降つて地固まるぢや。却つて貞節な女房が出來るかも知れぬぞ。

蘆雪　何の、あいつが……（思ひ入つて）　それに、わしは……（云ひ淀む）

源琦　どうぞ爲たのか。

蘆雪　あの厄雜者の依頼さへ肝入らうといふ程の深切なお身ぢや。いつそわしの依頼を聞いては呉れぬか。

源琦　今更めいた、その改つた言葉が氣に入らぬ。何故如

斯せえ、彼樣して呉れと、頭から打割つて云うては呉れぬ。

蘆雪　これはわしの出損ひぢや。お身の歸洛を待ちわびて居た此身が、去つた女房の話が出たので、つい肝心の事が言ひそびれた。わしには外に女房にほしい女が有る。

源琦　うむ、してそれは何處の誰ぢや。

蘆雪　何もかもさらけ出して云うてしまふ。應擧先生の娘御ぢや。

源琦　なに應擧先生の？（考へて）さうか。先頃、お身から貰つた手紙では、お身は先生から破門された筈であつたが。

蘆雪　下らぬ事で破門された。

源琦　その破門された弟子が、先生の娘に目をつける。（又考へて）では、破門前から懇ろになつて居たとでもいふのかな。

蘆雪　面目ないが其通りぢや。

源琦　いつか、お身を養子に欲しいと云はれた事も有つたが、破門までされる樣では、此縁談は容易うは纏るまい。

蘆雪　それ故わしも心一つに決しかねて、お身の歸りを待佗びて居たのぢや。

源琦　それ程わしを賴みにして呉れたとあつては、邪が非でもお身の望みを遂げさせてやらねばならぬ筈ぢやが、一度云ひ出したら、所司代の云ふ事でもいつかな聞かぬ師匠の强情、相手が勘當受けたお身とあつてはなあ。

蘆雪　（冷笑する樣に）破門？　破門？　その破門とて、此蘆雪が、應擧流の寫生一三昧で纎細な物ばかり描かぬが面憎いと云うての、狹いかたよつた橫車からぢや。

源琦　併しあれは、門人の中でも一番可愛がつて居られた、お身を矯め直さうといふ師匠の慈悲かも知れぬぞ。

蘆雪　いや、そんな御慈悲は眞平ぢや。繪師は人形では無い、いつまで師匠の作つて呉れた赤い衣服ばかり着けて居られるものか。わしの描くのは天地の魂ぢや。萬物の活きた働きぢや。一にも寫生、二にも寫生と。腸のぬけた鯉の瀧昇ぢや、狗ころの嚙み合ひばかり描いて居られるものか。

源琦　それについては、わしにも別に議論がある。が、今は云ふまい。差當つて考へねばならぬは、瑞枝どのゝ身の上ぢや。

蘆雪　（悲しげに）あの人も先生の人形ぢや。年頃になつても、嫁にやるでもなく、婿の相談も皆蹴散らされて、可哀さうに二十歲過ぎぬに亭主のない世話女房ぢや。朝から晩まで親の側にひきつけられて、二言目には口ぎたない小言ばかりぢや。

源琦　（嘆息して）先生は子煩惱過ぎるからなあ。

蘆雪　（腹立しげに）　何の、あれか、手煩惱ぢや？　應瑞
應擧の若先生たちさへ、身を置きかねて逃げ出したあの
牢屋の中へ、瑞枝さまを押こめて置くのは、いぢらしう
て、いた／＼しうて見ては居られぬ。二人が深い仲とな
つたも、あの人の身の上を思ひやつたゝめぢや。（源琦
の手を執つて）　兄弟子頼む。あの人を救つてくれ、息の
つまるやうな師匠の側から救ひ出して、何卒わしの手へ
渡してくれ。

源琦　それはわしも察せぬではないが……

（奥の方に女のわめく聲す。）

蘆雪　しつ。

（兩人俄かに沈默。女中お梅いそぎ下手より入來る。）

蘆雪　騷がしい。如何したのぢや。

お梅　いつぞやの御新造が見えました。

蘆雪　なに、いつぞやの？

お梅　あの一昨日も御見えになりました……

蘆雪　（源琦と顏を見合せながら）　何故留守ぢやと云はぬ
のぢや。

お梅　左樣申上げましたが、いや、今日は駒井樣も御見え
の筈ぢや、御宅に相違ないと仰有つてもうこれへお出で
になりまする。

蘆雪　困つた奴ぢや。如何したものか。

源琦　お身が逢うては面倒であらう。よい、わしが何とか
立て切らう。（お梅に）　通すがよい。

（お梅去る。）

蘆雪　では頼んだぞ。

（蘆雪は襖の中へ去る。蘆雪が先妻たりしお梶入來る。
婀娜めきたる風采。つと室内に入りて、源琦と顏見合
せ、稍失望の面色。）

お梶　おや、あの人は？

源琦　不在ぢや。

お梶　主が不在の家に、客人ばかり居るとは、變つた趣向
でござりますな。あの人はそんなにまで、わしといふも
のが怖いのか。まあ、相變らず意氣地のない。ほゝゝゝ
ほ。

源琦　（不快げに）　蘆雪の事は知らぬが、おぬしこそ相變
らず氣の強い事ぢやなう。

お梶　（わざと愁然として）　如斯でもしなければ、棄てた
男の家へのめ／＼訪ねては來られませぬ。ほゝゝほ。
（氣を變へて）　駒井さま、おまへさまも島原では義經さ
んで通つた粹な御方ぢや。さ、その樣な意地の惡い事を
せずと、うちの人に逢はせて下さりませ。

源琦　（呆れて）　うちの人？

お梶　三行半はまだ貰つては居ませぬ。うちの人といふに

誰が非を打たう。（わざと大きな聲にて）これ、旦那どの、梶はおまへさまを取つて喰はうとは云ひませぬ。早う出ておいでなされませ。

源琦（腹立しげに）えゝ、蘆雪は不在ぢやといふに。

お梶　そんなら御歸館まで待ちませう。

源琦　歸つて來ても逢はぬというたら。

お梶　如斯して逢ひます。

（襖をひらいて奥へ入らんとす。源琦は其手を抑へて。）

源琦　な、なにをする？　何處へ行く？

お梶（冷笑して）こゝは自分の家ぢや。何をしようと、何處へ行かうと、他人さまの御世話にはなりませぬ。

源琦　おまへは、今朝わしに頼んだ事を忘れたか。

お梶　男とぐるになつて、居留守をつかふ様な薄情男に、物を頼んだのが、わたしは口惜しい、あの頼みはもう取消しぢや。わたしは直々あの人に逢うて話をつけまする。

源琦　併し蘆雪は、おぬしには逢ひともないというて居る。逢うたとて、あの男の心は渝らぬ。もう歸つたがよい。

お梶　あの人の心を知つて居るのは、世界中にわたし一人ぢや。縱令、一時は渝らうと、逢ひさへしたら、あの人の心はいつもわたしのものぢや。

（云ひ棄てゝ、お梶は倚次の間へ行かんとす。襖さつと開いて、蘆雪は身を現す。）

蘆雪（苦々しげに）おまへは、まだ其氣象が直らぬな。

お梶（蘆雪を見るや、其兇暴なる態度は一掃され、蘆雪にすがりつき）まあ、旦那、わたしや、逢ひたかつた。逢ひたかつた。（泣く）

蘆雪（烈しく衝き飛ばして）狐、狐め、人を馬鹿にするのも程にせえ。不義を働き駈落をして、もう三年。能、能くも、その様にぬけ〳〵とした風をして、わしの前へは現れたな。

お梶　さあ、その不しだらにやつと目が醒め、恥面おし拭うてお詫びに來ました。さあ打つなりと叩くなりと、お心の濟むやうにして下さりませ。

蘆雪　えゝ數の知れぬ嘘つきめ、おのれは不義の相手にさへ棄てられて、身の置き處がないまゝに、又おれのところへ戻つて來たのぢや。

お梶　いや、それこそ嘘ぢや。痩せてもかれてもわたしは祇園のお梶ぢや。舞扇手にもつたら、貧乏繪師の女房よりも、たんと榮耀なくらしは出來ます。が、それではおまへさまが御氣の毒ぢや。三年前には御師匠様も舌をお卷きなされて、二代目應擧とさへ世間から唱はれたおまへが、聞けば此頃は自墮落な繪ばかり描いて、御師匠様から破門されたとやら。それも、これも側から精をつけ

て、生活の始末をして上げるものが無い所爲ぢや。わたしは其噂を聞いて悲しくなり、今までの男から暇もらうて、おまへさまの世話を焼きに戻つて來たのでござります。

蘆雪　（呆れて、）それこそ飛んだ餘計な御世話ぢや。破門されたは、却つておれの技倆の進んだためぢや。

お梶　それ程技倆が進んだなら、世間の評判ももそつと善くなりさうなものを、此貧乏生活はどうしたものでござります。

蘆雪　おまへと分れて、初めて清貧に安んずる覺悟が出來たのぢや。

お梶　他はともあれ、わたしに其負惜みは要らぬ事ぢや。兎に角わたしと云ふものが離れては、おまへさまの筆は鈍るばかりぢや。それについてはまだいろ／＼話したい事がある。駒井さま、おまへさまもよい年齢をして、久しぶりで逢うた夫婦の前を外すぐらゐの機轉を利かす氣にはなられませぬか。ほ、ほ、ほ、ほ、ほ。

源琦　あゝ恐しい女子ぢや。顏を見るさへ忌になつた。

（立去らうとする。）

蘆雪　まあ待つて呉れ。

（源琦躊躇する。）

お梶　さあ、早く行つて下され。

蘆雪　いや　しばらく……

お梶　さあ、早く……

（お梶は源琦の手を執つて襖を開き、その外へ去らしむ。遠く大原女の唄聞ゆ。）

唄へ二月逢はぬに、もう其樣な、心替りか、口惜や。

お梶　（膝にすがりて）ね、あの唄を如何お聞きなされました。

蘆雪　（衝きはなして）そんな事は如何でもよい。兎に角歸つてもらはう。

お梶　（又蘆雪の膝にとりついて）まあ、おまへさまは如何してその樣に情がこはくなつたのぢや。（恍然として）あゝ二軒茶屋の雪見酒、先斗町の涼みの床、あの頃の嬉しい昔を憶ひ出したら、その樣な邪險な仕打の出來よう筈はないものを。

蘆雪　おいてくれ。それは此蘆雪が間抜であつた昔の古傷。さはられる度に胸が痛む。これよりは今改めて云ひ聞かせる。わしには外に約束した女があるのぢや。

お梶　ふむ。成程なあ。

蘆雪　それ故そなたの心が、眞人間に立還つたとて、もう燕をもどす席はない。況して以前に變らぬその自墮落な

性根では、誰が相手にするものか。足下のあかるい中、さつさとこゝを退くがよい。

お梶　(次第に忿怒の色を面に現して) では、どうでも應擧先生の娘さんと、一緒にならうといふのでござりますな。

蘆雪　(驚いて) えゝッ。

お梶　(笑つて) 破門された先生の娘とちゝくり合ひ、一緒になれると思つて居るとは、お二人とも大分おめでたうござりますな。

蘆雪　そ、それは嘘ぢや。跡形も無い事ぢや。

お梶　一昨々日來た時に、裏口でちらりと見た美しい娘さん、どうやら見覺えのある人と、あのぼんやりの女中どのと、隣りのお饒舌婆さんに金轡をかけてやり、お二人のお睦まじい御容子は、殘らず種を上げてしまひました。

蘆雪　うむ。

お梶　こつちに不義の罪はあつても、そつちも人樣の娘をたらした性惡男、かうなつたら互ひの罪は五分と五分、振られた戀の意趣がへしに、お氣の毒だがおまへさんにも、娘さんにも、吠面をかゝせて上げますから、支度をして待つておいでなされまし。

(お梶悠然と立上る。)

蘆雪　待て。

お梶　何の御用?

蘆雪　さあ。

お梶　秋の日は早く暮れますから、御用ならばどうぞ御早く……

(蘆雪返事に當惑する。)

お梶　(冷笑して) あの娘を棄てるか。わたしを棄てるか、きつぱりとした返事をうかゞひませう。

(襖を開いて源琦出づ。)

源琦　其返事は、明日の朝、わしが持つて行かう。

お梶　面を見るのも忌だつた旦那さまが、急に使ひ奴になつて下さるとは、お梶も冥利にかなつた話、ではおとなしく待ちませうかね。

源琦　左樣して呉れ、あすは屹度一力へ訪ねて行く。

(此少時前より、應擧の娘瑞枝、上手の杉の木立の間に身をかくし居りしが、蘆雪の話に驚きて、思はず身を現す。お梶は不圖其姿を見て、忽ち嫉妬に心をやかる。瑞枝もそれに心づき、驚いて又身をかくす。)

お梶　(急に聲をあらゝげ) 駒井さま、明日まで待つのは馬鹿々々しくなりました。手つ取り早く片をつけて上げませう。

源琦　えツ。

お梶　(皮肉に) 今夜の中に、おまへさま方の思ふ通りにして上げませう。お喧ましうござりました。

（つと身を起して、縁側傳に下手へ去る。）

源琦　お梶どの、まあ、待つて下され、待つて下され。

（源琦はお梶のあとを追ふ。瑞枝は上手木立の中より身を現はし、蘆雪の坐りし前の縁側へ來りて泣伏す。）

蘆雪　（此聲に驚き）おゝ瑞枝さまか。

（瑞枝を抱き上へあげる。）

瑞枝　（蘆雪に縋りつき）わ、わたしは如何したら……

蘆雪　では今の様子を……

瑞枝　はい。

蘆雪　駒井があとを追うて行つた。案ずる程の事もござるまい。

瑞枝　でも、でも、あの方をもう一度、お宅へ御戻しなさるやうな事になつたら。

蘆雪　（わざと力づよく笑つて）な、何の、あの様な不しだらな狂女を……

瑞枝　でも、お戻しなされなんだら、二人の仲はあの人の口から父の耳へ……

蘆雪　（肚胸をついて）さ、さうなつたら……

瑞枝　左様なつたら、わたしは父に責め殺されうも知れませぬ。

蘆雪　わしもそれを案じて居たが……

瑞枝　（おいが腹を双の手におさへて）わたしが死んだら、この腹の、この嬰兒は……（泣く）

蘆雪　（決然として）左様ぢや。二人はもう人の親で有つた。生れ出る子の爲に、親らしう戰はねばならぬ。瑞枝さま、短氣を出してはなりませぬぞ。

瑞枝　（泣きつゝ）でも、でも……

（蘆雪は瑞枝をひしと抱く。此時下手にて、源琦とお梶の爭ふ聲。お梅のすゝり泣く聲聞ゆ。瑞枝と蘆雪とは驚いて抱き合へる手を離す。再び大原女の唄ふ聲。河瀬の音。舞臺靜に廻る。）

（二）圓山應擧の畫室

加茂河に望める居風を交へし離れ座敷、やゝ上手なる小高き邱の上にありて、正面の一部には丸窓あり、庭は梧桐、楓、寒竹など簇生し、所々に大湖石など置きある。下手の奥よりは、加茂河より東山一帶の風景を眺め、その前に枝折戸あり、母屋よりの行通ひは、すべてこゝを通る。

河瀬の音にて舞臺止る、圓山應擧は身に被布を纏ひ、座敷の上にて伏猪の繪を指しながら、下手に跪きて居る八瀬の百姓夫婦と物語り居る。

前場より半晌ばかりの後。

應擧　では、その猪は病氣であつたのか。

百姓の夫　はい、何とも面目次第もござりませぬ。

應擧　さうか。いつ死んだ。

百姓の女房　きのふ林の中で死んで居りました。

應擧（いま〳〵しげに）その伏猪の床と一口にいふものゝ、あの猛獸の眠れる姿を目あたり見るといふは、望んでも得られぬ事と諦めて居つた處、先頃のそちたちの話、取るものもとりあへず、娘に扶けられてそちたちが住居の瀨戸の林まで出かけたに、快げに眠れる有樣、これを寫生してこそ應擧が一代の名作と、筆端に魂を打込んで作り成したる此一幅も、死に瀕したる病中の猪とあつては、圓滿院の宮樣へも御覽に入れられぬ。

（筆を採つて縱横に塗抹する。百姓夫婦は驚いて。）

夫　わしがよしない事を申上げましたばつかりに、丹精こめて御かき上げなされた此樣な立派なものを、むざ〳〵とお消しなさるとは……あゝ、と、とんだ事を致しました。

女房　それも、猪を見たいといふ先生さまの御語が、しよつちう頭にこびりついて居たものでございますので、よく調べもしねえで申上げたのは、わしが惡いのでごぜえます。どうぞ御料簡なせえまして。

應擧　いや〳〵そちたちには何の罪もない。應擧このごろ世間の評判の高きに慣れ、一圖に寫生に心を注ぎ、魂をもつて森羅萬象を見まもる事を忘れし故、此樣なあやまちをさへ終に招いた。二月あまりの丹精の獲物を、むざむざ反故にしたは惜むべきに似たれど、宇宙の萬物を看破る眼が、忽ちこゝに開いたは、そちたち夫婦のたまものぢや。應擧うれしう思ふぞよ。

夫　何やらむづかしい御話で、良くは分りは致しませぬが、どえらく御叱りを喰ふことゝ思うてまゐりましたに、嬉しいといふ御語で、やつと胸の痞が下りました。

女房　今年の暮には、是非いきのいゝ猪を見つけ出して、旦那さまに御目にかけませう。

夫　村中はいふまでも御座りませぬ。大原や修學院の人たちにも頼んで置きましたから、屹度怒毛を立つた大物を御覽に入れるでござりませう。

應擧　何分頼む。

夫　では、旦那さま、これで御免を蒙ります。

應擧　母屋には妹と娘が居る筈ぢや。夕飯でもたべて行くがよい。

兩人　有難うござります。

（兩人は枝折戸の外に去る。應擧はぢつと猪の繪を眺め居たりしが、腹立しげに繪具箱の中にありし小刀を以て、繪をずた〳〵に切さき、座右にある繩を引くと、軒より母屋の方に引きある鳴子の音カラ〳〵と鳴る。）

されど母屋の方よりは答ふる聲なし。應擧はいら〳〵して、娘を呼ぶ。）

應擧　瑞枝々々。

（何返答なし、應擧又癇聲にて呼びながら、座敷を下りて欄を置きたるあたりに出づる。此時應擧の妹なるお雪、先に立ちて、前場の駒井源琦入り來る。）

お雪　何ぞ御用でござりましたか。

應擧　娘は如何しました。娘は……

お雪　（一寸困惑して）あの、今一寸四條まで使ひに參りました。

應擧　（不興げに）なに、使に？　もう日の暮れるに間も有るまい。この様な刻限に使ひなどに出すものがあるものか。

お雪　はい。

（源琦は前へ出で。）

源琦　先生、意外の御不沙汰を仕りました。

應擧　おゝ、駒井か。（急に機嫌を直し）おゝ、能く參つたな。いつ、歸つた。

源琦　昨晩漸うもどりました。

應擧　いろ〳〵土産もあるであらうな。

源琦　九州は山水が粗うござりますので、わたくしの筆には相應しからぬ景色が多いやうに思はれまする。あの邊の山水は寧ろ蘆雪などにかゝせましたら……

應擧　（眉を顰めて）蘆雪？　いや、あいつは、そちの留守中であつたが、破門してしまうた。あの様な者の事は、わしの前では名さへいうてもらふまい。

源琦　併しわたくしも同門のよしみ、兄弟ともなく睦み合うた彼の事、もし御詫の適ひます事ならば……

應擧　他から詫られて濟む程の事ならば、可愛い弟子を勘當はせぬ。あいつ、近頃世間の評判のよいにつれて増長我慢……（いひさしておのれの身を省み、思はず苦笑して）打捨てゝ置くが彼の爲であらう。

源琦　蘆雪にも逢ひました上、改めてお願ひ申す折もござりませう。

應擧　あの様な奴には、逢はぬがよい。いや、逢うてはならぬと云ひ渡し置くぞ。

源琦　（當惑さうに）はゝあ。

お雪　（取做し顔に）駒井どのから、いろ〳〵お土産をいたゞきました。

應擧　なに、土産を給はつたと、それは忝ない。これへもつて參ればよいに。

お雪　どうせお茶を召上りに御出での事と思ひまして、茶の間に置いて御座ります。

應擧　源琦には茶ではつまらぬ。灘の酒を馳走してやつて

下され。肴にはさつき大津から貰うた鯇があつたらう。
源琦　どうぞ御構ひ下されますな。御酒よりはこの御庭で、久しぶりの御話が承りたうございます。
應擧　わづかの間に大分寂がついてまゐつたらう。西陣の金田の庭の樣に金はかけぬが、所謂野趣横溢といふ所がわしの自慢ぢや。（お雪に）今朝は霜がひどかつたせゐか、日中はいつにない温かさぢや。古い文句ぢやが紅葉を焚いて、林間に酒を温むるも一興であらう。これへ酒をもつて來てもらひませう。
お雪　成程、それがよろしうございませう。駒井どの、ゆつくりして行つて下され。
源琦　有難うございまする。
（お雪去らうとする。）
應擧　娘が戻つたら、早うこゝへよこしてくだされ。
お雪　畏りました。
（お雪去る。源琦も榻にかける。水の音。）
源琦　お孃さまも、さぞ御成人でございませう。
應擧　年はもう二十歳ぢや、なりも大きい方ぢやが、まるで嬰兒同樣で困つたものぢや。
源琦　（挨拶に當惑しながら）いづれへか御縁邊の御約束でも……
應擧　（笑つて）何の〳〵、今もいふ通り、全くの世間知らず、その樣な事を耳に入れたら、恐しさに氣を失ふかも知れぬよ。はゝゝゝは。
源赴　しかし御年頃と申し、いつまでも先生の御側にばかり御引止め遊ばすわけにも參りますまい。相應のお心當りでもございましたら……
應擧　まあ、その樣に急ぐにも當るまい。それに息子どもは揃ひも揃つての我儘者、わしの手許にあつては、一刻の骨も盜めぬと思うてか、一人は大阪、一人は嵯峨へ別居致し居る。元氣に見せてもわれらももう取る年齡、さすがに朝夕は心淋しい。その淋しい心の慰めは、實をいへばあの瑞枝一人ぢや。今あれを手離したら、わしはもう畫筆を取る元氣もあるまい。
源琦　（慰めかねて）そ、それならば御心に召した御養子を御迎へなされませ。
應擧　（淋しく笑つて）わしの氣に入る樣な婿などといふものは、日本中を捜してもあらうとは思はれぬ。
源琦　併しいつでございましたか、蘆雪なら婿になされてもよいと、仰せられた事がございましたな。
應擧　もうあれの名はいうてくれるな。さう思うた事があるにつけても、一入あれが面憎い。
源東　併し萬一お孃さまが、あの男をお好きなされたら何となされます。

應擧　(笑つて) あはゝゝゝ。何であれにその様ななまめいた心があるものか。
源琦　併し此道ばかりは……
應擧　(嘆くやうに) 萬々一この様な事があつたら、娘とて容赦はない。心に思うたゞけでも、打たゝいて折檻する。
(源琦は我を折つて沈黙する。女中お竹枝折戸を開き、いそぎ入り來る。)
應擧　娘が戻つて來たか。
お竹　いゝえ、お客様でござります。
應擧　お客さま？　誰ぢや。
お竹　蘆雪さまの奥様といふ方でござります。
應擧　(苦々しげに源琦に向ひ) 蘆雪の女房というたら、あの三年前に零落をしたお梶の事では無いか。
源琦　(驚きながら) 左様でござりませう。
應擧　何しに來居つたか。お雪が逢へばよいに。
お竹　叔母御さまが御對面なされましたが、旦那さまに直々御目にかゝりたいと仰有つて、何分御承知なされませぬ。
應擧　併しけふは忙がしうて逢はれぬと申せ。
お竹　でも、御家にかゝはる一大事故、是非御目通りを致したいと仰有りまする。
應擧　困つた奴ぢやな。

源琦　私が逢うて追ひ返しませう。
應擧　(嬉しげに) 左様して貰はうかの。
源琦　承知致しました。
(お竹先に源琦行きにかゝる。)
應擧　いや、わしが逢はう。
源琦　(驚いて) えツ、先生が？
應擧　さしたる事ではあるまいが、兎も角も我家にかゝはる一大事というて參つたものを、門人が代理とあつては先きの深切を無にする様なものぢや。(お竹に) こちらへ通すがよい。
源琦　併し、あれは狂人じみた女でござりまする。先生がお逢ひなされては……
應擧　まあよい。お竹、これへ案内せえ。
お竹　はい。
(お竹去る。)
應擧　女が歸つたら、ゆつくり一酌しよう。秋晴の加茂川の夕景色は、また格別ぢやからなう。
源琦　(不安の胸を抱きながら) では後刻。
(源琦は挨拶して去りかける。お竹、お梶を伴ひ來る。お梶は機先を制して、慇懃に挨拶する。)
お梶　これは駒井さまでござりましたか。久しく御意を得ませぬが、御變りもなうて重疊でござりました。

源琦　（呆れて急には答へ得ず）　あなたも御機嫌ようて祝着でござつた。

（後をふり返りながら枝折戶の彼方へ去る。お竹も去る。）

お梶　思ひながら日蔭の身とて御不沙汰ばかり致して居りましたが、先生にもます〳〵御健祥にて……

應擧　（煩さうに）　その樣な事はあとにして、一體わしの家の一大事とは、ど、どの樣な事でござるの。

お梶　はい。若し詳しい事を御承知なされましたら、どの樣に御驚き遊ばすでござりませう。が、それを申上げます前に、わたくしから一つの御願ひがござります。

應擧　おまへの方からわしへ賴み？　ふむ、そ、それはどんな事ぢやな。

お梶　はい。蘆雪の宅へ、此わたくしが歸參がかなひます樣、先生の御力添が願はしう存じます。

應擧　（呆れ顏に）　併しおまへはあの蘆雪を棄てゝ、他の男と駈落をしたといふではないか。

お梶　それ故蘆雪はわたくしを許しては吳れませぬ。併し先生からのお聲がかりがござりますれば、一議もなく承知致すに相違ござりませぬ。

應擧　いやさう容易くも行きはすまい。それにあの男は今ではわしとは何の關係もない身の上ぢや。

お梶　破門を遊ばしたといふ事は噂に聞いて居りました。あの男がその樣な事を仕出かしましたも、わたくしが側に居らぬ爲でござります。今度わたくしが戾りましたら屹度先生の思召にかなひますやう……

應擧　いや、折角ぢやが、それは御免を蒙る。併し幸ひ駒井源琦がまゐつて居る。あれにでも賴んで見たらよからう。

お梶　あの人はだめでござります。

應擧　なぜにな。

お梶　あの人は蘆雪と一つ穴の貍でござります。先生の外には、蘆雪の頭をおさへて下さる方はござりませぬ。

應擧　併し今は師弟の關係は絕えてしまうた。わしにはどうにも手のつけやうがない。

お梶　では御座りませうが……

應擧　（腹立しげに）　おまへも存外くどい人ぢやな。勘當した弟子の、女房の世話までは、此應擧は燒いては居られぬよ。

お梶　（又態度をかへて）　これ程迄に御願ひ申しても御承知は下さりませぬか。

應擧　くどい。

お梶　では、では、あなたは其勘當なされた弟子に、なぜお孃樣をおやりなさるのでござります。

應擧　（驚いて）　なに、娘を……あ、あの蘆雪に？
お梶　はい。瑞枝さまを長澤蘆雪の女房として……
應擧　（思ひ返して笑ふ）　そ、そんな冗談よりも、わしの家の一大事といふのを聞かせて貰はうかな。
お梶　それが即ちお家の一大事でござります。
應擧　（落着いて）　娘を蘆雪に呉れてやる……馬鹿々々しい、根もない事ぢや。
お梶　いや、それには確な證據がござります。
應擧　（少し急いて）　ど、どの樣な證據ぢや。
お梶　わたくしが今も此目で見てまゐりました。
應擧　なに、おまへが、しかも今……
お梶　お嬢樣はお宅においでなされますか。
應擧　あ、あれは四條通りへ使ひに行つた。
お梶　わたくしが三年留守にして居ります間に、四條の通りは下加茂へ越してまゐりましたか。
應擧　なに下加茂へ？
お梶　蘆雪の借宅(しやくたく)は、糺(たゞす)の森の側(そば)でござります。お嬢さまは今もそこに居られます、嘘と思召すなら、駒井さまに聞いて御覽なさりませ。つい、今しがた、あの人も御嬢樣と御一緒になつた筈でござります。
應擧　（興奮して）　そ、それは嘘ぢや。娘、娘に限つてその樣な事のあらう筈はない。

お梶　（冷笑して）　では、わたくしの聞き違ひかも存じませぬ。が、そちこちする中にお嬢さまも御歸りでござりませう。まあ能く訊ねて御覽なさりませ。（間）　どうせわたくしの願は聞いては下さりますまい。一大事を申し上げましたら、わたくしの役目は果てました。まあ、餘りお嬢さまを御叱りなさらぬ樣になされませ。とんだ御邪魔を致しました。
（お梶一禮して去る。應擧は茫然としてその後姿を眺め居りしが、やがて心づきてあとより追ふ。舞臺しばらく空虚、水の音、落葉。やがて應擧は娘瑞枝の手をつかみ、枝折戸の向うより荒々しく引つれ來る。お雪と、源琦とは之を支へながらあとより續く。）
お雪　もし、あなた、そんな手荒な事をなされて如何(どう)なさるのでござります。
源琦　先生、若しお嬢さまに御惡い事がござりましたら、私が承はつて……
應擧　おぬしの樣な嘘つきに用はない。さ、あつちへ行つて貰はう。
お雪　（驚いて）　まあ、あなた。
應擧　おまへとても一つ穴の貉(むじな)かも知れぬ。とに角あつちへ行つてくれ。
お雪　でも……

の我慾無慈悲な親の折檻をおそれた一時の影ぢや。さう聞いては、尙更あの人の心の中の苦しみが察しられる。

（つと身を起し）　これから行つて連れて來る。

源琦　併し瑞枝どのゝ今の心には、親に捧ぐる孝行の外には、何もあるまい。

蘆雪　あの樣な無慈悲な親に何の孝行！　それにあの人には、人の子としてよりも、人の親として盡さねばならぬ務めがある。兎も角も一走り行つて來る。

源琦　それもよからう。有樣は此わしも、あの人の身の上が氣の毒でならぬ。あの心のしをらしさを思ふ時は、たゞ一日でも、お身と一緒に樂しい生活をさせて上げたい。

（淚を拭ふ）

蘆雪　（源琦の手を握りて）　能く云うて吳れた。蘆雪百萬の援兵を得た心持がして、力づよく出陣が出來るわ。

（お梅下手より出づ。）

お梅　あの、お風呂のお支度が出來ました。

蘆雪　わしはこれから出かけて來る。先生をお入れ申せ。

お梅　はい。あの、旦那樣の御召物は。

蘆雪　この儘でよい。たゞ袴を出して貰はう。

お梅　はい。

（押入より袴を取り出す。）

蘆雪　（袴をつけながら、駒井に）　一風呂入つては如何ぢや。

源琦　加茂川べりの行きかへりに、ひどく塵埃を浴びてしまうた。湯の辭儀は水とやら、では遠慮せずに貰ふとしよう。（立ちかゝつて）　如才もあるまいが、相手は名代の片意地先生ぢや。向つ腹を立てたら、こつちの負けぢやぞ。

蘆雪　手だてなぞは考へて居るひまはない。たゞ當つて碎けるばかりぢや。

源琦　一徹我慢にかけては、どちらもどちらぢや。まあ巧くやつて來い。

（源琦は下手に行く。お梅もつゞいて去る。蘆雪は大小をさし庭に下りると、夕風はげしく、下手植込の間より瑞枝姿を現す。顏色蒼白めて、幽靈かとさへ怪しまる。）

蘆雪　（狂喜して）　あゝ瑞枝さま、能う來て下されました。今迎へに行くところでござりました。（手を執らんとする。

瑞枝　（之を遮つて）　どうぞ寄つては下さりますな。

蘆雪　（驚いて）　えッ、そんならおまへさまが、こゝへ來られたのは……

瑞枝　（强き決意を示して）　お別れにまゐつたのでござります。

蘆雪　それでは眞實、このわしに別れる心で……

瑞枝　別れたうはござりませぬが、父はわたし一人を便りにして居ります。わたしはどうでも父から離れる事は出來ませぬ。

蘆雪　親をいとしむは人間の至情、如何にも尊い事ではあるが、それとて親の心にもよりけりぢや。わが子の幸福などは見向いても見もやらず、たゞおのが手足の助けに使ひまはさうとする我慾一遍の親に對して、其身の一生を犧牲にするなどとは、似而非孝行といふものぢや。必らず惡いやうにはせぬ程に、おうちの事などは思ひ忘れて、當分はこゝに落着いてお出でなさるがよい。

（蘆雪は強ひて瑞枝の手をとりて二重へ上げる。）

瑞枝　いえ／＼、父はわたしが無うては、繪さへ描けぬと申して居ります。それ故わたしは此身の生涯を、父と緒とに捧げる覺悟を定めました。あの樣な堅いお約束を致しながら、今更反故に致しましては、不甲斐ない奴、薄情な奴と、さぞお憎しみもござりませうが、二人の兒とさへ一緒に住ひかぬる父の行末を思ひますと、一身の幸福ばかり思うては居られませぬ。どうぞこれ迄の事は、廣いお心に御許し下されまして、あなたは……あなたは……あのお梶さまと、御睦まじう御暮しなされて下さりませ。

蘆雪　お梶の事などは聞くにも當らぬ。云ふにも及ばぬ。たゞし此蘆雪とて、今更おまへさまを失うては、折角先生から破門を受けるまでに、新らしく悟入した畫道の土臺まで崩してしまはねばなりませぬ。

瑞枝　あゝ。（悲しげに面を掩ふ）

蘆雪　いや、自分の身はともかくも、おまへさまとて、人の子として親に盡すつとめの外に、人の妻として夫につくし、人の親として子に盡すつとめを忘れてはなりますまい。

瑞枝　えッ。（思はず顔を袖にて掩ふ）

蘆雪　おまへさまのその帶の下には、われ／＼二人の大事な子供が宿つて居るのでござりますぞ。おまへさまは、その子の事を先生の耳へお入れになりましたか。

瑞枝　（始めて思ひ當りし如く）あゝ、まだ打明けは致しませなんだ。

蘆雪　打明けたら、先生は何と仰有るでござりませう。

瑞枝　（顔色を變へて）さあ。

蘆雪　あの無慈悲な父御ぢや。小面憎い蘆雪めの胤なら、暗から暗へおろしてしまへ……

瑞枝　（身をふるはせて）あゝ。

蘆雪　……とぐらゐの事は屹度云はれる事であらう。それ程でなくとも、生れた子は、人目にかゝらぬ山里の、下

賤なもの〻手へ、襁褓の中から渡されてしまふに相違ない。おまへさまは血を分けた大事な子を日の目を見るとその儘、その様なあはれなみじめな淵に投げ落しても、情ないとは思ひませぬか。

瑞枝　（身を揉んで）あゝ、わたしは何といふ無慈悲な、愚かな母であらう。まだ顔も見ず、聲も聞かねど、（腹をさすりつゝ）これはたしかにわたしの子ぢや。二人が愛情の生きたしるしぢや。こればかりは、こればかりは決して、決して、誰の自由にもさせてはならぬ。

蘆雪　能うそこに心がついて下された。それが分つたら、もう先生のおうちへ歸る心にはなれますまい。

瑞枝　（されど父の俤を心に映じて）でも、でも、父の先刻のなげきやう、悦びやう、あの時の幻が心の目にちらついて、父をあのまゝたゞ一人棄てゝ置く心にはなられませぬ……あゝ、如何するのが、女としての正しい道であらう。（泣き伏す）

蘆雪　（瑞枝の悲歎にくるゝ態度を一心に見戌り居りしが、俄に決心して）おまへさまは、今が大事なお身體ぢや。差しあたる歎きに、身體を傷ふやうな事があつては、あなた一人の大事ではない。たゞならぬお身體ぢやと申上げたら、いかに片意地の先生とて、お心の解けぬ事もあるまい。わしはこれから木屋町のお屋敷にお訪ね申し、先生からやさしいお語をいたゞいてまゐりませう。

瑞枝　（驚いて）いえ〳〵、父は恐しい程、あなたを憎んで居りまする。あなたの顔を見たら、またどの様な難題をいひかけるか分りませぬ。今逢うて下さるのは、憎悪の火に油をさす様なものでござります。こればかりはどうぞ思ひとまつて。

蘆雪　併しおまへさまの、その温かい心のうちをきかせて上げたら、どの様な冷たい先生の心とて、解けずには居られぬ筈ぢや。

瑞枝　でも、一度かうと云ひ出したら、決してあとへは引かぬ父上の横紙破り、今逢ふ事だけはどうぞ思ひ止まつて……

蘆雪　斷じて行へば、鬼神も之を避けるといふ。此蘆雪が智慧の有りたけ、魂のつゞくだけを語に現し、先生を説破して、屹度御許しを受けて戻りまする。

瑞枝　人の語で我を折るやうな父ではない。それよりはいつそ此身を……

蘆雪　（驚いて）如何しようと云はれるのぢや。

瑞枝　（泣いて）あゝお腹の嬰兒さへなかつたら……

蘆雪　それがあればこそ、勝味はこつちに有るといふもの。まあ、萬事はわしに任せて、落着いて返事をお待ちなされませ。それまではどの様な事があつても、此家を出て

はなりませぬぞ。分りましたか、大丈夫でございますか。

（瑞枝うなづく。）

蘆雪　では急いで行つて參りまする。

（蘆雪は云ひ捨てゝ、下手植込みの中へ去る。風の音、河瀬のひゞき、淒く鷺の聲。上手杉の木立の中に、お梶の幻影現る。瑞枝その姿に驚く。お梶の言葉は、瑞枝の耳のみに響く。）

お梶の幻影の聲　おまへの行くべき道はたゞあそこばかりぢや。（加茂川をさして）あれ、あの夕風にむせぶやうな加茂の川瀬が、おまへの行くべきたゞ一つの道ぢや。

瑞枝　あれえ。

（お梶の幻影は物凄き笑ひ聲を殘して消ゆ。瑞枝は木立の中を茫然として眺め居りしが、やがて何物にか憑かれし如く、ふら／＼と其方に去る。）

（日全く暗くなる。）

（源琦は行燈を携へて、下手より出で來る。）

源琦　蘆雪、蘆雪……あゝ、もう行つてしまうたか。

（風の音、河瀬のひゞき道具廻る。）

（二）　應擧が畫室

舞臺はすべて序幕（一）に同じ。

前場より半晌の後。

十六日の月東山の後方に出でて、その餘光は庭前の樹木を照す。

畫室の丸窓はとざされて、應擧が繪を描き居る姿、その障子に映ず。

河瀬の音、風の音、前幕よりも强く。響く落葉もまた繁し。

應擧は屢ば筆をとゞめて咳する。

應擧　瑞枝々々。あいつは何處へ行き居つた。夜になつては、わしの筆が思ふやうに進まぬのを知つて居ながら、何處へ行き居つた。どうも繪の具の色が、心のまゝには見分けられぬ。毛描きの筆あたりが心もとない。

（鳴子を引く。鳴子カラ／＼と鳴る。）

應擧　（窓を開き）瑞枝、瑞枝、瑞枝は居らぬか。

（筆を投げ棄てゝ、小郎を下り來る。此時お雪枝折戸を開いて出づ。）

應擧　娘は、瑞枝は？

お雪　（狼狽して）もう直に見えませう。

應擧　どこへ行つた。

お雪　今そこに居たのでございますが……

應擧　居たものが見えぬといふ事があるか。まさか、蘆雪めのところへ行きはしまいな。

お雪　その樣なことはござりませぬ。蘆雪どのがこゝへ見えました。

應擧　蘆雪が來た？　あの蘆雪が……

お雪　はい、あなたに御目にかゝりたいと申しまして。

應擧　無論、逢はぬといふたであらうな。

お雪　それは申しましたが……

應擧　（冷笑して）また御家の一大事とでもいうたか。

お雪　はい。瑞枝の一大事だと申しました。

應擧　あれも女房の聲色をつかうて居るな。瑞枝はわしの娘だ、他人のかまつた事でないと斷つてしまへ。

お雪　でも。

（十六夜の月、枝折戸の眞向うなる東山の上に出づ。蘆雪は月光を背にして出で來る。）

應擧　（それと見てわざと）誰ぢや。

蘆雪　長澤蘆雪でござります。

應擧　そちに逢ふ用はない、歸れ。

蘆雪　いや、お目にかゝらねばならぬ一大事がござります。

應擧　何、何の用だ。

蘆雪　あなたの御娘御、わたくしの妻の身の上についてゞござります。

應擧　そちにはお梶といふ女房があつた筈ぢや。

蘆雪　あれは去つた妻で御座ります。お娘御はこれから申受けねばならぬ妻でござります。

應擧　それをやらぬといふたら。

蘆雪　何と仰せられても、たつて申受けまする。

應擧　理不盡な云ひがかりをする奴ぢや。あれはわしのものぢや。そちなどに遣はすやうな娘ではない。

蘆雪　併し只今では、あなたお一人のものではござりませぬ。

應擧　何、何ぢやと。

（立あがつて、蘆雪に迫る。お雪おどろいて之を支へる。）

お雪　まあ、あなた……蘆雪どのも、語が過ぎませう。お二人とも、その樣に角芽だたずと、もつとなんどりと、御話が出來さうなものでござりますに。

應擧　かやうな噛みつく犬は、痛い目を見せねば吠えやまぬわ。

蘆雪　（冷かに）痛い目ぐらゐではなか／＼吠え止みは致しませぬ。が、叔母御さま、その樣に御心配はなされまするな。わたくしは師匠に向つて手を擧げる樣な事は致しませぬ。

應擧　（冷笑して）師匠？　師匠とは誰の事ぢや。わしには蘆雪といふ弟子があつたが、餘りに増長して、畫道に

外れた畫をかくによつて破門してしまうた。

蘆雪　一旦破門は受けましても、やがてその非をお悟りなさる時があると存じて、今以て師に仕ふる禮は棄てませぬ。

應擧　それに師匠の娘をたぶらかしたのぢやな。

（應擧は又蘆雪の前にすゝむ。お雪は之を遮つて。）

お雪　もし父樣……

應擧　（拂ひ退けて）煩さい。

（お雪よろめく、蘆雪之をさゝへて。）

蘆雪　叔樣御さま、御危うござります。先生からどの樣な御折檻を受けましても、決して御手向ひは致しませぬ。あなたはどうぞあちらへ御出なされまして……

お雪　でも……

應擧　煩さい。あつちへ行け。

お雪　はい。では蘆雪どの、頼みましたぞ。

蘆雪　畏まりました。

（お雪行きかゝる。）

應擧　娘が歸つたら、直ぐつれて來るのぢやぞ。

お雪　はい。

（心配しつゝも枝折戸の向うに去る。月光いよ〳〵明るし。）

蘆雪　先生、あなたはわたくしがお嬢様をたぶらかしたと仰有りましたな。

應擧　それに相違ないでは無いか。あの様な嬰兒にも等しい無邪氣な娘に、おそろしい不義を働かせて……

蘆雪　しかしお嬢様を、わたくしに押付けられたのは、先生、あなたでござりますぞ。

應擧　あれは親を棄てゝ、男の許へ走るやうな不心得の女ではない。それを、きさまは……

蘆雪　わたくしが智慧をつけて、おびき出したと仰有りたいのでござりませう。其樣な事はどちらでも宜しうござります。併し先生、あなたは、眞實にお嬢様をお可哀さうと思召しますか。

應擧　可哀さうと思へばこそ、女たらしの手から取還すのぢや。

（云ひつゝ枝折戸の方へ行かんとする、蘆雪は其袖を引止めて。）

蘆雪　先生が行かれても、お嬢様はお還りにはなりませぬぞ。

應擧　そ、そんな事のあらう筈は無い。あ、あれは孝行者ぢや。わしの語は決して背かぬ。

蘆雪　お嬢様も其爲に心を痛めて居られます。併しあなたが、二人の仲を引裂かうとなされたら、お嬢様はこゝろならずも、あなたのお心にお背きなさる事になりまする

ぞ。

應擧　（笑って）　その様な脅迫に怯む應擧と思ふか。娘はわしの顔を見さへすれば、忽ちきさまの呪禁の繩から斬りほどかれて、わしの手へ戻つて來る。あれは人の子としてのつとめを能く心得て居る。

蘆雪　同時に、人の親としてのつとめも、能く心得て居られます。

應擧　なに、人の親としての務め？

蘆雪　如何にも、子を生む道、子を育てる道……

應擧　（語せはしく）　子？　子とは何だ。

蘆雪　わたくしの子、お孃さまの子！

應擧　では、では、娘は？　（烈しく驚く）

蘆雪　はい。お孃さまは懷胎なされました。もはや五月になられます。

應擧　憎い奴ぢや。にくい奴等ぢや。それならば何の事…

（應擧又行かうとする。蘆雪之をさゝへて。）

蘆雪　尙如何なさらうと仰有るのでござります。

應擧　不義の胤を宿したあとつては、娘の恥、おれの恥、圓山家累代の恥辱ぢや。今、今の中に手當をする。

蘆雪　（赫となつて）　そ、その無慈悲な心が、殘忍な心が、お孃様をおまへさまから背かせてわたくしのものとしたのでござりますぞ。お孃様の胎内の兒は、わたくしの子でござりますぞ。

應擧　おれの娘の子はおれの孫ぢや。圓山の家に出來たものは、おれの自由にするばかりぢや。かゝる例は古往今來、歷史の上に澤山ある。

蘆雪　しかし、しかし、その様な殘忍な處置をなされたら、お孃さまの御身體は何となります。

應擧　うむ。

蘆雪　あなたがお孃様を可愛いと思召すのが――わたくしは左様とは思ひませぬが――兎に角、それが眞實でござりますなら、お孃さまとて御自分の御子は、矢張可愛い筈でござります。わたくしとて自分の子は……（涙ぐむ）

應擧　（驚いて）　如何したと。

蘆雪　お孃さまは、あなたの爲に、人形として推こめられ手足として追ひつかはれるが、苦しかつたのでござります。それ故、その苦しい、いましめの繩からのがれよう爲に、わたくしの手の中へ、逃げて來られたのでござります。

應擧　（哄笑して）　あれは其様な不孝者では無い。今も今とて、わしが理非を說いて聞かせたら、一言の下にそちを棄てるというた。

蘆雪　併しその孝行なお孃さまは、今どこにお出になりますな。

應擧　な、なんと。

蘆雪　お孃さまは、今わたくしのところにお出でになりますぞ。

應擧　(赫怒して) き、きさまは勾引をしたのぢやな。

蘆雪　勾引をするものが、わざ／＼これ迄出て參りませうか、お孃樣は……

應擧　(少し、怯みながらも、何弱點を示さすと) 親の許さぬ不義を働いた奴には、その位の天罰があるべき筈ぢや。

蘆雪　では、では、あなたはお孃樣を泣死に死なせようとなさるのでございますな。

應擧　(頑へかたくなりて) 小兒の處置は追つての事にする。東の角圓山應擧の娘は、不義の相手の、女たらしの家には置かれぬ。

(又行かうとする。)

蘆雪　それはわたくしして不承知でございます。

應擧　不承知なら不承知でよい。そちのやうな無法者とは論判無益ぢや。

蘆雪　併し……

應擧　聞くべき事はみな聞いた。云ふべき事はみな云うた。おれは自分の娘を自分の思ふ通りにするまでぢや。

蘆雪　それならばわたくしも申しまする。わたくしは自分の妻と子とを、自分の思ふ通りに致します。

應擧　如何とも勝手にせえ。

(應擧は枝折戸の方へ行かんとす。蘆雪亦之をとゞめる。此時下手の奥にてお雪の泣き聲聞ゆ。兩人は本能的に或衝動を感じて、思はず顏を見合す。お雪泣きながらかけ入る。)

應擧　娘は歸つて來たか。瑞枝は。

お雪　あの瑞枝は……瑞枝は？ (後方を指して泣く)

蘆雪　何、何となされました。

(源琦先に立ち、下加茂の村人大勢、瑞枝の死骸を戸板にのせて舁き來る。)

應擧　やつ、娘は？

蘆雪　お孃さまは？

源琦　(悄然として) 昔住を思うて、こちらへ還らるゝ途すがら、折からの月の光りにあこがれて思はず加茂川の深みの中へ……

(お雪死骸にとりついて泣く。)

お雪　あゝ、瑞枝、瑞枝……

(應擧と蘆雪と死骸を隔てゝ顏を見合す。間。應擧は手をさし延べて、蘆雪の手を握る。)

應擧　娘、お、おれが惡かつた。

(蘆雪は語なく、應擧の手に縋つて泣く。河瀬の音。

夜鴉の聲、智恩院の鐘の聲。落葉雨の如く落る——幕。）

茶を作る家（貳幕）

時　現代

場　宇治の農家

人

春日井友右衛門

同　守之助　其長男

同　博造　其次男

上野良造　學校教師

三代子　博造の妻

お藤　守之助の婚約女

藝妓お花　友右衛門の長女

其他　茶摘女五六人

序幕

春日井家の臺所

宇治の町を稍隔りたる茶師の家。古く、大なる臺所、半ば以上は土間にして、上手の一部は稍高き床、その一部に圍爐裏あり。四月末の事なれば、榾火の煙も細くして、茶釜の音も微なり。圍爐裏を繞つて花茣蓙の座蒲團二三枚、茶道具などありて、壁際には日本及西洋の權衡、小さき箕、光澤美しき茶飾の數種、大小の茶壺、澁紙づくりの大袋などあり、上手の一部は煤ばみて光澤つよき杉戸もて劃らる。正面の中央奥の方には、大なる樞のつきたる障子あり。これを庭先に出で去る出入口とす。戸を開く毎に晩春の日光に照さるゝ殘紅新綠の色見ゆ。

日の光障子を透して、薄暗き舊家の裏を微に照す。土間には茶櫃數個、米俵、農具など取ちらしあり。壁際には前夜の火事に用ゐたる刺子頭巾、長半纏、手かぎ、提灯など數個つるしあり、樞戸の上には袖がらみ、木刀、槍などを飾り、開きたる大戸の裏には火の用心の木札、諸神社の守り札など貼りつけあり、下手には流し、水口など見ゆ。春日井友右衛門は中央扉口より入

來る。下手に積重ねたる茶箱の一つには、四男博造腰かけ居る。

友右衛門　（舞臺の外なる人に向ひ）　直に歸つてお出でよ。

女の聲　（鍛錬されたる、されど悲哀の調を帯びたる聲にて）　えゝ、直に歸つて來ますわ。

友右衛門　あゝ〳〵、花もたうとう歸つて來たなあ。

博造　（大きな聲にて）　阿父さんはさぞ嬉しいでせう。

友右衛門　なに。（稍聾ひたる耳をたてゝ聽かんとす）

博造　（更に聲を高め）　阿父さんも嬉しいでせうね。

友右衛門　それあ嬉しいさ。七年も行方の分らなかつた娘が歸つて來て呉れたんだからな。併し花も大分うれしさうだぞ。

博造　でも、お花は大分變りましたね。馬鹿に色が白くなつて、大變に痩せましたね。

友右衛門　長く都に居ると誰でも左樣なるよ。田舎へ歸つて來てまづいものを食ふとまた直に血色がよくなるさ。おまへなぞも、此間來たばかりの時とは、大分違つて來たぞ。

博造　それにしてもお花は、あれから東京にばかり居たんでせうかね。

友右衛門　（何事か思ひあたる如く）　左樣さなあ。

（障子の前を、人の過ぎ行く影法師見ゆ。）

博造　あゝ。校長さんらしい。上野先生らしい。

（中央入口の障子開かる。八十八夜前の晩春の日光まぶしきばかりに射入る。小學校長上野良造入り來る。）

博造　やあ、入らつしやい。

上野　（まはりを見て）　如何です、博造さん。奥さんは。

博造　お花と一緒に平等院の方へ行くとか云つて出かけて行きました。

上野　わしは少し奥さんにお願ひがあるんだが。

博造　直に歸つて來るでせう。

上野　では、出直して來ませう。

友右衛門　（不機嫌さうに）　今日は日曜だ。大して用もあるまい。まあ、遊んで行きなさい。花もたうとう歸つて來ましたよ。

上野　左樣だつてね。如何かね。

友右衛門　立派な女になつてね。こんな草深い田舎では掃溜に鶴さ。それでも我家ほどいゝとこはないと見えて、それや大喜びさ。

上野　今度はしばらく逗留するつもりかね。

友右衛門　もう東京へは二度と再び行かないさうだ。

上野　如何だかね。

友右衛門　もう東京にはあき〳〵したさうだ。

上野　ほんたうかね。

博造　（茶慣な離れ）何も不思議な事はないぢやありませんか、わたしには、彼女の心もちは能くわかつてるつもりだ。

上野　併し長つゞきがするか知らね。誰にしたつて、こんなつまらない、變化のない處には居たくなささうなものだが。

博造　おやあ、あなたもどつかへ往らつしやればいゝぢやありませんか。

上野　いや、わしは天の命によつて此村で終る決心をつけたんだが、併しわしの代りに隨分澤山の若いものを此村から出してやつたよ。

博造　ほんたうですね。自家だけでも五人の兄弟のうち、四人までは村から出てしまつたんだからね。

上野　わしが勸めなければ、みんなは井の中の蛙でをはる處だつたのだ。

友右衛門　その代り上野さん、三人の男の子の學資やら、洋行費やらで、わしは身代を棒にふつてしまひかけてるんだ。わしは上野さんさへ此村へ來なかつたら、こんな馬鹿な事にはならなかつたらうと思ふと、全くおまへさんが怨みだよ。

上野　またかえ。そんな愚痴をこぼすものぢやあないよ、友右衛門さん。今に百層倍になつて返つて來るさ。

友右衛門　あてになつたものではない。

上野　そんなことがあるものかね。まあ博造さんにしてからがさうだ。今度はいよ〳〵自分の腕で、女學校を建てなさるといふ事だね。

友右衛門　それでまた金を出してくれといふ掛合だ。博造にあてゝ置いた五千兩はとうの昔にみんなになつてしまつたんだがね。

博造　併し阿父さん。僕は一文だつて無益につかつちや居ませんよ。今住んでる家屋だつて賣買にしても千五百圓や二千圓のものはあるんですからね。

上野　それにあゝいふ立派な教育のある奧さんが、博造さんを助けるといふんだもの、それあ乾度成功するよ。

友右衛門　それ迄にこつちが身代限りをしてしまはなければいゝが。

上野　その中には米國へ往つた友次郎さんが、大きなものになつて歸つて來なさるだらう。

友右衛門　あれも東京とやら横濱とやらへは歸つて來たといふ話だが、何でも毛唐の女房が出來たとかで、こんな片田舍へは足も向けたくないといつて居るさうだ。

上野　そんな事はあるものかね、わしの教育した人間にそんなものが有つて堪るものか。

友右衞門　いゝや、三男の春男のやつがいゝ手本だ。あいつは淺野の養子になつて、今では九州でも有名な實業家ださうだが、近頃は碌々時候の挨拶もしてよこさない。如何してこんな親不孝ものばかり揃つたかと思つて愚痴をいふと、守之助がいつも「阿父さん、何もかも約束事だ」といつては慰めてくれるがね。上野さんあんたに教育されたものは、みな此通りやくざになつてしまつたよ。

上野　ちつとも厄雜なことはないぢやないか。わしが一生懸命に教育をしてあんたと喧嘩をしいしい、東京へ遣つたればこそ、三人が三人兎に角立派な人間になつたんだ。子供を教育するのは親の義務だ、子供が立派な人間になつたからと云つて、それに榮耀をさして貰はうなんていふのは、親の方が間違つてる。

友右衞門　榮耀はしたくは無いが、首だけはくゝりたくないものだ。

博造　阿父さん、そんな忌な……

上野　（おさへて苦笑しつゝ）博造さん、あれが阿父さんの癖なんだ。あんたは久しく傍に居ないから氣になるだらうが、わしたちは今ぢやあ何とも思ひはしないんだ……時に、わしがけふ來たのは、あんたの奥さんに、わしの方の婦人會へ來て、一つ講話を願ひたいと思うてなんだが。

博造　いゝでせう。

上野　名古屋あたりの都會から來られた方には、かういふ田舍の婦人會もまた一興かも知れないからね。

博造　なあに、あれは一體が、田舍の方が好きなのですよ。併し昨夜の騷ぎでひどく興奮したものですからね……

上野　ほんとに飛んだ騷ぎだつたね、友右衞門さん。わしが驅けつけた時には、一面の火で手のつけやうが無かつたよ。

友右衞門　（ぎよつとして）うむ！

上野　しかし、風もないのに、隨分早くまはつたものだね。

友右衞門　（煩ささうに）うむ！

上野　やつぱり放火かね。

友右衞門　それに違ひないさ。なんでもあの夕方、妙な風體の若者が、木燧をもつてこゝいらをまご〳〵して居たといふ話だ。

上野　誰がそんな事をいつたね。

友右衞門　（やゝ躊躇して）誰でも云つてるよ。なあ、博造。

博造　さあ！

上野　それでも母屋へつかなくつてよかつたね。

友右衞門　その代り焙爐場はみな燒けてしまつたよ。

上野　でも、あれだけなら大した損害もないだらう。

友右衞門　左樣行くもんか、あすこには箕も、篩も、助炭も、茶をする道具は一式入つて居たんだから、いつそ母屋が燒けてくれた方がよかつた位なものだ。
上野　でも火災保險がついて居るといふ話だつたが。
友右衞門　保險でも取れなけりや、もう身代限りだ。
上野　また始めたね。それにしてもどんな積りで火なんぞを放けやあがつたのかね。
友右衞門　世間にや、友だちと見せて敵になつてる奴があるからね。
上野　しかし此家のうちが、人に怨みをうけよう筈はないではないか。
友右衞門　（腹立しげに）人の心は分るものか。
（長男守之助、中央の戸口を開き入來り、上野にちよつと挨拶して、圍爐裏の横手に上り、土瓶をとつて茶を呑む。）
友右衞門　上野先生にも一杯あげるがいゝ。
上野　わしはもう御免蒙らう。
（守之助物がなしげなる容子して、上野に茶を汲み渡す。一座しばらく黙然。）
上野　（つまらなげに）守之助さん、今火事の話をして居たんだが、飛んだ事だつたね。
守之助　（何かなしげに）有難う！

（一座又黙然。）
上野　時に、茶の芽だち方はどんな容子かね。
（守之助茫然たる容子、何やら分らぬ挨拶をなす。）
友右衞門　お茶の芽はさう惡い方でもない樣だが、焙爐場が燒けてしまつては、何にもなりあしない。
上野　茶の芽立さへよければ、何處を借りてやつたつていいさ。まあ〳〵結構だ。……ではまた伺ふとしよう。
博造　もう直に歸つて來るでせうよ。
上野　又來ます。どうか、あんたから奥さんへよろしく。
博造　さう申して置きませう。
上野　左樣なら。
友右衞門　左樣なら。
（守之助はふかく考へ込みて挨拶をもなさず。上野は中央入口より出で去る。鷄の聲日の永きをうたふ。）
友右衞門　あの下手學者にも困つたものだ、今度は博造の嫁にまで悪智慧をふつ込まうとして居るらしい。花なぞも餘程氣をつけないと又險難だ。
守之助　お花にも氣の毒です、折角久しぶりで歸つて來たのに、こんな忌なことを見せてやるといふのは。
博造　併し九州の兄さんから、好い返事が來れば、二千や三千の事は譯がないでせう。
守之助　（悲しげに）春男から返事が來たよ。

博造　いつ？

守之助　今、そこで郵便屋に逢つたから、受取つて來たのだがね。

博造　ど、どんな返事です。

（守之助懷中より一通の手紙を取出し、博造の前へ投げ出す。）

友右衞門　まあ讀んで見ろ、あいつは恩知らずだ。

（博造手紙を默讀す。）

博造　（苦々しげに）亂暴だ！　自動車を買ふから、金は貸せないといふんですね。

友右衞門　何だと。

博造　自動車を買ふ金はあるが、生れた家を救ふ事は出來ないんださうです。

友右衞門　（しばらく瞑目して、しひて心を落つけんとし、やがて涙につまる咽聲にて）そんな事だらうと思つて居たんだ。守之助、これからは二人ぎりで戰爭するんだぞ。

守之助　せめて火事だけでも無ければよかつたに、おとつさん茶園はどうでも他のものですかね。

友右衞門　いや〳〵おれの目の黒いうちは、あの茶園ばかりは、他手には渡されない。

守之助　だつて此十五日で延期の日限も、いよ〳〵切れたんですからね。それに焙爐場が燒けては茶をするわけには行かず……

友右衞門　今年なざあ、茶を作つたつていくらになるものか、あの大霜を喰つたあとだもの。それよりか、汝、保險金は焙爐場だけでも千五百圓は取れるだらう。

守之助　約束は左樣ですが……今駐在所へ呼ばれて行つたんですがね、巡査さんは放火ぢやなからう、自家の中に罪人が居やあしないかなんて、妙な事を云つて居ましたよ。

友右衞門　（煙草を吸はんとして木燧を磨りかけ居りしが、急にその木燧をおしかくして）そ、そんな事があるものか。

守之助　それにわしの歸つて來る時、保險會社の奴が駐在所へ入つて行きましたよ。

友右衞門　（如何にも不安らしく）だつて怪しい若者が、昨晩あの邊をまごついて居たといふ話ぢやないか。

博造　（ちつと父の容子を見つめ居りしが）おとつさん、さつきもあなたそんな事を仰有つたが、誰がそんな事を云つてるんです。え丶、だれがそんな事を見たんです。

友右衞門　（狼狽しつ丶）お、おれが見た。

博造　いつです。

友右衞門　火、火事のはじまる少し前に。

博造　（ぢつと父を見て）　おとつさん、あなたは火事のはじまる少し前に、あんな處に何しに行らしつたのです。

友右衛門　（ハツとして）　妙、妙な聲音を聞いたものだからな。

博造　あなたは、あれ限り火事のはじまるまで、部屋へは歸つて來られませんでしたね。

友右衛門　（たゞ前を見詰めて、頭腦は空虚なるかの如く）そ、そんな事はない。

博造　あなたがお床を出て行かれたのは丁度十二時でした。僕はうと〳〵しながらあなたの忍び足で出ていかれるのを聞いて居ました。

友右衛門　そ、その時わしは怪しいものゝ姿を見たんだ。

博造　それから私はまたうと〳〵しました。そして何だかパチ〳〵する音に驚いて目を醒し、あわてゝ戸外へ出て見たら、あなたはぢつと火を見つめて立つて居ましたね。

友右衛門　そ、そんな事は無い。

博造　わたしが阿父さんと聲をかけたら、あなたはわたしを撞飛ばして、戸内へ駈け込みなすつた。

友右衛門　（呼吸をはずませて）　う、うそだ、まるで嘘だ。

博造　うそではありません。わたしは……。

守之助　（博造を手で抑へ）　博造、しづかにしてくれ。（父に向ひ）　阿父さん、あなたはとう〳〵やつておしまひなすつたね。

友右衛門　（全く力を失ひ）　守之助、堪忍してくれ。

守之助　おとつさん、能く決心がつきましたね。

博造　（二人の顏を迭みに眺めつゝ）　では、阿父さんが火を放けたんですね。

友右衛門　（狂人の如く笑ひ出し）　放けはしない。蠟燭の心が落ちたんだ。

博造　おとつさん、あなたは氣がちがつたのですか。何、何だつて、そんな馬鹿な事をするんです。

友右衛門　保險の金でも入らなけりや、茶園が他手に渡つてしまふ。

博造　茶園の一ヶ所二ヶ所、それが何です。そんな法律上の罪人となつてまで、金を手に入れなければならない位なら、立派に茶園を渡してしまふがいゝぢやありませんか。

友右衛門　（苦笑ひして）　守之助、あんな事を云つてるよ。

博造　茶園が他手に渡つて飯がくへなくなつたつて、高が乞食になるだけの事ぢやありませんか。それでも自分で放火をして保險金を詐取するよりは、どの位立派だか分りません。

友右衛門　理窟は左樣かも知れない。併しあの茶園ばかりは如何しても他には渡されない。

博造　な、なぜです。

友右衞門　汝にも聞かせた事がある筈だ、あの茶園は御先祖さまが、太閤さまから拜領の、天竺の茶の實を蒔いて作つた茶園だといふことだ。それから三百何十年といふもの、お茶の香氣と一緒に自家の名も高くなつて、今日でも宇治といへば、日本一の茶所、その宇治の中でも春日井の還下といへば、世界中に鳴り響いたものだ。それほどの名木をおれの代になつて人手に渡しては、御先祖代々樣に對して、どう顏が合されるものか。（涙に咽びはげしく咳き込む。守之助茶を汲みて父に與ふ）

博造　併しどんな名木だつて、時が來れば枯れる事もあるぢやありませんか。左樣思つたら諦めのつかないこともありますまい。

友右衞門　しかし……

博造　（口を挿んで）それに三百年の茶園を失ふのがつらいからと云つて、三百年つゞいた家名に泥を塗つては尙つまらないぢやありませんか。

友右衞門　おまへはお茶といふものを知らないからそんな事をいふのだ、わしはお茶師の家に生れて、小供の時からあの茶の木の下で育つたのだ。あれはわしの大事の友だちだ。いや、わしの大事の生命だ。あれと分れる位なら詐僞でもする、盜賊でもする、懲役になつたつて驚きはしない。

博造　それにしても、一旦人手に渡つたところで、また取戾す手段もないことはないぢや有りませんか。

友右衞門　いや、あの茶園を抵當で金を貸した人間は期限が來たらすぐ茶の木を切つてしまつて、あそこへ別莊をたてようとして居るのだ。あの茶の木を伐られるのはこの身を切られるよりはまだつらいのだ。

守之助　博造、どうぞ、おとつさんやわしの腹の中も察してくれ。

博造　そんな馬鹿な事に同情が出來るものですか。いくらその茶の木を伐られるのがつらいからといつて、自分の家へ火を放けるには當らないぢやありませんか。その位ならあの焙爐場を賣つても、茶園をおさへたら好いぢやありませんか。

守之助　もう焙爐場は二番抵當までに入つてるんだよ。

友右衞門　だから、外に工風はなかつたんだ。博造、どうぞ知らない顏をして、いやおまへも口を添へて保險金の取れる樣にしてくれ。

博造　そ、そんな事は斷じていけません。僕は今が今、乞食にならうとも、そんな不正な仲間入は如何しても出來ません。

友右衞門　（狂氣の如く高笑ひして）おまへは名古屋へ行

けば、地所も家屋ももつてる立派な紳士だ。女學校の校長さんになる人だ。親の難儀などに、くよ〳〵しては居られまいさ。

博造　おとつさん、僕はそんな冷酷な人間ではありません。あの地所も、あの家屋もみんなおとつさんに貰つた財産です。僕は裸になつても、乾度おとつさんの爲に盡します。だからそんな不正な事をして保險金を盜み取る樣な事だけは止して下さい。

友右衞門　（愁然として）他に工風がつきさへすれば、おれだつてそんな事はしたくはないんだがな……

守之助　保險金は取らないにしても、この事が露顯したら、阿父さんの身に不都合はあるまいかな。

博造　なあに、阿父さんが探物に行つて蠟燭の心を落したとか、何とか云つて、粗忽火といふ事にしてさへ置けば、そりあ、大丈夫ですよ。他人に迷惑をかけたわけではなし、保險金を詐取する意志さへなければ、警察だつてそれまではじくる必要はないぢやありませんか。

友右衞門　それにしてもおまへの方で其金がな……

博造　大丈夫です。どうせ女學校を新築したら、あの家は賣つてしまつて、女學校の方へ一緒になるつもりですから。實は内々買手も定めてある位なんですよ。だから二千圓なら乾度出來ます。

友右衞門　だが……。

守之助　しつ、やつ、誰か來ますよ。

（障子に三代子、上野、お藤の三人が通り過る影法師うつり、やがて三人中央の戸口より入來る。お藤は土のつきたる五月大根を笊に入れもち來る。）

上野　博造さん、奥さんはなか〳〵謙遜家で、如何しても承知をして下さらん。一つ、あんたから說得して下さい。

友右衞門　（一同を見かへりもせで）子は三界の首枷だ。あゝ夭死をした老妻さんが羨ましい。（上手の杉戸を開きて、隣室へ入りかけながら）守之助、ちよつと來て吳れ。

（守之助もつゞいて上手へ去る。）

博造　兄さん、僕も一緒に行つて、今の話を定めてしまひませう。

（同じく上手へ去る。）

三代子　まあ、如何したといふんでせう。

お藤　何ぞ親子喧嘩でもしやしたのかも知れまへんな。

上野　火事の一件ぢやないかね。

お藤　火事どころぢやない、もつと早急な事が起つて居るらしいんだす。

三代子　左樣らしいのね。わたし眞實に何んとかして上げたいわ。

上野　いや、あなたは物質上の事なんぞ心配なさらんが好い。あなたは他を精神的に救つてやる方だ。
お藤　先生さん、またお株をはじめましたいな。
上野　全くだよ、あなたやわたしなぞは餘り世間の俗事に目をつけないがいゝ。何處までも精神の敎育を我々の天職として、その爲に努力するんですね。それであなたにお願ひしたいのは是非あすの午後に、わしの方の婦人會へ出ていたゞきたいのだ。
三代子　でも、自家にいろ〳〵取込みがあるらしいんですから、そんな中をわたし一人暢氣らしく……
上野　俗事は俗人に扱はせるがいゝんです。それにあなたにあの會へ出ていたゞくと、一人の少女がその爲に救はれることになるんですからね。
三代子　ど、どうしてゞす。
上野　實は此の向うの桃山の舊家に、山田といふのがあるんです。そこの娘が今度是非東京へ出て、修業をしたいと云つて親達に願つて居るんですが、親たちは今日の女子敎育といふものは、「新らしい女」とか「解放された女」とかいふことばかり敎へるものゝ樣に誤解して、如何しても東京へは出さんといふのです。それをわしが仲へはひつて、まあ半分以上親達を說得したのですがね、そこへあなたの樣な淑德の婦人が出て下さると、親たちの迷夢が忽ちにして晴れる事になるだらうと思ふんです。だから其の少女を助けると思つて、是非御臨席が願ひたいね。
お藤　先生さん、もう大抵にしてお止しやす。あんたは男でも女でも若いものさへ見たら東京へ行け〳〵云うてみんな村から出してしまうて、一人だつて村の爲になるものを拵へしめへん。茲の家だつて、あんたのお蔭で男の子を三人女の子を一人東京へ出して、みんな玉なしにしてしまうたやないか。
上野　これ。少しは前後を見てものをいへ。博造さんの奥さんがこゝに居なさるではないか。
お藤　（稍興奮して）博造さんが何だね。親の家が倒れかかつてるとこへ、こんなびらしやらした奥さまだか、御夫人だかを伴れ込んで來やはつて、女學校を建てるから金を貸せ。……哀愛さうに阿父は、三人の子どもに學資やら洋行の金やらつゞけ通して、身代を粉にしてしまはつた。而してあんたから意氣地なしだの、無敎育だのと云はれて居る守之助さん一人でおとつさんの手助けをして居る始末やないか。こゝの家の容子を見ただけでもう澤山だす。人の家の息子や娘をおだてて廻すのは、もう大概にしてもらひたうおまんな。
上野　（三代子に向ひ）奥樣、氣にかけちやいけません。

どうせこんな無教育な人間のいふ事ですから。（お藤に向ひ）おまへなぞは年は若くとも、頭が舊式なんだから話にならない。わしは自分こそこんな田舍の小學校の校長だが、自分の鞭の下から立派な人間を作り出すといふのがわしの一生の理想なのだ。立派な人間が一人出れば百の家庭がその犠牲にならうと國家から見れば却つて大きな利益だ。それには出來るだけ澤山人間を廣い都へ出して高等の教育を受けさせなければならない。玆の家だつてまあ見て居ろ、今に博造さんの女學校が立派に成功したら、おとつさんだつて、守之助さんだつて、朝から晩までお茶くさくなつて居るものか。馬、馬鹿な……。

お藤　（ヒステリックに笑つて）はゝゝゝゝ。どつちが馬鹿か知れたものやありやへん、そないな馬鹿つ話を聽いとると、晩の製茶の準備がおくれる。どれ、大根でも焚いて來ませう。

（茶をかゝへて下手流し許の方へ退場。）

上野　（後姿を見おくつて）あゝ如何も忌な事を御耳へ入れてお氣の毒でした。此村にはまだあゝいふ無教育な女が澤山ありますからな。實際骨が折れますよ、どうぞお察し下さい。

三代子　ほんたうにねえ。でも、あの人は中々深切者ですわ。

上野　同時に馬鹿ですよ。

三代子　まあ、それはさうと、あなた、あのお花さんね。

上野　あゝ、今朝歸つて來たこゝの娘ですか。

三代子　えゝ、わたしあの方は矢張博造見たやうに……あの方は如何いふ方なんでせう。

上野　如何つてわしも久しく逢はないのですから、大分變つて居るでせう。

三代子　ずうつと東京に在らしつたんでせうか。

上野　さあ、久しく何處へも便りが無かつたんで、能くは分りませんが……。實はあなただけですがね、あの娘もわしが是非東京へ出せと、友右衛門さんに忠告したんですが、友右衛門さんはあの子が馬鹿に秘藏つ子でしてね、如何しても手離さないのです。で、わしはあの子に勸めて逃げ出させたんです。

三代子　まあ、あなたは實に危險な方ですわね。

上野　しかしそれはあの娘を救ふ爲にした仕事です。勿論わしは東京であの娘が二三ヶ月身を寄せる事の出來る先を、ちやあんと定めて置いたのでしたよ。

三代子　それから如何なすつたの。

上野　もう東京へ出た以上は、友右衛門さんも我を折つて、學資をつゞけてくれるかと思ひの外――あゝいふ强情な男ですからね――女の癖に墮落をする樣なものは、再び家の敷居は跨がせない。野たれ死をしようと、醜業婦に

ならうと、勝手にしろと、如何してもわしの取りなしを聞いてくれないのです。

三代子　まあ、醜業婦に？（意味ありげに、上野を注視す）

上野　そこでわしも困り切つてしまつたのです。東京の方だつて左樣永く世話にならせる譯にも行かなかつたものですから、あの娘に旅費丈け送つて歸つて來いと云つてやつたのですがあの娘もおやぢに負けない强情つ張りですからね、その旅費をわしに返してよこして、いづれ人になつたら錦を着て國へ歸ります。それまではお目にかからないばかりか御便りも致しませんて、それから今日まで七年といふものまるで音信不通だつたのです。

三代子　でも、その、あなたが御世話なすつたといふ東京の方ですね。

（お花中央の戸口を開き入り來る。じみなるお召の東コートをつけ、手に野の花をもてり。輝く甍のあかるさより、俄に薄暗き古き家に入りたれば、はじめは中なる人の姿を辨じ得ざるが如く見ゆ。）

上野　あゝ、お花さん、久しぶりでしたな。

お野　どなた。（稍輕侮の色にて冷淡に）　あゝ上野先生でしたね。まあ、御機嫌よう。

上野　いや、御機嫌よう。能くまめで歸つて來られたね。今も奧さんとあんたの噂をして居たところだ。

お花　それでも偶には噂をして下さる御深切がありますかね。

上野　さう、いやにいふものではないよ。が、考へて見ればそれも無理はないかもしれないね。十七八の娘が見ず知らずの他國へ行つて、七八年間にこれだけ立派になつて歸らうといふんだから、隨分苦勞もしたらうからね。

お花　苦勞なんかするものですか、世間には深切な人が澤山ありますからね。

上野　それは左樣かも知れん。いや、その深切で思ひついたが、あんたに一つ御願ひしたい事があるが……

お花　何ですか。

上野　實は伏見の山田の惣領娘を、今度わしが勸めて東京へ出すことになつたのだがね。

お花　それが如何したと仰有るの。

上野　どうせ、あんたも近々に東京へ還られるのだらうが、どうです、その娘を一つ連れて行つて世話をしてやつてはくれませんか。

お花　わたしなんぞに、そんな事が出來るものですか。

上野　出來ないことがあるものか、あんたの身分ならわけもない事だ。

お花　（やゝ興奮して）　わたしの身分？　如何してわたしの身分がお解りになるの？

上野　そりあ容子で分るさ。わしなぞは左樣いふ事には極くらい方だが、あんたの服裝を見ただけでも、立派な生活をして居られるといふことは能くわかりますよ。如何です、奥樣、左樣お思ひになりませんか。

三代子　ほんたうにね。

上野　あんた、覺えて居るだらう、山田の娘、夏代と云ふ子を。

お花　覺えてますよ。好い娘柄でしたわね。

上野　もう、立派な娘になりましたよ。……だから、ひとつ東京へ伴れて行つて世話をして下さい。いゝでせう。

お花　東京へ――……東京へやれば何か好い事でもあるんですか。

上野　あんたのやうに、七年目に錦を飾つて來られゝば、それでいゝんです。

お花　錦を飾つてゞすかね。……襤褸をひきずつてゞすかね。

上野　まあ、そんな謙遜には及ばないさ。兎に角伴れて行つて下さい。左樣すれば親たちも大變に安心しますよ。

お花　（上手杉戸の方へ來りながら）親御さんたちに苦勞をかける基になりますよ。

上野　そんな事のあらう筈はない。是非一つ助けてやつて下さい。

お花　だめですよ、わたしは東京が嫌ひなんですから。

三代子　まあ、（疑はしげに）あの、あちらでは、どういふ事を遊ばして在らしつたのでございます。

お花　（やゝ躊躇して）あの、タイプライタアをやつて居たのです。

上野　能く新聞に見える、眞個の新らしい女の職業ですね。それを山田の娘にも敎へてやつて下さい。

お花　若い女を東京へ連れて行く位なら、いつそ宇治橋から撞落してやります。その方がよつぽど深切なんですからね。

（お花、上手杉戸の内へ入る。）

三代子　（見送りながら）隨分妙な方ね。

上野　如何も不思議だ。あんな子では無かつたが。

三代子　あんなに冷酷な方ではなかつたんでございますか。

上野　一體口數は利かない子でしたが、溫かいとこのある女でしたがな。

博造　（上手杉戸の中より）三代さん、そこに居るのかえ。

三代子　はあ。

博造　（杉戸を開きて出て來り）兄さんがおまへに話したいことがあるといふんだがね……あ……先生……（思はず口を結ぶ、守之助つゞいて出で來る）

上野　どうも御邪魔しました。もう御暇しませう。

博造　まあ、好いでせう。先生、こつちは急用といふわけでは無いんですから。

上野　いや、左様しては居られない用事があつたんだ、では奥さん、どうぞ是非御出でを願ひますよ。

三代子　はあ、いづれ博造とも能く相談いたしまして。

上野　博造さん、では宜しく願ひます。ぢやあ左様なら。

三代子　左様なら。

博造　左様なら。（土間に下り、中央戸口より立去る上野を見送り、樞戸をしめてふたゝび圍爐裏の側へ來る）

三代子　まあお二人とも、變な顔をなすつて、如何したんです。

博造　三代さん、昨夜おまへにした話ね。

三代子　昨夜……

博造　僕あ、自家の事をまるで間違つて見て居たんだ。兄さんはお茶で金を殘してるこゝと思つたら、近頃は年々損ばかり續いて、借金の爲にひどく苦しんで居るんださうだよ。

三代子　まあ、お氣の毒ですわね。

博造　そこへもつて來て昨夜の火事と來たんだからね。おとつさんも兄さんも途方にくれてるんだ。

三代子　でも、お藤さんの話では保險金が千五百圓とか取れるといふ話でございましたがね。

博造　彼女は何にも知らないんだ。それに昨夜の火事は粗忽火らしいよ。

三代子　でも前の日の三時過ぎからは、誰もあそこへ行かなかつたつていふぢやございませんか。

博造　ところが、夜中におとつさんが行つて居るらしいんだ。（守之助不安げに博造の袖を引く）兎に角、保險金は出すといつても、受取れない關係になつてるんだ。それにだね。だん／＼聞いて見ると自家の家運が傾いたのは、われ／＼兄弟三人が學資やら、何やらに少なからぬ金を引出したのが原因で、今度春日井の家に取つて一番大事な茶畑が抵當流れにならうといふ情ない鍔際まで進んだのは、僕が名古屋の家を買ふ爲に貰つた、その金を拵へた祟なんださうだ。

三代子　まあ。

博造　かういふ話を聞いて見ると、僕も丸つきり知らない顔をして居るわけには行かない。斷然名古屋の家屋と土地とを賣拂つて……

三代子　而して女學校は如何なるんです。

博造　（苦笑して）如何なるものか、折角目的にして來た新築費も借りられず、おまけに自分の財産さへ手離さなければならない身の上となつたんだもの……

守之助　いや、わしはおまへにそんな事をさせたくはない。なにおまへからお金をよこしてもらはなくたつて……

博造　だつて九州からは斷られるし、外に金の出道はないぢやありませんか。

守之助　だから、おまへが知らない顏さへしてくれゝば、保險金が手に入らないものでもなからうから……

三代子　(興奮して)　兄さん、そんな情ない事を仰有るもんぢやありません。あなたも教育家を弟にもつて在らつしやるんですから、少しは高潔な心もちになつて頂きませう。(夫に向ひ)　わたしは決心しました、名古屋の家屋を賣つてしまつてこゝへ引込みませう。

守之助　え、こゝへ？

博造　よく云つてくれた。(兩人一緒にいふ)

三代子　こゝへ引込んで理想的な田園生活を送りませう。わたしは田舍の方が却つて好きなんですから。(さし組み來る涙をかくす)

守之助　三代さん、實に濟まない。おまへ方にこんな思ひをさせるよりは……

博造　もう、そんなことを聽く必要は有りません。(妻に向ひ)　われ／＼は年が若い。二三年經つてこゝの家政を整理したら、もう一度われ／＼の希望の遂行に着手するさ。

三代子　わたし、このまゝで澤山だわ。

守之助　三代さん、博造。(兩人の手を取り)　堪忍してくれ。

(三人三樣の心をもつて顏をそむけ合ふ、鷄の聲長し

——幕)

第二幕

春日井家の外庭

正面は春日井家の臺所、高き藁ぶきの建物の前に瓦葺の小廂つきたる下家あり。其下手寄りに前幕の臺所の入口を外面より見たる樞戸あり。それに隣りて櫺子窓あり。臺所の後には大なる欅の若葉母屋の屋根に覆ひかぶさりて、その左には白壁の土藏の正面、見物に向つて立つ。それより土塀、上手見物に近く大なる長屋門立つ。其前方上手には七五三繩を張りたる大楠あり。その下に小さなる稻荷の祠あり、あかき鳥居、赤き旗多く立つ。その前に石の手水鉢あり。夏の花むらがり開き、鳥の聲かしまし。

お藤は日あたりよき窓のほとりに張板を立て洗濯物をはりつゝあり。

三代子は質素なる服裝、赤き襷、白の手拭にて頭をつつみ、樞戸を開き出で來る。

舞臺に姿をあらはさぬ前、その聲まづ聞ゆ。)

三代子　いやです〳〵、もう誰がそんな事をするものですか、馬鹿々々しい。（お藤の前を通り、手水鉢の上へ身を投ぐるがやうに腰掛く）

三代子　あゝ馬鹿々々しい。もうつく〴〵忌になつてしまつた。

お藤　まあ、大變に不機嫌やな。如何おしやした。

三代子　だつて人が一生懸命にお茶を選つてれば、兄さんが側から口を出して、こんなに骨を入れては駄目だとか、屑が選れないとか、いろんな事をいふんですもの、誰だつて、はじめつから、そんなに巧くは出來ないぢやありませんか。

お藤　それもさうだすが、でも商賣ものだよつてな、お稽古がはりにされては、守之助さんだとて困りまつしやろ。

三代子　（やゝヒステリックに）お藤さんは兄さんの肩ばかりもつてるのね。此間も、お茶を摘んだら、古い葉を一緒につみこんだつて、わたしの摘んだのばかりは、他の人の摘んだのと一緒にしてくれなかつたぢやありませんか。あゝわたし、名古屋へ歸りたいわ。

お藤　まあ、そないに怒らんとよろしいがな、日本一と云はれる御茶師の春日井だよつて、古葉のまじつたお茶は製されまへんがな。守之助さんだてゝ、腹は綺麗な人なが、運が惡うてする事がみな逆になつてるよつてな。ちつとは痛も立てまつしやろ、まあ、まあ、あんたも折角こゝへ引込むと決心したもんやよつて、そんな短氣は起さんとおきなはれえな。

三代子　でもわたしには、こんな仕事は如何しても向かないらしいんですもの。それにもう一つ餘りだと思ふことがあるの。

お藤　そりや何や。

三代子　それあ、わたしは慣れない仕事だから、不器用でせうけれど、これでも自家の爲だと思ふから一生懸命なのよ。それをあのお花さんね、自分の生れた家でありながら、まるで横のものを縦にもしないわ。

お藤　まあ〳〵人の事などはほつときなはれ。わしだつてこゝの家へ手傳ひに來てから、もう三年にもなるが、その間に錢一文、手拭一本貰ひはしめへん。それでも守之助さんがあゝいふお人だよつて、あゝ氣の毒な身の上やと思ふと、自分の事なぞは忘れてしまうて、一生懸命に盡す氣になりますがな。

三代子　だつて、あなたは兄さんと約束して居るんでせう。

お藤　あら、そんなあほらしい。

三代子　あるわ、何故早く結婚しないの。

お藤　（恥かしげに）身代がだん〳〵曲つて來るに、そんなのんきらしい事は出來んというてな、守之助さんが如

何しても開きなはらんのだつせ。（三代子の手を取り）三代子さん、守之助さんは好い人だすよつて、可哀相だと思つてやつておくんなはれえな。

三代子　わたしお藤さんに同情するわ。みんなで早く家政を整理して、あなた方を結婚さして上げませうね。

お藤　（いよ〳〵顏を赧らめ）わしなぞは如何でも構はんけれど、守之助さんがお氣の毒だすよつてな。

三代子　それにしても、お花さんは如何いふ氣なんでせう。

お藤　どういふ氣云うてな。

三代子　今朝もおそく起きて、黄檗へ行つて來るつて出かけてしまつたの。今日はお茶選りで忙しい事を知つてる癖に。

お藤　なるほどな。

三代子　それに先のうちは、いろ〳〵手傳もしてくれたんですけれど、近頃はもうちつとも……

お藤　あの人は病氣だつせ。だからまあ、堪忍してやんなはれ。

三代子　わたしだつて身體が惡いんですわ。わたしの方がずつと惡いかも知れないわ。

お藤　でもあんたは左樣やつて居られるけれど、あの人は餘程氣分が惡いのだつせ。何やらこの二三日は少し變なところが見えるやうやないか。

三代子　左樣いへば、此四五日といふもの、ちつともわたしには口を利きませんよ、それに昨夕は……（俄かに口ごもる）

お藤　昨夕なんぞありましたか。

三代子　なあに何でもないんですけれど……終夜自分の部屋をあるき廻つて居たやうでしたよ。そのために、わたしも目が冴えて困つたんですの。折々泣いて居るやうでしたよ。

お藤　泣いて？……乾度人に打明けられない程の心配事でもあるに違ひない、いとしがつてやんなはれ……まああこつちは影になつた、張板をあつちへもつて行かならん。三代子さん、濟まんが一枚もつて來ておくんなはれ。

（張板を小脇に、張物を入れしバケツを携へて下手に入る。三代子は不平らしき顏しつゝも、張板を重げにかつぎ下手へ入る。

上手の門の外より、友右衛門に扶けられつゝ博造入來る。

友右衛は筒袖尻はしより、煙草入を腰にさす。博造はズボンにシャツの兩袖をまくり、麥藁帽子をいたゞき、色靑ざめて呼吸せはし。）

友右衛門　（博造を縁臺におろし）やつと自家へ來た。今床を取らせるから、まあ、こゝへ腰をおかけ。

博造　おとつさん、もう大丈夫です。こゝに居る方が却つてせい〳〵します。

友右衛門　いや、さうでない、これ花……三代子……お藤は居ないか。

（また楓戸の音、三代子あわてゝ下手より入來り、博造の容子を見て。）

三代子　まあ、如何なすつたの。

友右衛門　なあに、ちよつと眩暈がして卒倒しかけたでな……あの、あつちへ床を取つて……

三代子　あのお醫師さまでも……

博造　なあに、それには及ばない、もう大丈夫だ、水……一杯水をくれ。

友右衛門　臺所の戸棚に燒酎の罎があるから、あれを持つて來て呑ましてやつてくれ。

（三代子あわてゝ戸の内に入る。楓戸のあく音す。）

博造　お父さん、もう大丈夫です、御心配をかけましたね。

友右衛門　そんな事は如何でもいゝが。

（楓戸のしまる音。三代子燒酎と水とを持來る。）

友右衛門　ど、どれ（燒酎に水をわり）さ、之を一杯呑んで御覽、ぢきに元氣がつくよ。

三代子　如何したんで御座います。怪我でもしたんではないんですか。

友右衛門　なあに、少し疲勞が出たところを、日に照りつけられて、かあつとして來たらしいんだ。

三代子　まあ、無理なんですね、この人があんな仕事をするのは。

友右衛門　全くだ、小兒の時から、爲つけない事なんだからな。

三代子　眞實ですわ。あなた、あんな野良仕事なんぞ爲なくたつて、あなたに適當な仕事は、外に澤山あるぢやありませんか。

博造　今頃そんな事をいひ出したつて詮方があるものか……おとつさん、直ぐあとから行きますから、あなた一足さきへ行つていたゞきませう。彼の畑だけきめてしまひませう。

友右衛門　けふは、もう日向へは出ないが宜い。小島ケ崎の幸作の悴でも頼めば、結構けふ中にきまりがつくから。

博造　人なんぞ頼むにあたりません。もう三十分も經てば大丈夫ですから、後から行きますよ。

三代子　だつてそんな輕はずみな……

博造　大丈夫だよ、僕だつてそんな弱い人間ではない。學校時代には隨分烈しい運動もやつたものだ。

三代子　運動と百姓仕事とは違ひますわ。

博造　僕はなんでもまた出かけて行く！

友右衛門　よし〳〵、それではわしは一足さきへ行つて居るから、自分の身體に聞いて心もちがよかつたらやつておいで。

（友右衛門不安げに立去る。）

三代子　あなた、本當に大丈夫なの。

博造　もう何ともありあしない。

三代子　氣をつけて下さらなくちや困りますよ。あなたには、こんな事をするのは最初から無理なんですからね。

博造　だつて僕は百姓の子だ。

三代子　でも教育が違ひますわ。人を作る人と、お茶を作る人とは、身體も心も違ひますからね。

博造　人が違ふ？

三代子　わたしたちは、矢張都で仕事をする人間だつたのですわ。

博造　なに？

三代子　わたし此間から、あなたに云ひ出さう〳〵と思つて居たんですがね。わたし、もうつく〴〵百姓仕事は忌になつてしまひましたわ。

博造　しかし慣れゝば何でもないよ。

三代子　いつまで經つた所で、慣れやあしません……わたしたちには一生かゝつたつて慣れる時が來るものですか……それに別に慣れようとも思ひません。

博造　ぢやあ、三代さんは此家が忌になつたのか。

三代子　えゝ！

博造　それでは、あんまり倦つぽ過ぎるぢやないか。

三代子　倦つぽいんぢやありません、最初から間違つて居たんです。

博造　なに？

三代子　わたしは田園生活といふ幻影に欺されてゐたんです。宇治といふ優しい名に、自分勝手な憧憬をもつて居たんです。けれど田園生活が現實になつてわたしの前にあらはれたら、わたしは其きたなさに堪へられなくなつたのです。歴史といふものが強い色彩でわたしたちの目をくらました宇治といふ名前も、實際が分つて見ると、わたしの心をつなぎとめる力はなくなつてしまつたのです。

博造　（思ひ入つて）では三代さんはこゝを出ようといふのか。

三代子　（決然と）え、左様です。

博造　併しわれ〳〵はこゝを出た處で、何處へも行くところが無いぢやないか、名古屋で折角作つた地位は棄てゝしまふし、地所も家屋も賣つてしまふし、縣知事や一部長などまでが心配してくれた女學校の方もたゞめちやめちやにして、こゝへ引込んでしまつたのだから、今更何處へだつて顔出しがなるものか。三代さん、僕も三代さん

の苦しいのは、そりあ察して居る。併し悪い亭主、悪い親を持つた因果だと思つて、どうぞ諦めてくれ。えゝ、これが二人の運命なんだから。

三代子　いゝえ、これは二人の運命ぢやありません。わたしたちがあの時、こんな道を取つたのは、田園生活といふ表面の興味に目が眩んで、その眞相を味ふ事の出來なかつた代償なんです。わたしたちは生活といふものを、まゝ事見たやうに觀察して、わたしたちの力でこゝの家運を回復しようなどと、馬鹿々々しい事を考へたのが間違ひの種だつたのです。

博造　しかしもう斯うなつてしまつた以上、外に仕樣は無いぢやないか。

三代子　ありますとも／＼。わたしたちは又名古屋へ歸るんです。

博造　歸つて如何する？

三代子　もう一度二人で教育に從事するのです。

博造　併し誰も相手にしてはくれないよ。

三代子　しますとも。

博造　誰が？

三代子　妾は一週間ほど前に、一部長の奥さんのとこへ、目下の窮狀を訴へてやつたのです。そしたら先刻返事が來ました。

博造　何、何といつて？

三代子　丁度愛知高等女學校の教頭が洋行する事になつて、その後任の選擇に困つて居るところなんださうです。だから若し春日井さんが來て下されば、大變に好都合だつて返事なんです。

博造　併し日高の奥さん一人の力で、そんな事が決定されるものか。

三代子　あなたは、如何してさう何でも悲觀してしまふのでせう。此事はね、一部長も、縣知事も、校長も、みんな贊成なんで、つまりこつちの念を推して來たのですわ。

博造　うむ……しかし僕は自分一個で女學校を立てるなんて大きな事をいつておきながら、今更大澤の空椅子を覗ふなんていふのはね。

三代子　まあ、あなたにも似合はない。わたしたちの最後の目的は、人間を作るにあるんぢやありませんか。人の立てた學校だつて、自分の立てた學校だつて、人間さへ作り出せば、それで好いぢやありませんか。

博造　それはまあさうだがね。併しおやぢや兄貴が、こんな憐れな生活をして居るのに、僕たちばかり紳士の生活をするには忍びないからね。

三代子　あなたはまるで理性を失つておしまひなすつたのね。おとうさんや兄さんがこんな憐れな生活をして在ら

つしやるにつけても、切めてあなたゞけでも立派な人格の人間となつて、あの人たちを救つて上げなければならないぢやありませんか。

博造　女學校の教頭ぐらゐでは、とてもこゝの家運を挽回は出來ないからね。

三代子　あなたが此家に居たところで、やつぱり如何もならないぢやありませんか。其上にあんな詰らない事のために精力を消耗してしまつて、自分の發達も出來なくなる。隨分馬鹿げ切つてるぢやありませんか。

博造　三代さんはなか〳〵野心家だね。

三代子　えゝ野心家ですとも……併し私の野心は、自分のための野心ぢやありません。あなたの爲の野心です。あなたは宇治で茶を作つてゐるには、人間が大き過ぎます。

博造　それなら、三代さんはこゝへ引込むと極めた時に、何故今の樣な事を云つてくれなかつたのだ。男が一旦かうと極めた事を……

三代子　世の中は進歩します、人間ばかりが同じ所に止まつては居られません。

博造　（沈思の後）よし、ではもう少し考へさせてくれ。

三代子　あゝ有難い！　ね、あなた、今こゝで苦しんでるだけ苦しんだら、どんな事でも、成らない事があるものですか。

博造　うむ、教育事業のために、卒倒するまで、奮戰しようかな。

三代子　どうぞさうして下さい。それでは妾、大抵よさゝうだつて返事を出しますよ。

博造　さあ、それはな。

三代子　はつきりなさいな。あなた、あつちへ行きませんか。

博造　もう少しこゝに居よう。

三代子　さう。

（三代子樞戸を開き退場。博造身に浸む物思ひに舞臺を上下す。鳥の聲のどか。お花やゝ派手なるセルの單物姿、手にパラソルをもち、上手門より入り來る。）

お花　兄さん、もう好いんですか。今おとつさんに聞いたもんだから、わたし急いで歸つて來たのよ。

博造　有難う。もう大丈夫だ。

お花　でもまだ顏色が惡いわね。慣れない無理な仕事をするからだわ。

博造　うむ、百姓仕事なんてものは、誰にでも譯なく出來ると思つたら、如何して仲々難かしいものだ。僕にはとても續きさうもない。

お花　わたしは最初から左樣だらうと思つて居たの。

博造　僕も春日井の家運を回復するまでは、おとつさんや

兄さんを助けて、鋤鍬をつかまうと決心したんだが、此分では僕の方が先に倒れてしまひさうだ。だから……

お花　こゝを逃げ出さうといふの？

博造　さういふ譯ではないが……此分では遠からず阿父さんを路頭に迷はせなければならないだらうと思ふとね。

お花　それは大丈夫よ。實は馬鹿に耳寄な話があるの。今そこで兄さんにも阿父さんにも話をして來たんですがね。

博造　耳よりな話！

お花　えゝ。馬鹿にいゝ話なの。實はわたし自家の容子を見るに見かねて、中の兄さん――友兄さんの許へ手紙をやつたんです。

博造　おまへはあの人の居るところを知つてるのか。

お花　まあ、お聞きなさい。すると深切ぢやありませんか。二千圓を銀行爲替にして送つてくれたの。

博造　二千圓！

お花　その上にね、又先になつたら、少し位は送つてよこしてもいゝといふの。

博造　では、友兄さんでも、全然自家の事を思はないわけでも無かつたのだな。それにしても兄さんは何處に居るんだね。

お花　（やゝ狼狽して）えつ……

博造　矢張り日本に居るのか？

お花　えゝ！

博造　矢張り東京に居るのか？

お花　えゝ、横濱に居るんです。でも誰にも打明けてくれるなといふんです。

博造　横濱で何をして居るんだ。やつぱり西洋人と商賣でもして居るのか。

お花　何をして居たつていゝぢやありませんか。わたしも先だつて、一寸途中で逢つただけなんですよ。

博造　それほどの深切がありながら、あの人は何故自分の生れた家へ、今まで手紙一本よこさなかつたんだらう。

お花　何か、大きい兄さんに感情を害してる事があるらしいの。それに自家がこんなにまでなつてるとは思はなかつたからでせう。

博造　何しろ結構だつた。實は三代子がね、もう如何してもこゝに居たくない。もう一度名古屋へ行かうと云つて聞かないのだ。が、自家の今日の有様を見捨てゝ外へ行くといふのは、餘り冷酷な樣だからね。如何しようかと思つて躊躇して居たんだ。が、こゝで二千圓も入れば、畠の方は大丈夫だし、小な焙爐場位は新らしく建てられない事もあるまい。では僕はいよ／＼名古屋へ歸るとしよう。

お花　あら、いけない事ねえ。わたしも今日東京へ歸らう

と思ふの。

博造　歸る？　東京へ？

お花　えゝ！

博造　だつて汝は、東京が忌だから此方へ歸つて來たんぢやないか。

お花　えゝ、此處へ來るまでは左樣思つて居たんですけれど、どれ、住み慣れた處は矢張いゝのねえ。

博造　しかし、おまへが行つてしまつては、おとつさんが可哀さうだ。それに汝はこゝへ來てから、たつた三週間にしかならないぢやないか。

お花　だつて、もう忌になつたんですもの。

博造　女つてものは、如何してみんなさう倦つぽいものかな。

お花　そんな事は如何でもいゝから、この間兄さんに預けて置いた鞄の鍵を頂戴な。

博造　鍵はあげるがね、……如何してもこゝが忌なのか。

お花　（悲しげに、しかも情熱をおしかくして）　えゝ。住むなら賑かな處の方がいゝわね。

博造　では、おまへの宿所を聞いておかう。僕たちも名古屋へ歸つたら、直に手紙をやるから、おまへも始終手紙をよこしてくれ。

お花　えゝ。

博造　矢張先に居たとこへ歸るのかね。

お花　えゝ。

博造　おまへは此節妙に鬱いで居るものだから、ついそのまゝにして聞かなかつたが、一體今まで東京では何處に居たんだ。

お花　えゝ。京橋の方に。

博造　やつぱり京橋區かね。

お花　えゝ。

博造　京橋區はどの邊だね。

お花　えゝ、新……新富座の近所なんです。

博造　新富座の近所？　では新富町か。

お花　そんな事はどうでもいゝぢやありませんか。さあ支度をしなければならないんですから早く鍵を下さいな。

博造　まて、待て。それに何もさう俄に立つ必要もあるまい。どうせ僕たちも二三日中には名古屋へ歸るんだから、その時一緒に立たうぢやないか。

お花　いゝえ。わたしは思ひ立つたら、もう我慢のならない性分なんですからね。今夜の夜行で立ちますわ。

博造　だつて阿父さんにも御相談しなければ……

お花　もう、して來たの。

博造　阿父さんは何ておつしやつた。

お花　（答へなし）

博造　喜びはしなかつたらう。
お花　怒つて居たわ。（獨語のやうに）人の氣も知らないで。
博造　誰だつて怒るさ！
お花　兄さんだつて、名古屋へ歸るんぢやありませんか。
博造　併し僕は立派に子としての義務を果して居る。自分の所有の家屋も土地も賣拂つて、今度は裸一貫で名古屋へ歸るんだ。
お花　わ、わたしだつて……
博造　汝は何をした？
お花　（思ひ返して）だつて妾は女ですもの。（太息を洩す）
博造　だから有形の財產で阿父さんに盡せとは云はない。せめて無形の心で阿父さんを慰めて上げろ。
お花　いやです〳〵、わたしはこゝに長く居たら、寂しい爲に死んでしまひます。
博造　では、おまへは東京で、そんな賑かな生活をして居たのか。
お花　（やゝ周章しつゝ）え、いゝえ。
博造　（ズボンの後隱袋より紙入を取出し、その中より一枚の寫眞版を引き出す）花、おまへ此藝妓を知つて居るか。（寫眞版をお花に示す）

お花　何、何してこんなものが……。（假に心をおちつけて）……いゝえ。
博造　それはね、東京の新橋で有名な文學藝妓といふんださうだ。
お花　（わざと平氣を粧ひ）へえ。
博造　それはね、僕たちがついこゝへ來たばかりの頃、三代子が隣から借りて來た、文藝俱樂部といふ雜誌の口繪にあつたのだ。
お花　（たゞ身をふるはすのみ、答なし）
博造　三代子は汝の顏を見ると、すぐ此寫眞版がおまへに相違ないと見てしまつたのだ。僕も最初には信じなかつたが、だん〳〵おまへの擧動や言語などに注意して見ると、おまへはどうも普通の婦人らしくない。勿論僕などはさういふ階級の婦人の事はよく分らんが、兎に角おまへはタイプライタアを職業として居たといふに拘らず、あんまり英語は分らんらしい。三代子が英語の話しをしかけると、しきりに避けるやうにして、近頃ではまるで口も利かなくなつた。どうも不思議だと思つて居ると、今無暗と自分の宿所をかくす工合といひ、うつかり口走つた場所は新橋か新富町か知らんが、兎に角さういふ醜業婦の巣窟らしい。それ等から結論して見ると、どうもおまへは正しい職業の婦人として、世に立つて居るとは

思へない。如何だ花、僕の觀察が間違つてるか。

お花　(たゞ涙を拭ふのみ、答なし)

博造　花、僕は何でもおまへが醜業をして居たといふのではない。が、若しさうであるのなら、僕はおまへを憎む、おまへのやうな姉妹を持つた事を、此上もない恥辱だと思ふ。

お花　(しづかに首を上げ)　なぜ、藝妓職業はそんなにいけないものなんでせう。

博造　おまへはもう、それが分らない程に墮落して居るんだ。藝妓だの娼妓だのといふ職業は、人間のする職業ではない。

お花　何故でせう。

博造　いふまでもないぢやないか、自分の節操を賣つて男子の玩弄となり、しかも自分でその身の淺ましさが分らない、……それでもおまへは普通の人間だと思つて居るのか。これ、花、僕はこれでも教育家だぞ、あらゆる人間に、人間の進むべき道を教ふる教育家だぞ。僕の妻もまた僕を扶けて、共に子弟を教育して行く女流教育家だ。僕たちはこれから再び愛知高等女學校の爲に、その教頭となつて、世の婦女子に賢母良妻となるべき教育をするのだ。その人間の妹が、婦人たる資格をさへ失つた藝妓になつてしまふとは何事だ。若しそんな事が世間に知れ渡つたら、僕の地位にも關係して來るではないか。

お花　(屹と顏を上げ)　兄さん。それではあなたは、御自分の地位を失ふのがおそろしい爲に、藝妓を妹に出來ないと仰有るんですか。

博造　何を生意氣な、僕は兎も角も……阿父さんがこの事をお聞きになつたら、どんなに殘念がるか知れやあしない。おまへはどうも……

お花　(しづかに)　でも、わたしが藝妓にならなければ、あなたも名古屋へは歸れなかつたかも知れませんよ。

博造　なに？

お花　はい、今申上げた二千圓ね。

博造　それが如何した。

お花　あれは妾が身賣の金なんですよ。自分の節操を賣つて男子の玩弄となる事を甘んじたゝめに出來た二千圓なんですよ。

博造　では友兄さんが送つてくれたといふのは……

お花　嘘なんです。

博造　おまへはなんだつてそんな嘘をつくんだ。

お花　あなたのやうなわからずやが、屹度わたしを止めるだらうと思つて。

博造　(憤然として)　わからずや……　(思ひ返し)　いや、今はそんな言咎で爭つて居るべき場合ではない。が、花、

阿父さんにしろ、兄さんにしろ、そんな汚らはしい事で手に入つた金を、快くつかふだらうと思つてるのか。
お花　水に沈むときは、藁にだつてつかまるといふぢやありませんか。自家もこの位火の車では、もつと汚ない金でもつかふかも知れませんよ。
博造　うむ！
お花　兄さんあなたは今、藝妓の事を、大變に惡く仰有いましたがね。藝妓にも一からきりまでありますよ。成程藝妓の中にも、自分の我儘がしたかつたり、唯目の前の榮耀がしたかつたりして、うか／＼その日を送つて居る人もあります。しかし大抵は自分から望んで、自分の節操を賣つてるんではありません。自分からして男子の玩弄になつてるんではありません。みんな涙の上に白粉を塗つて、酒と一緒に苦い涙を呑み込んで居るのです。暢氣らしい唄の文句は、虐げられた女の呪ひの聲です。陽氣な三絃の音は、かよわい女の胸の響です。しかし左樣してまでも、あんな商賣をして居なければならないのは何の爲でせう。親の爲です、義理のためです。境遇のためです。
博造　併し、おまへはそんな親を持つては居なかつた。誰にも義理はなかつた筈だ。
お花　いゝえ、ありました。
博造　だ、だれに。
お花　自分が夫と思つた男のために。
博造　夫と思つた？
お花　えゝ、わたしは生涯の約束をした男の爲に、如何しても三百圓の金が入るので身を賣つたのです。
博造　而してその男は如何した。
お花　その金の爲に出世しました。而して私を棄てました。
博造　それで汝は默つて居たのか。口惜くはなかつたか。
お花　口惜しいとは思ひました。併しその人の庇蔭で男といふものに對して目が開きました。それ以來わたしは男に對する執着を絶ちました。而してたゞ面白をかしく世を渡らうと覺悟しました。もうそれ以來わたしは、自分の節操を賣らずに商賣が出來ました。男子の玩弄とならずに、男子を玩弄にして世を渡つて來ました。
博造　それが如何して、急に自家へ歸つて來る事になつたのだ。
お花　七年前にわたしを欺した男が、またわたしに歸つて來たからです。
博造　ど、どうして。その男はまた零落でもしたのか。
お花　いゝえ、今では文部省の内でも、幅の利く偉い身分になつて居るんです。あなた方のやうな小さな教育家は眩しくて拜めない程、えらい大政治家になつて居るんです。

博造　だ、だれだ。

お花　それは申し上げますまい。が、其人は妾が新橋一流の藝妓だとか、文學藝妓だとか云はれて居るのを見て、叉玩弄にする氣になつたのです。去年の暮から今年の春にかけて、それはそれは執拗くつけ廻すのです。わたしはそれで、すつかり人間といふものに愛想がつきてしまひました。あゝ藝妓をして居ればこそ――自分が世話になつて居るお茶屋さんに義理があればこそ、こんな不德な狒々のやうな馬鹿者にも蟲を殺して居なければならない。えゝ、いつそ、こんな商賣を止めてしまつて……かう思ひ出したら、久しくわたしの心の底に眠つて居た、故鄕といふものが目を覺しました。阿父さんやら、兄さんやらが、戀しくてならなくなりました。妾はお茶屋さんや、お友達がたつて止めるのも聽かないで、看板も世帶もそつくり抱妓の子に讓つてしまひ、自分の衣類から持物まで、綺麗に友達や抱妓に分けてやつて、手許に殘したのはあの鞄一つにまとまるやうに質素な衣類を少しばかり、わたしはそれとお金をたつた五十圓持つて、なつかしい故鄕へ歸つて來たんです。

博造　それほど悟つたおまへが、何だつてまた東京へ歸らうといふのだ。

お花　兄さん、わたしは此頃毎晩のやうに、厭な夢許り見つゞけて居るんです。

博造　厭な夢を？

お花　えゝ。おとつさんが借金を苦にして他のお金を盜んだ夢を。

博造　馬、馬鹿な。それは逆、逆夢だ。

お花　さうばかりも云はれません、此間上野先生から聽いたのですが、わたしがこゝへ着いた前の晩の火事も、自家中に火をつけた人があるらしいといふ村中の評判ださうですよ。たゞどこまでも自火だといふので、保險會社からお金を取らなかつた爲ばつかりで、自家から繩つきが出なかつたのだと云ふ事ですよ。

博造　あの上野なんぞのいふ事があてになるものか。

お花　嘘か、本當か知りませんが、此話を聽いた時、わたしは胸を刺されるやうな氣がしたんです。それからといふものは、妾は毎晩床の中で泣いて居ました。しまひには氣が狂ひさうになつて、夜中に座敷中をあるき廻りました。

博造　それにしても、如何しておまへは二千圓の金を作つたのだ。

お花　もう二度とふり向いても見まいと決心した東京へ――もとの主人へ手紙を出しました。これ／＼で親の爲に、もう一度稼ぎたい。せめて千五百圓貸して貰ひたいとい

ふ手紙を出しました。

博造　して、その主人といふ人は、手紙一本で二千圓といふ金を貸してくれたのか。

お花　兄さん。あなた方には人間でない樣に云はれて居るわれ〳〵の社會にも、あなた方の社會には分らない一種の道德がありますよ。三年前にわたしが、禮奉公までつとめ上げた時に、五百圓の金と看板を分けてくれたもとの主人は、一行の文句もかゝずに默つて二千圓の小切手を送つてよこしてくれました。わたし共のやつてる事は醜業かも知れません。犬猫に劣る事かも知れません。併し敎育のあるあなたの奧さんのやうに、一旦こゝの家政を扶けると大きな事を云つて居ながら、十日や二十日で辛抱が出來なくなり、また遠くへ逃げて行くやうなケチな料簡はもちません。わたしがこゝを出るのは、自分のためではありません。わたしはのつけから、自分なんてものを棄てゝかゝつて居るのです。

博造　しかし、そんな金で助けて貰つたつて、阿父さんも、兄さんも、嬉しいとは思ふまい。

お花　だつてこゝの家は、お金の性質なんぞを調べて居るほど、悠長な場合ぢやないぢやありませんか。若しわたしのお金が汚れたお金だとあとで分つたら、溝へでも投り込むが宜うござんす。わたしは自分の身體をそれ迄にして、阿父さんと兄さんを助けて上げたと思へば、それで澤山です。

博造　しかし、それは阿父さんも、兄さんも知らないんだらう。

お花　えゝ。兄さん一人の外には誰にも打明けません。しかし自分の心は能く知つて居ます。新らしい語でいふ自己滿足とやらが出來ればそれで澤山ですわ。

博造　併しおまへは、もう一度その方面で花を咲かせる事が出來ると思つてるのか。

お花　それは如何だか分りません。（愁然として）藝妓の盛りは短かいものですからね。（氣をかへて）こんな事をいつてゝ乘りおくれてはつまらない。兄さん、鍵を下さい。

博造　お花、僕はこの儘おまへを東京へやるわけには行かん、兎に角阿父さんと兄さんの歸るまで待つてくれ。

お花　二人にその話をしてお金がいらないと云はれたら、わたしの折角の苦心も水の泡になるぢやありませんか。それからね、兄さん。わたしは今要らないお金なら溝へ捨てゝもらへばそれで本望だといひましたがね、折角自分の身を棄てゝまで拵へたお金を蛔蟲の棲家にしたくはありません。後生ですから、どうぞ阿父さんと兄さんには、默りにしておいて下さいな。ね、いゝでせう。

博造　でも、それでは汝はつまらなさ過るぢやないか。一身を犠牲にして他人に功を奪はれてるやうなものだ。
お花　わたしはどうせ野の草の運命を持つて生れて來たのです、春が來ても花も咲かず、人に踏まれ通して、枯れてしまへばそれでいゝのです。（心をかへ）さあ、兄さん鍵を下さい。
博造　では如何しても行くのかえ。
お花　手紙一本で二千圓貸してくれた主人の爲には、一分の時間も惜しまなければなりません。
博造　お花、あゝ如何かしてやりたいなあ。
（鍵を渡しながら、兄妹手を取り合ふ。）
三代子　（家の裏にて）あなた〳〵。
お花　あゝ姉さんが來ます。さあ、悟られないやうにして下さい。
（樞戸を開き、三代子おのが書きたる手紙を手にして入り來る。お花と顔見合す。兩人無言、輕く目禮して、お花は家の内に入る。）
三代子　あなた如何なすつて、大變長くお花さんと話しをして在らしつたぢやありませんか。
博造　うむ、實は花も東京へ歸るといひ出したのでね。
三代子　さうら御覽なさい。誰だつてこんなところに永く居られるものですか。
博造　併しあれの東京へ歸る動機は、三代さんのとはまるで違ふよ。
三代子　まあ妙な事をおつしやるのね。どう違ふといふの。
博造　花は阿父さんや兄さんを救ふため、二千圓でまた身を賣つたのだ。
三代子　また……身を？　さうら御覽なさい。矢張醜業婦だつたのでせう。あの文藝倶樂部の女がさうだつたのでせう。
博造　いや、あれに對して醜業婦といふやうな侮辱を與へるのは氣の毒だ。あれの心は天の使のやうに淸い。僕は今まで人の皮相ばかりを見て徒らに人を罵り人をおとしめて居たが、社會はわれ〳〵の信ずる程單純なものではない。僕は自分が奉じて居た教育上の主義に、今といふ今疑ひを抱きはじめた。
三代子　（高笑して）あなたは直に動搖し出すのね。親の爲に身を墮落の淵に沈める、そんな事は封建時代の道德の餘弊です。わたしたちが婦人教育に盡瘁するのは、かういふ舊套な因襲から現代の婦人を救つてやるためなのです。どんな事があつても、婦人の節操を賣るといふことは罪惡です。恐るべき罪惡です。だから如何なる動機の下にも、醜業婦には同情するわけには行きません。
博造　そんな事をいふのは、お互に十分社會の奥底まで分

つて居ないためだ。もし僕たちが世相のどんぞこまでも知りぬいたら……

三代子　しつ、兄さんが歸つて來ます。もう議論は止しませう。

（守之助悄然として上手門外より入り來る。）

博造　兄さん、お花はまた東京へ歸るといつて居ますよ。

守之助　うむ、今當八から聞いた、一旦川へ飛込んだものは、濡れずに岸へ着けるものではない。好きにさせるより外はないよ。

博造　しかし阿父さんは？

守之助　阿父さんもあきらめ切つてる。あんな薄情な奴は、一刻も早く出て行つてくれゝば好いと云つて居る。

博造　では、兄さんにも阿父さんにも、あれの心がまだ分つて居ないんですね。あれは……

守之助　いやよう分つてる、あれの心には一滴の血もないのだ。

博造　そ。それは違つてます。あれは自分の身を犠牲にして……

（又楓戸を開き、お花東コートに信玄袋と風呂敷包、片手に洋傘をもち出て來る。お藤は鞄をもつて、共に正面入口より出で來る。）

お藤　守之助さん、お花さんは急に東京へ歸んなはるといやはるが、何ぞして止める工風はおまへんやろか。

守之助　いや。これの方から居たいといつても、もう置くこつちやあない。さあ、もう時間だ乘りおくれない中に早く行くがいゝ。

お藤　でも、わしは何やら名殘がをしうてなりまへんわ。それにお花はんは身體の加減も本當でないやうやからな、せめてもう二三日もな。

お花　お藤さん、さう云つて呉れるのはあなた一人限りですよ。お藤さん、あなたの同情は生涯忘れませんよ。

お藤　では如何しても行かなんならんのかな。では詮方ないよつて、せめて停車場までゝも送らせて貰ひまひよか。

お花　有難う、では濟みませんけれど、車のある處まで送つて下さい。

守之助　いや、車は門の外へ來て待つてる筈だ。

お藤　では、鞄だけそれへつけて、一緒に歩いて行きまひよか。

お花　（涙を拭ひ）有難う。（守之助に向ひ）兄さん、わたしもう暫らくお目にかゝれないでせうから、お別れに一つあなたにお願ひがありますがね。兄さん、あなた此お藤さんを貰つて上げて下さいな。（お藤顔を背向ける）あなたは此方の内助を受けてさへ在らしつたら、春日井家の再興はたしかですよ。どうぞわたしの一生のお願ひ

ですから、左樣して上げて下さい。お藤さんのやうな自分を全くすてゝ、人の爲にのみ盡すといふ婦人は、さう幾人もあるものではありません。

守之助　餘計な事をいふな。うちの苦しいのを見て後足で砂をかけて逃げ出すやうな獸が、何をくだらない、餘計な事を云つてるんだ。お藤を女房にするに汝の世話になると思ふか。

博造　兄さん、そんな事をいふもんぢやありません。あの二千圓だつて……

（お花博造の袖を引く。）

守之助　あの二千圓を友次郎が送つてよこしたのは、お花の力だと云ふのか。馬鹿々々しい、向うによこす義理がなければ、法律で責したつてよこすものか。おいお花、今度友次郎に逢つたら、兄も阿父さんもみんな大變に喜んで居たといつてくれ。

お花　兄さん、あなたあのお金が手に入つたのが、そんなに嬉しくつて。

守之助　汝の樣な薄情ものが、兄弟中にあると、友次郎の忠實が懐しくなる。

お花　わたし、それを聞けて滿足だわ。（博造を見かへる。博造は悄然と首を垂る）あゝわたし忘れて居た。（風呂敷包を開きて、中より絹の裾模樣と帶とを取り出し、お藤に渡し）お藤さんつまらないものですけれど、あなた御婚禮の時に、これを着て下さいな。之は妾が自分の生れた家へ殘すたつた一つの記念ですからね。

お藤　でも、こんな立派なものを！（守之助を見かへる

守之助澁面つくる）

お花　兄さんにはまたあとで御詫びをするとして、とにかく納めておいて下さい。その中にはわたしの心の分る時も來ますから。では兄さん、姉さん、左樣なら。

（兄弟三人に挨拶し、門のあたりに來かゝる。日漸く暗し、鐘の音。）

博造　（後から）お花！（手を握る）

お花　阿父さんはどうなすつたでせう。

守之助　目の黒いうちは、汝の顏は見ないと云つてるよ。

（云ひ棄てゝ家の中に入る）

お花　そんなにわたしを憎んで在らつしやるの。（思ひ切て）では皆さん左樣なら。

（お花は悄然と門外に出づ。博造夫婦お藤はお花をおくつて又門外に出づ。日全く暮る。汽笛の聲遠く聞ゆ。家の障子に灯影さして、やがて友右衛門が燈明を手にせる姿、闇の中にションボリと現る。微に時鳥の聲聞ゆ。友右衛門稲荷の詞に燈明をさゝげ默禱にふける

——幕。）

政子と頼朝（一幕）

人

北條の息女政子姫
其　妹　牧子姫
源　　頼　朝

時

治承三年の春の午後

所

伊豆の國北條

伊豆の國なる北條時政が館の庭園。花咲き亂れ、柑子累々と垂る。胡蝶飛び、鶯啼く。治承三年の春或日の午後。

政子姫の妹牧子姫、石にもたれて頼朝よりの戀文を讀み居る。無邪氣な其面には、一種の驚愕と嬌羞との色が浮んで居る。

柑子のしげみより政子姫が出で來る。その跫音に驚いて牧子姫はその戀文を袂に隱す。

それを目ざとく見た政子姫は、わざと心づかぬ樣に側へ來る。

牧子姫も心がつかない體でぢつと足下を見て居る。

蝶と鶯とは、此姉妹の心のたゝかひを知らぬ省で、長閑に飛んだり啼いたりして居る。

政子姫　（しばらくして）まあ、こんなところに何をして居たの。

牧子姫　（初めて氣がついたやうに）あら、お姉さま。

政子　さつきからこゝに居たの。

牧子　いゝえ。

政子　如何かしたんぢやなくつて。

牧子　いゝえ。

政子　でも、顔色が良くないやうよ。

牧子　（顔を撫でゝ）さうでせうか。

政子　まだ昨夜の夢の事を考へて居るんぢやないこと。

牧子　いゝえ、夢はお姉さまに買つていたゞきましたから、わたしもう氣になんかして居りませんわ。

政子　左樣！　それなれば結構だけれど……これからもね、決して隱し立てなんかしないやうになさいよ。わたし、どんな相談にでも乘りますからね。

牧子　（何やら操つたさうに）えゝ。

政子　いくらわたしの方でばかり氣を揉んでも、おまへさ

んが祕密にして居たのでは、如何にもなりませんからね。阿母さまはわたしとは生さない仲でおありになつても、あんなに大事にして下さるんですから、わたし如何なにでも、おまへさんの爲めに盡さなければなりませんからね。分つて、わたしのいふことが。

牧子　えゝ。

（とは言つたものゝ、流石に戀文を出す譯にも行かない。政子の方は初めて氣のついた樣に、牧子の袂に目をつける。）

政子　おや、これは何。

牧子　（袂の上に片方の袂を載せて）な、何でも無いのですわ。

（といふ中に政子は手早く其戀文を引出してしまふ。）

牧子　お姉さま、あら、いけません。

（政子は側の樹木を楯にして逃げる。牧子は涙ぐんで追ひかける。）

政子　（逃げながら）隱し立てはしない約束ぢやないの。

牧子　でも、それは。

（政子は逃げながら、拾ひ讀みして、聲を上げて笑ひ出す。）

政子　ハヽヽヽハ、ホヽヽヽヽホ。

牧子　（愈よ涙ぐんで）お姉さま、返して下さいな。

政子　だつておまへさん……ハヽヽヽヽヽハ。

牧子　（腹立しげに）隨分お人が惡いのね。何が、そんなにをかしいんでせう。

政子　だつて隨分面白い事が書いてあるのですもの。誰？こんな面白い手紙をよこした方は。

牧子　わたし知りませんわ。

政子　知らない。知らない人が、手紙をよこす筈はないでせう。

牧子　だつて、わたし眞實に知らないんですもの。

政子　だつて名が書いてあるぢや有りませんか。

牧子　（一寸返事に困つて）でも、わたしまだそこまでは讀んで見なかつたのですわ。

政子　（わざと皮肉に）では、わたしが代つて見て上げませうね。「朝より」。「朝より」……「朝」つて誰の事？

牧子　…………

政子　牧子さん、「朝」つて誰なの。

牧子　わたし、眞實に知りませんわ。

政子　では、誰が此手紙をもつて來たの。

牧子　…………

政子　（急に何事か思ひ當つたやうに、其目は輝き出し、不快らしい陰がさつと其額をくもらせる）あゝ、今しがた藤四郎盛長のやつが門から出て行つたと思つたら、あれ

は頼朝からの戀の使者だつたのね。道理でわたしの姿を見たら、こそ〳〵逃げて行つたわ。始終阿父さまの許へ來るあの男が、如何したのかと思つたら、まあ此文を持つて來たの。

牧子　(顏を赧らめて)　えゝ。

政子　(腹立しげに)　えゝも無いものです。まあおまへさんは隨分大膽な人ね。世の中から「世になし源氏」なんて侮辱されて居る、あの流人の頼朝などと交際して居るなんて。

牧子　あら、酷いわ、お姉さま。わたし全く見た事も無い人ですわ。

政子　ほんたうに。

牧子　えゝ。

政子　見た事もないのに戀文をよこすなんて。(戀文を讀んで見て)　成程、「まだ一度の逢瀨も候はねど……」とは書いてあるのね。あゝ　(急に態度を變へて)　牧子さん、おまへさん、口惜くはない。

牧子　(無邪氣に)　な、何がです。

政子　こんな侮辱をうけてさ。

牧子　侮辱を?

政子　ひどい侮辱ぢや有りませんか。まだまるで見た事も無い婦人に、こんな失敬なつけ文をするなんて。

牧子　左樣いへば左樣ですわね。

政子　(妹の腑甲斐ない態度に一層憤慨して)　左樣ですともね。伊豆の女はみんな意志の弱い、無智なものだと思つて居るのか知ら。北條の娘を伊東の娘などと一緒にされて堪るものか。

牧子　伊東の娘つて、あの八重姫つて方の事?

政子　えゝ、あの人を誘惑したのも、矢張この式だつたのでせう。

牧子　でもあの方は八重姫さんに棄てられたのだつて、その手紙の中に書いてありますよ。あの方を棄てゝ江間の四郎さんのところへお嫁に來るのですつて。

政子　まあ、何て嘘つきなのでせう。八重子さんの阿父さんに知れると、八重子さんも千鶴さんといふ息子さんも打ちやらかして、自分一人で又蛭が小島へ逃げて來たんです。あんな色魔つてありあしません。

牧子　まあ怖い!

政子　(牧子が烈しく驚いて居るのを見て、稍得意になつて)　わたしが早く氣がついたから好いやうなものゝ、全く危ない所でしたわねえ。

牧子　夢の祟りでは無いでせうか。

政子　それは如何か分らないけれど、兎に角何でもわたしに隱しだてをすると、覿面にかういふ事が起りますから

ねえ。

牧子　あら、隠したわけでは無いんですけれど。(政子に縋りつくやうにして) ねえ、お姉さま、わたし如何したらいゝでせう。

政子　如何つて。

牧子　あの人が返事を聞きに参りましたら、如何したらいいでせう。

政子　(わざと太息をついて) 困りましたねえ。

牧子　お姉さま、後生ですから、如何かして下さいましな。

政子　では、詮方がありません。夢を買つてあげた次手ですから、此手紙も買つて上げませう。

牧子　まあ、嬉しい事。(思ひ直して) でも、その為にお姉さまの御迷惑になるやうな事が起りはしますまいか。

政子　大丈夫よ。起つたところでわたしなら自分で如何かしますわ。ではこの手紙の代りに、阿母さまから頂いた唐綾の小袖を上げませうね。

牧子　まあ、あんな立派なお品を。

牧子　おまへさんに上げれば、阿母さまは却つてお悦びになるわ。

牧子　でもお姉さまはあの人に如何なさるお積り?

政子　これはね。(笑ひながら牧子に囁く)

牧子　(目を丸くして) まあ、わたしの積りでお逢ひなさるの。

政子　えゝ。さうして思ふさま侮辱してやるの。

牧子　でも、そんな事をなすつて、あとで困る様な事が起りませんか知ら。

政子　まあ、わたしに任せてお置きなさい。伊豆の女の眞實の價値を十分に思ひ知らせてやるから。

牧子　でも、彼方が色魔だとすると、何だか心配ですわね。

政子　では、わたしが誘惑されるだらうといふの。

牧子　あら、左様いふわけでは有りませんけれど。

政子　(後の方を見て) あら、あの木の下を通つて來るのが左様ぢや無くつて。

牧子　左様らしいわ。

政子　おまへさん、たしかに逢つた事が無いのね。

牧子　それは大丈夫よ。

政子　では、早く隠れて下さい。姉さんのつもりで威張つて行つて頂戴。(わざと科をつくつて) では、お姉さま、また後刻。

(牧子は笑ひながら上手へ去る。政子思はず微笑したが、やがて戀文を披げてさて種々なしぐさをして見る。結局戀文を取り上げて、それを頬にすりつける。)

(頼朝は徐かに樹の間を分けて入つて來る。が、如何切り出したものかと、しばらく政子を見て居る。)

(政子も顏を見る機會に困つて、ぢつと立つて居る。)

(櫻の花は無心に散つて居る。)

(二人はしばらく心の中の鬪爭をつゞけて居たが、たうとう頼朝が根まけをして手にして居た扇を落す。)

(政子は烈しく驚いたやうに、戀文を隱して二三歩あとずさる。)

(二人は顏を見合せる。しばらく間。)

頼朝　あなたは牧子姫でいらつしやいますね。

政子　(わざと嬌羞を含んで)　はあ。あなたは。

頼朝　わ、わたしですか。わたしはあなたのお手にもつて居て下さる、其手紙の送り人です。世にも憐れな流人の頼朝です。

政子　まあ、あの頼……(と云ひかけて、戀文の名のところを見る)

頼朝　あなたはさぞ怒つて居らしつたでせうね。

政子　(何顏を見ずに)　何故です。

頼朝　あんまり厚皮しい、無禮な奴だと思つてゐらつしやるでせうね。

政子　わたし、そ、そんな事は思ひませんけれど……

頼朝　では、如何お思ひになつたのです。

政子　(恥かしさうに)　あなた、なぶつて居らつしやるんでせう。

頼朝　そ、それは飛んでも無い事です、わたしは衷心から、あなたをお慕ひ申して居るんです。その手紙の一字一句は、悉くわたしの血と涙とで書いてあるのです。

政子　まあ、あんな事おつしやつて、此字は墨で書いてあるぢや有りませんか。ちつとも赤くは有りませんわ。(わざと無邪氣らしくいふ)

頼朝　(笑つて)　そんなに揚足を取るものぢや有りません。兎に角わたしは一生懸命なのです。眞劍なのです。

政子　噓ですわ。あなたは、わたしを一度も御覽になつた事は無いんぢや有りませんか。

頼朝　お目にかゝつた事はありませんけれど、しかしお噂は能くうかゞつて居ました。

政子　まあ。誰が、わたしの噂なんぞを。

頼朝　能く阿父さまのところへお使ひにまゐる盛長や、それから近ごろ御懇意にして居るお兄いさんなどから。

政子　(ちよつと思ひ違へて)　兄から?

頼朝　お兄いさんでせう。あの義時さんは。

政子　(少し狼狽して)　あ、そ、左樣です。兄はさぞ惡口を申して居りましたでせう。

頼朝　如何して〳〵、お兄さんは何時もあなたの御自慢ばかりです。姉の政子はいやに怜悧ぶつて、それあ意地の惡い女だが、あれは又正反對に心のやさしい……(政子も

さすがに苦笑する。それを頼朝は別の意味に解釋して）いや、あなたは大變にお姉さま思ひでゐらつしやるさうですね。それにこんな事を申上げて、お心地を悪くしては濟みませんでしたね。わたしも他人の悪口をいふことは嫌ひな方ですが、お兄さんの仰有つた事を、つい正直に申上げたのは大失策でした。

政子　そんなに云ひ譯なんかなさらなくつても好うございますわ。どうせ姉は……

頼朝　いや、お姉さまの事はもう止しませう。兎に角お兄さんは、あなたほど女性らしい女性はないと云つておいでゞす。それにわたしのところの盛長なども、こちらへ伺ふ度毎に、あなたのお噂をして、まづ今の世の典型的女性だとさへ尊敬して居ります。

政子　まあ、わたし如何致しませう。

頼朝　わたしがこんな失禮な事を爲る樣になつたのも、實は二人の噂の爲なのです。わたしはたうとう見ぬ戀にあこがれて、こんな冒險を敢てする事になつたのです。

政子　でも本人にお逢ひになつて、二度吃驚をなすつたでせう。これでは見ぬ戀もさめておしまひなすつたでせう。

頼朝　ところが思ひは彌増すばかりです。實は――正直に申上げますとね。盛長の奴の話では、御風采の方は……失禮ですが……御品性に比して、多少の遜色があるなどといふ事でしたが、如何して如何して、わたしは都に居た時代でも、あなたの樣な美しいお方に、お目にかゝつた事は一度だつて有りません。成程伊豆は美人の産地で、既に一家の源三位頼政の北の臺となつた、菖蒲の前の如きも此近所の産れださうですが……

政子　それに伊東の八重子さんのやうなね。

頼朝　え、八重姫。あゝ、あの事はもう御承知なのですね。（少し萎れて）いや、あんな關係で分れた女に對して、こんな事をいふと男らしくない奴と、おさげすみになるかも知れませんが、あなたとはまるで程度が違ひますよ。

政子　（稍輕蔑した調子で）まあ、あなたは却々お上手ね。

頼朝　（少しく憤慨した樣子）お上手？　あなたは此頼朝をそんな人間と思つて居らつしやるのですか。これから生涯の苦樂を偕にしていたゞかうと思つて居るあなたに、心にも無い御世辭を使つて、其歡心を買ふ必要が何處に在ります。わたしは自分の感じたまゝを、たゞ率直に申上げたのです。が、そんな事はどうでもいゝ。それよりは其手紙に對する御返事を伺ひませう。

政子　ではきつぱりお答へ申上げます。わたしは御免を蒙ります。（と、勝ち誇つたやうにいふ）

頼朝　えつ。そ、それは何故です。

政子　わたしは伊東の八重子さんの樣な目に逢ひたくはあ

りませんからね。

頼朝　わたしがあの人に何をしたといふのです。

政子　御自分の身體の危險ばかりおそれて、妻も小兒もはふり出して、逃げ出してしまつたのは何人でしたかね。

頼朝　（いよ〳〵恐然として）そ、それは違ふ。小兒は不意に殺されてしまつたのです。女は一緒に逃げようと云つても承知をして吳なかつたのです。いや、それどころか女は父に壓迫されると、また他へ嫁に行かうといふのです。だから今日になつて見ると、わたしの方が棄てられた形です。併しわたしはそれを殘念だとは思ひません。伊東一家から棄てられた事は、わたしの爲めには寧ろ幸福だつたのでせう。あの人たちに何時までも好意をもたれて居たら、あなたといふ理想の美人に、如斯してお目にかゝる機會は無かつたでせうからね。

政子　（顔をしかめて、吐き出す樣に）色魔ッ！

頼朝　（驚いて）えつ、何、何ですつて。

政子　強ひて歡心を買ふ必要が無いと云つて居る口の下から、もうそんな心にも無いお世辭を使つて居るぢやありませんか。だから世間ではあなたを色魔だと云つておそれて居るのです。

頼朝　（急に笑ひ出して）わたしが色魔ですかね。成程、正直に心の思ふまゝを喋舌る人間を色魔といふのですかね。それならわたしは色魔中の色魔に相違ありません。併しそれは別問題です。それよりはわたしの希望に對する御快諾の語を伺ひませう。

政子　（少し力抜けがしながら）兎に角わたしの父もなかなか頑固ですから、八重子さんの阿父さんと同じ樣な事を爲ないとも限りませんからね。

頼朝　（冷然として）いや、それなら御心配に及びません。

政子　如何してゞす。

頼朝　あなたは今の阿母さまの眞實の御嬢さんですね。たしか左樣でしたね。

政子　えゝ、左樣です。

頼朝　ところが八重姫の阿母は、あの人とは生さぬ仲だつたのです、だから繼母どのはわたしの關係を烈く伊東入道にたきつけたものです。而して結果はあの騷ぎになつたのです。併し今度の場合では、わたしがお姉さんと妙な關係にでもなつたらいざ知らず。あなたとならば阿父さんも喜んで好意を表して下さいますよ。はゝゝゝは。

政子　（胸をでも刺されたやうに、急に顔色を變へて）まあ、まあ、あなたはそれで、わたしよりずつと美しい（と、云ひさして流石に躊躇したが、勇氣を鼓して語をつゞける）ずつと怜悧な姉には目も吳れないで、妹のわたしに白羽の矢をお立てになつたのですね。

頼朝 （少し狼狽して） いや、決してそんな……

政子 （疊みかけて） 口の先では、生涯の苦樂を倶にする妻を求めるやうな事を仰有つても、心の中では將來の保護をして與れる親を探して居らつしやるのですね。

頼朝 （愈よ敗亡して） と、とんでも無い……

政子 伊東の八重子さんと結婚しようとしたのも、彼方に愛情があつたのでは無くて、入道祐親といふ阿父さんの助けを受けたかつた爲めなのでせう。わたしにしても北條時政といふ父が無かつたら、あなたは見向いても見なかつたでせう。ね、頼朝さん、北條の娘はみんなお轉婆ですからね、そんな結婚政略の犧牲になる樣な、薄弱な意志をもつては居りませんよ。

頼朝 （尙辯解しようとして） しかし、わたしは……

政子 男らしくも無い。いつまでぐづ／＼云つて居るのです。もう直に日が暮れます。さつさと御歸んなさい。

頼朝 （烈しく威壓されたやうに、しばらくは默然として政子の顏を打戍つて居たが、やがて萎れ返つて） いや、では詮方が有りません、御暇致しませう。

（力なげに去りかける。政子は痛快さうに冷笑を含んで見送る。しばらく間。やがて頼朝は急に踵を囘して政子の方へ進み寄る。）

政子 如何なすつたの。

頼朝 その手紙を返していたゞきませう。

政子 （冷笑して） 成程ね、こんな證據が殘つて居ては、あなたの生涯の恥辱ですわね。

（頼朝に手紙を渡す。）

頼朝 （前とは打つて變つた一種の威嚴をもつて） 左樣です。こんなものでも天下を取つた時の邪魔になるといけませんからね。

（さつさと立去らうとする。と、政子は此語に胸を打たれたやうな感じがしてわれにもあらず後を追ふ樣に近寄つて。）

政子 な、何ですつて。

頼朝 頼朝の心はあなたなんぞには分りませんよ。（獨語のやうに） 身分の相違といふものは詮方の無いものだ。

（頼朝は尙去らうとする。）

政子 お待ちなさい。何ですつて。

頼朝 （尙獨語のやうに） 源氏は大將軍の家柄だ。北條は伊豆の片隅の田舍武士だ。

政子 北條は桓武天皇の後胤です。平家の一族です。天下の罪人などゝは格式が違ひます。

頼朝 なに、天下の罪人？

（頼朝は思はず聲をあらゝげて、政子の方へ突進する。が、政子は俄かに冷靜な態度に變つて笑つて居る。暫

らく間。頼朝は手にした戀文をびり／＼と引裂きながら、政子を見つめて居る。と、その紙片はいつか双手の間から落ち散つて居る。）

頼朝　あなたは全くわたしの理想の婦人だ。頼朝改めて御詫をします。

政子　（尙冷笑をつゞけて）　また御得意の御世辭ですか。

頼朝　いや、御世辭どころですか、わたしはもう眞劍以上です。正直に告白すれば、成程わたしには、强ひて婦人の歡心を買はうとする惡い癖があつた樣な氣がします。併しわたしの古い其缺點は、其儘文字に現はした此手紙と一緒に、此通り引ちぎつて、踏みにじつてしまひました。（紙片を踏みにじる）　さあ、新らしく蘇つた此頼朝に同情して下さい。

（頼朝は政子の兩手を堅くにぎる。政子は驚いて手を振はらふことも出來ない。）

政子　でも、父が二人の戀を許して吳れなかつたら如何します。

頼朝　あなたに千人の繼母があつて、阿父さまのお心をどんなに動かさうと、わたしにはそんな事は、もう何でもありません。如斯してあなたを、わたしの宿所へ連れて行くだけの事です。

（と、政子の手を握つたまゝ、引摺つて行かうとする。政子は其手を振はなして。）

政子　いけません、いけません。あなたは人違ひをして居らつしやるのです。

頼朝　人違ひですつて。（笑つて）　もうそんな事ぐらゐで誤魔化されるものですか。

政子　でもわたしは、あなたの考へてゐらつしやる牧子ではございませんよ。

頼朝　（思はず手を放して）　な、何ですつて。で、では、あなたは誰なのです。

政子　（笑つて）　誰だか、お分りにならない？

頼朝　（少し困つて）　それあ分りますとも、あ、あなたはお姉さまですね、政子姫ですね。

政子　（尙笑つて）　さあ、如何ですか。

頼朝　いえ、あなたは確かに政子姫です。政子さんです。若しさうでなかつたら……

政子　こんな御轉婆な筈はないと仰有りたいのでせう。でも、矢張わたしが妹の牧子でしたら……

頼朝　（尙心に迷ひながらも、强て勇氣を示して）　もうそんな事などは如何でも構ひません。あなたがあなたでさへ有つたら、それが姉さんであらうが、妹さんであらうが、縱令伊東入道の娘でも、淸盛の孫でも、わたしは喜んで結婚します。あなたこそはわたしが求めて／＼求め

拔いて居た理想の妻なのですからね。

政子　まあ、能くしら〴〵しくそんな嘘が云へますのね。あなたは日本一の嘘つきね。

頼朝　さあ、あなたの御弟子位にはなれるかも知れませんね。

政子　まあ。

頼朝　兎に角其點についても、あなたは鬼の女房に鬼神です。どうぞわたしを扶けて、わたしの事業を成功させて下さい。

政子　あなたの事業？

頼朝　（四邊を見て政子の手を握りながら聲を潜めて）　平家を倒して、天下を此四つの手に握る大事業です。

政子　（うつとり頼朝の顔を見て、さてその目を手に落し）　この四つの手に。

頼朝　十三の年に此伊豆の國へ流されて以來、二十年の間たゞの一瞬間も忘れた事の無いわたしの希望です。あなたが助けて下されば、屹度成功します。どうぞ〳〵わたしの願ひを適へて下さい。

政子　でも、あなたはたつた今、清盛の孫とでも結婚すると仰有つたぢや有りませんか。それで平家が倒せますか。

頼朝　それは[illegible]です。あなたがほんたうに清盛の孫だつたら、誰があんな事をいふものですか。

政子　だから、あなたは嘘つきだといふのです。

頼朝　えゝ。

政子　それに北條は平家です。父は平家の家來です。

頼朝　（すつかり閉口して）　成程、あなたは意地が惡い…

政子　どうせ、妹のやうにやさしくは有りません。

頼朝　（苦笑して）　あなたはその復讐のためにそんなに執(しつ)拗くわたしをお窘めなさるのですね。併しわたしにはあなたに反抗する力は有りません。どんなにでも窘めていたゞきませう。

政子　（さすがに氣の毒になつて）　あなた、ほんたうに後悔なすつて。

頼朝　（萎れて）　この通りです。

政子　では同情して上げませうかね。その代りあなたわたしに約束が出來て。

頼朝　（急に元氣を回復して）　えゝ〳〵、どんな約束でも。

政子　ではね、將來決して他の婦人に關係しないといふ…

頼朝　わけも無い事です。氏神の八幡大菩薩は勿論、三島、箱根、伊豆山の大權現達を證人に頼みませう。

政子　たしかに。

頼朝　無論です。

政子　（決心して）　父や母が何と云はうと、わたしは次の世までもあなたのものです。

頼朝　兵衛佐（ひやうゑのすけ）源頼朝、心から御禮を申します。

（頼朝は政子の手を取る。政子は心から恥かしさうに顔をそらしたが、急にわれに返つて。）

政子　あなた〳〵。

頼朝　えゝ。

政子　何時、平家追討の旗上げをなさるの。

頼朝　（周章（あわ）をくつて）如何（どう）も氣が早や過ぎますね。今やつと貴女と妥協が成立つた計りぢやありませんか。

政子　今度はそろ〳〵父の方をつけようと仰有るの。

頼朝　いや、決して、そ、そんな……

政子　（笑つて）父や弟はわたしが勸めて、屹度源氏の御味方をさせますわ。

頼朝　もう結婚政略は望みません。

政子　そんなに遠慮しなくとも大丈夫よ。（頼朝の方へ寄らうとして上手を見る）あら、妹が……

頼朝　（稍狼狽して）あゝ、あの方が妹さんですか。妹さんはわたしの手紙を御覧になつたのですか。

政子　見ましたとも、妹へおよこしになつた戀文ですもの。

頼朝　そいつは困つたな。如何しませう。

政子　（笑つて）まあ、わたしが何とか致しませう。あなたは早くお逃げなさい。

頼朝　ではまた。

政子　また明日ね。

（頼朝は心を殘して、來た道へと引かへす。政子姫はその後姿を見送る。牧子姫は上手より出で來る。）

牧子　お姉さま、あの人はもう歸りましたの。

政子　（やゝうつとりとして）あの人？

牧子　あの頼朝は。

政子　頼朝はね。

牧子　矢張色魔なの？

政子　あゝ、恐ろしい色魔よ。

牧子　でも、如何なすつて。

政子　（こみ上げ來る笑ひを壓殺しながら）わたしたうとう誘惑されてしまつたの。

牧子　まあ。

（牧子姫は呆れたる面色。政子姫は心の底より迸り出る幸福の感を、推隱すべく苦心する。落花、鶯の聲。）

――幕――

阪東武者（二幕）

人物

豐島太郎義近
畠山莊司二郎重忠
熊谷次郎直實
葛西平六秀重
西行法師
榛澤藤五（重忠の郎黨）
童金王
權内（義近の郎黨）
醫師
紫（義近の娘）

時

仁安のころ（今より八百餘年前）

處

武藏の國豐島の郷

第一

豐島太郎義近が館の一部、下手は奥に至るほど小高くなりて、その上に壯大なれども極めてプリミチーブなる建築あり。その入口の、建築に比して極めて小さきと、何等の裝飾のなきとより、建物の裏側なる事を察するに難からず、その建物の前なる丸石を重ねたる階段を下れば、一面の平地にて、その上手の方に、松の大樹と霜に飽ける楓の大樹と枝をかはし、その下に稻荷の社あり。鳥居の額には平塚大明神と記さる。家の後館をめぐりて、自然石を積み累ねたる胸壁あり。近世築城法の源流として建築學者の保存につとめたげなる形狀なり。胸壁と建物との間に一條の路ありて、とろ〳〵下りとなる。路の幅は「源平盛衰記」なんどに見えたる搦手のそれよりも尙狹く、徒立二人の辛うじて竝び歩むに堪ふるほどなり。胸壁を隔てゝ遠く武藏野の末に、甲信の山々と富士の高根とを展望し得べし。秋ふかく落葉滿地、斜陽さびしう澁柿の枝にかゝる。豐島が息女紫、胸壁にもたれつゝ、崖下を眺めふける。童金王、家の前なる筵の上にあぐらかきて、臼にて粉をひき居る。

紫　おゝ狩裝の人たちぢや。川を越えて來る。

金王　(身を起して紫の側に來り)　殿の御歸館ぢや。あゝ、大きな鹿ぢや。二人の勢子でさへ舁き切れぬやうぢや。わしも侍になつたら、森へいつて獵をするのぢや。
紫　そちは、もう程なう侍になれるではないか。
金王　わしは、今直ぐになりたいのぢや。
紫　その樣な出來ぬ事を願はずと、まあ精出いて、粉をひいたがよい。父樣の目に入つたらまた叱られようぞ。
金王　この樣なことは女子のする業ぢや、わしはこの樣な事をする年齡ではない。わしはもう少し大きうなつたら、こゝに居らぬのぢや。
紫　こゝには居らぬ？　何處ででもつと好い主取りをしようとか。
金王　殿は此上もないよい主ぢや。が、わしは奉公が忌なのぢや。
紫　でも、その樣な事をしたら、直ぐにつかまつて連れかへされうぞ。
金王　わしは海を越して彼方の國へ行くのぢや。さうすれば大丈夫ぢや。(云ひつゝ松の幹につけたる目標に指をあて)　まあ、これを御覽じませ。これは三月前にわしが刻つたのぢや。こゝへ頭がとゞくやうになつたら、此館を出てしまふのぢや。
紫　わしが父樣に密告けたら何としやる。
金王　それは大丈夫ぢや。あなたは美しい。美しい人はその樣な事はせぬものぢや。
紫　(笑ひつゝ)　それなら密告るのは止すとしようが、如何してそのやうな目標をつけたのぢや。
金王　これは熊谷の次郎どのが、身長の高さぢや。(手をのばして)　もう、これだけとゞくのぢや。(胸壁の方を見かへりて)「海もこゝからはさう遠くはない。この程も湯島へ用足しに行たら、すぐ側に見みた。
紫　海のむかうへ行たら何をしやる？
金王　武藝や兵法を習うて名ある勇士になるのぢや。そして源氏の棟梁となつて郎黨を澤山つれて歸つて來るのぢや。それからあなたを想うて居るあの熊谷の次郎どのを一刀に斬殺して、あなたをわたしの女房にするのぢや。
紫　でも、海の彼方にはこゝらよりは綺麗な女がたんとあるさうな。
金王　(當惑げに)　それは嘘ぢや。
紫　でも、それが眞實であつたら。
金王　(ちよつと考へて)　それならば、もう歸つては來ぬ。
紫　この子は、ほんに誠氣の少ない子ぢや。そなたはそれをあの法師どのに聞きやつたか。
金王　いゝえ、西行さまはとんとその樣な話はなされぬ。わしは熊谷どのゝ郎黨から聞いたのぢや。

紫　その様な事が父様の耳に入つたら、また折檻を受けうぞ。

金王　（澁面づくりながら）その中にはいんでしまふ。（崖下を見て）やつ、誰やら二人こちへ攀つて來る。一人は殿ぢや。

紫　して、尙一人は。

金王　木間（このま）がくれで能う見えぬ……おう、又森の外へ出た。あれは熊谷の次郎どのさうな……いや、左様では無い。あれは葛西の平六どのぢや。

紫　なに平六どの？

金王　あの和郎は三日の間に四たひわせられた。ほんに阿呆た和郎ぢや。あなたがあのやうな詠歌者（うたよみ）とやらを好くと思うて居るのか、自體阿呆ぢや。

紫　でも詠歌者といふものは、そのやうに賤しいものではない。それにあの人は都でも名を知られた詠歌者ぢやといふことぢや。

金王　なにか知らぬが、筆一本では戀敵の熊どのが鋭どい太刀先は受けれはせはしまひ。おゝ、殿は搦手の方へまはられた。粉の事はなにも云うてはくださるな。

（金王はあわたゞしく上手へ立去る。紫は打笑みつゝ、家の裡へ入る。）

（後の阪路より狩装のいでたちしたる豊島太郎義近と、華やかなる直垂して、面にも白きものなど塗りたる葛西平六秀重と相携へて、胸壁の前に上り來る。二人は尙みちすがら對話をつゞく。）

義近　われらとて風雅の道に志のないわけではない。が、幼い時から兵馬の中に身を置いて、文字三昧に遊るべき暇とては一日もなかつた。今更敷島の道もけうとい事ぢや。はゝゝは。

秀重　左様仰せられな。朝に道を聞いて夕に死するも可しとは、唐の聖も仰せられた。御身とはゆかりの深かつたげに聞く八幡太郎どのなんども、匡房の卿が後言（しりうごと）を聞いてから兵法にも和歌の道にも心を入れられた。それゆゑに、勿來の關の歌は弓矢の道よりも譽が高うなつた。それに……

義近　（家の方を見て）おゝ娘が來る。あれは女子ぢや。年齢も若い。あれにすゝめて下され。

（紫また家の奥より出て來る。）

義近　娘、葛西の若殿ぢや。わしが衣服かへるまで御もてなし申せ。

（豊島義近は家の裡に入る。紫は徐かに葛西秀重の方へ來る。葛西はおもはゆげに松蔭に立つ。）

紫　能くこそ、おいでなされました。

秀重　（勇氣を鼓して）あな、いとをしのわが紫の君、た

だ君が一本の故にこそ、この武藏野の千草百草、みな哀れとぞ見ゆるものを、いつ手につみて見せ給ふぞ。「けさは霞の立ちぞわづらふ」と詠ませ給ひし、源氏の君のそれよりも切なるわが戀路、何とぞふかくも汲み給ひて……

（秀重は都めきたる語づかひして、紫の手を握らむとす。紫は之をふりはらひ。）

紫　武藏野の草ふかい田舍で育つたわたしには、その樣な風雅な語はわかりませぬ。それに「戀」の「おもひ」のといふ事は、もうわたしの前では云ふまいといふ誓言を御立てなされたではござりませぬか。

秀重　「つれもなき人を戀ふとて山彥のこたへするまで歎きつるかな」さあ、これが私の心ぢや。この歎き聲さへ聞くまいとは、餘りにもつれない心ぢや。兎も角もまあ下に居て、わしの詠んだ戀の歌を聞いて下され。

（秀重は强ひて紫をかたへの石に腰打かけさせ、おのれも木の根に腰をおろす。夕風一陣落葉しげし。）

紫　その樣な都めいた事は、わたしなぞには分りませぬ。

秀重　いや〳〵、「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉となつた」とは、あの紀の貫之朝臣も云はれた。わしの心の誠を詠んだ歌が、あなたの心の誠に感ぜぬといふいはれは無い。わしはゆうべ、秋の夜長を一睡もせず百首の戀歌をよんだ。まづその一つは……

紫　（うるさげに）わたしはけふは頭がいたうて……

秀重　目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせるは此歌の德ぢや。あなたの頭痛もたちまち癒らう。そこで初めの歌はかうぢや。（懷ろより懷紙をとり出して讀む）「秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば、事ぞともなく明けぬるものを」

紫　待つてくださりませ。それではわたしとあなたともう逢瀨をたのしんで居るやうに聞えまする。滅多な歌をよんで下されては迷惑いたしまする。

秀重　その樣にきつうはいはれぬものぢや。人はもう二人の語らひが深い樣にいうて居る。「みちのくにありといふなる名取川、なき名とりては苦しかりけり」

紫　それほどに苦しければ、もう〳〵わたしの許へはお出でにならぬがよろしうござります。

秀重　「夢にだもあふことかたくなり行くは、我やいをねぬ人や忘るゝ」

紫　それはあなたのよみ歌でござりますか。古今集の中にある歌と能う似て居りますな。

秀重　どうしてあなたは古今集を。

紫　ゆうべ、この家へ泊られた行脚の法師どのから借りて見ました。

秀重　なに、行脚の法師？

紫　はい、西行といふ貴とい聖(ひじり)とやら。

秀重　なに、あの西行法師が！……かの人は今の世に稀れなる和歌の達人、わたしも是非御引合せが願ひたい。が、これは後の事、あなたも古今集に興を催ほす程ならば、わしとは此上もない似合うた妹と背(せ)ぢや。

紫　わたしは武士の娘ぢや。あの樣な和歌集とやらには興がない。

秀重　(懷紙を引むしり) おゝ、それ故あなたは熊谷の次郎が好きなのぢやな。あのやうな學もなく、才(ざい)もなく、人殺す業(わざ)の外には、何一つ知りもせぬ野獸(けもの)のやうな男子(をのこ)を、何處が好うて思ふのぢや。

紫　でも、あの人は武藏七黨の旗頭ぢや。打物取つてはならぶものもない勇士ぢや。

秀重　わしは幼ない時より上洛して、物學ぶ道にのみ心をひそめて居たが、さりとてわしも葛西清重が息子ぢや。弓矢の道とて熊谷の次郎ごときに劣らう筈はない。(俄かに身を起して) あなたさへわしを思うてくれるなら、今からは硯をくだき筆を折つて、打物業に身を任さう。

紫　その樣な事をしても、もう遲い。

秀重　それは戀の力を知らぬ人のいふ事ぢや。妹が嬉しき一言(ひとこと)には、鵜島の川波も片手もて堰止むる。紫どの、若しわしが熊谷の次郎をたゞ一打に倒しなば、あなたはたしかに……？

紫　(慌てゝ) いえ〳〵、わたしにはその樣な約束は出來ませぬ。

秀重　併しわしの胸一つに思うて居るだけはかまひますまい。

紫　それはあなたの心の儘でござります。

秀重　おゝそれ聞いて心が落ついた。かうと知つたら、役にも立たぬ歌よまう爲め、あたら日を無效(むだ)に過しはせなんだに。これでは貫之が古今集の序も怪しいものぢや。

(此時家の裡より、義近金王の襟髮をとりて、あらあらしく出で來る。)

義近　そちの身長がいくらあらうと、年齡がいくつにならうと、それをおれの知つた事か。女の手業でも小兒の仕事でも、おれのいうた事に違背はならぬぞ。(臼を見て) やい、まだ三分の一も粉を磨き遣らぬ。明後日は佛の日ぢやに何といふなまけ方ぢや。

金王　きのふ權内どのが手擒(てどり)にして來た狼に、餌をやりに行つたばかりでござります。

義近　狼の餌より自分の餌に氣をつけよ。おれの用を怠つたら、生涯その口へは餌がはいらぬぞ。

(金王は澁面つくりて、また粉を磨きはじむ。義近の怒りの聲に驚き、紫の側を離れて、俄かに胸壁の方に

赴き居る秀重は、この時崖を見つめつゝ。）

秀重　騎馬武者ふたり、郎黨とても引連れず、此方をさして急いで來る。

義近（絶壁に近づき）ほう、一人は傷を負うて馬上にも堪へぬらしい。旅の武士が不慮の怪我をしたと見える。われらを頼みに來たは淺からぬ宿緣ぢや。わしは迎へに行て來よう。娘、離亭を用意せえ。

秀重　わたしも御手傳致さう。

（義近と秀重とは母屋の方へ行く。紫は上手へ入る。）

金王（また臼をまはしつゝ）口を乾される前には海を渡つてしまふわ。

（西行法師母屋より出で來り、徐かに落日に對す。）

金王　おゝ法師どのぢや！　少し聽きたいことがある。

西行　どの樣なことぢやな。

金王　わしの殿はこの粉をわしに磨けといふ、が、これは女子の仕事ぢや。武士の業ではないと思ふ。法師どのゝ幼い時には、この樣な事はしはせなんだらう。

西行　主のいひ付けを守るのが、何より尊い事ぢや。それに粉を磨く方が、人を殺す業よりはずつと勝れた仕事ぢや。

（西行阪路を下り行かんとす。）

金王　法師どのは何處へ行かつしやる。

西行　秋の夕は淋しいものぢや。それ故ぢつとすわつては居られぬのぢや。

金王　法師どのにも淋しいといふことがあるものか。

西行　法師も人ぢや。

金王　子供も人ぢや。わしも行かう。粉はあすの事ぢや。

西行　おゝ來い〳〵。

（西行と金王と相伴ひて阪路を下る。畠山莊司二郎重忠は、義近の肩にすがり跛ひきつゝ、母屋より出で來る。）

義近　も一度こゝで休みなされ。（石に腰かけしむ）。醫師もやがて來よう。離亭の掃除も程なう濟まう。

重忠　不慮の災難から、いかい御世話に相成りまする。況して近ごろは源平ふたつに立別れ、互ひの親みも打絶えて居つたに。

義近　いざといふ時には、また戰場で逢ふまでぢや。まづそれ迄は心置なう寛いで居られえ。

（紫上手より入り來る。）

義近　畠山どの、これが娘ぢや。紫、この方は莊司二郎重忠といふ關東隨一の若武者ぢや。相模から故鄕への途すがら、狂ひ猪に出で逢うて手も無くそれはほり殺したが、人の運は測られぬものぢや。その猪を捕らうために作つた陷穽にはまつて、思ひもかけぬ怪我をせられた。

重忠　二十年來弓矢の家に育ちながら、面目もない仕誼でございつた。
紫　離亭の支度は出來ました。ともかくもあちらで。
（義近の郎黨構内は母屋の裡より、重忠の郎黨榛澤藤五と、醫師とが伴ひ來る。藤五は原人の俤を存したる、長大なる軀幹と、粗野なる言語とを有する若者なり。）
義近　おゝ重忠どのゝ家人が見えられた。
藤五　若殿、馬の始末はもうついた。これからは若殿の始末ぢや。
義近　おゝ醫師どのも見えられたな。
醫師　病人は誰ぢや。
義近　旅の人ぢや。兎も角もあちらへ行かう。
（藤五は重忠を扶け、義近及び醫師相伴うて上手へ入る。）
（日稍くらし。紫落葉の下に立ちて重忠を目送す。）
（熊谷郎直實母屋より出で來り、紫を見入る。稍間。）
直實　紫どの。
紫　何ぞ、用はし？
直實　また轉寢ぢや。
紫　戀の話にはもう倦いた。
直實　それは知つて居る。都下りの似而非公卿めが和歌とやらに迷ひ込んで、弓馬の德を忘れたそなたぢや。その心の迷ひはわしが解いてやる。
紫　（わざと冷笑して）秀重どのは、都にも並ぶものゝない詠歌者さうな。それに姿もうつくしく、擧止もやさしい。けふもわたしの爲めにかういふ歌を詠まれた……
直實　（腹立しげに）えゝ、その樣なじやらじやらした事は聞きたうない。
紫　心の底のせつなさを打わつた歌を聞くのは、女の身には嬉しい事ぢや。
直實　假名を三十や四十、一つにする位はどんな馬鹿にも出來るわ。
紫　でも、あなたには出來まい。
直實　歌を作つたら、屹度そなたはわしに從ふか。
紫　お客人のもてなしを忘れて居た。
（紫は笑ひながら上手に入る。）
直實　（紫の後姿を見おくりながら）腰折一つよめぬ故、思ふ女が手に入らぬとは、弓矢の道も地に墮ちた。（間）葛西平六の阿呆にさへ出來る和歌とやら、武藏七黨の旗頭たる熊谷直實に出來ぬ筈はない。あゝ秋の夜や……秋の夜や……
（葛西平六秀重は悄然として姿を阪路より現はす。）
秀重　次郎、こゝにか。
直實　平六か、一つの戀に、二人は無益ぢや。一つの生命

はおれがもらふぞ。

秀重　（太刀に手をかけ）　おれが所望ぢや。さ、豐島河原へ行かう。

直實　能ういうた。

（兩人立去らんとす。阪路に西行と金王とあらはる。）

西行　まづ止らせられえ。

直實　法師どの、許されえ。

（兩人立去らんとするを、西行杖を横にしてとゞむ。彼が兩人に對する刹那の心の閃きには、佐藤憲清時代の面目を彷彿せしむ。）

西行　兩人が爭ひのいはれは此小わつぱから聞いた。女一疋に二人の血を流すはをごりの沙汰ぢや、倅たち、まづわしと一緒に來られえ。忽ち煩惱の羈を絶つてやるわ。

（西行は先に立ちて母屋の方へ行く。若き二人は一種の威嚴に壓せられて、われにもあらず從ひ行く。）

（金王は三人を見送る。）

（紫上手より出で來る。）

金王　法師め、餘計なところへ口を出した。

紫　法師どのが、何を。

金王　兩人の阿呆侍が、眞劍の勝負をしようとしたを、法師どのが來て無事に濟ませた。

紫　それはよい功德であつた。

金王　なんのよい事か。面白い勝負を見損うた。

（榛澤藤五上手より出で來る。）

藤五　わつぱ、どの樣な勝負ぢや。

金王　女一人のために、男二人が生命のやり取りをしようとした。

藤五　たはけた奴等ぢや。が、世間にはそのたはけばかりぢや。そこへ行くと此藤五などは、如何な女が來ようと、蛆虫ほどにも思はぬわ。

紫　（笑ひながら）　それは賢こい人ぢや。

藤五　わしは聖ぢや。たゞ一つ腹を立つのがわしの惡い癖ぢや。今もあの權内とやらへ膳を投げつけてやつた。

紫　（驚いて）　あの權内へ？

藤五　あいつ、癪にさはる事をぬかし居つた。

紫　どの樣な事を。

藤五　わしの腹を底無しの池ぢやとぬかし居る。何の、あの樣なものゝ十杯や二十杯！

紫　それではわたしが給仕をして上う。もう一度喰べるがよい。

藤五　またにせう。腹が裂けさうぢや。

紫　それでもまだ足りぬのか。

藤五　酒がなければ心が足りぬ。

紫　でも、おぬしのお主から、決して酒は振舞うてくれる

など、きつい斷りであつた。

藤五　あれが若殿のたつた一つの悪い缺點ぢや。……や、若殿がこなたへ見える。いひつけられた用事を忘れて居た、許されえ。

（藤五いそぎ母屋の方へ行く。）

（日全く暮れて月樹の間に昇る。虫の聲あはれ。）

（重忠杖に縋りてしづかに上手より出づ。）

紫　何としてこゝへは。

重忠　瞽師の手當に、もう常と變らぬ心となつた。秋の夜の風情の面白さに、思はずあなたを驚かした。

紫　それは重疊でござりました。さ、こゝへお凭なさりませ。あの、瞽師はもう歸りましたか。

重忠　向うの庭を通つて歸られた。あの者の話では、もう四五日は旅立はむづかしいとの事でござつた。

紫　御國許へは使者をおくつてある筈、心安く御逗留なさりませ。

重忠　御親子の御志は、身にしみて忝けない。

金王　怪我をしても構はぬ。早う馬で旅をする身になりたい。

重忠　おゝ興がる童ぢや。今は何をして居る。

金王　物磨きぢや。あれは女子のする業ぢや。

重忠　人の語に背き得る程の身になるまでは、まあどの様ないひつけにも從ふが可い。

金王　併しわしにも人の語に背ける時が來るでござりませうか。

重忠　それは分らぬ。此世には強いものにしたがふものと、弱いものを使ふ人とがある。弱く生れたら生涯人に使はれるのぢや。

金王　（腕をさすりて）　わしには強い骨がある、強い筋がある。

（此時母屋の方にて人々の笑ふ聲、罵る聲、器皿の毀るゝ物音す。）

重忠　や、藤五めの聲ぢや。また何ぞ仕出かしたか。

紫　先程もうちの家來に膳を投げつけたとか申して居りました。

重忠　その時も戒めては置きましたが、生れついての荒武者、狂ひ出したら誰が語でもとゞまらぬ。併しわれらに取つては忠義無二の郎黨、仕儀によつては後に圍うて、此刀を拔かぬものでもござらぬ。

（またのゝしり騷ぐ物音。）

金王　（飛び上りて）　一大事が初まつたな。（母屋の前へ駈け行きて、思はず歩みをとゞむ）　權内老爺め、火のやうに怒つて居るわ。

（權内は母屋より出で來り、重忠に近づく。）

權內　お客人、あなたの御家來の亂行を聞いて下さりませ。わしに對する無法の振舞、それはお客人も御承知、あれから臺所へ飛び込んで、酒瓶へ首をつゝ込む猩々飲み、果てはわれらが仲間を集めて、わがもの顏の振舞酒に、母屋はだれも彼も醉漢ばかりでござりまする。お客人から何とかいうて下さらいでは……

（藤五亂醉して入り來る。）

重忠　藤五、何とした。

藤五　好きな酒を飲ませぬと申す故、わざと飲んで〱飲んでやりました。

重忠　酒はおれが止めてもらうたのぢや。

藤五　併し、それを飲まずには生きて居られませぬ。

重忠　長い事ではない、我慢をせえ。よいか、今宵の事はわしが謝まる。明日からは愼め、よいか。

藤五　主のいひつけぢや。餘儀ない事ぢや。たゞ、それまで生命がつゞくか如何か。

金王　（手をたゝき）酒がなくて死ぬとは弱い生命ぢや。

藤五　おのれ、武士に對して無禮な事を……

重忠　（金王をうしろに圍ひながら）靜かにせぬか。（權內に向ひ）老人、今宵の事は、わしに免じて許して下されえ。

權內　恐れ入りました。

重忠　（藤五に）さあ、あちらへ行け。

藤五　（悄然として）とんだところで怪我をされたものぢや。

（藤五退場。）

權內　（金王に向ひ）狼めを家內へ入れぬと、また檻を破つて逃げ出さうぞ。

金王　おゝ、忘れて居た。行かう。

（權內と金王とを、わきに寄せつゝ、母屋へ入る。）

（四園寂寞、月漸く冴ゆ。）

重忠　おゝ靜かな事ぢや。

紫　あの御家來は、この樣な靜かな處には馴れぬと見えまするな。

重忠　われらが秩父の館は人の聲、馬の嘶き、わめく音、打合ふ響きで、夜の神さへ眠れぬ程ぢや。（間）あなたはこの樣は淋しいところが好ましいかな。

紫　何ぢや知らぬが、こゝは父樣の家でござります。

重忠　それにしてもこゝは餘りに靜かぢや。生命がない。

紫　わたしも尚少し樂みが欲しい。こゝは餘りに物悲しい。それでも父樣の家なら仕方がない。

（微かに野寺の鐘聲聞ゆ。稍しばらく間。）

重忠　（身を起し）夜は更けた。寢るとしよう。

紫　ようおやすみなさりませ。

重忠　さらば。

（重忠は立去りかけしが、やがて立止り、しげ〳〵と紫を見返る。紫も半ば恐るゝ如く重忠を見送る。重忠立戻りて。）

重忠　紫どの、あなたには、もう約束の方がござるか。

紫　（烈しく驚きて身を引き）そ、その様なものは……存じませぬ。

（重忠はしばらく佇みて紫を眺め入りしが、やがて思ひ返して上手へ立去る。紫は身をふるはして石の上に身をおろす。）

（やがて義近、欠伸しつゝ上手より出で來り、まはりを見ながら。）

義近　お客人を外にして、思はず離亭で寢忘れた。（紫の姿を見て）あゝ、娘、如何してこの様な處に居るのぢや。夜露は身の毒ぢや。さ、閨へ行かう。首をかゝれても知らぬ程に眠いわ。（娘の肩へ手をかけ、いぶかしげに）如何ぞしたか、ふるへて居るぞ。

（親子手を携へて母家へ入る。蟲の聲、落葉いよ〳〵しげし。）

――幕――

第二

前幕と同じ場處。數日の後。

藤五は芝生の上に笑ひながら横臥し居る。

金王その傍に立つ。

藤五　わつぱ、それは確かゝ、屹度見たか。

金王　確かとも。熊谷の次郎め、眞面目な顔して、姫君に歌を讀んで聞かせて居た。而して自分が作つたのぢやというて居た。これ、何を笑ふのぢや。

藤五　武士ともあるものが、女を喜ばさうとて歌をつくる。聞いてさへ可笑しいわ。

金王　姫君も笑うて居た。

藤五　あの人も笑うたか？

金王　笑はずには居られまい。その歌がまた滅法と馬鹿馬鹿しいのぢや。

藤五　あの人が笑うたところを見ると、其歌はそれほど拙いものではない。それにあの姫も熊谷の次郎を惡くは思うて居まい。

金王　はあて。

藤五　女といふものは變つた化物ぢや。惚れゝば惚れるほど相手の男を苦めるものぢや。表面は笑うたと見せて、

腹ではほめて居るのぢや。

金王　わしには分らぬ、（考へて）しかし姫君は誰の事でも笑ふ。そなたの事は誰よりも餘計に笑ふ。

藤五　（苦笑して）それは笑ひかたが違ふ。それにおれはあの姫を思うては居ぬ。

（藤五は足ふみ伸して大の字に寢る。）

金王　また眠るのか。

藤五　眠る外に何ぞ仕事があるか、酒はのまれず、喧嘩は出來ず！　あゝ〳〵。

金王　眠る前に聞きたい事がある。そなた、それほど女といふものを知つて居るなら、云うて聞かしてくれ。姫君はな、畠山どのゝ顏を見るのを怖がつて居る。そなたのお主の跫音を聞くと、云ひかけた言も消えてしまふ。

（此語を聞くや、藤五の面には失望の色次第に著しく、やがて俄かに身を起し。）

藤五　わつぱ、そちは恐ろしい鋭どい目をもつて居るな。おれが眠つてばかり居る間にそちはおそろしい働きを目にさせたな。

金王　わしが一目にらんだら、何一つ分らぬものはない。

藤五　全くぢや、そちの話を聞いたので、おれは妙な心地になつた。

金王　左樣らしい。死にさうな面つきぢや。

藤五　死にさうな？　いや死ぬよりももつと悪い。（飛び起きて）おれたちはもう此處には居られぬのぢや。

金王　日に照らされて寢て居るから悪いのぢや。その爲めに氣の狂つた人が澤山ある。

藤五　（亢奮して歩きまはる）まあ、考へさせてくれ。考へさせてくれ。

金王　つめたい水へ三度も頭をつゝこんだら、好い智慧が浮んで來よう。

藤五　（太刀をぬきそばめ）馬鹿、大抵にせえ、煩さいと、此刀を三度もたゝつこむぞ。

（金王は一種の輕蔑を示して上手へ退場。）

藤五　いや嘘ぢや。わつぱの邪推ぢや。が、これが事實になるまいものでも無い。（再び石に腰かけ額の汗を拭く）あゝ、恐ろしい事ぢや。恐ろしい事ぢや。

（金王は重忠を導いて入り來る。）

金王　あれに居ります。餘り度々日向で眠たので頭が狂つたと見えます。氣をおつけなさりませ。何をするか分りませぬ。

（金王舌を吐いて退場。）

重忠　やい、藤五、何とした。

藤五　（獨語のごとく）それ處では無いのぢや。

重忠　いよ〳〵頭がくるつたか。

藤五　左樣かも知れませぬ。（訴ふるが如く）若殿、さ、いうて下され、あなたはあの賣女めを思うては居ぬと。

重忠　これ、突然に何をいふ。賣女とは誰の事ぢや。

藤五　こゝの娘、あの紫とやらの事ぢや。

重忠　豐島どのこそは、この身にとつて再生の恩人ぢや。その息女を賣女などゝは無禮にも程がある。

藤五　その一言で若殿の心がよめる。あの樣な女に若殿の心を奪はれたら、三百餘騎の郎黨郎從、みな男衾を出てしまはう。

重忠　それは何故にぢや。

藤五　いふまでもない。源氏方の豐島の娘などゝ緣組するのが第一に無法ぢや。それにあの幽鬱虫をその儘の娘どのに入られては、陽氣でもつた秩父の城が何とならう。酒も飲まれず、喧嘩三昧に日を送れずば、武士になるより百姓する。所詮あの女は畠山の敵ぢや。

重忠　（哄笑して）どの樣なものを嫁にせうと、秩父の家風は我父が守る。その心配は要らぬ事ぢや。

藤五　なにのろい和郞はいつもその樣な事をいふ。若殿とてこの淋しい場所を離れて、秩父の館へ歸られたら、流石に正氣はつくであらう。さ、直ぐにこゝを御立ちなされ。

重忠　（腹立しげに）物に狂ふも大概にせえ。

（藤五はしばらく氣を呑まれて默然たりしが、やがて涙を流して重忠の腕をつかみ。）

藤五　若殿、さ、少しも早く故郷へ。

重忠　（ふりはらひ）おゝ、紫どのが來られる。あの人に話したい事がある。さあ、むかうへうせえ。

（藤五は稍少時躊躇せしが、やがて齒をかみつゝ憤然として上手に退場す。）

（紫は母屋の方より入り來る。）

重忠　紫どの、五日前にわしのいうた語、まだ記えて居られうな。

紫　おぼえて居りまする。

重忠　ではその御返事を承はらう。

紫　その返事は。幾たびもした筈ぢや。

重忠　あの樣な返事は、わしの望みではない。

紫　もう、あの話はおいていたゞきませう。強ひて望みを遂げようとなされたら、あなたの生命は無事ではないさうな。

重忠　（哄笑して）あなたの父御に怒られて、此身が危いと分つたら、尙さら心は變へられぬ。

紫　それは無體といふものでございます。

重忠　左樣かも知れぬ。が、敵の劍の前も、女の目の前も、わしには一つぢや。誰が前でも言の腰を下げるのは卑怯

ぢや。

紫　その様にして女を嚇かすのも、卑怯ではござりませぬか。

重忠　その様な事はわしには分らぬ。わしはたゞ思うた女をわが物にしたいのぢや。あなたを妻に選んだのぢや。

紫　秩父の女たちは、その様な思はれかたで滿足して居るのでござりますか。

重忠　それは知らぬ。わしには初めての戀ぢや。が、かくまで思はれた女は嬉しいと思ふべきぢや。

紫　嬉しいと？

重忠　阪東に名ある莊司の二郎が思ひを寄せた女ぢや。身のほこりにするが當りまへぢや。

紫　豐島太郎の娘は、これしきの事は何とも思ひませぬ。

重忠　なに、何とも思はぬ。（紫の方に近より、決然たる聲音にて）郞黨一人秩父へつかはして、もう婚禮の準備にとりかゝらせた。秩父の武者が云ひ出した言は、弦をはなれた矢ぢや。再びもとへは返らぬのぢや。

（云ひ棄てゝ重忠は、上手へ立去る。紫は羞恥と、憤怒と、恐怖とに身を悶えて、淋しく佇む。）

（義近母屋より入來る。）

義近　金王めは何處へ行た。日毎に怠けかたが烈しくなる。見つけ次第に手足の折れるほど折檻せう。

紫　父様、まあこゝに居て下され。話したい事がある。

（義近は紫の傍に腰かく。）

義近　娘、この頃は何とした。是までと違うて沈んでばかり居るではないか。

紫　いえ、何ともござりませぬ。それよりは妾のこのむことを屹度適へると約束をして下さりませ。

義近　何ぢや、その様な遠慮がましい。衣服でもほしいといふのか。

紫　いえ、衣服ではござりませぬ。

義近　これでは何であらうな。都ではやるとか聞く黄金の簪か。

紫　いえ〳〵、その様なものでは無い。父様、わたしはあなたの戀の話が聞きたい。

義近　（驚いて）なに、わしの戀の話を？

紫　わたしが母様に別れたのは頑是ない時であつた。それでもあなたは母様の話をして下された事はない。母様の話をきゝたい。

義近　そなたの母は美しい人であつた。

紫　父様は如何して母様に逢はれたのぢや。如何して思ひ合うたのぢや。如何して一緒になられたのぢや。さ、それを話して聞かせて。

（義近過去を夢みるごとく、額に手をあて茫然として

ありしが、やがて身を起し。）
義近　また話す機會があらう。
（紫も身を起して父の手をとり、父もとの位置に引戻して。）
紫　父様、わたしはもう女ぢや。聞かせて下されてもよい筈ぢや。
義近　嘘の様な話ぢや。その頃は人の心もあらかつた。腕のつよいものが世の中を支配した。強いものには如何なる悪事も道理であつた。
紫　それが如何したのでござります。
義近　そなたの母は相模の大庭が娘であつた。
紫　では重忠どのと同じ平家方の。
義近　さうぢや。
紫　平家方の娘を、どうしてお迎へなされたのでござります。
義近　（太息して）戀の國土に境はない。あゝ、思ひ出せば四十餘年の昔ぢや。相模境に狩漁してのかへるさに、ゆくりなくも行き逢うたは、そなたの母が野武士の手にとらへられ、濟ましい目に逢はうとして居る處であつた。
紫　まあ、物語にでもありさうな。それでもあなたは母様を。
義近　おゝ救つた。野武士の手からは救つたが、わしはもうそなたの母を親元へ還さう心にはなれなんだ。
紫　えゝ。
（義近は默然として、過去の追憶に打勝たれしごとく、たゞ大地を見つむ。紫は體内に潜める或力のうづき出せるごとく身を悶えて、父の兩手をしつかと執りながら。）
紫　それから、それから？
義近　力づくに奪つて還つた。そのためにわしはあれの戀人をひとり殺した。大庭の家來を五人まで傷つけた。
紫　そして、そして？
義近　それから後は兩家の爭鬪ぢや。鮮血は双方から流された。あれの父はおれを呪ひ死にゝ死んださうな。
紫　あゝ、恐ろしや〳〵！
義近　これ、靜かにせえ。それを見るが忌さに、今までは口を緘んで居たのぢや。
紫　でも、その様なおそろしい。
義近　それもこれも過ぎた事ぢや。
（重忠上手より來る。）
重忠　御免くだされ。（行過ぎんとす）
義近　（立上り）ま、お話しなされ。傷痍はどうぢやな。
重忠　御親子の御心盡しの效あつて、意外に早う快うなりました。

義近　その御禮では痛み入る。何事も相見互ひぢや。

重忠　あすは御暇いたさうと存ずるが、それにつけても遠からずわれらが方へおたづねを願ひたい。（紫の顏を見ながら）敵も味方も打忘れ、一家のごとき好みをもつて。

義近　（打笑ひつゝ）保元平治の事なくば、源氏平家の流れの末に、風波立つることもあるまいに、思へば武士ほど片意地なものは無い。が、其中には御造作にあづかる時節も來るであらう。

重忠　（わざと紫に向ひ）その時には御息女にも。

（紫つと身を起して父の手をとり。）

紫　父樣、まだ話したい事がある。さあ、參りませう。

（親子は母屋の方へ行く。重忠は二人を見おくる。藤五又登場。）

藤五　あれほど泣憐れをかけた家來の事も忘れ果てゝ、彼女を見つめて居る淺ましさ、わしはもう……

重忠　默れ下郎！　それほど此重忠が氣に入らずば、いづこへなりと主取りせえ。

藤五　（驚いて）なに、他家へ主取りを？　此藤五の心さへ分らぬ樣になつたとは、たしかに心が狂はれたに相違ない。此上は有無を云はさず秩父へ連れもどり、正氣になるまで押こめ置くのぢや。

（藤五、重忠をつかまんとす。重忠身をかはして藤五をはづし、扇をもつて其頭をうつ。藤五地に倒る。）

重忠　馬鹿め。

（冷然として退場。）

（藤五疼痛をこらへてわづかに身を起す。）

藤五　魂ひの腐つたには似ず、武勇はさして變りはない。それにつけてもあの心の迷ひを直す工夫はないものか。

（西行阪路をのぼり來る。）

藤五　法師どの、聞きたい事がござる。

西行　何ぢやな。

藤五　戀に心の狂うた男を、正氣にかへす工夫はござるまいか。

西行　（あきれ顏にて）はゝう、そなたが戀に狂はれたかな。

藤五　わしが、戀に？　戀とわしとは仲違ひぢや。

西行　如何にも左樣らしい顏ぢや。してその戀に狂うた男といふは誰ぢやな。

藤五　わしの主人ぢや。

西行　（笑ひかけて）うむ、莊司の二郎か。二郎どのも物のあはれを知るやうになつたか。

藤五　えつ。

西行　そなたには分るまい。二郎どのなら戀に身をくはれ

て死にもせまい。ま、ま、棄てゝ置くがよい。

藤五　えゝ、その様な事をしたら……

西行　このわしでさへ北面の武士であつた時には、つれない女にあこがれて一夜も二夜も待あかした事さへある。若い時には一度づゝは誰しもかゝる流行病(はやりやまひ)ぢや、生命までは別條ない。棄てゝ置くが第一の療治ぢや。

（西行は笑ひながら母屋の方へ去る。）

藤五　賣僧め、おのが若い時ののろけまで吐き居つた。もう此上は誰に便らうまでもない……

（沈吟の裡、紫先きに熊谷直實母屋より入り來る。）

紫　おゝ藤五どの。

（藤五、紫を一睨して、つと阪路の方へ立去る。）

紫　をかしい人ぢや。わたしを怖ろしいものか何ぞの様に。

直實　そなたを恐れる人は賢い人ぢや。わしのやうにつき纏ふはおろか者ぢや。

紫　聞きともない。もう止して下され。

直實　平六めの云ふ事なら、よろこんで耳を貸さうに。

紫　あい、彼の人は歌が巧みぢや。

直實　わしとても歌はよんだ。

紫　あれは歌ではない。秀重どのゝとは比べやうもない。

直實　またしても平六ぢや。秀重ぢや。三日三晩まんじりともせんで詠んだ歌さへ、その様にさげすまれるはあの平六めの有るがためぢや。いまに思ひ知らしてやるわ。

（忿然として阪路の下へ駈け行く。すれ違ひさまに金王上り來り、直實を見おくりて。）

金王　次郎どのが怒つたわ。こりや面白い、いよ／＼果し合ひが見られるな。

紫　そなたは何をいうてぢや。

金王　昨夕(ゆうべ)かけて置いた兎罠を見に、砥島の森に行たら、平六どのが家來をあつめて、太刀打の稽古をして居た。あの詠歌者も今は武藝に懸命ぢや。

紫　でも、西行法師の説得で、ふたりは勝負をせぬ事になつた筈ぢや。

金王　その後に平六どのが、次郎どのゝ歌を笑うたといふ話をしたら、次郎どのはえらう腹を立てゝ、誓を破つても平六どのを殺すというて居た。やつ、又藤五の氣ちがひめがやつて來た。

紫　ほんに心が如何ぞして居るらしい。

金王　日向で眠た所爲(せゐ)ぢや、うつかり話をなされぬがよい。

（藤五悄然として阪路を上り、上手へ赴かんとして何やら思ひ當りしごとく、うなづきつゝ紫の方へすゝむ。）

藤五　姫君。

金王　（獨語のやうに）今度は馬鹿に丁寧になつた。

藤五　わしは今一大事をきいて來た。
紫　何事ぢや。
藤五　豐島河原で果しあひが初まりさうぢや。
紫　えつ。
藤五　云ふまでもなく、熊谷どのと葛西どのぢや。事の起りはあなたぢや。
金王　（躍りあがつて）有難い。いよ〳〵勝負ぢやな。
（金王は飛ぶが如くに阪路を下り去る。）
紫　どうでも果しあひになりさうか。
藤五　武士の刀に手がかゝつたら血は流れずに居る筈はない。
紫　あゝ、如何ぞして止める工風はあるまいか。
藤五　それは易い事ぢや。
紫　それは何として。
藤五　どちらか一人の妻になるのぢや。
紫　（驚きて）えつ。
藤五　えゝ、ぐづ〳〵して居る時はない。どちらか一人死ぬのぢや。さあ、どちらを取る御心ぢや。
紫　わたしはどちらも……
藤五　一人は武藏七黨の旗頭ぢや。一人は都に名だかい詠歌者ぢや。さあどちらを取る御心ぢや。
紫　でもわたしは二人とも心に染まぬ。

藤五　併しあの二人は、わしの主人などゝは違うて、心もけだかく氣はやさしい。あの樣な人たちの妻となつたら僥倖ぢや。
紫　そなたの御主はその樣に惡い人か。
藤五　惡いの何のというて、わしの若殿ほど惡人は此世にあるまい。放埒、無慘、親には不孝、妻には無慈悲……
紫　（笑ひをしのびつゝ）あの人にはもう妻があるのか。
藤五　いや、有つたらさうもあらうと思ふのぢや。あの樣な了簡では、縱令女房を迎へ取らうとも、衣裳も買うてはやるまい。調度も與へはせまい。氣に入らぬ事があつたら、たぶさつかんで屋敷中を引ずりまはさう。
紫　おゝ恐ろしや、恐ろしや。（何やら思ひつきし如く）成程かねて聞いた通りぢや。人の噂に違はぬならず者であつた。
藤五　（俄かに容を變へて）なに、ならず者？
紫　左樣ぢや。惡人、恥知らず、女たらし……
藤五　（卒然身を起して太刀ぬきそばめ）嘘も事にこそよれ、おらが若殿を惡人とは誰がいうた。恥知らずとは誰が吐した。（脅迫的に紫の方にすゝみ）さあ、其嘘吐きの名をいへ。名をぬかせ。武藏一國たづねめぐつても、屹度此禮はしてやるのぢや。女、さあ、その當の奴の名をぬかせ。

紫　さあ、其人の名はな。

藤五　その人の名は。

（紫は指をまはして、方々を指しながら、最後に藤五の顔をつくばかりにして。）

紫　この人ぢや。

藤五　な、なに、おれぢやと？

紫　自分のいうた事さへ信實とは思はぬ男、重忠どのからこのわたしを離さうためとは初めから見て取つた。これ、藤五どの、そなたは何故その樣にわたしを嫌ふのぢや。

藤五　かうなつたらもう隱しだてはせぬ。あなたに怨みつらみはないが、若殿は平家方、あなたの父御は源氏の利けもの、思ひ合うてもむだな事ぢや。それ故わしは二人の仲が裂きたいのぢや。

紫　（沈吟して）わたしの母樣は、平家方の大庭の娘であつた。それでも源氏方の父樣と緣組した。

藤五　（愕いて）えつ、あなたの母御は相模の大庭か。ふむこれは不思議ぢや。

（重忠入り來る。紫おどろいて起上り、こゝを去らんとす。重忠手を上げて之をとゞむ。）

重忠　藤五、馬をひけッ。

藤五　何となされます。

重忠　明日は秩父へ還るのぢや。けふは骨だめしぢや。

藤五　有難いことぢや。

（藤五阪路を下る。）

重忠　（紫に）今の語を聞かれたな。

紫　はい。

重忠　して、わしへの返事は？

紫　（神經的に、母屋の方へ身を退きつゝ）同じ事ぢや。

重忠　わしは力づくで、そなたを奪ひ去らうとは思はなんだが……（紫の逃げんとするを引とらへ）まあ、聞かれえ。明日、わが出立の砌、快くわが心に從はゞ兎に角、たつて不承知とあらば、この豐島が館に血の雨が降らうも知れぬぞ。

（義近母屋より登場。此體を見て、呆れ、驚き、茫然として立つ。重忠は紫を離しながらも冷然として義近の前に立つ。）

義近　娘に對して何とする。

重忠　秩父が妻に申し受けたのぢや。

義近　なに申し受けたと。（太刀に手をかけ、脅かす如くにすゝむ）わしの許しを受けようともせで……日頃の恩も打忘れ、人の娘を奪はん所存な？

重忠　源平二つに立別れては、晴れての祝言はもとより成るまい。それ故斷りなく連れて行くまでぢや。

義近　不義は武門の瑕瑾ぢや。娘を渡す其前に、その成敗

をしてつかはす。

重忠　おう、望むところぢや。

（兩人大刀に手をかけ、互ひに進み寄る。西行法師母屋より走り來る。）

西行　まづ、待たれよ、秩父どの、こゝはそなたが再生の恩人の住居ぢや。この豐島の館に血を流しては、武士の義理が立つまいぞ。

重忠　これは法師の云はるゝ通りぢや。

義近　さらば、彼方の森蔭にて待つがよい。われもあとよりつゞいて行くわ。

重忠　その詞を忘るゝな。

義近　何を？

（意氣込むを紫身をもつて之を支ふ。）

重忠　（紫に）重ねて迎へにまゐるぞ。

（藤五阪路を上り來る。）

重忠　馬は？

藤五　阪下にひき据ゑてござる。

重忠　さらば行かう。

（兩人胸壁の下に消ゆ。）

（紫は尙も父の身に抱きつく。）

西行　豐島どの、馬鹿者ぢや、棄てゝ置かれえ。

紫　ほんにあとを追ふのは止めにして。

義近　卑怯者とさへ思はれずば。（胸壁の側に寄り、崖下を俯瞰して）おゝ、馬をくだつて森蔭にわしを待つて居る。阪東武者の名折れぢや。行かずにや居られぬ。（西行に）法師どの、屍をあの森蔭に曝す前、塗籠へ來て後世の菩提を賴み申す。

（義近は母屋の方へ行く。）

西行　（悲しげに）わが力ではこの愚かしい人間の爭ひをとゞむる事は出來ぬか。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

（兩人退場。やがて母屋の方に讀經の聲聞ゆ。紫は涙をとゞめ、いそぎ胸壁の前に來り、狂へるごとく崖下を見詰む。金王は跳躍して阪路を上り來る。）

金王　豐島河原はたうとう血を見た。平六どのがたゞ一太刀でやられてしまうた。（紫が此一大凶報に耳を傾けぬを訝かりつゝ、胸壁の側へ來りて、その眺めつゝある方に目を走らす）あゝ、あれは秩父どのと藤五めぢや。二人は馬から下りて居る。

紫　（放心せる人の如く）母屋へ行て、被衣を取つて來や。

金王　どの被衣を。

紫　どれでも好い。

（金王は訝かしげに紫を一瞥して母屋へ走り入る。紫はまはりをいそがしく見、やがて一散に阪路をくだり去る。）

（日光稍くらし、落葉しげし。）

（しばらくして金王は被衣を携へて母屋より出で來る。）

金王　これでよろしうござりますか。

（柴の姿を見出し得ざるに驚き、あたりを見まはせし後、思はず驚きの叫び聲を發し、被衣を落す。）

金王　殿！　殿！

（義近と西行と母屋より走り來る。金王は崖下を指し。）

金王　あれが姫君ぢや。二人は姫君を迎へに來た。

（義近は額に手を翳して、ぢつと崖下を見つむ。）

金王　あゝ二人は姫君と一緒になつた。……秩父をさして駈けて行く。

義近　馬ぢや！　馬ぢや！　義近の馬ひけつ！

（義近は太刀を拔きかざして走り去る。金王その後を追ふ。）

（斜陽、落葉、蟲聲。）

（西行淋しく秋風の裡に立つ。）

――幕――

文覺（一幕二場）

人

文覺上人（四十五六）
源頼朝（三十三）
政子姫　北條の息女（二十三）
相照　文覺の弟子（三十位）
阿那坊　同じく（十二）
與次太夫　寺男（五十五）
小笹　茶屋の老婆（五十）

時

治承四年の彌生の或日

處

（一）伊豆國奈古屋の文覺が庵室
（二）同國原木村一軒茶屋

（一）　文覺上人の庵室

伊豆奈古屋なる文覺上人の庵室。すべて丸太造りの簡素なる建築。正面には不動明王の大幅を懸け、前に護摩壇を置く、上手は板戸によつて次の室に通じ、下手と前面には濡縁を折りめぐらして、側に筧あり、その末は細流となり、土橋その上にかゝる。下手の奥は山櫻のさかり、上手前の方には橙数株、累累たる黄金の玉をつらね。

時は治承四年彌生の或日。

幕明くと、次の室にて文覺の烈しく罵しる聲聞え、つゞいて物の碎くる音す。

小僧阿那坊、鞠のごとく次の室よりまろび出づ。

文覺は太き榊の杖を手にして追うて出づ。

弟子相照、さゝへながらつゞいて出で來る。

文覺　阿呆め、失せえといふに、何故失せ居らぬ。
阿那坊　とうの昔に失せて居ります。
文覺　またその様な妄語をぬかして居る。早く失せえ。
阿那坊　たうとう失せました。
文覺　おのれ、まだ強情を張り居る。さらば二つ三つくらはしてやらう。
（文覺杖を振り上げる、阿那坊庭へ飛び下りる。）
相照　（文覺をとめて）師の坊、どうぞお許し下さりませ。阿那坊には屹度御詫び致させまする。これ、阿那坊、そなたは何故その様に師の坊にあらがふのぢや。
阿那坊　なに、わしは些ともあらがひはせぬ。たゞ思うた

事を正直に云うて居るのぢや。

文覺　なにが正直ぢや。失せえといふに失せえ。

阿那坊　徒らに假の相に執して、人間本來の眞實を觀じ得ぬは、畢竟不根不覺の腥さ坊主の事ぢや。

文覺　おのれ、それが何とした。

阿那坊　わしの肉身は、俗眼には其儘に映じて居つても、魂魄はとうの昔にけし飛んでしまうた。先刻の先刻に消え失せてしまうた。

文覺　おのれ、もう勘辨がならぬわ。

阿那坊　此方も、もう猶豫がならぬわ。

（阿那坊下手へ逃げ去る。文覺は愈よ憤怒して庭先へ飛び下りる。相照もつゞいて飛び下り、和める。北條時政の娘政子下手より出づ。文覺はそれと見て躊躇する。）

政子　上人にはお穿物も召されず。いづれへお出でなされます。

文覺　な、なに、ついそこまで……そこらで阿那坊に逢はれなんだか。

政子　ついそこで逢ひました。上人にはいつにない御機嫌ぢや、早う行けと云うてゞございました。

文覺　（苦笑して）あいつ、まだ出鱈目をぬかし居る。

政子　あのお子は如何なされたのでございますか。

文覺　あいつ、わしの云ふ事を聞かぬによつて折檻せうと思うたら、逃げて行きくさつた。

政子　道理で呼吸をきつて馳けて行かれました。

相照　（笑つて）致し方のない悪太郎でございます。

政子　彼のお子ばかりは、上人の苦手でございますな。

文覺　外にももう一人居る。

政子　どなたでございませう。

文覺　そなたぢや。

政子　（驚いて）何で、わたしが……

文覺　そなたに鼻を鳴してあまえられると、文覺の道心も折々ゆらめき出しさうぢや。あはゝゝゝゝ。

政子　（拗ねて）まア、好かぬ上人さまぢや。

文覺　それ、そのすねた風が苦手なのぢや。これが若い折であつたら首を斬る女がもう一人殖えたも知れぬよ。あはゝゝゝ。

政子　まあ、いやらしい。

文覺　（泥足のまゝ濡縁に飛び上りながら）まあ、上からつしやれ。

相照　筧の水で足をお洗ひになりましては。

文覺　まあ、これでよい。（泥足を縁になすりつけ、護摩壇の前にすわる）

相照　では、わたしは一寸御免を蒙ります。政子さま、御

綴りなされませ。

政子　忝けなうござります。

（政子は腰をかける。相照は跣足のまゝ上手へ去る。）

文覺　あがつたら如何ぢや。

政子　（腰かけしまゝ獨語の樣に）　袈裟さまとやらが羨ましい。

文覺　何で袈裟が羨ましい。

政子　わたしも斬られて死にたい。

文覺　また謎を始めたの。何故死にたいのぢや。

政子　心にもない男に、想ひをかけられたゆゑ。

文覺　その樣なあてつけは云はぬものぢや、袈裟に無體な戀慕をした罰で、遠藤武者所盛遠とも云はれた男が、髮そりこぼつて佛いぢりぢや。

政子　あの男も、早く出家でもすればよいに。

文覺　ひどく嫌うたものぢやな。して其男は。

政子　名さへ山木判官兼隆といふ、田舍武士でござります。

文覺　なに山木判官、あいつならわしも二三度逢うた事がある。家柄骨柄、北條の家にふさはしからぬ程とは思はれぬ、あれを田舍武士というたら、そなたの父御や弟御も、田舍武士と云はれうぞ。

政子　えゝ。田舍武士に違ひはござりませぬ。

文覺　えらい鼻息ぢやの。そこであの判官め、そなたに文でも、つけたと云ふのか。

政子　いゝえ、わたしには何の沙汰もなく、直接に父の許へ云ひ込んでまゐりました、よく／＼物のあはれを知らぬ田舍武士と見えまする。

文覺　併し、それが女夫の緣結びの本道ぢやよ。搔き口說いたりするは戀の横道ぢや。

政子　でも、それがいつち捷徑でござりませう。

文覺　今から、その樣に拔道ばかりめがけるやうでは、親たちも安心はならぬの。

政子　でも、上人も袈裟樣をうちつけに搔き口說いて……

文覺　免せ／＼、それは過去の夢ぢや。えゝと、それよりは差當り判官の一埒ぢやが、そなたに戀文をつけぬといふだけで、あの判官を嫌ふのか。それならばあの男にもちと氣の毒ぢやの。

政子　いゝえ、そればかりではござりませぬ。

文覺　（政子の顏をぢつと見て）　はゝあ、そなたには戀人があるな。

政子　（驚いて）　如何してその樣な事がお解りになりまする。

文覺　わしは天下無双の相人ぢや。この目で一睨みすれば、如何なる人間の腹の底の祕密でも隈なく解る。

政子　（わざと顏をつきつけて）　それならば其戀人は誰で

ござりますか。

文覺　（引かれて躊躇する）されば……、まあ其方から云うて見い。

政子　解りませぬか。

文覺　滿目蕭索、有情非情、此法師の活眼をまぬかるゝものとては無い……。が、さう何もかも云うてしまうては靈驗が無い。その戀人はどこの誰ぢやな。

政子　心もとない相人ぢや。では申しまする。

文覺　ふむ。

政子　蛭が小島の佐殿で御座りまする。

文覺　蛭が小島の……あゝ、賴朝か。

政子　（誇顔に）清和天皇十代の後胤、前左兵衛佐源朝臣賴朝どので御座ります。

文覺　それで、そなたは、田舎武士を、毛嫌するのぢやな。成程、あれでも、十三までは都で育つたのぢやからな。

政子　それに、なんと云うても、こゝらの田舎武士とは、氏、素性が違ひまする。

文覺　わしは、あの男の小童（こわつぱ）の時に、一二度、垣間（かいま）見た事もある筈、それから、もう、二十幾年ぢや。今度、同じ伊豆の國へ流人となつたが、いつも折惡しうかけ違うていまだに顏を見知らぬ。どの樣な男になつたか、逢ひたいものぢや。

政子　それは威あつて猛（たけ）からぬ優美なお姿……

文覺　いや、もう、わかつた〳〵。

政子　それに……

文覺　（語せはしく）そこで、そなたの父御は其れを知つて居るのか。

政子　弟の話では、薄々氣取つて居る樣で御座ります。でも、何事も心の底に疊み込んで居る父の事ゆゑ、しかとした事は解りませぬ。

文覺　ふむ、して母御は、如何ぢやな。

政子　誰の秘密でも知らずには居られぬ、母上の事で御座ります。無論知つて居りませう。

文覺　それに母御は、そなたとは、繼（まゝ）しい仲であつたな。

政子　さうで御座ります。其の上母上は、生みの子の妹に佐殿を娶合せたう思うて居ります。わたしは、其れが、心がかりでなりませぬ。

文覺　繼母どのが、邪魔せうといふか（間）よし、それならば、この戀は、わしが肝煎つて遂げさせうぞ。

政子　あゝ、忝けなう御座ります。でも父は何と申しますやら。

文覺　いや、其の方は心配すまい。父御は人並はづれた、慾張りどのぢや。毒を持て毒を制す。慾で、持かけたら、屹度動くわ。

政子　まあ。（怨めしさうに文覺を見る）

文覺　許されい。これはちと言過であつたかの。頼朝こそは、大將軍家の嫡々、やがては天下を掌握すべき、大福相ぢや。今の中に聟に取つたら、御身は卽ち一天下の外戚、家門の繁昌いふまでもないと、かう大袈裟に、もちかけるのぢや。わしの觀相の力は、時政どのも、よう、知つてぢや。先頃の病氣を、いひ當てたのも、修善寺へ入湯させて、間もなく平癒させたのも、わしぢや。其わしの口から、娘の戀人が天下取りと知つては、口伊豆の小大名の山木判官などは、日輪の前の螢の光ぢや、二言までもなく、そなたたちを女夫にするわ。

政子　でも困つた事には、あの佐殿には、その樣な野心がとんと御座りませぬ。一門親屬の菩提を弔ふが、今の身の勤めぢやというて、毎日法華經ばかりを讀誦して居られます。

文覺　（不快氣に）なに、血氣盛りの若者が經文ばかり呻つて居る？　武門に生れながらさて〳〵呆れ返つた腰拔ぢや。この文覺などはあの一大事に、一念發起して、この身體にはなりながらも、折々全身にうづまき湧き立つ妄想妄念の荒波を抑へかねて、或る時は、那智の大瀧に此の身を打たせ、或る時は三十一日の船路の旅に一粒の穀をも絕つ。斯うまで五體を無理に苦しめても煩惱の羈は、なか〳〵に絕ちがたいを、おのれ、凡俗の身でありながら、讀經三昧に日を送るなんどとは、下根下劣の大馬鹿ものぢや。武士らしいだけでも、山木判官の方が、まだしもぢや。

政子　それでも、わたしは、佐殿がいとしい。（泣き出す）

文覺　（又軟化して）よい〳〵、それ程までに思ひ込んで居るなら、强ひて思ひとまれとは云はぬ。では、兎も角もその腰拔どのに、わしが逢うて見よう。こゝへ、寄越して見ては如何ぢや。

政子　逢うても、優しうして下さらねば……

文覺　承知ぢや〳〵。逢うた上で、如何やら物になりさうなら、唆かけて見てやらう。

政子　それでは直ぐに、これへと申しませう。

文覺　と云うても、さう急には來られまい。

政子　なに、直ぐでもよろしう御座ります。あの人は觀音堂で、わたしを待つて居ります。

文覺　觀音堂で……これ〳〵、あそこは、淸淨な佛の庭ぢや。逢引きの場所にしては勿體ない。

政子　觀音さまは、上人の樣に嫉妬深うは御座りませぬ。

（政子はいそ〳〵と下手に去る）

文覺　これ、今日でなうてもよいわ。

（弟子相照、次の室より出で來る。）

相照　政子さまには、もうお戻りで御座りましたか、白湯でも差上げようと存じましたに。
文覺　あんな者には、水でもぶつかけてやれ。
相照　ヱ、なんぞお氣にさはりましたか。
文覺　あつちへ失せえ。
相照　はつ。
文覺　失せえ。
相照　はつ……あの下男の與次太夫が、お目にかゝりたいと、申して居りまするが。
文覺　與次太夫……地ならしの事であらう。こつちへ寄越せ。
相照　はつ。
（相照は次の室へ去る。藪鶯の聲遠く聞ゆ。やがて、上手より下男與次太夫、片手に鍬、片手に髑髏を持つて入り來る。）
與次太夫　上人さま。
文覺　何ぢや。
與次太夫　（髑髏をさし出して）こんなものが飛び出しました。
文覺　（それを手に取つて）何處からな。
與次太夫　御入定の庵室を作るべいと、あの洞穴の地ならしをして居ましたら、土の中から、ころりと轉がり出ましたゞ。どんな奴の沙利骨か知んねえが、斯う白く、晒れてるところを見ると、二三十年は確かに立つて居ますだあ。
文覺　なる程なあ。久しく土中に埋もれて居たものと見えて、すつかり晒れ切つて居る。何ぢや、こゝに傷があるぞ。
與次太夫　なアに、それは、今わしが鍬で、がちりとやつたので御座りまさあ。……、斯う古くなつたら、痛いも痒いも、わかりはしますめえ。
文覺　兎に角、斯う泥だらけではしやうがない筧の水で洗つて呉れ。
與次太夫　はい〳〵。では、久しぶりで、顏を洗つてやりますべい。
（筧の水にて髑髏を洗ひ、衣服の袖にて拭きながら文覺の前に來る。）
與次太夫　生れ返つた樣に綺麗になりましたゞ。この樣子ぢや、昔は大した別嬪だつたかも、知れましねえな。上人さまが、ちよん斬つたと云ふ、袈裟とか法衣とかいふ人の首ぢやアねえかな。
文覺　馬鹿を云へ、袈裟の首は鳥羽の戀塚に埋めてある、それに、これは、男にしても餘程大きな頭ぢや。
與次太夫　それぢやあ、蛭が小島に御座らつしやる頼朝樣

の父様の首かも知んねえ。あの人は闇なし一番のどたまだと云ふ評判だから。
文覺　頼朝の頭は、そんなに大きいかな。
與次太夫　何でも大抵の人の、烏帽子ぢやあ、あの人の頭にやあ、のつからねえつて事で御ぜえまさあ。
文覺　それ程、大きいのかなあ。（ぢつと髑髏を見入る）
與次太夫　誰の沙利ッ骨でも構はねえ。二十年も地べたに、潜り込んで居たんでは、魂魄は中有に迷つて居るに違えねえ。上人さま、一つお經を上げて、成佛さしてやつておくんなせえ。
文覺　よいとも〳〵。
（阿那坊、下手よりかけ出で來る。）
阿那坊　師の坊、世になし源氏がやつてまゐりました。
文覺　誰れが來た。
阿那坊　蛭が小島の流人どので御座ります。
文覺　なぜ、名を云はぬ、どの樣な人に對しても、其の樣な無禮な事をいふものではない。
阿那坊　師の坊の眞似をして見たのぢや。
文覺　おのれ。（思はず手にせる髑髏を投げつけようとする）
與次太夫（驚いて）上人さま、それを礫がはりにしちやあ、可哀さうだ。

文覺　左樣であつたの。
阿那坊　前兵衛佐、源朝臣頼朝どのは、なんとなされます。
文覺　これへ通せ。
阿那坊　畏つて候。
（阿那坊は、わざと侍めかして下手に去る。）
與次太夫　上人さま、それは如何しますべえな。
（髑髏を指す。）
文覺　置いて行け。
與次太夫　では、上人さまがお經を上げてくれさしつたら、あとで何か好きなものでも御馳走して、改めて葬つてやりますべえ。
文覺　それは、奇特な事ぢや。わしも寄進につかう。相照に云うて欲しい程貰うて行け。
與次太夫　有難う御座ります。それでは、もう少し經つたら、其の佛を貰ひに來ますべえ。
（與次太夫、いそ〳〵として上手へ去る。）
（文覺は髑髏を、ぢつと見て、思はず微笑する。やがてそれを手にして、次の室に入る。）
（左兵衛佐頼朝、阿那坊に案內されて下手より入り來る。）
阿那坊　さゝ、お上りなされませ。
頼朝　して、上人は。

阿部坊　只今まで、これに居りましたが……

（文覺、次の室より出で來る、驚て賴朝を見るや、電光に打たれし如く、へた〳〵と護摩壇の前に平伏する。）

阿部坊　やあ、また、狂氣がはじまつた。

文覺　おのれ、何を吐す、失せ居らぬか。

阿部坊　失せます〳〵。

（下手へ走り去る。）

文覺　この文覺、日本國中を修行して、在々所々に源平兩家の公達とも見參致したが、殿の如き威應の相あるおん方を、たんだ一人も見奉つた事は御座らん。誠に殿こそは、一天四海を率行すべき大將の相好完備して、大果報の末賴母しき御方ぢや。まづ〳〵、あれへ。

（文覺は賴朝の兩手を取つて上座に直す、賴朝は茫然として席に着く。）

文覺　（涙を流し）まことに、故下野守殿を、其儘の御姿ぢや。頭の殿、若しこの世に在して、此體を御覽じられたら、如何ばかり御よろこびなさる事であらう。由緣(ゆかり)のふたゝびならぬ此法師でさへ、鬼の目にもこの涙ぢや。（泣く〳〵）

賴朝　草刈る童にさへ、世になし源氏とうたはれて、世にも、人にも棄てられし賴朝の今の身には、その情ある語こそ、肝に銘じて、忝けない。行末ともに、親しう交つてくだされい。

文覺　（いよ〳〵涙に咽び）勿體ないお語ぢや。源氏こそは、淸和天皇の後胤、六孫王の末葉にして、一天の守護、四海の將軍たるべき家柄ぢや。其嫡々の佐殿が、如何に武運の末なればとて、文覺如き痩法師に、今のお語は、何事ぢや。況して、只今も申した如く、殿には天下を管領すべき瑞相が御座る。唐土にては漢の高祖……

賴朝　（あたりを憚りて）思ひもよらぬ其の語。一家一門悉く殘落してわれたゞ一人、かゝるいぶせき片田舍に、わづかに露命を繋ぐ薄運の身の上ぢや。萬一、平家の耳にでも入らば、此の身の一大事と、ならうも知れぬ。以後は決して其樣な……

文覺　（哄笑して笑ふ）文覺の觀相はたんだ一度の見損じもござらぬ。此法師の兩眼こそは、決して凡夫の眼でない。左は大聖不動明王、右は孔雀明王の御目ぢや。人の果報を知り日本國を照し見る事、さながら掌(たなごころ)を指すが如くぢや。今は早、何の躊躇、疾く〳〵謀叛を起し、平家を打滅ぼして、父の恥を雪ぎ、天下の主となりなされ。

（文覺は次第に賴朝の前に詰めよる。）

賴朝　（不安らしく）思ひもかけぬ事ぢや。此の身は勅勘を蒙りたれば日月の光にあたるさへ憚りある。況して池殿の尼御前には、一命を助けられたる大恩さへあるに、

平家へ對して弓矢を向けんなんどとは、夢にだに思うた事はない。髪こそ絶たね、心には墨染の法衣を纏ひ、日毎に法華經二部を轉讀して、父母親屬、殊には池の尼御前の冥福を祈る外には餘念もない。謀叛などとは耳にするさへ恐ろしい。

文覺　（俄かに狂氣の如く）弱蟲め、恥知らずめ。

頼朝　えつ。

文覺　卑怯もの、腰拔武士、日本一の大馬鹿者。

（云ひ棄てゝ次の室に駈け入る。頼朝は悄然として立上り去らうとする。）

文覺　（次の室にて）待て、左兵衞佐。

頼朝　何と。

（文覺は左手に先刻の髑髏をもつて出で來り、護摩壇より獨鈷を取り、それにて髑髏を碎かんとする。）

頼朝　（驚いて之を止めながら）如何なる人の髑髏か知らねど、出家沙門の身にてそのあらけなき振舞は、あまりに兇惡無慚ぢや。まづお靜かになされい。

文覺　若し、此髑髏に靈あらば、おのれが如き不孝者の、卑怯な語を聞くさへ口惜しからう。二十餘年の修羅の妄執をたゞ一擊に微塵に碎き、左馬頭義朝が未來の苦患を救うてやるのぢや。

頼朝　（驚きて）な、なに、これがわが父の……

文覺　左樣ぢや。平治の昔、三條の河原にて獄門にかけられたを、此文覺が盜み取つて久しく土中に隱し置いたのぢや。

頼朝　（髑髏の前に額づいて）斯くと知らば一日も早く此庵室に推參し、父上の御骸に見參しまゐるべきを、間近く住みながら一片の香華をさへ、捧げ申さゞりし此身の罪、御詫の致しかたもござりませぬ。

文覺　（涙ながら）國こそ多けれ、所こそ廣きに、御身もわれも同じ國に流され、二十餘年の長の間、隱し置いたる此首を、今見參に入るゝこそ、よく〱深い由緣でござらう。（頼朝の嗚咽する態を見て、急に怒り立つ）併しそれもこれも無益になつた。己のやうな謀叛一つ得起せぬ卑怯者を子に持たれたは、下野守どのが七生までの憾みであらう。最期の無念を其儘に宿したる髑髏に、おのれが如き腰拔け面を見せたは、此文覺が一代の不覺であつた。下野守殿。免して下され。

（聲を放つて泣き、やがて髑髏をかき寄せ、獨鈷をふるつて又打碎かうとする、頼朝は文覺の手にすがりつき。）

頼朝　上人、お待ち下されい。只今の御教訓心に銘じ、左兵衞佐頼朝初めて迷夢の醒めたる思ひ、平家追討の旗上げ、屹度思ひ立ちまする。

文覺（嬉しげに）うむ、うむ、乾度謀叛を起すな。

賴朝　父義朝公、尊靈も照覽あれ。佛神の怨敵、王法の朝敵たる清盛法師、ならびに平家の一門一類を、必ず追討致しまする。

文覺　うむ、それでこそ源氏の嫡々、左馬頭どのが祕藏の子息ぢや。

賴朝　それにしても、此賴朝は勅勘の身の上、無名の師は勝利の程が覺束ない。せめては竹の園生の御方の御令旨にても申受けて。

文覺　令旨までもない。これより直ちに新都福原の櫻の御所へ馳せまゐり、院宣を申し受けよう。

賴朝　併し上人とて、世を憚るべき勅勘の御身ゆゑ。

文覺　院の御所には前兵衛督光能とて、此法師が外戚のゆかりの者がある。此者について歎き申せば、仙洞の宣旨を申受けんは必定ぢや。

賴朝　それにしても流人の身にて、此伊豆を脱け出す手段はござりますか。

文覺　それとても易い事ぢや。先頃より七箇日入定の旨を、國中に披露して置いたこそ幸ひぢや。庵室の下へ穴を掘らせ、そこより拔出して都へ馳せ上り、七日目の夕暮までには必ず立歸るわ。

賴朝　驚き入つたる上人の大妙策、唐土の孔明とても及びますまい。

文覺　その樣な空世辭は嬉しうもない。それよりも事成就の曉に、十分の禮は心得て居らうな。

賴朝　申すまでもござらん。天下だに手に入らば、五國十國の所領はお望みのまゝに寄進致す。

文覺　いや、此痩法師に所領の望はない。欲しいは高雄神護寺造立の寄進ぢや。

賴朝　いづれの國にても御所望通りに致し申さう。

文覺（笑つて）さて〳〵大腹中の將軍ぢや。但し何事でも、おのが物とならぬ中は、誰しも腹の廣いものぢやが、一旦わが物となつたら最後、出し惜みのせらるゝが人情ぢや。今の内に寄進狀を書いて貰はう。（傍らにありし文臺をつきつけ）よいか、丹波の國に五ヶ所、播磨の國にも同じく五ヶ所、土佐の國に十三ヶ所、さあ、判形を書いて下されい。（賴朝の書きし寄進狀を默讀して）これでよい、これでよい。此上は庵室の造營が大急ぢや。こりや、相照々々。

相照（次の室にて）はあ。（相照出て來る）

文覺　與次太夫を呼べ。

相照　與次太夫は先程から庫裏にて御待ち申して居ります。あの髑髏の事につきまして……

文覺（はつとして）いや、わしの云ふのは與次太夫では

ない。與次兵衛ぢや。

相照　(不審さうに)　與次兵衛……與次兵衛と申しますと……。

文覺　それ、北條の匠の頭次兵衛ぢや。はゝゝゝゝゝ。

(相照も頼朝も怪訝さうに文覺を見る。藪鶯の聲、櫻花しづかに散る——暗轉。)

(二)　原木村一軒茶屋

下手よりに草の屋、酒、餅などをひさぐ。家の前には自然木の床几二ツあり、一ツには前場の寺男與次太夫と阿那坊と腰をかけ、與次太夫は酒を飲み阿那坊は餅を食ひ居る。茶やの主なる老婆小笹は家の中にて麻をつむぎ居る。

小笹　與次太夫どのは今日は大層な上景氣ぢやの。

與次太夫　うむ、今日は思ひがけない金が舞ひ込んでな。

小笹　それは結構な事ぢや。七半でも打つて勝たしやつたか。

與次太夫　何の、今度上人さまが、あの觀音堂の洞穴の中で、七日の入定をさつしやるについて、けさ地ならしをおつ初めただ。すると如何だ。鍬の先へがちりと當つたものがあるだ。

小笹　それが金だね。

與次太夫　おれも左樣かと思つて拾ひとつて見ると人間のしやりつ骨よ。

小笹　やれ〳〵、南無阿彌陀佛、々々々々々々。

與次太夫　併しの、それも何かの緣に逢ひねえ。これあ。おれに弔つて貰えていいといふ、佛の賴みだんべいと思つたでの、上人さまに御回向をお願ひ申しただ。すると平常は狂人じみた上人さまだけんど、根があゝ云ふ涙脆え方のこんだから、それは奇特なこんだ。何か佛の好きさうなものを馳走してやれつて、金をうんと下さつたゞ。

小笹　それこそ御奇特の事だつたな。それにしても、おめえ。そのお金でてめえの腹ばかり肥したのでは、回向にも何にもなんねえでねえか。

與次太夫　さあ、そこだよ。おめえ、その佛が何が好きだか解るかな。

小笹　生れ素性せえ知れねえものに、好き嫌ひの事が分りやうがあるものけえ。

與次太夫　それでおれも當惑したゞ。若し下戸の佛に酒を手向けたのでは冥路の障りになるだんべいし、と云つて、上戸に餅ではこれも迷ひの種だ。そこでいろ〳〵と考へた揚句が、上戸ならおれが名代になり、下戸だつたら阿那坊どんに代り役をして貰つてどつちみち佛に苦勞をかけねえ事にしただよ。

小笹　可哀さうに、佛さまこそいゝ面の皮だ。
阿那坊　しやりつ骨に面の皮があつて堪るものか。
小笹　あれまあ小僧さま、そんな憎まれ口を叩かつしやるもんぢやアねえよ。
阿那坊　餅がなくなつて口がひまになつて來たから、そろそろ憎まれ口でも利かなければならない。
與次太夫　無くなつたら、もつと貰つて喰べたがいゝぢやねえか。
小笹　腹も身の中だ。ちつとは加減をしなさるがいゝ。先刻から大人の五人まへも喰べてしめえなすつたゞ。
阿那坊　愚僧は身體こそ、少々小ぶりだが、智慧にかけては、大抵の大人の十人まへはあるから、喰ひ物も從がつて餘計に入るわけだ。なにしろ喰ふものも、喰ふものも、みんな智慧袋へ入つてしまふから、ちつとも身になりはしない。
小笹　全く日から先へ生れて來なしつた樣な小僧さまだ。
阿那坊　だから、生れ落ちると直ぐに天上天下、唯我喰尊とのたまはせられた。
與次太夫　煩くてならねえ。もう少し口ふさげをやつてくんなせえ。
小笹　でも、餅はみんなになつてしまつたゞ。
阿那坊　嘘をつけ、まだあの園の中に一盃殘つて居らア。

小笹　あつ。見附けたかね。
阿那坊　今度は日から先へ生れたやうな小僧さんだと云ひたからう。さア、物惜みをせずに、出せ〳〵。
小笹　あればつかしは御領主さまのお云ひつけでも出せましねえ。
阿那坊　何故によ。
小笹　あれは蛭ヶ小島の頼朝さまへ上げるのでがんす。
與次太夫　なに、頼朝さまへだつて。
小笹　あの方が蛭ヶ小島へ初めて流されて來なすつた時分から、丁度二十年といふもの、おらあ毎日缺かさずに、此餅を獻上する事にして居るだよ。
與次太夫　おらあちつとも知らなかつたが、何だつてそんな事をして居るのだ。
小笹　だつて、おめえさま。あの方は大將軍のお家筋だつていふぢやアねえか。いくら世の末だつていひながら、それほどのお家の若殿樣が、あんな蛭ばかりのたくつて居る島の中で、粟の入つた糧飯を喰つてござらつしやつたぢやアねえか。此節はやつと武藏の方の御家來から、飯米の仕送りも來るやうになつたさうだが、あの頃の苦患艱難は與次太夫どの、おめえも知つてゐさつしやらう。おらあ、それが氣の毒でなんねえから、毎日一盃づつお初穗を上げる事にして居るだよ。

與次太夫　一日一盃づつにしても、二十年と云つちやあ大したものだ。頼朝さまも、さぞ有難く思つて居なさるだんべえ。

小笹　（笑つて）世が世なら、こんな田舎婆あの、こねた餅なんざあ、間違つたつて召上つちやあ下さるめえ。それを思ふと此方の方が餘程有難てえだよ。

阿那坊　あゝ、おれも將軍の家に生れて、毎日餅が喰ひたかつたな。

與次太夫　將軍さまの公達（きんだち）が、毎日上人さまにどやされて居れあ世話はねえだあ。はゝゝゝ。

小笹　全くだ。ほゝゝゝ。

阿那坊　（態と上手の方を見て）やあ、餅喰ひの將軍さまがやつて來らあ。

與次太夫　ほんに頼朝さまだ。睦まじさうに話をして來なさるのは、北條のお姫さまぢやあねえかな。

阿那坊　さうだ政子姫だ。先刻は師の坊のとこで油を賣つて居たつけが今度は世になし源氏どのとべた〱して居らあ。あんなに男の好きな娘ッ子もない者だ。

小笹　これ、子供の癖に、そんな、ませた事をいふもんぢやあねえ。あの方々はこゝで休んで行きなさるだ。與次太夫どの、おめえも奥へ行つて飲んでおくんなされ。

與次太夫　よし〱。「人の戀路は邪魔せまい〱」

阿那坊　「邪魔をしたら、犬まろに喰はせうぞ。犬まろに喰はせうぞ」（謠ひながら踊る）

小笹　そなたも、なか〱隅へは置けましねえな。いつそ、何處ぞへ行つて遊んで來なされ。

阿那坊　あゝ、狩野川へ行つて、鮠（はや）でも漁つて來よう。

與次太夫　滅相な。出家が殺生をなさるといふ事があるものか。

阿那坊　師の坊などは、人の首さへ斬り居つた。「犬まろに喰はせうぞ喰はせうぞ」

（阿那坊は踊りながら下手へ去る。）

（與次太夫は酒杯をもつて家の中へ入る。小笹は床几の上をかたづける。前場の頼朝、白の絹にて包める髑髏を手にし、上手より出づる。政子もつゞいて出づ。）

頼朝　媼、そこを借りるぞ。

小笹　ようおいでなされました。お姫さまも御一緒にお詣りでござりましたか。

政子　つい、そこでお目にかゝつたのぢや。

小笹　さあ、何卒おかけなされて下さつしやりませ、誠にむさくるしうはござりますが。……さう〱殿様、お初穂が取つてござりますだ。さあ、一つ召上つて下さつしやりませ。

（戸棚より餅を取り出し、白湯を二人に出す。）

頼朝　いつもながらのその親切・頼朝忝けなく思ふぞ。やがて天下を……いや、世に出る事もあらば、此恩は屹度返すぞ。

小侍　（涙ぐんで）其お話でもう／＼澤山でござりますだ。（思ひついたやうに）奥にお客様がござります。一寸御免なされて下さつしやりませ。お姫様、たんとお話しなされやし。

（小侍は與次太夫の側へ酒をもち行く。二人は床几にかける。）

政子　して、上人はどの様な事を仰有りました。

頼朝　わしの顔を見ると、突然わしの相を褒め立てゝ、（俄に聲を潜め）天下を掌握する威相があると云ふのぢや。

政子　まあ。

頼朝　而して、わしに（政子の耳に口をあてゝ囁く）と、勸めるのぢや。

政子　（微笑して）で、あなたは何と返事をなされました。

頼朝　何分にも、あの法師の腹がのみ込めぬ。平家の手先となつて此頼朝を陷れん謀計かも知れぬと思うたによつて……

政子　（不安になりて）何となされました。

頼朝　わしには其様な野心は毛頭ない。わしには父母親族、わけても池の尼御前の菩提を弔ふ外に餘念はない、と、きつぱりと斷つた。

政子　それで、ようあの上人が納得致しましたな。

頼朝　するとあの法師、俄かに狂ひ出して、雷の落ちかゝる様な悪口雜言ぢや。而してこの様なものを持出して理不盡に打碎かうとするのぢや。（絹の包をとく）

政子　それは何でござります。

頼朝　（髑髏を示して）父左馬頭の髑髏ぢやさうな。

政子　（直覺的に）誠でござりませうか。

頼朝　さあ、それは解らぬが相手は妄語を戒むる出家の事ぢや。それに、外の事とは違ふ、まさかに此様なもので他を欺しもせまい。

政子　それも左様でござりますな。

頼朝　それに上人の話では、父上の頭は拔群に大きかつたといふ。而してこの髑髏も人並ならず大きいと云ふ事ぢや。

政子　其の様な證據があるなら、頭殿の頭に違ひはござりますまい。

頼朝　（あたりに心を兼ねて）上人は此の髑髏の前で散々にわしを叱られた。卑怯者、腰拔武士、此様な不孝者の面を見せるは此の頭に氣の毒ぢやと罵られた。

政子　それで、それで、あなたは謀……あの決心をなされましたか。

頼朝　父上が最後の無念を思ふと、惣身の血潮が湧き立つばかりに思はれた。それ故（聲を潛めて）たうとう一大事を思ひ立つた。

政子　あゝ嬉しうござります。（政子頼朝にすがりつく）上人は父へ勸めてくれるでござりませうか。

頼朝　おゝ、直ぐに行くと云うて居られた。程なくよい返事があるであらう。

政子　殿。

頼朝　政子どの。

（兩人は感極まつて涙に咽ぶ、此の時與次太夫踉踉として二人の側に來る。）

與次太夫　これは殿樣、お姫樣、へ、へ、お樂しみでござりますな。

（小笹は心配げにあとより跟き來り、與次太夫の袖をひき。）

小笹　これ、與次太夫どの、若い方たちのお邪魔をするものではねえよ。

與次太夫　いや邪魔するわけぢやねえが一寸殿樣に伺ひてえ事があるだ。

小笹　今でねえたつて好いぢやあねえか。

與次太夫　うんにや、今の今でなけれあなんねえ事だ。殿樣、このしやりつ骨はどつから持つて來なすつただね。

小笹　これ、殿樣に失禮な……

與次太夫　いや、失禮でねえ、殿樣、一體これはどこから手に入れさつしやつた。

頼朝　奈古屋の文覺上人から貰うて參つた。

與次太夫　へえ上人さまから……殿樣、一寸見せておくんなせえ。（取らうとする）

頼朝　（取返して）これだけは許してくれ。

與次太夫　そんなに隱すにや當るめえ。燒いて喰ふべえとは云やあしねえ。

小笹　（氣をもんで）これ與次太夫どの……これは殿樣の……

與次太夫　（手に取つて）やあ、こいつに違ひねえ。

頼朝　その髑髏が何とした。

與次太夫　これはおれがだ。

頼朝　そちは酒に醉うて居るな。それは父の髑髏ぢや。

與次太夫　（腹をかゝへて笑ふ）冗談ふつちやあいけましねえ。こいつあ、今朝わしが觀音堂の洞穴から、掘出したしやりつ骨だ。これ、そこに證據があるだ。

頼朝　どれ何處に。

與次太夫　これあわしが今朝鍬でつけた疵だ。

頼朝　併し上人は二十年前に、三條の河原から、盜み出した父の髑髏ぢやと云うて居られたが……

與次太夫　（一層笑つて）たうとうおめえ樣も上人さまの大法螺に吹きとばされやしたの……

頼朝　なに、上人が僞りを……

與次太夫　上人さまあ日本中に並ぶ人のねえ程偉え坊さまださうだが、折々出たらめを云つて人をかつぐのと、何でもねえ事で人をなぐるのが惡い癖でごぜえやすよ。

頼朝　それならば、これは何者の髑髏ぢや。

與次太夫　そんな事が誰に解りやすもんか。二三十年この方、あんな場所で人の首なんか葬つた事あれえだから、どつかゝら犬でも咬へて來た宿無しか、乞食の首でもあんべい。

頼朝　さうか、名も無いものゝ首であつたか。生の父上の御しるしと思うて、不孝の罪を詫びた此頼朝は、日本一の大馬鹿ものぢや。あの賣僧の僞りさへ看破する事のならぬ、愚かな此身に、どうして一大事が企てられよう。

政子どの、面目ない。

政子　無理にお勸め申して、逢うて戴いたわたしが猶更面目なうござります。あゝ、あの上人が、わたしまで欺さうとは……

頼朝　えゝ、思へば腹立しい……

（髑髏を大地に投げつける。與次太夫之を拾ひつゝ。）

與次太夫　此しやりッ骨には何の罪もねえ、粗末にしては貰ひますめえ。さア〳〵、寺へ連れて歸つて、ねんごろに葬つてやりませう。

（與次太夫は髑髏を手にして蹌踉と上手へ去る。頼朝は引止むる勇氣もなく、悄然として其後姿を見送る。政子もおのが撒いたる種子の意外なる實を結べるに驚き、茫然として佇み居る。）

小笹　あれ、與次太夫どの、おめえ、まだ勘定は濟んでねえんだよ。これ與次太夫どの、與次太夫どの。

（小笹はあわてゝ與次太夫のあとを追ふ。家の後ろに鳩の啼く音。）

頼朝　左樣ぢや。初めから案じた通り、あの賣僧めは平家の間者ぢや。見え透いた手段にかゝつて、此身の破滅を招いてしまうた。（身悶えして怒る）

政子　あれ程親切にして居てくれた上人が、僞にわたしをだまさうとは思はれませぬが。

頼朝　二人の仲を聞いて、俄かに嫉ましくなつたのぢや。

政子　ほんに左樣云へば……いや、いや、それほどの心の狹い上人ではない。

頼朝　袈裟をさへ殺した男ぢや、何をするか解るものか、（上手を見る）やあ、賣僧めがこつちへ來る。

政子　おゝ、ほんに上人が……

頼朝　おのれ、今の復讐を……

（頼朝は上手に走り入らんとす。文覺莞爾として上手より姿を現す。）

頼朝　文覺御坊……

文覺　はゝゝゝゝ、いや與次太夫から理由は聞いた。あの髑髏は違うて居たさうぢやな。

頼朝　默れ、文覺、おのれは此頼朝を……（刀に手をかける）

文覺　（哄笑して）はゝゝゝ、さう怒つては折角の人相が惡うなる。佐殿、御身はあの髑髏を何と思うてござる。あの様なものは畢竟人間が使ひ古した智慧と力の糟の塊ぢや。一旦髑髏となる上は貴人も下民も差別はない。ただ人間の貴い魂が、あのやうなむさい古骨などに宿つて居ぬだけが定ぢや。

頼朝　そ、それにしても……

文覺　この文覺が今日御身に引合せたは、下野守どのの古骨ではなうて、尊い父御の魂ぢや。わしは折から土中より現れたあの一片の枯骨を借て來て、御身の心の底に眠つて居た源氏再興の魂を呼び醒したのぢや。あの髑髏が、よしや乞食乞丐の骸であらうとも、其爲にこの天下が、御身の兩の手に入つたら、御身に取つては、父御の眞實の首よりも、一入尊い寶ではないか。

頼朝　えツ。

文覺　（冷かに）それとも此法師に欺された口惜しさに、折角思ひ立つた一大事を棄てゝしまふか。

頼朝　うむ。

文覺　佐殿、髑髏は贋物でも、人相だけは本物ぢや。「天の與ふるを取らざれば反つて其咎めを受く」とは、漢書の語ぢや。政子どの、戀人のあの人相を、持ち腐れにしてしまふは惜しうはないか。

政子　（哀訴するやうに）佐殿。

頼朝　上人、お免し下され。

政子　上人樣、この通りでござります。（政子は文覺に手を合す）

文覺　（快よげに）よい、よい、雨降つて大地固まるぢや。これで佐殿の決心も固うなつたであらう。

頼朝　面目次第もござりませぬ。

政子　善は急げぢや、上人、少しも早う父上にも……

文覺　左樣ぢや。丁度よい折ぢや。これから直ぐに一緒に行かう。三人で推かけて、あの慾張爺を煙に捲いてやらう。

政子　また、その樣な……

文覺　その樣に苦い顔はせぬものぢや。（頼朝の肩をたゝいて）そなたの父御に輪をかけた慾張どのがこゝに居るわ。無慾のこの法師に馳けめぐらせて、天下を我物に

せうといふ日本一の大慾張ぢや。（賴朝と政子は相顧みて苦笑する）

文覺　慾張といへば、佐殿、髑髏が贋物になつたと云うて寄進狀は反故にせまいの。

賴朝　賴朝は嘘をつくが嫌ひでござります。

文覺（歩きながら）これ、左樣皮肉にはいふまい。（花道の附際に立ちて）佐殿々々。

賴朝（政子と共に文覺の側に來り）何事でござります。

文覺　今度は本物の下野守殿の髑髏を探し出して、新たに一寺を建立せう。その時には何ヶ國程の寄進をして下さるな。

賴朝　さア、それは……

政子　僅かな事が極つてからになされませ。又欺されてはなりませぬ。

文覺　今から雞鳴（かんどり）が時をつくらせては、源氏の末も思ひやられるぞ。あはゝゝゝ。（政子は顏を背く。賴朝はひそかに微笑す。文覺先に三人打つれて揚幕に入る）

――幕――

大森痴雪篇

秋成の家

時
明和五年　秋

處
大阪曾根崎

人
上田　秋成　俗稱東作（三十五歲）
おなみ　花屋の主婦（二十八歲）
およし　秋成の母（六十餘歲）
おみね　おなみと秋成との間に生れた子（十一歲）
金次郎　博徒（三十餘歲）
建部　綾足　秋成の友（四十餘歲）
加藤宇萬伎　秋成の師　江戸の士（登場せず）
小よね　花屋の藝妓
若　龍　花屋の娼妓
おきの　花屋の仲居
おいま　花屋の仲居
濱　德　花屋の客
その他、娼妓、少婢

（一）舞臺面

店の間と茶の間との二室から成る二重屋臺。舞臺の下手の側面に內部から見た格子戶の入口がある。店の間の正面には二階座敷へ通じる箱梯子がある。茶の間の正面には臺所の方へ通じる出入口と押入がある。上手の側面は居間へ通じる吉原障子の出入口。茶の間の壁に數挺の三味線をかけ、鴨居に神棚などが吊つてある室のよき所に長火鉢、水屋などを据ゑ、一方の壁際に線香場が設けてある。曾根崎新地の娼家花屋の體。

秋の日の午後。

藝妓小よねと仲居おきの、おいまの三人が長火鉢の傍で話をしてゐる。店の間の方では少婢が片付けものなどをしてゐる。素人らしい姿に扮した娼妓の若龍が二階から降りて來る。

若龍　姐ちやん、これで宜しい？
（三人の前に起つて粧ひを見せる。）

いま　何や怪態（けつたい）な帶の緊めやう、まるで疊んでひッ附けたやうな。鳥渡待ちなはれ。
（いまは後へ廻つて帶をなほしてやる。）

若龍　素人らしいに見せよう思ふと、どんだけ辛度いか知れへん。
小よし　それであんた、素人に見える積りかいな。
若龍　さうかて素人だんが、この衣見なはれいな、好ううつゝてまッしやろ。
（皆笑ふ。）
少婢　それおいまさんの衣だつしやないかいな。
若龍　余計なこといひな。
（我身も共に笑ふ。茶の間の正面の出入口からおなみが出る。）
若龍　お母アちやん、これで宜しおまッしやらう。
なみ　まアそれで可えわいな、まつさら子供衆とも見えへんやらう。
きつ　姿ばかりがそれでも、肝腎の口氣いつけなあかへんし。
若龍　それがわたい、かなはんの、つい出るしなア。
なみ　おいまどん、あんた一緒に隨て行てやんなはれ、どうもこの子一人ではあぶこしい。
いま　よろしおま。わたい呼出したげるよつて、それから先の肝腎な所、あんたあんぜう云ひなはれ。
若龍　はア、そら云ふし。
なみ　そして是非一度來とくれやす、お母アちやんも殿ましおますよつてとあんぜう云うてな、成るべくその場でお金貰らうといで、宜しいか。
（若龍は不承無精に首肯く。）
なみ　あんたが好きで逢うたお客で倒れが出來たら、皆我が身に係つて來ることは知れてるやないか。それに好きなお客さんと永う續かうと思うたら、其でなうても精々お金取つとかなあかへんし、お金の未練だけでゞも切られんやうになるのやよつて。
若龍　そら、わたいかてよう知つてま。
なみ　まア早よ行て、巧いこと呼出して、精々お金取つて來なはれ。
いま　では、行きまへう。
若龍　姐ちやん、濟ンまへん。（おなみ等に）鳥渡行て來ます。
（二人下手へ去る。直ぐ格子の外で若龍を冷かしたり、はしたなく笑ひさゞめいたりする女等の聲が聞える。やがて風呂歸りの三人の娼妓が下手から出る。）
娼妓の一　若龍はんの、あの澄ました格好どうや。
（三人は見えもなく笑ふ。）
なみ　おゝ、騷々しやの、皆早よ拵へしときなはれ。
（三人はそこ〳〵に二階へ去る。）
なみ　おきのどん、未だか。（上手の居間の方へ眼を向け

る）

きの　へえ、居てゝだす。

なみ　隨分お尻の長いお客やないか、あれ何やね。

きの　旦那はんの學問のお連れらしあす。何や知りまへんけれど、難かしい談してはります。

小よね　隨分とかち〳〵らしい人だんな。最前來やはつた時どうや。上田秋成殿當家におゐでかの……私は……ええと、何たらいふ名や云ははつたし。

（おなみは不快らしい面色で莨をのんでゐる。）

なみ　一體、何思うて今時分にヒョッコリ戻つて來たんやろ。ほんま云うたら、今更になつてこの家の敷居が跨げた義理やあらへん。

きの　旦那はんがだつかいな。

なみ　あんな人、旦那はんなんて云はん措いとくなはい、やゝこしいがな。

小よね　ほな、どない云ひまんね。

きの　本名があるやないか。東作さん。それで結構やし。

なみ　へえ……東作さん云ふお名だんの？　私等當家へ奉公して六年からになるけれど、つひぞ聞いたこともおまへなんだ。

小よね　十年の餘も前に家出たぎり、戻るはさて措いて便りもせん人の名を、汝等が知るもんかいな。

小よね　然やつたら何んだんな、あのお方がほんまに血を分けたお倅ちやんの……

（おなみの不快らしい顏色を見て口を噤ぐ。）

なみ　よねちやん。あんた昨夜金さんに逢うたと云うてはつたな。

小よね　はア、平野屋で、知つてるお客さんいふので行たら兄さんでおました。尤も二人ほど同伴者がおましたけれど……

なみ　二三日家へ寄りつかんと思ふと直きそれや。詮もない。

（やけに莨をふかす。小よねとおきのはそッと眼を見合はす。稽古歸りのおみねが下手から出る。）

みね　唯今。

きの　お歸りやす。

なみ　今日はえらうお稽古が長ごおましたな。

みね　舞も鼓も早よ濟みましてん、そやけれど、三味線今日で上るので長ごおましたの。

小よね　まア、もうひなぶり上つたの？　ほんまにあんた取りが早よおまんな。感心やし。

なみ　なんぼ早よても、直き忘れたらどもならん。また、小よね姐ちやんにさらへて貰ひなはれ。

みね　姐ちやん、さらへとくれやすや。

小よれ　はア／＼とも。あんた舞妓さんに出てだんのやろ、そやつたら精々早うに多種覺えなあかしまへんで。

みれ　お母ちやん、わたい今度目のお正月が來たら、出しとくなはるのだんなア。

なみ　それもあんたの覺え次第やがな。さア／＼、早よ二階へ行てさらへて貰ふといなはれ。

（正面から法體の祖母のおよしが出る、おみれは媚へるやうに縋附く。）

みれ　お祖母ちやん、わたい今日でひなぶり上りましてん。

よし　おゝ、さうか、上つてやつたんか、えらかつたなア。

みれ　然やよつて、約束の御褒賞買ふとくれやすや。

よし　よし／＼、お母ちやんに賴んで買うて貰うたげまつさ。天滿屋の讃子さんの挿いてはるやうな、ぴら／＼の附いた簪、然うやつたなア。

なみ　お祖母さん、何時の間にそんな約束しなはつてん。

みれ　もう疾にやわ。

よし　何卒御褒賞に買うて遣つとくなはい。

なみ　お祖母ちやんは甘いよつてどもならん。

みれ　お祖母ちやん、わたいな、今度目のお正月來たら舞妓さんに出るの。ほんまだつせ。

よし　然うか、えらいえなア。あ、然うや、ぴら／＼の簪、その時まで預かつとこか。

みれ　厭だつせ、厭だつせ。お祖母ちやんてすこい人。ほんまに厭だつせ、え、宜しおますな。

（皆の笑聲に送られておみれと小よれは二階に去る。おきのと少婢は正面から去る。およしは長火鉢の一方に坐る。やがて二階から三味線の音が聞えて來る。）

なみ　お祖母ちやん。あんた何樣思ひなはる？

よし　何がだんね……

なみ　東作さんは何しに戻つて來なはつたのでおますやらう。

よし　さア。十年も碌々便りせんと居たものが、昨日不意に戻つて來て……。けど、私も未だ落々話もせんのやよつて……

なみ　十年前と今とでは、萬々當家も變つてゐますよつてな。

よし　そら然うやとも、あの子にしたところで、そのくらゐなことは能う心得てゐますやらう。

なみ　然うだすやらうかな。けど、爰はあの人の出生の家やし、わたいは根が爰に貰はれて來たもんやし、第一生みの母者人のあんたは恁うして居てだすのやさかい、昔も今も同じやうな積りかも知れしまへん。ひよつと、そんな量見で種々なことに口出しでもしられたら、わたいの立つ瀬がおまへんよつてな。

よし　そんなこと、そら私がさゝへんし、またされた義理合ひではないやないか。昔は兎もあれ、今は立派なあんたの家やがな。あんたの腕一つで爰までになつた花屋やがな。

なみ　お祖母ちやんがその量見で居ておくなはるなら宜しいけれど、十年振にひよつこり戻つて來られて見ると、わたいかて何や恁う……宛然澄み切つた池の中へ、石でもほり込まれたやうな氣持がしますわいな。

よし　そらなア、私にしたかて……

なみ　あんたにしたら實の我が子やもん、嬉しおますやろ。

よし　嬉しいどころか、私は氣術なうて〳〵どもならん。花屋の隱居さんで樂々恁うして暮して行けるのは、みんなあんたのお蔭やもん。それにしても誰に似てあんな變屈な子が出來たのか。

なみ　父親に似てはりますのやらう。

よし　然うやらうか……(苦しき表情)

なみ　お茶屋の子に生れて、中途から氣でも狂うたやうに學問なんぞに凝るとは……。父御がそんな筋の人でゞもおましたんか。

よし　(いよ〳〵苦しき表情)　どう云うたら可えのんか。私の出てた時分は、それは〳〵家が苦しい最中やつたよつて精々とらんならんしなア。

なみ　わたいかて隨分種々なことがおました、あんたと二人の仲でより外、口に出しては云へんやうなことが……

(二人は偶と淋しい眼を見合はし、直ぐ外らす。上手の居間の方から手が鳴る。およしが立ちかける時、臺所から返辭が聞えて、正面からおきのが出る。)

きの　お祖母ちやん、大事おまへん。

(おきのは上手の障子の内へ去る。)

よし　なア、おなみ、あんた東作のことに就いて、何にも氣に懸けんと措いとくなはいや。金さんのことかて、私がグッとも云はせんよつて……

なみ　(急に昂奮して)　金さんのことなんぞ誰が口出しさせますもんかいな。あの人は家やお祖母ちやんばかりやない、わたいもおみねも棄て行かはつた人だす。わたい情夫があらうが、旦那があらうが、そんなこと……

よし　然やよつて、氣に懸けてはというてるのやがな。

なみ　阿呆らしい、氣になんぞ懸けて堪りまつかいな。然や。あの人のこつちや、大方お金でも欲しなつて戻つて來たんやろ。

よし　まさか、そんなことも……

なみ　あんたは我が子やよつて贔屓がつきますわいな。けど、何所の國へ行ても、學者たら云ふもんは皆貧乏に極つてるのだす。錢が欲しいなら欲しいと手ッ取早う云うたら可えのだ。

よし　まア〳〵私に任せとき、今夜にも篤り因果含めて、私が埒を明けるよつて。

（上手から建部綾足を見送つて、上田秋成とおきのが出る。）

きの　おかみさん、お客さんのお歸りだすせ。

なみ　（急に愛想よう）もうお歸りでござりますか。えらい放棄ときまして濟みまへんこと。東さん、何やつたら二階で一杯進げなはつたらどうでおます、直に何なと取りに遣りますよつて。

綾足　いや、決してそれには及びません。（およしに對つて）これは母御前でござりますか、大層長座を致しました。

およし　どう致しまして。待庭東作がお世話さんでござります。貴方はん、まア緩りなはつたらどうでござります。

綾足　有難うござりますが、未だ用事もありますので。

よし　まア〳〵、左樣でござりますかいな。

なみ　では、何卒これに凝りんと、ちよく〳〵遊しにお越しなはつておくれやす。

（二階から身じまひを了まつた娼妓の一人が降りて來る、同時に下手から金次郎が出る。）

娼妓……　あ、兄さん　（おなみに）お母ちやん……

（おなみは浮腰になる。稍狼狽せる體、金次郎は衝と茶の間へ通り、立はだかつたまゝ秋成と綾足とをじろりと見る。娼妓の二と三が續いて二階から降りて來る。三人は不安の眼を見交しながら、口の間の一隅に集まつて雲行を見てる。）

金次郎　（嫉妬の表情）おなみ、談がある奥へ來とくれ。

（上手へ去る。おなみは二人へ氣を兼ねながら續いて去る。秋成は綾足に對して私かに恥ぢる體。）

綾足　秋成殿、繰返して云ふやうなが、貴公も今夜の船で一緒に京へ上らぬか。私一人が二條城を訪れたでは、定めし宇萬伎大人が失望せられるだらうと思ふ。

秋成　然し……思ひ立つた家事上の始末を着けいでは、折角戻つて來た効がないによつて、殘念ながら一足先に上京してお貰ひ申さう。

綾足　然うかなう。笛を携げて倶に澱江の月を賞しながら、貴公が得意の歌論でも聞かうと思うたに、家事上の都合とあつては是非がない。

秋成　師匠へは、直に後から私が上ることを申上げて置いて貰ひたい。

綾足　（態と聞咎めて）ふう、直に後から……。して見ると家事上の始末とやらも存外手輕なことゝ見えるの。私はまた大切な師匠の宇萬伎大人が、京都の勤番に上られたのをさへ訪れぬほど故、餘程重大な要件かと思うた。

秋成　重大と云へば重大、面倒と云へば面倒な用件ではあるが、なに、高が一家の私事で、それも、十分思案を廻らした上で行ふことぢやから。
綾足　然し、最前から大分屈託らしい氣が見えてゐるぞ。お互に學問を以て立つ身が、俗事に囚はれて徒に心を勞するなぞは、餘り好ましいことではない。何か仔細は知らぬが、高が一家の私事といふくらゐのことなら、此際思ひ切つて打捨てゝしまはれたらどうぢや。
秋成　打捨てられることなら、お身の忠告を待つまでもなく打捨てゝゐる。
綾足　いかさまなう。したが、どうも打捨てた方が……
秋成　打捨てた方が……？　何故ぢやな。
綾足　いや。改まつて何故ぢやと問はれると、聊か答へに苦しむが……。なう秋成殿、察する所貴公の云ふ家事上の都合とは、所詮何事か人の心を動かさねば埒の明かぬことであらう。狐狸にも人を魅惑かす通力があるとは貴公の持論ぢやが、その實人間には狐狸にも遥に優る通力があつて、善惡邪正にかゝはらず、躬からの爲めとあるならば必死とその通力を働かすことを思はねばならぬ。通力と通力。信念と信念。先方が動けば此方も動く。先方が狂へば此方も狂ふ。あな煩はしの人の心ぢや、そんなことに心を苦しめうより、寧そ思切つて、倶に京へ上らうではないか。京には加藤宇萬伎大人といふお身を愛する師匠が待つてゐられる。いや、お身の大切な、學問といふ戀人が待つてゐる。その外友としては蕪村がある、楞亭がある、貞幹も居れば景山も居る。
秋成　御厚意は忝けないが、津の國のなにはにつけて疎まるゝ、蘆間の蟹の横ばへる身は……白詠通り云出しては横に這ふ無腸ぢや、疎まれても惜まれても、行る所まで行つて見ねば氣の濟まぬ秋成ぢや、また待時の病が出たと笑うてゞも置いて下され。
綾足　是非がない。ではお暇しよう。
秋成　呉々も師匠へ宜しいやうに。
綾足　承知しました。
（綾足は下手へ去る。秋成は上り口に佇立むでぢつと考へてゐる。娼等は囁き合うては嘲笑の眼を秋成に向ける、やがてはしたなく笑ひながら茶の間の正面から去る。）
よし　東作。鳥渡爰へおいなはい。
秋成　はい。
（長火鉢の傍へ坐る。）
よし　なア東作、十年以來碌しか便りさへせなんだ汝が、何樣な用で不意に戻つておいなはつたンや。私や昨日からそれ訊ねようと思うたのやけれど、つい人目が煩さい

のでで、今まで聞はずに居ましたのや。

秋成　長い間便りさへ怠りました不孝の段は、重々お詫びを申します。

よし　何の、そんなことはまア可えわいな。けどな、十年の月日が經つ間に、家の格合もコロッと變つて居るのやせ。私は取る齢でこの通り隱居して、家のことは何も彼もおなみに任せてある。あの子も隨分と苦勞をしてな、そのお蔭で家もあの頃とは好うなつてるし、私もまたお蔭で隱居の身の上といふもんや。結局おなみが居たりやこそ、花屋が今日まで行燈揭げて居られるので、あの子が居なんだら、疾に潰れてしまうてます。そやよつて、この花屋は最う私の物でも汝の物でもない、おなみの物なのや。汝かてその邊のことは能う察して居なはるやらう、そやよつて……

秋成（進つて）母者人、そのやうなことは今改めて聞くには及びませぬ、私もこの家を自分の物などとは決して思うては居りませぬ。然し自分の實家を、何時までも恁うした家業で置くことは、何よりも心苦しいのでござります。

よし　心苦しいというて、それが前々からの家の商賣なら詮方がないやないか。

秋成　あなたはこの茶屋商賣を、卑しい淺猿しい家業だとはお思ひなさりませぬか。多くの人の娘を買取つて慘らしい稼ぎをさせる。人を欺き誑かして金錢を貪る。いや金錢を貪るだけならば未だしもぢやが、甚しきに至つては、一家離散の憂目を見せ、或は思ひもそめぬ罪を犯させ、人の命を害はせ……

よし　待ち。汝は何いひなはるのや、汝のやうに云うたら、お茶屋は宛然盜人よりもまだ惡いやうに聞えるがな。

秋成　或は……然うかも知れませぬ。（苦しき表情）

よし　能うそんなこと云うてやな、汝もその中から生れなはつたんやで。

秋成　それが何より苦しい……悲しいことでござります。母者人。私は折入つてお頼みします。何卒恁うした淺猿しい家業は廢めて下さりませ、正しい、人に後指さゝれぬ家業は、世の中に幾何でもござります。

よし　汝はそれ云ふ爲めに十年振に戻つて來なはつたンか。

秋成　自分が學べば學ぶほど、人と交はれば交るほど淺猿しい我が家の有樣を、外に看過しては居られぬのでござります。

よし　學問するとそんな理窟を云はんならんか知らんけれど、そら餘り身勝手な理窟やないやろか。汝かて昔は隨分極道しなはつたで。貰うて店出しが濟むか濟まんのおな

みともあゝいふ譯になつて、おみねといふ子も拵らへなはつた……

秋成　母者人、私は然うした放蕩無頼な行爲から眼が醒めましたればこそ、學問の道に入りました。遊里の惡いといふ事を知つて居ればこそ、正しい商賣に就いて戴かうといふのでござります。

よし　爰の家はおなみの家だす。そのおなみは、疾くの昔に汝が捨てゝしまひなはつたんや。

（秋成は口を噤んで歎息する。上手から金次郎とおなみが出る。）

金次郎　おなみ。お前のいふ通り晩に出直すよつて、ちんと金の耳揃へといとくれ。違ひあらへんな。

なみ　はアよろしい。若龍があんぜうして戻つて來るやらうよつて……

金次郎　やらう……では頼りないがな。おい。違うたら俺に覺悟があるぜ。

（およしは居辛らい體で正面から去る。）

なみ　そやよつて宜しいというてまんが、厭らしい口きかんと置いとくなはい。

金次郎　（秋成を一瞥して）誰がきかんならんやうにしくさるのや。おなみ。怪體な眞似しさらしやがると承知せんぜ。

（金次郎は下手へ去る。おなみは長火鉢の前に坐る。）

秋成　（長き沈默の後）おなみ。今のあの人は、ありや何ぢやな。

（おなみは應へにくき體。）

秋成　いや、これは私が惡かつた。あの人がお前の何かといふことは改めて問ふまでもないことであつた。

なみ　東さん。濟ンまへんけれど、何卒惡う思はんと置いとくれやすや。わたいかて、あの時あんたに捨てられへなんだら、あの人と此樣な譯になつて、苦勞なんぞせえでも可かつたのだす。

秋成　成る程、私はお前を捨てた。お前ばかりではない、母者人も捨てた。この家も捨てた。したが、捨てたと思うたのは皆詐りで、私の心は仍且この家から離れてはゐなんだ。絶えず母者人を思ひ、おみねを思ひ、そしてお前のことを思うてゐた。その抑へ難ない心が、十年振りに私をこの家に戻らせたのぢや。

なみ　東さんがわたいのことを思うてゝおくなはつた……それは眞實でおますのか。

（おなみは秋成の言を別の意味にとる。冷笑的の表情。）

秋成　私は決して詐りは云はぬ、私は何卒してお前達を幸福に暮させたいと思うて居た、そして、今その幸福に導

く覺悟が着いたによつて戻つて來たのぢや。

なみ　へえ……。幸福とは、どないに暮すのでおます。

秋成　それを云ふ先に、私の方から訊ねることがある。今去んだあの人……外目から見たところでは、隨分とお前に無理難題も云ひ掛けるやうに察しられるが、お前はそれでも眞實滿足に思うて暮してゐなさるのか。

なみ　そら、あの……。（秋成を一瞥して急に語氣を變へる）そんなことがおますもんかいな。怪體な廻り合せであの人と此樣なつたので、因縁とでも思はな詮樣がおまへんわ。

秋成　ではお前は、眞心からあの人を思うて居るのではないのか。

なみ　えゝ……そら然うだすなア。（煮切らぬ返辭）

秋成　さうか。で、あの人の商賣は何ぢや。

なみ　商賣いうてあらしまへん。

秋成　無商賣……遊人……博奕でも打つ人か。

なみ　まア云うたらそんなもんだす、そやよつて、能う錢貰ひまんね。難儀でおますわ。

秋成　おなみ。お前は茶屋といふやうな卑しい商賣を廢めて、もそつと正しい業をする氣はないかな。

なみ　好え商賣が出來さへすれば廢めたかて大事おまへんわいな。お茶屋いうたかて、そない儲かる譯のもんでもなし、第一倒れは出來るし、人は大勢使はんならんし、好え加減辛度におますよつてなア。

秋成　うん、さうか。然しそれは本心で云うて居るのであらうな。な……おなみ。

なみ　え。何がだんね。

秋成　その然るべき業がありさへすれば……

なみ　えゝ、そのことだつかいな。そら眞實だすくらゐ。

秋成　お前が眞實その心なら私は何樣に喜ばしいか知れぬ。したが、正しい業に就くとすれば、先づお前自身の行爲も、多少改めてかゝらねばなるまい。

なみ　さア、然うだすかいなア。

秋成　正業を營むお前の夫が、博徒、遊人といふのでは、不均衡ではないか。

なみ　そら、まア然うだすなア。

秋成　お前はあの人を眞心から思うて居るのではないといふたな、それなら家の爲め我が身の爲めに、場合によつては別れることも出來るであらうな。

（おなみは秋成の心を邪推してほゝ笑む。）

なみ　えゝ、えゝ、そらもう、先方さへ承知してくれたら、わたいの方は願うたり叶うたりだす。今更好いた惚れたの中でもおまへんのやよつてな。ほゝゝゝ。（四邊を見邊して）あゝ、大分晴うなつて來た。若龍の遲いこと、

どないしてるのやな。誰ぞ、行燈に灯を入れなはれや。
きの　宜しおます、唯今……
（正面の臺所の方から返辭が聞えておきのが出て來る
線香場の燧石を取つて火をつくりながら。）
きの　なアおかみさん、濱徳さん根つから來やはりまへんなア、今日明いうちに乾度來やはる約束でおましたのに。
なみ　自分に覺えのないお客はあかへん、直に他所へ浮氣しやはるよつてな。
きの　ほゝ。おかみさん……
（眼で秋成を指す。おなみもはつと氣着いて苦笑する。おきのは門の行燈へ火を點しに出て行く。直ぐ外でおきのと濱徳といふ客の話聲が聞える。）
きの　あゝ、おいでやす、たつた今おかみさんと噂してましてん、聞えしまへんなんだか。
濱徳　聞えてたとも、今夜こそおきのどんとの談分けるというてゐた。
きの　ほゝゝ。飛んだお門違ひ。
（濱徳とおきのが下手から出る。おなみは愛想よく迎へる。）
なみ　好うこそ、それでも今日の約束を、よう覺えてゐておくれやしたな。
濱徳　あんたとの約束を忘れて可えもんかいな。時に、レシ居やへんか。（拇指を出して見せる）
なみ　いゝえ……居たかて何だんね。
濱徳　島渡怖いがな。
なみ　阿呆らしい、花屋はお茶屋だんが。
濱徳　有難い。わいかて七兩二分ぐらゐ何時でもはずむぜ、はゝゝ。
（正面から三人の娼妓が出る。二階からは小よねとおみねが降りて來る皆賑やかに會釋する。）
みね　（おなみに）最うちんと覺えましてん、然やよつて簪買ふとくれやす。
なみ　まア、この子は……。お客さんに御挨拶しんかいな。
みね　旦那はん、おこしやす。
（濱徳はおみねを引寄せて抱く。）
みね　嫌ひ。髮破れまんが。
濱徳　髮ぐらゐ破れたかてだんないが。これみねちやん、あんた生長なつたらわいが水揚げしたげるで、可えか。
みね　知らん、嫌ひ。
なみ　何いふねん、何卒お頼み申しますといふときなはれ。
みね　へえ……。何卒お頼み申します。
濱徳　はゝゝ。
（秋成は聞くに堪へぬ體で上手へ去る。）
濱徳　あれ、誰や。

なみ　いえ、親類の人だすの。さ、二階へ上つとくれやす。
濱德　よしや。
（皆は濱德を手舁ぎにせんばかりにして二階に上る。）

（暗　轉）

（二）　舞　臺　面

居間と中の間の二室から成る二重屋臺。居間（上手の方）の正面には床の間、佛壇、簞笥を納めた押入れ等がある。中の間の正面は吉原障子の出入で、これを開けると第一場の茶の間に通じる。中の間の下手の側面は壁で、鴨居に棚を吊り、いろ／＼の器具が載せてある。壁際には衣桁を置き脱捨ての衣裳などがだらしなく懸けある。居間の後に壁一重を隔てゝ狹い寢室がある體で、前側に障子がはめてある。緣側がこの前を奥へ延びて、緣の端れに厠がある。上手の二重の下は手狹な庭で、石の手洗、植込み、袖垣などが配らつてある。

花屋の居間の體

第一場と同じ日の夜。

秋成が今夕餉を終つた體で、淋しげに庭を見遣つてゐる。食膳と飯櫃とが室の一隅に押遣られてある。二階から賑やかな絃歌が聞えてゐる。おきのが下手から出る。

きの　お客さんが同時になつたので、ツイ御飯が遲なりまして、おまけにお給仕もせんと放棄ときまして濟ンまへん。
（膳を片附け始める。下手から若龍が出る。）
若龍　姐ちやん。お母ちやんは……？
きの　二階だす。あんた、どうだした？
若龍　あかへんわ。
きの　何ぢやいな今までかゝつて。逢ふには逢ひなはつたんか。
若龍　はア……。けど錢くれはれへん。明日の晩乾度行くいうて。
きの　あんたもあかんお子やし。
若龍　然うかて、そない酷いこと云はれへん。けど、明日は乾度來やはる。
（おいまが下手から出る。）
いま　鳥渡、おかみさんは……？
きの　二階の奥だす濱德さんのお座敷。
いま　兄さんが歸つてだしたの、どないしまほう。
きの　早うおかみさんにそない云ひなはれな。愛ぐつが惡いよつて、毎時の寢室の方へはいつて貰ひなはれ。
（おいま下手へ去る。）
若龍　わたい、濱德さんのお座敷へ行たらいかん？
きの　その姿で行きなはるか。

若龍　ほゝ。早よ着更へて來う。

（若龍は下手へ去る。）

きの　旦那はん、御免なはつておくれやすや。

（おきのは膳を持つて下手へ去る。秋成は不快さうに起つて縁へ出る。下手からおみねが出て、押入れの手箱からお手球を取出す。）

秋成　おみね。

みね　何だす。

秋成　何をしてゐる？

みね　松屋のお梅ちやとこへ遊びに行きまんの。

秋成　夜遊びに行くよりも、最う寢ねばならぬ刻限ではないか。

みね　あゝ可笑し、あんなこと云はる。今時分から寢るもんあらへんわ。お客さんや子供衆さんやつたら寢やはりまッけど。

秋成　おみね。鳥渡爰へおいで。

（おみねはお手球をまさぐりながら秋成の傍へ來る。）

秋成　（ちッと見て）お前は最う十一になるのであつたなあ。

みね　えゝ。お梅ちやとわたいと同年でおますの。

秋成　お前は此私が誰か知つてゐるか。

みね　えゝ。知つてま。

秋成　知つてゐる。さうか、知つてゐるか。

みね　親類の小父ちやんだつしやろ。

秋成　……それを誰が敎へた？

みね　お母ちやんに聞きましてん。

（おみねは起つて行きかける。）

秋成　これ、鳥渡待ち……

みね　お梅ちやん待つてはりまんね、今夜おこんめせういうて、お稽古の歸りに指切りしときましてん、行て來まつさ。

秋成　あ、これ。お前に話して聞かしたいことがあるのぢや、まアもう暫らく……

みね　もう結構でおます、後から聞きまつさ。

（おみねは舞の手振りをしながら下手へ去る。秋成は淋しく見送る。次の寢室の方でおなみと金次郎の爭ふ聲が聞える。と、それも打消すほどの絃歌の聲が二階座敷に起る。秋成はいら〳〵して來る。喫みかけた煙管を投捨てゝ家を去らうとし、思ひ返して座に復る。次室の爭論が激しくなつて、おなみが縁から逃げて出る。金次郎はそれを追うて出で逃げ惑ふ、おなみの髮をひッ掴む。）

金次郎　よくも俺を馬鹿にしさらしやがつたな。

なみ　誰が馬鹿にした。汝こそ詮もない悋氣ばかりして。

金次郎　なんかしやがんね、おのれ。

（激しく打つ。秋成は二人を引分ける。）

秋成　何といふ亂暴なことをするのぢや、

金次郎　汝の知つたこツちやない、退きさらせ。

（秋成を撲退けて又おなみを打つ。）

なみ　何しなはるのや。（撲と坐る）さ、氣に入らなどうなとしなはれ、打つなと、蹴ると殺すなと勝手にしなはれ。

金次郎　おゝ、よう吐かした。殺し兼ねん俺やと思うてけつかるのか。

（懷中の匕首を拔く。）

なみ　殺しなはれ、殺す甲斐性があるなら殺しなはれ。

金次郎　なにッ。

（匕首を振翳す。その手を秋成が捉らへる。）

秋成　待て、何か言爭ひに刃物三昧などを出してどうするのぢや、穩かに談せば事は分るではないか。おなみ、お前もその淺猿しい有樣は何事ぢや。

なみ　いゝえ、あんたの係り合ふことやおまへん、放棄といておくれやす。

金次郎　默うや、喧嘩せうと何せうと此方の勝手や、大體お前のやうな人間が傍に居るのが癪に障るのや。おい、おなみ、此はお前の家やないか、俺の氣に入らん奴は誰かて構めへん、間男やらうが、昔の亭主やらうが、二階に居なさる德やらうが追出してしまへ。

なみ　大きな聲しなはんな、内部の者はどうでも構めへんけれど、お客さんしくじつて何樣しまんね。

金次郎　大體その容からして氣に食はんのや。おい、おなみ、怒うなつたら何も彼も打明けてしまうてやる。おい、おな、これまでかて、お前のしてることで、なんぼ眼閉つて、見て見ん顏してるか知れへんぞ。

なみ　何いひなはんね、それも皆商賣やないかいな。

金次郎　商賣が商賣ばかりで濟まんのがあるわい。

なみ　それが汝の氣の廻りだす、汝の手弄みの資本が、何處からどうして出來ると思ひなはる。

金次郎　そやよつて、これまでは辛抱してたんぢや。

なみ　嘘いひなはれ、何時かて汝はこの騷ぎだんが。

金次郎　今度のは對手が違ふわい、最前金の無心いうたのも、實は金が欲しいのやない、汝の氣を引いて見る爲めに云ふたんぢや。おい俺の氣を惡うするのが厭なら、何でとつとと埒を明けんのぢや。

なみ　明けたうても、汝がやいやいいふので、その間もあらへんがな。

金次郎　嘘吐かせ、汝に未練があるからぢや。

なみ　東さん。濟ンまへんがあんたが居てやと、家が揉めてどもなりまへんよつて、何卒何所へなと出て行ておくれやす。

秋成　出て行けと……。おなみ、最前云うたことは詐りだつたのぢやな。

なみ　金さんと別れてあんたと舊通りになつたら、其方は可えか知らんけれど、わたいは其様こと嫌ひでおます。捨てられた男に逢戻りするほど、わたいも未だ不自由はしやしまへん。

金次郎　それ見い。仍且そんな智慧からてけつかつたんやな。

秋成　おなみ、お前は私の言を然ういふ風に聞取つて居たのか。

なみ　また夫に違ひないやおまへんか。

秋成　私はお前に正しい人間になれと勸めたのぢや。正しい業に就けと訓へたのぢや。

なみ　口頭だけはなんぼ綺麗でも、その下心は阿呆なわたいにかて丁と分つてますわいな。それなればこそ金さんの惡口も云ひなはつたのやおまへんか、博奕打ちなんぞとは別れてしまへと云ひなはつたのやおまへんか。

秋成　病は最う膏肓に入つて居る。（歎息する）

金次郎　おなみ、お前の量見は分つた、俺の惡かつたところは謝罪る、その代り俺の眼の前で、此男出て行つて貰うてくれ。

なみ　東さん、氣の毒だつけど、お聞きの通りだすよつて

（秋成は込上げて來る癇癖な堪へかねる體、思はず起ちかける時、縁からおよしが慌たゞしく出る。）

よし　東作、私が困るよつて何にも云はんと早よ出て行つておくれ、どうでお前は爰の家には性の合はん生質なのや。

秋成　母者人……。（辛うじて怒りを堪へる）出て行きます、素より私はこの家に戻りたかつたのではない、生きながら地獄の底に沈んでゐる人達が救ひたかつたのぢや。

なみ　どうでわたい等は地獄に墮ちた人間でおます、偉い學者の東さん達と一緒にはならしまへん。

（おみねが下手から出る。秋成は貪るやうに引寄せて抱きすくめる。）

秋成　おゝ、おみね。殘るものは、この子唯一人……せめてこの最愛いものだけは救ひたい。おみね、私はお前の眞實のお父さんだ。お前はお父さんに附くのぢやぞ。お父さんと一緒に來るのぢやぞ。この茶屋商賣などといふものは、決して正しい人間のする家業ではない。爰に居ればお前はやがて人の弄みものにならねばならぬ。苦しい、淺猿しい……悲しい、怖ろしい目を見なければならない。

みね　厭や、放して、放しとくれやす。（身をもがく）

よし　東作、お前は何にも知らぬ子に餘計な智慧つけなは

るのか。
秋成　おみねは私の…秋成の血を分けた子でござります。
みね　厭だす、わたいはお母ちやんの子でおます、放しとくれやす、放しとくれやす。
（おみねは秋成の手を遁れておなみに縋る。）
みね　なアお母ちやん、わたいはあんな小父さんの子やおまへんなア。
なみ　然うやとも、然うやとも。
みね　（秋成に對つて憎さげに）それ見なはれ。わたいはお母ちやんに、檢校さんに出して貰ふのでおます、
秋成　あゝ、事はすべて……（絶望の表情）
よし　東作、私が得心行くやうに話したげる。爰では邪魔になるよつて此方へ來なはれ。さ、此方へ來なはれ。
（秋成の肩に手をかけて促す。）
（廻る）

（三）舞臺面

第一場と同じ。
おきのとおいまとが上手の障子の外で立聞きしてゐる。時々囁き合ふ。やがて人の出て來る氣勢に慌てゝ障子から隱れる。おいまは火鉢の銅壺から德利を取り、代りの德利をつけて二階に去る。おきのは跫音を忍ばせながら正面から去る。秋成とおよしが上手から出る。
よし　東作、お前は相も變らず何でこないに一徹なのや。さ、爰にお坐り、私が能う得心の行くやうに……
秋成　いや、母者人、最う何にも云うて下さりますな。
（秋成はおよしを見向きもせず、ぢつと考へる。）
秋成　家の爲めに……秋成自身の爲めに……、秋成自身の爲めに……？
（下手から綾足が出る。旅支度をしてゐる。）
綾足　秋成殿。
秋成　おゝ、綾足殿。
綾足　私の宿から八軒家へ行くには、爰へ立寄つても大した迂廻でもないので、最う一度誘うて見ようと思うて寄つた。どうぢやな、奮發せぬか、私は貴公を殘して行くのがどうも心懸りぢや。
秋成　（長き沈默の後）同道しよう。
綾足　おう、上京するか。
秋成　綾足殿、私は他の上を思ふ積りで、實は我が身の上ばかり考へてゐたことが今分つた。我れながら愚かしいことに心を勞したことが口惜しい。何の……何の、世の中の所謂氏や素性が何ぢや、貴賤上下といふも、質して見れば何の變りもない。三井は浪人者、白木屋は煙管屋、鴻池は小酒屋、小橋屋は古手屋、辰巳屋は炭屋ぢや、神

代から續いてゐる家のやうに誇る輩が可笑しい。上田秋成は茶屋の果ぢや、いや、太鼓持の古手でも構はぬ、天下御免の人交はり……今の所山の大將は俺一人、お相手はござらしやるまい。はゝゝ。(強ひて笑ふ)

綾足　その通りぢやとも、その通りぢやとも、貴公が其處に氣のついたことを何より嬉しく思ふ。いや、その勢でこれから直に上らう、最前も云ふ通り、京には貴公の戀人が待ち侘びて居るのぢや。

(上手からおなみと金次郎が出て長火鉢に差向ひに坐り、おなみは銅壺の德利を取つて金次郎に注いでやる。おみねが上手の障子の蔭から怖さうに見る。秋成と眼が合ふと直ぐ姿を隱してしまふ。おきのが上手から秋成の手荷物を持つて出で、おなみが眼で指圖するまゝに秋成の傍に置く。下手の土間から少婢が草履を持つて出で上り口に揃へる。二階からおいまと若龍が降りかけて、中途に停まつてこの體を見てゐる。綾足は空模樣を見る體で格子の外に出る。)

秋成　母者人、お暇します、御機嫌宜しう。

(一禮して口の間へ出る。)

綾足　秋成殿、よい月夜ぢや。今夜は面白う吟じられさうぢやぞ。

(格子の內へ引返す。)

秋成　月に遊ぶおのが世はありみなし蟹……何時やらこんな句を詠み捨てたこともあつた。

綾足　みなし蟹……みなし蟹……

(倶に淋しく笑ふ。おみねがまた障子の所から覗き、秋成と顏見合はして隱れる。)

——幕——

(大正一二年六月稿)

おさん茂兵衛（三幕五場）

人物

以春　大經師の主人
おさん　以春の妻
茂兵衛　大經師の手代
助右衛門　同
おたま　大經師の召使
捕手

（一ノ一）

京都の中央にある大經師以春の家、玄關と奧との中間にある一室、上手と下手と正面下手寄りとに出入口がある。

十一月のある日、外出する以春を送つておさんとお玉が上手から出る。

以春　あ、勸修寺様へ持つて行かねばならぬ肝腎の書附けを忘れた。

お玉　取つて參ります。

以春　いや、お前ではあかん。おさん、私の手筐笥の二ッ目か三ッ目の抽斗にはいつてゐる、鳥渡取つて來て。

おさん　はい。

（おさんは鳥渡二人の顏色を窺うたが、何にも云はず引返して上手へ去る。お玉も引返さうとする。）

以春　お玉、今夜こそ宜しいな。

お玉　旦那様、まだあんなことを……

以春　昨夜明日の晩こそ屹度と……

お玉　どうぞもうそんなことは仰しやらんと。

以春　でもあれほど堅うお前は約束をしたやないか。

お玉　さう申さんと、無理ばかり仰しやりますよつて。どうぞもうなぶらんとお措きやしておくれやす。

以春　私は決してなぶりなぞしやへん、ほんまに眞劍なのや。

お玉　あれほど立派な御寮人様をお持ちやして、何が不足でそんなことをなさるのでござります、玉は御當家の奉公人でござります、そんなことが出來るか出來んか。

以春　これは理窟と云ふもんや、理窟から云うたら私かて何でお前が好きになつたか分らん、お前が奉公人であらうとなからうと、私は唯お前が好きなのや。

（手を捉へる。）

お玉　いきまへん、御寮人様に知れたらどうなさるのでご

ざります。

（漸く振離す。）

以春　あんなもんが何や、貞女賢女と自分獨極めに極め込んで、何も彼もたつた一本の物指しで當らうとする女子や。

お玉　そんなこと仰しやつたら罰が當ります。どないにお望みやしてお貰ひなされた奥様か、玉は御寮人様から伺うてよう知つて居ります。

以春　そりや望んで貰ふたことは貰うた、けど、私とは性が合はぬ。私は命まで投込んでかゝれる女子が欲しい。貞女や賢女の引張りを着ぬほんまの女子が欲しい。

お玉　そんな女子さん、よそにもたんと拵へておゐでなさるのやござりませんか。

以春　そりや極道もしたけど皆違ふ、そして命まで投込める女子、それがお前なのや。

お玉　もう結構でござります、どうぞ早うお越しやしておくれやす。玉は餘りで可笑しうなつて參ります。

以春　お前はそんなこと云うて約束を胡魔化す積りか、私や承知しやせんぞ、今夜こそどうでも約束通り……。

（また手を捉へようとする、それを遁れて。）

お玉　旦那様……。

（強く云ひかけ、人の跫音に口を噤む。上手から二通の書類を持つておさんが出る。）

（二人の様子を偸み見る。）

おさん　これより見當りませんが、どちらでござります。

以春　よし、これや。（一通を受取つて）戻りに笹屋町と猪熊に寄るよつてどうで晩うなるやらう。先へ寢んだがよいぜ。

おさん　いつもの通りお先へ寢ませて戴きます。

（以春に隨うて二人も下手へ去る。）

（蔭で「お早うお歸り」の聲。やがて二人は引返す。おさんは怒りを帶んだ眼にお玉を一瞥してさつさと上手へ去る。お玉は悄然と佇立む。正面から茂兵衛が出る。）

茂兵衛　お玉どん、氣の毒やなア。

お玉　え……。

茂兵衛　旦那様も隨分無理を仰しやるな。

お玉　（流石に恥て垂頭れる）聞いておゐやした？

茂兵衛　つい來かゝつたもんやよつて。何によらず一度云ひ出したらやり遂げな承知の出來ん御氣性やよつて難儀なもんや。

（茂兵衛は押入れから表裝裂れなどを取出してゐる。）

お玉　あゝ私どうしたら……（ちつと茂兵衛を見る）なア茂兵衛さん。

茂兵衛　えゝ。

お玉　一昨日（をとつひ）のあれ見ておくれやした？
茂兵衞　見ました。あんたの心は嬉しいけれど、奉公中の身やよつてな、そんなことしたらお互ひに御當家にゐられんやうになつてしまふ。
お玉　もう直き街道入りおしやすのやおへんか。
茂兵衞　そらさうや。
お玉　そやつたら何も暫らくの間ぐらゐ。
茂兵衞　その暫らくが尙大切や。それに私は旦那樣にも御寮人樣にも、外の奉公人より一倍も二倍も御恩になつてゐるよつてな。
お玉　私はなんでこんなに因果な身なのやらう。思ひもせぬ人からは執念深う附きまとはれるし、命がけの人からは……泣く〳〵

（茂兵衞は不愍さうに見まもる。お玉は忍音に泣臥す。）

茂兵衞（驚いて）これ、お玉どん。

（肩を搖すつて注意する。）

お玉　茂兵衞さん……

（手を提へる。それを振離して立上る。）

茂兵衞　よう考へときまつさ。

（正面から助右衞門が出る。）

助右衞門　おゝ茂兵衞どん。六角まで行つて來るよつて鳥渡店頼むぜ。
茂兵衞　えゝ行つといでやす。
助右衞門（お玉を見て）どうしたんや。
お玉　いゝえ、どうもしやしません。（泣顏を隱す）

（助右衞門は問ふやうに茂兵衞を見る。）

茂兵衞　大方旦那樣……御寮人樣にでも……けど、私や鳥渡も知らん……。

（茂兵衞は裂地を持つて正面から去る。助右衞門は思ひ當つた體。）

助右衞門　お玉どん、番が廻つて來たな。

（正面から去る。お玉は會得が行かぬ體で見送る。）

（廻る）

（一ノ二）

以春夫婦の居間。

次の間の附いた八疊ほどの座敷。上手に床、下手に襖の出入、正面は庭に面して障子が締めてある。

おさんが縫さしの仕立物を取上げて、縫ひもせずに何ものかを見詰めてゐる。怪しい顏つき、やがてそれを捨てると炬燵にはいつて、蒲團に顏を埋める。下手から火斗（じふ）を持つてお玉が出る。そつと炬燵に手をやつて

見て、そのまゝ退らうとする。

おさん　お玉。

お玉　へえ。

おさん　爰へおいで。

お玉　何ぞ御用でございますか。

おさん　お前旦那様と何の話をしてゐた？

お玉　…………。

おさん　二人の眼つきで私には何も彼もよう分つてゐます。

お玉　…………。

おさん　お前は私の前でそれを話すことが出來んのか。お前までが私を馬鹿にしてゐるのやな。（強き語氣）

お玉　いえ、そんなこと……私はつい旦那様がお氣の毒やと思ひましたので。實は御寮人様、旦那様は殺生なお方さんでございます。

おさん　ではやつぱりお前にも……。

お玉　これまでもそないことがあつたのでございまするか

おさん　お玉、お前は旦那様の仰しやることを……。

お玉　滅相もございません。もう恁うなりましたら何も彼もすつかり申上げてしまひます。私が御當家へ御奉公申してまだ三月もたつやたゝずから、旦那様は怪體なことおいひ出しなされまして、それがこの頃では三日にあげず、私の寢間へ……。旦那様が今夜は晩なる、先へ寢めと御寮人様へ仰しやつてお出ましになつた晩は、あの臺所の明り窓から……。昨夜なぞは切迫詰つたによつて、明日の晩は乾度と申して漸うお歸し致しましたが、今もその事を仰しやつて。御寮人様、申しては濟みませんが、如何に私のやうなものでも、あんまりおなぶり方が強過ぎて口惜しうございます。（泣く）

おさん　あれほどお賴みしてゐるのに……外では祇園など先斗町など島原など、また町方の女子さんであらうと何であらうと大事ございません、唯家でだけは……私の眼のかゝる者だけはと……あれほどお願ひしてゐるのに、一つ濟めばまた一つ、意地になつてなさるとは、女房は何されても人形のやうにぢつとしてゐるものと思うておいでなさるのか、あんまりと云へばあんまりな踏付けやう。今までは旦那様の恥になることは何にも云はず耐へてゐたが、もうけふこそは何も彼も親達に打明けて、私の身の立つやうにして貰ひます。

お玉　御寮人様、私ゆゑにそんなことになりましては、第一お實家の御兩親がどんなに御心配なされますか……。

おさん　それもかうなつたら是非がない、お玉、私の衣裳を出して。

お玉　はい……けど、御寮人様。

おさん　宜しい、私が勝手に着更へます。
（立上る。お玉縋る。）
お玉　ま、どうぞ御寮人様。
おさん　お前に迷惑かけへん。放して、えゝ放して……。
（おさんは簞笥から衣類を取出す。）
（お玉は走つて下手へ去る。やがて茂兵衛を引張つて出る。）
茂兵衛　御寮人様、どうなされたのでござります。
おさん　私や今から實家（さと）へ歸ります。
茂兵衛　え、お實家へ……。
おさん　いはうやうのない旦那様の不身持を、親達に聞いて貰うて來ます。
お玉　私の申したことからそんなことになつては濟みませんよつて。茂兵衛さん、どうぞお宥（なだ）め申して。
茂兵衛　あんた何も彼も旦那様のことを申上げてしまうたのか。
お玉　申さなならんやうになりましたので。
茂兵衛　さうか。御寮人様。お腹立は重々御尤もでござりますが、お實家（さと）へおいでなされましても、御兩親には餘計な御心配をかけ、旦那様のお顏は惡うなるばかりでござります。それではあなた、平素御辛抱の甲斐がないではござりませんか。

おさん　辛抱すれば、するほど、私は阿呆扱ひにされる。旦那様は外のことはよう分つたお方の癖に、辛抱する者の心の辛さだけはこれほどの思ひ遣りもない。そんな浮ぶ瀬のない辛抱には私はもうこり〳〵しました。
茂兵衛　然し蔭のことをぱつとなされて、旦那様が私が惡かつたと、折れて下されば宜しう厶いますが、ひよつと意地におなりなされたらどうなされます。
おさん　そりや今でも意地になつて、わざと私に見せつけにしてゐられるのや。
茂兵衛　それなら猶更ぢやござりませんか。何にせえ、蔭のことは蔭で濟ましませんと、京で名高い大經師のお名にかゝはります。詰る所が旦那様のお心さへ改まればよいのでござりますから、お實家（さと）へおいでなさることだけはお思ひ止まり下さいますやうに。
おさん　私もさう思うてけふまでどれだけ口惜しい辛抱をして來たか知れぬ。
（蒲團につゝ伏して泣く。）
お玉　茂兵衛さん、どないしたら宜しおすやらう、私一人の爲めにこんなことになつて。私さへゐなんだらと思ひますけれど、宿下りしても義理の仲の叔父さんの家どすし。
茂兵衛　（ぢつと見て）お玉どん、あれほんまか。
お玉　え………（理解せぬ體）

茂兵衛　いや、よう考へんならん、よう考へんならん。

（店の方で「茂兵衛さん〳〵」と呼ぶ丁稚の聲。茂兵衛立ちかけて。）

御寮人様、よう考へまして、屹度旦那様のお心が改まるやう致しますよつて、どうぞ妾の所を御辛抱下さいます様に、くれ〳〵もお願ひ申します。店で呼んで居りますよつて、鳥渡行つて參じます……。

お玉　でも晩になつたらまた旦那様が……。

茂兵衛　お玉どん、あとであんたに相談することが……あるかも知れん。

（「茂兵衛さん、茂兵衛さん、お人さんどすぜ」と呼ぶ丁稚の聲が前よりも近く聞える。）

茂兵衛　よし、今行く。

（茂兵衛は緣から去る。おさんは何か思ひ浮んだ體で、頭をもたげる。）

おさん　お玉、今夜旦那様は屹度お前の所へ……。

お玉　へえ。あない仰しやいましたよつて、どない致しませう。

おさん　お前に頼みがある、ねきへおいで……。

（二人は額を鳩める。）

（暗轉）

（一ノ三）

お玉の寢室。

茶の間に隣る小室。上手に窓。正面は押入れと襖の出入り。下手は障子。室の外は茶の間で、その正面と下手に出入口がある。

室の一方に枕屏風が寢所を圍ひ、行燈に脫捨ての衣裳がかけてある。夜更けの體。茶の間の正面から茂兵衛が出る。幾度か逡らつた後、室へ入る。屏氣の中からおさんが出る、抑へがたい怒りの面色、探り寄つて互ひに手を取合ふ。忽ち二人は感觸の違ふのに驚いて飛退く。

茂兵衛　誰や。

おさん　あ、茂兵衛か。

茂兵衛　御寮人様でござりますか。

（室外へ逃げ去らんとするを、おさんは捉へる。）

おさん　茂兵衛、お前は最前あれほど頼もしさうに云うておきながら、旦那様の味方になつて、此方の計略の裏をかいて私に恥をかゝしたのやな。

茂兵衛　滅想もございません。御寮人様がこんな所に寢んでござらうとは夢にも知りさうな筈がござりません。

おさん　それなら何のために、今夜旦那様が忍んで見えると判つてゐるこの部屋へ……。

茂兵衛　はい、知つて參りました。私とお玉どんと二人爰に寢てゐる所を、旦那様にお目にかける覺悟で忍んで參つたのでござります。

おさん　ようまあぬけ〳〵とそんなことを。お前一人が寢る氣でも、お玉が寢なんだらどうおしる。

茂兵衛　（懷中から數通の手紙を取出す）この通りお玉どんからくれました手紙も、旦那様への證據にと思うて持つて參つて居ります。御寮人様。いかな旦那様も、お玉どんが私のものとお分りになつたら迷ひの夢もおさめになりませう。もとよりお叱りをうけるのは覺悟の前でござりますが、御發明な御主人のこと故、後になれば御勘辨も下さりませう、縒り違うてお暇となつたにしても、長年御恩を蒙つたお家のためと思へば諦めもつきまする。

おさん　茂兵衛、お前の親切は忝けない、厚う禮を云ひます。したが私の腹立ちはお玉一人のことではない。何一つ背かず從順にしてぢつと辛抱すればする程、これでもか〳〵と拷問にかけるやうな旦那様のなされ方が、私は口惜しい、腹が立つ。今夜こそこんな女子でも、怨むことも、怒ることも、仕返しすることも、決して人には負けぬといふことを思ひ知らしてあげるために、お玉と代つて爰に待つて居ました。帶も解かず、枕にもつかず、ぢつと考へゐると、口惜しいことのありだけが胸一杯に湧いて來て、並一通りの恥かゝせたでは、迚も〳〵心が得心せぬ。今にも爰へござつたらどういうて、どう仕返ししたら……。

茂兵衛　仕返しなぞと、そんなことをなされたら却つて騷動でござります。それより奥へお出でなされてどうぞお玉をこれへ、萬事は私に任せてお置き下さりますやうに……。

おさん　今夜のお玉が無事にすんでも、その次ぎのお玉、その又次ぎのお玉と、旦那様はそれからそれと私の責道具をおこしらへなさるのに極まつて居る。さうや所詮、あゝいふ氣性のお方に、意見も涙も役には立たへん、女房に背かれ、恥をかゝされ、口惜しい、無念なと御自身にお思ひやす時が來たら、始めてお目がさめるのやらう。

茂兵衛　女房に背むかれ……そんなことなされたら、あなたのお身は破滅でござります。

おさん　（悸っとして）身の破滅……でも、今やつたら。お玉といふ歴つきとした證據人がある。

茂兵衛　そりや、證據人は立派にござります。けれど、そんな狂言にお乘りなさるやうな旦那様ぢやござりません

さ、御寮人様、萬事は乾度私が引受けますによつて、早う奥へお歸りなされますやうに、どうぞ〱お願ひでござります。

（以春が下手から出る。探り寄つて室内の樣子を窺ふ。）

おさん　茂兵衛、恩と云うてもさしたることでもないのに、それほどまでに私の身を思うておくれやのか。

茂兵衛　思はいでどう致しませう、恩を知らな人間やござりません。

おさん　けど、……私はやつぱり奥へはいなれん。

茂兵衛　それでは却つて大事になるばかり、さ、御寮人様。

（以春、手荒く障子を引開けて内に入る。激しき嫉妬の表情。）

以春　おさん。

茂兵衛　おゝ旦那さま。

（以春は茂兵衛を蹴る。おさんが遮る。）

おさん　旦那様、女房が外の男と話してゐたゞけで、それ程お腹が立ちますか。

以春　おのれ、私の顔へ泥土（どろ）を塗り居つたな。

おさん　年びやく年中、泥土ばかり塗られてゐる女房の口惜しさ辛さが、今にお分りになりましたか。

茂兵衛　旦那様、何にも云はずに貞女にしてござる御人様のお心も少しは察してお上げなされいでは、お可愛（かはい）さうでござります。

以春　えゝ犬め、よくも主人の手を噛み居つたな。二人ともその分では濟まさぬからさう思へ。

茂兵衛　御寮人様にも私にも、聊かたりとも暗いことはござりません。はい、立派な生證據がござります。したが旦那様、譯も質さずそれほどお腹の立つものを、その萬分の一を思召しても、御寮人様のお心の辛さがお分りになりませう。

以春　何が辛さぢや、俺の留守勝ちをよいことにしさらして……。

茂兵衛　旦那様、あなたはお眼が晦んで居ります。

以春　おゝ、よくも俺の眼を晦まし居つたな。

（また茂兵衛を打つのを、おさんが止める。）

おさん　手荒なことをなされたら、後で茂兵衛に面目なうて。

（以春はおさんを蹴仆す。茂兵衛と三人入り亂れる。室の正面からお玉が出て以春を引分ける。茶の間の正面から助右衛門が出る。）

以春　こいつ等は不義者ぢや、たつた今現場を俺に見付けられ居つたのや。

（お玉は驚きと嫉妬の表情。）

茂兵衛　お玉どん。お前が何よりの證據人や。今日昔からの成行きを篤くり旦那様へ申上げておくれ。

お玉　茂兵衛さん、あんたの素氣ない譯が今分りました。

茂兵衛　え。

お玉　戀ういふ大外れた樂しみがあるによつて……。

茂兵衛　お玉どん、お前まで……。

おさん　お玉、最前お前とあの通り、相談の上でしたことやないか。

お玉　でも、現場をお見つけられやしたら。

茂兵衛　お玉どん。

（手を握らるのを以春が蹴仆し、茂兵衛と、おさんを激しく打つ。助右衛門が漸う引き分ける。）

以春　二人ともその首を粟田口に晒らしてやる。覺悟してゐい。

助右衛門　店の者が眼さましたら御外聞にかゝはります、どうぞお靜かに〳〵。お腹の癒るやうにどうなと致しますよつて、兎に角奥へ。これお玉どん。

（お玉と二人して以春を奥へ連れ去る。）

おさん　茂兵衛。

茂兵衛　御寮人様……。

（二人は[illegible]の體。）

――幕――

（二ノ一）

橋立の文珠に近いおさん茂兵衛の隱れ家、山の中腹にある小さな草屋。六疊ほどの一室に圍爐裏を切り、上手は土間。下手は窓のある壁。正面は襖の出入。その後に極く狹い寢室がある。後に山を負ひ、崖の下から農家の屋根だけが見えてゐる。周圍には木立が茂つてゐる。三月のある日、夕近い頃。

遠くに竹法螺や、地引網の聲が聞える。おさんが洗濯物を取入れてゐる。

茂兵衛が釣道具と、魚籠を提げて上手から出る。

おさん　お歸り。けふは春になつて初めてのうらゝかな好い天氣どしたな。

茂兵衛　毎日々々雪と風で閉口したが、二三日前の雨からころッと變つて、それもその筈や、京ではもうやがて稻荷のお出や。

おさん　ほんにさうどすな。

（一應淺淋しい顏つきで、やがて裏から洗足の水を汲んで來る。）

おさん　けふは釣れましたか。

茂兵衞　岩瀨の海で名物の鰻と鱸を三尾も釣つたので、戻りに文珠の茶屋へ賣つて、あとがあんたの好きな小魚……これだけあれば今夜のさいにはなるやらうと思うてな。
おさん　剩りますわ、燒いてお酢に浸して置いて、明日のお辨當に入れまつさ……。
茂兵衞　明日は沖へ鯖釣りに連れて行かうと、下の漁師がいうてゐるのやが。
おさん　そんな危ないこと、沖へなぞ行かんと措いとくれやす。
茂兵衞　大丈夫、海はあの通り、まるで鏡のやうや。
おさん　でも、こつちやの海は怖いのやさうな、若しもの事があつたらどないしますの、ほんまにやめとくれやす、賴みどすよつて。
茂兵衞　そない案じるなら行かへん。行かしません。
（足を濯ぎ了つて、室へ上り、爐に寄つて、莨を喫す。おさんは洗濯物を疊み初める。竹法螺が聞える。）
茂兵衞　長閑やなア、まるで世間も何もない、別な世界にゐるやうな。
おさん　私達に世間といふものがあるやなし、二人には爰がほんまの別な世界どす。
茂兵衞　よう淨瑠璃や何ぞに三千世界というてあるが、爰がその世界の一ッかも知れん。はゝゝゝ。然し、大分洗濯が上手になつたらしい。
おさん　ほゝゝゝ。人間は馴れゝばどんなことでも出來るものどす。
茂兵衞　さう云へば、私もいつの間にか漁師の眞似が出來るやうになつた。今に下の畑を借りて野菜物ぐらゐ作れるやうになるやらう。あゝ草臥れた。
（茂兵衞は長く臥はる。）
おさん　終日漁ばかりしてゐたら、草臥れますやらう。
（おさんは疊んだ洗濯物を押遣つて、茂兵衞の背を擦る。）
茂兵衞　もう澤山、背はどうもないのやけれど、脚がだるうなつて……。
おさん　脚どすの。
（また足を擦る。）
茂兵衞　あゝ、えゝ鹽梅、そこがだるうて……。
（茂兵衞は、卒かに跳起きる。）
茂兵衞　濟みません、勘忍しておくれやす　勘忍しておくれやす。
おさん　まア、なんどすの……。
茂兵衞　いえ、濟みません。濟みません。世間の手前を女房扱ひにすることが常習になつて、いつの間にか心まであなたを女房扱ひするやうになつてしまひました。奉

公人が御主人に足擦ます。そんな勿體ないことが……。
おさん　世間も何もないたつた二人ぎりの世の中に、主人の奉公人のといふ隔てが何所にあるのどす。
茂兵衛　さうは申すもの丶やつぱりあなたは……。
おさん　い丶え。い丶え。丹波からこの丹後へ來る途中。普甲峠の絶頂で海を見た時、あんたは何というて約束してどした。二人はこの後あの海のやうに、平かな隔てのない心で暮さう。夫婦といふ名が惡いなら、世界の中の二人者と思ひませうと。
茂兵衛（遮つて）あやまりました。もう二度といひ出しやしません。私にしても以前のことを思ひ出す度に、心が苦しい。忘れます、ふつ丶り忘れます。
おさん　どうで世の中から懸離れて暮すからは、道の義理のといふこともい丶加減に忘れてしまうて……。なア、さうと違ひますか。
茂兵衛　そりや義理も道も世の中の湧き物やよつて、いうたらそんなものやけれど……。
おさん　私や一つも道がなうて、そしてどこへでも行けるあの海のやうに、思ふまんまに暮して行きたい。さ、もつと擦りませう。
茂兵衛　自渡作つて、忘れてゐたが、今の間に魚を料(つく)つてしまはう。

おさん　そんなら、晩にゆつくり採まして貰ひまつさ。
（茂兵衛は晴々しい心持で走り元へ去る。おさんは小箱から鏡と櫛とを取出し、上り端で髮を梳き上げながら、荒んで行く自分の容貌を淋しげに見入る。）
（雲雀が囀り、夕陽が輝く。）
おさん　樂しさうに囀ること。
（下に降りて空を仰ぐ、足元に蓬の生えてゐるのに心附き摘み採る。）
おさん　蓬がいつの間にかこないになつて……。
（見てゐるうちに何か思ひ出した體で顔を曇らす。また鏡を取つて見窶らしい我が姿に泣く。茂兵衛が魚を入れた皿を持つて走元から出る。）
茂兵衛（ちつと見て）やつぱり以春樣のことを思ひ出さずにはゐられますまい。（嫉妬の表情）
おさん　思ひ出すのは口惜しいことばかり。あれほど眞實を盡したのに、何の爲めにこないな目にあはされるのかと思ふと。
茂兵衛　口惜しいと云ふのは戀しいからでござります。こない目にあはなんだら、あなたと私とは今いうた通りの主從や。
おさん　あ、勘忍して、私が惡かつた。
（縋る、おさんを手荒く振り放す。）

茂兵衛　あんたは京が戀しいのやらう。

おさん　唯憎いのどす。二人がかうして暮してゐても、その後に京といふ世の中があるばつかりに、あんたは私を我ものにしてくれてやない。この儘月日が經つて行つたら、濱の女子(をなご)や百姓の女房のやうに、見るかげもなうなつて、あんたにも捨てられるに極まつてゐます。私は辛い、私は辛い……。

（激しく泣く。茂兵衛の嫉妬は強い感激に變つて行く。手を取って。）

茂兵衛　その辛らいのは私も同じことでござります。いつぞやあなたはこれでも〳〵と、旦那様の拷問にかゝつてゐると仰しやりました。それと同じやうに、私達二人は不義といふ字に附纏はれて、明けても暮れても拷問にかゝつてゐるのでござります。京を立退いてから、誰が見ても夫婦やし。何をしてもまた夫婦同樣に暮しながら、不義になりたい、いや不義になるまいと、心で責め合ふ苦しみは、いつそ殺されたがましやと思うたことも二度や三度ではござりません。（泣く）

おさん　私も、いつそ死んでしまうたらと思ひながら、あんたの戀しさに引かれて一日々々とけふまで暮して來た。もし、私はどうなるのどす……、どうしたらえゝのどす。

茂兵衛　御寮人樣。

（驚いて離れる。）

おさん　聞くのもいや、私の名を呼捨てにして。

茂兵衛　それが云へたら……云はれる位なら……。

（おさんは泣き伏す。いつの間にか陽が落ちて、黄昏の色が四邊を罩める。上手から助右衛門が出る。家を繞つて二人に近づく。）

助右衛門　茂兵衛。

茂兵衛　誰や。

助右衛門　私ぢや。

茂兵衛　おゝ、助右衛門。

（取りつくおさんを後に圍ふ。）

助右衛門　私に見つけられたらもう觀念するやらう。おさん樣。

（捕へようとすのを遮る。）

茂兵衛　待つてくれ、これにはいろ〳〵入譯が……。

助右衛門　えゝ措きさらせ。（陰に向って）茂兵衛に相違ござりません。

（上手、下手から、三四名の捕手が出る。）

おさん　茂兵衛、早う。

茂兵衛　おさん樣。

（二人は家へ駈け上る。）

（茂兵衛は有合す、出刃庖丁を取つておさんを刺さうとする。捕手が遮る。）

（廻る）

（二ノ二）

おさん茂兵衛の隠れ家の裏手。

上手に寝室の突上窓。それに隣つて走り元の櫺子窓。家に近く縄釣瓶の井戸。後は橋立の海を望み、崖下に文珠堂の一部が松林の間に見えてゐる。鐘の音。水鳥の聲。夕月が斜めに舞臺を照らす。

おさんと茂兵衛が捕手に引立てられて出る。

助右衛門　おい茂兵衛、私は主命で見知人に來たのやから、惡んで貰ふまいぞ。おさん様も駈落ちさへなされなかつたら、旦那様も恥を世間に振撒きたいことはなし、離縁ぐらゐで濟ましてやつたものをと、仰しやつてゞござりました。お蔭で茂兵衛も助かるものを、惡うなつたらいやでも應でも粟田口へ列ばにやならん、どえらい事をしてしまうたな。

茂兵衛　お役人樣、名殘りにあの水を一口飲ましておやり下さりませ。

（捕手は水を酌んで飲ます。おさんも飲む。）

茂兵衛　この捕繩一本で漸う望み通りの不義者になれた、おさん。

おさん　茂兵衛どの。

茂兵衛　私の心は疾うからお前と、不義をしてゐた。

おさん　私もお前に命を渡してゐました……。

茂兵衛　粟田口で嬉しう、首をならべよう。

（二人は笑顔を見交す。捕手に引立てられて揚幕へ去る。）

——幕——

陸奥陽之助（二幕三場）

人

陸奥陽之助　新政府の使者。後の宗光伯
吹田四郎兵衛　三井組の番頭
お　蓮　鏡寅の娘
お　近　鏡寅の主婦
安藤行藏　陸奥の下僕
由良守應　兵卒
鴻池屋善右衛門　大阪の富豪
加島屋久右衛門　同
加島屋　作兵衛　同
米屋　平右衛門　同
米屋喜兵衛　同
米屋伊太郎　同
鴻池屋　惣兵衛　同
平野屋　五兵衛　同
鴻池屋　市兵衛　同
加島屋　作五郎　同
辰巳屋久左衛門　同
加島屋三郎兵衛　同
米屋長兵衛　同
其他關係、兵卒、女中

第一幕

鏡寅の離座敷

「舞臺面」茶室めいた六疊ほどの離座敷。正面に床と壁。上手側面は襖の出入、その外に水屋を兼ねた手狹な次室がついてゐて、そこから廊下傳ひに母屋へ通じるやうになつてゐる。平舞臺は建仁寺垣で圍はれた小庭で、植込みや石燈籠などの寂が、堀江あたりの料理屋とは思はれぬやうな趣きを添へてゐる。

慶應四年(明治元年)閏四月十三日の午後。

三井兩替店詰の手代吹田四郎兵衛(四十二、三)が女中に導かれて飛石傳ひに下手から出る。

女中　このお座敷でよろしうございませうか。

四郎兵衛　こゝで結構。けふはごく內々の相談があるのだから、外の客に知れないやうに、くれ〴〵も賴んで置きますよ。

女中　よろしうございます。

（女中去る。下手の襖を開けて鐃貫の娘お蓮（十七、八）が茶を持つて出る。）

蓮　おいでなさいまし。夜前は大きに。

四郎兵衛　心やすい儘に勝手なことを頼んですみません。

蓮　どういたしまして。（茶をすゝめる）

四郎兵衛　（ちつと見て）　お蓮さん、どうかしなすつたのか、大層眼もとが脹れてゐるぜ。泣いたな。

蓮　いゝえ……。

四郎兵衛　私に秘すことはない。また例の一件でお母さんにやられたな。

蓮　えゝ……私どうしたらよいのかと、思案に暮れてゐます。

四郎兵衛　一體あんたは眞實陸奥さんに惚れてゐるのか、どうなのだや。

蓮　それは、あの……私にも分りません。（羞かしさうに眼を俯せる）

四郎兵衛　お母さんは、定めて別れてしまへといふのだらう。

蓮　同じ持つなら、なんで町の方とならんのかと……。

四郎兵衛　三條様のお使者といふお役目だけは立派だが、金となると陸奥さんでは儲かりやうがないからな、はゝは。

蓮　私はお金儲けのために、稚さい時から爰へ貰はれて來たのだと、今も厭なことばかり聞かされました。

四郎兵衛　それであんたはどうする積りだな。

蓮　どうしたらようござりませう。

四郎兵衛　相談をかけられてもちよつと返辭に困るが、お母さんが無理に別れさせようとしたら、あんたはどうしなさる？

蓮　私は……陸奥さんは、死んでも別れることはならぬと仰しやるのでございます。

四郎兵衛　死んでもは大分手厳しいな。然しさうなつたら、お母さんは堰いても逢はしてはくれないだらう。

蓮　今でも逢ふどころか、阿彌陀池の夜店にもなかく出してはくれませぬ。昨日漸う人を頼んで、手紙でコッちの様子を報らしてあげましたら、陸奥さんからも御返事が來ましたけれど……（おどく〳〵して室外ばかり氣にする）

四郎兵衛　陸奥さんからはどんな返事を下すッたな。

蓮　餘り家が面倒なら、思ひ切ッてこちらへ來てしまへと仰しやるのですけれど……。

四郎兵衛　コッちとは？　八軒家の役所へか。

蓮　さうだらうと思ひます。

四郎兵衛　司農局へ來いとは隨分亂暴だな。

蓮　大阪の御用が濟んだら、西京へ連れて歸るからと……。

四郎兵衛　連れて歸るはいゝが、歸つたところでお屋敷があるわけではなし、今のところでは他家の二階に下宿暮しだからな。

蓮　間借りをしておいでなさいますので？

四郎兵衛　狹い所に大勢お友達は押しかける、何も彼も遣りッ放しで隨分大變なものだ。

蓮　そんなこと構ひませんけれど、出たら後が騷動になりはしまいかと、それが心配で……。

四郎兵衛　どうせそれは騷動になる。大事な金箱を默ッて渡して置くやうなお母さんではないからな。

蓮　それにあんまり不義理なやうな氣もしますし……。

四郎兵衛　義理を云ひ立てれば、確に不義理には違ひない。

蓮　行けば不義理になるし。あの方は死んでも別れることはならんと仰しやるし……。

四郎兵衛　お蓮さん、追分道に立ちなすッたな。

蓮　私、欺されてゐるのではないでせうか。

四郎兵衛　そんなことがどうして他人に分るものか。

蓮　どうしませう……どうしたらいゝのでせう。

四郎兵衛　今もいふ通りで、相談をかけられても、こればかりは返辭が出來ない、然しあんたが右を向けば右、左を向けば左を向いてあげるだけの親切は、私も持合はしてゐる積りだ。

（人の跫音にお蓮はギョッとして振返る。襖を開けて主婦のお近（五十餘）が出る。）

近　毎度御贔屓に有難う存じます。

四郎兵衛　けふはまたお世話さんです。

近　いゝえあなた、まことに行き屆きませんで。お蓮、姿が見えないので何所へ行つたかと思つてゐましたよ。

四郎兵衛　今私の惚氣を聞かしてゐた所さ。はゝゝ。

近　けふは何か御相談ごとださうで、誰樣がお越しなさるのでございます。

四郎兵衛　けふは千草屋の御主人がお見えになる筈だが、都合によると後から加島久さん、加島作さん、それから米喜さんもお見えになるかも知れない。

近　あの……あの御主人がでございますか……。

四郎兵衛　左樣。

近　まあ〳〵、お店の衆には毎度御贔屓にして戴いてをりますが千草屋さんや加島屋さんの旦那さんがお越しになるとは……。お蓮、お前まあ失禮なそんな姿をして早く着物でも着更へて、それから女中達にも小紋に着更へるやうにさういつておくれ。

四郎兵衛　いや、けふは極く內々の集會だから、決してそ

んなに仰々しくして下さらぬやうに。

近　へえ／＼承知致しました。では鳥渡御免下さいまし。

（あたふたと出て行く）

（四郎兵衛は見送つて笑ふ。）

四郎兵衛　大阪選抜きの富豪がお見えになると聞くが早いか、直ぐに娘を……と來る。お母さんの眼前にはもう山と積んだ千兩箱がちらついてゐるのだらう。陸奥さんなんぞに鼻汁もひッかけないのは當然だ。

蓮　陸奥さんは何時京へお歸りになるのでございませう？

四郎兵衛　明日にでも御用が濟みさへすれば、大急ぎでお歸りになるだらうと思ふ。

蓮　まあそんなに急に……。

四郎兵衛　急どころではない、京ではお上の皆さんが首を長くして、陸奥さんの吉左右を待焦れておいでなさるのだから。

蓮　そんなに急では……。どうしたらいゝのか……。

四郎兵衛　お蓮さん、人間の運は富籤を抽くやうなもので、いくら考へても、それが富籤だと始めから分りさうなことはないのだから、ひよッと空籤を抽當ても、悔やんだり歎いたりしないだけの覺悟をつけて置いて抽くことだ。

蓮　その覺悟がなか／＼つかないので困ッてしまひます。

四郎兵衛　覺悟はほんに富の籤のやうに、さう手取早くつくものではない、まあ精々自分の心と相談をして見なさるがいゝ。

（次の間の襖を開けて女中が顔を出す。）

女中　お蓮さん、おかみさんが……鳥渡どうぞ。

四郎兵衛　さあ／＼早くおやつしをして、精々美しいところを見せて貰はう。

蓮　衣裳なんぞ着更へぬ方がと仰しやッたではございませんか。

四郎兵衛　それは女中さん達のことだ、お蓮さんは別さ、はゝゝゝ。

（お蓮は會釋して女中と一緒に去る。）

（四郎兵衛は矢立と懐紙を取出し何か考へながら書き記す。庭傳ひにお近が千草屋龜之助（三十餘歳）を案内して出る。）

近　千草屋様がお越しでございます。

四郎兵衛　おゝ、これは……（座を離れて丁寧に迎へる）

龜之助　大層待たせましたな。

四郎兵衛　いえ、私も今しがたまゐりましたところでございます。

龜之助　こゝの家にこんな閑靜な部屋のあることはちつとも知りませんでした。

四郎兵衛　滅多に妾等へはお越しになることもございます

まいから。
龜之助　それでも參會で二、三度來たことがありますよ。
近　今日はようこそ。每度御贔屓にあづかりまして有難う存じます。
四郎兵衞　こゝのおかみさんでございます。今に評判の娘も御挨拶に參るさうでございます。はゝゝはゝゝ。
龜之助　はあ、左樣か。
（怪訝な顏つき。お近は女中の運ぶ茶を受取つて龜之助に侑める。）
近　こんな穢くるしい所へ旦那樣がお越し下さいまして、本當に手前どものまんがなほります。ほゝゝゝゝ。どうぞ御緩りと。（お近は去る）
（龜之助は茶をすゝりながら何か考へる體。四郎兵衞は懸念さうにぢつと見戍る。）
四郎兵衞　皆さんの御樣子は如何でございました……。
龜之助　今まで會所で集り會つてゐたが、誰一人お請けをしようといふものはない。中には昨日御沙汰のあつた時、その場できッぱりお斷りをしなかッた手代達が惡いなどと、大分鼻息の荒い人もあッた。
四郎兵衞　それで結局お斷りなさることに極まりましたのでございますか。
龜之助　何しろ初めが三百萬兩、それから五萬兩、引續いて今度の十萬兩と、半季もたゝぬうちに三度までの御用金とは、幕府の時代にもないことだといふので……。
四郎兵衞　いや、そこが勝負ではございませんか。今の十萬兩を惜しむと、前の三百萬兩が生きないことになッてしまひます。
龜之助　私もさうは思ふが、自分だけが取りしきッていひ出す譯にも行かず、いひ出したところで聽いてくれる人がないのだから困つてしまふ。知つての通り私の家は、先祖代々禁裏の籠の御用を承つてゐて、諸役御免の家柄だけに、隨分幕府方からは睨まれた。近い所では新撰組だの何だのと、苦しい思ひや危ない淵を渡つて來ました。大阪にはたッた一軒の禁裏御用の千草屋だから、千草屋一軒の力で出來ることならどんな御用でも喜んで勤めようと思つてゐるが、何分王政復古といふ大御變革なのだから、私達の一軒や二軒が力んだくらゐではどうすることもできず、全く齒痒いことです。
四郎兵衞　しかし、萬一この御用金が調はぬとなりますと、世の中がまたどう變るまいものでもございませんぞ。
龜之助　世の中が變るとは……。
四郎兵衞　これは極く內々のお話でございますが、この十萬兩が出來る出來ぬで、今最中の五稜郭の戰爭の勝敗に響くのでございます。

亀之助　では十萬兩は軍用金なのか。

四郎兵衛　いえ、さうではございません。先年幕府から阿米利加へ註文してあつた鋼鐵造りの素晴らしい軍艦が、今度出來上つて日本へ廻ッて來たのでございます。

亀之助　成程、そのことは私も聞いてゐる。

四郎兵衛　幕府が註文した軍艦だから引取らぬといへば、艦は直に五稜廓の幕軍の方へ廻されるに極まってゐます。さうなれば外國へ對して新政府の御威光にかゝはるばかりか、容易ならぬ幕軍の強味になつて、戰の旗色がどう變るまいものでもございません。萬々一官軍敗北といふやうなことにでもなれば伏見の戰爭以來、折角爰までよい目を彈き出した算盤の桁が崩れて、世の中はまたどんなことにひつくりかへらぬとも申せません。

亀之助　十萬兩はその艦の代金になるのだな。

四郎兵衛　薄々ながら確かにさうだと聞いて居ります。然しそれも火急なことで、もう隻手(かたて)の指に數へるほどしか猶豫がないらしいのでございます。

亀之助　ふう……たつた十萬兩で……。

四郎兵衛　その、たつた十萬兩が、前の三百萬兩にも對ふのでございます。ことによると三百萬兩以上に働くかも知れません。

（亀之助は腕を拱む。軈てその顏に決心の色が浮ぶ。）

亀之助　十萬兩は高が知れてゐるが、前の三百萬兩はあり、これから先の御用金も見越してゐる衆(みんな)の肚は、なか〳〵一とほりのことでは動くまい……。どうしたものか。

四郎兵衛　思切つた大芝居でも打たなければ駄目だらうと思ひます。

亀之助　陸奥さんの內意で、三井のあんたが私をこゝに引張出したのからして芝居だな。

四郎兵衛　でもこれはほんの大序でございます。

亀之助　すると私がその次の幕を受持つ譯か。

四郎兵衛　さうなれば終局(しまひ)の幕は陸奥さんがおやりになります。

亀之助　私はあまりいゝ役廻りではない、どうせ衆(みんな)から恨まれたり憎まれたりするのだらう。

四郎兵衛　いや、そんなことは……。よしまたあつたにいたしましても、やがては分ることでございますから。

亀之助　怨まれても憎くまれても、行くところまで行かなければ、これまでの御奉公が入れ佛事になる。四郎兵衛さん、大體いふと昨日役所に手代を招んで御沙汰のあつたのが拙い。なぜ是非とも主人が自身で出頭しなければならぬやうにお計らひなさらなかつたのか。膝詰めの談判なら、そこは有る手から漏れるで、十萬兩ぐらゐどうともなつたに違ひない。

四郎兵衛　大きに御尤もでございます。では新規蒔直しと致したらどうでございます。

龜之助　しかし味を知つた今となつてはな。

四郎兵衛　そこが芝居の打ちどころでございます。

龜之助（何か思ひ浮んだ體）十萬兩の御辭退に……。さうだ、四郎兵衛さん、よいことを思ひついた。御返辭は明日といふことになつてゐるから、御沙汰を蒙つた家の主人が殘らず揃つて、十萬兩の御用金の御斷りに出頭することに、私の方で纏めよう。

四郎兵衛　成程。そこを通さず泣きつくなり拜み倒すなり……。しかしその主人出頭がうまく纏まりませうかな。

龜之助　明日の返答は手代どもではお取上げにならず、必ず主人が直々にといふお觸れを、けふの間に、總會所まで出してさへ貰へばわけはない。

四郎兵衛　成程……成程。これは至極御妙案でございます。

龜之助　しかし乘るか反るかの大芝居はそれからだが、うまくゆかうかな。

四郎兵衛　うまくゆかねばお上の浮沈みにかゝはります。陸奥さんもさうなれば命がけの氣でおやりになりませう。

龜之助　陸奥さんはたしか紀州出のお侍とかいふことだつたな。どんな氣性のお方か知らぬが　算盤と睨引で困まつた大阪町人はなか／＼手强いからな。はゝゝゝゝ。

（衣裳を着替へたお近が、米屋喜兵衛（四十一歲）を案內して、庭傳ひに下手から出る。）

近　お越しになりましてございます。

龜之助　おゝ、米喜さんが見えた。さ、どうぞ。

喜兵衛　大きに遲くなりました。

（座に着き、四郎兵衛を怪訝さうに見る。お近は次室で茶を入れる體。）

四郎兵衛　御機嫌宜しうございます。

龜之助　はからず爰で邂逅てな。三井さんはお上の內幕に明るいから、內々樣子を聞いてゐたところです。

喜兵衛　あゝ、左樣か。どんな鹽梅ですな。

龜之助　明日司農局へは、主人自身に出頭せねばいかんさうです。

喜兵衛　お請けするのならいゝが、どうせお斷りするのだから。

龜之助　いや、お斷りするのだから、猶更主人が出頭せぬと喰ひ切りがつかぬ鹽梅です。

喜兵衛　成程。それもさうですな。

（四郎兵衛はそつと二人の顏色を窺ふ。）

龜之助　どうです米喜さん、明日はみんな揃つてお斷りに出ようぢやありませんか。

喜兵衛　一人では貫平だが、僕が一緒に出頭されるのなら私だつてまゐりませうよ。

龜之助　時に加島久さんや加島作さんは、どうなさいました。

喜兵衛　加島久さんはけふは先約があるとかでお斷りでしたが、加島作さんと米平さんと米伊さんとは、直ぐ後からお出になる筈です。

龜之助　それは丁度幸ひ、あなたと私とで明日出頭のことをお勸めしようぢやありませんか。しかしほかの方は兎も角も、加島作さんはあのとほりの派手好きだから、こんな窮屈な座敷ではお氣に入るまい。四郎兵衛さんたしか二階に頃合ひの座敷があつたな。

四郎兵衛　ございます、早速さう申附けませう。

龜之助　濟んだ所へ來合はして、氣の毒ながらお頼みします。

四郎兵衛　どういたしまして。（次室へ向つて）おかみさん。

（お近が茶を持つて次室から出る。）

四郎兵衛　爰では狹いと仰しやるから、何所ぞ二階の奧の間へでも。

近　へえ／＼、宜しうございます。多分爰ではお狹からうと存じまして、二階の奧座敷の方が明けてございますから、何時でもどうぞ。

龜之助　では米喜さん、早速そこへ通して貰ひませうか。

喜兵衛　さ、どうぞ。

近　恐れ入りますが、此方からどうぞ。

（お近に導かれて三人は廊下傳ひに下手へ去る。やゝ長き間、たそがれの色が舞臺をこめる。安藤行藏（三十餘の武士）が女中に導かれて庭傳ひに出る。）

女中　どうぞ暫く爰でお待ち下さいますやうに、直ぐにお見えになりますから。

行藏　誰にも知れはしまいな。別席へ呼出してさういつてくれたらうな。

女中　へえ、誰樣にも知れませんやうに申上げて置きました。

（行藏は首肯く。女中は庭傳ひに下手へ去る。廊下傳ひに四郎兵衛が出る。人目を忍ぶ體。ほの暗い室内を透すやうに見て。）

四郎兵衛　安藤さんでございますか。

行藏　四郎兵衛か。

四郎兵衛　大層暗うございますな。

行藏　人目を避けるにはこの方がいゝ。どうだ、形勢は…。

四郎兵衛　大分面白くなつて來ました。

行藏　さうか。出しさうか。

四郎兵衛　さう手取早くは行きません。

行藏　今誰々が集つてゐるのだ。

四郎兵衛　千草屋に米喜、それからたつた今加島作、米平、米伊の三人が來たところでございます。

行藏　皆指折の連中だな。實はお前の便りがないので、役所の方では、大心配で、それでおれが様子を見にやつて來たのだ。

四郎兵衛　丁度よい所へ來て下さいました。明日の返答は手代ではいかん、主人自身出頭するやうにとの嚴重な觸を、今夜のうちにお出し下さるやうに、どうか陸奥先生に御相談下されまし。

行藏　よし、承知した。主人自身出頭するやうに命じるのだな。

四郎兵衛　先生のお仕事はそれからでございます。なアに大阪を脊負つて立つ大町人ばかりで、出す氣にさへなれば、まだ／＼十萬やそこらは何でもないのですから、本人を捕まへて置いて、是が非でも拜み倒すに限ります。

行藏　やす／＼町人に頭を下げるのも殘念だが、これもお國のためだから是非がない。ではおれは直に役所に歸る。

四郎兵衛　御苦勞さんでございます。

（行藏が立ちかける時、上手の庭木戸から、髪を亂したお蓮が泣きながら出る。）

（それを追うてお近が出る。）

近　お待ち。どこへ行くのだ。

（激した語氣。腕を捉へて引止める。四郎兵衛と行藏はぢつと窺ふ。）

近　お蓮、お前はどうしてそんなに私のいふことが聽かれないのだ。早く身じまひをしろといへばいふほど、意地にかゝつてぐづ／＼するし、少し譴責をいへばこの通り。お前はそんな我ままが出來る體だと思つてゐるのか。親の心も知らないで、あのお座敷に行くのが何んでそんなに厭なのだ。

蓮　あたし……厭なんぞと……。

近　口でいはなくつても、お前の所作で分つてゐる。親に楯をついて、勝手な眞似がされるものならして見るがいい。何だ、あんな貧乏侍なんぞ……、二度と再び逢はしてたまるものか。いくらお前がぢたばたしても、親の威光で手を切らしてしまふのだ、さう思つておいで。

（お蓮は咽び泣く。廊下から女中が、燭臺を持つて出る。

女中　暗い所へお置き申しまして相すみません。

（お近は始めて四郎兵衛等のゐるのに心づき極りの惡い體。女中は燭臺を置いて下手に去る。）

近　まあ、ちつとも存じませんで。おゝ、安藤さん、今日

はどちらのお歸りで……。

行藏　いや、もうこゝから歸る所だ。（庭へ下りる）お蓮、何をそんなに叱られてゐるのだ。

近　いえ、なにあなた、あんまり我儘ばかりするものですから。（去れと目顔で命じる）

（お蓮はしぶ／＼庭木戸から去る。）

行藏　では四郎兵衞、頼むぞ。

四郎兵衞　承知致しました。

近　ほんとうにもうお歸りでございますの、まだお早いじやございませんか。安藤さんが素面でお歸りなさるとは、何だか嘘のやうでございます。

行藏　その代りこの次にはうんと醉つてお前を困らせてやるぞ、はゝゝ。

四郎兵衞　ではこれで御免蒙ります。

（行藏とお近は下手へ去る。庭木戸からそつとお蓮が出る。）

蓮　四郎兵衞さん……。

四郎兵衞　また大分痛めつけられたな。

蓮　あたし……もう思切つて、先刻お話の富籤を……。

四郎兵衞　抽いて見るか。縱令それが空籤であつたとしても……。

蓮　悔やみも……怨みもしやしません。

四郎兵衞　覺悟がついたのか。

蓮　えゝ。

（お蓮は座敷に上つて、四郎兵衞の膝近く坐る。）

蓮　四郎兵衞さん、あなたは屹度私の向く方を……。

四郎兵衞　私も男だ。嘘はいはぬ、屹度あんたの味方になる。お蓮さん……。（さゝやく）

（廊下から龜之助が出る。）

龜之助　（襖の外から）四郎兵衞さん。

四郎兵衞　え……。

龜之助　やつぱりこゝだつたのか。（襖を開けて意外の體）や。これは……飛んだ所へ來たな。

四郎兵衞　いえ。どういたしまして……。千草屋樣、四郎兵衞もなか／＼粋に見えるでございませう。

龜之助　さあ、三井さんは何にかけても、腕達者だからな。

（頻りに笑ふ。お近が引返して下手から出る。）

――幕――

第二幕

（一）司農局の廣間

「舞臺面」大阪八軒家の紀州屋敷をそのまゝ用ひた司農局の一室。前側に廣縁のついてゐる書院。次の間境

ひの襖が外してあるので、五十疊餘の長方形の室になつてゐる。室の正面は襖。上手側面は床と壁。下手側面は襖の出入。大きな床に古びた書幅をかけ、次の間に砂子の衝立が置いてある外何の裝飾もない。前面の平舞臺は庭で左右を板塀で閉ひ、下手に小門が設けてある。

下手の襖を開けて安藤行藏が出る。

行藏　（小門の方に向つて）　由良はをらぬか。おい。由良……由良……。

（小門から配下の卒由良守應（三十四、五）が出る。）

守應　お呼びになりましてございますか。

行藏　みんなの支度は出來たか。

守應　はい。御命令通り身拵へを整へて彼方に控へてをります。

行藏　由良。貴公にけふの指揮役を命じるぞ。

守應　は。私に……、然し同僚が私なぞの命令を聽くでございませうか。

行藏　それは聽くやうに俺の方からいつてやる。衆を此方へ呼べ。

守應　承知しました。（小門の外に向つて）　おい。お呼びになつてゐる。衆此方へ來てくれ。

（小門から十數名の卒が出る。皆嚴重に身拵へをして、思ひ／＼に鐵砲、槍などを携へてゐる。）

行藏　最前言含めた通り、けふは最後の大事な談判なのだから、皆ぬかりなく、精々もの／＼しくやらなければいかんぞ。それでけふの指揮役を由良に命じた、その積りでゐてくれ。

卒の一　（不平さうに）　我々はどうして由良の指揮を受けなければならないのでございます？

行藏　由良は貴公等と異つて、風采だけは堂々として、如何にも強さうに見えるからだ。まあ不平をいふな、けふ一日のことだから。

卒の一　けふ一日なら、これも上への御奉公だと思つて諦めます。

行藏　さうだとも、大切な御奉公で、首尾よく行けば拔群の手柄になることだ。さう思つてよく由良の指揮命令を守つてくれ、由良もまた機宜の處置をあやまるな、いゝか。

守應　一生懸命になつてやります。みんな。けふ一日はおれが隊長だ、よろしく頼むぞ。

卒の一　しつかりやれ、貴樣の指揮が惡いと動かんぞ。

守應　よし。大丈夫しつかりやる。

（下手の線から屬僚の一が出る。）

屬の一　唯今鴻池その他のものが出頭いたしました。

行藏　皆揃つてゐるか。

局の一　主人側が十五人、それに銘々手代が附添つてをります。

行藏　よし。手代連は溜で控へさせて、主人だけ庭から奥へ案内しろ。

局の一　承知しました。

（下手へ去る。）

行藏　由良。いゝか。

守應　は……。（卒等に）衆（みんな）、そこで刀や槍の手入れを始めろ。

卒の二　俺の刀は錆ちやをらん。

守應　錆てゐなくてもいゝ、手入れの眞似をしろ。

（皆武器の手入れを始める。行藏は正面の襖から奥へ去る。）

（二人の局係に導かれて、鴻池屋善右衛門、加島屋久右衛門、加島屋作兵衛、米屋平右衛門、千草屋總之助、米屋喜兵衛、米屋伊太郎、鴻池屋忠兵衛、平野屋五兵衛、鴻池屋市兵衛、加島屋作五郎、辰巳屋久左衛門、島屋市兵衛、加島屋三郎兵衛、米屋長兵衛の十五人が小門から出る。卒等は拭ひ上げた太刀を振り、槍をしごき、鐵砲を狙ひなどする。）

局の一　暫くあれでお控へなさい。やがて陸奥さんがお會ひになるから。

善右衛門　左樣でございますか。どうぞ加島屋さん……。

久右衛門　まあどうぞ。

善右衛門　ではお先へ御免蒙ります。

（年若な鴻池屋善右衛門は兢々として座敷へ通る。久右衛門その他も續いて座に着く。二人の局係は小門の外へ去る。守應は卒等を庭傳ひに上手へ去らせてから、殊更に大きな音をさせて小門に錠をおろし、皆を一瞥して上手へ去る。）

善右衛門　私はかういふ所へは始めてまゐりましたが、氣持の惡い所ではございますな。

平右衛門　今のやうに刀や槍などを振廻されるとぞッと致します。何か出來たのぢやありますまいか。

作兵衛　なあに心配するにも及びますまい。大方あれは調練にでも出て行くところだつたのでせう。

喜兵衛　だが、門に錠をおろして行つたのは變ぢやございませんか。

善右衛門　加島作さん、あなたはかういふことはお精しいのではございませんか。

作兵衛　いや、私は役所向きのことなどは一切店の者任せで、何が何やら一向存じませんが、大方金の御相談で他聞を憚るところからあゝやつて錠をお卸しになつたので

せう。なあ千草屋さん、あなたのお家は禁裏御用だからよく勝手を御存じでせう。

龜之助　いゝえ私も一向不案内なのでございます。

喜兵衛　何にせよ、けふは千草屋さんが發頭人で、かうして皆が揃つて出頭したのですから、萬事千草屋さんが取はからつて下さるやうに。

龜之助　どう致しまして、私は唯御相談を申したゞけで、發頭人だなぞとは飛んだことです、萬事どうぞ、御家柄の鴻池屋さんから……。

善右衛門　いえ、私はこの中で一番若輩者ですから、どうかお年役に加島久さん加島作さん、お二人から宜しいやうにお頼み申します。

久右衛門　まあ〳〵そこはその時の鹽梅として、一應あのことだけは、年役に私から申上げることにしませう……然し、けふは大分樣子が違ひますぞ。（一座を見廻し、龜之助に眼をとめる）千草屋さん、あなたは何ぞ聞いておいでゝせうな。

龜之助（聊か狼狽へて）いえ、別に……何にも……。

久右衛門　この前三百萬兩の御用金で、二條のお城にお呼出しになつた時でも、その次に五萬兩の御用で手代連が出た時の談を聞いても、けふの役人衆の樣子とは大變に違ふ。そも〳〵あの錠前が……はてな……。（ぢつと考へる）

喜兵衛　あ、千草屋さん、あんたは私達を……。

龜之助　何を……何を私が……そんなこと決して……。

喜兵衛　いゝや、昨夜の堀江の集會が……。

作兵衛　うん。あの三井の四郎兵衛……。

龜之助　いゝえ……いゝえ。それは、お上の御沙汰だから出頭しようと申したまでゝ……。（どぎまぎする）

（正面の襖が開いて、陸奥陽之助（二十七歳）と安藤行藏が出る。皆は容を整へて迎へる。）

行藏　三條公のお使ひとして判事陸奥陽之助殿がお逢ひになる。けふは主人が直々に出頭するやうに命じて置いたが、相違なくまゐつてゐてくれるであらうな。一應姓名を讀み上げるから返辭をして貰ひたい。（控書を取出し）鴻池屋山中善右衛門……加島屋廣岡長兵衛……米屋殿村平右衛門……千草屋平瀬龜之助……米屋石崎喜兵衛……米屋殿村伊太郎……鴻池屋中原惣兵衛……平野屋高木五兵衛……鴻池屋井上市兵衛……加島屋長田作五郎……辰巳屋和田久左衛門……加島屋樋口三郎兵衛……米屋今堀長兵衛。

（讀上げると一々返辭をする。）

陽之助　この度の大政御變革について、大阪三鄕の町人、分けてお身達が總代となつて御奉公の誠をいたし、この

程も進んで三百餘萬兩の御用金をお請けしたことについては、お上に置かせられても御滿足に思召され、追つて格別の御沙汰もあらうと思はれる。さて今度の十萬兩は關東平定についての御用金で、極めて急を要することは、先日手代どもへ懇々申し聞かせて置いたから、改めていふまでもなく皆存じの上で出頭したことゝ思ふ。それで右の十萬兩は、明後十六、十七の兩日中に三井兩替店まで差出すこと。火急の御用ではあり、金高も少額であるから、三百萬兩の際のやうに、總代連署の請書を出すには及ばん、今日口頭でお請けをして貰へばそれでよろしい。

久右衛門　加島屋久右衛門、年長でございますから、一同に代つて御返辭を申上げます。先日手代どもへ御沙汰がございましたから、それ〴〵相談を重ねましてはございますが、金子不廻りの折から、先日の御用金の御沙汰で、大阪の町人としては精一ぱいの御奉公を申上げました所、そこにまたぞろ五萬兩の御用金、引續いて今度の十萬兩とございましては、何ともはや力に及びかねるやうにございます。つきましては一同協議の上、御辭退のため打揃つて出頭いたしました次第で、どうぞその邊をよろしく御推量下さいますやうに……。

陽之助　意外千萬なことだ。三百年來日本の商賣の根源地として、天下の富を思ふまゝに吸ひ寄せて來た大阪町人が、三百萬兩はおろか、五百萬兩、千萬兩の御用金子も事を缺くはずはない。冥加としても進んで御用を勤むべきであるのに、僅か十萬兩の御用金さへ斷るとは、お前達は朝廷を輕んじ我々要路の役人を侮蔑するのだな。

久右衛門　どう致しまして、決して左様な覺えは毫頭ございません。失禮ながらお武家様方は、商人の金廻りといふことを御存じございませんので、成程、大阪は日本一の商賣の激しいところでございますが、それだけになかなか遊んでゐる金と申してはないのでございます。その中から三百萬兩の御用金で、そのうち百五十萬兩だけを一度に上納いたしただけでも、容易ならぬ苦しみだつたのでございます。

陽之助　噓をいへ。先年來の天下の騷動を、ぼんやり見過してゐる商人が大阪にあるか。お前達は政治の變革を見越して商賣も手控へ、諸藩への貸附けも取立てられる限り取立てゝ、如才なく正金にして抱へ込んでゐることは疾くから我々は承知してゐる。武家は金廻りのことに暗いなぞと、不肖ながら判事の役目を勤むる陸奥陽之助は、そんな甘手なごまかしに乘るやうな男ではないのだぞ。

（威猛高にきめつける。）

作兵衛　慮外ながら唯今久右衛門から申上げましたのはお

上を輕んじましたのでも、またお役人を蔑りましたのでも決してございません、さしかゝつて金子の調達に當惑いたしてをります次第を、一同に代つて申上げましたゞけなのでございます。もつとも商人のことゆゑ、少々景氣さへ復つて參れば十萬や二十萬の御用金は、兎や角お詞を戴くまでもなく、今が今でも差出すのでございます。どうぞその邊を思召しまして、この度だけは御赦免下さいますやうに、只管お願ひ申上げます。

陽之助　お前は加島屋作兵衞だつたな。その言では景氣さへ復れば十萬や二十萬は何でもないとのことだが、元來先を見越して取引をするのが商賣の道ではないか、するとお前達は今の政府に見込みがないと見越したのだな。

作兵衞　いえ、決して左樣なことは……。

陽之助　高が十萬や二十萬といふその金子さへ用立てぬのは、畢竟新政府に望みをかけぬ證據と見るべきだらう。それならそれと明かにいつてくれ、當方にも覺悟がある。

作兵衞　以ての外のことで、萬々一にも左樣な量見がございましたら、先の折の御用金からして御辭退を申上げます。假にも三百五萬兩。大阪町人のお上へ盡す眞心は、それだけでもお分りになつてゐることかと存ぜられます。

陽之助　その誠忠なる奉公振りを存ずればこそ、重ねて十萬兩の御用金を頼んでゐるのだが、前には誠忠であり、今は不忠であるとは、何としても當を得ぬことではないか。

作兵衞　それは殘念ながら力が及ばぬからでございます。

陽之助　力が及ばぬ……。確にお前達は力が及ばぬといふのだな、日本の民と生れながら、國家の御大事に臨んでも、力が及ばぬといつて一身一家の安泰ばかりをはかるといふのだな。

（威嚇的な語氣。下手の妻戸から屬僚の一が出る。ちよつとためらつたが、進み寄つて書面を陽之助に渡す。）

屬の一　御返事を……。

陽之助　（手早く讀んで袂へ入れる）よし。

屬の一　は……。

陽之助　（殊更に嚴格に）よろしいといつて置け。

屬の一　承知致しました。

（妻戸から去る。）

陽之助　唯今重ねて三條公から御書面を遣はされて、大阪町人の赤誠に訴へて、是非とも御用金を調へて戻れとの嚴命を蒙つた、然るにお前達が飽までも御辭退申上ると いふなら、陸奥陽之助は一身を投出して、最後の手段を執るより外はないが、それではお前達の不爲でもありまた氣の毒でもあるから、願はくば穩かに談を取り纏めたいと思ふ。お前達はどうあつてもお請けをすることはな

らぬといふのか。最後の返答をしてくれ。

（しばらく沈默が續く。善右衛門はそつと久右衛門と作兵衛に囁く。）

善右衛門　恐入りまするが、今一應相談が致したうございますので、どうぞしばらく御猶豫を……。

陽之助　相談ならこの席でするがよい。確たる返答を聞くまでは一人たりとも退座はゆるさぬ。安藤……（眼配せする）

行藏　承知しました。

（緣へ出合圖をする。由良守應が以前の卒を隨へて出で、もの〳〵しく出入口を警戒する。）

（善右衛門。久右衛門。作兵衛の三人を中心に、車座になつて協議を始める。その中の四五人は頻りに龜之助を攻撃する體。屬僚の一がまた妻戸から出る。）

屬の一　（陽之助の傍に進み）唯今のが何時ごろお出でなさるかそれを承りたいと……。

陽之助　（打消す樣に）いや、それは晩に……。まあそんな風にでもいひつけて置け。

屬の一　承知いたしました。

（妻戸から去る。）

龜之助　皆さんが私をそんなに思召すなら差出がましうございますが、手前が御返事を申上げませう。それが皆さんへの面晴れでございます。

（皆元の座へかへる。）

龜之助　唯今再應協議を致しましてございますが、この度のところはどうあつても御辭退申上るより外はございません。卒爾ながら三條大納言樣へ宜ろしくお執成し下さいますやう。一同に代りまして千草屋龜之助からお斷り申上げます。

陽之助　さうか。ではいよ〳〵大阪の町人は。新政府の御用を勤めぬのだな。

龜之助　いえ、決して左樣ではございませんが……。

陽之助　默れ、その方ども何と心得てゐるのか。この十萬兩は關東御平定、人民安堵のためのこの上もない大切な御用金だぞ。日本の民と生れながらかゝる御大事に際して御用を勤めぬとは不埒千萬な町民どもだ。よし。この上は陸奥陽之助一身を賭して最後の手段をとる。安藤、町人どもを殘らず一室へ押込めてしまへ。

行藏　承知しました。（立かゝる）

龜之助　（戰いて）どうぞ……どうぞ暫く。それは餘り御無體でございます。

陽之助　勿論無體は承知の上のことだ。その方どもを人質にして面々の店に押かけ、有金を奪つて急場の御用金に宛てた上で、陸奥陽之助は切腹をして申譯をする。不義

も無體も天下國家の大事にはかへられぬのだ。由良進發の用意をしろ。

（陽之助が立上るのを鴻池屋市兵衛が必死にとめる。）

市兵衛　それでは大變騒動の二の舞が出來て、大阪の町がめちや／＼になります。どうぞ……どうぞ、穏かな御分別を……。

陽之助　その穏かな分別を、其方達がせぬから是非もないのだ。

市兵衛　いえ、まだ／＼御相談の道はいくらもございます。

陽之助　斷然辭退するといつたではないか。

市兵衛　そこが商人のことで……もし皆さん……御本家、あなたも默つておいでなさらずに……。

善右衛門　でも、どう申したらよいのか……なあ加島久さん。

久右衛門　（決心の表情。陽之助の前へ進んで）十萬兩の御用金、お受けを致します。

行藏　え。お請けをする。お前の一存か……。

（陽之助が眼配せしても、行藏は心づかずに膝を乘出す。）

久右衛門　失禮ながら、こゝまでのお骨折……を拜見致しましては、誰一人異存はないことゝ存じます。

陽之助　（はつとしたがさりげなく）さうか……。確にお請けをするな。

（皆頭を下げる。陽之助と行藏は吻とした體で顏を見合す。）

陽之助　十萬兩の御用金調達方をひき請けてくれてこの上の滿足はない。ついてはこゝに御用金上納の割當てを作つて置いたが、萬一出し高の上に異存があるなら、相談の上勝手に變更してくれ、こちらは唯十萬兩の都合にさへなれば、銘々が分擔の多寡はどうなつてもよいのである。

（書類を行藏に渡す。）

行藏　（讀上げる）一萬二千兩づつ、山中善右衛門。廣岡久右衛門。長田作兵衛。一萬兩、殿村平右衛門。八千兩づゝ、平瀬龜之助。石崎喜兵衛。殿村伊太郎。五千兩づつ、高木五兵衛。中原惣兵衛。四千兩づつ、井上市兵衛長田作五郎。三千兩づつ、和田久左衛門、淺田市兵衛。樋口三郎兵衛。今堀長兵衛。都合十萬兩。

久右衛門　委細承知をいたしましてございます。

陽之助　先刻も申した通り、至急の御用金だから、明後、十六、十七兩日のうちに相違なく三井組へ納めてくれねばならん。確と申付けたぞ。では自由に引取つてくれ。御苦勞だつた。

(陽之助と行藏は正面から去る。守應も卒を隨へて上手へ去る。皆は夢からさめたやうな顏つき。久右衞門は懷中から書付けを取出して見る。)

市兵衞　全く一時はどうなることかと思ひましたよ。

作兵衞　ひやりとはしたが、考へて見ると元々金の談ですからな。

善右衞門　然し役所事は手代に限ります、二度と來るところぢやございません。

久右衞門　(書付け見ながら)お役人もなか／＼ぬかりがない。私の割宛てとぴつたり合つてゐる。千草屋さん。あんたも懷中にこんなものを持つておいでだらう。

組之助　いえ、どう致しまして……。

喜兵衞　外は兎も角、千草屋さんの八千兩は安過ぎますよ。

組之助　戯談仰しやつては困ります。

(善右衞門と作兵衞とは、久右衞門の持つ書付けを覗く。)

作兵衞　これはどうも……。始めから割宛てを拵へておいでだつたのですな。

久右衞門　でも、さすがにこんな芝居を見ようとは思ひませんでしたよ。はゝゝゝ。

(皆苦笑する。上手から守應が出て小門を開く。)

守應　どうぞ皆さん、こちらからお歸り下さい。

(丁寧に會釋する。)

―― 暗轉 ――

第二幕

(一)　築地の船十

「舞臺面」　築地の席貸船十の二階座敷。正面欄干つきの縁。そのむかうに大川の流れと對岸の家並みが見える、上手に床。下手は襖の出入。その外側に廊下が沿ひ、下手奥へと通じてゐる。第一場と同じ日の夜。

お蓮が燭臺の灯に草雙紙を讀んでゐる。やがてそれにも飽いた態で縁へ出る。舟歌と艪の音が間近に聞える。お蓮は慌てゝ座にかへり、所在なげにまた草雙紙を取上げる。廊下から女中が出る。

女中　大層遲うございますが、もう一度お役所に使ひをあげて見たらどうでございませう。

蓮　えゝ……でも御用がおいそがしいのでせうから……。

女中　人を待つほど辛氣なものはございません。もつと他の本でも持つてまゐりませうか。

蓮　いゝえ。これで澤山。

(女中は茶を侑める。陽之助が他の女中に導かれて廊

下から出る。)

女中　あゝ、お越しになりました。

陽之助　待たせたな。

(お蓮は無言で迎へる。)

女中　すぐにお酒に致しませうか。

陽之助　酒か。よからう。心祝ひに大いに飲んで見よう。

女中　ほゝゝゝ。かしこまりました。

(女中二人は廊下から去る。)

陽之助　よく思ひ切つて出て來てくれたな。

蓮　お母さんには濟みませんけれど……。

陽之助　なあに、恩返しぐらゐはいつでも出來る。そのうちにきつと私がさせてやる。でも、よく出られたな。

蓮　晩は却つて人目が多いので、晝の間に髪結さんへ行くふりをして、何一つ持たずにこのまゝで出て來ました。

陽之助　それでいゝ。駈落に荷物などは不用なものだ。

蓮　定めし家では騷動をしてゐることでせう。早く相談をしたいと思つて手紙をあげましたのに、晩に行くといふ御返辭だつたので、ひよつとその間に家の者が探しに來たらどうしようかと、心配で/\命が縮るやうでございました。

陽之助　その手紙が大事な御用の眞最中にとゞいてな、氣のきかん屬僚めが、いつおいで下さるかお返辭を、などとやつたのには烏渡閉口した。はゝゝゝ。

蓮　御用のお邪魔になつたのでございますか。

陽之助　なあに、三條公からの手紙とごまかして、大事な御用も都合よく濟んだ。それから大急ぎで安藤を京都へのぼらせるやら何やかやで、氣は急いたがとう/\今になつてしまつた。

蓮　あなた。私を今夜のうちに、京へなりどこへなり、連れて逃げて下さいまし。

陽之助　今夜のうちに……連れて逃げろ……。さうは行かぬ。十六、十七の兩日が過ぎぬうちは、私は大阪を動くことは出來ぬのだ。

蓮　そんなにいつまでも大阪にかゞんでゐたら、きつと追手に見つけられてしまひます。

陽之助　二日や三日ぐらゐは大丈夫だらう。萬一見つけられたら見つけられた時のことだ。

蓮　まあ。そんな氣樂なことを……。

(女中が酒肴を運んで來る。)

女中　お待たせ致しました。(陽之助に酒をすゝめて)どうぞお呼び下さいますやうに。

(廊下から去る。)

陽之助　しかしお蓮。お前はもうきのふのお蓮ではないのだぞ。どんな苦しいことがあらうとも……たとへ命をす

てゐやうなことがあらうとも、決して私から離れて出て行くやうな心は持つまいな。

蓮　私にはもう、あなたを離れて歸つて行く家がありはしません。宮籔の盃をひいても悔まぬだけの覺悟をして行けといはれたので、その氣になつて出て來ましたのです。

陽之助　そんなことを誰がいつたのだ。

蓮　あの四郎兵衞さんが……。勸めはされぬが、あんたが右を向けば私もキッと右を向いてあげると……。

陽之助　はゝゝゝ。四郎兵衞め、乃公を容籔にたとへをつたのか。

（女中が廊下から出る。）

女中　唯今鶴貢のおかみさんがおいでになりまして、陸奥先生にお目にかゝりたいとおつしやいますが……。

蓮　あなた、どうしませう。（慌てゝ立ちかける）

陽之助　これが居るといつたか。

女中　いゝえ。何とも申しはいたしませんが、陸奥先生がおゐでのことを知つて來たのだから、是非お目にかゝりたいとおつしやいますので。

陽之助　さうか。お蓮、お前は暫く何所か別な部屋へ行つてゐろ。

蓮　お逢ひなさるのですか。

陽之助　乃公がゐると知つて來たものを逢はぬ譯にはいかん。

蓮　私、何所に隱れませう。

女中　裏梯子から下座敷へはいつておいでになつたらよろしうございます。

（お蓮は女中に教へられて、緣から上手へ去る。）

陽之助　こつちへ通してくれ。

女中　よろしうございます。

（女中は去る。やがてお近を導いて廊下から出る。お近は疑ひの眼で室内を見廻す。女中は去る。）

陽之助　何か私に用があつたのか。

近　ちよッとお蓮をお呼び下さいますやうに。

陽之助　お蓮……。乃公の所へ來てはをらんぞ。

近　へえ。參つてはをりません……。けふお晝過ぎに、先生の所へ參る了簡で、置手紙をして家出を致したのでございます。

陽之助　さうか。お蓮が家出して乃公の所へ來てくれるとは嬉しいことだ。欣んで妻にする。可愛い娘の望みならお前にも異存はあるまい。

近　そんな御戲談をうかゞつてはをられません。ともかくも一應娘を返して戴きます。

陽之助　よし。來たら歸るやうにさういつてやらう。

近　では、どうあつても來てはゐないと、おッしやるので

ございますね。

陽之助　乃公のために家出をしたのが眞實なら、いつか來るだらうが今は來てをらん。またそのうちに訪ねて見るがいゝ。

近　左樣ですか。しかし何處までも先生の方で、知らぬ居らぬでお突張りになりますと、私の方でもまたそれ相應のことをして邪が非でも連れ歸らなけりやなりません。さうなるとあなたさまのお身分にもかゝはるだらうと存じますが……。

陽之助　いや。乃公の方では身分にかゝはるやうなことがあらうとは思はぬ。どうともお前の勝手にするがいゝ。

近　さうまできツぱり承つて置けばそれで結構でございます。だが誰樣にもせよ、お上のお役人が人の娘を誘拐したといふやうな噂でも立つたら、隨分妙なものでございますね。

陽之助　お近、お前は俺がお蓮を誘拐したといふのか。（激しい語氣）

近　いえ、どう致しまして、先生は知らぬと立派に仰しやるのですから、これはほんのたとへ話でございます。

（廊下から女中が出る。）

女中　三井組の吹田さんがお越でございます。

陽之助　さうか。此方へ通せ。お近。役向きの用談があつて呼び寄せたものが來たから、お前はもう歸つてくれ。

近　御用談ならお邪魔も出來ませんから、お暇を致しませう。大きにお邪魔を致しました。

（お近と女中は廊下から去る。陽之助は見送つて微笑する。廊下から四郎兵衛が出る。）

四郎兵衛　今日はお目出度う存じます。

陽之助　おゝ。お蔭で首尾よく運んだ。

四郎兵衛　大分思切つたことをなさいましたな。

陽之助　はゝゝゝ。

四郎兵衛　それに就いて、この上もない素晴らしいお土産が參つてをります。

陽之助　ふう、どんな土産だな。

四郎兵衛　鳥渡お待ち下さいまし。（室外へ向つて）　どうぞこちらへ……。

（加島屋久右衛門と千草屋龜之助が、廊下から出る。）

久右衛門　先刻は失禮を致しました。

陽之助　おゝ、加島屋に千草屋……。四郎兵衛の口上では此上もない土産を持つて來たといふことだから、定めし何かよい話を聞かしてくれるだらう。爰は個人の陸奥陽之助の席だから、ずつと進んで遠慮なく寛いで話して貰はう。

久右衛門　では、御免を蒙ります。

（三人それ〴〵座につく。）
久右衛門　早速ながら、今日の私どものお受け振りをどう思召しになりましてございませうか。
陽之助　對手の本心を掴まぬうちは、決して自分達の本音を吐かぬ根強さが、大阪町人の町人たる所だと思うたよ。
久右衛門　有難う存じます。大阪町人は朝廷の御用金を譯もなく出し澁つたのでは決してございません、お武家が如何にお國の爲めでも、むざとは命をお捨てにならぬのと同じ心なのでございます。
總之助　然し、一度筋と見込みさへ立ちますれば、どれほどの御用金でもひくとも致すのではございません。それにつきまして……。
（階段を登る慌たゞしい音。上手の縁からお蓮が走つて出て陽之助の後に身を縮める。それを追うてお近が出る。）
近　お蓮、よくもお前は……。
蓮　勘忍して下さい、私は死んでも家へは歸りません。
近　陸奥先生、これでもお蓮を知らないと仰しやるのですか、隱さないといふのですか。
陽之助　默れ。用談の席へ無斷で踏込むとは無禮千萬な奴だ。
近　何が無禮なのです。人の大事な娘をこの通り誘拐して置きながら……。
陽之助　なに、おのれ。
（刀を取つて衝立上る。お近は驚いて廊下へ逃出す。）
近　一生怨んでやる。女泥坊め、死んでもついてやるから覺えてゐるがいゝ。陸奥の大泥坊め。
（陽之助が追ふやうな擬勢を示すと、お近は下手へ逃げ去る。）
四郎兵衛　先生、先刻もその手でおやりになつたのですな。
陽之助　加島屋。千草屋。大阪町人は陸奥陽之助を強盗に等しい奴だと思つてゐるだらうな。
久右衛門　ところがそのお手並に惚込んだればこそ、私ども二人は一同の總代として、今後の御用金を何百萬兩、何千萬兩でも大阪町人の手でお引請けするお約束の爲めに參つたのでございます。なあに、あなた、大阪にはそんな肝玉の小さい商人は一人もをりません。
總之助　これから外國なぞとの談判事にも、是非ともどうぞそのお手並でお願ひ申します。
陽之助　王政復古の大業は天下の志士が武力で成つたが、日本政府の基礎は大阪町人の金力で築き上げられる。忝けない。陸奥陽之助、この通りお禮を申す。（二人の前に手を仕へる）
總之助　町人でも日本の民でございます。まさかの時は金

ばかりか命でも投出して御覽に入れます、

四郎兵衞　このお祝に、今夜は景氣よく醉潰れる所まで戴きませう。さ、先生。

（猪口をすゝいで陽之助に侑める。）

蓮　私がお酌を……。

（立つて德利を把るのを四郎兵衞が遮る。）

四郎兵衞　けふからもう、あなたにお酌は願ひません。

蓮　いえ、そんなこと……。

四郎兵衞　まあ、奧方は……。どうぞ……どうぞ……。

（陽之助と列んで坐らせる。皆晴やかに笑ふ。）

――幕――

日本戯曲全集・第三十四巻
現代篇第二輯・第十八回配本



禁無斷上演

昭和五年四月　二　日印刷
昭和五年四月　五　日發行　（非賣品）

著作者　依田學海、福地櫻痴、榎本虎彦、右田寅彦、岡村柿紅、松居松翁、大森痴雪、

發行者　和田利彦

印刷者　島源四郎

製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八
發行所　春陽堂
振替東京一六一七

東京市小石川區諏訪町五六常磐印刷所印刷



